

# 変な男性操縦者

ハーレム王

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

希代の大天災、篠ノ之束によって生み出された史上最強の兵器、IS。女性しか使えないその兵器は、世界中での常識であった。しかしその常識を覆す異例の男性操縦者が2人現れたのだ。1人はあの世界最強の弟である、織斑一夏。そしてもう1人は――

「女子高？男女比率が1：9??……………ほう」

# 目次

## 第一章

動キ出ス欲望

1

入学ス

12

学園最強現ル

33

闘イノ時来タル

61

代表決定ス

83

中華墮ツ

109

中華ピンチ

131

学園ニ襲撃アリ

154

眼鏡ドジツ娘教師、墮ツ

174

## 第二章

嵐前ノ静ケサ

190

本当ノ実力

206

男装少女

228

仏蘭西美少女ナリ

252

英中独模擬戦争(笑)起キル

279

大会ハ早期終結ス

305

## 第三章

淫夢ト朝駆ケト

333

淫靡ナル臨海学校

359

複数ふれいハ苦手也

385

淫靡ナ時ノ終ワリ

407

対福音ク即終了ク

434

一夏ハ不遇デアル

465

## 第四章

夏ノ長期休暇 其ノ壱 | 496

夏ノ長期休暇 其ノ弐 | 525

夏ノ長期休暇 其ノ参 | 564

夏ノ長期休暇 其ノ肆 | 583

夏ノ長期休暇 其ノ伍 | 606

第五章

長期休暇ガ明ケテ | 623

英国淑女ハ常ニ毅然ト | 644

番外編 二人ノさんたくろーす

668

番外編 内気ナ少女ト初詣 | 679

生徒會長カラカウ | 689

めいど嫁トでーと | 722

学園祭、終了 | 785

第六章

教師ハ淫ラニ | 823

シャルロットの凱歌 | 846

派遣先はテニス部 | 874

レースに向けて | 900

行事は大体中止になる | 925

襲撃者（かわいそう） | 953

最終章

姉妹の妹の方 | 980

教師のドジっ娘の方 | 1003

取材 | 1026

酒は飲んでも飲まれるな | 1053

それぞれの思惑

—————

1076

機体

—————

1104

またまた襲撃

—————

1130

ナース姉妹

—————

1163

コスプレリベンジ！（最終話）

（あとが

き）

—————

1180

番外ノ章

山田 真耶

—————

1205

続・山田 真耶

—————

1229

セシリア・オルコット

—————

1249

続・セシリア・オルコット

—————

1268

凰 鈴音

—————

1289

続・凰 鈴音

—————

1314



# 第一章

## 動キ出ス欲望

「ほう……千冬の弟がISを………」

薄暗い空間で、男の声が響く。

部屋の中には色々なもので散らかっており、鉄くずや何に使うのかわからない機械などがある。

「そうだよ〜！いつくんがISを起動させたんだって！これで『2』人目の男性操縦者だね！」

男の声に返すのは、若い女の声。

とても楽しそうに、弾んだ声で男に返事する。

2人の男女は地べたに敷いた布団で、抱き合うようにして寝転んでいる。

2人とも身には何一つ纏っていないく、今までナニをしていたのかは一目瞭然だ。

「……………これもお前が仕込んだことではないのか？束」

「……………えへへ。どうだろうね」

男にそう言われると、束と呼ばれた女は一息入れてから曖昧に返す。

紫色の長い髪をストレートに腰まで下ろして、こんな時でも何故か頭にウサ耳が付いている。

よく見たらそのウサ耳は機械でできている。

顔は端正に整っていて、今は男にすり寄ってニヤニヤと破顔している。

非常に大きく育った二つの乳房を男に惜しげもなく押し付けて、乳房の形がむにゅむにゅと常時変わっている。

肉付きがいい脚を男に絡ませて、間が空かないようにしている。

男にこれでもかというくらい媚びているこの女の名前は篠ノ之 束。

現在、世界中で最も名の知られている人間の一人だ。

「ふむ……………そうだな……………」

「?どうしたの、クロくん」

束にクロくんと呼ばれた男は、何かを思案するように手を顎に当てる。



「いや、何……私もI S学園とやらに行ってみようかと思つてな」  
「ええええええっ!？」

男の発言を聞いて、束は寝ていた状態からガバツと勢いよく上半身を起こす。  
それで巨乳を越えた爆乳が、柔らかそうにプルンと揺れる。

「クロくんは行つちやダメだよ〜!」

「そう言うな。何だか面白そうな匂いがブンブンとするしな」

束は半泣きになって男に抱き着くが、男の意思は固いようだ。

……………男の動機は不純すぎるような気もするが。

こうなつたら意思は変えないと長い付き合いで知つている束は、これ以上引き留めることはしないでおく。

「ぶう〜。どうせ学園に行つて、色んな女を食べるつもりでしょ?」

「……………」

「そこは嘘でもいいから違つて言つときなよ……………」

束に指摘されて、束から体ごと視線を逸らす男。

正直者だ……………。

「じゃあ束さんが直々に、クロくん特性I Sを作つてあげるよ!」

今度は身体を全部起こして、立ち上がつて宣言する束。

そのせいで乳房だけでなく、括れた腰や薄い茂みのある女陰が露わになる。

その時には男は束の方へと体を戻していた。

欲望に正直だ……………。

「ああ、作ってくれるのだったら助かるな」

「ふっふっくん♪現在既存しているISはもとより、これから生まれるであろう全てのISを凌駕するような、とんでもない専用機を作つてあげるよっ！」

グツと握り拳を作つて言う束。

それを男はどこか子供を見るような温かい目で見つめていた。

まあ実際、束は自分勝手な子供がそのまま大きくなってしまったようなものだし

……………。

「そ・の・か・わ・り〜♪」

束はしなだれかかるように男にもたれかかり、甘い声を出す。

「またクロくんに愛してほしいな〜♪」

そう言いながら、男の首筋にキスをしてペロペロと舐めはじめ。

そうしているかと思えば男の体に鼻をこすり付け、すうと大きく息を吸い込む。

すると束の顔は真っ赤になって、何かに陶酔するように蕩けた表情になる。

「……………そうだな、こちらからもお願いしたいくらいだ」

「あんっ♪」

そう言って2人の男女は、布団へと倒れて行った。



「あぁっーうんん……やぁっー！」

目をキュツと瞑って快感に耐える束。

男は束の豊満すぎる乳房を責めていた。

左の乳房は全体を握りしめるように揉みしだき、右の乳房は頂点にある桃色の乳首を吸っていた。

「あん……クロくん、おっぱいばかり弄らないでえ……」

もう何分も乳房しか弄られていない束は、焦れたように男に懇願する。

「む？ならこちらの方がいいのか？」

そう言うって男が伸ばしたのは、濡れそぼっている女陰。

焦らされていたからなのか、すでに股を大きく開いていつでも受け入れることができるようになっていた。

男は指を膣内に入れ、上側をズリズリと削る。

「あつーあつーあつー！そ、そこダメだよお……………」

指を出し入れされるたびに嬌声を上げ、布団をギュッと握りしめる。

身体をグイと反らすので、大きな胸がプルプルと小刻みに震える。

「ああ…………クロくん。欲しいよ…………入れて?」

「だつたらちゃんとお願いをしないとな」

「う、うう…………この束さんにこんなことができるのはクロくんだけだよ……………」

束は羞恥から顔を真っ赤にするが、男のバキバキに立っている怒張を見てお願いするのを決心する。

秘裂を両手で開けて、M字開脚する。

女陰はひくひくとうごめき、男根が来るのを今か今かと待っている。

「クロくんの大きくて固いおちんぼで、束さんのお腹の中をグチュグチュにかき回して?」

羞恥を我慢し涙を両目の端に溜めながらお願いする束を見て、男の頭の中で何かがプ

ツリと切れる音がした。

東も東でこのシチュエーションを結構愉しんでいるのは秘密だ。

男は一般男性のそれを大きく上回っている男根を、東の秘裂にぐにゆにゆとうずめていく。

全て埋まると、男は勢いよくジュプジュプとピストン運動を開始した。

「あはあああつ!!気持ちいい!気持ちいいよ、クロくん!!」

「東の膣内なかもキツいな」

すっかり開発されてしまっている東の膣内は、男の男根を隙間なく締め上げる。

愛液の量もかなり多く、大きな男の男根でも痛みを感じず快樂だけをむさぼる。

「あひいつ!?ダメ!子宮ばかり突いちやダメエっ!!」

「東は奥を突かれるのが本当に好きだな」

「あひいいい!!あん!ああ……奥弱い!奥弱いのおお!!」

正常位でズチュズチュと貫かれる東は、口からよだれを垂らしながら喘ぐ。

貫かれるたびに巨大な乳房がプルンプルンと揺れ、存在感をアピールする。

「ああああつ!!あん!も、もうダメっ!イク!イっちゃう……イっちゃうよおお!!」

ついに登り詰めようとすると、男は男根を膣からちゅぽんという音を立てて抜く。

龟头は勿論、陰茎まで東の愛液で濡れきっている。

亀頭の先と膣内で愛液の橋を作っている。

「え？何でやめちゃうの、クロくん!?あとちよつとで束さん、イケそうだったのに〜!」  
ふう、と頬を膨らませて恨めしそうに男を見る。

「いや、こちらの方がいいかと思つてな」

男はそう言つて、束を四つん這いにさせて秘裂を指で開ける。

愛液は秘裂から飛び出して、肉付きのいい太ももにも浸食していた。

「うええっ!?さ、流石に束さんもこれは恥ずかしいよ……………」

「だがこちらの方が奥に届くぞ?」

「う、うううう……………」

唸りながら悩む束を、知つたことかとばかりに男はいきり立つた逸物を膣内へと挿入する。

——パン!パン!パン!パン!

「んはあああつ!!しゅごい!クロくんの、しゅごいよおお!!」

唾液と愛液が布団にボトボトと零れ落ち、呂律の怪しくなってきた言葉で喘ぎまくる。

「束はこちらも弄られるのが好きだったな」

「んひいつ!?おっぱいはだめえっ!!」

背後から手を回し、二つの乳首を指でギュッと挟む。

それから大きな手で、これまた大きな乳房をむにむにと揉む。

「あああつ！あつ、あつ、あつ！ダメ！だめだめだめ！いつちやう！東さん、いつちやうううう！！」

「そうか、じゃあ私も出すぞ。腔内なかに出すぞ」

「あつ！ひん！うん！出して！東さんの腔内なかにいっぱい出してえつ！！」

——ドピュ……ピュルルルル！！

「あああああ！！イクううう！！あ、ああ……クロくんの、腔内なかでたくさん出てるよお……」

男根から吐き出された大量の精液が、腔内へと流し込まれる。

束も射精でさらに絶頂したのか、ビクンビクンとその蠱惑的な肢体を震わせる。

「はああ……お腹の中、あつたかい……」

腔内に収まりきれなかった精液が、ゴポリと音を立てて腔内から布団へと滴り落ちる。

しかしそれを気にすることもなく、束は快樂の余韻を楽しむのだった。



「えへへ、クロくんに愛の力をもらったから、後一週間は元気はつらつだよ！」  
「……………意外と短いな」

甘ったるい情事を終えた2人は、あられもない姿のまま布団に寝転んでいる。

束は男に頭を撫でられているので上機嫌だ。

男の胸板に頬を押し付けながら、ゴロゴロと猫のように喉を鳴らす。

……………実際は束は狡猾な兎なのだが。

「クロくん、楽しみにしててね！すんごいISを作っちゃうんだからっ！」

「ああ、楽しみにしている」

男はそう答えて束を抱き寄せる。

最初はキョトンとしていた束だったが、次には本当に幸せそうに微笑んで男の背中に腕を回した。

これが稀代の大天災・篠ノ之 束と、世界で最も初めにISが使えた男性、クロウ・ミ



キストリだとは、誰も知ることはできないだろう。  
かくして物語は次の段階へと進んでいくのだった。

——  
ねえねえ、東さんはもつと愛してほしいな〜♪

——  
……………望むところだ

# 入学ス

「久しぶりだな、クロウ」

「む？千冬か……………」

束との情事から数日後、驚くべき早さで束はクロウの専用機を作り上げた。それからクロウはすぐここに、IS学園にやってきたのだ。

色々な手続きなどは束と千冬に任せた。

束の元を去る時にまた何時間も愛して、束が気絶してから学園に来た。

「まさかお前が出迎えてくれるとは思っていなかったぞ」

「これも仕事のうちでな。さあ、入れ。ようこそ、IS学園へ」

クロウを迎え入れたのは、束と同じ位ふるくからの付き合いである織斑 千冬だ。

黒く美しい髪を後ろで一つに束ねて、鋭い眼をしている。

顔は凜として整っていて、今は不敵に微笑んでいる。

黒くピチツとしたスーツを身に纏っており、胸部はスーツを押し上げられている。

引き締まった脚を黒いパンストで覆っており、できる大人という雰囲気をも全面的に押し出している。

彼女が『あの』篠ノ之 束の親友で、現在世界最強の名を持つ女だ。

「しかしいい女になったな、千冬」

「何年も会わなかったら人も変わるさ。お前が束とずっと一緒にいたからな」

クロウの言葉に少し恥ずかしげに顔を背けるが、最後は拗ねたような雰囲気を出す。

やはり世界最強と言えども、好意を寄せる異性が他の女とイチャコラしているのは気のいいものではない。

「む……確かにその通りだな」

「はあ、まあいいさ。お前の女好きは今に始まったことではないしな。ついてこい。お前が所属するクラスに案内してやる」

「助かる」

そう言って2人は目的地に向かって歩き出す。

肩を並べて歩く姿は、街でならカップルに見られることもあるかもしれない。

「ああ、そうそう。学園内で私を名前で呼ぶなよう？」

これでも私とお前は教師と教え子の関係だからな。

そう続ける千冬。

成程、確かに教師を名前で呼ぶのはよろしくないだろう。

そう考えたクロウは、すぐさまそれに順応する。

「そうだな、では私は織斑教諭と呼ぼう」

「それでいい」

満足そうに頷いた千冬は、それ以上話すことはないとはかりにスタスタと歩きはじめる。

クロウもはぐれてしまわないように、千冬の後をついていくのだった。



『げえっ!? 関羽!』

『誰が美髯公か、馬鹿者!』

パァーン!と凄まじい音がまた響く。

教室の前で待機させられているクロウには分からないが、教室の中では姉弟の軽快なコントが続けられていた。

暇だなあと思いながら、キョロキョロと辺りを見渡すクロウ。

基本的に無表情なクロウだが、今は少し好奇心が大きいのか目がキラキラと輝いている。

とてつもなく大きな黄色い声援がクラス内から聞こえてくることもあったが、大して興味を示さなかったクロウはひたすら青い空を眺めて時間を潰していた。

『——遅刻してきた奴がいてな……ミキストリー!入ってこい!』

自分の名前が呼ばれたので教室に入ることにする。

クロウが教室内に入ると、先ほどまで騒がしかった花の女子高生たちがピタリと話すことを止める。

何故か教諭である山田 真耶もポカンとして見ているが、それは気にしないでおう。

静寂に包まれる空間に何吹く風とばかりに無表情を貫いて教卓に立つ。

「本日からI S学園に入学したクロウ・ミキストリだ。年は驚くほど離れているが、まあよろしく頼む」

淡々と自己紹介をし終えたクロウ。

さらにシン……とした空気になるが、一人の女子生徒が絞り出すように言葉を話す。

「お、男……………」

「……………見てわからんか？」

次の瞬間、窓ガラスを割るほどの大音量の悲鳴が響き渡った。

「お、男だっ!!」

「クールでイケメンだっ!!」

「年上だっ!!」

ワイワイと賑やかに話す生徒たち。

大半のクラスメイトがキヤアキヤア言っているが、数人の生徒たちは未だにポカんとしている。

例えば世界唯一の男性操縦者だと思われていた織斑 一夏。

「（お、俺以外にも男のI S操縦者がいたのか……まあ嬉しいからいいんだけど）」

例えば鮮やかで少しロールのかかった金色の髪で、碧いヘアバンドをつけたお嬢様な雰囲気を出す英国の淑女。

「ど、どうしてクロウさんがここにいらっしやるのかしら?」

例えばのほほんとのんびりとした雰囲気醸し出す、いかにも眠たげな少女。

「あれ? 何でこんなところにクーがいるんだろ?」

例えばこのクラスの副担任で、束をも超える超乳を持つ女性。

「(え、ええっ?! クロウさんが私の生徒にっ?! ……えへへ、そこはダメですよ)」

考えることは人それぞれだったが、皆共通しているのは驚愕しているということだ。

この数人は大人しかかったのだが、クラスのほぼ全員を占める女子生徒たちが騒ぐので少し……否、かなりうるさかった。

話の対象であるクロウ自身は我関せずと沈黙を保っているが、隣にいる鬼教師が我慢の限界だった。

「貴様らあ……いい加減にしろ!! そんなに元気なら今すぐグラウンドを走ってこい!!」  
『……………』

ピタリ……と先ほどまで喧しかったクラスが静かになる。

流石世界最強。戦闘力だけでなく、統率力にも長けているようだ。

「まあなんだ。これからよろしく頼む」

そう言って、波乱を呼んだ『最初の』 I S 操縦者紹介は幕を閉じたのだった。



一時間目が終了し、今は休み時間。

一夏は幼馴染である篠ノ之 箒に連れられてどこかに行ってしまった、現在クラスにいる男はクロウ一人となってしまうていた。

人を引き付けてやまない容姿をしているクロウは、女子生徒たちの好奇心の対象なのだろう。

「あく、クー。久しぶり〜」

「む？本音か」

そんなクロウに最初に話しかけたのは、のんびりとした少女。

可愛らしい髪飾りで両側を少し縛っていて、服の丈が異常に長い改造制服を着ている美少女。

ほにやあと擬音が聞こえてきそうなこの娘は、布仏 本音。



更識家に仕える侍女で、更識家次女の簪の専属メイドだ。

「今までどこに行つてたの？ 私とかかんちゃんとか寂しかったんだよ？」

ぷくうと頬を膨らませて怒っていますとアピールする本音。

しかし本音特有ののんびりとした雰囲気ので、怒っているというより拗ねていると感じてしまう。

「すまなかつたな」

「まあ私は大丈夫だったんだけどね？ 楯無お嬢様とか、更識家を総動員してクーを探してたんだよ」

私欲のために対暗部用暗部を使うのはどうかと思う。

しかし全世界から絶賛逃亡中の束と一緒にいたクロウを見つけるのは、流石に無理であらう。

「でもまた会えてうれしいよ」

そう言つて本音はポスンとクロウに抱き着く。

抱き着くというか、もたれかかるみたいな感じで腕を背中に回してギュつとする。

「……………ああ、私もだ」

クロウも本音を受け入れて、壊れやすいものを扱うかのように優しく抱きしめる。

この時他の女子生徒たちが発狂しているのだが、本人たちに関知されていないのでス

ルーしよう。

「えへへへ、クーはいい匂いがするね〜」

「そうなのか？」

「うん、なんていうか……安心する感じ〜？」

幸せそうにほにや……と笑ってクロウに抱き着く。

その際に意外と育っている胸が押し付けられるが、クロウは表情を変えずに優しく本音を抱いている。

……………いや、少し体を引き寄せた。

——キーンコーンカーンコーン

休み時間を終わらせるチャイムが鳴る。

本音は邪魔されたような気分になり、少しふくれっ面になる。

「むう〜、タイミングが悪いね〜」

「そう言うな。またいつでもしてやるさ」

「ほんと〜？じゃあ我慢するね〜」

本音は可愛らしい笑顔をクロウに向けると、自分の席に向かっでとととゆつくりとした速度で歩いて行った。

後ろの方の席で、金髪ロールのお嬢様が歯ぎしりをしていたことは誰も気づかなかつ

た。



「——I Sは現在存在する兵器の中でもトップクラスの力を持つ。当然危険なこともあるので、しっかりと勉強に励め」

「……………はい」

2時間目、I Sがうんたらかんたらな授業を碌に理解できなかった一夏が怒られてい

る。  
実姉に怒られて意気消沈しているといった感じの一夏。

もういいと言われて席に座る。

「ミキストリ。お前は理解できているのか？」

千冬は次にクロウに聞いてきた。

他の生徒たちも気になるのか、クロウのことをじつと見つめる。

その視線を受け流し、クロウは答える。

「……………まあな」

ふいつと顔を背けて答える。

嘘が丸わかりだ。

千冬はハアとため息をつく。

「あ、あの、大丈夫ですよクロ……ミキストリくん。先生が放課後にしつかりと教えてあげますからねっ！」

えへん……と大きな超乳をブルンと揺らして胸を張る真耶。

「で、でもそうするとクロウさんと二人つきりに……ああっ！ダメですよクロウさん！こんなところじゃ——」

自慢げに言ったと思つたら、今度は頬を赤らめていやんいやんと体をくねらせる。フルフルと横に揺れるものだから、大きな乳房も横に盛大に揺れる。

教室内の何人かの女子生徒は、まるで親の仇を見るような目で真耶……正確には育ちまくっている乳を睨む。

「んんっ！山田先生、授業を」

「あ、は、はいい！」

とてて……と走って教壇に戻るが、途中で何もないところに躓いて転んでしまう。

山田 真耶……メガネ超乳ドジっ娘としてこれからも活躍してくれることだろう。

「ご機嫌いかが？クロウさん」

「……………セシリアか」

金髪碧眼の白人少女。

少女といえる年齢なのだが、大人びてた雰囲気から大人の女性と言われても不思議ではない。

彼女もまた改造制服で、スカートを少しドレス風にアレンジしている。

彼女の名前はセシリア・オルコット。

イギリス貴族の子女で、英国代表候補生でもある。

「ふむ……英国淑女らしい、美しく育ったな」

「うふふ、ありがとうございます」

口に手を当ててクスクスと微笑む。

そんな仕草にも気品が溢れている。

「わたくし、あれからたくさん頑張りましたのよ？ いっぱい勉強してたくさん訓練して……やっそここまで来たのですよ」

「お前は頑張り屋さんだったからな。……よく頑張ったな」

「……………はい」

優しく髪を撫でながら褒められて、セシリアは頬を少し赤くする。

何年も前に味わったことのある、暖かい手。

ちなみに今も他の女子生徒たちは発狂している。

『本音の次はオルコットさん!?!』

『わく、クーはぶれいぼーい〜』

————— などなど、色々なことを喋っている。

それからセシリアはクロウと談笑する。

その時のセシリアは本当に楽しそうに微笑んでいた。

そしてまた授業を告げるチャイムが鳴る。

「あら、残念ですわね。もう少しお話しなかったのに……………」

「なに、また話せばいいさ。次は紅茶でも飲みながら話すでしょう」

「……………ええ！」

最後にクロウに向かって微笑んで、自分の席に戻って行った。  
流石女好き、女の扱いをよく知っている。

3 時間目は教壇に真耶ではなく、千冬が立つ。

クラス代表者を決めなければならないらしく、自薦他薦は問わないということだった。

そして面白いことが大好きな女子高生たち。

勿論世界で2人しかない男性操縦者を推薦する。

クロウは別に反応しなかったが、一夏は嫌々と言うが千冬の前では意見が通るはずもない。

この2人のどちらかになるか……そう思われた時、異議を唱えた者がいた。

「……………納得いきませんわ」

セシリアは静かに立ち上がって言う。

「そもそもIS 起動時間が極端に少ないお二方に、クラス代表戦をやれというのはいささか無理があるのでは？ それなら小さいころから訓練をしているわたくしなどがクラス代表になるべきですわ」

ちやつかり自分を推薦しているのがセシリアらしい。

一夏は一夏で救世主を見るような目でセシリアを見ている。

「ふむ……確かにオルコットの言うことにも一理あるな。ならばクラス代表決定戦をすすめるか」

「ええ、わたくしは構いませんわ」

セシリアは自信満々と言った風に胸を張る。

実際代表候補生であるセシリアはIS訓練もみっちり受けているので、技術的にはクラス最強だろう。

「ミキストリと織斑もそれで構わんな？」

「ああ」

「えっ？あ、ああ、大丈夫だ」

一夏も慌てて答える。

そして一週間後の月曜日に、セシリア、一夏、クロウによる三つ巴のクラス代表決定戦が行われることになったのだった。

「（とりあえず千冬姉に恥をかかせないように頑張ろう）」

「（成長したわたくしを、クロウさんに見てもらおうチャンスですわ!）」

「（……………とりあえず戦えばいいのだな?）」

三者三様、それぞれの思惑を乗せた戦いは、もうすぐやってくる。





「うげ〜……何やってるんだか、さっぱりわからん」

「……………何故ここにくる」

クロウの席に突っ伏しながら悲鳴を上げる一夏。

ISの勉強はなかなかはかどらないようだ。

「あ、俺は織斑 一夏。少ない男同士、仲良くやっていこうぜ」

「クロウ・ミキストリだ。まあほどほどにな」

そう言つてクロウは差し出された手を握る。

美少女や美女以外に基本的に興味を持たないクロウは、ここでも健在だった。

「あ、ミキストリくん、織斑くん。まだ教室にいたんですね」

そう言つて2人に声をかけてきたのは、ロリ超乳の山田 真耶だ。

彼女は2人の部屋割りの件で探していたのだそうだ。

ここ、IS学園は全寮制で、生徒は例外なく寮に入ることと義務付けられる。

しかしイレギュラーである男のIS操縦者、クロウと一夏がいるために寮の調整をしなければならなくなったので、一週間は自宅通いの予定だった。

しかし日本政府の特命でクロウと一夏をすぐに寮に入れることになったのだ。

ちなみにこのことをクロウは知っておらず、千冬の部屋に押しかけようと思っていた。

「あれ？じゃあ俺の荷物は………？」

「それならすでに私がやっておいてやった」

そう言っただけで現れたのは千冬だった。

彼女が持ってきたのは着替えと携帯電話の充電器だけらしい。

15歳高校1年生の思春期男子にそれはキツ過ぎやしませんかね？

「ク、クロウは荷物どうしたんだ？」

さめざめと目から雨を降らせていた一夏は、自分と同じ境遇のクロウに話しかける。

おそらく自分と同じで大した用意もできずにいるのだろうと思っただけ——

「ああ、その点なら問題ない。私の専用機の中に入れてあるからな」

「はあっ!!? ISってそんなこともできんのかよ!!」

「馬鹿者、できるはずがないだろう。こいつのは特別製だ」

それを聞いて、『いいなあ』と羨ましそうにクロウを見つめる一夏。

次に真耶から寮生活上の注意点を言われていくが、一夏は風呂の件でまたとんでも発言をする。

「ええっ?! 大浴場って使えないんですか?!」

……………馬鹿者。

男子が2人いえるといえども、ここは基本的に女子高。

大浴場は必然的に女子が使うことになるのは当然だ。

それを理解して慌てて否定する一夏だが、また相変わらず言葉の使い方が下手だった。

まるで女には興味がなく、男が好きだと解釈される発言をしたのだ。

……………ほら、周りで聞き耳を立てていた女子生徒たち腐女子がにわかに色めき立つ。

「ク、クロウさんはダメですよ、織斑くん!」

名字で呼ぶことも忘れて、慌ててクロウの腕を抱き寄せる真耶。

暖かくて柔らかい巨大な二つの肉に挟まれて、無表情だが裏ではご満悦だ。

「ち、違いますよ!!」

「あゝ、ゴホンツ! 山田先生、生徒にそれほど密着するのはどうかと思うぞ」

千冬はどこか不機嫌そうに真耶に言う。

「ふえっ!？」

純情な真耶は顔を真っ赤にさせて、思考を停止させてしまう。

動かなくなった真耶を千冬に任せて、クロウと一夏は己の部屋に帰ることにした。



一夏は1025室で、クロウは1024室と隣同士だった。

「あれ〜?どうしてここにクーがいるの〜?」

クロウが部屋を開けて最初に飛び込んだできたのは、どこぞの電気ネズミのような全身パジャマを身に纏っている本音だった。

眠たげな眼をしながら、不思議そうに首を傾げている。

「うん?私にあてがわれた部屋がここなのだな。どうやらお前と相部屋のようだ」

「わ〜い。クーと一緒〜♪」

本音はまた異常に遅いスピードでととととクロウに寄っていき、キュツと抱き着いた。

「(この生々しい感触は——ノープラ……だと……!!?)」

クロウは無表情の下で変なことを考えていた。

本音とクロウに挟まれて、そこそこ大きい二つのボールが形を変える。

隣の部屋あたりからズドン!という剣呑な音が聞こえてくるが、2人は気にしなかった。

2人の男子生徒の片割れが悲鳴を上げていたような気もするが、2人は気にしなかった。

「ん〜……クーは気持ちいいね〜。何だか眠たくなってきたよ〜」

「ふむ……私も少し眠りたいな。今日は飯抜きにして寝るか」

「おう、私も寝るよ〜」

2人は食事を捨てて睡眠をとることにした。

男女七歳にして同衾せず。

この言葉を真つ向から無視するように、同じベッドに入るクロウと本音。

国立であるIS学園はベッドもいいものを使っているらしく、寝心地もいいし2人で寝てもベッドから落ちる心配はなさそうだ。

「一緒に寝るのか？」

「うん」

「……………そうか」

クロウは考えることを止めにする。

本音の柔らかな肢体の感触を楽しみながら、だんだんと眠りに落ちていったのだ  
た。

—————  
すー……………すー……………えへへ、クー♪

—————  
動けん。どこにこんな力があったのだ……

## 学園最強現ル

「うわー、これおいしくよ、クー」

「……………そうか」

入学式翌日の朝、クロウは本音と一緒に朝食をとっていた。

声をかけても起きず、クロウに抱き着いて離さない本音をここまで連れてくるのは少し骨が折れた。

「ミ、ミキストリくん。一緒にご飯、食べていいかな？」

「む？！構わないぞ」

朝ごはんを食べているクロウに話しかけてきたのは、同じクラスメイトの女子2人だった。

クロウの許可をもらってガッツポーズをしている。

「ミキストリくんって本音と仲がいいの?」

「ふむ……旧知の仲……みたいなものか」

「私とクーはずつとずつとずくつと昔に知り合ったんだよ」

本音は長い袖をパタパタとしながら答える。

……………和む。

それから女子2人はクロウと本音の關係に興味を持ったのか、本音に質問攻撃をする。

それに本音もすらすらと答えていった。

「じゃあ本音ってミキストリくんとどういう關係なの!」

「えへへ、ただならぬ關係……かも」

……………何やらとんでもない嘘をついている気もするが。

最後の方をボソリと皆に聞こえないように呟いたので、聞き耳を立てていた生徒たちが大騒ぎする。

『た、ただならぬ關係って……………!』

『あの子、もう大人の階段駆け上ったのかしら!』

『嘘!?!ミキストリくんは織斑くんの恋人でしょ!?!』

「こういう腐女子は絶滅すればいいと思う。」



く。クロウはクロウで別に気にしないで食事を進めているため、余計に噂が広まってい

「私はお前とただならぬ関係だったか？」

「ん〜？予定〜」

無表情で質問するクロウに、ニコニコと笑いながら告げる本音。

合っていないようだが、意外といいコンビなのかもしれない。

「こら、貴様ら！さっさと食事を済ませろ！遅刻した者はグラウンドを走らせるぞ!!」

1年寮長の千冬が現れ、噂話で盛り上がっていた女子高生たちを一蹴する。

このIS学園のグラウンドは広く一周が5キロもあるので、女子には厳しい距離だろ

う。

皆慌てて食事に戻るのだった。



現在は3時限目の授業。

ISに関する授業を行う時間である。

「あの、先生。体の中が弄られているようで少し怖いんですけど……大丈夫なんですか？」

一人の女子生徒が、教壇に立つ真耶に質問する。

ISはもともと宇宙で活動するために作られたマルチフォーム・スーツで、操縦者の肉体を常に安定した状態に保つことができる。

まあ製作者が本場に宇宙活動を目的に作ったかどうかは分からないか……。

それで安定に保たれるのは心拍数、脈拍などから始まって、脳内エンドルフィンまで管理する。

それを自分の体がいじくられているようで不安になった生徒が質問したのだ。

真耶はそんな生徒を安心させるようににっこりと笑って言う。

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。例えばブラジャーのようなものだと考えてください。ブラジャーもサポートしてくれますが、体に直接的に悪影響を及ぼすことはありませんね？だから——」

すらすらと言っていた真耶だが、クロウを見て顔を真っ赤にする。

「す、すみません。ミキストリくんと織斑くんには分かりづらい説明でしたね。あはは……………」

教室中に気まずい空気が流れる。

一夏も居づらそうに顔を下に向けているし、女子生徒たちも胸を隠そうと腕組みをしたり体を抱いたりしている。

クロウや本音など、一部の生徒たちは平然としているが……………。

「ゴホン！山田先生、授業を続けてください」

「は、はいっー」

流石世界最強。気まずい空気は一刀両断し、真耶に授業の続きを促す。

真耶もこれ幸いと授業を再開させる。

それからISはパートナーやら、彼氏彼女みたいなものですかと聞かれてあたふたとしてクロウを熱っぽい視線で見つめる真耶がいたり、色々あって授業は終わった。

休み時間は、昨日は様子見をしていた女子生徒たちが一気に好みの男子の方に群がった。

わいわいと盛り上がり、一夏が千冬の私生活を話そうとした時に千冬が現れて授業が始まった。

「織斑、お前には専用機が与えられることになった」

「……………専用機？」

千冬に言われて一夏は『なにそれおいしいの?』といった顔をする。

ISには原則としてコアが必要不可欠であり、そのコアを作るのはISの母である束しかない。

そして束が作ったコアの数は、全部で467機。

その中で専用機が持てる人物は、間違いなくエリートであろう。

まあ今回一夏が与えられるのは実験みたいなものだ。

「クーは専用機持つてるんだよね〜?」

本音はクロウを見ながら言う。

「うむ」

『ええっ!?!』

クロウの言葉に、クラス中の生徒が驚く。

上記のようにISは467機しかない。

それなのに弱冠15歳——クロウが15歳なのかは怪しいが——で専用機が与えられるのは異常なことなのだ。

「ミ、ミキストリくんってどこかの代表候補生なの?」

「いや、これは束からもらった」

『ええっ!?!』

また皆で一斉に驚く。

それも仕方がないことだろう。

世界中の各国が血眼になって探している大天災からもらったと言うのだから。

「じゃあミキストリくんって篠ノ之博士に会ったことあるの!?!」

「ああ」

「どんな人なの!?!」

「……………ふむ」

クロウは顎に手を当てて考えるしぐさをする。

女子生徒たちは皆クロウのことを見つめて、ゴクリと固唾をのむ。

そして目をパチリと開けて口を開いた。

「……………『狂った兎』だな」

『……………』

あまりにもひどい評価に、皆啞然とする。

だが世界中の人間の中で4人しか認識できないのだから、あながち間違いというわけでもない。

それから一夏の幼馴染、篠ノ之 箒が束の妹だということが分かりクラスメイト達に

質問攻めされるが、急に怒鳴り声を上げた筈にこれ以上聞けずに授業に入ったのだった。



「クロウさん、専用機を持っていらしたのですね」

セシリアはそうクロウに声をかける。

「まあな。セシリアも専用機を持っているのだろう?」

「ええ、勿論ですわ。わたくしはイギリスの代表候補生ですもの」

そう言つてセシリアは優雅に一礼する。

英国貴族のセシリアは、流石こういうことも様になっていた。

「で、お前の専用機はどのようなものなの?」

「うふふ、それは言えませんわ。クロウさんには情報規制もバッチリしておかなければ

勝てませんもの」

クスクスと微笑んで言うセシリア。

情報を聞き出すことはできそうにないらしい。

「まあ仕方がないか」

「ええ、仕方ありませんわ」

セシリアは楽しそうに笑う。

「ねえねえクー。ごはん食べに行こうよ」

そう言ってクロウに寄りかかってきたのは本音だった。

セシリアとの会話を邪魔するように話しかける。

「む？そうだな、食堂に行くか。………セシリアはどうする？」

クロウはギロリと本音を睨んでいたセシリアに声をかける。

するとセシリアは慌ててクロウに向き直って言う。

「い、いえ、わたくしは遠慮しておきますわ。クロウさんにほだされて情報を聞き出されたら堪りませんもの」

「そうか、ではまた後でな」

「ええ」

そう言ってクロウと本音は食堂に向かった。



「ね〜ね〜、クーはなに食べるの〜?」

「そうだな……日替わり定食にするか」

「じゃあ私もそれ〜」

2人仲良く日替わり定食を買い、空いている席に座って食べ始める。

今日は鯖の塩焼き定食らしい。

正直魚が苦手なクロウは失敗したと思っていた。

骨を取るのが面倒なのである。

「クーは代表戦勝てそ〜?」

「さあ、どうだろうな」

ISを使わないで戦うのだったら、クロウが勝つのは目に見えている。



しかしISを碌に使ったことのないクロウト、代表候補生としてかなり鍛錬を積んできたセシリアとじゃあ差があるだろう。

どっちに転ぶかわからないのだ。

一夏？論外である。

「じゃあおねーさんが教えてあげようか？」

そう言っつて声をかけてきたのは、リボンの色からして2年生の女子生徒らしい。

水色の髪の毛で、口元に扇子を当てている。

制服の上からでもわかるメリハリのついたスタイル。

「……………刀奈か」

「ぶー。今は楯無よ」

彼女の名前は更識 刀奈。

対暗部用暗部の更識家17代目当主である楯無だ。

クロウトに対して二本の腕でバツ印を作る。

「そうか、では楯無。お前が私に教えてくれるのか？」

「久しぶりとかはないのね……………まあいいわよ。ええ、私がしっかりと教えてあげるわ」

更識 楯無はIS学園最強の生徒会長。

彼女に教えてもらえるのなら、IS技術が身につくかもしれない。

「ふむ……ではよろしく頼む」

「ええ、了解したわ。明日からみっちり教えてあげるよ」

そう言つて楯無は上機嫌で食堂を去つて行つた。

鼻歌まで歌つていたので、余程嬉しいのだろう。

「楯無お嬢様嬉しそうだったね」

「そうだな」

それからクロウと本音は料理に舌鼓を打つて、教室へと戻つて行つた。



あれから一週間後の月曜日、クラス代表決定戦の日。

現在一夏は最大のピンチを迎えていた。

「……………ISのこと何も教えられていないんだけど」

「……………すまん」

そう、一夏はこの一週間で、ISのことを何も学んでいなかった。

クロウが楯無に教えを請うたように、一夏は箒に頼んでいた。

しかし箒にこの一週間教えられたことは、剣道のみ。

確かにそういう技術も勝つためには必要だろう。

しかしまず最初にISのことを学ばなければ始まらない。

一夏はこの一週間で振り返って、しくしくと涙を流した。

「……………クロウはISのことはちゃんと理解しているのか？」

一夏は同じピットにいるクロウに話しかける。

もしクロウがあまり理解していないのだったら、セシリアに勝てずともクロウには勝

てるかもしれない。

そう思つて聞いてみるが、クロウの返事は『是』だった。

「へく……………誰に教えてもらったんだ？」

「この学園最強と言われている女だな」

「うおっ！すげえ人だな……………」

一夏は『勝てそうにないな』と絶望し、クロウはこの一週間で最も印象に残った出来

事を2つ思い出していた。



「三日教えただけで私より強くなられた件について」

ピチツとしたISスーツを着用して見事なプロポーションを強調させている楯無が、膝と手を地面につけてがっくりとうなだれる。

クロウと昔からの知り合いである楯無は、地となる力は十分に持っているかと判断してすぐにIS技術を教えることにした。

最初は確かに勝てた。

ISの機動力をフルに使って飛び回って戦うと、碌にISの使い方が分かっていなかったクロウを倒すことができた。

しかし2日目になると、自分が負けだした。

まあそういうこともあるだろうと思っただけだ3日目。

クロウのISのシールドエネルギーを碌に減らせずに完敗。  
プライドも誇りもずたずたにされた日になった。

「ふむ……戻るとするか、楯無」

「……………ええ」

しかしクロウのこういう強さは、素直に格好いいと思える。

昔からの恋慕の想いのせいかもしれないが、そう思ってしまうのだから仕方がない。  
誰もいない更衣室に入る。

「……………いい加減に更衣場所は別のほうがいいのではないか？」

「……………別にいいのよ」

この3日間、楯無はクロウと同じ更衣室で着替えていた。

自分のプロポーションには自信がある。

たわわに実った胸、括れた腰、大きくなった臀部、肉付きがよくスラリとした脚。

男は欲望の、女は羨望の視線を向ける。

これでクロウと関係を持ちたいと思っていたし、持てると思っていた。

女好きで、更識家が集めた情報では篠ノ之 東や、この学園の教諭である織斑 千冬  
とも怪しい関係だと知っている。

だから自分も愛してほしい。

そう思っていた楯無だが、クロウはそういうことをせず今までできた。それが楯無には我慢できなかった。

「ねえ、クロウ。どうして私を抱かないの？私、そんなに魅力ない？」

そう言つて楯無はクロウにしなだれかかる。

顔を伏せて、目に溜まっている涙を見せないようにする。

クロウはそんな楯無の水色の髪に手を乗せて言う。

「しかしな……お前、処女だろ？」

「しよ、しよしよしよ処女ちゃうわっ!!」

「……………」

バレバレだった。

冷たい空気が更衣室に流れ、楯無は顔を真っ赤にさせる。

「いやな、やはり女の初めては痛いものなのだろう？抱いている女が痛みに顔を歪めるのは好きではないのでな……………」

「え？処女膜はもうないんだけど」

「なん……………」

目に溜まった涙もぬぐわないで、キョトンとした表情で言う楯無。

ISという『スポーツ』は非常にアクロバティックで動きの激しいスポーツである。

膜が損傷してしまいましたとしても不思議ではない。

「ね？痛みはないし（多分）、私、おいしそうだと思わない？」

クネツと体をねじって、スタイルを強調する。

「ああ、それならいただくとしよう」

「ん……………」

クロウはそう言って楯無にキスをした。

楯無の目から涙がまた一筋頬を伝っていき、地面に落ちていった。



「ん……………」

クロウの手が楯無の豊満な乳房を優しく揉む。

楯無はベンチに腰掛けるクロウの膝に、脚を大きく開いて跨っていた。

ISスーツを上にかくし上げ、胸だけ露出するようにしている。

横から突いて胸をプルプルと揺らせ、乳首を指で弄る。

「どんどんと乳首が大きくなっていつていつていってるぞ?」

「もうっ!そういうことは言わないでよ!」

楯無は物足りなさそうに顔を歪める。

それを見たクロウは片方の勃起した乳首を口に含んだ。

下で乳首をレロレロと弄んだと思えば、思い切り乳首を吸引したりする。

片方の乳首にも指でクリクリと弄って刺激を与える。

「んんっ!あふっ……んあああっ!!」

チュポン……と音を立てて乳首から口が離れるのがきつかけとなり、楯無は身体を少し痙攣させる。

下半身を覆うISスーツの股間部が、液体で少しにじむ。

「はああ……少しイっちゃったわ」

「それはよかった」

楯無は絶頂の余韻を味わいながら、クロウのたくましい体にギュウウと抱き着く。

「んっ……ここが大きくなってるわよ」

クロウの股間部も、ISスーツを盛り上げて形がハッキリとするくらい大きくなった



陰茎がある。

楯無の秘部に押し付けられている。

「ふふ……私に任せなさいっ」

そう言つて楯無はクロウの膝から降りて地面に膝をつき、陰茎を取り出して自慢の双丘にうずめる。

そしてタップと胸を揺らしながら、上下運動を始める。

「ん、じゅる、ちゅく……ちゅぶぶぶー」

大きな楯無の胸に埋まってもなお顔を出す巨大な男根。

その亀頭に吸い付きながら、胸で陰茎も刺激する。

「(ああ……これがクロウの匂いと味……クセになりそう……)」

楯無の秘部は刺激していないのどンドン愛液を分泌させ、さらにISスーツをにじませている。

「ふふっ、(っ)ういうのはどうかしらっ」

「むっ」

楯無は豊満な肉房を活かして、左右の乳房をそれぞれ違う動きをさせる。

右の乳房が上に向かうときは左の乳房は下に向かう。

この性技にクロウも呻いてしまう。

「いつでも出したい時に出していいわよ。じゅるるるる!!」

男根がピクピクとし出して絶頂の時が近いことを悟ったのか、楯無はラストスパートとばかりに亀頭にバキュームをする。

「くっ……もう出すぞ」

クロウの宣言のすぐ後、男根から大量の精液が放出される。

それは楯無の口内を一瞬で満たして、口からも溢れ出すほどだった。

「んんん、ふ……ちゅぶ、じゅるうー」

それでも足りないとはかりに楯無は横から乳房を押しして乳圧をかけ、鈴口に吸い付いて中に残った精液を吸い出そうとする。

「ふはあっ……御馳走様っ♪」

楯無は満足したように笑顔を魅せる。

精液は聞いていた通り確かに生臭かったのだが、不思議や不思議、クロウの精液はなぜか美味しいと感じてしまった。

「ちよ!?!これ凄く恥ずかしいんだけど?!」

楯無は両手をベンチにつけて、豊かな肉付きのお尻をクロウに差し出すような恰好をさせられる。

屈辱的なポーズを取らされて、楯無の顔は紅潮する。

「しかし濡れまくりだな……淫乱な女だ」

「んうっ！」

ISスーツ越しに小陰唇を手で広げて、くぱあ……と開ける。するとクロウの指に粘着質な液体が付く。

「だ、誰が淫乱よっ！私——ああっ！」

楯無の抗議の言葉は、陰核をこすられることで遮られる。

「ああ……ふううっ!!」

腕で己の体重が支えきれなくなってしまい、豊かな胸がベンチに押し付けられて潰れる。

クロウは勃起した陰核をクリクリと弄りながら、ISスーツごと膣内へ指を出し入れする。

「あっ！んんう……あああっ!!」

ISスーツがあるので奥まで指は入らないが、それでも十分すぎるほど快感だった。クロウはそれが納得できなかつたのか、下着ごとISスーツを下にずらす。

「うあんっ！お尻舐めないでえ………」

膣内へ指は浅く出し入れしつ、汗に濡れた大きな尻肉にも舌を這わせる。

楯無は身体を持ち上げていたので、動きに合わせて豊かな乳房がタプンタプンと揺れ

る。

クロウは尻を舐めることを止めると、指を奥まで押し入れて激しく動かせる。

「あああつ！ひいつ！イ、イク！イっちゃう！！」

「そうか。イつていいぞ」

「ひやあああつ！イクツ！イ……クうううあああつ！！」

指を2本腭内に咥えこんだまま、豊かな尻を震わせながら絶頂する。

それと同時に、プシャアツ！と勢いよく潮を噴き、秘部あたりを液体でビチヨビチヨに濡らす。

クロウはまだヒクヒクとうずいている秘部に顔を近づけて、じゆるじゆると音を立てて愛液を啜った。

「ああつーそんなに音立てないでえ……………！！」

まだ絶頂の余韻が残っているのか、身体を小刻みに痙攣させている。

クロウは舌を腭内へと忍び込ませ、腭内をレロレロと舐めまくる。

「はひいつ！す、すごいいい……………！！」

さらに愛液で濡れた秘部を見てもういいと思ったのか、クロウはいきり立った男根を秘部へとうずめていく。

「くっ……………キツ……………っ」

未だ男を知らない女は、男根を締め付ける。

「あ、あああああ……………!!」

楯無は痛みを感じないようで、大口を開けて男根をむさぼる。

クロウは男根が全て埋まったのを確認して、ピストンを開始する。

「ああん! あつ! あんつ! クロウの大きくてお腹いっぱい!!」

「楯無の膣内ななかもトロトロでいいぞ」

膣から伝わる快樂で腕に力が入らなくなり、時折ガクガクと身体が揺れる。

クロウはさらにピストン運動を激しくさせ、子宮口にくつつくほど男根を深く深く押し入れる。

「あつ! あつ! ふううんつ!!」

ピストンされることに連動して、楯無の豊満な乳房が揺れる。

それが気になったのか、クロウは背後から手を伸ばして驚掴みにしながら腰を動かす。

「あはああつ! これ! これ奥にくるううう!!」

クロウは楯無の華奢な肩を持って、グイッと身体を起こさせる。

そうして自然と顔が近くなり、楯無は顔をひねらせて舌と舌を押し付け合う。

「んはあ……………ふひつ! あああつ!!」

次にクロウはまた身体を倒させて、後ろから楯無の細い腕を引っ張って腰を打ち付ける。

大きな胸がこれ以上ないくらい、タパンタパンと踊る。

「楯無、身体を動かすぞ」

「……………うん」

後背位で繋がっていたのを正常位へと変える。

ズン！ズン！と突かれて、楯無は首を反らせて快楽に狂う。

「あああ！あ……………くうっ！オチ○コ！オチ○コいいよおお!!」

また顔を近づけて、舌を絡ませ合う濃厚なキスをする。

楯無は両腕をクロウの背中に回して抱き着き、脚は所謂『だいしゆきホールド』をかける。

「あ、ああ……………だいしゆき！くろうだいしゆきなのおっ!!」

「ああ、私も好きだぞ」

クロウは楯無の括れた腰を掴み、さらに速く、深くピストンする。

「ああんっ！ダメ！そんなにしたらイッチャうう!!」

「ああ、イっていいぞ」

「……………ツ!!」

楯無は突かれながら絶頂し、また潮を嘔く。

両腕をギュッと寄せ、豊かな乳房をむぎゆう……と押し寄せる。

しかしまだクロウは絶頂に達していない。

巨大な男根でピストン運動を継続させる。

「んひいいいっ！あああああっ！ダメえ！い、今いつてりゆのおお!!」

「すまないな、後少し我慢してくれ」

激しく痙攣している楯無の肢体を、さらに蹂躪する。

肉付きのいい太ももを持ち上げて、激しく出し入れされる。

「こ、こんなにやの知らないっ！くろう！凄いおっきいのがくりゆよお!!」

「ああ、私ももうイクぞっ」

クロウは今までで最大のピストンをする。

ズリュ！ズリュ！と膣壁を抉り、大量の愛液があふれ出る。

「あああああっ！いひいいいっ！イク！またイクううう!!」

そしてクロウも絶頂する。

——ビュルルル！ビュルツ!!

「~~~~ツ!!」

子宮の中へと大量に注ぎ込まれる精液。

今までで最大の痙攣を起こし、たわわに実った双丘が柔らかそうに揺れる。

楯無は目から涙をこぼし、口からはよだれを垂らして絶頂した。

「はあ……はあ……気持ちよかったあ……」



「汗だくになっちゃったわねえ……シャワーでも浴びましょう」

「そうだな」

クロウと楯無は情事がかいた大量の汗を流すべく、更衣室の近くにあるシャワー室に向かう。

楯無は長年の恋が叶ったからか、いつも以上に楽しげな表情をしている。

「ふふっ……背中、私が流してあげるわ♪」

「そうか、では頼む」



猫のように笑ってクロウの腕に抱き着く。

もうすでに全裸になっているので生々しい感触が直に感じられるのだが、クロウは平静を保つ。

シャワー室に入って振り向いた楯無が見たのは、先ほど大量に精液を出したのにも関わらず立派になったクロウの男根。

「うわあ……めっちゃくちゃ元気ね……………」

平静を保つていても体は正直だった。

歩くたびに揺れる豊満な乳房と尻。

そんな情景を見せられれば、枯れた男であろうと元気になってしまっただろう。

「ふっふっ、ここにやる？クロウ」

楯無はクロウの首に手を回し、豊満な乳房を惜しげもなく押し付けながら甘く囁く。

当然断る理由などないクロウは楯無の身体を優しく抱き寄せる。

「ああ、お言葉に甘えるところでしょう」

「んっ……………」

そう言ってクロウと楯無は目を瞑り、唇を合わせるのだった。

しかしIS学園最強も艶事ではそうでもないらしいな  
あなたが絶倫なだけよ！

## 闘イノ時来タル

1つ目の大きな出来事を思い出しながら、クロウはうんうんと頷く。

とてもいい出来事だった。

あれ以来どこか余所余所しかった楯無は一緒にいれなかった時間を埋めるように、クロウにたくさん甘えるようになった。

人となりを掴めなく謎に満ちた綺麗な生徒会長は、クロウの前では年相応に好きな異性に甘える可愛らしい少女になっていた。

「すまない、ミキストリ。織斑の専用機はまだ届かないようだから、先にオルコットと戦ってほしい」

そう言って近づいてくるのは、スーツを着こなしたクールビューティー。

こんな時でもメインウエポンである出席簿を手放さないようだ。

織斑 千冬は申し訳なさそうにクロウに話しかける。

そんな千冬をじつと見て、2つ目の大きな出来事を思い出す。

そう、あれは楯無と肉体関係を持って2日後のことだった。



「千冬、酒でも飲まないか？」

「貴様はいきなり何を言っている」

千冬はいきなり寮長室に押し入ってきた男の頭を出席簿ではたく。

パアンツ！と凄まじい音がクロウの頭からするが、された本人は痛みに顔を歪めることなく平然としている。

クロウの手には徳利とお猪口が2つあり、酒を飲むつもり満々のようだ。

「貴様はI S学園に所属する生徒だろう。そんなことは許さんぞ。後織斑先生だ」

「しかしだな、千冬。私の年齢なら日本の法律に反していないぞ?」

「だから織斑先生と呼べと……………」

屁理屈をこねるクロウの顔をアイアンクローで握り、持ち上げる。

ミシミシと決して聞こえてはいけない音も聞こえるような気もするが、クロウが騒いでいないので気のせいだろう。

千冬はクロウを締め上げながら考える。

「(そういえばビールを切らしていたか……………」

千冬は意外と愛飲家である。

よく缶ビールを飲んだりしているのだが、今日は切らしていて少し残念に思っていた。

「……………ふう、仕方がない」

千冬はそう言ってクロウを解放する。

万力のごとく締め付けられていたクロウだが、相変わらず無表情のままだった。

「ふん、美味しいものでなければ承知しないぞ」

「うむ、それなりのものを用意してきた」

クロウも20歳を超えているし、まあいいだろうと考えた千冬はクロウと酒を愉しむこ

とにする。

こうしてクロウと千冬の長い長い夜が始まったのだった。



「ぶはっ……………」

「大分酔いが回ってきたのではないか？千冬」

「ふん、まだまだ大丈夫だ」

小さいお猪口に入れてあった日本酒を飲み干し、ズイツと催促するようにクロウにお猪口を突き出す。

千冬の顔はすでに酒のアルコールで真っ赤になっており、酔っているのは誰の目に見ても明らかだ。

そんな千冬にクロウは苦笑しながら酒を注ぐ。

クロウも酒が入っているからか、いつもより表情がはつきりしている。  
「むう……………」

現在千冬は少し不機嫌になっていた。

酒を酌み交わし始めた最初の方は、今まで離れていた時間の話を酒の肴にしていたのだが、クロウが束と淫欲に狂った話を聞いていたら腹が立ってきたのだ。

酒は人を大胆にさせる。

千冬もその例にもれず、クロウの隣に行つて肩に頭を寄りかからせる。

「……………どうかしたか？」

「……………察しろ」

少しの間、寮長室に沈黙が訪れる。

しかしそれは決して気まずく感じられるものではなく、だんだんと淫猥な雰囲気になつていく。

クロウと千冬は自然と顔を近づけていき、唇を合わせた。

「ん、ふ……………ふはっ」

クロウと千冬の間、銀の橋がかかる。

千冬は纏っていたスーツを脱ぎ、ワイシャツを開いて肢体を露わにする。

豊満な肉体を守っているのは淫猥な黒い下着。

上のブラだけを外し、外気に触れる。

「ふむ、また少し大きくなったのではないか？」

「……………そうか？ならこれを使ってやってやる」

千冬はどこか嬉しげにそう言つて、豊かな乳房で剛直をうずめる。

それでもクロウの怒張は埋まりきらず、龟头と少しの陰茎の部分が見える。

千冬は物凄い速さで乳房を上下運動させて、陰茎を刺激する。

それを数分も続けると、クロウに限界が訪れる。

「くっ……………射精でるぞっ」

「きゃっ!？」

怒張からあふれ出る大量の精液に、千冬は普段は絶対に出さないであろう悲鳴を上げて驚く。

精液は千冬の顔を犯すだけではなく、豊かな乳房や引き締まったお腹、それにお情け程度に羽織っているワイシャツまで染めた。

「んっ……………やはり精液は苦いな」

千冬は指にかかった精液を口に含んで言う。

しかし言葉とは裏腹に表情は淫靡に悦んでいた。

それを見たクロウは我慢の限界だったらしく、千冬に襲い掛かった。



「千冬」

「ちよっ?!いきなりがつつくな!んんうっ!!」

千冬をベッドに押し倒し、股を閉じられないように体を間に入れる。

そして量感のある乳房を揉みながら、先端にある桜色の乳首に吸い付いた。

「んんっ!あっ!ひああっ!!」

餅のように柔らかな乳房を愉しんだ後、顔を下に移動させて濡れそぼった秘部に吸い付く。

熱くなり湯気でも出そうな秘部に、じゅるじゅるとはしたない音を立てて愛液を啜る。

「やあああんっ!そんな汚いところ舐めるなあっ!!」

そう言つて大きく開かれた両脚を閉じようとするが、クロウの力には勝てず、そして秘部から送られる快感の稲妻が身体中を駆け巡り、力が入らなくなる。

それから数分舐められ続けた千冬の秘部は愛液でトロトロになり、クロウの男根をいつでも受け入れられる状態になった。

「もう……いいぞ。もう入れてくれ」

クロウはそれを聞いて、己のいきり立つた怒張を千冬の膣内へと挿入した。

「ああんっ!あっ……あああああっ!!」

クロウはヌプヌプと音を立てながら、ピストン運動を開始する。

千冬の膣内はクロウの怒張に絡みつき、さっさと精液をよこせと言わんばかりだ。

こんな名器相手ではそう長くないことを悟ったクロウは、最初からラストスパートばりに突きまくる。

「くううっ！ そんなに激しくしたらダメだっ！ はうっ……ううううっ!!」

千冬の身体が激しく痙攣する。

それは千冬が登り詰めたことを証明していた。

長年好意を寄せる男と艶事をできなかつたせい、いつも以上に敏感になっているようだ。

「何だ？ もうイってしま——痛いぞ、千冬」

「……………ツ!!」

言葉の途中でアイアンクローを喰らわしてやる。

すでに1度クロウに秘部を舐められて達していた千冬は、恥ずかしいやら生来の負けず嫌いからの悔しさやらで顔を赤く染めてしまう。

「ダメだと言ったのに……次はお前の恥ずかしいところを見せてもらおうぞ」

そう言つて千冬はクロウを寝台に仰向けで寝かせて、自分は跨るようにする。

所謂騎乗位というやつだ。

「ふふ、お前のその鉄仮面をはがしてやる」

そうやって千冬は己の秘部に男根を合わせて、一気に体重を下した。

「~~~~ツ!?!ど、どうして……さつきより奥までえ……!!」

自分の全体重を込めれば自然と男根が奥へと進むのは当然だ。

騎乗位の経験がなかった千冬はそのことが分からず、ただただ自分の行動を後悔するだけだ。

「あつーあつーくううー!こんな危ないものは私がしつかりと管理してやらないとなー!」

千冬はクロウに抱き着きながら、厭らしく大きな臀部を上下させる。

適度な快楽が与えられて愉しむ余裕ができてきた千冬だったが、それはクロウが許さなかった。

千冬が尻を落として来るのに合わせて、クロウも思いつきり腰を突き上げた。

「んひいひいっ!?!」

強烈な衝撃に身体を起こし、ビクンビクンと痙攣する。

一気に力が入らなくなったようにクロウにもたれかかる。

「お前……その場所はダメ……だ……」

どうやら千冬が達してしまったのは奥まで突き上げられただけではなく、快楽を強く得る部分、所謂Gスポットを抉られたからでもあるようだ。

「ふむ……ここか？」

「んはあああんっ!!」

確かめるようにもう一度同じ部分を突かれて、また強烈な快感が千冬を襲う。

もうクロウはその部分以外を責めようとせず、同じ部分だけをズンズンと突いた。突きながら徐々に体位を変えていき、後背位になって千冬を突きつづける。

「よし、そろそろ千冬の膣内に射精すぞ」

「あああうううっ！私も！私もお前のが欲しいっ!!」

脇の下から手を回して豊かに実った乳房を鷲掴みにする。

「ああああっ！止まらなひい！イクのが止まらないいいいいっ!!」

千冬はすでにイキっぱなしとなっており、呂律も回らなくなってきた。

「ああっ！あうっ！ひいいいいっ!!」

豊富な双丘の先端にある乳首を指でグイツと引つ張り、形を歪に変えさせる。

———ヌチャ！ヌチャ！ヌチャ！ヌチャ！ヌチャ！

愛液が男根でかき回される音が、いやに大きく感じられる。

「んはあああっ！出して！私の奥にクロウのちようだいっ!!」

「よし、イクぞっ」

下から乳房を揉みあげながら突きまくる。

そして膣内の最も奥の場所に行きつくと、男根から精液が勢いよく放出された。「あああああつ！熱いのが奥にいつぱいいいっつ！！」

大きな乳肉を逃がさないとはかりに全体を強く揉んで達する。身体を支えきれなくなった千冬は横になる。

そうすると膣内に入りきらなかった精液がゴポポ……と音を立てながら、豊かな尻肉を伝っていく。

「はあ……はあ……まさか……ここまでされるとは……」

「……………何を言っている？まだこれからだ」

「え？ちよ、ちよつと待——ああああつ！！」



千冬の顔を見て思い出す。

次の日体調不良で仕事を休んだのはいい思い出だ（クロウの中でだけ）。

「……………どうした？」

訝しげにクロウを見る千冬。

話しかけた相手が自分の顔をじっと見て動かなくなったら、誰でも不審に思うだろう。

「いや、なに。織斑教諭の乱れ具合は凄ま——痛いぞ」

「さっさと行け！」

顔を真っ赤にした千冬はクロウの顔を驚掴み、思いつきり放り投げる。

これ以上千冬をからかわない方がいいと思ったクロウは、大人しくISを纏って戦いの場へと赴くのだった。



「あら、最初はクロウさんがわたくしの相手ですか？」

「うむ、どうやら織斑の専用機が遅れているらしくてな」

アリーナ上空で親しげに会話する『蒼』と『金』。

セシリアの駆る I S は第 3 世代機である『ブルー・ティアーズ』。

空の蒼よりも青い I S を身に纏い、手には 2メートルを超す大型銃器、六七口径特殊

レーザーライフル・スターライト mk III が握られている。

武器からしておそらく中距離、もしくは遠距離型の I S だろう。

対してクロウが駆るのは、同じく第 3 世代機の I S に相当するであろう『ヘルド・コ

ング』。

名付け親曰く、『え？そんなの適当だよ。別にクロくんは名前とかどうでもいいで

しょよ?』。

太陽光に反射して光り輝いている金色の I S 。

クロウは手に武器は持っていないかった。

「随分と煌びやかな I S ですわね」

「私の趣味ではないのだがな」

クロウの言葉に、セシリアは淑女らしくクスクスと微笑む。

今から戦うとは思えないくらい和やかな空気が流れている。

しかしこれは決闘。

相手を倒すまで、決して終わることのない闘い。

「ふふ、わたくしがどれだけ成長したか、見ていただけますこと?」

「うむ、かかってこい」

本来なら逆の立場なのだが、2人の関係上こうなるのも当然かもしれない。

セシリアはスターライトmkⅢの銃口をクロウに向ける。

「さあ……往きますわよー!」

ほぼ全校生徒が見守る中で、金と蒼が全面衝突した。



「どうしましたの!?!逃げているだけでは勝てませんわよ!?!」

「……………ふむ」



試合開始から約10分後、クロウとセシリアの試合は大した動きもなく続いていた。

両者ともにほとんどシールドエネルギーを減らしておらず、セシリアの攻撃をクロウがひたすら避けているだけのようだ。

クロウは未だ武器さえ出さず、ひたすら飛び回っている。

「クロウさんはこの程度ではないでしょう!? 攻撃なさいな!」

セシリアはイラついていた。

そこからへんにいる、女尊男卑をただ受け入れて女に媚びへつらうだけの男ではなく、力強く権力には屈しないクロウに惚れたのだ。

こんな戦い方はクロウではない。

「ふむ、では攻撃してみるか」

クロウがそう言って逃げるのを止めて空中で止まる。

「やつと戦うのかと思っていると、衝撃的な光景を目の当たりにした。

「なっ!?!」

クロウの背後の空間が歪み、そこから一本の剣が現れたのだ。

全体像は見えないが、まるで何かの命令を待っているかのようだ。

「……………往け」

セシリアの考えは正解だった。

クロウの言葉と同時に、歪んでいた空間から剣が発射された。

それは物凄い勢いでセシリアに迫り、防御の構えを取ることも許されずに直撃した。剣がいきなりとてつもないスピードで迫ってきたのだから、驚くのも仕方がない。

「きゃあああっ!?!」

フルにあつたシールドエネルギーが、たった一度の攻撃で半分以上減らされた。

これはISの絶対防御が発動したのを表していた。

つまりあの攻撃はシールドバリアーを容易く貫通し、セシリアの命が危険になるほどの攻撃だったのだ。

セシリアは冷や汗を一筋、頬に垂らす。

「と、とんでもない攻撃ですわね。ですがそんな高威力の武器なんて、もうないのではななくて?」

「いや、そうでもない」

「え……………?」

セシリアの予想は簡単に踏みにじられた。

クロウの背後でまた空間が歪む。

しかも今度は2つも。

「……………往け」

「ツ!!ブルーティアーズ!!」

またとてつもないスピードでセシリアに向かっていった2本の剣だが、それはセシリアに届くことなく途中で撃墜された。

セシリアの周りを飛び交う6つのピット。

自立機動兵器であるブルーティアーズは、このISの名前に付けられるほどの兵器である。

「まさか側面から攻撃させるとはな……………」

「うふふ、側面からの攻撃なら軌道を逸らしてくれるかと思いましたが。ただ失敗すればとんでもないのですが」

セシリアは先ほど襲い来る2本の剣を、側面から攻撃したのだった。

本来ならピットは4機しか使わず、残りの2機は他と違ってレーザーではなくミサイルで隠し玉としているのだが、威力が威力なので6機分全ての威力ではねのけた。

「うむ、強くなつたな、セシリア」

「つ!ええ、でもまだまだこれからですわ!」

クロウに褒められて感極まりそうになったセシリアだが、奥歯をぐつと噛んでこらえる。

そうしてまた『金』から放たれた剣と『蒼』から発射された閃光がぶつかりあったの

だった。



「うわあ……大接戦ですねえ」

先ほどまでクロウがいたピットでモニター越しに闘いを見ている真耶。

しかし本当にすごいのはクロウだろうと、真耶は考える。

今までしつかりとした知識と訓練を受けてきたイギリス代表候補生と、最近初めてI  
Sを学びだした素人。

それがほぼ互角といった闘いを繰り広げているのだ。

「な、なんだよ、あのとんでもない攻撃………」

「し、しつかりしろ！一夏！」

一緒にモニターを見ていた一夏が、さらに絶望したような表情でガクガクと震える。

箒はそれを叱咤するが、仕方ないとも思う。

たった一度の攻撃で、代表候補生が防御する暇もなく絶対防御が発動したのだ。

セシリアはピットでそれを対応しているが、自分の専用機にそんな武器があるかはわからない。

もし自分の立場だったら……そう考えて箒は一度身震いした。

「しつかりせんか、馬鹿者」

「痛っ!？」

そんな一夏に対して怒るのが、姉である千冬。

出席簿で一夏の頭をスパアン!と叩く。

「確かにミキストリのあの攻撃は脅威だが、一気に懐に入ってしまったらどうなるかわからないだろう?」

「はっ!確かに!」

あんな高威力の兵器を自分の近くで使うことはできないだろう。

この一週間、無駄に剣道の勘だけは戻ったので、近接戦には少し自信がある。

少し希望が湧いてきた。

「……………まあ近接格闘では、私は赤子の手をひねるように倒されたがな」

「……………」

「しっかりしろー！一夏ー！」

千冬のボソリと言った現実に、一夏は両手と両膝を地面につけて首を垂れる。

「千冬姉が勝てない相手に、どうやったら勝てるんだよ……………」

ピット内ではそんなことが起きていたが、アリーナではもう決着がつくころだった。



「ふふ、流石はクロウさんですわ」

「いや、中々に手こずったぞ」

シールドエネルギーの残量は30。

メインウエポンである『スターライトmkⅢ』はエネルギーが切れて、ピットは6機すべてが破壊された。

一応予備の武器として近接戦闘用の『インターセプター』があるが、近接格闘も鍛え

ているとはいってもクロウに勝てるほどではない。

つまり、勝負は決したのだ。

「わたくしはあなたに認められる程の力はあったでしょうか？」

「うむ、すばらしい腕だったぞ」

確かにセシリアは強かった。

代表候補生としてなら、世界各国の中でも最強クラスだろう。

「なるべく痛くないよう、お願いいたしますわ」

「……………ああ」

そう言つてクロウは、無抵抗のセシリアに向かって剣を振り下ろした。

そしてブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者、クロウ・ミキストリ』

空中でセシリアのブルーティエアーズが粒子となつて消えたので、当然自然落下する。

しかしそれはクロウがお姫様抱っこすることで、地面と衝突することは避けられた。

「ふふ、しつかり運んでくださいな」

「了解した」

セシリアは負けたとは思えないくらい清々しい顔をして、クロウの首に手を回す。

顔も幸せそうに蕩けており、普通より少し大きな双丘をクロウの逞しい胸板に押し付

ける。

こうしてクロウ・ミキストリvs. セシリア・オルコットの闘いは、幕を閉じたのだった。

——セシリアはいい匂いがするな

——ッ！デ、デリカシーがなくてよ！



## 代表決定ス

セシリアをピットに送った後、クロウもまたピットへと戻っていた。

「よく戦ったな。いい試合だったぞ」

「そうか」

千冬に褒められるが、クロウは笑顔を見せることなく受け取った。

「本当にすごいですよ、クロウさん！代表候補生に勝ってしまうなんて！」

「……………そうか」

真耶も興奮しているようで、ピョンピョン跳ねながらクロウを褒める。

それに連動して、真耶の爆乳がたゆんたゆん揺れてクロウの視線を釘付けにする。

普通なら気づくのだが、興奮している真耶は気づくことなくクロウを褒めている。

「オルコットの専用機があれば試合はできんな……。仕方ない。翌日にミキストりと織斑の試合。さらにその翌日に織斑とオルコットが試合をすることにする」  
セシリアの機体損傷はビットだけだが、やはり武器なしで次の闘いをやれと言えぬわけもない。

ビット程度なら、ここのI.S.学園の優秀な整備科でどうにでもなるだろう。

「えっ!?俺、次はクロウとやるのか!?!」

一夏は絶望しきった声を上げる。

逃げたい。猛ダツシュで逃げたい。

しかしクラス代表決定戦なのだから、絶対にやらなければならない。

だから織斑 一夏は——

「い、一夏……どこへ行く!一夏ああああ!!」

逃げることにした。

筈が必死で一夏を追いかけていく。

ピット内は、何とも言えない空気が流れるのだった。



「いや、勝つとは思っていたけど、まさかこんなに圧勝するとはね」

クロウは自分の部屋へと帰っていた。

何故か学園最強が隣に歩いているが、まあ気にしないでいいだろう。

「お前のおかげだな」

「最初は教えがいがあったのにね。何であんな一気に強くなるのよ……」

最初は照れて答えていたのだが、最後は落ち込みながら言う。

まあロシア代表操縦者であり、各国の代表操縦者の中でもトップクラスの实力を持っていると自負していたのに、最近 I S を使い始めた素人に 3 日で負けたのだ。

落ち込まないはずがない。

クロウは少し……否、かなり人から逸脱しているとは昔からの付き合いで知っていたが、まさか I S のことでも逸脱していたとは思わなかった。

「まあお前も十分に強いさ」

「むう」

ポンポンと水色の頭を優しく叩いて宥めてみるが、効果は薄いようだ。楯無がこんな子供のような言動するのは、クロウの前だけだろう。そんな話をしながら、クロウは部屋へと戻って行った。



「ふう……………」

部屋の玄関を閉めて、疲れからか一息つく。

まあセシリアとあんな濃密な戦闘を行えば、疲れるのも仕方ないだろう。

楯無はあれでも生徒会長の仕事があるらしく、途中で別れて行った。

どうやら生徒会書記である本音も仕事があるらしく、今日は部屋に帰ってくるのが遅くなるらしい。

とりあえず戦闘でかいた汗を流そうと、部屋に備え付けられているシャワー室に入

る。

全裸になりシャワーを浴びて汗を流す。

そうしてしばらく心地よいお湯を全身に浴びていると、何故かここでは聞こえないはずの音が――。

「し、失礼しますわ」

「……………」

……………何故？

入ってきたのは、先ほどまでクロウと激戦を繰り広げたセシリア・オルコットだった。自分のイメージジカラーとも言える蒼のヘアバンドも取っており、美しい金髪がさらりと流れる。

日本人女性からすれば大きい白人特有の胸をさらけ出しており、薄く金色の茂みも下半身で確認できた。

肉付きが程よい脚は、スラリと長い。

「あ、あの……………そんなにじつと見つめないでくださいまし……………」

……………いや、熱心に観察している場合ではない。何故セシリアがここに？  
というか恥ずかしいのならタオルか何か巻け。

「……………いや、どうしてここに？」

「む、昔一緒にお風呂に入れてもらったことを思い出しまして……………」

それはまだセシリアが子供の時だ。

いや、現在も高校生という子供だが、しかし身体も女性らしく成長してきたこの歳で一緒にお風呂はいかんだろう。

……………まあクロウからすればバッチコイなのだが。

「……………」

備え付けられている湯船につきり、筋肉を弛緩させる。

セシリアも一緒に入っており、クロウの大きな体にすっぽりと入ってしまいそうだ。

白人の美しい肌も、赤く紅潮している。

「……………やはりクロウさんは強い男ひとでしたのね」

「ん？」

セシリアが沈黙を破る。

セシリアは、15歳とは思えないようなつらい人生を送ってきた。

名家に生まれたセシリアは、なに不自由ない裕福な暮らしを送っていた。

強い男性に惹かれるようになったのは、自分の父親を見てからだろう。

しかし父親は強く逞しいわけではなく、むしろ逆だった。

母親の顔色ばかり窺い、何の能力もない男。

そんな父親が情けなくて、セシリアは添い遂げるなら強い男性と決めたのだ。

「だからわたくしは貴方に……………」

そう言つてセシリアはクロウに身体を押し付ける。

形のいい乳房が歪む。

対して母親は強い女性だった。

女尊男卑が世界に広がる前でも会社をいくつも経営していた。

そんな2人が死んだのは3年前、セシリアが12歳の時だった。

普段決して仲が良いとは言えない2人が、何故かその時一緒に行動していて列車事故で死んだ。

セシリアに両親の死を悲しむ暇はなかった。

手元に残された莫大な金をかすめ取ろうと、いやしい大人があの手この手を使ってきたのだ。

だからセシリアは努力した。

両親の遺産を守ろうと、ありとあらゆることをした。

そうしていた時に分かった、自分にある高いIS適性。

それからクロウの指導——— 勿論IS関連ではない——— などを受けて、ここまで強

く美しくなったのだ。

まあクロウは頑張っている途中にどこかへ蒸発したのだが……………。

「あの時のことは許せませんわ……………」

「……………すまん」

クロウの腕をキュツとつねる。

それでも嫌いになれないのは、やはりこの男に惚れているからなのだろう。

「謝るのだったら、ちゃんと行動で示してほしいですわ」

「……………どうしたらいい？」

「もう……………わかっていくせに……………」

そう言ってクロウとセシリアは唇を合わせたのだった。



「あ、ん……………ふあ」



シャワー室のマットの上に寝かせて、普通より少々大きいほどの乳房を揉む。いつの間にマットを持ってきていたかは、クロウのみぞ知る。

揉まれているうちに勃起した桃色の乳首を指先でくりくりと弄られる。

「あつ、あつ、ん……あん」

クロウは顔を右の乳房へと持つていき、ペロペロと犬のように舐めだす。

「あ、あああ……ひあつ」

気持ちいいが、されど物足りないと思うセシリア。

そんなセシリアの想いを知ったのか、クロウは左手を秘部へと向けて弄りだす。

すでに秘部は愛液が溢れているほど濡れていて、今すぐにもクロウを受け入れることができる。

「んんんうっ！あつ！ああっ！」

膣口を弄られていたかと思うと、勃起した陰核をこりこりと弄られて声を上げてしまう。

その後膣内に指を出し入れされて、ぞくぞくとした快感がセシリアの身体中を駆け巡る。

「あつ………」

膣内に入っていた指を抜かれて、セシリアはどこか寂しげに声を上げる。

秘部がきゅんきゅんとうずき、大声ではしたないことを叫んで男根を求めてしまいうになる。

「よし、もう入れるぞ」

「はあ……はあ……どうぞ、いらしてくださいな」

いきり立った怒張を膣口にこすり付けて、愛液を男根に塗りつける。

そんなことでもセシリアはびくびくと身体を震わせて反応させてしまう。

充分濡れたところで、クロウはゆっくりと男根をうずめていく。

「ん~~~~ッ!!」

初めての性交だがセシリアも処女膜が破けてしまっていたらしく、血も出るかもしれない。痛がることもなかった。

「大丈夫か?」

「んんっ……ええ、動いていただいて構いませんわ」

セシリアは目の端に涙を溜めながら、ニツコリと微笑んで言う。

そんなセシリアにきゅんときたクロウは、ゆっくりとピストン運動を開始する。

にゅぷにゅぷと膣内に潜っていき、一度突かれるたびに膣口からびゅるつと愛液が噴き出してくる。

「あっ! あっ! んんう……あああっ!!」

——ズブ！ズブ！ズブ！ズブ！

愛液は太ももにまで広がり、突かれるたびにびくびくと痙攣するセシリアの肢体。セシリアのスラリとした綺麗な脚をクロウの体に回し、所謂『だいしゆきホールド』の状態になる。

「ああつ！好きつ……大好きですわ！クロウさん!!」

そう言つてセシリアはクロウの唇に吸い付く。

クロウもそれに答えて、舌と舌を絡み合わせる濃厚なキスになる。

「ああ、私も好きだぞ、セシリア」

「うああつ！ああつ！ああああつ!!」

耳元でそう囁かれ、セシリアは乱れる。

クロウの首に手を回し、絶対に離さないと意思表示をする。

口は大きく開けて、そこから舌を伸ばしてキスをねだる。

よだれを一筋垂らし、淑女にあるまじきことだが、それは今のセシリアは気にすることができない。

もう限界が近いのか、パチュ！パチュ！と淫靡な水音がやけに大きく聞こえる。

「あつ！あつ！あつ！あつ！感じる！クロウさんを身体全体で感じますわっ!!」

セシリアももうそろそろ達するのか、膣肉が隙間もないくらい男根に絡みついて精液

をねだる。

「よし、イクぞっ」

「ああっ！わたくしももうダメですわっ！イクっ！イっちやううう！！」

左の乳房を形が変わるくらいギュっと握り潰し、精液を膣内に発射する。

「ふっ、ああああっ！！」

射精と同時に達したセシリアの肢体は、びくんびくんと激しく痙攣する。

セシリアは涙を流しながら、クロウと致せたことを喜ぶのだった。



本来ならまだ2回戦3回戦へと突入していくのだが、セシリアが今日の戦闘でかなり疲労していたらしく、一度クロウと致したらすぐに眠るように気絶してしまったのだ。

まだ精力が満ち溢れていたクロウだが、寝ている相手ならまだしも気絶した女性をた

たき起こして性交を迫るほど鬼畜ではない。

セシリアを部屋へと送り届け、自分の部屋に帰ってきた。

お姫様抱つこで連れて行つたので、途中で会つた女子生徒やセシリアのルームメイトが黄色い悲鳴を上げたのは当然だった。

「うむ、これも中々……………」

クロウは現在本音がないのをいいことに、日本酒をくびくびと飲んでいた。

流石のクロウも女子高生の前で酒を飲んではいけないことは分かっているらしく、酒を飲むのは寮長室でだけだった。

勿論、酒を飲むだけでは済まなかったが……………。

そんな感じで酒を楽しんでいたクロウだったが——。

「ねえ、クー。私にも少し飲ませて〜?」

「なん……………だ……………?」

のほほんとしたマイナスイオンを撒き散らすマスコット、本音が現れた。

後ろからクロウに意外と育つた肢体を押し付けるようにして抱き着き、両手を伸ばして酒を飲もうとする。

クロウに察知させずに接近する隠密能力、流石更識家侍女である。

「ダメだ。お前ははまだ未成年だろう」

「え〜。ぶうぶう〜」

クロウの言っていることは至極真つ当なことなのだが、本音は抗議するように鳴く。お酒は二十歳を超えてから。

「あ、そうだ〜。クー、おめでと〜。試合、かつこよかったよ〜」

「む、ありがとう」

褒められることは少し気恥ずかしい。

「それでね〜？私はクーにご褒美を上げようと思つて〜」

本音はいつものもののほほんとした雰囲気ではなく、どこか大人の女性らしい淫猥な雰囲気を出す。

クロウに抱き着く力も強くなり、より柔らかい肉体がはつきりと感じられる。

頬を少し紅潮させて、本音は言った。

「私を好きにしているよ〜？」

「なん……だと……!!？」

クロウ、本日で二度目の驚愕であった。



どろお……と口の中に溜めた唾を、クロウの男根に垂らす。

すべりのよくなった男根をにゅちにゅちと音を立たせながら手で扱く。

「えへへへ、私もちよおつとえつちな勉強しているんだよ」

そう言つてつつ……と竿の部分舐める。

手は陰囊を揉んで、クロウに鋭い快楽を与える。

「こんははんひひ〜?」

口をいっぱいに向けて亀頭を丸呑みする。

ぢゆるううう!!と啜り、今度はレロレロと舐めまわす。

「ん〜、むうかひいよ〜」

男根を頬張りながら話すので、先ほどから何を言っているのかよくわからない。

本音は次に男根の根本まで全て飲み込む。

少し……否、かなり苦しいのだが、クロウが気持ちいいのだったらそれくらい我慢する。

「んっ！んっ！」

ジュブ！ジュブ！とはしたくない音が部屋中に響き渡る。

大分限界に近づいてきたクロウは、本音の頭をガシツと掴んでさらに奥へと引き寄せる。

そしてそれが刺激になったのか、クロウの怒張から精液が溢れ出した。

「んんっ!!んんんんッ!!」

口いっぱいまで男根で塞がれた本音は悲鳴を上げることができず、ただただ呻くしかできない。

ごく、ごく、と精液を飲み下していた本音だが、あまりの量の多さに咳き込んでしまふ。

「ぶあ……けほっ！けほっ！……もう、出すときは出すって言ってよ」

「すまん」

鈴口から伸びた精液は本音の口につながり、口から垂れた精液をこぼさないように手を受け皿にして止める。

それでも受け止めきれなかった精液は、本音の着ぐるみパジャマを変形させてしまっている盛り上がった胸部へと垂れる。

けほけほと咳き込んでいた本音だが、一度出したのにも関わらず勃起したままの男根



を見て驚愕したような顔をする。

「うわゝ、あんなに出したのにもう元気なの？男の人ってみんなこうなの？」

「さあな、それは知らん」

ほへゝ……と呆けたように男根を間近で見つめる。

男根は時折びくびくと動いており、未だ戦闘状態であることを強調している。

「えへへゝ、なんだか私も熱くなつてきちゃったよ」

そう言つて精液で汚れてしまった着ぐるみパジャマを脱ぐ。

そうすると意外と肉感的に育っている本音の肢体が露わになる。

熱気で柔らかな身体に汗が真珠のように浮かんでいる。

そして何より驚くのは、本音の雰囲気とは真逆のもの。

結構大きな胸を覆う黒いブラジャーに、秘部を守る黒の下着。

「あゝ、私も濡れ濡れだよ」

黒いパンティーを横にずらすと、もう濡れてしまった秘部が見える。

本音の息は荒くなつていく。

「最初はこれからね」

本音は対面座位の形でクロウの上に座り、ぬりゆぬりゆと秘部に男根をこすり付ける。

「あは、もうちよつとで入っちゃいそうだね。あつ」

秘部からは大量の愛液が分泌されだしており、ぬめりをさらによくする。ちよつとでもクロウが腰を動かせば、膣内に入ってしまうことは確実だろう。

本音はくるりと身体を反転させ、今度は背面座位の体位になる。

量感のある乳房が黒の下着から解放されて、外気にさらけ出される。

「また出しちゃえ」

さらに素股を激しくし、鈴口を細いが柔らかい指で弄る。

それから刺激され続けて少しした後、また男根から射精した。

「あは、すごお」

精液は素股していた太ももに大量にかかった。

それを少し堪能していた本音だったが、クロウに我慢の限界が訪れた。

「きやあつ!?ク、クー?」

柔らかで沈み込みそうな太ももをグツと掴み、V字型に足を開けさせる。

親指と親指で秘部を開けることも忘れない。

「本音も随分と濡れているな」

「ひいっ!!ちよ、そこはダメえ……んんっ!はああつ!!」

少し指で膣口を弄るだけで、ぐちゅぐちゅで卑猥な音が発せられ、肉付きのいい肢体

はビクビクと反応する。

クロウは男根を膣口へ照準を合わせる。

「よし、入れるぞ」

「えっ!?ま、待つ——あああああっ!!」

狭い入口を押し開け、一気に奥へと挿入する。

激しい衝撃に、本音は口を大きく開けて鳴き、よだれをダラダラとこぼれさせる。

ズプ!ズプ!と最初から激しく突き、本音を狂わせる。

「あああっ!はあっ!あはああっ!——んむうっ!」

盛大に喘ぐ本音だったが、ここはIS学園。神聖なる学び舎である。

防音設備など当然つけられていない部屋なので、騒ぎまくれば隣にも聞こえてしまうかもしれない。

それを抑えるために、クロウは本音のプニプニとした唇を唇で塞いだのだった。

最初は驚いて目を見開いた本音だったが、理解してくちゆくちゆと淫靡な音を奏でるデープなキスに変える。

しかしキスを止めてしまうと、また盛大に大きな悲鳴を上げる。

「本音、声を少し押さえろ」

「無理い!無理だよ!気持ち良すぎて抑えられないい!!」



指を口の中に入れて、舌をいじくりまわしてやる。

突かれることに連動してそれなりに大きな双丘がプルンプルンと揺れる。

「そろそろ出すぞ、本音」

「んっ！んっ！んっ！ふううっ！んううううっ！！」

乳房を揉まれた快感で仰け反ったので、後背位からまた背面座位となつて突きまくる。

口の中に指を入れられたままなので、本音は碌に話すこともできずに呻く。

「腔内なかに射精だすぞっ」

「くくくくッ！くくくくッッッ！！」

最も深い場所、子宮口に亀頭がへばりつき、そこから射精される。

子宮内部を、クロウの子種が満たしていく。

「ふはっ、はひい……あふう………っ」

ようやく指を口内から抜かれて、話せるようになった本音。

しかし話せるほど余裕がまったくなく、ただただ行為の余韻に浸るのみだった。



それからおよそ一時間後、また汚れたのでシャワーに入って出てきたクロウ。

「……………むっ？」

部屋を見渡すと、シャワー室に入るまで放心状態だった本音がなくなっていた。復活してどこかに行ったのかもしれない。

そう考えてクロウはベッドにもぐって眠りにつこうとするが……………。

「むっ？」

毛布の中から突進してきた物体を優しく抱き留めてやる。

突進と言えるほど強い衝撃ではなかったのだが、彼女からすれば立派な攻撃だったのだろう。

「何をしている？本音」

「えへへ、さつきはクーにやりたい放題されたからね。次は私のターンなんだよ」  
そう言って本音はクロウに襲い掛かった。

結局その日、艶やかな少女の声が啼き止むのは、もう少し深夜になってからだだった。



3日後の朝のホームルーム。

ある重大なことが決まっていた。

「———ということで、クラス代表は織斑 一夏くんに決定しました」

「なん……だと……!!?」

『何だか1繋がりでないなあ』などと言っている真耶に対して、一夏はまるで世紀末のような顔をして呆然としていた。

この3日間のクラス代表決定戦の対戦結果は、

○クロウ v s. ●一夏

○セシリア v s. ●一夏

で、順位的には1位がクロウで2位がセシリア。

一度も勝てなかった一夏がドベということになった。

しかしクロウにはまだしもセシリアに負けたのは仕方がないことだ。

結局大した勉強もできずにIS起動時間も1時間に満たない素人と、イギリス代表候補生としてみっちり勉強をして起動時間は300時間を超えている玄人では話にならない。

まあつまるところクラス代表は本来クロウのはずなのだが、何故か最も関係のない位置にいた一夏が代表になったのだ。

「質問！どうして俺が代表なんですか？俺1回も勝てなかったんですけど………」  
自分で言っていて悲しくなってきた一夏。

そんな一夏に真耶が答えてくれる。

「あ、それはミキストリくんとオルコットさんが辞退したからですね。そうして必然的に織斑くんが代表になりました」

「何いっ!?!」

グルン！と凄まじい勢いで首を反転させてクロウとセシリアを見る一夏。

クロウは相変わらず無表情で、セシリアはクスクスと口に手を当てて微笑んでいた。

セシリアの美しい仕草に怯んでしまう一夏だが、今日の一夏は一味違う。

「何で2人とも辞退したんだよ？」



2人の答えはこうだった。

クロウ↓面d……戦闘経験の少ない一夏を鍛えて上げられるから。  
セシリア↓クロウさんがそう言うんだったらわたくしもそうする。

「ぐう……………」

言い返してやりたいのはやまやまなのだが、自分のためとか言われると言い返せない。

クロウは明らか本音が出ているが、しかしそこを指摘してもどうにもならないだろう。

クラスの女子生徒も男子2人のうちどちらかだったら別にどっちでもよく、一夏がやるんだっいたらいいんじゃないかな？みたいな空気が流れている。

「よし、1年1組のクラス代表は織斑に決定した。異論はないな」

『はあーい』

「……………はい」

こうして非常に不本意ながらクラス代表は一夏がすることになったのだった。

よし、これで織斑に押し付けられたな

やっぱりかあああ!!

## 中華墮ツ

「よし、全員頭では理解したな？では今から実践を見てもらう。ミキストリとオルコツト、それに織斑。飛べ」

クラス代表決定戦から数週間が立った4月下旬。

寒い日と暖かい日が交互にやってきて、日本人からすれば最も厄介とも言える季節。

ここIS学園の1年1組学級は、アリーナでISの授業を聞いていた。

指名されたクロウとセシリア、そして一夏がISを展開させる。

最も展開が早かったのは、やはりと言うべきかセシリアで、そう変わらない時間でクロウが、一夏は一番時間がかかった。

ちなみにクロウが少し展開が遅れたのは、女生徒たちが全員ISスーツを着用してお

り、成長途中の未熟な肢体がくつきりと浮かんでいる彼女たちをガン見していたからでは決してない……と信じたい。

まあしかし成長途中と言ってもすでに十分成長した生徒もいるわけで、例えば碧いI Sスーツを纏ったセシリアは大きな胸に括れた腰などが強調されていて非常に美しい、一夏の幼馴染である篠ノ之 箒も胸部がかなり発達している。

……そんな話はどうでもいい。

「織斑、熟練されたI S操縦者は、展開までに1秒とかからない。別に貴様にそこまで求めるわけではないが、もう少し努力しろ」

教官であり教諭である実の姉、千冬にそう言われて落ち込む一夏。

それからすぐに空に飛ぶように言われ、クロウとセシリアはすぐさま空へと飛んでいく。

一夏もそれに遅れまいと必死に追いかけるが、イギリス代表候補生のセシリアと『僕の考えたさいきょーのオリ主』のクロウに敵うはずもなく、どんどんと距離を離されていった。

まだI Sに触れて間もないから仕方がないのだが、やはり2人に比べて情けなく見えてしまうのは仕方ないだろう。

「お前らつて凄いやなあ……どうやったらそんなに動けるようになるんだよ……」

ようやくクロウとセシリアに追いついて、独り言のように疑問を飛ばす一夏。クロウとセシリアはふいつと顔を見合わせた後、一夏を見て――。

「何となくだ」

「昔からずっと訓練してきましたから」

まったく参考にならない言葉に、がつくりと肩を落とす。

セシリアは普通にわかるが、最近使えるようになった一夏からすればどうしようもない。

クロウは論外である。というかこんな奴にフルボッコにされて、一夏はさらに沈んだ。

「コツとかはないんだな……まあ仕方ねえ。ひたすら訓練あるのみだな！」

流星は主人公。熱い心を持った青少年である。

そんな一夏を見て、セシリアは美しく微笑みながら言う。

「うふふ、その意気ですわ。こういうところは、クロウさんも見習わなくてはなりませんわよ。」

「……………」

急に黙ったクロウに、セシリアは楽しそうに笑う。

その笑顔は異性を魅了するには充分だったらしく、一夏も例にもれず顔を赤らめた。

『一夏！もう十分だろう！さっさと降りて来い！』

幸せで暖かな時間が、ISの通信回線から聞こえてくる大声で吹き飛ばされる。

それを言ったのは一夏に一途な好意を寄せる筈であり、彼女は楽しそうに話し合っているセシリアと一夏が許せなかったのだ。

インカムを取られた教師の山田 真耶は生徒に強く出ることできず、あわあわと涙目になりながら慌てていた。

「……………」

そんな彼女の様子に、クロウがキュンときたのは内緒である。

次に千冬が命令したのは、上空200メートルのこの場所から急降下、地表10センチで完全停止をしろとのことだった。

最初にセシリアが実行し、難なくそれをやりこなしてみせた。流星はイギリス代表候補生と言ったところだろうか。

「じゃあ次はどつちがやる?」

「お前が逃げ」

「……………」なんか違う気がしたけど気のせいかな? まあいいや、やってくる」

クロウの言葉にどこことなく不安を覚えた一夏だったが、気にしても仕方がないと割り切り急降下を始めた。

それは凄まじいスピードで地表に向かっていき、地表10センチの所で機体を――

ズドオオオオン!!

――止めることなく地面に突撃。見事に墜落した。

地面にかなり大きな穴が開き、皆そちらを注目している。

そして一夏と同じように最近ISを使い始め、学園最強に師事したと言ってもここまでの繊細な動きができないと考えていたクロウは、ゆつくりと地面に降りていたのだつた。

「うふふ、織斑さんって面白い方ですわね。そしてクロウさん、ズルはいけませんよ?」

「……………」

しかし見ていた人は見ていたらしく、隣でお小言を言うセシリアを始めてこちらをニコニコとしながら見つめてくる本音などがいた。

それから最後には武装の展開を指示された。

セシリアは何の問題もなくクリアー。

長距離タイプのセシリアだが、近接戦闘用の武器も問題なく展開できた。

一夏は武装が『雪片式型』しかないため、比較的容易にイメージができて初心者にしては早い展開速度だった。

そしてクロウだが、意外にも彼が問題だった。

本来 I S の装備を展開させようとする、熟練者なら一瞬の爆発的な光が発生して次の瞬間には武装が完了している。セシリアが良い例だろう。

素人でも光の粒子がゆつくりと武器を形取っていつて、完全に展開される。これは一夏だ。

しかしクロウは武装を展開させようとする、武器は空間を歪ませながら現れるのだ。

さらにその展開スピードの遅いこと。

かなり遅いという訳ではないが、それでもやはり普通の I S 武装展開速度よりは格段に劣る。

だがこれはクロウの問題ではなく機体の問題なのでどうすることもできず、結局それで授業は終わって解散になった。

勿論一夏は残ってグラウンドの穴埋めである。



「……………、どこのなのよ……………」

ある一人の少女が、IS学園内をうろつきまわっていた。

彼女は所謂迷子というやつなのだが、彼女の高いプライドはそれを認めないだろう。茶色の髪の毛を黄色いリボンでツインテールに結わえてある。

口を開けば見える八重歯が印象的で、身長の小ささも合わさって小動物にも見える。IS学園の制服を纏ってあることから生徒であることは分かる。

彼女もまた制服を改造しており、肩と脇は露出しているが袖はあるといった変わった改造を施してある。

活発な印象を与える彼女の名前は風 鈴音。

彼女は今『本校舎一階総合事務受付』を目指して進撃していた。

……………が、考えるよりも先に体が動くタイプな彼女は地図を見ずに突撃したため、今更地図を見ても何もわからない状態に陥っていた。

「もう、何で案内人くらいつけてくれないのよ……………」

ブツブツと文句を言いだす鈴。

理不尽極まりない。

「……………ん？」

そうこうしていると、近くにあったアリーナの入り口から女子生徒たちがぞろぞろと出てきた。

おそらく授業が終わったのだろう。

「(あの中から適当な奴選んで案内してもらおつと)」

そう考えた鈴は早速行動に移す。

しかしそこで思いもよらない……わけでもなく——むしろそいつ目当てでここに来た——、知った声が聞こえてきた。

「もう、クーはちゃんと授業を受けないとダメだよ」

「……………すまん」

「(えっ!?この声って……………!)」

先ほどまで面倒くさそうに顔を歪めていた鈴の表情が、可愛らしい満面の笑みに変わる。

声が出た方を見れば、やはり自分の想い人である男の姿が。

隣のほほんとした女がいることが少しムカつくが、男の大好きさは身を持って体験しているので気にしない。

鈴はダツと駆け出し、クロウの背中に抱き着きにかかった。

「く〜ろ〜う〜!!」

「むっ?」

走った勢いそのままクロウの背中に抱き着き、落ちないように首に手を回して引つづく。

それでもクロウは倒れることはなく、しっかりと受け止めて見せた。

「鈴か? 久しいな」

「そうね、久しぶり〜!」

すりすりと、自分の匂いをこすり付けるようにクロウの頬に頬ずりする。

鈴の柔らかかな肌がこすり付けられて、クロウもご満悦だ。

「ちよつと迷っていて困ってたのよ。付き合ってちょうだい」

「む?」

そう言つて鈴は、小さな体のどこにそんな力があると疑いたくなるような力でクロウをグイグイと引つ張つて行った。

クロウと一緒にいた本音が一人ポツンと残されたが、悲観することなく相変わらずのほほんとした雰囲気のまま、教室に戻つて行った。



「お前……私の案内を聞く気がなかっただろう……」

「え〜？そんなことないわよ〜？」

クロウと鈴は、現在何故か屋上へと来ていた。

鈴の目指していた場所が『本校舎一階総合事務受付』と聞き、わかりやすい場所にあつたので覚えていたクロウはそこに案内しようとするが、鈴はそんなこと知ったことじゃないとばかりに話を聞かずに動き回った。

そうしていつの間にか屋上へと来ていたのだ。

クロウの責めるような声もどこ吹く風、金網に手を絡ませて風を楽しんでいる。

鈴のツイントールが風邪と共に踊り、心地よさそうに目を瞑っている彼女を見て、クロウはドキつと心が少し高鳴った。

「で、改めて言うけど久しぶりね、クロウ」

「そうだな、半年ぶりか？」

鈴との出会いは彼女が日本に来た小学生の時からののだが、半年前にも会っているよ  
うだ。

鈴は優しい笑顔を浮かべているが、うつすらと開いた目はハイライトがなかった。

「そうね、あんたがいきなり何も言わずにどこかへ行っちゃったからね」

「……………すまん」

クロウは身近な人に何も言わずにどこかへ行く癖でもあるのだろうか？

「別にいいわよ。あんたがそういうやつだって知ってるし」

「む？」

そう言つて鈴は地べたに胡坐をかいていたクロウの体に、スポットとはまるように座  
る。

鈴は小柄な体型で、それに違わず体重もかなり軽く、クロウからすれば何が乗ったの  
かわからないくらいだった。

胡坐の中にすっぽりと埋まりこんで、鈴はニコニコと笑う。

「えへっ、あんたの膝の上つてやつぱり落ち着くわね」

「そうなのか？」

鈴はゴロゴロと猫のように喉を鳴らしながら、クロウに身体をこすり付ける。

背中をクロウに預けるように押し付けている。

そうすると自然と、鈴の甘い香りがクロウの鼻孔をくすぐるわけで……………。

クロウは鈴のツインテールの片方を持ち上げ、鼻に当てて匂いを嗅ぎだす。

「ちよっ?! あんた何してんのよ!？」

「うむ、いい匂いだ」

「感想を聞いているんじゃないわよ!」

鈴は顔を真っ赤にさせて怒鳴る。

それは怒りからか、羞恥からか、それとも……………?」

クロウは一際匂いを堪能した後、鈴の首筋に吸い付いた。

「んんうーや、やめなさいよ……………」

そう言つて抵抗するが、ゾクゾクとした快感が全身に走つて弱弱い抵抗しかできない。  
い。

もう半年もお預け状態なのだ。性欲だつて溜まりに溜まっている。

首筋をペロペロと舐めていたクロウは、今度は鈴の小ぶりな唇に吸い付いた。

舌と舌を絡ませるようなキスではなく、クロウが自分の唾液を鈴に飲ませるように大量に流し込むキスだった。

鈴も鈴で、それを一切こぼさずに飲みきった。

そしていつの間にか下着しか纏っていない状態にまで脱がしていたクロウは、下着の上から鈴の発展途上な乳房に吸い付いた。

「んんっ！あっ……ひゃあっ！」

左の乳首は赤子のように吸い付き、右の乳首は爪でカリカリとした後ギュッと潰した。

ブラがクロウの唾液で変色していく。

「こちらも準備はできているのではないか？」

「やんっ！」

秘部に手を伸ばし、下着の上からクニクニと弄る。

そして次に顔を秘部に近づけていき、秘裂を全て飲み込むように吸い付いた。

「あああっ！ちよつと待って！あたし汗とかかいているし………」

「そんなの気にしない」

「あたしが気にすんのよ！」

しかしクロウはその抗議を受け付けず、ひたすら秘部を舐めまわした。

下着はクロウの唾液と秘裂から滲み出した愛液で、すでに濡れ濡れだった。

陰核はこれまでの刺激から、下着を押し上げるほど勃起して存在をアピールしていた。

クロウはそれを指でクリクリと弄りながらも、秘裂からにじみ出る愛液を啜り続けた。

「ひうううっ！あふっ！ああああっ!!」

鈴は送られてくる快楽を涙を浮かべながらも我慢する。

しかし身体は正直なもので、まんぐり返しされている秘部からプシュップシュツと液体が噴き出して、鈴の顔にかかる。

「我慢せずにイっていいぞ」

「うつくうううっ！はあああっ!!」

クロウの言葉がきつかけとなつたのか、鈴の絶頂と共に秘部から勢いよく潮が噴き出す。

「ああ……飲むなあ………」

クロウは秘部に口を押し付けて、あふれ出てくる潮をどんどん飲み干していく。

そんな姿を見て鈴は顔をさらに赤くして抵抗しようとする。

しかし絶頂の余韻で小さな身体を痙攣させていて、力が入らなくて……と地面に倒れこむ。

「……………変態」

「むう……………」



恨めしそうに涙を浮かべながら罵倒する鈴。

そんな彼女をお姫様抱っこで持ち上げ、いつの間に用意したのか、マットレスの上にゆっくりと横たえさせる。

「鈴」

そう言つてクロウは鈴の目の前にいきり立つた怒張をさらけ出す。

ガチガチに勃起した陰茎は、時折ピクピクと動く。

鈴は亀頭を全て飲み込み、陰茎を手でこすつて刺激する。

「んちゅ……ふう、ひもひい？」

「ああ、気持ちいいぞ」

クロウは男根を鈴に咥えさせながらも、手を伸ばして秘部を刺激する。

下着を秘裂に食い込むように引つ張り上げれば、下着に浸透した愛液が滴り落ちる。

「んぐうー！ふぐうううっ!!」

下着を横にずらせば、陰毛が一つも生えない恥肉が見える。

シックスナインの体位になって、秘部にまた吸い付く。

唇が触れた瞬間、鈴の身体が大きく撥ねた。

「んんんっ！ああ……ふぐっ！」

送られてくる快感に負けないように、口の中にある亀頭を下で舐めまわす。

鈴の舌はまるで猫のようにざらついており、それも快感を与えるいい刺激になる。

クロウも陰核を舌で刺激しながら、指を二本膣内へと入れていく。

「んんうううっ!!」

それから激しく指を出し入れする。

そうするたびに愛液が噴き出してくる。

「んっ！んぐっ！あぐううっ!!」

大きな男根が口にねじ込まれているので悲鳴は出せないが、それでも嬌声が漏れ出す。

クロウの指が天井部分をこすり、コリツとした感触が伝わる。

「んぐううっ！んああああっ!!」

それでまた絶頂に達した鈴は、秘部から大量の潮を噴出させる。

「ぐっ」

しかしただでやられるかと、負けず嫌いな鈴はじゅるるる！とはしたない音を立てながら、口の中の亀頭をバキュームする。

そしてとうとう鈴口から精液が溢れ出す。

鈴の口の中に発射されると同時に、秘部からまたプシュツと音を立てて液体が噴出した。

コクコクと精液を飲み干していく鈴だが、飲みきれなかった分が口からあふれ出た。「んく……あんた、出し過ぎよ」

はあはあと息を吐きながら言う。

力なくマットレスの上に横たわり、慎ましい乳房が外気にさらされている。

クロウは男根をゆっくりと膣内へ挿入していき、全て入ると動き出した。

「はああつ！ひいつ！おつきいいいっ!!」

突くたびに揺れるのは、つつましやかな双丘。

ほんの少し揺れる程度のそれを見て、クロウは桜色の先端を口に含む。

「んう……やあ………」

ちゆうちゆう、と吸い付いて乳首を刺激した後、また激しく男根を突き入れる。

「あああつ！身体が押し上げられるうっ!!」

凄まじい大きさと長さを誇る男根は、子宮まで届いて押し上げる。

その衝撃で、鈴の小さな身体は跳ね上がり息ができなくなる。

勃起した乳首を舐め上げ、小さな乳肉を弄びながら反応を愉しむクロウ。

眼からは涙が零れ落ち、身体中から汗が噴き出る。

秘部は突かれるたびに愛液を噴出させ、鈴の身体は数多の液体でびしょびしょになる。

クロウは鈴を横に寝かせて、さらにそこから突きまくる。

「あふうううっ！やあ……これ犬がおしっこするときみたいじやないいいっ!!」

腕を上を持っていかせ、露わになった腋にキスをする。

ゾクゾクとした疼きが、また鈴を襲う。

あふれ出る腋汗をなめとつていき、自分の唾液で腋が濡れていくのを愉しむ。

「あああつ！腋はだめえっ!!」

そう言つて鈴は逃げようと体位を変える。

するとなんの偶然か後背位となり、奥へとねじ込まれる男根をさらに感じやすくなつてしまった。

「逃げたお仕置きだな」

「いいいいっ！あつ！ああつ！あああああつ!!」

大きな男根が小さな膣内へと押し進められ、鈴のGスポットが亀頭で抉り削られる。

「ひいひいっ！んんんんううううっ!!」

そしてまた嘔いてしまう潮。

男根を銜え込んだまま、大量の潮を嘔きださせる。

それで力が入らなくなつてしまい、支えていた手と膝は地面に投げ出して動けなくなつてしまう。

するとクロウは鈴の腹を抱えて持ち上げて、その状態で突き始める。

「ああああっ！あしいい！届かないいいいいっ!!」

そうすると必然的に鈴を支えるのはクロウの腕と膣内に刺さっている男根のみになるので、さらに奥へと突きだされる。

子宮口が押し開けられ、亀頭が中へと入ってくる感覚に絶叫する鈴。

このままでは鈴が壊れそうなので、マットレスの上に座って鈴も座っているクロウの上に座った。

そして背面座位の形となつて、また突き出す。

「ああっ！スゴイいいっ！あんっ！あふうううっ!!」

クロウの足に手をつくので、二の腕で乳房が寄せられて小さな谷間ができる。

「だめええっ！奥、気持ち良すぎるううううっ!!」

ズン！と一度腰を持つて思い切り突くと、愛液が溢れ出して未熟な乳房がプルンと揺れる。

背中に噴き出ている冷や汗を舐めとる。

「はああ……あたし、おかしくなっちゃう……このまま一緒に……」

身体をひねって、クロウのキスをねだる。

鈴はクロウの肩に手を乗せ、助けを求めるようにキュツと握る。

クロウはキスに応えてやりながら、陰核を指で刺激する。

「ふぐつーもうだめ……またイっちゃうかも……」

鈴の言葉通り、膣内が精液をねだるようにギユっギユっとなら男根を締め付ける。

元から小さかった鈴の膣壁がさらに狭まり、動かせなくなるくらいになる。

しかしクロウはそんなのどうしたと言わんばかりの勢いで、また突きはじめた。

「はあああつー奥のそこ、イイイイいっ!!」

はふつはふつと犬のように息を吐き出し、舌をだらしなく垂らせる。

膣の奥へと突き刺さった男根を引き抜く際にカ리가膣肉に引っ掛かって、また大きな快楽を起こさせる。

尻穴もひくひくとうごめく。

「私ももう限界だ。一緒にイこうか」

「ひいっ!!これはだめえええっ!!」

健康的な肉付きの太ももを抱えて、グイッと持ち上げる。

するとさらに奥へと男根が突き刺さり、ゴリゴリと抉っていく。

「ひうううっ!もう出ないのに……また出ちゃううううっ!!」

プシヤアアアツと用をたしているときのように、放物線を描いて飛んでいく液体。

「鈴、イクぞっ」

「あっ……ひいいいいいっ!!」

鈴口から物凄い勢いで精液が射精され、その衝撃でまた潮を噴きだしてしまう。

「あっふ……はああ!はあ!はあっ!」

身体中を痙攣させて悦ぶ女の身体。

膣内も痙攣しまくり、残った精液を絞り出そうとうごめく。

入りきらなかった精液がゴポゴポと音を立てて零れ落ちていく。

「あう……くろう、キスしてえ………」

「ああ」

そしてむさぼるように唇に吸い付く鈴。

今度は舌と舌を絡み合わせる淫靡なキスだ。

「(くろう……すき……だいですき………」



あれから気絶してしまった鈴を『本校舎一階総合事務受付』に送り届けたクロウ。

帰りのホームルームや夕食の時間まで過ぎてしまったが、まあ鈴との過ごした時間に比べれば安いモノだろう。

そう言えば、今日の夕食後の自由時間で一夏のクラス代表決定を祝ってパーティーもどきがされることを思い出した。

正直パーティーとかそういうことにはまったく興味もないのだが、一応顔を出すくらいはしておいた方がいいだろう。

そう考えたクロウは、食堂へと脚を向けるのだった。

——— また一方的にイカされた……………

——— あの〜凰さん？大丈夫ですか〜？



## 中華ピンチ

『織斑くん！クラス代表決定、おめでと〜！』

「は、はは……………」

1年の寮の食堂で開催された、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』。

祝ってもらう立場の一夏だが、全敗した結果のこれだと素直に喜べるはずもない。

まあしかし女子生徒たちからすれば何か口実をつけてクロウと一夏という2人しかない男子生徒と仲良くなりたいたいだけなので、そんなことは関係ないのだろう。

頼りになるお兄さんキャラのクロウか、爽やか系のイケメン一夏。

それぞれ好みの容姿をしている方に近寄って行って、なるべく会話をしようとする。

「は〜い！新聞部で〜す！」

そう言つて入つてきた眼鏡をかけた少女。

自己紹介するには、彼女の名前は黛 薫子。新聞部の副部長らしい。

彼女は現在学園中の話題をかつきらつてゐる2人の男子生徒にインタビューに来たらしいのだ。

一夏へのインタビューをそこそこに、次はクロウに向けてボイスレコーダーを向けた。

「はい！じゃあ次はクラス代表決定戦に全勝したというミキストリくん！この学園に来ていいと思つたことはありませんか？」

一夏のインタビューが意外とつまらなくなつてしまつたので、こつちに期待とばかりに目からキラキラした光線を出している。

クロウは少し考えた後、答えた。

「ふむ……私と同クラスの女子勢が総じて可愛らしいことかな？」

『ええっ!』

クロウの予想外の答えに、1組女子勢は一部を除いて顔を真つ赤にさせる。

触れられていなかつたが、クロウの容姿も中々……というよりかなり整つてゐる。

それがふざけた様子もなく無表情で言つたら、それは本気だと思ふだろう。

逆に1組以外で参加していた女子生徒たちが舌打ちをする。

「おお〜！ミキストリくんは堂々としているね〜。織斑くんもこれくらい言えるようにならなきゃ」

「勘弁してくださいよ……………」

からかってくる薫子に、一夏は本当に無理だと言わんばかりにテンションを下げて言う。

確かに思春期の少年からすれば、かなり恥ずかしい内容だ（両者にとって）。

まあクロウは思春期をとくに過ぎているのだが。

「何を他人事のようにしている？」

「……………え？」

クロウはそう言つて、薫子の顎をクイツと持ち上げ上を向かせる。

顔をさらに近くさせ、眼鏡越しに目を見て話す。

「お前も十分魅力的な女なのだぞ？ 私から見ても」

「……………ツ!!」

最初何を言われているのかわからなかった薫子は、言われた意味を知ると声にならない悲鳴を漏らした。

顔は真っ赤に染まり、先ほどまで一夏をからかっていたとは思えない。

「え……………あう……………き、記事を書かなければいけないので帰りますううう!!」

どひゅん！と擬音が聞こえるような勢いで食堂を出ていく薫子。

「良い御身分ですわね？クロウさん」

「……………痛いぞ、セシリア」

制服の上から尻をつねりあげられる。

セシリアは美しい微笑みを維持しているが、こめかみに大きな青筋が現れていた。

冷や汗がタラリと頬を伝う。

結局クロウはこのパーティーが終わるまでの間、セシリアの笑顔の圧に苦しむことになったのだった。

そして場所は変わって、クロウと本音の部屋である。

「尻が痛い……………」

「あんなこと言うクーが悪いね」

のほほんとした表情で正論を言う本音。

まったく言い返せない。

「でも、私とかせつしーとかも手籠めになっているのに、こういうことするんだもんね」

「……………」

ザスザスと見えない刀が、クロウのハートに突き刺さる。

しかしこれもすべて自業自得。どうすることもできない。

「だから、私に許してほしかったらいっぱい愛してね？」

そう言つてクロウの背中に抱き着く本音。

その声は先ほどまでの険はなく、おねだりするような声色だった。

「……………ああ」

クロウはキュッと優しく、本音の柔らかな肢体を抱きしめた。

そしてそのまま、朝まで一緒になつて寝るのだった。



翌日の朝、1年1組の教室ではある噂でもちきりだった。

それは今日学園に転入生が来るからだ。

噂好きな女子高生が盛り上がらないはずがなかった。

そしてさらに女子生徒たちの注目を集めたのは、その転入生が中国の代表候補生だからだ。

代表候補生と言えば、1組にいるイギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

4組にいる日本代表候補生である生徒がいるだけで、2人しかない。

しかしこれだけでも十分凄いのだ。

ISの機体数Ⅱ国防力と言われるこの時代に、弱冠15歳にしてそのとんでも兵器を任されているのだから。

4組の日本代表候補生の方は色々な事情があつて未だ専用機を持っていないようだが、今それは置いておこう。

まあとにかく、『代表候補生マジパネエ』ということである。

「(そういうや中国つて言えば……………」

一夏は昔仲の良かった中国人幼馴染を思い出す。

決して尖閣諸島だけに飽き足らず、沖縄までひっぱり出してきたとか考えていない。

それは違う世界でのお話だ。

「(あいつ、今も元気でやってるかな……………」

まあ元氣じゃない姿なんて想像もできないけどな…………と苦笑しながら続ける。

頭に浮かぶのは、髪をツインテールの結わえていて活動的な女の子。

気を使わないでよく、女友達の中では最も仲が良いと断言できる。

そんな彼女も家庭の事情で、中学2年生の時に中国へと戻ってしまった。

その時に柄にもなく泣いてしまったのは秘密である。

「織斑くん、クラス対抗戦頑張つてね！」

「……………」

一気に憂鬱になった。

クロウとセシリアにあっけなく敗北した一夏は、本来ならクラス代表にはなれない。

しかし勝者2人が面倒だと押し付けてきたので、逃げることもできずにクラス代表になつてしまったのだ。

クラス対抗戦の優勝賞品は、学食デザート半年フリーパス券。女子生徒たちが狙わな  
いはずがなかった。

クラスメートたちにはプレッシャーをガンガンかけられて、一夏は非常に疲れてい  
た。

「頑張つてくださいね？織斑さん。わたくしもデザートは好きですわ」

「じゃあお前が出てくれよ」

「それはできませんわ。このクラスの代表は貴方なのですもの」

さつきまでクロウと仲良く会話をしていたセシリアが一夏へと近づいて言う。

ブツブツ文句を言う一夏だが、セシリアの正論に何も言い返せない。

そもそもあそこで全敗した自分が悪いのだ。

「……………よし！やっつてやるさー！」

千冬に迷惑をかけないように頑張ろうと決めた一夏は、クラス対抗戦を優勝しようと思気込んだ時だった。

「じゃああたしにも勝てないとね」

「えっ……………？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

それはやつぱり一夏のセカンド幼馴染、風 鈴音だった。

別れた時から約一年ほどたっているからか、髪形や体型はほとんど変わっていないくても大人びて見える。

「鈴……………か？」

「ええ、そうよ。あんたも元氣そうね、一夏」

「お前も元氣そうだな」

「あたしが元氣じゃない時なんてないわよ」

そう言つて笑い出す鈴。

昔と変わらず、気安く話せて本当に楽しい。



一夏はまだ話そうとするが、こちらに来る……というか鈴に向かつていく強大な脅威が現れたのでやめにする。

その脅威は、鈴に向かつて出席簿を振り下ろした。

「きゃっ!？」

しかし流石は中国代表候補生。それに鈴の猫的本能があるのか、転がりながらもその攻撃を避けて見せた。

一夏はそれだけでも拍手がしたくなる。

「ち、千冬さん……危ないじゃないの!!」

「シヨートホームルームの時間だ。さっさとクラスに戻れ」

睨み合う猫と狼。

2人とも同じ異性に好意を寄せる者として、一歩たりとも引かない。

「あ、あの………本当にもうすぐ時間になっちゃいますよ?」

そんな緊迫した空気を霧散させたのが、本音に次ぐ癒しキャラである真耶だった。

千冬はもう興味はないとばかりに視線を逸らし、鈴も教室に戻るために扉に手をかける。

そして出ていくときにふと思い出したように、顔だけ戻す。

「あ、そうそう。クロウ! 今日、お昼一緒に食べましょう?」

「む？構わんぞ」

「えへっ、りよ〜かい！」

承諾されて嬉しそうに笑う鈴。

それはまさに恋する乙女で、見たことのない幼馴染の女の瞬間を見て一夏は自分に向  
けられたものでもないのにドキリとしてしまった。

そうして噂の中国代表候補生は出て行った。

……………不機嫌になった千冬とセシリアを残して。



昼休みになり、生徒たちは各々昼食を取り始める。

クロウとセシリアに本音は食堂組なので食堂に向かっていた。

セシリアはクロウと親しげに話していた中国人チャイニーズが気になっていた。

「はあ……………」

どうせクロウの毒牙にかかった女の中の一人だろう。

まあ自分もそうだから笑うこともできないのだが……………。

本音はいつも通り、何らかの癒し成分を周囲に放出させている。

クロウもこの癒し成分に夢中になっている人の一人だ。

「何にするか……………」

「わたくしは洋食ランチにしますわ」

「じゃあ、私はうどんにしよ〜つと〜」

それぞれ食券販売機で好みの昼食を買い、食堂のおばちゃんに渡す。

結局クロウは和食セットにすることにしていた。

「ふむ……………」

さて、食事を受け取ったのなら席を取らなければならない。

しかしこの食堂の飯は美味しく、生徒たちにも人気のある場所だ。

故に席は女子生徒たちで埋まり、座るところがないように見える。

「クロウ〜っつちよ〜！」

だがそこに救世主が現れた。

鈴が小さな身体を目いっぱい使って手を振り、自分の存在をアピールしていた。

「どうやらクロウ達の席も確保してきてくれたみたいだ。」

『あれがもう一人の男性操縦者?』

『ねえ!ちよつと格好良くない!?!』

『う〜ん……私は織斑くん派かな………』

『私はミキストリくんに思いつきり甘えてみたい!』

食堂中に聞こえるような大声で呼んだので、自然と視線も集まる。

珍しい男の生徒となれば、さらに視線の数が多くなる。

しかし3人はそんな大勢の視線を気にも留めず、鈴に向かって歩きはじめた。

セシリアはその美貌と地位の高さから視線にさらされるのは日常茶飯事だったし、本

音は相変わらずのマイペースでまったく気にしない。

クロウは言わずもがなだ。

「すまない、助かった」

「べ、別にいいわよ。………余計なのも来ちゃってるけど」

照れてツインテールの髪を弄りながら答える。

ちよつと本音も出ているが、仕方がない。

「お邪魔してしまって申し訳ありません」

「お邪魔〜♪」

セシリアはペコリと頭を下げ、謝るが、本音はまったく謝る気はないようだ。それぞれ席に座って料理を食べ始める。

ちなみに鈴の昼飯は、中国人らしく（？）ラーメンだった。

特に会話もなく食事が進められていき、数分後になってセシリアがクロウに話しかける。

「クロウさん？この方を紹介してほしいのですが……………」

そう言われて気が利かなかったクロウは謝罪を口にしてから紹介をする。

「こいつは風 鈴音。私は鈴と呼んでいる。……………まあ昔からの付き合いだ」

次に鈴に紹介するため、セシリアのほうに手を向けながら話す。

「こいつはセシリア・オルコット。セシリアとも昔からの付き合いだな。この学園で再会した」

そして最後に、我関せずと言うかのように一人食事を進めていた本音に手を向ける。

「こいつはセシリアは知っていると思うが、布仏 本音。見た目通り、のんびりした奴だ」

「うえ、そんなことないよ」

本音は抗議するが、セシリアと鈴には聞こえていなかった。

両者ともに『イイ笑顔』で向き合っている……………否、睨み合っている。

「……………あんたも?」

「ええ、つい最近ですわ」

たったそれだけで、セシリアに意図が通じる。

頬を赤らめてくねくねとうごめく英国人。

それを頬を引くつかせながら睨みつける中国人。

第3次アヘン戦争の始まりである。

……………まあこれは冗談だが、しかしこれから何年もずっとクロウを求め合うライバルとなるのは事実だった。

「でもあなたも代表候補生なのですね?驚きましたわ」

「へー、じゃああんたもどこかの代表候補生なの?」

今度はセシリアが鈴に質問する。

鈴はその猫のような目を少し見開いて、驚いたと表現する。

「あら?ご存じなくて?それは代表候補生としてどうなのかしら」

「別にあたしは他国に興味はないしね。それにI Sもそんなに好きってわけじゃないし」

鈴は女だが、現在世界中での過剰なまでの女尊男卑は好きではなかった。

それではI Sが発表されるまでの、男が女に大きな顔をする時代と変わらないではな

いか。

特に女尊男卑はヨーロッパなどで強く、まさにヨーロッパのリーダーとも言える国はあまり好きではない。

「それでも、少しは他国にも興味を示すべきですわ」

「……………考えとくわ」

セシリアは、努力して掴みとった代表候補生としての地位に誇りを持っている。対して鈴は特に思い入れがあるわけでもなく、誇りなどなかった。

それがこの2人の決定的な差だろう。

「ねく、クー。食べさせて〜」

「む？別に構わんが……………」

「……………」

だが今は争うときではない。

とりあえず、今クロウの膝に乗って甘えまくっている日本人を倒そう。

今この時だけ、英国と中国は手を組むことにしたのだった。



「あんた、弱いわね」

「……………うるせえ」

鈴は今ピットで疲労によって倒れこんでいる一夏を、指でツンツンと突きながら言う。

違うクラスだからあまり話せなかったので、放課後になつて話しに来ているのだ。

一夏はクラス代表となつた時から、ずっと箒と特訓をしていた。

今日もそれで倒れているのである。

しかしその訓練は鈴からしてみると――

「そんなのでI Sの操作がうまくなるはずないでしょ」

「……………やっぱり？」

今日こそ箒は学園から借り出した日本産I S『打鉄』を使って訓練したが、そう何度も一般生徒が借り出せるはずがない。

ではI Sを使えないときはどうするのか？



それはひたすら剣道の指南である。

それのおかげで勘は戻ったが、I Sの操作がうまくなったわけではない。仕方ないから知識だけでもと思ったのだが、それもできなかった。

『こう……バン！ときてからグイっとする感じだ！』

ダメだこいつ。

箒では意味がわからないので、優秀なI S操縦者であるセシリアに聞いてみた。

『つまりこの部位から半重力や円滑に操作できる流動的力翼——』

ごめん、理論過ぎて理解できない。

懇切丁寧に教えてもらえるのは非常に嬉しいのだが、一般高校生な一夏には難しすぎた。

「鈴！俺にI Sを教えてくれ！」

「ちよ……………!?!」

ガシッと鈴に華奢な肩を持って詰め寄る一夏。

もう頼れるのはこいつしかない！

しかしいきなり迫られたら困るのは鈴の方で——

「いいからさっさと離れろ！」

「ぐええっ!!」

中国の何らかの武術だろうか、腹に一発良いモノをもらって崩れ落ちる一夏。

鈴は『あたしに触っていいのは……………」とかブツブツ言っている。

だが一夏は腹から随時送られてくる凄まじい吐き気を抑えるのに必死だったので、  
聞こえなかつた。

「……………まあ暇な時なら教えてあげるわよ」

「ほ、ほんとう……………か？」

吐き気を抑えながら感動したように鈴を見る一夏。

しかし地面に這いつくばっていた形から鈴を見上げると、必然的に短いスカートの中  
を拝見できるというわけで――

「――死ねッ！」

一夏の口では、強い酸の味がした。



「も〜！何であいつ、さっさとと言わないのよ！」

午後8時過ぎ、鈴は寮の廊下をズンズンと怒りに満ちた歩調で歩いていった。

自分の下着を見やがった一夏を蹴り倒し、悶絶する彼に向けてふと思つた疑問を質問する。

『あんたつてやつぱりクロウと同室なの？』

しかし鈴の予想していた答えは返つてこなかった。

『いい、いや……俺は……箒と同室……だ』

それだけ言つて、一夏はガクリと力尽きる。

だが鈴は一夏を構っている時間はなかった。

クロウと女が同室。

それは腹を空かせたトラがいる檻の中に、蜂蜜を塗りたくつた子犬を放り込むようなものである。

「（それにあいつにいつぱい女ができて嫌だし……）」

そう考える鈴だが、もうすでに手遅れだとだけ言つておこう。

ズンズンと歩き続けて、ようやくクロウの部屋である1024室につく。

「ふう……大丈夫よね……？」

勢いのまま飛び出してきてしまったので、身なりとかはきちんと整えられていない。髪の毛を手で梳きながら考える。

「(もし部屋に入って押し倒されたら……………)」

考えながら頬が赤くなる。

そう言えば、まだお風呂に入っていない。

まだ時期が時期なので汗はかいていないが、もし匂ったらどうしよう……………。

「……………悩んでも仕方ないわね……………よし！往くわよ！」

覚悟を決めて、ドアにノックをする。

しかしそれから待っても待っても出てくる様子はない。

「(留守かしら……………?)」

それなら出てこないのも分かるが……………。

一応確かめとばかりにドアノブをひねると——

「……………開いた？」

ということは居留守でも使われたのだろうか。

いや、でも居留守使われるようなこととしてないし……………。

色々嫌な考えが頭に浮かぶが、それを振り切るように大声を上げて中に入った。

「ちよつとクロー！いるなら返事くらいしなよ……………い……………よ……………」

最初は威勢良かったのだが、どんどんと語気が弱くなっていく。それも仕方ないだろう、何故なら……………。

「あつ！あつ！あつ！気持ちいいよ〜!!」

ベッドでクロウと本音が交わり合っていたのだから。

見る見るうちに鈴の顔が紅潮していく。

クロウと本音は、鈴に気づいていないように快樂をむさぼり合っている。

ベッドの上で四つん這いになり、クロウの欲望を受け止めている。

「あ、あわわわ……………」

呂律が回らなくなる鈴。

自分も似たようなことを何度もしたことはあるが、他人のを見るのはまた違う。

「む……………鈴か。少し待て」

そう言うのとクロウは、ピストン運動をさらに激しくさせる。

本音の膣壁をゴリゴリと削り、彼女は激しく痙攣している。

鈴が来るまでの間に何度も絶頂を迎えているので、おそらくこれが最後になるだろう。

う。

「あああつ！ひいつ！だめつ！いく……………いくううう!!」

同時に達したのか、2人仲良く身体を震わせる。

本音は支える力もなくなったのか、柔らかいベッドに身を沈ませる。

男根という栓が抜かれた隙口からは白濁液が垂れだしている。

「あふうく……気持ちよかつた……」

そう言つて本音は眠りについてしまう。

すやすやと健やか寝息を立てていて、いかにも幸せそうだ。

さて、問題はとんでもないところに出くわしてしまつた鈴なのだが……。

「い、今お取込み中らしいし、後で出直して来るわねっ!!」

身軽なその身体を翻し、脱兎のごとく逃走を図つた。

しかし相手はあのクロウ。そう簡単に逃げさせてもらえないはずがなかつた。

「待て」

「ッ!?!」

飛び出そうと半分まで扉を開けていた鈴の肩に、ガシツと手が置かれる。

「こいつを見てくれ」

「ひいつ!?!」

鈴の小さな身体をくるりと反転させ、目の前に未だいきり立っている怒張を見せつける。

それに鈴は引きつった悲鳴を上げる。

男根は本音の愛液と自分の精液で何とも言えない匂いを出しており、血管がやけに生々しく見える。

それなりに見慣れているはずなのに、何故かまったく違うもののように見える。しかしクロウの意図をお分かりだろうか？

先ほど大量に出したのに、未だ収まらぬ男根を女に見せつける。

それ即ち——

「さあ、ベッドに來い」

「ちよ、待ちなさいよ！待ってえええ!!」

抱きかかえられて往く鈴。

そして開かれていた扉が、独りでにゅつくりと閉まっていった。

## 学園二襲撃アリ

「ん、ちゅ……じゅるるっ!」

四つん這いになってクロウの股間に顔をうずめている少女。

亀頭をまるまる口に含み、射精を促すように刺激する。

そんな淫狼なことをやっている鈴は、まるで熱にうなされているかの如く赤くなっていた。

「なあ、鈴。お前の胸も使ってくれないか?」

「はあっ!? あんた喧嘩売ってんの!」

奉仕していた時に、いきなりとんでもないことを言い出すクロウ。

鈴の胸は一般より小さく、パイズリなんてできるほど乳肉はない。



小さな胸をコンプレックスに持っている鈴は、返答次第では黄泉へと送ってやろうと画策する。

「いやいや、お前の胸も使えるぞ?」

「へっ……きやあつ?」

鈴の小さな身体をふわりと持ち上げて、仰向けに寝かせる。

その上に体重が乗らないように気を遣いながら跨ると、決して豊かとは言えない乳房の間に男根を乗せて、こすり付ける。

「……………愉しいの、これ」

「うむ」

冷ややかな目でクロウを見つめる鈴。

正直奉仕しているといった感じもしないので、まったく興奮しない。

しかし何分か経っていくと、ずっと男根を見つめていたからか息が荒くなってくる。すりすりとこすり付けられる男根に対して、何故か愛しいとも思えるようになる。

「んんっーふぁ……………」

時々谷間がないせいで滑るのか、亀頭と乳首がこすれるようにすれ違う時がある。

そのたびに鈴は嬌声を上げて、乳首を固くするのであった。

「……………はむ、じゅるるる!!」

口の近くまで突き出された時に、ぱくりと口に含んで吸い上げる。

そうしてクロウを奉仕していた鈴だが、股間からくる凄まじい快楽に身体を震わせる。

「本音……起きたのか」

「えへへ、ここ美味しそ〜」

先ほどまでクロウに犯されて気絶していた本音が参戦する。

膣口からドロリと精液を垂らせながら、鈴の小さな秘部に口を押し付けた。

「んんっ!!」

ちゅばちゅばと秘部を舐めまくり、鈴に刺激を送り続ける。

鈴はそれでも男根を口に含んで奉仕していたが、とうとう我慢できずに口を離してしまい、ぶる……と身体を震わす。

「あっ! あっ! ああっ! あんっ!!」

ぐちゅぐちゅと秘部を刺激して、尻肉に愛液が飛び散るほど舐める。

文句を言つてやろうとする鈴だが、快楽に負けて声が出てこなかった。

「むう……後少しだったのだが……」

「あっ! ふううっ! ああんっ! そこ、だめだつてえ……」

完全に勃起している乳房をくりくりといじめながら、不平を漏らすクロウ。

小さいからこそかなり敏感なそこを弄られて、鈴の肢体がぶるりつと大きく震える。「ん、ふ……ちゅぷちゅぷ」

それでも本音は、鈴の濡れそぼった秘所から口を離そうとせず、ずっと舐め続けている。た。

自分の限界も近かったクロウは鈴をひよいと抱えて、背面座位の形になる。

「本音も少し待っている」

「りよ〜か〜い」

本音の返事に満足すると、クロウは鈴を支えていた力を抜いてゆつくりと秘部に男根をうずめた。

「ふえ、あ……ああああっ!!」

まだ半分も入っていないが、その刺激だけで鈴は絶頂する。

首をグイツと仰け反らせて、全身を痙攣させる。

秘部からは達してしまったことで、液体がちよろろ……と滲み出す。

「あ、は……あああ………」

液体は男根を濡らして、さらに鈴自身の小ぶりな尻や太ももにまで飛び散った。

すでにくたあ……と力が抜けて呆然としている鈴だが、クロウは反動をつけるように

持ち上げて――

「あひいいいいっ!!」

一気に奥まで男根を押し込んだ。

支えが男根しかないことと重力が合わさって、最も深い場所に男根が到達する。

ゾクゾクとした感覚が身体中を駆け巡り、秘部からはありえないほどの量の愛液が分泌される。

「ふっ！ふっ！ふううううっ！んんんんっ!!」

顔を反転させられて、舌と舌を絡め合わせるキスをする。

口を塞がれているので大きな嬌声は上がらないが、口から漏れ出すように悲鳴が聞こえる。

鈴は巨大な男根が、小さな自分の膣内に入っていることを確認するかのようになり、手を膣口の上部に持っていく。

にゆるにゆると舌と舌が絡み合い、鈴の顔はさらに赤く紅潮する。

「あっ！あっ！あああっ！んはあああっ!!」

ラストスパートとばかりに激しく男根を出し入れする。

鈴も小さな乳房をプルプルと揺らし、ガクガクと身体を震わせる。

「んああっ！あっ！あああっ!!」

大量の精液が、鈴の膣内で吐き出される。

それと同時に鈴も絶頂し、目から涙を零し口からよだれを垂らして歓喜する。入りきらなかった精液が膣内から逆流して、男根に伝っていく。

「んん……………っ！」

ヌポリと音を立てて男根を引き抜き、動けなくなった鈴を優しくベッドに寝かしつけてやる。

そうすると、さつきまで大人しかった本音がクロウに近づいていく。

ビクンビクンと蠢いている男根に鼻を寄せ、すんすんと音を立てて嗅ぎ出した。

「……………どうした、本音？」

「んん？ここからクーの精液とく、リンリンの愛液の厭らしい匂いがするね〜」

そう言うと、本音は汚れている男根を口に含んだ。

口の中に唾液をいっぱい溜め、生暖かい液体が龟头を包み込む。

「むうっ」

先ほど射精したばかりで敏感になっている龟头を愛撫されるので、クロウも堪ったものではない。

しかし待ちきれないといった様子で、男根に吸い付いて離れない本音。

「ん、ぷ……………じゅる、ぢゅぱっ」

精液と愛液で汚れた男根を味わうように舐めとっていく。

秘部は触れてもいないのに濡れそぼり、愛液が太ももを伝いだす。

「ちよ、ちよつと待て」

「んばあ……えく、まだ吸いたいよく」

ぢゆるるるるる!!と激しい音と共に吸い付いてきたので、慌てて口から男根を引き抜く。

物足りなさそうに口を開いたままにしている、そこから唾液と我慢汁が混ざつてとろお……とこぼれる。

本音は仰向けで倒れている鈴の上に覆いかぶさり、スカートをするりと退けてヒクつく秘部を見せつける。

秘部からはじゅわ……と愛液が滲み出し、尻穴が見えるほど尻肉を大きく開ける。

「ねく、クー。早くちようだい〜」

そう言ってクロウを挑発すると、鈴に小ぶりの唇に吸い付いた。

驚いて目を見開く鈴だが、意識が朦朧としているのか、特に拒絶することなく受け入れる。

ちゆ、ちゆ、と可愛らしいキスをし合う鈴と本音。

クロウは亀頭をクチュクチュと秘裂にこすり付けて濡らすと、一気に奥までズン!と突き入れた。

「あああああつ！入って……きたああ………」

後背位の形となつて、奥へと突きまくる。

「あつ！あつ！ああつ！クーので膣内ながかき回されるううう!!」

じゅぼじゅぼと突き入れられるたびに、大きな本音の乳房がプルンと揺れる。

力が入らなくなつて小さな鈴の身体に倒れこむと、ピンピンに勃起した本音の乳首と鈴の乳首がこすり合つて、さらに快感が増す。

「んあつ！ひいいつ!!」

「ひあああああつ!!」

下部では、こちらにも勃起した陰核と陰核がこすり付けられ合つて、激しい快楽を起す。

「あああつ！凄いいいっ！ひあああああつ!!」

膣壁を抉られて、身体を大きく揺らす本音。

豊満な乳房も上下に大きく揺れる。

「あつ！ふあああつ!!」

グチユグチユと突かれながらも、鈴の陰核を弄る本音。

鈴も大きく嬌声を上げる。

そうして本音をしばらく突いていたクロウだが、膣内からヌポツと抜いてまた鈴の膣

内へと挿入した。

「あああ……クーー！抜いちやだめえ………！もつとズボズボして〜！」

「あつー！あつー！あああん！！」

はっ、はっ、と犬のように息をしながらクロウに懇願する本音。

逆に鈴は高ぶっていた身体にまた男根を撃ちぬかれたので、ぶるるる、と身体を震わせて鳴き喚く。

「よし、なら2人まとめてイけ」

そう言うのとクロウは、男根を交互に突き出し始めた。

「あつー！ふああつー！あああああつ！！」

「はあつー！ひいいいんっ！！」

2人とも涙を流してよだれも垂らしている。

汗が全身から吹き出し、乳首の先からほとぼしる。

突かれていると、膣内がきゆうきゆうと切なげに締め付けられる。

もう限界なのだろう。

そしてクロウにも限界が訪れて、鈴口から噴き出すように精液があふれ出た。

「あああつー！んふあああああつ！！」

「ひいいいっ！んあああああつ！！」



それと同時に鈴と本音も達し、2人仲良く潮を噴出させる。

出る直前に膣内から抜かれた男根から精液が飛び出して、鈴と本音の身体を真っ白に染める。

そうしてI S学園に来て、初の3Pは幕を下ろしたのだった。



鈴が転校してきて数週間が過ぎ、今は五月となった。

クラス対抗戦の対戦カードも発表され、1組代表の一夏と戦うのは2組代表の鈴とだった。

しかし一夏は鈴にそれでも師事していた。

鈴の説明は少し筈と似て感覚的なものなのだが、重要なところはしっかりと勉強しているみたいで、基礎的な能力だけは備わった。

そして鈴と一夏の試合を明日に控えた現在、鈴はクロウの部屋でプリプリと怒っていた。

「一夏のやつう……絶対に許さないわ………」

何故ここまで怒っているのだろうか？

それは金曜日、一夏にIS技術を教えていた時だった。

鈴の教え方と一夏の聞き方がまずい方にドッキングしてしまい、激しい口論になったのだ。

そこで一夏は、言っではいけない悪口を言ってしまった。

『貧乳』。

鈴が最も気にしている最重要改善対象を侮辱したのだ。

それで鈴は激怒。一夏をフルボッコにしてやろうと決めたのだった。

ちなみに一夏は、去り際にISを部分展開して地面を破壊したのを見て青ざめた。

「まあそう怒るな。売り言葉に買い言葉だったのだろうか？」

「それは……そうだけど………」

鈴の頭を優しく撫でながら諭すクロウ。

鈴も撫でられていてご機嫌なのか、先ほどのように怒ることもなく気持ち良さそうに

目を細めている。

まるで本当に猫のようだ。もう少しすると喉をゴロゴロと鳴らしたり――

「いんいんいんいん」

――鳴らした。

匂いを擦り付けるかのように、身体全体を使ってクロウの体にすり寄る。

それをクロウも満更ではなさそうに受け入れていた。

「鈴、そろそろ消灯時間だ。部屋に戻った方がいいのではないか？」

「……………うん」

そう言つて鈴は名残惜しそうにクロウから離れる。

甘えていたら、急に拒絶されたような猫のように見える。

しかしこの寮長は織斑 千冬。

ただでさえ最強の女だが、クロウが関われば最強から最恐へと進化する。

残念そうにながらも、鈴は自分の部屋に帰つて行つた。

そして擦れ違い気味に入ってきたのは、ルームメイトの本音だった。

「今までどこに行つていたのさ？」

「ん〜？おじょうさまの所に行つてた〜」

布仏 本音は、更識家に代々仕える一族の娘である。

勿論本音も例にもれず、更識家に仕えている。

ただ現更識家当主・更識 楯無には本音の姉が専属メイドとして仕えているので、本音はもう一人の『更識』に仕えている。

その自らが仕えるべき主に会ってきたのだろう。

「おじようさま、寂しがつてたよ〜」

「む、そうか……また会いに行くか」

「そうしてあげて〜」

クロウの返答に、本音は嬉しそうに笑う。

主の幸せは自分の幸せ。

普段はのほほんとして何を考えているかわかりにくい少女であるが、根本的には心優しい少女なのだ。



本日は、1組と2組のクラス代表が戦う、クラス対抗戦の日だ。

第二アリーナではすでに役者はそろっており、一夏は純白の機体である『白式』を。

鈴は中国の第三代機である『甲龍』シエンロンを身に纏って、準戦闘態勢を敷いている。

とても偉い人に怒られそうな名前だが、まあ関係ないので大丈夫だろう。

「さて、一夏。あんたがどこまで戦えるのか、見せてもらおうよ」

「ああ、だけど俺もただでやられねえぜ？」

「言うじゃない」

好戦的に笑って言う一夏に、鈴は楽しそうにクスクスと笑う。

今から戦い合う関係とは思えない。

しかし一夏は手に長剣を持ち、鈴は青竜刀の派生型と思われる異形の武器を持っている。

『それでは第一試合、始め』

アナウンスで告げられた試合開始の合図で、両者が動き始める。

「行くわよ、一夏あー！」

「行くぞ、鈴！」

そうして激突した両者を、モニター越しに見つめる人物がいた。

空色の髪で、眼鏡をかけている少女。

表情は冷たく、特に一夏を睨みつけるようにして見ている。

スレンダーな肉体をIS学園の制服で包んでいて、手には空中投影ディスプレイの元を持つている。

「織斑……一夏……」

まるで親の仇を見るような目で、モニターに映る一夏を見る少女。

余程の恨みがあるのだろうか？

「落ち着け、簪。あいつを睨んだからといって、何か変わるわけではないだろう」

そんな少女に話しかけたのは一人の男性。

このIS学園に2人しかいない男子生徒の片割れである、クロウ・ミキストリだった。

そして少女の名前は更識 簪。更識家当主の楯無の実の妹だ。

「確かにそう……でも納得はできない……」

更識 簪は、日本の代表候補生である。

それは偏に彼女の努力のたまものである。

優秀な姉である楯無にクロウを独占されないように、精一杯頑張った結果だ。

それを姉は喜んで協力してくれたし、代表候補生になった時は愛しの異性に褒められたりして幸せだった。

「私の専用機……」

それを奪ったのが、織斑 一夏であった。

代表候補生の中でも優秀な簪は専用機が与えられることが決まり、それは喜んで喜んだものだ。

しかし世界でイレギュラーが発生した。

それが『世界でISを起動できる2人目の男』の出現だった。

しかもそれが日本人だということで、日本政府は簪の専用機作成中だった会社に一夏の専用機を作るよう指示したのだ。

必然的に簪の専用機作成は後回しにされ、簪が専用機を持つことはなくなってしまうのだ。

「まあそう怒るな。本音たちにも手伝ってもらって作っているのだろうか？」

「それは……そうだけど……」

簪は会社が専用機を作ってくれないと知ると、なんと自分で作り始めたのだ。

と言っても、勿論コアは束にしか作れないし一からISを作ることもできないので、既存していた『打鉄』を改造して作ったのだが……しかしそれでも十分凄いことだ。

ただそれは前代未聞というほどでもなく、事実簪の姉たる楯無は似たようなことをやってのけている。

「それに戦闘データなら私も手伝ってやる」

「……ん」

そう言つてクロウは優しく簪の頭を撫でる。

気難しく他人に隙を見せない簪も、この時だけは年相応に甘える少女になる。

頬を少し赤く染め、気持ちよさそうに感触を楽しむ。

しかしそんな時間も、長く続かなかつた。

モニターの中のアーリーナがとてつもなく大きな音を立てて、何者かに破壊されたのだ。

「……何?」

簪は何者か特定しようとするが、襲撃者がやったのか、モニター回線は閉じられて様子を探えなくなつてしまった。

「……………ふむ」

しかしクロウにはあの一瞬で敵の情報を掴んだらしく、どこか面白そうな雰囲気を出していた。

「簪、私は少しあちらに出向く」

「……………うん、わかつた」

簪は気を付けてとクロウを見送る。



整備室を出たクロウの顔は、少し口角が上がっていた。



「くっそ！なんなんだよ、あいつ！」

「あたしが知るわけないでしょ！」

クラス対抗戦を行っていた一夏と鈴は、現在アリーナに侵入してきた襲撃者と戦闘を行っていた。

終始鈴優勢で試合が進められていた中、何者かのISがとてつもない衝撃と音と共に来襲。アリーナ内にいた一夏と鈴を敵判定して、襲い掛かってきたのだ。

一夏と鈴は協力して対処にあたるも、敵ISの凄まじい性能に攻めあぐねていた。

「オオオオッ!!」

咆哮を上げながら、何度目かになる突撃を仕掛ける一夏。

しかし敵 I S は凄まじい勢いでスラスターを噴射してそれを避け、反撃に一夏に拳を当てようとする。

「一夏っ！」

だが後ろに控えていた鈴が衝撃砲を発射。それを避けるために動いた敵 I S は、必然的に一夏からも離れることになった。

「ちよつと！考えもなしに、突撃とかやめなさいよ！」

「あ、ああ、わりい」

鈴に怒鳴られて謝る一夏。

鈴は中国へ帰国後、1年間みっちり I S 訓練を受けている。

それには対 I S 戦闘技術なども当然入っている、戦い方は分かっている。

しかし一夏は修行しているとはいえ、ごく最近 I S を使い始めた少年だ。

I S 戦闘技術がないのも仕方がない。

「(でもあの I S ……………)」

鈴は敵 I S への警戒を怠らず、浅く考え始める。

I S には、操縦者を守るためのありとあらゆる機能がある。

シールドバリアーなどが良い例だ。

しかし使用するのには所詮人間。無理な動きをすれば、I S が保護しきれずに怪我をし

てしまうこともある。

「あの I S の異常なまでの出力展開」

しかし敵の I S はそんなことを考えず、普通の人間なら空気抵抗で骨を折っているような動きを何度も見せているのだ。

——まるで人が動かしているのではなく、機会が動かしているかのよう。

「(試してみる価値はあるわね……………)」

もし考えと違ったら、とんでもない事態になる。

しかしこのままでは自分たちが殺されてしまう。

「二夏、少し提案があるんだけど——」

なので鈴は賭けに出ることにしたのだった。

## 眼鏡ドジツ娘教師、墮ッ

鈴が立てた仮説は、『敵I Sは無人機ではないだろうか』といったものだった。まだ世界ではI Sの無人機技術は確立されておらず、そんなことはありえない。しかし無人機としたら、人間からすれば無理のある機動を行うことができる。そして無人機なら、『手加減せずに戦うことができる』。

一夏の専用機、『白式』の単一仕様能力である『零落白夜』。

自らのシールドエネルギーを全て攻撃能力に変換する、諸刃の剣。

自分の命を危険にさらす代わりに、全I S中最強の攻撃能力を誇るこの能力を、敵I Sに使えるのだ。

勿論中に人がいたら、間違いなく大惨事である。

しかし鈴は己の勘を信じ、そして一夏はその仲間を信じた。  
 そしていざ作戦開始というところで――

『一夏あつ!!』

敵 I S の攻撃対象が、箒へと変わった。

箒としては愛しの一夏が命を賭して戦っているのに何もできないことを悔やんで、せめて応援でもと考えた結果のこれだった。

しかし戦闘能力を持たない箒は、まだここに出てくるのではなかった。

敵 I S は箒へと腕を向け、あの凄まじい出力を誇る熱線を放とうとする。

「鈴、やれ!!」

だがそれは一夏が許さない。

外部からエネルギーを取り込んで激しい加速をする瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>、加速を、鈴の衝撃砲を利

用して発動。

敵 I S に向かって切りかかった。

「うおおおつ!!」

その攻撃は、敵 I S に届いた。

箒に向けていた右腕を切り落とし、箒へ攻撃できなくさせる。

しかし敵 I S も素早い反応ですぐさま反撃、カウンター気味に一夏を殴り倒し、熱線

をゼロ距離で放とうとした。

しかし――

『あらあら、織斑さん。無茶はいけませんわよ?』

「セシリアっ!!」

『ブルーティアーズ』を装着したセシリアが、敵 I S を狙撃。見事撃破した。

一夏の攻撃は敵 I S の右腕を切り落としただけでなく、客席を守る遮断シールドをも破壊していたのだ。

一夏は万が一倒せなかった場合の保険として、増援部隊が入りやすいように破壊したのだが、セシリアのいい意味で予想外の支援攻撃で命を救った。

今度こそ敵 I S は完全に沈黙し、ほっと息をついて体を脱力させる一夏。

もうすでに『白式』のエネルギーも限界だったらしく、自然と光の粒子となって消えていった。

しかし、敵 I S はまだ健在だった。

「一夏あつー!」

最初に気づいたのは、安堵のため息をつきながら一夏を見ていた筈だった。

その言葉に、3人はそれぞれ行動を起こす。

一夏は I S と唯一戦える手段である『白式』を失っているので戦えるはずもなく、呆

然と立ち尽くすしかない。

セシリアはまた狙撃銃『スターライトmkⅢ』を構え、鈴は青竜刀を投擲する構えを見せる。

しかしゼロ距離で一夏を攻撃しようとしている敵ISの方が当然早く、誰もが間に合わないと思った……その時。

——ズガァン!!

『!?!』

どこからか飛来してきた鉄の杭みたいな物体が、敵ISの頭部を貫いた。

それが決定打となり、ISはどうとう沈黙した。

こうして誰一人の犠牲者を出すことなく、IS学園に襲撃してきた敵ISを倒すことに成功したのだった。

「まったく……全員、詰めが甘いな」



「……………で、今回の遊びは楽しかったか？束」

『うーん……………まあ色々な情報は取れたよ』

IS学園内の、人けのない廊下で会話する2人。

空中に投影ディスプレイが浮かんでおり、その画面内にいるのは兎耳をつけた美女。

現在各国が絶賛指名手配中の大天災、篠ノ之 束だった。

「別にお前のやることに文句を言うつもりはないが、しかし今回のISは出してもよかつたのか？」

『いいのいいの。束さんほどじゃないけど、世界の『自称』天才たちが無人機開発に勤んでいるからね。大体後5年くらいで出てくるんじゃないかな』

クロウの言葉に、束はあっけらかんと返す。

今クロウと束がこうしている間にも、世界各国の優秀な研究者たちがISの謎を解明しようと躍起になっている。

それは軍事的利用にも熱心であり、どこかの国では試験管ベイビーを造ってしまうほどだ。

「だがお前にしては珍しいな。あのISはお前の妹も攻撃しようとしていたぞ？」



『いやいや、あれはクロくんを信用していたからだよ』

自他ともに認めるスーパースコン束。

まあ対象である妹の箒には疎まがれているのだが……………。

『でさあ……………ちよおつとクロくんに聞きたいことがあるんだけどさあ……………』

先ほどまでニコニコと楽しそうに笑っていた束の顔に何故か影が差し、目の部分だけが不気味な光で煌めく。

その豹変ぶりには、流石のクロウもタジタジだ。

『いくらなんでもフラグ建てすぎじゃない？いつの間にあんなに建てたの？』

束の聞き出したことは、クロウのヒロイン数の多さである。

自分から離れてたった1ヶ月ほどで、5人も美少女・美女を食べているのだ。勿論性的な意味で。

まあ千冬は幼馴染として知っていたが、まさかここまで根回しがしてあったとは予想外だった。

「……………お前、もしかしてそれでISを……………」

『ふんっ！さあて、どうだろね』

答えを言っているようなものである。

普通私益のために各国の優秀な人材が集まっている学園に襲撃など言語道断だが、

やったのは稀代の大天災である篠ノ之 束。世界中で4人しか明確に認識できない彼女に、他人のことなんてどうでもよかった。

「まあいい。夏休みに入ったら戻るから、それまで我慢している」

『うええ……長いよお………』

それから他愛のない話を数分間続けて、回線は切られた。



「あのく、ミキストリくんく？ 布仏さんく？ いますか？」

夜、クロウと本音が会話を楽しんでいると、来訪者が現れた。

クロウが扉を開けてみると、扉の前に眼鏡の位置を治している山田 真耶がいた。

「どうした、山田教諭？」

「あ、はい。お部屋の調整が付いたので、布仏さんがお引越しです」

「ええ〜」

真耶が届けた知らせは、至極当然のことだった。

今まで多感な思春期の少年少女を同室にしていたことが問題なのだ。

それれもやむを得ない場合なのであつて、その問題が解決されたのなら別居するようにするのは当然だ。

当の本人はいいやいと枕を抱きしめながら抵抗しているが、それは無理な話だ。

「うう〜、それつて今すぐしなきゃだめなの〜?」

「それはそうだろうな」

「うう〜」

クロウにも言われて、本音は涙を目にいっぱい溜めて唸る。

クロウ大好きな本音からしてみれば、やっぱり離れてしまうのは嫌なのだろう。

「そう唸るな。どうせクラスで顔を合わせるだろう?」

「……………うん」

こればかりはどうしようもないので、了承する本音。

それからクロウと真耶が手伝つて本音の荷物をまとめて、引越し部屋へと運び入れた。

シユンと沈んで部屋を出ていく本音にキユンときたのは内緒だ。

引越し作業が終わった後、真耶は1人部屋となったクロウの部屋で話していた。

「ふむ……ということは織斑も1人部屋になったのか？」

「はい、そちらも何とかなりましたから」

真耶は苦笑しながら答える。

一夏の部屋から引越しと箒に告げた時に一悶着があったのを思い出していたのだ。本音と対象に、一夏大好きの箒からすれば死活問題なのだ。

まあ一夏の病気ともいえるほどの鈍感ぶりで、結局引越しはしたらしい。

「真耶も今は気遣わなくてもいいぞ？ 私その他には誰もいないのだからな」

「ええと……はい、そうしますね」

過去がどうであれ、ここでは生徒と教師の関係。そう親しげに話すことは憚れる。

だから真耶はクロウのことをミキストリと呼んでいたし、ぼろが出てしまいそうなのであまり積極的には話さなかったのだ。

「私、クロウさんが学園に来ていた時はビックリしましたよ！聞いてませんでしたし」

「まあ思いつきだからな」

非常に迷惑極まりない。

「しかし真耶、お前また胸が大きくなったのではないか？」

「ええっ!? そ、そんなこと……」

顔を真っ赤にさせて、腕を胸の前でクロスさせて隠そうとする真耶。

しかしながら巨乳を越えた超乳、いや、魔乳と言えるほどの大きさを誇る乳房を隠しきることはできなかった。

途中で言葉を止めたのは、胸が大きくなったのが事実だったり……………。

「どれ、少し私に揉ませてみる」

「ちよ、クロウさん!」



「あつ、んん……………あんっ!」

「うむ、凄まじいな」

下から持ち上げるように乳を揉みあげる。

するとタプタプと柔らかそうに揺れる。

手にはかなりの重量の肉が乗っており、まるで沈み込むように柔らかい。

「う、はっ……ああっ！」

卑猥な嬌声を上げてしまい、頬をカアアと紅潮させる真耶。

服の上からムギユムギユと乳房を潰されるたびに、悩ましがな体をくねらせる。

真耶の乳房はかなりの大きさを誇るが、感度もまた良いらしい。

クロウは服を脱がせながらも常に揉みしだいており、とうとう外気にさらされた時には先端は完全に勃起していた。

「あっ、はあっ！あああっ！！」

巨大な乳房をギユッと握ると、ジユルジユルと音を立てて吸いあげる。

乳首をキュツとつまんで引つ張り上げると、豊かな乳房も淫猥に形を変えて引つ張られる。

性感帯である乳首を弄られると、身体が否応にも反応してしまつて震える。

「あっ！そこは……ああっ！！」

次にクロウが手を伸ばしたのは、グチヨグチヨに濡れそぼつた秘部。

パンティイの中に手を滑り込ませて、グチユグチユと弄り始める。

「あっ！ううっ！ダメですうっ！！」

そう言つて嫌がる素振りを見せる真耶だが、目は歓喜の涙で濡れ、吐息も荒くなつて

はあはあと犬のように喘ぎだす。

「しかしこんなに濡れているぞ？やめてもいいのか？」

「はあ……はあ………」

そう言つて真耶の目の前に指を出すクロウ。

指は真耶の愛液でトロトロになっており、真耶がどれだけ愛液を噴出させているのが分かる。

普段なら顔を真っ赤にさせて卒倒しているかもしれないのだが、今は快樂に囚われていてぼんやりと眺めているだけだ。

それを面白くなく思つたのか、クロウは豊かすぎる両胸を寄せて乳首同士をすり合わせる。

グニグニと淫猥に形を変える豊満な乳肉。

「あつ……く、クロウさん。私もご奉仕します」

クロウの愛撫にただ感じていた真耶だが、これではいけないと体位を変えてシックスナインの形になる。

そしてクロウのズボンをズリ下げて、いきり立った怒張を出現させる。

男根もすでに勃起しており、時折ピクピクと蠢く。

それを見ていると真耶の鼓動が早くなり、息もさらに荒くなり始める。

「ああ……久しぶりのクロウさんの………」

男根を手を持ってうつつりと呷く真耶だが、トロトロになった陰部を目の前に突き出されてクロウが何もしないはずがなかった。

「じゃ、じゃあ舐めま——ひいつ?」

ああんと大きく口を開けて男根を口に含もうとしたが、クロウに膣口を大きく広げられて首を反らしてしまう。

真耶は乳房だけでなく秘部も柔らかく、むにいと大きく形を変えられている。

「あつーんっ! ああんっ!!」

陰核を舐められ、膣口全体に吸い付かれて男根を口に含むことができな

それでもクロウに奉仕しようと、強烈な快楽に悩まされながらも亀頭を口に入れる。

「あつーそ、そこダメです! 何かでちやいますうっ!!」

何度も何度も敏感な陰核を舌でこすられて、とうとう限界が近づいてくる。

クロウは舌を膣内へ挿入し、陰核を指先でキュツとつまむ。

それが決定的となって、真耶を一気に駆け上らせる。

「あつーイクツ! イクうっ! はあああああつ!!」

亀頭から口を離し、大きく身体を仰げ反らせる。

ビクビクと痙攣し、下を出して歓喜に震える。



膣内からプシイイツと潮を噴いて、クロウの顔を濡らす。

「あ……はあ……はあ……」

盛大にイったからか、全身を脱力させてベッドにゆだねる。

柔らかな乳房が重力に負け、だらしなく形を歪めている。

そんな淫靡な光景を見せられて、もともと我慢の限界にきていたクロウはとうとうキレてしまい、亀頭を膣口へ合わせて一気に腰を押し込んだ。

「あああああああつ!!」

久しぶりだからなのか、膣内はギユウギユウとクロウの男根を締め付ける。

久しぶりに感じる激しい異物感に、真耶も慣れないようだ。

「あつ! ひいんつ! だめえつ!!」

何年もセックススレスレになっていたので、とてつもない快楽が真耶を襲う。

クロウはブルンブルンと揺れる巨大な乳房を握りしめ、激しく腰をピストンさせる。

「あつ! あんつ! うひいっ!!」

細い腕をガシツと掴んで、自分側に引っ張る。

するとさらに男根が奥へと突き刺さり、大きな快感にむせび泣く真耶。

「真耶」

「あつ! ん、ぢゅつ……んんつ!!」

唇を重ね合わせて、舌を絡ませ合う。

この行為で真耶はさらに胸の高鳴りが増し、快楽が大きくなる。

クロウは体位をクルリと変え、獣の性行為のように後背位にして突き立てる。

「ああっ！ひいいっ！ダメですクロウさん！このままじゃ、バカになりますっ！！」

真耶の必死の懇願も受け入れず、パンパンと激しく突きまくる。

真耶は助けを求めるかのようにシーツを握りしめ、だらしなく開いた口からはよだれが溢れてシーツを濡らす。

「よし、そろそろ腔内なかに射精だすぞ」

「はいいっ！出して！出してくださいいっ！！」

身体がガクガクと震え、とうとう身体を支えられなくなってしまう。

それでもクロウは突きつづけ、真耶の限界と共に急激に締め付けた腔内に向けて登り詰めた白濁液を発射した。

「ああああっ！イクうっ！イキますっうううっ！！」

ビュルルルと激しい勢いで、腔内を満たしていく精液。

真耶も今日一番強く絶頂し、身体を大きく震わせる。

全身に噴き出ていた汗が、身体から飛び跳ねていく。

真耶は力なくベッドに倒れ伏し、時折身体を震わせながら息を吐いていた。

「む……眼鏡を使わなかったのは間違いだったな」

「ええっ!?!も、もう無理ですよ!」

そう言いながらも嬉々として続けたのは余談である。

そしてクロウと真耶がイチャついているとき、もう一つの男子部屋で起こったことがクロウをも巻き込むことになるとは、まだ誰も知らなかった。

## 第二章

## 嵐前ノ静ヶサ

更識 簪の休日には、基本的にISのことで潰れる。

勿論ISのことだけではなく、やたらと構ってくるシスコン気味の姉と話すときや、大好きなヒーローアニメを見たりして過ごすときもある。

が、やはり最も時間を使っているのはISにだろう。

「……………は、さう」

六月に入ったばかりの日曜日、今も簪はISの機体を弄っていた。

簪の弄っているISは、『打鉄式式』。日本の純国産である『打鉄』を色々と改造し、簪の専用機へと変態中の機体である。

簪本人が優秀なこともあるが、色々な人物からあらゆる助力を得ているので、正式な研究者たちが創る専用機にも負けない性能となっている。

「……この出力は抑えた方がいいかな……？」

空中にディスプレイを投影させて、何やら難しそうな画面を見ていく。

それは決して高校1年生の少女が見るようなものではないが、本人の高い能力のおかげで全て把握できている。

最も、これは才能などではなく、努力で養ったのだが。

「休日も整備をやっているのか………」

「……クロウ」

そう言って整備室に入ってきたのは、無表情の男、クロウ・ミキストリだ。

ちなみにだが簪以外にも休日返上でIS関連に打ち込む熱心な生徒もおり、それは技術的な面から知識面、簪と同じように整備面でも努力している。

「どうしたの……？」

「いや、私は今暇でな。何か手伝えることがあるなら手伝おうと思ったのだが……それはいらぬようだな」

クロウが簪に手を貸せることは、その異常なまでの高い戦闘力を活かした戦闘データを集めることである。

逆にI Sに関して知識的なものはほとんど持ち合えていないので、そういう方面は全く力になれない。

現在簪がやっているのは機体の調整であり、クロウが手を貸せる分野ではないのだ。

「う、ううん。出力とか、武器のことについて聞きたいこともある」

「そうか、ではやるか」

「……うん」

そう言つて、2人は『打鉄式』を整備し始める。

熱中したら周りが見えなくなる傾向のある簪と、それを一切止めようとしなクロウなので、結局終わったのは夕方になってからだった。



「ク、クロウ……」

「ん?」

『打鉄式』を満足いくまで整備した後、簪はクロウを部屋に招いていた。

その際にとても勇気がいったのは秘密だ。

今簪は、クロウにその小柄な身体を抱きしめられていた。

「嫌か?」

「いい、嫌じゃないっ」

抱きしめられながらも、首をプルプルと振って否定する。

恋慕の想いを寄せる相手に抱きしめられて嫌なはずがあるだろうか。

しかし恥ずかしいものは恥ずかしい。

「ならいいではないか」

「う……いいんだけど……」

もう何分抱きしめられたままなのだろうか。

性欲の塊と胸を張って罵倒できるクロウが、自分の身体を抱きしめたまま何もしないのである。

クロウの体臭を吸っていると、こちらがいけない気分になってくる。

「く、クロウ……」

「む?どうした?」

「……………」

分かつているくせに、白々しく尋ねてくるクロウ。  
しかし自分から言えるほど、簪の肝は据わっていない。  
なので簪は行動で示すことにした。

「……………」

きゅつと目を瞑って、プルプルの唇をすつと突き出す。  
頬は赤く染まり、その身体は小さく震えている。

無理をしているのがありありと分かるその姿を見て、何もしないような鬼畜ではない  
クロウ。

自分の顔をすつと寄せて、唇を重ね合わせた。

「んう……………」

それは口内に舌を入れるような濃厚なものではなく、簪の可愛らしい唇をついばむよ  
うなキスだった。

「……………ん、身体が熱くなってきた」

クロウと手を重ね合わせて、物足りなさそうに言う簪。

こんな小さな愛撫でも、簪の胸は高鳴り息も荒くなる。

「んっ、ん……………んふう」



今度は舌と舌を重ね合わせるキスをする。

最初は舌先でツンツンと小さく、そして徐々に舌全体を使った濃厚なキスになる。

レロレロと舌をこすり合わせ、唾液を交換し合う。

「あっ……はっ、はっ」

舌を離すと、クロウと簪の口の間を銀色の唾液がつかぬ。

トロオ……と伸びていった唾液の架け橋は、途中でプツリと途切れて地面に落ちる。

簪はまだキスに慣れていないのか呼吸の仕方が分からなかったようで、唇を離されると激しく息を吸い込む。

いいや、もしかすれば興奮しているのかも………？

「脱がすぞ」

「あっ……胸は……」

簪の制服を器用に脱がすと、小ぶりだが形のいい乳房が露わになる。

小ぶりと言っても日本人でこの年齢なら平均の大きさで、簪の周りにいる姉や専属メイドが逸脱して大きいだけである。

すでに乳房の先端は固くどがっており、触られるのを今か今かと待ちわびているようだ。

「あっ……ん……」

クロウは小ぶりの乳房に手を伸ばし、乳肉をやわやわと揉み始める。

それはまるでマッサージをしているかのように、味わうかのようにして揉みしだく。

「あうっ！そ、そこはダメ……！」

乳首をくにくにと弄られると、可愛らしく反応する簪。

乳房は張りがあり、まだ固さの残る感触だ。

「簪は本当にここが弱いな」

「ああっ！ひうっ！」

指で転がされてさらに存在を強調するようになった乳首を、舌でいたわるように舐める。

レロレロと乳輪を舐めまわし、そしてパクリと乳首を口に含む。

口の中で舐めたり、ぢゆるぢゆると音を立てながら吸い付いたりする。

乳首を吸われると、簪はビクンと大きく反応する。

そしてクロウは顔を下に下げていき、簪の股間部分に顔をうずめる。

「う、あああっ！あっ！ああっ!!」

下着を横にずらすと、むわつと湿気ている熱い空気が出てくる。

そして現れた秘裂に、クロウは舌を伸ばして舐めはじめる。

膣口を舐めると、愛液がさらに溢れてくる。

「あつー！やつー！んんうっ!!」

指を膣内に入れながら、舌で陰核を舐める。

すでに濡れ濡れになっている秘部はクロウの指を容易く受け入れる。

そうして性感帯を刺激され続けると、自らの身体を支えていた両脚がガクガクと震えはじめる。

「あつーだめっ！だ——んんんんっ!!」

敏感な部分を舐め続けられて、とうとう達してしまった簪。

大声で淫猥な声を上げないために指を口に咥え、我慢しようとする。

身体は大きく反応し、ビクツビクツと撥ねさせる。

そうすると小ぶりの乳房もプルンと撥ねる。

「よし、そろそろ挿入れるぞ?」

「……うん、大丈夫」

簪はベッドの上に寝転び、クロウを受け入れる体制を作る。

クロウは柔らかかな太ももを掴み、くばあと大きく開けさせる。

秘部は濡れそぼっており、いつでもクロウを受け入れることが可能だ。

簪は手を広げ、迎え入れるようにして待つ。

そんな姿に喉を鳴らしたクロウは、一気に逸物を押し込んだ。

「あああああつ!!」

一突きされただけで簪の顔は蕩けてしまい、ぞくぞくと快樂を感じてしまう。目の端に涙を溜めて歓喜する身体。

「あつ!あつ!あつ!あつ!」

ぐぼぐぼと浅く出し入れされて、喘ぐ簪。

顔はだらしなない笑みを浮かべており、普段の物静かな簪とは思えない乱れっぷりだ。  
「あつ!ひいつ!ああんつ!!」

奥をこすられると、はしたない嬌声を大声で上げてしまう。

喉を大きく反らし、ビクビクと身体を痙攣させる。

膣はキュンキュンと精液を求めるように疼き、尻穴がヒクヒクと蠢く。

「んんっ!あつ!あつ!ああつ!!」

簪をクルリと回転させ、後背位の体位になつて突く。

ぬちゆぬちゆと厭らしい音が響き、愛液がシートに垂れ墮ちる。

「んっ!んっ!んっ!んんっ!!」

パンパンと柔らかな尻に腰を叩き付け、男根を奥へねじ込む。

また絶頂が近いのか、膣壁は隙間がなく、らい男根を締め付ける。

ゆっさゆっさと身体を揺らされ、奥の方ばかりを抉られる。

そしてとうとう限界が来て――

「ああっ！イクツ！イっちゃううっ！ああああっ!!」

白い欲望を吐き出した。

物凄い勢いでほとばしった精液は、膣内から溢れ出してシーツのあちこちに飛び散る。

「……いっぱい出た」

簪はお腹の中に感じる熱い液体に、ふわりと柔らかく微笑んでみせた。



「ねえ！この話って本当!?!」

「勿論！トーナメントで優勝すれば、織斑くんかミキストリくんと付き合え――」  
珍しく一人で食堂にやってきたクロウ。

あの後も簪と何度も体を重ね合わせたため、大分時間が遅くなってしまったのだ。なので今食堂にいるのも少なく、数人が噂話をしているだけだった。

クロウは適当な定食を頼み、席に座って食べ始めた。

「私も……一緒にいいかしら？」

「……………楯無？」

「一人寂しく食べているクロウに話しかけてきたのは、先ほどまで熱い時間を過ごしていた簪の姉である、更識 楯無である。

クロウが頷いて同席を認めると、前に座ってため息を吐く。

「疲れているようだな」

「そうなのよ……………もう肩がパンパンだわ」

「ここIS学園は、世界で1つしかないIS操縦者を訓練する教育機関である。

ありとあらゆる国から色々な少女たちがやってくるので、当然問題も起こったりする。

さらに今年は世界でISが使える男子が2人も入学したため、学園の警備体制の見直しなどいろいろすることがあるのだ。

大半が教師陣でなんとかすることだが、生徒会にもよく仕事は回ってくる。

「しかも襲撃もあるしねえ……………」

これだけでもかなりの重労働なのに、楯無はIS学園の生徒会長。学園最強でなければならぬ生徒会長は、倒されれば辞任し倒した者が新たな生徒会長となるのだ。

なので楯無は、男子生徒が入学したからか1日に1度は襲撃を受けているのだ。

「ご苦労だな」

「ええ……………」

しかしこれが楯無でなければ、3日も働けば卒倒しかねないほどの重労働である。

楯無の優秀さがあるからこそ、今学園は回っているのだ。

『疲労困憊』と書かれた扇子を出したくなる楯無だが、食事中はマナー違反だと考えてそれは我慢する。

それに楯無がここまで弱みを見せるのはクロウぐらいだろう。

「それで？各国から刺客などは送られてきているか？」

「ええ、それはもうたくさん」

やはりデータが欲しいのだろう、各国は刺客を送り込んでいた。

と言ってもクロウの恐ろしさは東に刺客を送ると絶対に帰ってこないことから分かっているのだ、狙われているのは全て一夏である。

姉に『世界最強』ブリュンヒルデがいるが、誘拐などをしないかぎり大丈夫だろう。

「まあ全部捕まえてやったけどねっ！」

楯無は豊満な胸をさらに強調させて、むんと胸を張る。

各国の派遣した刺客は、全て更識家によって潰されているようだ。

流石は対暗部用暗部。抜け目がない。

「……………（キラキラ）」

そして楯無は、クロウに『ほめてほめて』と視線を送る。

普段は冷静でつかみどころのない少女だが、クロウの前では年相応の少女に戻る。

「……………よく頑張ったな」

「えへへ……………」

楯無は弱冠高校2年生で、対暗部用暗部の更識家の当主である。

気を抜く間がなく、こういう所でしか発散できないのだ。

それを理解しているクロウは、優しくゆっくりと水色の髪を梳いてやるのだった。





大半の学生が憂鬱な気分になる月曜日、1年1組の女子生徒たちはある話題で盛り上がっていた。

それは今日からISスーツの申し込みが開始するので、どの会社が作ったものかという話だった。

ISスーツはISを効率的に運用するための専用衣装である。

別に着用しなくてもISは動かすことはできるが、反応速度が鈍ってしまったりする。

「———ということ、やっぱりISスーツは着用した方がいいですね」

そんなISスーツの雑学を披露する真耶。

ドヤ顔で胸を張るので、魔乳がさらに強調されて非常に直視しづらくなる。

事実、一夏は頬を赤らめて視線を逸らした。

「お〜！凄いい知識人だね、山やん！」

「流石山びー！」

「え、ええっ!？」

褒められてえへへと喜んでいた真耶だが、色々なあだ名で呼ばれてあわあわと慌てだ

す。

こういう可愛らしいところが、生徒たちに慕われている理由だろうか。

「おはよう」

『お、おはようございます！』

やがて千冬が来て、これからの訓練について説明される。

今まではISを運用するうえで必要となる知識を学んでいたのだが、ISスーツが届いてからは実践訓練が始まることになる。

世界でも467機しかない——と言われている——ISを使えることは女子高生たちにも嬉しいことなのだろう、ワクワクとした表情をしている。

「ちなみにISスーツを忘れた者は学校指定の水着、それすら忘れた者は下着姿で訓練を受けてもらうので、そのつもりで」

ここIS学園の指定水着は、絶滅危惧種であるスクール水着である。

ほぼ女子高であるIS学園でスクール水着は珍しい。

さらに体操服は、もう絶滅したのではないかと思われるブルマである。

ここの学園は『夢』を分かっている。

「では山田先生……………」

「は、はいっ！今日はなんと、転校生が2人もこのクラスにきます！」

『ええっ!?!』

千冬にバトンタッチされた真耶の爆弾発言に、教室中から声上がる。同時期に2人も、しかも同じクラスにくるなんてそうそうないだろう。そしてこの2人が学園に波乱を起こすことを、まだ誰も知らなかった。

「じゃあ入ってきてくださあい！」

## 本当ノ実力

「失礼します」

「……………」

1人は丁寧にあ挨拶しながら、もう1人は無言のまま教室に入ってきた。

そして普通なら少し盛り上がるはずなのだが、このクラスではそれが一切なかった。

その理由は片方の転校生にあつた。

「フランスから来たシャルル・デュノアです。まだ日本に来て間もないので、色々助けてくれたら嬉しいです」

そう言つて金髪の美少年、シャルルはニツコリと笑つた。

『ええええええっ!?!』

一拍置いた後、クラス中に黄色い悲鳴が響き渡つた。

何故ならこの世界に2人しかいないと考えられていたISを動かせる男が、ここにもう1人来たのだから……………。

そしてシャルルの容姿が、それにさらに拍車をかけた。

セシリアより濃い金色の髪が輝いていて、それを後ろで1つに束ねている。

ニコニコと微笑むその姿は、まるで絵本に出てくる王子様のようなのだ。

「お、男の転校生!？」

「織斑くんの隣に立ちたくなるような雰囲気、ミキストリくんの絶対に守ってもらえる安心感、そして転校生くんの守ってあげたくなるような姿!!」

「このクラスで本当に良かった〜!」

きやあきやあと楽しそうに、そして嬉しそうに会話する女子生徒たち。

一夏も数少ない男が学園に入ってきてくれて嬉しいのか、驚きながらも笑っている。

シャルルはそんな生徒たちの様子に苦笑いしていたが、無表情のクロウを見つけると嬉しそうに微笑んで、フリフリと手を振った。

「……………」

そしてもう1人の転校生。

輝く銀髪を腰まで伸ばし、黒い眼帯を片目につけた少女。

端正に整った顔をしているのだが、氷のような冷たさを感じさせる表情なので、まる

で人形のようなだ。

それに何より、その小さな身体から発している空気が一般人のそれとは違った。まるで軍人だ。

そんな彼女は、スタスタと歩いてクロウの席の前に来る。

「久しぶりだな、ラウラ」

「……………本当に、だ」

クロウに話しかけられ、嬉しそうにも悲しそうにも見える笑顔を浮かべる少女。

その笑顔は非常に可愛らしく先ほどまでの無表情とのギャップもあり、何人かのクラスメートの心を射抜いていた。

「嫁がいきなりドイツからいなくなったときは、本当に驚いたぞ」

ぷくうと頬を膨らませ、片目に涙を溜めて抗議するラウラ。

それは幼児退行した幼女のような反応で、クロウでなければとめどなく赤いパトスがあふれ出ていたであろう。

……………いや、鼻にティッシュをあてがっているのは気のせいだ。

しかし女子生徒たちが食いついたのは、そこではなかった。

『よ、嫁ええええええつ!?!』

ラウラの嫁発言で、さらに騒がしくなる一組。

「……………ラウラ、その嫁とはなんだ？」

「うん？日本に来る前に、クラリツサから聞いたのだ」

ラウラが言うには、日本では気に入った相手を嫁と言う風習があると、ドイツ軍特殊部隊であるシヴアルツェ・ハーゼの副隊長から聞いたらしい。

とりあえず報復はすることを心に誓い、目の前でコテつと首を傾げているラウラの頭を撫でてやるのだった。



その後、きやあきやあと騒ぎ立てる女子生徒たちにととうとう堪忍袋の緒が切れた千冬が雷を落とし、一瞬で沈める。

いつもより機嫌が悪そうに見えるのはなぜなのだろうか？

「自己紹介をしろ、ボーデヴィツヒ」

「はっ！教官」

バツと敬礼して千冬に返すラウラ。

これには理由がある。

それも単純なことで、数年前にある借りでドイツの軍隊教官として働いていた時に、ラウラと出会ったのだ。

そこでの生活で、ラウラは千冬をかなり敬愛していた。

綺麗な敬礼をするラウラに、千冬は頭が痛そうにため息を吐いて言う。

「ここでは私は教官ではない。先生をつけろ」

「はっ、織斑先生」

やはり堅苦しさは抜け出せていない。

まあこれまで学校という場所に通ったことのない軍人に、いきなり慣れろと言う方に無理がある。

「ラウラ・ボーデヴィッツヒだ。出身はドイツ。よろしく頼む」

非常に簡潔で、必要最低限の自己紹介を終えるラウラ。

それに対して女子生徒たちの反応は——

「何か人形みたいに可愛いねっ」

「はあ……ナデナデしてみたい……」



「あの赤い眼も綺麗だよね〜」

おおよそ受け入れられたようだ。

銀色の髪に紅い瞳ということで、どこか兔を連想させる容姿のラウラは非常に愛らしい。

可愛いもの好きが多い女子高生には好評だったのだろう。

「……………」

教壇で立っていたラウラだが、一夏を見つけると何か思案するように顎に手を当てる  
と、何か納得したのか頷くとスタスタと一夏の方に歩き出した。

——パアンツ！

「……………はっ？」

そして鋭い音を立てて、一夏の頬を叩いた。

先ほどまで騒がしかったクラスがシンと静まり返る。

当の本人である一夏も何をされたかわからないような顔をしていたが、だんだんと理解していくうちに怒りがわいてくる。

「何すんだ、この野郎!?!」

心の中で、『やっぱり女だから野郎じゃないか?』などと考えている一夏。意外と余裕である。

それに対して、ラウラは悪気が一切ないように言い返す。

「うむ、物語の流れ上しなきゃいけないような気がした」

「ごめん、何言ってるのかわかんない」

早口で言い切る一夏。

この世界の、何か触れてはいけないものに触れてしまいそうな感覚だったのだ。

ここでタイミングよく(?)、チャイムが鳴り響く。

「次は第二グラウンドにて、二組と合同でIS模擬戦闘を行う。各人遅れるなよ」

千冬の言葉で、場が締めくくられる。

皆それぞれ更衣室に向かって歩きはじめる。

クロウもそれにならって移動しようとしていたのだが、千冬に呼び止められる。

「ミキストリ、デユノアの面倒を見てやってくれ。まだ織斑は自分のことで手一杯だからな」

「了解」

千冬に頼まれば各かではない。

皆いなくなってしまうとおろとしていたシャルルのもとに向かう。

ちなみにだが、一夏は授業終了の合図とともにダッシュしていた。

「シャルロ……シャルル、着いてこい」

「あつ、クロウ！」

クロウに話しかけられたシャルルは、パアツと顔を明るくしてとてとてと駆け寄ってくる。

まるで迷子になっていた少女が、父親を見つけたような感じだ。

クロウはシャルルを連れて教室を出る。

「久しぶりだね、クロウ」

「そうだな」

シャルルは楽しそうに微笑みながら、クロウと会話する。

『お前いつから男になったのだ？』などと会話していると、どこからか現れた女子生徒たちちに囲まれる。

それは皆、転校してきた男子生徒を一目見ようと集まってきた女子生徒たちだ。

流石に情報が回る速さは女子高生だというべきか。

「……………シャルル、走るぞ」

「う、うんっ」

人がいいシャルルだが、血走った目で見つめられるのは気持ち悪い。

まだ完全に包囲されていないなかったため、空いていた穴を通って走り出す。

「逃がすかあつ！」

しかし女子生徒たちも諦めないで、物凄い形相で追いかけてくる。もうシャルルは涙目だ。

「シャルル、掴まれ」

「ふえっ?——ええええっ!?!」

最早最終手段と、クロウはシャルルの身体を担ぎ窓から飛び降りた。

クロウはシャルルのことをお姫様抱っこで抱えていて、シャルルはなぜか顔を赤くしていた。

クロウとシャルルがいなくなった場所では、腐属性の女子生徒たちが鼻血を出して倒れていた。



「あ、あのね、クロウ。もう下ろしてくれても大丈夫かなあって思うんだけど……………」

「む、そうか」

第二アリーナの更衣室にたどり着いたクロウとシャルルは、ようやく息を付く。

お姫様抱っこから下ろしてもらったシャルルは、顔を真っ赤にしている。湯気が出そうだな勢いだ。

「さて、お前と話もしたいが、それは後だな」

「う、うん」

次の授業は、千冬が受け持つ I S 模擬戦闘訓練。遅刻は断じて許されない。

I S スーツを着るために、制服を脱ぎ始める 2 人。

「わぁ……………」

チラリとクロウを覗き見ると、思わず熱い吐息を漏らしてしまう。

しなやかで鍛え上げられた肉体。

盛り上がった大胸筋や上腕二頭筋、割れた腹筋などに目がいく。

シャルルの吐息がだんだんと荒くなっていく。

そしてクロウはズボンに手をかける。

そしてその腕を下ろし——

「何をしている、シャルル」

「へっ!? な、ななな何でもないよ!」

ちよつと残念そうにため息をするシャルルだった。

その後は特に何もなく着替えて、第二アリーナへと向かつて行った。

「遅刻だぞ、ミキストリにデユノア」

「すまん」

「ゴ、ゴめんなさい」

第二アリーナにはすでに千冬が来ており、1組2組の生徒も全員集まっていた。

千冬は普段のピシツとしたスーツ姿ではなく、動きやすさを重視したジャージ姿だった。

豊かに実った母性が、ジャージを押し上げている。

「二度目は許さないぞ」

そう言つて千冬はクロウとシャルルに列に並ぶように言う。

男の転校生が来たという時点で他の女子生徒たちが暴走することは、目に見えて明らかだったからだ。

クロウは一番後ろに移動する間、女子生徒たちの様子を確認する。

ISSスーツは個人で用意しても問題ないが、今はまだ発注していないので学園支給のものを皆着ている。

ISSスーツは着用者の身体にぴったりとフィットしていて、発展途上の女子高生たち

の肢体をくつきりと浮かび上がらせる。

何人かは十分に育っている女子高生たちもいて、魅惑的な身体を惜しげもなくさらしている。

「ふむ……………」

そんな生徒たちをじっくりと見まわし、満足気に頷いて列に加わるクロウ。最低である。

しかしクロウだけを非難できるわけでもなく、男に——女子高故に——飢えている女子高生たちは、ISスーツを着用してくつきりと浮かび上がる腹筋や大胸筋を見て鼻息を荒くしている。

だが可愛いので許される。

「何をなされていたのですか？」

列に加わると、隣に立っていたセシリアがクロウに話しかける。

セシリアは代表候補生としての訓練もあつたので、すでに専用のISスーツを所持していた。

青色のISスーツを身に纏っていて、身体の凹凸がハッキリしている。

クロウは前にセシリアのブラを見たとき、Dと書かれていたのをふと思ひ出した。

「うむ、のんびりしていたら遅刻した」

「当たり前じゃない」

反省の様子がかけらも感じられないクロウに、後ろから鈴が会話に加わる。

2組と合同授業なので、当然鈴もいるのだ。

同じく中国の代表候補生である鈴も、専用のISスーツを持っていた。

桃色のISスーツで、セシリアと比べるとあまりにも身体の凹凸が窺えない。

鈴のブラを見たとき、Aと書いてあったのを何故か思い出したクロウだった。

「……………なんか変なこと考えてない？」

「気のせいだ」

野生動物の如く勘の良さがある鈴は、クロウの失礼極まりない考えを察知しかける。

追及されても無表情で返せるクロウも凄い。

「しかし織斑、素晴らしいスタートダッシュだったぞ」

「は、はは……………」

自分たち———というか主にシャルル———に女子生徒たちが殺到してくるのを予

見した一夏は、チャイムが鳴ったとたんに猛ダッシュで教室から離れたのだ。

意外としたたかである。

ちなみに4人がこうして話しているが、口の動きを最小限且つ前を向いたままとい

う、無駄に高度な技術を使って話していた。



「さて、今日は再確認の意味も込めてI Sの戦闘を見てもらおう。オルコットに風、前に出る」

しかし千冬にはしつかりと見抜かれていたようで、セシリアと鈴を前に呼ぶ。

力を見せつけたいとかいう欲はない2人は断りたいのだが、教師の指示には逆らえないし自分が悪い面もあるのですごくすぐと前が出る。

「あの……セシリアと戦うんですか？」

鈴が心底面倒くさそうに千冬に問う。

千冬にこのような態度で接するのは自殺行為なのだが、相手がイギリス代表候補生と戦うとなれば本気になるしかない。

しかし千冬はニヤリと笑うと、違うという意味も込めて首を横に振る。

「いや、今回貴様らの相手をするのは、貴様らもよく知っている人物だ」

千冬の言葉に、セシリアや鈴だけでなく1組2組全女子生徒たちが首を傾げる。

セシリアと鈴は、2人とも世界に誇れる超大国の代表候補生である。

その実力も折り紙つきで、セシリアは実際にクラス代表決定戦で実力を示している。

そんな2人と対等に戦える相手など、この学園に何人いるのだろうか？

戦うのは誰なのだろうか？

「さ〜い！」

そんな疑問が全員の頭によぎっているとき、遙か上空から声が聞こえた。皆が上を見ると、空から人間が1人降ってきていた。

その人物は皆がよく知っている……特に1組の生徒ならなじみ深い人物。

「きゃああああ！逃げてくださいい〜！！」

空から降ってきている人間の着弾予測地点は、あの男の脳天。

「……………ん？」

その男、クロウが空を見上げると、もうすぐそこにISを纏った山田 真耶が……………。

——ズドオオオオンツ！！

真耶が落下した場所から、大きな砂塵が舞い散る。

生徒たちは悲鳴を上げ、落下地点から離れようと走り出す。

千冬はため息をつく。

砂塵がゆつくりと晴れていき、2人の様子が露わになる。

「あ、あの……クロウさん……………」

2人は無事だった。

ISを纏ったクロウが、真耶をお姫様抱っこで助けていたのだ。

真耶は顔を真っ赤にして、混乱もしているのか、クロウのことを名前で呼ぶ。

そんな2人の姿を見て、乙女思考の強い女子生徒たちは黄色い悲鳴を出す。

「ふむ……………」

クロウが見つめるのは、窮屈そうに詰め込まれた真耶の双丘である。

普通でもピッチリしているISスーツが、真耶が着ることによってさらに張りつめられている。

真耶が少し身じろぎするたびに、巨大な胸がプルプルと柔らかそうに揺れる。

そう言えば真耶のブラを見たときにGという目を疑う文字があつたことを思い出すクロウ。

「……………ミキストリ、時間もないから早く下ろせ」

「む、了解した」

千冬がどこか棘のある口調でクロウに言い、クロウも素直にそれに従う。

ゆつくりと優しく地面に下ろされた真耶だが、少し残念そうにしていた。

さて、真耶が現れたことによってセシリアと鈴が戦う相手が分かったのだが、正直相手にならないというのが生徒たちの総意だった。

勿論、真耶がセシリアたちに勝てないという意味で。

しかしそれも仕方がないことだろう。

普段の真耶は千冬のように頼りになる先生というより、友達といった方が適切なの

だ。

「一応言っておくが、山田先生は日本の元代表候補生だ。侮るなよ？」

「えへへ……………」

千冬の言葉に真耶は嬉しそうに、だが恥ずかしそうにしていた。

そしてこの言葉で、セシリアと鈴は真耶を侮ることを止めた。

日本も超大国とは言えないが、それでも世界列強の1つに数えられる大国である。

そんな国で代表候補生を務めるのは容易ではない。

ちなみに、真耶が日本の代表生を決める大事な試合で、緊張のあまり1割も実力が出せずに敗退したことは、数人を除いて知られていない。

「さて、では試合を始めるぞ」

この事に、セシリアと鈴はポカンとしてしまう。

確かに侮ってはいけない相手だと認めだが、自分たちも同じく代表候補生。2 v s. 1 など結果は見えている。

「心配するな。『これでは』お前たちは勝てないさ」

しかし千冬に挑発された2人は、空へと昇っていく。

戦闘の場では冷静に戦える2人だが、元々2人のプライドは一般人に比べて高い。

2 v s. 1 でいい勝負と言われたら黙っているわけにはいかない。

真耶も表情をいつもより引締め、空へと昇って行った。

「よし、デュノア。山田先生が現在使用しているISの説明をしろ」

「あ、はい」

上空で激しく戦っているセシリアと鈴、真耶の試合を眺めながらシャルルは説明を開始する。

真耶が使用しているISは『ラファール・リヴァイヴ』。

フランスのデュノア社が開発した第2世代型のISで、世界で12か国で制式採用されている。

その理由は、第2世代型だが第3世代型の初期機に劣らない性能と、操縦のしやすさにある。

別名『疾風の再誕』と言われている。

「そこまでいい」

シャルルのすらすらと述べられた説明を途中で遮り、千冬は空を見上げる。

上空での戦いが終わったのだ。

結果は真耶の勝利だった。

真耶のシールドエネルギーもほぼ0に近いが、先に力尽きたのはセシリアと鈴だった。

「はあ……………」

「むう……………」

ISを解除した2人は、悔しそうに呻いていた。

この勝負の結果の原因は真耶の実力もあるが、やはり2人の共闘の拙さであろう。

真耶の実力は確かにセシリアと鈴を上回っていたが、2人を普通に足し算する戦闘力だと真耶は到底敵わない。

だが共闘すれば、1+1が2になるわけではない。

共闘などしたことのない2人がいきなりそうすれば、呼吸が合わないのも当然だろう。

合わせられるとしたら、どちらかが戦闘に関して天才であるしかない。

しかしセシリアと鈴は確かに才能があったが、決して天才ではなかった。

現在ISを駆って空を縦横無尽に駆け巡れるのは、ひとえにそれぞれの努力の結果である。

「これでこの学園の先生方が有能であることが分かったな？よし、次はISを使つての実習を行う。専用機持ちである6人のところにそれぞれ分かれる」

千冬がそう言うと、女子生徒たちはそれぞれワツと散っていく。

やはり集まりが多いのは、男子生徒である3人の所だ。

爽やか系が好きな女子は一夏の所へ、可愛い男の娘が好きな女子はシャルルの所へ、守ってもらいたい、甘えたいという女子はクロウの所へとそれぞれ散った。

ちなみにこの3人の中で最も集まりがいいのは一夏。次にシャルルと来てクロウである。

この3人に女子生徒は集中しているが、セシリアや鈴、ラウラの所にも少数ではあるが集まっている。

セシリアや鈴に集まっているのは純粋にIS機動がうまくなりたいと願う生徒たち。

ラウラの所に行ったのは、可愛いもの好きな生徒たちである。

しかし当然これでは人数が偏ってしまい、授業がまともにできない。

「馬鹿者！思い思いに散ってどうする！」

千冬の一括で出席番号順ということになった。

男3人のところに行けた女子生徒たちは歓喜し、女子陣の所にいった生徒たちは残念がるのだった。

「は〜い！班のリーダーは訓練機を取りに来てくださいね〜！」

そう言つて真耶が示したのは、『打鉄』と『リヴァイヴ』。

クロウは班メンバーの意見を聞いて、『打鉄』を取りに行く。

「山田教諭、『打鉄』を貸してほしいのだが……………」

「あ、はいーどうぞ、取って行ってください」

クロウに話しかけられ、笑って訓練機を差し出す真耶。

その表情は代表候補生2人に勝ったからか、いつも以上に自信に満ちていた。

普段も親しみやすい教師として慕われている真耶だが、こういう風にキリツとしてい  
るとできる教師みたいな感じで慕われるかもしれない。

「うむ……………」

しかしクロウが見ていたのは顔ではなく、その破壊力抜群のダイナマイトボディであ  
る。

ISスーツに包まれて、身体の輪郭がはつきりと視認できる。

戦術兵器ともいえるGカップの巨大胸が、真耶が動くたびに柔らかそうに揺れる。

「あ、あの、ミキストリくん……………そんなにじつと見ないでほしいのですが……………」

真耶はクロウの不躡な視線を感じて、顔を紅潮させる。

これで済むのは、真耶がクロウのことを好いているからだ。

そうしてどことなく気まずい空気が流れていると、後ろからクロウを呼ぶ声がある。

「クー、まだ〜?」

「ああ、すまない。ではな、山田教諭。格好良かったぞ」

そう言つてクロウは『打鉄』を抱えて飛び去っていく。



その後真耶がくねくねと身体を動かしていたのは内緒である。

## 男装少女

クロウに褒められて使い物にならなくなった真耶に代わって千冬からこの授業の目的を聞かされる。

それはISを動かすことであり、午前中までに終わらせろということだった。

そしてそれを実行していたのだが、ある女子生徒がISを立たせたまま解除してしまったので、次の生徒が乗れなくなってしまったのである。

そこで復活した真耶は、専用機持ちが抱えてコックピットまで運んであげてと言う。

そんなおいしいことを、楽しいこと大好きな女子高生たちが食いつかないはずがなかった。

意図的にISを立たせたまま解除するようになったのだ。

そしてそれはクロウのところでも同じだった。

「……………またか」

「は、はは……………ごめんね、ミキストリックン」

申し訳なさそうにクロウに謝るクラスメート。

しかし他の女子生徒たちの視線が、ISを立たせないと殺すと訴えてくるので仕方ない。

そもそもクロウも嫌がっておらず、むしろピチピチの女子高生たちの身体に触れられるというところで、内心歓喜している。

「えへへへ、次は私だ〜」

次にISに乗るのは、のほほんとした癒し系美少女、布仏 本音であった。

普段のぬいぐるみパジャマや異様に袖が長い改造制服でもない、一般的なISスーツを着用していた。

その雰囲気や身長には不釣り合いなほど実った胸部が、柔らかそうに揺れている。

当然真耶には敵わないが、Dカップおっぱいは伊達じゃない。

「クー、抱っこ抱っこ〜」

本音はクロウを迎え入れるように、両手を大きく広げる。

クロウがしゃがみ込むと、本音は腕を首に回して抱き着いた。

その状態のままクロウが浮遊すると、本音はだらーんとクロウの首にぶら下がる。

普通なら痛くて我慢できないが、クロウは無表情のまま本音を首にぶら下げた状態でコックピットに近づいていく。

時折柔らかい胸部がクロウの鍛え上げられた厚い胸板に当たり、形を変える。

「ほら、移れ」

「むう、名残惜しい」

ぶうと頬を膨らませるが、あくまでこれは授業なのだ。イチヤつく場所ではない。それを理解しているの、本音も駄々をこねることなくISに乗るのだった。



「ふい、……終わったあ……」

そう言つて一夏はゴロンと地面に横たわる。

あれからISの歩行訓練はすんなりと進んでいき、無事に皆訓練を終えることができ

た。

「クロウ、シャルル。さっさと帰ろうぜ」

「ああ、悪いな。まだISを片付けていないから、先に行っておいてくれ」

「僕も機体の調節がしたいから、先に帰っててくれると嬉しいな」

一夏の誘いを、クロウとシャルルはそれぞれの理由で断る。

訓練機はIS専用のカートで運ぶのだが、動力などはないので人が押すことになる。

一夏がここまで疲れているのも、これが大きな要因にもなる。

正直2人を手伝ってやりたい一夏だが、力仕事は勘弁してほしいし、機体の調節などまったくできないので先に帰ることにした。

「悪いな。先に行つとくな」

そう言つて一夏は手を軽く挙げて去つて行つた。

一夏が見えなくなると、シャルルは疲れたようにため息を吐いた。

「随分疲れるらしいな、男の真似事は……………」

「……………まあね」

クロウの言葉に、シャルルは苦笑で応える。

シャルル…………いや、シャルロットは男ではなく、女である。

フランス代表候補生、シャルロット・デュノア。それが彼……彼女の本当の名前である。

何故彼女が男装してIS学園に入学しているのか。

それは彼女の父の命令だからである。

シャルロットの実家は、量産機ISのシェア世界第3位の大企業、デュノア社だ。

しかしながら技術力や情報力が劣っているため、どう頑張っても作れるのは第2世代のISだけ。

だが世界ではすでに第2世代型は過去のものであり、現在は超大国の国々では第3世代型が普及し始めている。

アメリカとロシアでは第3世代を超えた、第4世代型ISを目指しているという。

と言っても圧倒的に技術力と知識が不足しているため、未だ机上の空論であるが………。

さて、話を戻してシャルロットが何故男装して入学させられたかだが、それは今年入学した男子生徒、織斑 一夏とクロウ・ミキストリにある。

男が使うISの技術を盗ませて、それをデュノアが作れば利益が得られるかもしれない。

そういう苦肉の策で取られたのが、妾の子供であるシャルロットを使ったスパイであ

る。

「まあ当然ダメだけどね」

シャルロットは普段の暖かい雰囲気を通して、無表情で言う。

男でISを使えると触れ回るといふバカなことをしたので、そんな嘘は絶対にばれるだろう。

シャルロットからすれば、いつばれるのか楽しみだとすら思っている。

「その時は助けてやるさ」

「うん、お願いするよ」

これで強力な後ろ盾を得たシャルロットは、絶対につかまったりすることはないだろう。

したたかな女、シャルロットである。

「しかしよく誤魔化せているな」

「うひゃあっ!?!」

クロウはいきなり、ISスーツに包まれているシャルロットの胸部に手をあてる。

すると手のひらに感じるのは、よく触らなければわからないくらい小さな小さなふくらみ。

「ちよ、クロウ！何平然と触っているの!?!」

カアアアと顔を紅潮させて、クロウからバツと離れるシャルロット。

しかしクロウは悪びれる様子はない。

「中に何か入れているのか？」

「まず君がするのは謝ることだよね!？」

ISの格納庫内でギアアギアアと騒ぐ2人……と言ってもシャルロットがヒートアップしているだけなのだが。

「よし、確かめてみるか」

「ええっ!? どうしてそんな発想にいくの!？」

シャルロットをひよいとお姫様抱っこして、格納庫内にあつたマットの上を持って行く。

普段なら乙女趣味があるシャルロットなら喜びそうなものだが、今はこの後ナニがされるのか分かっているので必死で抵抗する。

だがしかし男と女の差がある。

と言ってもシャルロットなら一般男性くらいなら軽く捻れるのだが、相手がクロウの時点で敗北は確定していた。

「ちよっ、待っ……離してええええっ!!」





「ん~~~~んくっ……ぢゆる」

ISの格納庫内で、2つの人影が重なり合っている。

それは勿論クロウとシャルロットである。

シャルロットの露わになった膺からは白い液体が流れ出ており、何があつたかは一目瞭然だ。

すでにシャルロットは抵抗する様子はなく、クロウの上に乗ってむしろ積極的に唇を押し付けていた。

ぢゆるぢゆると卑猥な音を立てて、唾を吸い込んだり送り出したりする。

2人の口の周りは唾液で汚れている。

舌を押し付け合って、シャルロットは幸せそうに目を瞑って感じる。

「ふふっ」

シャルロットがクロウの口との間に銀色の橋を架けながら、唇をゆっくりと離す。身体を起こしたことで下半身に重心がいき、勃起した陰茎に秘裂が押し付けられる。するとまたじつとりと愛液が滲み出す。

シャルロットは巧く息ができなかったのか、少し息も荒くなっている。

「さつきはただやられていただけだったからね……次は僕の番だよ」

最初に連れ込まれたときは羞恥などで顔を真っ赤にさせて抵抗していたので、一度有無を言わず犯したのだ。

それでシャルロットも何年も会えていなかった愛しの男との情事で、タガが完全に外れてしまったのだ。

「はあ……はあっ……」

固くいきり立っている怒張に顔を近づける。

シャルロットの吐息が男根に当たり、ビクビクと震える。

あまり口淫の経験のないシャルロットは、間近で男根を見てあうあうと赤くなってしまう。

「んっ！んんっ！」

だがクロウのためと、少ない知識を総動員して口淫を行う。

根元を細く白い指でつかみ、口の中に一気に入れる。

巨大な棒が口の中に入ってくるという、普段ではあまりないことに目の端に涙を溜める。

それからズルズルと唾液をたくさん溜めた口内で陰茎をしごき、陰囊を優しく揉んで刺激する。

「んっ…ふっ!!」

シャルロットも男根を舐めているうちに興奮してきたのか、指を下半身に持つていて秘部を刺激する。

チュプチュプと、男根を刺激する音以外にも音が出始める。

それからシャルロットは、雑誌や本などで得た色々なことを試してみる。

ハーモニカを吹くように、陰茎に吸い付いたり。

亀頭だけを口に含んで、舌で清めるように舐めまわしたり。

口内から出して、陰茎を手で扱きながらカリの部分をペロペロと舐めたり。

「ぢゅるるるる!!」

クロウの限界が近づいてきていることを悟ると、ラストスパートをかける。

喉の一番奥まで迎え入れたと思つたら、吸引しながら亀頭あたりまで吐き出す。

シャルロットの口から出された多量の唾液が、口の周りと陰茎を濡らす。

秘裂に手を伸ばして、グチュグチュと弄る。

「んんんんんん!!」

そして鈴口から液体が発射された。

ビュツビュツとポンプのように吐き出し、そしてその汚液をゴクゴクと喉を鳴らして胃に流し込む。

「ぶはあつーど、どうだった?」

シャルロットが男根から口を離し、心配そうに聞いてくる。

飲みきれなかった精液が陰茎に垂れ流れ、シャルロットの顔にも飛び散っている。

シャルロットも先ほどで絶頂したようで、ブルブルと細かく痙攣している。

「ああ、とても気持ち良かったぞ」

「……………えへへ」

シャルロットの金髪を優しく撫でながら、彼女の性技を褒めるクロウ。

それをむず痒そうに、しかし嬉しそうに受け入れるシャルロット。

「……………うん!」

そうシャルロットは意気込むと、クロウの上に押し掛かり身体を起こす。

そうすると、見事なスタイルが惜しげなくクロウにさらされる。

Cカップの胸は、括れた腰などで大きく見える。

シャルロットは陰茎を掴んで膣へと狙いを定めると、大きく股を開いて亀頭を秘裂に

押し付ける。

はしたない恰好をしているせいで、シャルロットは顔を真っ赤にさせてフルフルと震えている。

「こんな格好でいいのか？」

「……………うん」

これは所謂騎乗位というのだが、シャルロットはあまりこの体位を好まなかった。

やはり恥ずかしいらしい。

どういう過程でこの体位をしてくれるのかはわからないが、これぞ好機とクロウはシャルロットの柔らかい臀部を掴む。

「あああっ！ふあああっ！！」

ヌルヌルとした腔内に、ゆっくりと男根を埋めていく。

そして最後に、一番奥に亀頭をブチュウっと押し付ける。

シャルロットの身体はブルブルと震え、力が抜けたように倒れる。

「いくぞ、シャルロット」

「ひあああっ！！」

シャルロットの肢体をギュッと抱きしめて、耳元で囁く。

どうやらそれが個人的にはキタようで、シャルロットの身体にゾクゾクとした快感が

走る。

ズブズブと突かれ、身体中から汗を流す。

「んふうっ！んんっ！んんっ！！」

シャルロットの唇に唇を押し付けて、貪る。

ぢゆるぢゆるとシャルロットの口内から、唾液を吸い取って味わう。

接吻をしている状態でも腰は動かしており、ぬちやぬちやという水温が2か所から聞こえる。

「あっ！あっ！うっ！ああっ！！」

腰を激しく動かしながら、大きく見える乳房に手を伸ばす。

モミモミと感触を楽しむように揉むと、シャルロットにゾクゾクと快感が与えられる。

左の乳房をムニユウつと潰し、右の乳首を指でギユウウウと摘まむ。

すると膣内がギュツと締まり、グチユグチユと音を立てる。

「あっ！んあっ！はあんっ！！」

クロウも体を起こし、対面座位という体位になる。

柔らかな尻肉をギュつと握り、男根を出し入れする。

「んちゅっ！ん……ふっ！んんんっ！！」

クロウはこの状態でシャルロットとキスするのが好みのもので、また唇を重ね合わせる。

シャルロットも腕をクロウの背中に回して、これを受け入れる。  
Cカップの胸が、クロウの鍛えられた胸板に押し付けられて潰れる。

「————出るぞ」

シャルロットの子宮も降りてきて、突き入れられると龟头と子宮口がキスをする。  
トントンと突き入れるたびに、子宮口に当たる感触がする。

「あああああつ!!」

そしてクロウの体が一度ブルリと震えると、膈内に精液が放出された。  
シャルロットは目から涙を流し、よだれを垂らして歓喜する。

しかし性交はまだ終わっていないかった。

「ああつ! あああつ! ああああああつ!!」

クロウは精液を吐き出しても、まだピストン運動を続けているのだ。  
シャルロットの両腕を自分側に引き、逃がさないようにする。

Cカップの乳房が腕の上に乗るあげ、柔らかかそうに形を変える。

鈴口からは腰を押し出すたびにポンプのように精液が飛び出し、膈内中を白く染め上げる。

「ああああっ！ああああああっ！！」

もうシャルロットは嬌声しか話すことができず、ただ喘ぐだけだ。

それでもクロウは腰を休めることなく、シャルロットの柔らかい尻に打ちつつける。

ガクガクと身体が震え、よだれが口から溢れている。

「ひっ！あっ！あっ！あっ！！」

シャルロットの色々な液体で汚れた身体をマットに優しく寝かせると、正常位の体位になつて腰を動かす。

ズブズブとはしたくない音が響く。

また唇を押し付け合い、離すときは両者ともに顔中がよだれだらけになる。

「あっ！ひいっ！ま、また腔内なかで大きくなつてうっ！！」

クロウの限界が近いのだろう。

シャルロットもまた絶頂するのか、腔壁がキュウキュウと男根を締め付ける。

「あっ！あっ！あああああああっ！！」

クロウの男根から、爆発する勢いで精液が放出された。

まるで陰囊の中に溜めていたものを空っぽにするように、吐き出され続ける。

熱い液体が腔内に流し込まれる。

あふれ出た精液が、尻穴にまで垂れ堕ちる。



「はあ……はあ……」

そしてシャルロットは、自分に覆いかぶさる男の頭を優しく撫でるのだった。



「……………クロウたち、遅いな」

一夏が屋上で、そう呟く。

シャルロットが転校してきたことで、歓迎会の意味を込めて皆で昼食を取ろうと言った一夏。

それに仲のいい専用機持ちが食いつき、今日に屋上で食べることになったのだ。

しかし未だ主役であるシャルロットはまだ来ず、クロウも来ていなかった。

「まあ遅れることだってあるわよ。先に食べちゃいましょうよ」

「ええ、そうですわね」

一夏に対して鈴とセシリアは、すでに持つてきた弁当を屋上にひろげだす。

「悪い、遅れた」

もう皆で先に食べてしまおうとしていたところ、ちょうどいいタイミングでクロウとシャルロットがやってきた。

クロウはいつも通りの無表情なのだが、シャルロットがやけに赤くなっている。

歩き方も不自然で、たびたびフラフラとしている。

「どうした、シャルル？ 具合でも悪いのか？」

「え!? だ、大丈夫だよ、うん!」

友達想いの一夏に聞かれるが、シャルロットは何でもないと首を振る。

それもそうだろう。犯されて足に力が入らないなんて、言えるはずもない。

鈍感である一夏はそうかと言って気づかなかったが、セシリアと鈴は別である。

「(に、日本では同性愛が活発だとは聞いておりましたが……………!)」

「(お、男同士ですって……………ツ!)」

意外と間違っていた。

まあシャルロットも送り込まれる前の猛特訓のせいで、ほぼ男と同じ仕草などをするようになっているので、仕方ないといえれば仕方ない。

セシリアと鈴は顔を伏せて、プルプルと身体を震わせる。

「大丈夫か、2人とも?」

『大丈夫(ですわ)(よ)!!』

「おうっ!?!」

身体を震わせる2人を心配して声をかけた一夏だが、物凄い剣幕で返事をされて驚いてしまう。

その後クロウとシャルロットも来たということで、改めて昼食会が開始された。

箸は一般的なお弁当を作ってきた。誰に上げようとするのか丸わかりである。

セシリアは木のバスケットの中にサンドイッチを、鈴はタツパーに酢豚を詰めてきていた。

一夏とシャルロットは購買で買ったものを、クロウは何も持ってきていなかった。

もらうつもり満々である。

「ほら、クロウ。あたしの酢豚、あげるわよ」

「む、すまない」

酢豚が入れられたタツパーをグツと押し出し、クロウに催促する。

クロウも礼を言つて、酢豚を口に入れる。

「うむ、相変わらずうまいな」

「そ、そう、それはよかったわね」

クロウから贈られる讃辞に、鈴は恥ずかしそうにしてそつぽを向く。

中学生との時から、深く広く研究してきた中華料理。誰にも負けるつもりはない。

しかし酢豚を食べていると、米も食べたくなってきた。

そこで目をつけたのが、鈴の膝の上に置かれた白米の入ったタツパー。

「ん？(っ)飯がほしいの？」

「ああ」

ここでニヤリとほくそ笑む鈴。

絶対に(っ)飯を持ってこないだろうと確信していた鈴は、自分の分だけ持ってきていたのだ。

それはバカツプルのやる、『はい、あ〜ん♪』がしてみたいからである。

「い、いいわよ。はい、あ〜ん」

そうやって鈴は白米をつまんだ箸をクロウに差し出す。

やっている本人が恥ずかしがって、顔を紅潮させてそつぽを向く。

これよりも恥ずかしいことなどたくさんやってきているが、これは別の話である。

「……………ずるいですわ」

そうしてクロウと鈴がキヤツキヤウフフを楽しんでいると、恨めしそうにセシリアが文句を言う。

セシリアがこの中に入れない理由……それはセシリアの異常なまでの料理の下手さである。

どうやったらこの食材でこんな味になると慟哭するレベルの料理を生み出すのだ。

それはセシリアも自覚しており、最近仲良くなった鈴に料理を見てもらったのだが、味見した鈴が気絶。それから料理教室もなくなってしまったのだ。

「……………これはお前が作ったのか？」

「は、はい。一応わたくしが……………」

バスケットの中からサンドイッチを取り出してセシリアに問うクロウ。

その見た目は、実に美味しそうである。しかし、中身と外見のギャップが凄まじい。

「ただこう」

「あっ……………」

鈴曰く食物兵器とまで言わしめたセシリアの料理を、クロウはパクリと簡単に口の中に放り込んだ。

むしゃむしゃと咀嚼すると辛いやら甘いやら苦いやら、とにかくありとあらゆる味覚が口を支配する。

どれもこれも調和どころか激しく対立しあっており、どれも強い味なのでとんでもない味になっている。

それでもクロウは少しも表情を崩すことなく、セシリアのサンドイッチを全て飲み込んだ。

「……………うむ、また精進して私に料理を出してほしい」

「……………はいっ！」

セシリアは満面の笑みでそれを了解する。

普段微笑みが似合う英国貴族らしからぬ笑顔だが、この笑顔も年相応の少女のもので可愛らしく美しい。

鈴は自分の愛する男の優しさにさらに好感度を上げ、鈴に説明されたシャルロットもまた好感度をググンと上げた。

元々Maxだったのだが、それを振り切ってしまった。

「そう言えば午後の授業もISの訓練だったよな？早く食つちまわないと……………」

「え？別に更衣室に行つて服を脱ぐだけじゃない。そんなに時間かからないわよ」

「えっ？」

「えっ？」

一夏の言葉に、鈴がキョトンとして返す。どうやら両者の間に認識の違いがあるようだ。

鈴たちの話によると、ISスーツはいちいち着替えずに着たままだそうだ。

逆に一夏は毎回着替えているので、それで時間が喰つてしまうのだ。

「何だよ。それだったら俺も次からそうするか」

一夏はそう言つてじつと自分のファースト幼馴染である、篠ノ之 箒を見つめる。

それは別に性欲でとかではないのだが、傍から見ればじろじろと女性を見る変態である。

「ば、馬鹿者！女をじろじろ見る奴があるか！」

「わ、悪い」

一夏と違つて、クロウはじろじろと見ることはなかった。

目を瞑つて、大切に脳内に保存してある情景を思い出しているのだ。

豊かに実つた果実を持つセシリアの美しい肢体。

まだ成長しきつておらず、未熟な肉体の鈴。

程よく均整のとれた肉体を持つシャルロット。

その3人がそれぞれオリジナルのISスーツで身を覆い、惜しげもなく肢体をさらしている。

「……………うむ」

「？」

満足そうに頷くクロウに、シャルロットがコテリと首を傾げるのだった。



「結局私と同室になったのか……………」

「うん、そうみたいだね」

1日の授業も終わり、夕食を食べ終えてゆっくりとできる時間。

クロウとシャルロットは部屋で向き合って話していた。

本音が離れたこの部屋にシャルロットが同室することになり、今は食後の休憩みたいな感じになっている。

あくまでも男として学園に通っているのです、こうなるのも必然である。

「それでね、クロウ。シャワーのことなんだけど……………」

シャルロットが持ちかけたのは、シャワー時間をいつにするかだ。

男と女である以上、これは絶対に決めなければいけないのだが……………。



「む？一緒に入れれば済む話だろう」

「ダメだよ!？」

流石はクロウ・ミキストリ。いきなりぶっ飛んだことを言い出す。

顔を真っ赤にさせて拒否するシャルロット。今日の午前にあつたことを思い出して  
いるのだろうか。

結局話し合い——という名の欲望の押し付け——は夜遅くまで続き、『たまに』  
一緒に入ることで決着となったのだった。

## 仏蘭西美少女ナリ

「……クロウ、これ」

「了解した」

土曜日、私立でなければ休みであり学生が月曜日に最も欲しがる曜日である。

しかしここI S学園では午前には理論学習があり、午後からはアリーナが全開放されるため多くの生徒たちがその実力を高めようと努力する。

そしてそれは4組の代表候補生、更識 簪も同じであった。

整備室に閉じこもり、自機をより良いものにしようとして改造に改造を加える。

それを手伝うのは大柄な男子生徒、クロウ・ミキストリだ。

簪では持ちづらい重い物を持ち運びしている。

「…………ふう」

投影ディスプレイをずっと睨んでいた簪は、1つため息をつくと目を労わるように瞑る。

「む？今日は終わりか？」

「…………うん、あまり根を詰めても意味がないし」

荷物を持って行って帰ってきたクロウに話しかけられ、簪は目を瞑ったまま応える。クロウが近くに来ると、ゆったりと寄りかかる。

大柄なクロウに寄りかかると、まるで大木に身を寄せているかのように感じる。しかしここは最も安心する場所で、自分が最も好きな場所である。

「…………ん」

クロウも簪の水色の髪を優しく梳いてやる。

大きな手で撫でられて、心底気持ちよきそうにする。

そしてだんだんとうとうとし始めていると――

「か〜んぎ〜しちや〜ん!!」

邪魔者が現れた。

その邪魔者、更識 楯無はクロウの腕の中にある簪の所に器用に滑り込み、簪に抱き

着く。

楯無の豊満に育った双丘が簪に押し当てられる。

——こいつは喧嘩を売っているのだろうか？

巨乳がそんなに偉いのか？ いや、違う。感度である。

「……お姉ちゃん、離れて」

ギュウギュウと締め付けてくる姉を引き離そうと、手をグイグイと押す。

その時に柔らかな胸に手が当たる。

………Bカップで何が悪い。

「ぶ〜じゃあクロウに〜♪」

「むっ？」

簪を見てニヤリと意地悪そうに笑うと、簪から離れてクロウの腕に抱き着く。

豊満な胸の間に腕を埋め、簪の反応を楽しむように見る楯無。

「……ッ」

むすつとした表情で楯無を睨む簪。

しかし簪の整った容姿では、怖いと言うよりむくれていて可愛いと感じてしまう。

そんな姉妹2人に取り合いをされて羨まけしからん男、クロウは胸の感触をうんうん

と頷きながら楽しんでいた。

「でも簪ちゃん。私が手伝った方が早く終わると思うよ？」

「……うん、でもこの子は私が作り上げたいから」

そうやって簪は『打鉄式』を見上げる。

簪は対暗部用暗部『更識』の当主であり、ロシア代表生である楯無に劣等感を抱いている。

特にクロウと出会うまでは酷く、碌に楯無と会話することもできない状態だった。

クロウと出会うてからは楯無と会話することくらいには取り除くことができたのだが、心の奥底では少し残っている。

しかしI Sを自分で組み立てることができたのなら、少しは姉に近づけるかもしれない。い。

そんな想いで、簪はI Sを組み立てていつているのだ。

「……………簪ちゃんは凄いなあ」

楯無はクロウの腕に抱き着いたまま、またI S整備に向かって行つた簪を眩しそうに見つめる。

「お前に似たのだな」

戦闘や事務、家事なども熟す完璧超人と言われる楯無だが、それは偏に彼女の努力のたまものだろう。

どれもこれも必死に努力して、頑張った結果のものである。

簪も姉に似て、努力家になった。

「そんなところが好きだぞ、楯無」

「……………」

クロウにじつと見つめられて言われ、楯無は頬をポツと赤らめる。

そんな姿の『学園最強』は見せるわけにはいかないとはかりに、クロウの体に顔を押し付けて見せないようにする楯無だった。



楯無とクロウが何だかいい雰囲気なり、簪が眼鏡越しにそれをジト目で見ていたその頃、アリーナでもイベントが発生していた。

「成程な、『瞬時加速』イグニッションブーストを使うときもいろいろ考えなきゃな」

「そうだね、特に僕やセシリアみたいに遠距離タイプには気を付けたほうがいいかもね」

簪が休日を返上してISを整備しているように、一夏も少しでも実力をつけようというリーナで努力していた。

教師役としてシャルロットに頼み、ISについて師事しているのだ。

一夏とシャルロット以外にも大勢の生徒がおり、それぞれ自身の向上のために頑張っている。

普段はうわさ好きな女子高生だが、元々IS学園は超エリート校。それぞれ努力は欠かせないのだ。

「むう……だからそれは私が教えてやったではないか………」

仲睦まじく会話する一夏とシャルロットに、我がヒロインことモツ……簪がムスツとしてブツブツと言う。

小学生のころからずっと想い続けてきた男が、他の女と楽しそうに話すのはとても面白くない。

といっても、シャルロットにはあの男がいるから心配する必要はないのだが………

「ねえ、あの子って転校してきた………」

「ホントだ！兎みたいで可愛い！」

「あのISって、やっぱりドイツのなのかな？」

それぞれ努力に励んでいた生徒たちが、にわかに騒ぎ立つ。

一夏とシャルロットが生徒たちの視線の先を見ると、そこには最近一組に転校してきた一夏の頬をいきなり打った少女がいた。

「ラウラ……ボーデヴィツヒ………」

一夏はそう呟いて、眉を顰める。

『流れ上』とかいう意味がわからない理由で、いきなりピンタされたのだ。良い感情を抱けるはずもない。

ラウラはその小さな身体に己の専用機、『シユヴァルツエア・レーゲン』を纏わせている。

「織斑一夏」

「……………なんだよ」

ラウラから『開放回線』オープン・チャネルで声が飛んでくる。

無視する訳にもいかず、洩々返答する一夏。

「私は貴様が嫌いだ」

自分の尊敬する織斑 千冬の経歴に泥を塗った男。

もし一夏が誘拐されるようなことがなければ、千冬は間違いなく第2回 I S 世界大会

——モンド・グロツソで二連覇の偉業を達成していただろう。



しかし一夏が絶対的に悪いというわけでもないことは、ラウラも理解している。小さな子供に誘拐犯を倒せというのは無理な話だ。

だが理解はしていても、許すことはできないのだ。

「私と戦え、織斑 一夏」

「嫌だね。戦う理由がない」

「お前をコテンパンに伸すことで、私の気が済むだろう？」

何を言っているんだと、コテンと首を傾げるラウラ。

ふざけるなど叫びそうになる一夏だが、純真無垢な瞳を見てうつと言葉を詰まらせてしまう。

もしかしてこいつはめちやくちや単純な子供じゃないか？

そんな考えが一夏の脳裏によぎる。

「仕方ない。なら——」

ラウラの紅い瞳から人間味のある暖かさが消え、軍人のような冷徹な色が灯る。

彼女はI Sを戦闘状態へと移行させ、一夏めがけて——

「——戦わなければならぬようにするだけだ」

大型の実弾砲を発射させた。

「おっと……危ないなあ」

しかしそれが一夏に届くことはなかった。

一夏の前に躍り出て、シールドで実弾を弾いた美少女——クロウ以外には男だと思われているが——。

「こんな人がいるところで発砲なんてしちゃダメだよ？」

「む……それもそうだな」

「素直だ………」

ニツコリと笑って注意するシャルロットに、ラウラは冷徹な雰囲気捨てて素直に謝る。

そんな様子を見て、一夏はハア……とため息を一つ。

『「こらー！今発砲した奴！学年・クラス・出席番号を言え！」』

アリーナ内にアナウンスで響き渡る怒声。

どうやら教師が見ていたようだ。

「むむ！ではな、織斑 一夏。次は戦え」

そう言つてラウラはすぐさまISを解除、アリーナから逃走を開始した。

怒られるのは嫌らしい。

「はあ………何でこうなったんだよ………」



『おひさあ、クロくん!』

「そんなに久しぶりというわけでもないだろう」

クロウは今、整備室を出て廊下で投影ディスプレイに向かって話している。

そのディスプレイに映っているのは、ラウラと違って狡猾な腹黒兔、篠ノ之 東であつた。

『本当に暇だよお、こっちは。そっちに遊びに行つてもいいかい!』

「大騒ぎになつてもいいのだったらしいぞ」

騒がれるのは面倒だなあ……と言う東。

どうでもいい人間が自分に群がってくるのは、想像するだけでも鬱陶しい。

『あく、でも久しぶりに箒ちゃんやちーちゃんに会いたいなあ』

「妹からは嫌われているぞ、お前」

『ガーン！』

クロウの言葉に、頭に手を抱えてうなだれる大げさな表現をしてみせる束。箒は小学生のころ、愛しの一夏と別れるようになった引越しの理由である束のことが好きではないのだ。

箒Loveな束は少し残念だが、まあいずれ彼女は『自分を頼ってくる』のだ。のんびり待つとしよう。

「……………」

そんな会話をしているとき、廊下を歩く音が聞こえた。

「誰か来たようだな……………切るぞ、束」

『うん！またね！』

束は、おそらく現在世界で最も知られている人間だろう。

いい意味でも悪い意味でも有名な彼女とクロウが話しているところを見られると、色々面倒なことになりかねない。

投影ディスプレイを切って、足音がする方向を見る。

そして現れたのは、銀髪の煌めく髪を腰まで伸ばした眼帯美少女、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「おお！嫁ではないか！」

クロウの姿を認めると、パアツと顔を輝かせてトテテテと走り寄ってくる銀髪兎。クロウの近くまで来て顔を见上げる姿は、先ほどアリーナで冷徹な軍人の様子を見せた同一人物とは思えない。

ただ飼い主に懐いている兎だ。

「何かあつたのか？ラウラ」

「うむ、つい先ほど織斑　一夏を襲つてみた」

腕を組んで小さく慎ましやかな胸を、フンスとドヤ顔を見せる。何故ドヤ顔なのだろうか？

灰色の特製ISスーツを着ているので、身体の輪郭がはつきりと分かつてしまう。

スタイルは鈴と同じく幼児たいげゲブンゲブン！まだ未成熟な瑞々しい身体である。

「……………まあほどほどにしておけよ」

「……………あいつは教官の顔に泥を塗つたのだ」

プイツと顔をクロウから背けて言う。

その姿は年相応の拗ねた子供のようなであつた。

「それでも……………だ」

「むう……………」

むくれている彼女の頭に手を乗せ、優しく梳いていく。

輝く銀色の髪が、大きなクロウの指の間からサラサラと流れていく。

クロウに出会ってから少しは身なりを気にするようになったラウラだが、未だあまり興味がなく髪の手入れなども怠っているにもかかわらず、美しい髪をしている。

最初は意固地に『私は嫌だ』と拗ねた様子を見せていたが、だんだんとクロウの手に頭を押し付けようとしていたのは内緒である。



ラウラと別れて、自分の部屋へと帰路につくクロウ。

「……………むっ？」

自室の扉を開いて中に入ると、すでに帰ってきていると思っていたシャルロットがいなかった。

まあどこかで道草でも食っているのだろうと思ってベッドに腰を下ろそうとすると、

ある音が聞こえてくる。

それは水音。つまり誰かがこの部屋のシャワーを使っているということだ。考えるまでもなく、それはシャルロットである。

「シャルロットがシャワー……ほほう」

そしてろくでもないことを考えるバカ野郎がここにいた。だがしかし、この男の思うように展開が進むときもある。

「あ、帰ってきてたんだ」

シャワールームから出てきた金髪の美少女。

突入とか考えていたクロウの作戦が、いきなり破たんした。

「ふう……いい気持ちだったよお……」

クロウと向かい合うようにして、ベッドに腰掛ける。

シャワールームに突入してイチヤイチャはできなかったが、これはこれでいいものである。

金髪の綺麗な髪はあまり水分を拭き取られていないのか、しっとり湿っている。

頬は温水を浴びていたために紅潮していて、そこに髪も何本か張り付いて色気がある。

服はスポーツジャージを着ていて、前のチャックを開けているので胸の谷間が見えて

いる。

髪から垂れた水滴が頬・顎・喉・鎖骨を滑り、胸の谷間の中に消えて行つた。  
そんな風にじつと胸を見ていたので、視線に気づいたシャルロットはさらに顔を赤く  
させて、胸を腕で隠す。

「……………どこ見てるの、クロウ」

ジトオとした目で見えるシャルロット。

こんな目で見られても一切怯まない精神力は圧巻である。

「……………これ、そんなに気になるの？」

そう言つてシャルロットは、自分の胸に手を当てる。

素肌に当たっている指は、柔らかな肉に沈み込んでいる。

「うむ、気になる」

グツと指を立ててシャルロットに告げる。

こうやって欲望を普通に言えることは、ある意味凄いことである。

クロウの言葉に、顔を真っ赤にさせるシャルロット。

「じゃ、じゃあ触ってみる……………？」

その言葉でシャルロットがどうなるのか、決まってしまったのだった。





「ん……………」

ベッドに腰掛けているシャルロットの後ろに回り、腋の下から手を伸ばして胸を揉む。

柔らかな乳肉の感触がジャージ越しに手に伝わる。

乳肉を揉まれ、熱っぽい吐息を漏らす。

「あ……………んう……………」

全体をマッサージするように捏ね回され、シャルロットはもじもじと下半身を動かす。

ギュツと握つてやれば沈み込んでいくように柔らかく、下から持ち上げるようにすると程よい重量感がある。

持ち上げられた際に、乳肉がジャージからあふれ出ようとする。

「あうっ!」

ジャージの上からでも分かるくらい勃起していた乳首をクニクニと揉まれ、鋭い嬌声を上げる。

「シャルロット、直に触ってもいいか?」

「う、うん……………」

シャルロットの了解が得られたクロウは後ろから前に回り、ゆつくりとチャックを下ろしていく。

そして全て下ろし終わって上着を脱がせると、ポロンとCカップの胸が現れる。形の良い乳房で、桃色の乳首はツンと上に引つ張られている。

スタイルが非常に良いので、1カップ上のDカップの大きさにも見えてしまう。

「あつ、んっ!」

厭らしく自己主張している乳首に指を当て、プニプニとした感触を愉しむ。

コリコリと弄られたり、乳肉を揉まれたりしていると、シャルロットの身体がブルツと震える。

谷間に顔を埋めて、深呼吸をするように息を吸い込む。

鼻孔を女子特有の甘い空気が満たし、再びかいてきた汗が顔に当たる。

顔を横に逸らせると、可愛らしい乳首がある。

そこに顔を寄せていき、口から舌を出して乳輪を舐める。

「あつーん……くっ！んっ！」

乳輪を円を描くようにして舐めると、その次に乳首を乳輪ごと全部口の中に入れる。

チュウチュウと口内で吸引され、もう片方の乳首は指で捏ね回される。

必死に胸をすすする赤子のような姿のクロウに、母性本能を刺激されたシャルロットは頭に手を乗せて優しく撫でる。

その間にも、クロウは乳首をねちっこく苛める。

レロレロと舐めまわしていたと思えば、ジゅるるると大きな音を立てて乳首を吸引する。

クロウのよだれは舐めまわされた乳首や乳輪だけでなく、Cカップの乳房全体に広がっていてベトベトになってしまっている。

しかしシャルロットは汚いとは思えず、クロウに支配されているような被征服感で逆に興奮してしまう。

「んっ！ううあつ……あああつ!!」

なのでシャルロットは、胸を愛撫されただけで達してしまふ。

ビクビクと身体を痙攣させ、蕩けたような顔になる。

「胸だけでイったのか？厭らしい女だな、シャルロット」

「い、厭らしくなんか——んっ!？」

シャルロットは顔を真っ赤にさせて抗議しようとするが、途中で唇を塞がれて話せなくなる。

唇を塞いだのは、クロウの唇だった。

「んちゅ、くちゅ、ちゆるるっ」

シャルロットの口内に舌を侵入させて、絡みとって唾液を嚙り取る。

最初は恥ずかしがって逃げ回っているシャルロットだったが、だんだんと口内を犯される気持ち良さに負けて、自分からも舌を絡み合わせるようになる。

「ぶあ……………」

顔を離す。

銀色の唾液が舌や唇で橋を架けあう。

シャルロットの熱い吐息が、クロウの顔にかかる。

「……………もう、最後まで話させてよね」

「ああ、すまない」

プクウと頬を膨らませて抗議するが、クロウが気にしている様子は全くない。

反省するどころかシャルロットの着ているズボンを脱がしにかかってさえいる。

スルスルと脱がされると、秘部を覆い隠す純白の下着が露わになる。

白く柔らかい臀部をモミモミと捏ねると、下着の間からねっとりとした愛液がタラリと太ももを伝っていく。

「あつ……………」

下着越しにいきり立つた男根を秘部に押し付けられ、ほう…………と吐息を漏らす。

臀部を揉んだまま、片方の手をまた胸に持つて行ってにぎにぎと乳肉の感触を愉しむ。

「ねえ、クロウ」

そう言ってズボン越しにはつきりと形が分かるほど勃起した男根を撫で、上目づかいでクロウを見上げる。

そしてズボンをズリ下げ、男根を露出させるとポロンと一般男性のサイズを上回った逸物が飛び出すようにして現れる。

「さつきは僕のおっぱいを弄ったし、次は僕の番だよね？」

くぱあ…………と開けた口は、覗き見ると赤い綺麗な舌が見える。

唾液が舌と上あごで橋がかかるようにして伸びている。

普段は天使のような愛らしさを見せる美少女が、娼婦のような色気を纏って口淫をねだる姿に、クロウは抗うことはできなかつた。

「ん、ちゅ、ちゅる」

陰茎の根元に手を乗せ、亀頭の一歩先つぽ、鈴口を口の中に入れて啜る。

ぺちやぺちやと唾液を絡ませた赤い舌で飴を舐めるように舐める。

「あむ……もむもむ」

亀頭から口を離すと、陰囊に口を近づけてそれを口に含む。

陰茎よりも男臭さがあつて咽るような臭いが鼻を満たすが、シャルロットは不思議とそれを嫌とは思わなかった。

「ちゅぷちゅぷ、れろお」

陰囊からどんと上に上がっていき、裏筋を舌で舐める。

そうすると男根はビクビクと苦しそうに動き、今にも欲望を吐き出しそうな雰囲気になる。

「♪んんんうー！」

自分の口淫でクロウが悦んでいることが嬉しくなり、もつと奉仕したくなってくる。

その思いに素直になり、大きな男根を亀頭から飲み込んでいく。

顎が外れそうになるほどの大きさで、亀頭と陰茎少しくらいしか飲み込めない。

それでも気持ち良くなつてもらおうと、頭を動かし始める。

「にゅぷーぬぽーぬぽー！」

頭部をピストンさせて、男根を柔らかい口内で刺激する。

引き抜くときに大きなカリ首で止まって刺激し、そしてまた喉奥まで男根を埋める。  
「ぢううううううっ!!」

亀頭の部分を強く吸引すると、元々達する寸前だったので白い液体を吐き出す。

ビュルルルと激しい勢いで精液が発射され、シャルロットの口内が白濁液で埋もれていく。

「ぐくーぐくーぐくー」

それを急いでどうにかしようとして、喉を上下させて飲み干しだす。

時折思い出したかのように鈴口から精液が溢れ出す。

シャルロットがうまく飲めなかった分の精液が、口から溢れて顎に伝う。

喉奥まで入れていた男根をゆっくりと吐き出していき、亀頭の部分で尿道に残っている精液も逃がさないとちゆるるる、と吸い出す。

「ちゅぽっ」

プリプリで濃い精液が、ゼリーみたいに感じる。

男根から口を離れたシャルロットは、指についた精液も飲もうと舐める。

その際に赤い舌が口から出てきて、そこに白い汚液がかかっているのは非常に淫靡だ。

「ふふ……喉に絡みつくな………」

精液の味を楽しむように口内で転がし、こくりと喉を鳴らして胃に収める。

「口から少し精液が垂れていて微笑む姿に、クロウはドキリと胸が高鳴ったのを感じた。」

「シャルロット、いいか？」

「う、うん……………」

シャルロットの了承を得たクロウは、純白の下着をズリ下ろす。

形の良い尻尻がクロウに差し出すようにされ、濡れた秘部やキュツと閉まった尻穴まで見える。

尻を掴むと、汗でしっとり濡れた肌が手に吸い付いてくる。

親指で秘裂を広げてやると、赤く充血した秘肉がある。

そこに一度射精しても全く衰えない男根を持つて行き、亀頭を秘裂にこすり付ける。

愛液と我慢汁でニチャニチャと厭らしい音が響く。

そして十分男根が濡れると、一気に膣内に挿入した。

「ああっ!!」

秘肉をかき分け、一気に子宮口まで押し上げる。

圧迫感と快感で、目の端に涙を溜める。

クロウの巨根を何度も受け入れてきたにも関わらず、性器は緩んだとかそんなことは



全くなく、みちみちと男根を締め付ける。

「あっ！あっ！はげっ………しいいっ!!」

後背位からガンガンと突かれて、強い快楽を送り込まれる。

ズン！ズン！と秘肉をかき分け、抉るように打ち込まれる男根にただ翻弄されるシャルロット。

まるで童貞のように我武者羅に腰を打ちつける。

そしてシャルロットの秘部は名器で、うねるように男根を刺激する。

「くっ」

そんな名器にクロウも長く耐えることができず、早くも射精してしまう。

「あああああっ!!」

ドクドクと熱い液体が膣内に吐き出され、子宮内を犯していく。

膣内射精される何とも言えない快感に、ガクガクと身体を震わせる。

「——ッ!!」

だがクロウの男根はあれほどの精液を吐き出したのにも関わらず、未だいきり立ったままであった。

そしてまたピストン運動を開始されて、驚きの表情を浮かべるシャルロット。

「あっ！はっ！うあっ!!」

男根が秘部に出し入れされるたびに、膣内から汚液が溢れ出してくる。背後から腕を回し、Cカップ乳房をぶにぶにと揉む。

激しく突かれているので、子宮内に溜まった精液が動き回り泡立つ。

「あぁっ！ひいっ！あっ！あっ！あっ！！」

後背位から肉付きの良い太ももを掴んで脚を上げさせ、シャルロットを横向きに寝かせて突く。

そこから脚をまた動かせて、正常位にさせて腰を打ちつける。

程よい大きさの乳房に顔を埋めて、乳首を動物のように舐める。

「可愛いぞ、シャルロット」

クロウは熱く火照っている頬に手を当て、すりすりとなでながら言う。

するとシャルロットの顔がさらに蕩けたようになり、膣圧がギュツと増した。

「こんな時に言うなんて、ズルいよう……………」

そう言ってシャルロットは、自分からクロウの唇に吸い付いた。

シャルロットの舌がクロウに捕まり、唇でジュルジュルと扱かれる。

「ふぁぁぁっ！イクツ！イチっちゃうよぉおっ！！」

今までより一段と強く突かれて、激しく喘ぐ。

愛液の量がさらに増し、男根を濡らしていく。

顔も赤く染まり、瞳には淫靡な色が宿っていた。

そんな顔をクロウに見せたくないのか、シャルロットは両腕で自分の顔を隠す。

「あつ……………？」

しかしクロウが両腕の手首を掴んで上に上げたため、淫猥な表情がクロウにさらけ出される。

「あつ！あつ！んっ！あつ！！」

ズパン！ズパン！と激しく肉がぶつかり合う音が響き渡り、巨大な逸物がシャルロットの膣内を犯しまくる。

形の整っている乳房がプルンプルンと上下運動する。

「うあああああつ！！」

そしてまた吐き出される精液。

どこにこれほど溜まっていたのかと思うくらい、多量の精液が噴出される。

だがクロウはまだ男根を抜かず、腰を動かし始める。

「あつ！んっ！ふうっ！！」

ツンと立っている乳首にむしゃぶりつき、猿のように腰を動かす。

片方の乳房はプルンプルンと柔らかそうに揺れている。

膣内に射精された精液と分泌された愛液が混ざりあい、膣外へと垂れ流れていく。

「あっ…あっ…いつ…ひいつ!!」

むぎゆう…と強く乳房を驚掴みにする。

クロウの大きな手の間から、乳房が厭らしく顔を出す。

唇を重ね合わせて、お互いの口内を犯していく。

「ああっ…イク…イクツ…ああああああっ!!」

最後…：…本当に最後の精液が膣内に流し込まれる。

先ほどまでの射精の勢いはなく、いつもより精液も少なかつた。

まあそれでも一般男性の射精量と遜色ないのだが…：…

シャルロットはそれを蕩けた表情で受け入れるのだつた。

## 英中独模擬戦争（笑）起キル

「んちゅ、じゅる、じゅるるっ」

クロウとシャルロットの部屋で、何かをすすする音がする。

ベッドの上に目をやると、そこには全裸でクロウの股間に顔を寄せている金髪の美少女がいた。

彼女は勿論シャルロットであり、今は所謂お掃除フェラをしているのである。

「ぶえ……クロウのこゝ、まだ元気なままだね………」

あれほど出したにも関わらず、未だいきり立っている男根。

その巨大な逸物を口に全部含むのは難しいので、龟头だけを口に含んだり陰茎をハモニカを吹くようにして啜えたりして掃除している。

時折ビクンと震えるそれは、厭らしくも逞しく感じる。

「ならまたお前で静めてくれるか？」

「え、ええ……ダメでしょう」

拒否の言葉を紡ぐシャルロットだが、顔は嬉しそうにしていままったく説得力がない。

頬に手を当ててくねくねと、整ったスタイルの身体を曲げる。

そしてシャルロットは四つん這いになり、形の良い尻をクロウに捧げるように持ち上げる。

「よし……いくぞ？」

「うんっ♪」

亀頭が秘裂に触れようとした瞬間。

—— コンコンコン

「ッ!!」

扉がノックされる音がして、シャルロットの肩がビクンと撥ねる。

こんな時でもまったく動揺していないクロウ。慣れているのだろうか？

「誰だ？」

『あ、クロウさん？わたくし、セシリアですわ』

ピシツと石の彫刻のように固まってしまったシャルロットに代わり、クロウが応答する。

扉の前にいるのはセシリアで、食堂に中々来ないクロウをわざわざ誘いに来たのだ。

しかし部屋の中ではクロウとシャルロットは全裸であり、今すぐ出ていけるような恰好ではなかった。

『?クロウさん?失礼しますわよ?』

返事に詰まっていると、不審に思ったセシリアが扉を開けようとする。

不運にもこの時鍵は締めておらず、誰でも入ることができていた。

「わあああつ!?!ど、どうしようクロウ!」

先ほどまでの淫靡な笑顔は吹っ飛び、今はあわあわと慌てるだけだ。

「(……………諦める)」

「(諦められないよ!?)」

小声で会話する二人。

まだ学園内ではシャルロットは男として認識されている。『まだ』ばれるわけにはいかない。

しかし全裸ではCカップの胸や括れた腰、形のいいお尻などですぐに性別がばれてしまう。

シャルロットがとった行動とは――

「クロウさ――な、何で上半身裸なんですの!？」

セシリアが部屋に入って見たのは、布団で下半身まで隠して上半身を露出させているクロウの姿だった。

鍛え上げられた身体を見て、セシリアは顔をカアツと紅潮させる。

「で、何の用だ？」

「は、はい……お食事でも一緒にどうかと思ひまして……」

さて、シャルロットがどこにいるかだが、彼女はクロウがかけている布団の中に縮こまっていた。

「ば、ばれないよね……?」

全裸で所々精液が引っ付いている女らしい魅力的な肢体。見つければ言い訳の仕様がな

ない。だがシャルロットの身長が154cmと小柄であり、セシリアがクロウの体を盗み見ることに熱中しているおかげで気づかれていない様子はなかった。

「あ……目の前に……」

シャルロットが低く低く体制を維持していると、目の前に萎えてしまっている男根があった。



自分以外の女子生徒と話しているクロウを見て、少しいじわるしたくなったシャルロットはそれを口に含んだ。

「むっ……………」

「?どうかなさいましたか?」

「いや、なんでもない」

一瞬ピクリと眉を顰めるが、すぐにまた無表情に戻った。精神力の高さは本当に目を見張るものがある。

対して布団の中のシャルロットは、男根が今は小さいので全て口内に含ませていた。音を立てないように、口内で舌を動かさせて男根を舐めまくる。

「……………セシリア、今から着替えるから外で待つてもらえないか?」

「は、はい、大丈夫ですわ」

セシリアは頬を赤らめたまま、扉を閉めて外に出る。

そしてそれと同時にシャルロットの口内で、精液がはじけた。

バサツと布団を退けると、精液を味わうように口内で転がして飲み込んでいつているシャルロットの姿が。

「えへへ、御馳走様?」

「可愛く言ってもダメだ」

「あうっ」

◆  
「すまないな、待たせた」

「ええ、本当ですわ。女性を待たせることはいけませんわよ？」

部屋からガチャリと音を立てて現れたクロウ。

クロウの謝罪を、セシリアは冗談交じりで返す。

シャルロットは部屋に置いていくことにした。

クロウはまだ誤魔化せるのだが、身体中に精液がぶっかけられたシャルロットがセシリアの前に出ると、匂いではれるかもしれないからだ。

今頃は部屋でシャワーでも浴びているだろう。

「じゃあ参りましょう」

そう言うとセシリアは鼻歌交じりにクロウの腕を取り、自身の腕を絡める。引き寄せられた腕に、Dカップの柔らかな胸が当たる。

その状態で、食堂に向かって歩き出す。

大柄な体型のクロウと、意外と小柄で156cmのセシリアではまるで美女と野獣である。

まあクロウもそこまで酷い顔をしているのではないが……………。

「あれ？クロウ達も今からメシか？」

「あら、織斑さんに篠ノ之さん……………」

食堂に行く途中でぼったりと出くわしたのは、一夏と箒だった。

2人仲良く食堂に向かっていているようだ。

「奇遇ですわね」

「ああ、そうだな。一緒に行こうぜ」

クスクスと微笑みながら話すセシリア。

箒はセシリアの腕に注目した。

クロウと親しげに絡み合わされた腕。

自分ではできないほど密着した体制になっている。

しかし、一夏とこんなことをしてみたいと思うので、頑張つて実行してみようとする。

「い、一夏。その……腕を組んでもいいか？」

「え？なんだって？」

「……………」

箒の恥辱を我慢した必死の懇願は、どうやら鈍感には届かなかったようである。シユンと落ち込んだ箒に、何でだろうと首を傾げる一夏。

そんな二人を見て、セシリアは苦笑してしまう。

その後は落ち込む箒をなだめつつ、四人で食堂に向かって行ったのだった。



「シャルロット、ご飯はいるか？」

帰宅早々、ベッドでゴロンゴロンとくつろいでいたシャルロットに声をかける。

クロウの手には定食が一つあり、どうやらシャルロットのために持ってきたようだ。

「あ、持ってきてくれたの？ありがとうございます、クロウ」

そう言つてニッコリと微笑むシャルロット。

クロウが持ってきたのは洋食定食であり、今日はハンバーグなどが皿に飾られている。

「もしかして、僕がお箸を使えないってこと知つていてこうしてくれたのかな？」

シャルロットはシャルワールームに消えて行つたクロウを思つて考える。

心がほっこりと暖かくなつた気がした。



翌日の朝、一年一組のみならず、学園全体を騒がせていた噂が流れていた。

その噂は、学園別トーナメントで優勝すれば、織斑 一夏かシャルル・デュノア、そしてクロウ・ミキストリの誰かと付き合うことができるといったものだった。

この噂の原因は、意外や意外筈であつた。

彼女は以前、一夏に優勝したら付き合えと廊下で大声を出して話してしまつたのである。

多分誰か女子生徒が聞いていて、噂好きな女子生徒たちの間を形を変えて伝わって行つたのだろう。

そして心中穏やかではないのは、筈だけではなかつた。

「(なんですか、この噂はっ!?)」

「(えへへ、クーと恋人〜)」

「(これってチャンスじゃない?)」

「(……クロウ)」

IS学園第一学年のそうそうたる少女たちが、好機ととらえ危機ととらえる。

ちなみにこの噂がIS学園中に広がっているころ、どこかの『研究所』で狂つた兎の目のハイライトが消えていたとかなんとか………。



「はあ……はあ……。あんた、やるじゃない……」

「そ、それはどうも、ですわ」

アリーナで対峙する『蒼い雫』と『甲龍』。

操縦者であるセシリアと鈴は、息を整えながら会話する。

クロウと恋人になれるという噂を聞き、彼女らは優勝するために特訓をしていた。

もうすでに恋人のような関係なのだが、ここで勝っておけば優越感とアドバンテージが得られる。

そこでアリーナに来た二人だが、ちやうど鉢合わせをしてしまう。

真耶と戦う際の共闘で両者ともに実力が均衡していると知った二人は、特訓相手としてそれぞれを選んだのだ。

現在二人は簡単な模擬戦闘を行っており、エネルギーの減りもほぼ同じくらいである。

「さあ、次で決めるわよ！」

「それはこっちのセリフですわ！」

鈴が双天牙月を振りかざして襲い掛かり、セシリアは後ろに移動しながらスターライトmkIIIを構えた。

しかしその時、セシリアと鈴に一発ずつ実弾が発射された。

「はあっ！」

「ふっ！」

だが流石世界列強国の代表候補生。セシリアは飛んでくる銃弾をレーザーで狙撃し、鈴は双天牙月で叩き落とす。

セシリアと鈴が撃ったであろう人間がいるところを睨みつける。

そこにはドイツ第三世代機『シュヴァルトツェア・レドゲン黒い雨』を纏った銀髪紅眼の美少女、ラウラ・ポー

デヴィツヒがいた。

「ちよつと……なんのマネ？」

「いきなり攻撃してくるとは驚きましたわ」

ムスツとした表情で言う鈴と、困ったように苦笑するセシリア。

いきなり攻撃されても余裕を見せ、おおらかな態度で接する二人。

だがISのモードを着々と戦闘状態へと移行していった。戦意を見せないのも、賢い戦い方の一つである。

「なに、私も噂を聞いてな。模擬戦に混ぜてもらおうと思ったのだ」



「……………え？それだけ？」

ラウラのあまりにも下手な誘い方に、本当にポカーンとしてしまう鈴。腹の中で蓋を閉めていた戦意が台無しだ。

セシリアも本当に苦笑して、なんだかコミュニケーションの取り方が下手な妹を見ているような感じになる。

「まあもうあいつは私の嫁だから、恋人とかはいらんのだがな。一応もらっておこうというわけだ」

しかし腰に手を当てて言った言葉に、セシリアと鈴がピシツと固まる。

だがここで怒っても意味がない。心を静めようと頑張っている。

「よ、嫁って…………クロウは男よ？お嫁さんにはなれないわ」

ヒクヒクと頬を引きつらせながら言う鈴。

「それは知っている。部下に、日本では気に入った相手を『嫁』と呼ぶ風習があるらしいからな。それに習っているのだ」

少し昔のオタクがよく言っていました。

しかし日本の少女マンガに興味津々な特殊部隊副隊長とはどうなのだろうか。

「そ、それに将来は私が花嫁になるのだしな。一番最初に」

照れて頬を紅潮させながら言うラウラ。

しかしセシリアと鈴は、最後にボソリと言った言葉を聞き逃さなかった。

「はあ？あんた何言ってるのよ。そんなのあたしに決まってるじゃない」

「あらあら、おチビさんたちお二人はなにを仰っているのかしら」

「何だと……………」

三者それぞれの欲望がぶつかり合う。

英国の美しい淑女。

中華の可愛らしい少女。

独逸の黒兔軍人。

強大な力を持つ三者が、今ここで三つ巴の戦闘を開始した。



「で、その結果がこれか」

『……………』

常時無表情のクロウだが、どこか苦笑しているような雰囲気を感じられる。それは目の前で仏頂面のままそっぽを向いている三人の少女が理由だった。所々包帯が巻かれてあったり、湿布が張られてあったりする。

あの三者三様の宣戦布告の後、とてつもなく激しい戦闘が開始された。

その戦闘は凄まじく、アリーナ内がボロボロになった。

それを見かねた千冬が、ISを装備せず三人とも叩きのめしたので。

今彼女たちに施されている治療は、八割が叩きのめされたことが原因である。

「何が原因なのさ？」

「そ、それは……………」

「その……………」

クロウに聞かれて、セシリアと鈴は顔を真っ赤にさせる。

流石にクロウの恋人を巡ってマジバトルをした結果とは言いづらい。というか恥ずかしい。

だがしかし、そういう羞恥心が少し欠けている鬼がいた。

「うむ、実はお前のこ——」

「わあああっ!!」

「む？こ……なんだ？」

「何でもありませんわ!!」

ベッドに座ったまま、赤裸々に話そうとしたラウラの口を塞ぐ鈴とセシリア。

これで何となく察したシャルロットは、苦笑するしかない。

ちなみに彼女も現場にいたら、戦闘に参加していたのは必至である。

「?何かな、この地響き？」

シャルロットがコテンと小首を傾げる。

ドドドドドと地響きが聞こえてくるのだ。それもだんだんと近づいてきているような気がする。

そして次の瞬間——保健室の扉が吹き飛んだ。

「きゃあつ!!」

「な、何なの!!」

「敵かつ!!」

ベッドの上で動けなかった三人は、それぞれの反応を見せる。

セシリアは悲鳴を上げ、鈴は戸惑い、ラウラはその場で即時に戦闘状態に入った。

話していないシャルロットはポカンと口を開けて呆け、クロウは相変わらずの無表情だった。

「ミキストリ君、デユノア君!!」

保健室に飛び込むように入ってきたのは、第一学年（主に一組）の女子生徒だった。それぞれ目を血走らせているので、シャルロットは軽く涙目である。

どうしたのかとクロウが聞くと、生徒の一人が紙を突き出してきた。

これによると、前回の I S 襲撃を考慮して二人一組となつて学年別トーナメントを行うらしい。

そこで女子生徒たちは、数少ない男子生徒に近づこうとペアを申込みに来たのだ。

ちなみに一夏も襲撃を受けて、一組の相川という女子と組まされたらしい。

モツピーが悔しがっているのが目に浮かぶ。

「あ、あのー!」

シャルロットが声を上げ、皆そちらを向く。

目を血走らせてギョロリとシャルロットを見る姿は、B級のホラー映画のようだ。

「ぼ、僕はクロウと組むことになってるんだ。ごめんね」

シャルロットの言葉に、女子生徒たちは『まあしょうがないか』といった空気になつてくる。

彼女たちの認識ではシャルロットは男なので、腐ってしまったている女子生徒たちはすぐに引き下がった。

結局皆名残惜しそうにしながらも、保健室から出て行つた。

だが納得できないのが、ここにいる三人である。

「待ちなさいよ！あたしを選んだ方がいいと思うわ」

「そうですわね、わたくしを選んだ方がいいですわね」

言い終わると同時に、睨み合う鈴とセシリア。

プライドが高いところなどが良く似ている。

「う〜ん……それは難しいと思いますよ〜」

そう言つて保健室に入つてきたのは、緑髪眼鏡巨乳っ娘、山田 真耶だった。

彼女はそれそんな眼鏡をくいと持ち上げながら、手元にある資料を見る。

「凰さんとオルコットさんのISを調べましたが、ダメージレベルがCを越えています。トーナメントに出ても、機体が持ちませんよ？」

「むう……………」

どうやら三つ巴の戦いで、とてつもないダメージを受けていたようだ。

千冬に止められる直前は、三人ともシールドエネルギーが雀の涙ほどしかなかったのもうなずける。

「ボーデヴィツヒさんはどうなのですか？先ほど名前を呼ばれていませんでしたが……………」

「ボーデヴィツヒさんの機体も大きなダメージがありました。トーナメントまでしつかりと休ませてあげれば戦闘は可能です。ボーデヴィツヒさんは出れますよ」

真耶の言葉にラウラは小さくガッツポーズし、鈴とセシリアはちつと舌打ちする。

本当ならそんなダメージなど気にせずに参加したいのだが、自分たちは大国の代表候補生。国に泥を塗るようなまねはできない。

それにそんな状態でクロウのペアになれたとしても、足手まといになるだけである。

そんなことから鈴とセシリアは真耶の言葉を素直に受け入れたのだった。

「よし、嫁。私のペアになれ」

「すまん。もうシャルロ……シャルルに決まっているからな。他を当たってくれ」

「(ガーン)」



「ごめんね、クロウ」

部屋に戻ってシャルロットの第一声は、クロウへの謝罪だった。

彼女は勝手にクロウとペアを組んだことを謝っているようだ。

「なに、気にするな。私もお前と組めて嬉しいぞ」

「そ、そう。ありがとう」

クロウの言葉に頬を赤らめて返事する。

実際シャルロットはその性格ゆえに共闘に向いており、他人の戦い方に合わせる事ができる。

それに戦闘技術も申し分なく、世界の代表候補生の中でも上位に属するだろう。

そんな彼女は足手まといにはならないし、容姿もクロウ好みである。

「む……制服をまだ着替えていなかったな」

「そうだね、着替えようか」

そうは言うが、この部屋にいるのは年頃の（片方だけ）男女である。

そんな二人が同じ場所で着替えるなど、問題がありまくりだ。

普通の男なら、気を遣ってどこかへ移動したり見ないようにするだろう。

しかしクロウはガン見である。

「く、クロウ？そんなに見られると恥ずかしいよ……………」



「む？お前の身体に恥ずかしいところなどないぞ？」

「そういう意味じゃないよ……………」

白い頬を愛らしく赤に染めるシャルロット。

そして次の瞬間、彼女は爆弾発言をする。

「そ、そんなに見たいんだったら、僕の着替え手伝ってくれる……………」

「任せろ」

これからどうなるかは、もう察してほしい。



「もう……………ダメだよ……………」

インナー越しに、彼女の乳房をすりすりと撫でる。

形の良い乳房がむにゆりと形を変える。

口では嫌がっているようなシャルロットだが、表情はどこか期待しているような気がした。

「ひゃっ!？」

インナーを上にかくし上げられる。

大きく見えるCカップの乳房が、水色と白の縞々下着に覆われている。

その乳房を、ブラジャーごと揉みしだく。

ぶにぶにと乳肉の感触を愉しみ、自由自在に動かせて目でも愉しむ。

開けるように乳房をぐにいと引つ張ると、柔らかかそうに形を変える。

「んっ」

ブラジャーを下にぐいと引つ張ると、乳房がプルンと飛び出してくる。

乳房同士が当たり、肉が叩かれた音がする。

ブラジャーを取り外して生で揉まれていくと、シャルロットの息がどんどん荒くなつていく。

眉を切なそうに寄せ、目には水滴が溜まりだす。

乳房の先端にある桃色の乳首も勃起している。

乳首に指をそつと乗せると、シャルロットの身体がピクンと動く。

「んっ……あつ」

指を動かすと、乳首がくにくにと動き回る。

それを数十秒か続けていると、乳首の勃起の長さが大きくなった。

吐息もさらに荒くなり、乳房からは汗がにじみ出していた。

恥ずかしかがって極力声を出さないようにするシャルロット。

その頑張りを止めさせるように、耳をペロペロと舐めだす。

「あっ！んんっ！ああっ!!」

そして乳首を指で摘ままれてコリコリと動かされると、とうとう我慢できなくなつて嬌声を上げる。

クロウは背後から乳首を愛撫しながら、耳穴に舌を侵入させる。

シャルロットの身体はビクビクと反応し、下は下着が濡れてしまっていた。

「ん、レロ……ちゅっ」

前面に回ったクロウは、シャルロットの口にキスを落とす。

ぬちやぬちやと舌に濡らせた唾液を絡ませ合う。

キスの最中も、Cカップの乳房をぶにゅぶにゅと揉んでいた。

「ぬちゅ、くちゅ、んっ……あうっ」

クロウはキスを続行しながらも手を下に持つて行き、程よい肉付きの太ももを撫でる。

そしてぐちよぐちよに濡れた下着越しに、秘部を指で愛撫する。

シャルロットは手をクロウの胸に当てて、積極的に舌を絡ませだす。

下着を下にずらすと、秘部から垂れたねばつとした愛液が橋を架ける。

愛液は色白なお尻もベトベトに濡らしていた。

クロウが口を離すと、シャルロットの顔はすでに出来上がっており、目からは涙がこぼれていた。

クロウが秘部に顔を寄せると、愛液でねっとりとなった秘部が男根を今か今かと待ちわびていた。

すでにトロトロ口に濡れそぼっていたので、前戯はいらないと判断したクロウは男根を秘部に沈めて行った。

「んんんんっ!!」

ビクンビクンとシャルロットの小さな身体が激しく震える。

ドロドロだった秘部は抵抗なく男根を受け入れ、隙間がないくらいにフィットする。

シャルロットは口からはあ……と熱い吐息を漏らす。

「ん、ふうっ！くうっ!!」

ズプ！ズプ！と腰を動かし始める。

乳房をぶにゅぶにゅと揉むと、乳首がピクピクと反応する。

男根を引き抜くときには、離れないでと言わんばかりにギユウギユウと締め付ける。  
「ひいつ!!」

腰を打ちつけながら乳首をギユウウウつと潰してやると、首をグイツと反らせる。  
愛液の分泌量も増えたみたいで、水音がさらに大きくなつたように感じる。

「んあああああつ!!」

二つの乳房を掴んで乳首を寄せると、二つ一気に舐めだした。  
目の中でパチパチと電気が走る。

「あああああつ!んんんうつ!ああつ!!」

片方の乳首を吸い、片方は指でクリクリと弄る。

シャルロットはどうやら乳首に弱いらしく、膣内がギユウギユウと男根が折れるくらい締め付ける。

愛液も突かれるたびに吹き出し、尻だけでなく太ももにまで飛んでいた。

「うううつ!イク!イク!!」

パン!パン!と形の良い臀部に腰が打ちつけられ、卑猥な音が出る。

口の端からよだれを垂らして快楽に酔う。

「あああああああつ!!」

そして盛大に絶頂するシャルロット。

クロウも同時に達し、膣内に精液を注ぎ込む。

しつとりと汗に濡れた乳房を掴み、シャルロットはその腕をキュツと握る。

この後も厭らしい行為は続き、日が変わるまで何度も何度も膣内に射精されたシャルロットであった。

## 大会ハ早期終結ス

「うわ……いっぱい人がいるな………」

アリーナの更衣室で、モニターを見ながら感想を言う一夏。

今日は学年別トーナメントであるツーマンセルトーナメントの当日である。

IS学園第一学年が全員ISスーツに着替えるため、皆更衣室に入っているのだ。

男——1人は違うが——は三人しかいないので、更衣室もガラガラである。

しかし女子生徒たちの使用する更衣室はかなりの密集度だろう。

熱い熱気が更衣室を見たし、うら若き少女たちの肌に汗を濡らす。

「……………」

少し行ってみたくなくなったクロウであった。

「まあ今日は色々な国から人が来ているからね」

一夏にシヤルロットがそう言う。

今日は招待された色々な人間が集っているのだ。

政府関係者は自国の人間にどれだけの人材がいるか。

研究者はまだ解明されていない I S の秘密に迫るために。

企業家は自社が開発した I S や武器の性能を見るために。

軍関係者は他国にどのような I S が配備されているのか。

それぞれの思惑を持って、この I S 学園に集っているのだ。

それに第一学年は、現在世界で最も注目されているのだ。

何故なら、現時点で専用機持ちがなんと六人もいるからだ。

二年生で二人、三年生で一人しかいないのに、これは異常である。

さらに世界列強国であるイギリス、中国、フランス、ドイツが送り込んでいるので、それを見るために先進国の諸国が集まっているのだ。

と言つても今回は『ある事故』により、イギリスと中国の代表候補生は参加しないよ  
うだが……………。

「それに君とクロウがいるからね」

代表候補生よりも注目されている存在。



それが世界で二人しかいない男のIS操縦者である、一夏とクロウである。どのような原理でISを動かしているのか、二人の遺伝子情報を得ようと画策している者もいるだろう。

そう聞いて一夏は顔をサアアと青くする。

「そういえば一夏はパートナーとうまくいっているの?」

「ああ、あんまり時間がなかったから完璧とは言えないけど、それなりに連携はうまくいっていたぜ」

彼のパートナー、相川 清香はハンドボール部に所属しており、趣味もスポーツ観戦とジョギングと活発な女子生徒である。

運動能力も高く、IS機動も筋がいいようだ。

「あ、決まったようだね」

観客席を移していたモニターが、トーナメント表へと移り変わる。

そしてクロウの対戦相手は——ラウラ・箒ペアだった。



「まさか第一戦目でお前と当たるとはな」

「私も驚いているぞ」

専用機に身を包んだクロウとラウラが対峙しながら会話する。隣にはそれぞれのペアであるシャルロットと箒が立っている。

「私をペアに選ばなかったこと……後悔させてやるぞ、嫁よ」

「ふむ、楽しみだ」

試合開始のブザーが鳴り、第一戦目が開始された。

威勢にいいことを言ったラウラだったが、襲ってこない。

「おおおおおっ!!」

襲ってきたのは、ペアの方である篠ノ之 箒だった。

近接ブレードを振りかざし、クロウに斬りかかった。

それを空間を歪ませて出現させた無骨な西洋剣で受けとめる。

ラウラはこの間に少し下がっていたことから、どうやら今回は後衛に回るらしい。

剣を押し合って膠着しているクロウに、ラウラはワイヤーブレードを二つ発射する。

「させないよっ！」

そのワイヤーブレードを銃を二丁コールしたシャルロットが、銃弾を当てて軌道を変えさせる。

その間に箒がバツと後退移動し、睨み合う。

「助かったぞ、シャルロット」

「えへへ、背中任せといて」

嬉しそうに微笑みながら言うシャルロット。

彼女の戦い方は、基本的には色々な銃器を使った後方からの支援攻撃である。

といつても近接格闘もかなりのものなので油断できない。

敵であるラウラも遠距離中距離の装備が多いので、後方支援についたのだろう。

逆に箒は射撃などの技術は全くないが、近接格闘においてはこの学園の全学年でも――

―― 勿論専用機持ちは例外―― かなり上位に食い込む。

クロウは近・中・遠距離すべてに対応できる戦闘のプロである。

「来ないのならこちらから行くぞー！」

箒がISを動かしてクロウに襲い掛かった。

それをまたクロウが剣で受け止め、ラウラがクロウを攻撃しようとする――

「何度も同じのやっていると、観客が怒っちゃおうよ？」

シャルロットがラウラに向かって発砲。

ラウラはそれを避けるため、クロウに攻撃ができなくなってしまうた。

「いいだろう、まずはお前から倒す」

こうしてクロウ v s . 箒、シャルロット v s . ラウラと一騎打ちの対決が二つ出来上がったのだった。

「はああああっ!!」

箒が凄まじい斬撃を繰り返し、クロウを切り裂かんとする。

しかしクロウは顔一つ変えることなく、涼しい表情でそれを受け止める。

そして問題が一つ。

——クロウはまだ一度も攻撃していないのだ。

「くっ！貴様、私を侮辱しているのか!? 何故攻撃しない!?!」

クロウに刀を振り下ろしながら、激昂する箒。

「ふむ……ならば攻撃しようか」

「ぐうっ!?!」

そう言つて、西洋剣を薙ぎ払う。

箒はそれを近接ブレードで受け止めるが、凄まじい衝撃に距離を取る。

斬撃は非常に重く、手がビリビリと痺れていた。

「ただだぞ」

「くっ……おとおっ!!」

休む暇も与えずに襲い来るクロウを迎え撃つ。

一方シャルロットとラウラの戦いは均衡していた。

それぞれが遠距離から射撃し、ペアを援護しようとするれば妨害される。

「罅が明かないな………」

ボソツと呟いたラウラは、左目につけていた眼帯を外す。

その瞳は金色の輝いており、右目の紅眼とオツドアイだった。

それはI S用補佐ナノマシンで『<sup>オー</sup>ヴォ<sup>ディ</sup>ダン・<sup>ン</sup>オー<sup>ン</sup>ジエ』と呼ばれる疑似ハイパーセ

ンサーである。

ドイツ軍最強のI S配備特殊部隊であるシュヴァルツェ・ハーゼ、通称黒ウサギ隊隊

員が全員瞳に移植されている。

シュヴァルツェ・ハーゼの隊長として、当然ラウラも移植されてある。

このナノマシンのせいでラウラは部隊でも出来損ないと言われた故に嫌っていたの

だが、クロウとの出会いでそれもなくなった。

「行くぞ」

「ッ!？」

ラウラは素早い動きで、シャルロットに接近してくる。近接戦を挑むようだ。

近づけまいとマシンガンで弾幕を張るが、ラウラは高度な機動でそれに一切当たらない。

ヴォーダン・オージェには脳への信号速度の高速化などの効果があるのだ。

シャルロットは近接ブレード『ブレード・スライサー』をコールして、ラウラが手首から出現させたプラズマ手刀と切り結ぶ。

だが切り結んだ瞬間、シャルロットはショットガンをコールさせて至近距離からラウラに発砲した。

飛び散った銃弾の何発かがラウラに当たり、シールドエネルギーを減らす。

しかし当たったところはどこも腕など、致命傷にはなりえない場所だった。

あの距離でこれだけの被害で済ませることができるラウラは、間違いなく強者である。

「ははっ、中々危なかったな。貴様のコールするスピードは凄まじいな」

「まあ僕の十八番だからね」

練度の高いIS操縦者でも、武器をコールするには一秒はかかる。

しかしシャルロットはそれ以下の時間で出現させ、さらに構えも取っているのである。

それはシャルロットの専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムIIが拡張領域が非常に広いことのできる『高速切替』ラピッドスイッチである。

それに彼女の戦い方も厄介である。

『砂漠の逃げ水』と呼ばれるその戦い方は、近距離戦闘を行っていたかと思えば次の瞬間には距離を取られて遠い場所から射撃する。

攻防ともにバランスが取れた非常に安定する戦闘スタイルである。

「私も負けてられないな」

そう言ってラウラは前に手をかざす。

するとシャルロットの身体がピクリとも動けなくなる。

その間に、プラズマ手刀で身体を切り裂かれる。

「(なっ?!もしかしてこれって……………!)」

シャルロットはこの能力に覚えがあった。

ドイツの第三代機特殊武装兵器である、『慣性停止結界』Aだ。

この能力は対象を任意で完全に停止することができるという兵器である。

彼女もこれで動きを止められているのだ。

そしてもう一度ラウラが切りつけようとした瞬間。

「ぐっ!?!」

一本の剣が飛来し、ラウラに着弾した。

集中が途切れたことでシャルロットを拘束していた停止結界は解除され、自由の身になる。

「無事か？シャルロット」

「クロウ……ありがとう、助かったよ」

シャルロットの近くに来るクロウ。

どうやら先ほどの剣は彼が射出した物だったらしい。

今の一撃で、ラウラのシールドエネルギーは大幅に削られた。

「くっ……やっつけてくれるな、嫁」

「弱い男は好かないだろう？」

「当然だ。私の嫁が弱いなんてことはあってはならない」

不敵に笑いながら言うラウラ。

だが勝敗は明らかであった。

箒もまだ戦えるとはいえ、クロウによって大半のシールドエネルギーが奪われている。

最早二人は満身創痍なのだ。

しかし二人はあきらめない。



『(嫁)(一夏)の恋人になるのは、この私だ!!』  
欲望にまみれた思考を持って、クロウとシャルロットに突撃した。



結局あの試合はクロウとシャルロットの勝利に終わった。

トーナメントは順調に進んでいき、決勝で会った二組はクロウとシャルロットチームと、一夏&相川チームだった。

他の一年代表候補生の簪は本音と組んで参加したのだが、準決勝でクロウたちとぶつかって敗退した。

優勝したチームはクロウとシャルロットだった。

一夏と相川も奮戦したのだが、やはりリアルチートのクロウとフランス代表候補生のシャルロットには経験と知識が圧倒的に足りなかったのだ。

「あ、ここにいたんですね、三人とも」

大会も終わり、食堂でのんびりとした時間を過ごしていたクロウとシャルロットに話しかける真耶。

ちなみに一夏は地面にキスをしている状態になっている。

箒の付き合ってくれというのを、買い物に付き合ってくれと勘違いしていたのだ。

………普通はこんな勘違いはありえないのだが。

それに激怒した箒が鋭い一撃を、鳩尾に叩き込んだのだ。

「どうかしたんですか？」

「はい、今日から男子も大浴場が解禁ですよ！」

「マジですか!？」

コテンと小首を傾げて聞くシャルロットに、むふつと可愛らしいドヤ顔を決めながら言う真耶。

真耶の言葉に一番食いついたのが、先ほどまで地に伏していた一夏だった。

彼は日本人らしく……と言うのもなんだが、お風呂が大好き少年である。

それに対して表情が固まったのが、金髪の貴公子で通っているシャルロットである。

クロウは事情を知っているから構わない——厳密に言う構う——のだが、一夏は一切知らないのだ。

それに裸をクロウ以外の男に見せるのも嫌だ。

そんな中でも、相変わらざるの無表情なクロウである。

「クロウ！ シャルル！ 早く行こうぜっ！」

「よく頑張ったな、真耶」

「えへへ〜♪」

駆け出す格好でクロウとシャルロットを誘う一夏だが、誘った相手が教師の頭を撫でてイチャついていた。

真耶も気持ちよさそうにしているのはどうなのだろうか。

「ぼ、僕は今日は遠慮しておくよ。個室のシャワーを使うね？」

「え〜……もつたいなあ………」

「あはは、ごめんね？」

シャルロットはこの危機をうまく回避することに成功した。

残念そうにしていた一夏だが、嫌がついているのを無理やり連れて行くこともできないので、クロウと二人で大浴場に向かうことになった。

「一緒に入るか？ 真耶」

「だ、ダメですよ………」



「あぢい〜……まだ浸かっているのか？クロウ」

「うむ、まだまだ大丈夫だ、問題ない」

クロウと一夏が風呂に入浴してから一時間ほどが経っていた。

すでに一夏は顔を真っ赤にさせており、のぼせているのが分かる。

風呂好きの名に恥じずに、精一杯大浴場を使い尽くした。

まあそんな楽しんでいたら普通はのぼせるわけで、平然としているクロウがおかしい。

「あく……俺もう出るなあ………」

「ああ」

目をぐるぐると回しながら、フラフラと出口へと向かって行く一夏。

彼が出て行った後、大浴場に沈黙が降りる。

もうちよつと温まってから出ようと考えるクロウ。  
だがそこに来訪者が現れた。

「く、クロウ？」

「む？」

瞑っていた目を開けると、何故かそこには束ねていた髪を下ろした金髪美少女の姿が。

一応タオルを持って身を守っているのだが、薄い生地なのか、シャルロットの身体の曲線がくつきりと浮かんでいる。

標準より少し大きめの柔らかかな双丘や、キュツと括れた腰。

そしてなだらかな曲線を描いている臀部が窺える。

「……………どうした？風呂に入りたくなつたのか？」

「え…………う、うん！」

カア…………と顔を赤くしながら湯につかるシャルロット。

日本の混浴なるものをやってみたかたとは言えない。

湯船にゆつくりと浸かって、クロウの近くまで行く。

湯に浸かるときのマナーを守って、タオルを湯船の縁に乗せておく。

「ふえっ!? く、クロウ!？」

「ふむ……これくらいはかまわないだろう？」

恥じらいながらも近づいてきたシャルロットを捕まえ、自分の足の間にちよこんと座らせる。

154cmと少し小柄なシャルロットは、クロウの体の陰にすっぽりと隠れてしま

う。  
はわわ……と慌てていたシャルロットだが、彼女にとつても役得なので離れようとはしなかった。

「……………」

少し時間が経つと、また大浴場には沈黙が生まれる。

と言つても気まずいとかそんな空気ではなく、ただ単に入浴を楽しんでいるのだ。

実際シャルロットは身体を固くさせていたのに、今ではすっかり湯にほぐされて背中をクロウの胸板に預けてリラックスしている。

チラチラ金色の髪からたまに見えるうなじを凝視している者などいない。

「僕ね……………」

「むっ？」

シャルロットがゆっくりと語りだす。

「そろそろ……僕が女だつてばらそうと思うんだ」

「もういいのか?」

「うん、それに男の子扱いされるのもちよつと嫌だしね」

あはは……と苦笑しながら言う。

彼女がもういいと言ったのは、母国であるフランスである出来事があつたからである。

それはデュノア社長……つまりシャルロットの父親の逮捕である。

彼が経営難のデュノア社を何とか立ちなおそうとしてシャルロットを『世界で三番目に I S が使える男』として大々的に発表したのはいいのだが、それだけで各国のお偉いさん方は信じるだろうか?

否、絶対に信じない。

世界各国の首脳たちは、男性操縦者が現れたフランスにその者の情報開示を求めた。当然列強国の一国であるフランスも、数多の国々から睨みを効かされたら拒めるはずがない。

フランスは仕方なく各国の諜報職員を受け入れ、自由に調査させた。

結果、シャルル・デュノアなんて名前の人間が存在しないことが明らかになった。

各国の猛烈な批判を浴びたフランス政府はすぐにデュノア社長一家を逮捕。

デュノア社も潰されるかとされたが、量産 I S 機の世界第三位のシェアを誇る会社を

潰すのも惜しく、各国からも大きな批判は沈静されていたので残されることとなった。

最も懸念されるシャルロットのことだが、父親に強制されていたことやデータを盗んでいないことから彼女に非はないとされていたし、女性ということで色々な団体が世界中でギヤアギヤアと喚いたためお咎めなしということになったのだ。

「よかつたな」

「うん、僕もまさか無罪だとは思わなかつたよ」

何かしらの軽い罰は覚悟していたのだが、完全無罪となつたことには驚いたが嬉しかった。

ただもう男の格好をすることはやめるようにとお達しはあつたが……………。

「これからはお前の女子制服姿が拝めるといふことか……………」

「……………なんか言い方がえつちだよ」

じとお…………と半目で睨みあげるが、シャルロットの愛らしさのせいでまったく怖くない。

だがシャルロットも嬉しい。

クロウは自分を女の子として見てくれているとは思うが、やっぱり男ものの制服より女ものの制服の方が可愛い。

自分を可愛く見てほしいのも、意中の相手がいるなら当然だ。



「ひゃあっ!？」

自分の制服姿を見て、クロウは褒めてくれるかな……と妄想に飛びかけていたシャルロットを、お尻に当たった固い感触で現実に取り戻す。

シャルロットはクロウの足の間に座らされているのだから、当然当たっているのは……。

「うむ、すまん。我慢の限界だな」

「ちよつと待って!こ、ここお風呂だしっ!」

「なに、気にかけることはない。もう誰も来ないだろうし、ここは二人だけだ」

「ふ、二人だけ……や、やっぱ——」

二人だけという言葉にポオ……と赤くなるが、何とか現実に戻って反対しようとする。

まあその時にはすでに遅く、シャルロットの瑞々しい唇はクロウに奪われていた。



「お、大きい……………」

何度見ても、クロウの男根の大きさには目を見張ってしまふ。

天に向かつてそそり立っている肉棒は、非常に逞しくて猛々しい。

皮も全部向けていて、亀頭が剥きだしになっている。

他の男のモノは知らないが、長さも太さもかなり逸脱しているのではないだろうか

……………?

シャルロットはそんな男根に顔を近づけ、亀頭をペロンと舐め上げる。

「ぺちや、れる、れる……………ちゆる」

まだ拙さが残っているが、器用に亀頭を舐めまわす。

陰茎に下がっていき、横から食べるようにブルツと震える。

そうすると男根が歓喜するようにブルツと震える。

この反応でクロウが感じてくれていると思つて嬉しくなり、亀頭を丸々飲みほす。

たっぷり溜めた唾液と、柔らかい頬肉で優しく刺激する。

「シャルロット、次は胸を使ってくれるか？」

「も……………う、うん」

龟头を口から解放すると、溜めた唾液を口からたらあ……と寄せた乳房の谷間に落と  
して潤滑液とする。

お湯で濡れているから必要ないのかもしれないが、クロウに教えられたので習慣と  
なっているのだ。

そして男根を、Cカップの乳布団の中に埋める。

しかし巨大な男根を全て乳房に埋めることはできず、龟头どころか陰茎の一部まで上  
からのぞいていた。

「ちゅば、ちゅつ、ちゅるっ」

シャルロットはそこを口に含み、口内で吸い上げる。

横から張りのある乳房を手で押して、男根に乳圧をかける。

陰茎はムニユムニユとした肉の柔らかな感触が、龟头からはぬめった舌と吸い上げで  
だんだんと射精感が高まっていく。

「んっ、んぷっ、ぢゅっ、ぢゅるるるっ！」

クロウの絶頂が近いと感じ取ったシャルロットは、先ほどより強く男根を攻め上げ  
る。

乳房も形が変わるほど強く横から押して圧迫をかける。

「——ッ!!」

そして男根から精液が放出された。

シャルロットはそれを口内で受け止めるが、ドクドクと底なしに湧いてくる白濁液に許容量を超えてしまう。

しかしそれでも、口内に残っていた精液をごきゅつと飲み下す。

その精液は何日も出していないのかと思うほど粘っこく、亀頭から伸びた精液が口内へと続いていった。

「んっ……いっばい出たね」

そう言いながら、顎にこぼれた精液を手で拭う。

シャルロットも舐めながら興奮していたのか、秘部からたら……と愛液がしたたり落ちる。

「さて、次はお前の番だぞ」

「ふえっ!? っていうかいつの間にマットなんか用意したの!？」

いつの間にか設置されていたマットの上に優しく仰向けに寝かされる。

その際に乳房が柔らかかそうにプルンと波打った。

クロウはシャルロットの下部に回ると、程よい肉付きの太ももを持って前に押し上げる。

恥ずかしいところを見せているので、顔を恥じらいで赤くするシャルロット。

「ひうっ！」

しかしその恥ずかしさも、秘部に吸い付かれたことよって吹っ飛んでしまった。

「あっ！ひゃあっ！んっ！ああっ!!」

秘部を舐められる快感に、思わずクロウの頭に手を置いて太ももで頭をサンドイッチしてしまう。

それでも秘部を舐めることを止めることなく、膣口をレロレロと舐めたり、舌を膣内に挿入して溢れ出してくる愛液を音を立てて啜る。

「ひっ！あっ！あっ！んあああああっ!!」

シャルロットはどうとう達してしまった。

お湯と汗に濡れた身体をビクビクと痙攣させ、身体を跳ね上げて背中を折れそうなほど反らせる。

そうすると強調されるCカップ乳房がブルンと揺れた。

「呆けているところ悪いが、まだ終わらないぞ」

絶頂の余韻に浸っているシャルロットをグイツと抱き起すと、自分の上に乗せた。

「ぼ、僕が上に乗るの……………?」

カア…………と顔全体を赤らめるシャルロット。

でもいつもしてもらってばかりだし…………と考えた結果、秘裂に亀頭を合わせる。

精液と愛液が混じり合って、くちゆりと音を立てた。

「ん、んあああ……………」

シャルロットはゆっくりと腰を埋めていき、男根を膣内に侵入させる。

そして亀頭を飲み込み、陰茎を徐々に侵入させていく。

「んはあああああつ!!」

しかし最後は勢いよく腰を下ろし、ズボンと全て飲み込ませた。

巨大な逸物が締まりの良い名器に包まれる。

少しの間男根の感触を味わっていたシャルロットは、腰を上下に動かし始めた。

ぬちやぬちやと粘っこい液体が男根に絡みつき、膣内に出し入れされる。

ハアハアと熱っぽい吐息を漏らすようになり、クロウにも動いてほしそうな顔をす  
る。

おねだりを受けたクロウは、自分からも腰を突き上げてやる。

「はあつ!んあつ!あつ!あああつ!!」

シャルロットの細い腕を掴んで、離れられないようにする。

彼女が腰を下ろすのに合わせて、腰の上に突き上げる。

これまで以上に感じているようで、ズチユズチユと音も大きくなる。

「あつ!ふうつ!く、くるつ!!」

また絶頂する予感を感じて、大きく喘ぐ。

勢いよく腰を下ろすので、パンパンと柔らかな尻肉が腰に当たる。

「んひいっ！く、クロウ!?」

シャルロットの限界を感じ取ったクロウは、騎乗位から彼女を下ろして後背位へと体位を変える。

そして一番奥に男根を突き入れて、そこで射精した。

「あつうっ！ああああああつ!!」

びゆるるるっ！と子宮内に直に熱い白濁液を注ぎ込まれる。

シャルロットも同時に達し、熱い顔を見せないようにしていたのだが、彼はまだ終わらせなかった。

「ああっ！ひっ！またああっ!!」

白い尻を捧げさせ、遠慮なくそこに男根を突き入れる。

最早精液が愛液かわからない液体が、突かれるたびに秘裂からほとぼしる。

非常に激しいピストンを受けているのだが、シャルロットの身体をゾクゾクとした快感が走り回る。

「んあっ！んっ！んっ！んっ!!」

あまりにも送られてくる快感が強いので身体に力が入らなくなってしまう、脚はみつ

ともなく開かれ蟹股のようになっていた。

コツコツと子宮口を亀頭で叩かれるたびに、太ももをガクガクと震わせる。

程よい大きさの乳房も連動してブルンツと揺れ、口から短い吐息が犬のようにさされている。

クロウは後背位でシャルロットを十分に愉しんだ後、身体を反転させて正常位に変えた。

「あっ！はっ！んあっ！ひいっ!!」

手を伸ばして、Cカップ乳房をむぎゆうつと握る。

指の間から溢れた肉が盛る。

もうすでに湯船に浸かっていたお湯はなく、汗でしっとりとした肌触りがあった。

右の乳房に顔を寄せて乳首を舐ってやると、ピクピクと可愛らしく反応する。

乳首だけでなく、乳輪や周りの乳肉も口に含んで強く吸い上げる。

「はあっ！あっ！ひっ！ぐうっ!!」

乳房を解放し、ただ腰を突き入れることに専念する。

括れた腰を抱え、ビクンビクンと痙攣する身体を抑える。

ブルンブルンと揺れる双丘から、汗と唾液が飛び散る。

「また射精すぞ」



「はひっ！んっ！あっ！な、膣内なつかにつ！ちようだいっ！！」

両脚を抱え込んで激しく腰を打ちつける。

ズン！ズン！と膣壁をかき分けて子宮口まで押し寄せる。

「あああああああつ！！」

ドクドクと鈴口から精液が溢れ出す。

その大量の精液は膣内だけでは収まらず、外へと溢れ出してきた。

シャルロットも同じく絶頂し、よだれまみれの舌を出しながら激しく痙攣した。

男根を膣内から引き抜くと、こぼ……と音を立てて精液が流れ出た。

「ま、まだ大きなままだね」

シャルロットが見て驚いたのは、あれほどの量出したにも関わらず未だいきり立っている男根である。

精液と愛液で汚れた肉棒を手で触りながら言う。

「シャルロットが可愛いからな」

「そ、そんなことないよ……………」

至近距離での褒め言葉に、顔をカアア……と赤らめる。

でも好きな異性にそう言われて嬉しくない十五歳JKがいるはずもなく……………。

「く、クロウが満足するまで、そ、その…………し、していい…………よう」

自分の秘部を両側からひろげて、恥ずかしそうに言う。  
開かれた秘裂からドロリとした白濁液が尻穴を伝って、マットレスにシミを作る。  
当然クロウがそんな情景を見て我慢できるはずもなく、大浴場からはうら若き乙女の嬌声が鳴りやまなかったのだった。



翌日、シャルロットは朝のホームルーム時間に自分が女の子であることを告げ、教室が大パニックになったの言うまでもない。

## 第三章

## 淫夢ト朝駆ケト

放課後、ある教室で水音が響いていた。

「ペろ、くちゅ、ちゅば、じゅるるる！」

生徒たちが帰宅したので、一年一組の教室には現在二人の男女しかいなかった。

男は椅子に座り、局部を外気にさらしている。

金髪を後ろで一つに束ねている少女は男の足の間に座り込み、男根に舌を這わせていた。

男の名前はクロウ・ミキストリで、女は最近重大なカミングアウトをしたシャルロット・デュノアであった。

彼女は裏筋に舌を這わせると、昇っていきカリ首をほじるように舐めた。

「くちゅ、ちゅぽ」

亀頭を軽く口に含み、中に溜めた唾液で愛撫する。

そしてそこからゆっくりと奥へと沈めていき、男根に舌を絡める。

一番奥まで入った時、クロウの限界も同時に来て射精する。

ビュルツ！と勢いよく出た精液は、シャルロットの顔にも飛び散った。

「ぶはっ……まだガチガチだね」

シャルロットはいきり立ったままの男根の亀頭をくにくにと指で弄りながら言う。

だが口淫していて興奮していたのはクロウだけでなく、シャルロットも流れ出た汗で

ワイシャツが透けて乳房の先端がうつすらと見えている。

分泌された愛液は、下着を濡らすだけでなく地面にしたたり落ちて小さな溜まりも

作っていた。

「次は胸でやるね？」

シャルロットは自分でワイシャツのボタンを外す。

しかし真ん中のボタンだけは外さず、上の方と下の方だけを解放した。

そして男根を下の方からぐに……と埋めていく。

所謂パイズリである。

クロウの巨大な男根は乳肉の谷間も突きぬけて、ひよっこりと顔を出す。亀頭に向かって口に溜めた唾液をタラツと垂らしてすべりをよくする。

「ふふ、気持ちいい？」

「ああ」

横から乳房を掴み、上下運動して男根を刺激する。

舌で亀頭も舐めて、射精を促す。

その結果、クロウはまた射精することになりシャルロットを汚す。

「ん、ちゅ……………」

飛び散った精液を指で絡め取り、口の中に入れる。

ドロリとした精液は、『F』カップ乳房でできた谷間も汚す。

クロウが教室の地面に寝転がると、シャルロットはそれの上に跨り秘部と亀頭を擦り

合わせる。

ぐちゅ、ぬちゅと厭らしい音が出る。

「はっ……………んっ！入ってきたあ……………」

ゆっくりと男根の感触を確かめるようにして膣内に埋めると、腰を上下させて快楽を得る。

ぐちゅぐちゅとあふれ出た愛液が音を出し、シャルロットは淫靡な笑顔を浮かべてい

た。

だがシャルロットの余裕はここまでだった。

「あひいっ!!」

クロウが体位を逆転させて、シャルロットを下にしたのだ。

ひざ裏辺りを掴んで、まんぐり返しさせる。

この事で男根がさらに奥へと入り込み、子宮口を押しつぶした。

「あ……あああ………」

あまりの衝撃に、シャルロットは声を出せずに悶える。

眼からは涙がこぼれ、口は大きく開かれ舌をだらしなく出してよだれを垂らす。

精液と汗に汚れた豊満な『F』カップ乳房がぶるんつぶるんっ!と重たげに揺れる。

ビクンビクンと小刻みに痙攣し、膣内はひくひくと動くことを期待している。

邪魔だとばかりにワイシャツをがばつとたくし上げると、巨大な乳房がブルンと現れる。

乳輪ごと尖った厭らしい乳首を、ちゆるちゆると吸う。

「いひいっ!あっ!あうっ!ああっ!!」

男根を乱暴に突き入れて、奥へ奥へと侵入させる。

柔らかそうな乳房をぐにゅつと鷺掴みにし、乳首をカリと優しく甘噛みする。

すると眉根を切なそうに歪めて、ビクンビクンと反応する。

「射精すぞ。どこがいい？」

「腔内なか！ いっぱい射精してえっ!!」

ヌプヌプと突くたびに、連動するようにFカップの乳房が揺れて愛液が飛び散る。

そして――

「うんあああああっ!!」

どくどくと大量の精液が、子宮内に注ぎ込まれた。

ビクンビクンと一番激しく痙攣し、強い快楽を感じる。

そこでシャルロットの意識は闇に沈んでいったのだった。



「ハッ！」

パチクリと目を覚ましたのは、自分の寮部屋だった。

最近引っ越してきたあまり見慣れない天井を見ながら、先ほどまでのことを思い出す。

「ゆ、夢……………」

カアア…………と顔全体を紅潮させるシャルロット。

あんな淫夢を見ていたと思うと、恥ずかしくて視線を上げられない。

というかそもそもあの胸はなんなのだろうか。

別に胸自体は標準だし、クロウは実際のサイズよりも大きく見えると言ってくれた。

あんなFカップも無駄な肉はいらないのだ。

うんうんと頷いて何とか誤魔化そうとする。

しかしやはり気になるのか、手は自分の乳房へと向かっていた。

「んっ……………」

Cカップの乳房に手を当ててみると、先ほどの淫夢のせいか乳首が勃起しており擦れて快感が発生する。

少し冷静になると、股のあたりがやけにぬちやぬちやとしているのを感じる。

シャルロットはそれが何かを察すると、まずルームメイトの様子を窺う。

こんな姿、ばれるわけにはいかない。



「あれ？いない……………？」

最近同室になったドイツの銀髪軍人はベッドにはおらず、使用された形跡すらなかった。

首を傾げて疑問に思うが、今は好都合である。

シャルロットはすぐにベッドから抜け出し、下着を取りに行ったのだった。



所変わって、ここはクロウの寮部屋。

シャルロットが女性とカミングアウトしたので、当然彼女は違う部屋へと引越したくなった。

なので現在この部屋は、クロウの一人部屋となっている。

本来なら一夏と相部屋になるはずなのだが、部屋数にも余裕があることからそれぞれ一人部屋を与えられたというわけだ。

彼は今ベッドの中に身を沈め、目を瞑って休養を取っているのだが……………。

「ん、ちゅ、じゅるじゅるっ」

「……………」

卑猥な水音と、下半身から伝わるねっとりとした快感に目を覚ます。

夜中のうちに彼女が侵入してきたのは察知していたが、まさかこんなことをするとは

……………。

クロウは自分にかけていた薄い毛布を取り去る。

「んちゅ、ちろちろ……………むっ？」

「……………何をしている」

毛布の中にいたのは、クロウのいきり立った男根に舌を這わせる小柄な銀髪美少女、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

彼女は何故か身に何も纏っていない、専用機の待機状態である黒いレッグバンドが太ももに巻き付いているだけだった。

細い太ももに巻き付いているレッグバンドは、全裸ということもあつてか厭らしく見える。

基本的に常時付けている眼帯もつけておらず、美しい金色の瞳がクロウをじっと見つめている。

「うむ、日本では伴侶をこのように起こすと聞いたのだ」  
またあの副隊長の知識だろうか。

とうか昔ならいざ知らず、現代で口淫をして伴侶を起こすなどする日本人が何人いるのだろうか？

しかしクロウにはメリットしかないので、わざわざめさせる必要もない。

「ラウラ、続けてくれ」

「む？了解した」

朝っぱらから早速情事に励むクロウとラウラであった。



「んっ……………」

綺麗な桜色の乳首に、ぴと…………と指で触れる。

それだけで敏感なラウラはピクンと反応し、吐息が熱っぽくなる。

そしてAカップのあまり多くない乳肉をむにむにと揉まれると、小刻みにピクピクと震える。

小さい胸は感度がいいと言われるが、彼女はそれ以上に感度が良い。

「んはああっ!!はあっ!あっ!はっ!!」

唾液で濡れた舌で乳首をれるお……と舐めると、彼女の身体は強く震える。

乳首をぢゅううううと吸ったり、レロレロと舌で転がしたりする。

そのたびにピクピクと彼女の身体は震え、吐息が荒くなっていく。

「わ、私もするぞっ」

一方的に快楽を与えられることに恥ずかしさを覚えたラウラは、クロウの男根にも快楽を与えようとシックスナインの体位になる。

男根はすでにギンギンに勃起しており、鈴口からは先走り汁が少し垂れてもいた。

逸物はこれからされることに、プルプルと震えて期待していた。

そんな男根に、ラウラはペろりと舌を這わせた。

「ん、ふっ、ぢゅぷぷぷぷっ」

大きく張った亀頭をくぼつと口に咥え、そこから喉の奥にゆつくりと進めていく。

そうやってクロウに奉仕していると、ラウラもそれだけで感じてしまい、子宮がキュ

ウキウウと疼き秘裂がひくひくとうごめく。

膣内からは愛液が流れ出し、尻だけでなく太ももまでも濡らしている。

起きる前から男根を刺激されていたクロウは限界が近づいてきたので、ラウラの小ぶりの尻肉をきゅつと優しく握った。

「——ッ!!」

すると敏感なラウラはそれだけで登り詰め、達してしまふ。

それと同時にクロウも男根から精液を放出し、彼女の喉奥で快樂に酔う。

ラウラの身体はビクビクと激しく痙攣し、キyunキyunと疼く秘部からは大量の愛液が流れた。

彼女は目を細め、喉奥で放出された精液をゴキユツと飲み下した。

男根から口を離すと、精液と唾液で汚れた逸物からラウラの口まででろお……と汚液の橋が出来上がる。

「い、挿入れるぞっ。」

ラウラはクロウの体に跨り、顔を淫欲に染めながら言う。

一応疑問形で聞いているが、止めても聞かないことは目に見て明らかだった。

これから来るであろう快感に、彼女は胸をドキドキと高鳴らせて期待する。

腰を下ろして秘部に龟头をあてがうと、ぬちゅ……と音がする。

ゆつくりとそれを膣内に埋めていき、やがてズブン……と全てを飲み込んでしまう。  
ラウラの表情は淫靡に蕩げ、口からはよだれを垂らす。

「私が動かすぞ」

「う、うむ、わかった……………」

ラウラに跨られている騎乗位だったが、クロウが身体を起こして正常位に変える。

そんな些細な動きでも身体を軽く震えさせ、Aカップのほとんどない乳肉をピクピクと波打たせる。

ゆつくりと男根を引き抜いていくと、離れないでと言わんばかりにギュツギュツと膣内を締め付ける。

「ああああああああつ!!」

抜けるギリギリまで男根を引き付けた後、一気にそれを奥に押し込んだ。

ラウラの目にチカチカと星が飛び散り、ひっと喉を引きつらせる。

そこからズン！ズン！と自分の欲望を満たさぬことしか考えていないような激しいピストンで彼女を攻める。

突くたびに愛液が飛び散り、小柄な肢体を弓のように反らせて喘ぐ。

クロウは逃がさないとばかりに折れそうなほど反れた腰を掴み、腰を打ちつけ続ける。

巨大な男根は膣壁を押し避けて、子宮を直に突いて形を変えさせる。

「ああっ！ああああああああっ！！」

ドブドブと大量の精液が、膣内で発射された。

精液は膣外にも溢れ出し、ごぼつと厭らしい音を出す。

しばらくつながったまま、ラウラのことを抱き寄せてキュツと腕に抱く。

ラウラも息が絶え絶えになっていくが、幸せそうにクロウの背中に手を回す。

そうして二人に心地いい時間が流れていたのだが、それはクロウによつて終わりを迎えた。

「あつ——！！」

いきなりクロウが腰を突き上げ、まだ勃起したままだった男根を子宮に叩き付けた。

ゴツ！と子宮に当たる音が聞こえ、ビクンビクンと身体が痙攣する。

子宮を突かれた衝撃で、秘部からプシャツ！と潮が噴き出した。

そこからずちゆずちゆと激しいピストンが開始されるが、ラウラの表情はゾクゾクとした快感に気持ち良さげに歪んでいた。

クロウはそれからラウラに色々な体位を取らせた。

正常位で悲鳴に近い嬌声を上げるラウラを押さえつけ、慎ましい乳房がプルツと揺れるほど激しく腰を打ちついたり。

後背位にして奥深くまで男根を押し入れ、力なく地面に突っ伏してよだれを垂らすのを構うことなく快楽を与え続けたり。

「ひゃああっ！うああっ！ああっ！！」

はむツと小さな乳輪ごと乳首を口に含み、乳房の形が変わるほど吸引する。

片方の乳房は乳を搾るようにギュツと握ってやる。

「あっ！はっ！ひいっ！んああっ！！」

パン！パン！と音がするほど、尻肉に腰が打ち付けられる。

子宮が精液をキュンキュンと求めることで、限界が近いことを察知する。

慎ましいAカップ乳房を両方とも後ろから回された手で揉みほぐされ、ラウラはよだれを垂らして悶える。

「はあっ！うああっ！ああああああっ！！」

膣内奥深くで射精されたと同時に、ラウラも身体を大きく震わせて絶頂した。

顔中涙やよだれで汚しながら、恍惚とした表情を見せている。

秘部から精液と愛液が混ざった液体が、だらあ……と垂れ落ちていくのは非常に卑猥だった。





「うむ、ここの食事はいつも美味しいな」

「そうだな」

一年生寮の食堂で、もむもむとサラダを食んでいるラウラ。

彼女はドイツの特殊部隊隊長であるからなのか、あれほど激しい情事のあとでもすぐに回復した。

今ではクロウと一緒に朝ごはんを楽しんでいるところである。

「クロウ、ここいい?」

「む? シャルロットか。構わんぞ」

そんな二人のところに慌てた様子で聞いてきたのは、金髪の美少女、シャルロットだった。

謙遜しているが皆が認める優等生であるシャルロットが、こんなに遅く食堂に来るのも珍しい。

「シャルロットにしては珍しいな……何かあったのか？」

「な、ななな何でもないよ!」

顔をカアア……と赤らめて、パタパタと手を振って否定する。

何かあったのは明白である。

しかしシャルロットも、淫夢を思い出して自慰にふけていたら遅刻しかけていたとは拷問されても言えることではない。

「と、ところでラウラはどこにいたの? 部屋にはいなかったけど………」

あからさまに話を変えるが、そこには優しきで誰も突っ込まなかった。

シャルロットは不思議そうにラウラに問いかける。

一度も使った形跡がなかったのだから、気になるのも仕方ないだろう。

「む? クロウの部屋だ」

しかし何でもないように言ったらラウラの言葉が、シャルロットをピシリと固まらせた。

一晩性豪であるクロウの部屋に泊まったのだ。何も無いということはあるし、ない。

彼がハーレムを形成しているのは承知しているが、やはり他の女と寝たというのはあまり気分のいいものではない。

だがクロウにはそれに見合うほどの魅力というものがあるので、我慢するしかない。

「むう……本当にクロウはえっちだね……」

「否定はしない」

思春期である高校男子なら真っ赤になって否定するだろうに……。

ふう……とむくれる彼女の頭を、優しく撫でてやる。

これで気分がよくなる自分は、かなり安直だな……と気持ち良さげにしながら考えるシャルロットであった。

その後は構ってもらえないことに拗ねたラウラをなだめたりと、朝から桃色の空気を撒き散らす三人だった。



「ん、しょ……」

シャルロットがグツと机を持ち上げ、前に運ぶ。

放課後の静かになった教室には、掃除に励むシャルロットとクロウの姿があった。

IS学園では、生徒は掃除をしないことになっている。

では何故生徒の二人が掃除をしているかというと、それは担任教師である織斑 千冬から課された罰だからだ。

そもそも遅刻気味だったのだが、食堂でイチヤついたせいで予鈴がなるまで食事を食べきれなかったのだ。

一時間目は鬼教官である千冬が担当ということで、猛ダツシユで駆け出すシャルロットとラウラ。

しかしクロウは別に遅刻してもいいやといつも通りの速度で歩き出す。

このままじゃ遅刻してしまうと、優しいシャルロットはわざわざ戻ってクロウを連れて行くこうとする。

ちなみにラウラは、必要なときは仲間を見捨てなければならぬと特殊部隊生活で理解しているため、一人で走っていた。

クロウの所に戻ったシャルロットだったが、このままでは間に合わないので禁止されているISを展開する。

そして一気に教室の窓まで飛翔した。

この時シャルロットに持ち上げられている形になっていたクロウは、水色の布を見て

うんうんと頷いていた。

ISを使ったことで本来なら間に合ったのだが、なんと教室にはすでに鬼教師の織斑千冬がいたのだ。

禁止されているISの使用ということで大目玉をくらったクロウとシャルロットは、罰として掃除をすることとなったのだった。

ラウラは軍隊生活の中で習得した隠密技術で、二人が怒られている間に席に滑り込んでいたりする。

「んんっ……これ重たっ」

シャルロットは机を運ぼうとするが、あまりの重さに持ち上げることができない。

机の中身を覗き見てみると、そこにはぎちぎちに詰め込まれた教科書類が……………。

ちなみにこの席は、持ち主に『フルアーマー机』と命名されている。

「私が持とう」

重たい机に悪戦苦闘するところに、クロウがぬつと腕を出して机を掴む。

「え、大丈夫だよ。僕が頑張るよ」

「適材適所というやつだ」

ぐつと力を入れると、シャルロットが苦戦していたのが嘘のように軽く持ちあがる。

身近で男の力強さというものを見てしまった彼女は、なんとなくドキドキと胸を高鳴

らせる。

「あ、あのさ、クロウ」

「むっ？」

シャルロットはそのドキドキを振り払うように、クロウに話しかける。彼も机を置くと、彼女に身体を向けた。

そして彼女は、緊張による胸の高鳴りを抑えつつ口を開いた。

「か、買い物に付き合ってくれないかな？」



「えへへ♪」

シャルロットはクロウと手をつなぎながら幸せそうに顔を緩める。

白くて柔らかい彼女の手が、無骨で固い彼の手をキュツと握る。

休養日である日曜日に、二人は駅前のシヨッピングモールに来ていた。

来週に迫った臨海学校のために、クロウに魅せる水着を買いに来たためである。

ついでに学校の指定水着でいいと考えていた彼の水着も求めに来た。

もともと顔もスタイルも整った美少女のシャルロットだが、服選びのセンスもいいため余計に視線が集まっている。

さらに幸せそうに笑っているものだから、彼女持ちの男まで振り向いてしまっている始末である。

クロウはシャルロットほどではないのだが、無表情とはいえ精悍な顔つきとがっちりとした体格が好きな女性はついつい目をやってしまっているようだ。

特に彼氏や夫がいる女性は、彼を見た後自分のパートナーを見てため息をついている。

「さて、水着売り場に着いたな」

目的地である水着売り場にいる二人。

幸せな時間だったからか、あまりにも早く感じてしまうシャルロット。

水着売り場は世界中に浸透した女尊男卑の影響から、女物を扱うところが目立っている。

「では別れるか」

「ま、待って!」

離れて行くこうとするクロウの手にギユツと抱き着く。

「僕がクロウの水着を選んでもいい?」

「それは構わないが………」

「ほ、ホント!?!」

嬉しそうに笑うシャルロット。

そうして二人は手をつないだまま仲良く男性の水着売り場に行ったのだった。



むふー……と鼻息荒くご満悦といった様子のシャルロット。

男物の売り場に行くのは少し恥ずかしかったが、意中の相手の水着を選べたことは嬉しかった。



それに試着してもらった時に、鍛え上げられた身体を見れて良かった。

あの情景は脳内フォルダにしつかりと保存した。

さて、次は自分の番である。

「く、クロウ。今度は僕の水着を一緒に見てくれな——」

「任せろ」

シャルロットが言い終える前に了承するクロウ。

何故かイイ顔をしている。

お願いした側のシャルロットも、少し引き気味である。

そして二人は今度は女性の水着売り場に向かったのだが、そこでまた一悶着あった。

「……………むっ？」

何故こうなつたと首を傾げるクロウ。

おかしい、何故自分はシャルロットと一緒に試着室に入っているのだろうか。

二人で入ると狭く感じてしまうような密室空間で、若い高校生カップルがいる。いけません。

「(や、やつちやつた……………)」

クロウを連れ込んだシャルロットも、頭の中では大混乱だった。

もつと彼とイチャつきたいと考えていたら、いつの間にかこのような行動に出てし

まっていたのだ。

追い出そうにも、自分から連れ込んでおいてそれは酷いと思う。

「(うう……き、着替えちゃえ!)」

もうやけくそだと、服を脱ぎだすシャルロット。

クロウも今回に限って、着替えている彼女をじつと見つめるのではなく後ろを向いている。

まあ恥ずかしいからという理由では当然なく、どのような水着を着るのか見ない方が後で楽しめると考えたのだ。

シウルシウルと音を立てさせながら衣服を脱いでいき、身に着けているのは水色の下着のみとなってしまう。

ブラで寄せられてできた谷間に、専用機の待機状態であるオレンジ色のネックレスがある。

そして下着も脱いでいき、とうとう危険人物との二人きりの密室空間で全裸となってしまう。

シャルロットは煙でも出しそうなほど、顔を赤らめている。

急いで選んだ水着を手に取り、それを身に着けていく。

「く、クロウ、もういいよ」

背中を向けていたクロウがそう言われて振り向く。

「ど、どうかな……………」

彼女が選んだ水着は黄色を基調としたもので、胸を強調するようなものだった。

なのでCカップの平均的な胸の大ききなのだが、一つ上のカップに見えるような水着だ。

「うむ、とても似合っているし可愛いぞ」

「そ、そう? えへ……………」

ガシツと細い肩を掴まれ、うんうんと頷きながら言われた褒め言葉。

それにシャルロットは恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあこれに決めちゃうねっ!」

「うむ、では私は外に出ておくれ」

「うん、ごめんね?」

気にすることはないと手を軽く挙げ、仕切りのカーテンを開ける。

「……………あ」

これまたタイミングが悪いことに、開けた先にはIS学園で教鞭を振るう二人の教師が。

長い黒髪の凛々しい美女はシャルロットといることを見て不機嫌になり、緑髪で眼鏡

が可愛らしい爆乳美（少）女はなにを勘違いしたのか顔を真っ赤にさせる。

「む？千冬と真耶か」

「……………何をやっている。クロウ、デユノア」

この後は真耶の嫉妬混じりの説教を喰らったり、千冬と真耶の水着を選ばせてもらったりして時間を潰した。

シャルロットは近くにいたラウラを捕まえて、どうやら水着売り場に引つ張って行ったようだったが……………。

## 淫靡ナル臨海学校

高校生活で思い出になるのは、やはり何かしらの行事が多いわけで。

つまり臨海学校に向かう一年一組が乗車するバスの中は非常に賑やかだった。

特に海が見えたときなどワツと歓声が上がリ、厳しいお姉さまと恐れられている織斑千冬の叱責がなければさらに騒がしかったであろう。

男子生徒二人を抱えるこのクラスでは、バスの席決めでも激しい戦いが勃発した。

その結果、織斑一夏の隣を勝ち取ったのは幼馴染で豊かな胸を持つ篠ノ之箒。

クロウ・ミキストリの隣に座ったのは、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

一夏と箒は昔話に花を咲かせ、ラウラはクロウの方に頭を傾けてスヤスヤと眠りについていた。

どこか緊張しているようだったので、疲れていたのかもしれない。

クロウもぼんやりと外を眺めながら、この臨海学校に来れなかった日本の代表候補生のことを思い出していた。

『風邪……か』

『ケホツケホツ……水着、新しいの買ったのに……』

『ではまた今度、休みの日に一緒に行こうか』

『う、うんっ』

『大丈夫！ 簪ちゃんは私がちゃんと看病してあ——』

『いらない』

もつと簪も素直になればいいのにと思う。

「もうすぐ目的地に着く。降りる準備をしろ」

千冬の言葉に、はいと返事する生徒たち。

彼女の言った通りすぐに目的地である『花月荘』に到着した。

IS学園第一学年の生徒が全員降りて、女将に挨拶をする。

その後各自決まっていた部屋に、それぞれ向かって行く。

「へーい、クー」

自分の泊まる部屋が教えられてなく手持無沙汰に立っていたところに、長い袖をプラ

プラとさせながら布仏 本音がゆっくりと走ってくる。

そしてそのままクロウにダイブしてきたので、それを優しく受け止めてやる。

「クールの部屋はどこになったの〜?」

「うむ、それがまだわからないのだ」

クロウに抱っこされているような形になっている本音が聞くが、知らないので答えようがない。

周りにいた一部の女子生徒は、羨ましそうに本音を見ている。

「まあわかったら教えるさ」

「本当〜? 約束だよ〜?」

「ああ」

そんな話をしていると、千冬がやってきた。

「ミキストリ、ついてこい」

どうやら部屋に案内してもらえらしい。

部屋の一覧にクロウと一夏の部屋が記入されていなかったのも、不純異性交遊を防ぐためだとか……。

……もう手遅れな気がしてならない。

連れてこられた場所は、教員室。

つまりこの臨海学校を引率している教師たちが寝泊まりする場所だった。

これも不純異性交遊を防ぐためである。

……だから手遅れ（ry

「織斑は私と同室だ。ミキストリは山田先生と同室だな」

クロウと一夏に説明する千冬。

彼女の顔はどこか納得できないような残念がつているような……。

しかし一夏はそれに気づかず、部屋の中に入って「おお……」と感嘆の声を上げていた。

クロウは指定された部屋の中に入る。

「あ、ミキストリくん」

「む？・邪魔をしたか？」

部屋に入ると、中で書類を見ていた眼鏡爆乳教師である山田 真耶がいた。

クロウの気遣いに大丈夫ですと慌てて手をパタパタと振る。

その仕草が小動物っぽくて可愛らしい。

今日は一日中自由時間なので、少し真耶との会話に使う。

その間真耶は本当に楽しそうにしていた。

「あ、この書類織斑先生にも見てもらわないと……」



「む、そうか。では私は海にでも行くか」

途中で申し訳なさそうに言ってきた真耶に、構わないと言うクロウ。

むしろこの場に留めていたのだからこちらが悪い。

その後、またと手を振って真耶と別れた。



「……むっ？」

海で遊ぶためには、当然海水パンツに履き替えなければならない。

いや、別にそこまで重要ではないのだが、やはりガッツリ遊ぶのならそうするだろう。

クロウも例にもれずに着替えるため更衣室に向かっていたのだが、その道中で一夏と箒がじつと立ち止まっているのを見つけた。

「何をしているっ？」

「あ、ああ、クロウか。これ……」

そう言つて一夏は視線を下に向ける。

そこを見ると、何故か地面からウサ耳がニヨキつと生えているのだ。

しかし毛並みのある本物ではなく、機械でできた作り物だが……。

この下に何が埋まっているのか、もう想像がついた。

「さつさと行くぞ、一夏」

「ちよ……箒!？」

共に理解している箒は、一刻も早く離れたいと一夏をグイグイ引つ張つていき消えて行つた。

一夏も理解しているので止めようとするのだが、とんでもなく強い力になすすべもなく引きずられていった。

さて、残されたクロウはどうしたものかと考える。

もし想像している人物が臨海学校に乱入するとなると、自分は久しぶりに会えて嬉しい絶対の退屈はしない。

「迷う必要などないな」

その人物が他の女子生徒たちにどれだけの迷惑をかけるかは一切考慮せず、自分の都合だけで決断した。

彼が自分勝手なのはいつも通りである。

「……………む？」

とりあえずウサ耳を引っこ抜いてみたクロウだが、出てきたのはウサ耳だけだった。あるえ？と首を傾げていると、上空から高速で空気を切り裂く音がどんと近づいてきた。

ふいつと上を見上げると、何やら物凄い勢いで落下してくる物体が一つ。

————ドオオオオオンツ！！

激しい衝撃と砂煙、そして暴風を起こしながら地面に着弾した物体。

近くにいたクロウだが、一步も後ずさることなく普通に立っているのは相変わらずである。

落下してきた物体は、とてつもなく大きな人參だった。

「クロく〜ん!!」

人參をパカリと開いて現れたのは、世界中の国家のお尋ね者である篠ノ之 東だった。

紫色のあまり手入れされていないのであろう長い髪をたなびかせながら、クロウに向かって猛ダッシュする。

そしてクロウに向かってダイブ。しっかりと受け止めてやる。

「あつはあ……クロくんの匂いだあ……」

わつしと猿のようにしがみつき、首筋に鼻を埋めてスンスンと匂いを嗅ぐ。だんだんとトロンとした顔つきになっていき、呼吸も荒くなっていく。

「会うのは久しぶりだな、束」

「ホントそうだよ。我慢できなくなつて逢いに来ちゃったよ」

勿論主目的は違うのだが、クロウに逢うために来たというのはあながち間違っているわけではない。

デイスプレイ越して顔を合わせていても、やはり実際に逢う方が高揚する。

「はあ……はあ……クロくんの匂い嗅いでたら興奮してきた」

流星年中発情期の兎さん。頬を紅潮させて目じりが下がっている。

しかし事を致すにも、ここは真昼間の野外である。

なので旅館内に戻ろうとするのだが……。

「うう……もう我慢できないよおっ！」

クロウの腕をガシツと掴んで、凄く速さで走り出す。

科学者なのにどこにそんな力があるのか。

そして束はクロウを引き連れたまま、木々が生い茂っている場所に飛び込んだのだつた。



「んんう……んぶ、んつ、ぶちゅ」

人が通る場所から少し離れた茂みに飛び込んだかと思うと、クロウと熱烈な接吻を交わす束。

ぶちゅうつと貪るように唇を合わせ、にゆるにゆると舌を絡ませ合う。

そうして数分間経った後唇を離されると、束は追いかけるように舌を伸ばす。

そこから透明の唾液が垂れ、地面に落ちる。

「て、手際良すぎない?」

クロウは束が着込んでいたドレスのような洋服もしゆるしゆると脱がしていき、白いブラに覆われた乳房が露わになる。

ブラを上にはずらすと、Fカップの乳房がタプンと波打った。

これだけ大きいにも関わらず、型崩れも全くしていない。

「んっ、ふう……んんう」

柔らかな乳房を乳首に触れないように揉み、ぷにゅ……とした感触を愉しむ。

乳首に触れられなくてもピクツと時折身体を震わせ、吐息も熱っぽくなっていく。

汗が浮かんだ肌が、揉むたびにしっとりとしていて気持ちいい。

「ひゃああっ！あああっ！！」

散々焦らした後、乳首を口に含んでちゅううつと赤子のように吸引する。

ビリビリと快楽の電流が身体を駆け巡り、秘部から溢れ出した愛液がじわあつとシヨーツを濡らす。

レロレロとねちっこく乳首を舐めると、指で勃起した先端をコリコリと弄ったりもする。

白いシヨーツをゆっくりと脱がしていくと、桃色のキュツと閉まった尻穴が見えて、愛液でとろおとした秘部が現れる。

秘部は早く男根をと懇願するように、ヒクヒクと待ち焦がれている。

「ああああっ！！」

秘部を吸い付かれて、束は舌を出して嬌声を上げた。

指で広げられて、そこを舌でぴちやぴちやと舐められる。

時折身体がピクンと反応するとき、巨大な乳房はぷるんと揺れる。

そして陰核を舌尖でコリコリと刺激されると、きゅうううつと子宮が期待する。

束は蕩けた表情で、秘部に顔を埋めているクロウを見つめる。

「束、私のも頼む」

「わあっ♪」

束の目の前で露出された男根。

鈴口から先走り汁が溢れていて、すでに陰茎まで汚していた。

束はそれを嬉しそうに見て、逞しいとも感じていた。

「ただきまあす……れろお」

早速束は顔を近づけて舌を這わせた。

口内に唾液を溜めて、内側のツルツルとした肉で男根を刺激する。

溢れ出してくる先走り汁を時々飲み下しながら、男根がさらに固くなっていつているのに喜びを感じる。

シックスナインの体位になって、お互いの性器を愛撫し合う。

「ひゃうっーん、んぶ、んんっ」

舌を膣内に侵入され、肛門を広げられる。

舌を膣内に入れられるたびに男根を愛撫するのを中断してしまい、身体を短く震わせ

る。

このままでは一方的に絶頂を迎えさせられるだけだと考えた束は、自慢の乳房を使うことにした。

胸の谷間にはすでに多量の汗が流れていたのので、にゆるにゆると男根をなめらかに刺激できた。

豊満なFカップの双丘でも隠しきれない龟头を、チロチロと舌で愛撫する。

「あはあ……凄いいい」

横から乳房をギュッと圧迫して龟头を丸呑みすると、鈴口から大量の精液が溢れ出した。

凄いい勢いで発射された精液は、束の顔と乳房を白く染め上げた。

その匂いを嗅いで、まるで媚薬を浴びせられたかのように蕩けた表情を見せる。

「んふふ、挿入れちやう？んちゅ……」

「うむ、愉しませてもらうぞ」

期待した表情で、ねだるように男根を舐める。

秘裂を開いてやると、早くよこせとうごめいている。

当然これだけで性欲が満足しないクロウは、男根を秘部に合わせる。

「ああああっ!!」



そして男根を膣内に挿入すると、久しぶりに受け入れたからかギチギチと強く締め付けてくる。

しかもそれだけで軽く達してしまっただのか、ビクビクと小刻みに痙攣する。腰を動かし始め、上の口も重ね合わせる。

唾液を流し込んでやると、嬉しそうに飲み干した。

「んっ！あっ！はっ！はああっ!!」

男根を出し入れされると、豊かな乳房が重そうに、そして柔らかそうにたぶんたぶんと揺れる。

束の脛は久しぶりに入ってきた男根を逃がさないようにと、膣壁を絡みつかせる。

何度も使われているはずなのだが、処女のように綺麗な桃色をした秘部だ。

突くたびに柔らかそうに揺れる乳房を、動かさないようにむぎゆうつと握りつぶしてやる。

「よし、体位を変えるぞ」

「あひいいい……気持ちいい……」

束を四つん這いにさせると、後ろから腰を打ちつける。

軽く打ちつけただけなのだが、それだけでまた絶頂に達した彼女はぴゅーつと潮を噴く。

だがそんなことは関係ないと、クロウは動きを止めない。

東の大きく曲線を描いた臀部は、潮や愛液で濡れまくっていた。

「あひいつ!? お尻いい……っ」

いきなり肛門に二本もの指を挿入され、舌を出してよがる束。

二本だけでもクロウはかなりがっしりとした体格をしているので、指も大きく無骨なのだ。

また秘部から潮を噴かして、男根を濡らす。

そして腸内で指をぐりぐりと動かしてやると、背を反らせて悦ぶ。

さらに膣内を男根で抉ると、我慢できずに上半身をだらしなく地面に横たわらせる。

「ほら、しつかりと立たないか」

「ふあ……あああああっ!!」

力なく伏している束を、ひよいと持ち上げて立たせてやる。

だが脚は生まれたての小鹿のように震わせていて、いかにも頼りない。

自分の限界も近づいてきたので、激しくピストンさせる。

巨大な乳房をぶるんと大きく揺らす。

パン！パン！と音が出るほど強く尻肉に腰を叩き付け、双丘を握りつぶすように強く  
掴む。

最後に肛門に埋めていた指を曲げながら引っこ抜いてやると……。

「あはあああ……奥にきたあ……」

身体を細かく痙攣させながら登り詰めた。

多くの精液が腔内に流し込まれて、子宮内を満たす。

肛門はまた指を待っているのか、ぽっかりと開いたままだった。



「で、今日は何しに来たんだ？」

「ん〜？」

束は情事の余韻を楽しみながら、クロウの鍛えられた胸板に頬を擦らせている。

もう二人は服を着込んでいる。

ここは野外なので、クロウの膝の上に束が座っている形になっている。

「今日はね、箒ちゃんに専用機を持ってきてあげたの」

「ほう……」

ISを作り上げた科学者が個人のために専用機を作るといふ異常事態。

しかしクロウも作ってもらっているのです、別に驚くことではない。

彼女はとにかく身内鼻屑をする。

それ以外なら、そこらへんに生えている雑草と大して違いが判らないといった風に。

「さて、私はこれから海に行くが、お前はどっする？」

「うくん……東さんも一緒に行きたいのはやまやまなんだけど、まだ調整に一日くらいかかりそうなんだよねえ」

まだ箒の専用機は完全にはできておらず、今日一日を使って作り上げるつもりのようにだ。

「そうか、では私は行くぞ」

「うん、面白いこともするから楽しみにしててね♪」

頬に指を当てて、可愛らしく笑いながら言う束。

だが彼女がすることと言ったらとんでもないことばかりなので、正直まったく楽しみにできない。

「ほう……期待している」

まあこの男は楽しみにしたようだが……。



「あら、クロウさん？」

「む、セシリアか」

茂みから歩き出して少しすると、更衣室に向かっているセシリア・オルコットと出会った。

綺麗で豊かなクリーム色の金髪をたなびかせ、優雅に歩いている。

「クロウさんも海に？」

「うむ」

「では一緒に行きませんか？」

そうして二人は更衣室に向かって歩き出した。

道中さりげなくセシリアが手を繋いできたりして幸せそうに微笑んだりしていた。そして更衣室が見え始めたころ、彼女は恥ずかしそうにしながら切り出してきた。

「あの……クロウさん？背中にサンオイルを塗ってほしいのですが……」  
「任せろ」

即答である。

普通セシリアほどの美少女にそんなことを言われると照れたりするものだが、そういうことは一切なかった。

しかしなまじ顔が整っているのが、がつついていても不様ではない。世の中顔が全てとは言わないが、多くを占めるのは間違いない。

「ふふっ、ではまた後ですわ」

嬉しそうに笑って、女子の更衣室に入って行ったセシリア。

それを見送ると、クロウも男子用の更衣室に向かって歩き出す。

更衣室の中に入ると、当然だがすでに一夏は着替えて出て行った後だった。

そこでシャルロットに選んでもらった水着に着替え、外に出る。

「うわっ！ミキストリくんの身体すごっ！」

「身体が筋肉で盛り上がってるっ！」

「……はっ！私は織斑くん派私は織斑くん派私は織斑くん派……」

クロウが出てくると、近くにいた女子生徒たちがにわかに騒ぎ出す。

彼の身体は鋼のように鍛えられており、女子生徒たちには眩しかった。

逆にそれはクロウにも言えることで、各々の肉体に水着を纏わせている姿を見て楽しんでいた。

しかもIS学園には世界中の国々から色々な人種の生徒たちが集まっているので、身体の成長具合なども見ていて楽しめる。

さらにIS学園の生徒は何故か容姿がいい者が多いので、見ていて目の保養になる。

「遅いわよ、クロウー」

「む?」

まるで弾丸のように突っ込んできた小柄な人影。

衝撃がその人物に伝わらないよう、うまく受け止める。

躍動的なツインテールを揺らしながら突っ込んできたのは、凰 鈴音だった。

彼女も勿論水着に着替えていて、オレンジ色のビキニみたいな水着を着用している。ビキニみたいだが、まるでスポーツブラのようにつながっているやつだ。

身体の凹凸が乏しい鈴だが、それでも水着で抱き着かれると柔らかい感触が伝わる。

「元気だな、鈴」

「まあねっ！久しぶりに海に来たからテンションも上がってるし」

ガシツと抱き着きながら言う鈴。

クロウの手がどんどんとお尻に向かっていつているのには気づいていないようだ。しかしセシリアにお願いされていたことがあったので、鈴に手を付けるのは後にすることにしたようだ。

セシリアに呼ばれているからと告げると、あからさまに不機嫌になる。

離れることを渋った鈴だったが、後で一緒にいると約束すると渋々離してくれた。

そしてセシリアを探しだすクロウだったが、これがなかなか見つからなかった。

「クロウさん、お手を拝借しますわ!」

「む?」

だがいきなり手を掴まれると、引つ張られる。

クロウの強靱な身体ならそれを拒んで立ち止まっていることも可能だったが、引つ張っている相手を探していた人物だということに抵抗しなかった。

IS訓練を受けた副産物なのか、砂の上でも走るのが中々速い。

そうしてしばらく大人しくついていくと、人影がない死角になっている場所に引き込まれた。

「乱暴なことをしてしまい申し訳ありません」

「いや、気にするな」



もしクロウにサンオイルを塗ってもらえることが他の女子たちに知れたら、自分がやってもらう時間が少なくなってしまうのは明確だ。

だから女子たちの視線が当たらない場所に引き連れたのだ。

クロウを攫うときは、近くに一夏がいたのであまり彼が注目されていなかったことも幸運だった。

「うむ、しかし似合っているぞ、セシリア」

「そ、そうですか？ 嬉しいですわ」

自分の専用機と同じ色である青のビキニ水着を身に纏っている。

下はパレオを巻いており、モデルよりも美しい脚がチラリと見えるのが艶めかしい。

セシリアは嬉しそうに笑うと、クロウにサンオイルを差し出す。

「早速ですが、お願いしますわ」

「うむ、任せろ」

さっさと終わらせないと、他の女がここを嗅ぎつけてくるかもしれない。

しかもクロウを取り合っている最有力候補たちは、皆世界列強国に名を連ねる国の代表候補生たちばかりである。

彼女たちほど有能な人材なら、いつばれてもおかしくはない。

なのでセシリアはなるべく二人きりの時間を取るために少し急いだ。

パラオを取ると、肉付きのいい太ももが露出される。

下の水着は露出度が高く、美しい造形の下半身がクロウの前にさらされる。

そしてブラを取ってシートの上に寝転ぶと、Dカップの乳房が潰れて横からはみ出す。

「では……お願いしますわ」

セシリアはクロウにサンオイルを塗られることを期待して、頬を赤らめる。

クロウはサンオイルを手に垂らす。

思ったより冷たかったので、手で適温まで温める。

意外と気遣いのできる男であった。

「ん……」

上半身から塗り始めた。

肩から背中に向かって塗り、なめらかな肌を滑っていく。

背骨に沿ってサンオイルを塗ると、悩ましげな声を出す。

腋に手を入れ、脇腹にも塗る。

時折潰れて横に逃げ出した乳肉に触れる。

背中を塗り終えると、次は足首を持って脚を塗り始めた。

足首からふくらはぎに上がっていき、豊かな肉付きの太ももをさする。

この時点でセシリアの息は上がっており、身体を悩ましげに揺らしていた。何を期待しているのかは明白である。

しかしクロウは中々性感帯に触ろうとはしない。

数分間ひたすらありとあらゆる場所にサンオイルを塗る。

そしてついに、クロウは水着越しだが尻を揉んだ。

「ああ……」

臀部を触られたのに、セシリアの口から洩れたのは歓喜の震え声だった。

尻を触る手つきはサンオイルを塗るものではなく、明らかに性的な刺激を与えるためのものだった。

大きく張り出した尻肉を、モニュモニュと揉みしだく。

柔らかいのだが確かな張りがあり、飽きさせることはない。

「あつ……やつ」

グニュウ……と強く握りしめてやると、柔らかそうに形を歪めた。

秘裂からは愛液が早くも分泌され始め、水着越しにじわりと滲み始めた。

「あつ……ひあつ！」

水着越しに秘部にキスをする。

唇で陰部のプニプニとした感触を愉しんだ後、まるで食べるように口に含んだ。

舌を伸ばすと、肛門があるとところを舐める。

新しい刺激に喘ぐセシリア。

「セシリア、腰を上げろ」

「こ、こうですか？」

グツと四つん這いの体制を取らされる。

捧げられるように自分に向けられている臀部を掴むと、尻間に男根を差し入れて擦る。

所謂尻コキである。

「あ、ああ……やつ！」

これはクロウしか気持ち良くないようにも思えるが、擦るたびに陰部と肛門が刺激されるのでセシリアも快楽を得ていたりする。

秘部から漏れ出た愛液が潤滑液となり、尻を擦るのをなめらかにする。

そこに男根から漏れた先走り汁も加わって、ヌチヌチと卑猥な水音を立てる。

「あ、熱っ！」

尻から発射された精液は、勢いよく飛び出して背中や手の位置まで飛んでいった。

クロウが射精したことを確認すると、セシリアはくるりと反転して仰向けになり、股を開いて彼を誘う。

クロウもそれに乗って近づいてき、男根を――。

「ひいっ!?!」

肛門に挿入した。

予想外な場所を貫かれて、引きつった悲鳴を上げる。

「そ、そこはちが――ッ!!」

フルフルと必死に首を振って拒絶するセシリアだが、クロウはそれを気にも留めない。  
い。

腰を動かして、腸内を刺激する。

そうしているうちに、だんだんと腸内を擦られることが気持ちよく感じてしまう。

クロウはぶるぶると艶めかしく動くDカップの乳房に目をつけると、乳首を舐めだした。  
た。

「あっ!あっ!あっ!あっ!!」

乳首を舐めていたと思ったら、口に含んでチュウウウつと吸引する。

片方の乳首を口で転がして、片方は指でチツチツと素早く弾く。

「んっ!んんっ!んうっ!!」

セシリアの汗でぬれた身体を持ち上げ、唇を重ね合わせる。

そして彼女の身体を反転させて背面座位の体位を取ると、愛液が濡れそぼっている秘

部をヌチュヌチュと弄る。

「はっ……あぁっ！あっ！あっ！！」

セシリアをうつぶせに寝させると、覆いかぶさるようにして腰を振る。

パン！パン！と肉同士がぶつかり合う音が響き、セシリアの身体がビクビクと震える。

クロウもそろそろ限界のようで、ゾクゾクとした快感が脳を焼く。

男根を引くとき、肛門からプチュプチュと恥ずかしい音が発生する。

「あぁぁぁっ！！」

腸内に大量の精液が流し込まれた。

それと同時にセシリアも絶頂し、秘部からプシヤアアアツと潮を噴く。

「はぁぁ……せっかくのサンオイルが台無しですわ」

口では文句を言うが、顔は気持ちよさそうに笑っているので意味がなかった。

## 複数ぶれいハ苦手也

あの後再びセシリアの身体にサンオイルを塗り終えたクロウは、あの死角になっていた場所から離れていた。

セシリアは体力を回復させるために、少しシートの上で寝転んでおくとのこと。ハーレムを築いているだけあって、体力は凄まじい。

「あ、クロウ！もう……どこ行ってたのよ」  
「鈴か、すまん」

パシヤパシヤと海水の上を走りながら近寄ってきた鈴に、クロウはこう答える。  
流石にセシリアとさつきまでセクロスしていたとは言えない。

まあ鈴も長い付き合いだ。この男が女と二人きりになってやることと言えば決まっ

ていることを理解している。

「さっ！今度はあたしと遊びましょ！」

「うむ、構わんぞ」

だが鈴は嫌な顔一つせず、クロウを波打ち際まで誘った。

クロウが女を複数侍らせているのは周知の事実だし、もう慣れた。

「クロウ！あそこの島まで競争しましょ！」

そう言つて鈴が指さしたのは、ここから一キロほど離れた小さな島である。

本当に小さいので人は住んでおらず、無人島だった。

「当然、あんたはちよつと遅れて出なさいよ？じゃないと公平じゃないし」

そしていきなりのハンデ宣言である。

クロウの強靱な肉体で水をかくと凄い勢いで水中を進めるのだ。

鈴のように細腕では勝ち目はないだろう。

「うむ、構わんぞ」

「よっしや！じゃあ行くわよ！」

鈴は言うが早いが海水の中にザブザブと入っていき、島めがけて泳ぎだした。

クロウも少しすると、海水の中に入って行つた。

こうしてクロウと鈴の、一キロ遠泳競争が始まった。



「ふむ、遅かったな鈴」

「あ、あんたが……速すぎんのよ……っ！」

結果はクロウの圧勝であった。

しかし決して鈴が泳ぐのが遅いという訳ではない。

むしろ天性の運動神経と代表候補生として鍛えられたことも併せて、水泳はかなり得意である。

だが肉体系チートのクロウには勝てなかった。

砂浜に二人座り込んで、とりあえず鈴は呼吸を整える。

「つていうか何であんなに速いのよ」

「知らん」

そんなことを話しながら、二人でぼお……とする。

遠く離れたところから、年若い少女たちが楽しそうにはしゃいでいる声が聞こえてくる。

ちなみに鈴はこの時、クロウの体を盗み見てちよつと興奮しちやっていたりする。

それはクロウも同じで、脳内の半分以上が性欲で占められているのかと疑うほどの性豪である。

「あんたつてなんだかい匂いがするわね」

「鈴の方がいい匂いがすると思うが……」

いつかクロウが鈴の匂いを嗅ぎまわったように、今度は鈴がクロウの匂いを嗅ぎ始めた。

別に普通の匂いなのだが、鈴にしてみたらとてつもなくいい匂いに感じてまるで媚薬のように身体を侵してくる。

だんだんと頬も赤らんでいき、吐息も熱っぽくなる。

そして自然に、いつの間にかクロウと唇を重ねていた。

触れ合うような軽い接吻を交わした後、舌を絡め合う。

びくびくと可愛らしく身体を振るわせ、ゾクゾクとした快楽に負けないようにキュツと目を瞑っている。

少しの間口づけをした後、鈴は自ら水着を脱ぎだした。

慎ましやかなAカップの胸が露わになり、桜色の先端も露出する。

その乳首にキスをして、先端だけ舌でちろちろと柔らかく刺激する。

「あつ、ん……………」

乳輪を先端と一緒に舐めてやると、面白いように感じている。

茶色のツインテールを砂浜に垂らし、喉を反らせる。

「んっ、ん、ふっ……………んっ」

後ろから抱きかかえるようにして、腕を回して陰部を愛撫する。

くちゆくちゆと愛液が指でかき回されて音を出し、分泌量を増やす。

鈴は顔を横に向け、キスをねだる。

クロウもそれに応えてやり、舌を愛撫し合う。

十分に濡れていると判断したクロウは、正面に回って鈴を膝の上に乗せる。

所謂対面座位の体位となっている。

鈴は小柄なので、後ろから見たらクロウしか見えない。

亀頭だけを膣内に埋めると、早く全部よこせと子宮がうづく。

「ちゆ、ん……………んん——っ!!」

ぐっと鈴の顔を自分側に寄せさせて、キスをする。

そして鈴がうっとりとして身体から余分な力を抜けさせると、一気に男根を全て膣内に収めた。

奥まで愛しい男のモノで満たされ、恍惚とした表情を見せる鈴。

「あつ！あああつ！ああつ！！」

男根を奥に押し込めると、小さな体躯の鈴は子宮口まで届いてしまう。

亀頭が子宮口に当たると、こつんとした感触が伝わる。

「あつ！んあつ！あつ！！」

少ない乳肉を、ぎゅつぎゅつと揉んでやる。

そして小さな桜色をした乳首を、こりこりとこねたりぎゅつと潰したりする。

そうすると鈴は耐えられないといった様子で、クロウに抱き着く。

「あつ！あああつ！あああつ！！」

ぬちやぬちやと、男根が膣内をかき回す音が聞こえる。

片方の乳首を口に含み、片方は指で潰す。

貧乳ゆえに敏感な鈴は、がくがくと身体を震わせる。

「人が来ないからといって、声が大きすぎないか？」

「だ、だつてえ……ああつ！」

ぎゅううつと手を恋人つなぎで絡め合わせ、ぴちやぴちやと唾液で濡れた舌で乳首を

転がす。

口をそのまま上に持って行き、口で鈴の口を塞ぐ。

それでも鈴はクロウの口内で、大きな嬌声を上げる。

身長が150センチしかない鈴は、当然性器も小さい。

クロウの巨根を挿入されると、膣内がこじ開けられるので快感もかなり感じるのだ。

射精が近いのを感じると、対面座位の体位を取らせていた鈴を押し倒して正常位にする。

「あひっ！あっ！あっ！ああっ！！」

ぬっぬっっ！ピストンされて、時折子宮口をこっこつと突かれると身体をビクンと撥ねさせた。

クロウの限界を膣内で男根が震えることで感じ取った鈴は、膣内で射精しろとばかりにクロウの身体を離れないようにぎゅううっっ！と抱きしめた。

そんないじらしくも可愛らしい鈴のこの行動に、クロウも身体の中で震えている小さな肢体を抱きしめてやる。

「あっ！んっ！あああああっ！！」

そして子宮口に男根を押し付け、精液を発射した。

同時に鈴も絶頂し、びくんびくんと身体を痙攣させた。

鈴は目の前にある愛しいものを離さないように、余韻に浸りながらも強く強く抱きしめたのだった。



「……まさか腰が抜けて泳げなくなるとはな」

「う、うっさいわね！」

顔を真っ赤にして声を荒げる鈴。

クロウと鈴は情事の後、小さな無人島から本島へと戻っていた。

しかし鈴は先ほどまでの情事で泳げなくなってしまい、今はクロウに背負われている状態だ。

彼女がキュツとしがみついているので、慎ましいが確かな柔らかさがある双丘が背中に当たって気持ちいい。

その後もなんだかんだ話しながら、本島に泳いで戻った。

着いた瞬間にすぐに背中から飛び降りた鈴は、ちよつと休むとふらふらしながらどこかへ歩いて行つた。

背負われて泳ぐのは恥ずかしかつたらしい。

「クロウ〜!」

「む?」

自らの名前を呼ばれた方向を見ると、太陽に金色の髪を反射させながらこちらに向かつてくるシャルロットと、それに引つ張られてこちらに来る未確認物体がいた。

黄色いビキニタイプの水着で、下半身はかなり短いスカートのようなもので隠している。

ブラで上げられた胸がいつもよりも大きく見え、深くできた谷間に専用機の待機状態である十字のネックレスが埋もれている。

「うむ、やはり似合っているぞ」

「そ、そう……かな?」

クロウの言葉にポツと頬を赤らめて、えへへとだらしなく笑うシャルロット。

くねくねと身をよじると、魅惑的な肢体もうねるので目に悪い。

……クロウはじつと見ているが。

「で、お前は何をやっているのだ？ラウラ」

「な、何故分かった!？」

白いタオルで、まるでミイラ男のように身体中を巻いて隠している人もどき。

クロウは身長や体格を見て、ラウラだと判断した。

体格で人が判断できるなど、最早変態である。

「ラウラも水着に着替えたんだけどね。恥ずかしいって言って出てこないの」

ラウラのことだからスクール水着で来ると思ってたんだけどなあとシャルロット。

同じ部隊の副隊長に言われるまで、本当にそうしようとしていたとはラウラしか知らない。

「ほら、出てきなよ。クロウもラウラを見たいよね？」

「うむ、是非とも」

「う、うう……」

シャルロットの問いかけにすぐに答えたクロウを見て、嬉しくなって見せたいという気持ちと恥ずかしいという気持ちがラウラの中でぶつかり合う。

そして勝ったのは……？

「ど、どうだ？クロウ」

勝ったのは見せたいという気持ちの方だった。



タオルをバツと脱ぎ捨てると、中から水着を身に着けたラウラが現れる。

それはフリルがついた黒いビキニの水着で、布面積が小さい。

鈴と同じか少し幼い体軀であるラウラが大胆な水着を着ると、ギャップも凄まじい。

普段は流しているだけの銀色の髪は、シャルロットによつてツインアップテールになつていた。

恥ずかしそうに身をよじりながら、クロウに聞いてくる。

「うむ、よく似合っているぞ。しかし少し大胆すぎないか？」

「そ、そうか。これはクラリツサに勧められて買ったやつだ」

またあの日本を勘違いしている典型的な外国人である副隊長か。

インターネットが発達した現代で、なにゆえ少女マンガからしか知識を得ようとしなののか。

いつもつまらないことをラウラに吹きこんではいるが、今回ばかりは褒めたやりたいと思つたクロウだった。

「クロウも僕が選んだ水着を使つてくれたんだね」

「せっかく選んでもらつたしな」

臨海学校に入る前に行ったデートを思い出して言うシャルロット。

お互いが選んだ水着を着るのは、まさに恋人同士ではないだろうか？

……まあクロウの恋人はいっぱいいるのだが。

「むう……嫁。今は私だけを見る」

シャルロットと仲好さげに話しているのを見て頬を膨らませたラウラは、クロウの腕をクイクイと引つ張つてわがまを言う。

しかしシャルロットもそれは面白くない。

「ダメだよ、ラウラ。クロウを独り占めなんて」

シャルロットもギュツとクロウの腕に抱き着いて抵抗する。

フランスの金髪美少女と、ドイツの銀髪美少女に取り合いをされている男。

傍から見たら嫉妬で爆発してしまいそうな光景だが、まあ彼もそれなりの甲斐性を持つていたりする。

ちなみにここは、他のIS学園の生徒がいる砂浜である。

じとくと見られていることに気づいたシャルロットは顔を赤くする。

「く、クロウにラウラ！ちよつとあっちの方に行つてみない!？」

「いや、別に——」

「ほら！早く！」

クロウとラウラの返事を聞く前に、シャルロットは二人を引きずつて人影の少ない方へと走り出した。

「どうしたのだ、いきなり」

「ごめんね？たぐさんの人に見られてたからつい……」

誰もいない茂みに着くと、シャルロットはようやく止まった。

聞いてきたラウラに、顔を赤く染めながら答える。

しかしそれなりにここまでは距離があつたのだが、誰一人息切れしていないとはさすがである。

フランスの代表候補生にドイツの特殊部隊隊長兼代表候補生、そしてただのチート野郎なのだから当然かもしれない。

閑話休題。

さて、ここまで二人の美少女に連れてこられたクロウだが、彼は水着を纏ったとはい

えほぼ裸同然の彼女たちに抱き着かれたりしていたのだ。

しかも二人とも最近テレビに出ているアイドルなど目じやないほどの美少女である。そうすると、男なら必然的にこみあげてくるものがあるわけで……。

「く、クロウ!?前、前!」

「うむ」

シャルロットに指摘されているのに、何を誇らしげにしているのだろうか。

普通恥ずかしがって隠すものだと思うのだが……。

今日だけで何発も色々な美女美少女に吐き出しているのに、いまだにたぎるとはとんでもない男である。

「む……これは私たちでこうなったのか?」

「当然だ」

「そ、それなら……」

ラウラはおずおずとクロウの水着に手をかけると、それを下にずらす。

するとビンといきり立った逸物が、ラウラとシャルロットの目の前でさらされる。

そしてラウラはそれに顔を近づけて、口淫を始めた。

唾液と鈴口から漏れ出す汁で、厭らしい水音が発生する。

シャルロットは目の前で行われる卑猥な行為にしばし呆然としていたが、意識を取り

戻すとラウラに文句を言う。

「ちよつと、ラウラ!?!何してるの!?!」

「んちゆ、ちゆ……ぷはっ。嫁の性欲を発散させてやるのも私の役目だからな」

そう言つて聞く耳持たずといった様子で口淫を再開する。

すぐさま行為に戻つたラウラに、また呆然としてしまうシャルロット。

「ぼ、僕もやる!」

ハツと意識が戻ると、すぐにクロウとラウラの間割り込んでいった。

「む、どけシャルロット」

「嫌だね。それに僕の方が胸大きいし」

しゅるりと上の水着を取り払うと、Cカップの形の良い乳房が零れ落ちてくる。

それを男根に押し付け、亀頭をレロレロと舐めまわす。

「むうう……私だつて……っ!」

ラウラも対抗して、胸を露出して男根に寄せる。

しかしAカップでふくらみが十分でないラウラの乳房では、肉の柔らかさというより

肌の滑らかさで男根を刺激した。

形も張りも素晴らしいシャルロットの乳房と、慎ましいがとても感度の良いラウラの

乳房が押し合う。

「ん、ふ……れろ、じゆるっ」

「れろお……ぴちやぴちや」

シャルロットは亀頭、ラウラは陰茎の裏筋を舐める。

ラウラは顔をどんどん上に上げていき、亀頭の裏側も舌で清める。

そして二人とも十分に亀頭を綺麗にすると、カリ首をちろちろと愛撫する。

シャルロットが亀頭を丸呑みしてじゆるるるると音がするほど吸引し、ラウラが陰茎をハーモニカを吹くように横からはむつと口に含む。

「んっ……んう」

二人の外国人美少女に奉仕された男根は、白濁液をシャルロットの口内で遠慮なく発射した。

今日何発も射精したのにも関わらず、未だ濃厚なそれを口内で転がす。

ラウラも亀頭にへばりついた精液を舌で掬い取り、味を占める。

「クロウ、私の準備はもう万全だぞ」

「ええっ!? ずるいよー!」

身体中が性感帯なのかと疑いたくなるほど敏感なラウラは、触れられてもいないのにすでに陰部から愛液がにじみ出ている。

感度が良いのは間違いないがラウラほどではないシャルロットは、抗議の声を上げ

る。

しかしクロウは亀頭をにゆるにゆると膣口にこすり付けて愛液で濡らすと、膣内へとゆつくりと埋めていった。

「あ……あああ……」

ずぷりと全て埋めると、鈴以上に小さな体躯のラウラは膣内いっぱいにくろウが入っているのを感じた。

辛ささえ感じるような巨根なのに、ラウラに顔に浮かぶのは悦びただ一つだった。

「あっ……あっ……あっ……あ———」

ぐちゅぐちゅと膣内を男根でかき回し、重力でさらに潰れた慎ましやかなAカップ乳房の乳肉を揉む。

ゾクゾクとした快感がラウラを襲い、ぶると小刻みに身体を震わせる。

「んっ……ひいっ……んんっ!!」

正常位だったのを後背位に変えて、激しく腰を叩き付ける。

歯を力強く食いしばって、送り込まれる快楽に耐えようとする。

そんなラウラの痴態を見て、シャルロットはいつの間にか陰部に手を伸ばしてぐちゅぐちゅと弄っていた。

早く男根を求める身体に耐えられなくなったシャルロットは、さっさとクロウを射精

させて自分に構ってもらおうと考えた。

「むっ」

シャルロットはすぐに行動すべくクロウの後ろに回ると、後ろから陰囊を舐めはじめた。

ぴちやぴちやと陰囊をふやけるほど舐めると、その行動はエスカレートしてクロウの肛門まで舐めはじめた。

ずりゆりゆと舌を腸内に侵入させ、細く白い指で陰囊を優しく揉んでやる。

「ひいっ！急に激し——あっ！あっ！あああっ！！」

シャルロットの思わぬ行動に強い快楽を与えられたクロウは、ピストン運動をかなり速くする。

そしてラウラの膣内で、シャルロットに肛門を舐められながら射精した。

荒い息を吐いて地面にくたつと力なく伏すラウラ。

シャルロットは待ちきれないとクロウを仰向けに押し倒し、跨るようにして座る。

「ふふっ、今度は僕の番だよ」

すでに濡れそぼっていた膣内に男根をゆつくりと埋めていく。

そして全部入りきると、膣内を隙間ないほど埋め尽くされた。

「あっ！クロウは、休んでいいからねっ！僕が！動く、んっ！から！」



ぬぼぬぼと厭らしくも大股を開いて腰を上下するシャルロット。

薄く茂った金色の陰毛や、男根が膈内に入ったり出たりする情景が丸見えになる。

それでも彼女はCカップの乳房をたぶたと揺らしながら、腰の運動を止めることはなかった。

「んはあっ！はああっ！んうっ！！」

「むう……クロウ、私もしてくれ」

一心不乱に腰を動かして快楽を得ている姿を見て、ラウラは羨ましそうな視線を送りながらクロウの顔面に陰部を押し付ける。

クロウの眼前には、蕩けた秘部が現れている。

「あっ！んっ！し、舌も……んっ！気持ちいいな……っ！！」

「あああっ！んくうううっ！！」

じゆるじゆると舐めても舐めてもきりが無いほどのラウラの愛液を啜り、シャルロットはそんなクロウに魅惑的な肢体を打ち付ける。

「ぶはっ……好き勝手やってくれたな」

「んあああああっ！！」

好き勝手腰を打ちつけていたシャルロットの開かれた太ももを掴み、腰を上に向かって強く突きつけた。

そうするとガクガクと身体が震え、舌を出して喘ぐ。

膣内に一番奥で射精すると、シャルロットは背を弓なりに反らせて絶頂した。陰部から男根を抜き取ると、どろりとした液体が零れ落ちた。



「んあっ！あっ！ああっ！！」

「あうっ！はああっ！！」

ラウラを下に寝かせ、その上にシャルロットを覆いかぶさるようにさせる。

未だ衰えを知らない男根をラウラの膣内で出し入れし、シャルロットの陰部には指を入れていく。

ラウラの膣はじゅぽじゅぽと突かれるときゆうつと膣壁が絡みついてくる。

シャルロットの陰部も、まるで洪水のように愛液が溢れ出してくる。

「んううっ！ううっ！ちゅっ」

「んむっ！ぢゅっ！」

自然とシャルロットとラウラの顔は近づいていき、濃厚なキスを交わす。そして二人ともまた登り詰めた。

ラウラの秘部から男根を抜き取ると、今度はシャルロットの秘部に突っ込んだ。

ラウラは下で身体を逆にする、目の前にきた陰囊を優しく揉む。

するとシャルロットは秘部から全身へと駆け巡る快楽を誤魔化しようと、ラウラの秘部に吸い付いた。

じゆるじゆると愛液を啜られ、厭らしく喘いでしまう。

「はっ！あっ！はあああっ！！」

「んっ！んうっ！んんんっ！！」

シャルロットは陰核を舌で舐めながら、ずぼずぼと指を膣内に入れて動かす。女性だからなのか、感じるところもよくわかつているらしい。

「んあああああっ！！」

「ひあああああっ！！」

クロウの精液を膣内で受け止めて、絶頂するシャルロット。

ラウラもシャルロットの愛撫で絶頂し、ぶしゅあっ！と潮を噴いた。

この事で、二人がさらに仲良くなったのは言うまでもない。

## 淫靡ナ時ノ終ワリ

クロウとシャルロット、そしてラウラが砂浜に戻ると、そこではバレーボール大会が行われていた。

まあ大会というよりかは、勝ち抜き戦の試合みたいな感じだが……。

現在連勝しているのは、セシリア・鈴の英中コンビだ。

一夏・箒の日本ペアも奮闘したのだが、セシリアと鈴チームの方が何枚か上手だった。今は二人と戦うペアを求めているようだ。

「二人とも行ってみたらどうだ？」

「うくん……ラウラ、どうする？」

「そうだな……バレーボールはしたことがないから、少し興味はあるな」

「決まりだねっ。お〜い！」

てててと走っていく二人。

そしてクロウや女子生徒たちが見ている前で、壮絶な戦いが始まった。

片方が点を決めれば、片方が点を取るといふ接戦。

四人とも運動神経はかなり良いので、見ていても楽しい。

クロウからすれば、ジャンプするたびに柔らかそうに弾むセシリアとシャルロットの乳を見て嬉しい。

鈴とラウラは……うん、まあいいと思う。

「いや〜、凄い勝負だね〜」

「そうだな」

そしてクロウ大好き専用機組がない間に、本音が彼に近づく。

彼に隙間がないほど近寄りながら座り、目の前で行われるバレーボールの応酬を見る。

「しかし暑くないのか？」

この砂浜を照り付ける7月の海で、水着ではなくまさかの着ぐるみを着ている本音。

見ているだけでこちらが暑くなってくる。

「ん〜……確かにちよつとだけ暑いかも〜」

顔は出ていたとはいえ、それ以外は全部着ぐるみで覆われているのだ。

本音は慣れているからなのかもしれないが、男でもぶつ倒れる可能性が高い。

「んしょつと……やっぱり着てない方が涼しいね〜」

本音は着ぐるみを上半身だけ脱ぐ。

そしてクロウはそれを見て、少しの間呆然としてしまう。

その理由は、着ぐるみの中での本音の水着である。

最早水着と呼べるかさえ怪しいもので、乳房の先端だけを隠すように縦に細長い布しかなかったのだ。

なので横乳が盛大に見えており、肌に浮かんだ汗がそこを滑る。

「（おおく、見てる見てる〜）」

クロウは遠慮なく本音の胸を見ているが、これは本音の計画通りだったりする。

このまま欲情して襲ってもらおうという算段だ。

そして本音の予想通り、いつの間にか砂浜からクロウと本音の姿が消えてた。

……しかしとんでもない精力である。



また色々と死角になってる場所に来たクロウと本音。

二人はそこで唇を合わせていた。

「んぷっ、んっ、んう……」

本音の口内に舌をにゆるりと侵入させて、口内をかき回す。

本音はそれをうっとりとしながら受け入れて、幸せそうにしている。

クロウは砂浜に跪くと、上の水着と同じく布面積が異常に少ない下半身へと顔を近づけた。

そして水着を脱がすと、むわりとした熱気と汗の匂いが彼を襲う。

「うむ、汗臭いな」

「そ、そんなこと言わないでよ……ひゃんっ!？」

本音の涙目になっての抗議を聞き流し、ペロンと陰部を舐め上げる。

汗でぬれたことや匂いなども気にせず、にゆるにゆると舐める。

そうしてしばらくすると、今度は指を一本膣内に挿入した。



膣内は愛液で濡れており、あつさりと指を受け入れた。

もう一本と薬指も挿入し、結果二本の指が本音の陰部に埋まる。

くちゆくちゆと弄っていると愛液が指を伝って砂に落ち、砂はそれをすぐに吸収した。

ほたほたと立て続けに落ちると、吸収しきれずに水の後を残す。

「さて、次は私もやってみらおうか」

本音の淫靡な姿を見てすっかり興奮していたクロウの男根は、どうしてこんなに元気なのかと疑うほど勃起していて先走り汁も出ていた。

それを本音の顔にこすると、ぴちやりと汁が顔についてしまった。最低である。

しかしそんなことをされても本音は嫌そうな顔をせず、素直に舌を伸ばしてペロペロと男根を舐めだした。

口を開けた際に漏れ出た吐息が男根に当たって、弱い快楽を与えた。

陰茎を手で握り擦りながら、亀頭を口に含む。

口内で吸引して刺激し、漏れ出た先走り汁をごくごくと飲んでいく。

本音の柔らかな内側の頬肉を亀頭が押し上げ、顔を歪めている。

「ほら、その胸も使ってくれ」

「は〜こ」

亀頭を舌先でちろちろと焦らすように舐めながら、上の水着も脱ぐ。

そしてポロンと零れ落ちた豊かなDカップの乳房で、男根を包み込む。ふにゆりとした柔らかい肉に包まれ、ピクピクと震える男根。

本音の汗のおかげで滑りも良く、にゅつにゅつと擦られる。

自分で乳房を掴んで不規則に動かして、射精を促す。

舌で溢れる汁を舐めることも忘れない。

「えへへ、たくさん出たあ〜」

びゆるびゆると勢いよく吐き出された精液は、顔と乳房、そして髪まで汚してしまう。しかし本音は嬉しそうに、そして淫靡に笑ってれるれろと精液を舐めとっていく。

亀頭に吸い付き、尿道に残っていた精液を飲み干していく。

そして味わうように口内で転がし、ごくんと飲み込んだ。

「ひゃうっ！ひああっ!!」

クロウは何の予告もなしに陰部に手を突っ込むと、小刻みに動かし始めた。

そして桜色の乳首をコリコリと弄っていたかと思うと、突然ぎゅううつと強く潰すように摘まんだ。

本音の吐息が荒く、そして熱くなる。

「あああああっ!!」

Dカップの乳房を揉みしだきながら、今度はキュツと閉じた肛門に指を挿入した。身体の中で最も汚い場所も刺激され、本音の目の中でチカチカと電気がつく。

乳房を揉んでいた指を膣内に挿入すると、陰部と肛門の中に入った指をそれぞれバラバラに動かし始めた。

ピクンピクンと身体を震わせ、陰部からは粘り気の強い愛液をトロリと垂らす。

ガクガクと脚が震え、立っているのも限界になる。

陰部から溢れた愛液は陰部の周りを濡らすだけでなく、肉付きのいい太ももを伝ってむっちりとした脚を流れ、地面に砂にまで届いていた。

「あああああああつ!!」

陰部と肛門に埋まっていた指を引っかけるようにしながら抜き取ると、ぷしやあああつ!と盛大に潮を噴きながら絶頂した。

柔らかな肢体が、砂浜に崩れ落ちる。

そんな本音を仰向けに寝かせると、ずぶずぶと男根を陰部に埋めていった。

本音が求めるように舌を出すので、クロウも舌を出して触れ合わせる。

クロウが上に覆いかぶさっているので、クロウの唾液を一方的に流し込まれるような感じになる。

そして本音はそれを美味しそうに飲み下していく。

「あつーあつーあつーあつー!!」

本音の膣内の気持ち良さに、腰を止めることができない。

にゅぷにゅぷと男根を出し入れし、本音の反応を見て愉しむ。

さらに奥へと男根を突き入れるために柔らかい腕を掴んで、自分側に引つ張る。

二の腕に豊満な乳房が乗っかり、ぶるんぶるんと重たげに揺れる。

「ひゃあああつ!!」

仰向けに寝かせていた本音を四つん這いにさせて、後ろから突き立てる。

腰と尻の間に隙間がないほど、強く押し入れた。

本音はまるで犬のように、はっはつと断続的に息を漏らす。

手持無沙汰の手を使って、尻肉を開かせて肛門を広げてみる。

先ほどまで指をくわえていた厭らしい穴が開く。

びたん!びたん!とむっちりとした尻肉に腰を叩き付ける勢いを強くして、限界を伝える。

「あああああ……」

汗に濡れてしっとりとした乳房を形が変わるほど強く握り、膣内で射精した。

背骨が折れるほど弓なりに反らせて、快楽を得る。

そして半分ほど射精したかと思うと、ちゅぽんと音を立てて陰部から引き抜いて肛門

に突き入れた。

「あぐうっ!？」

腸内にビューー!ビューー!と精液を流し込む。

そんな乱暴な行為にも、本音はだらしなく舌を垂らして悦んだ。

外気にさらされた赤い舌から、唾液が垂れて砂浜に落ちたのだった。



「あれ〜?皆いないね〜」

「そうだな……」

クロウと本音が甘いひと時を過ごして戻ってくると、バレーボールの試合で盛り上がった現場にはもう学生たちはいなかった。

いや、少なからず人はいたのだが、それでもかなり少なかった。

「あいつらなら今は食事中だぞ」

「千冬か……」

どうしたものかと考えていると、I S 学園教師である千冬が声をかけてきた。

千冬はいつものようにキリッとしたスーツを着ているのではなく、彼女も海というところで水着に着替えていた。

大人の女という雰囲気を買わせる千冬に、とても似合った黒いビキニタイプの水着。豊満な双丘からなる谷間も惜しげもなくさらされていて、本音ほどではないが布面積が少ない。

もしここに男がいたのなら、何人もがナンパしてくること間違いなしである。

「そういえばお腹減ってるかも」

さすさすと着ぐるみ越しにお腹を撫でながら言う本音。

それは時間ということもあるだろうが、激しく運動したからではないだろうか？

「クー、私たちもごはん食べにいきましょう？」

「うむ、そうだな」

「ま、待て。ミキストリは少し残ってくれ」

スタスタと離れようとする二人のうち、クロウだけを呼び止める千冬。

頬を少し赤らめて恥ずかしそうにしている姿は、普段の千冬からは想像もできない。

本音は千冬の態度を見て何か察したのか、ごゆっくりと言つて一人で歩いて行つてしまつた。

「で、何か用か？織斑教諭」

「なに、少し私に付き合え」

IS学園の教師は、当然臨海学校の途中でもやらなければならないことが山ほどある。

そしてこの行事中、教師の自由時間は今の数時間しかないのだ。

千冬も凛々しい女教師と言えども、まだ二十四歳の若い身である。海で好きな異性と過ごしたいと思うのも普通だ。

こうしてクロウは、千冬と少し遊ぶことになった。

……まあどうせすぐにアツチ系に持つていくのだろうか。



そして案の定である。

生徒や他の教師たちがいないことをいいことに、性的なことに励むクロウと千冬。

Eカップの豊満な胸を、水着越しに掌で掴む。

「千冬はいい匂いがするな」

「な、何を……あつ」

水着と乳房の間に手を忍び込ませ、直に感触を愉しむ。

ふかふかに柔らかいのだが、手を押し返すような強い弾力もある。

ちよど掌の真ん中くらいに、コリコリとした感触があつた。

「んむっ、ん、ちゅ、んふう……」

千冬の健康的な色をした唇に、喰らいつくように唇を合わせる。

舌を侵入させ、口内でにちやにちやと絡め合わせる。

歯の一本一本を磨くようにして舐めてやると、千冬は気持ちよさそうに目を細める。

片方の手はブラをずらし始め、もう片方は弾力のある尻肉を掴んでいた。

ブラを完全に取り払うと、ふよふよと柔らかい肉が手に当たる。

「綺麗だ、千冬」

「ば、馬鹿者……」



齒の浮くような言葉に、顔をカツと赤らめる。

口を離すと、唾液が何本もの橋となって二人をつなぐ。

口から漏れ出した唾液は口の周りだけでなく、深い胸の谷間にまで広がっていた。キスをしている間うまく呼吸ができなかったのか、千冬は呼吸を荒げている。

「あつ、あつ、あつ、あんっ！」

すでに男根の受け入れが可能なほど濡れていた膣内に、指を挿入して弄る。

ぐちゅぐちゅと小刻みに動かすと、愛液が飛び出してパタパタと地面に落ちる。

頬を伝う汗を舐めとり、豊満な乳房の先端を指で摘まむ。

「あうううっ!!」

仰向けに寝ていても美しい隆起を描く乳房を掴んで、乳首同士を合わせるようにする。

そして二つの乳首を合わせて口に含み、吸引する。

そうしながらも、乳房をぐにぐにと揉む。

乳首から口を離れたときには、乳房はよだれで濡れまくっていた。

むっちりとした肉付きが豊かな太ももを掴んで脚を開けさせると、大切な秘部が露わになる。

愛液と汗で濡れたそこは、むあつとした熱気があった。

「あぁっ!!」

そこに男根を突き入れ、ピストン運動をする。

ぷちゅぷちゅと愛液が飛び散る。

ずぶずぶと突いていると、豊かな乳房が腰の動きに合わせて揺れて、陰部からはねつとりとした愛液が漏れだす。

いつの間にか、千冬は自分で太ももを掴んでクロウが動きやすいようにしていた。

「んふうっ！ふうっ！んんっ!!」

グツと身体を千冬の方に持つていき、唇を塞ぐ。

口内は千冬が吐いた嬌声と吐息で満たされる。

乳房をギュッと握りしめ、パン！パン！と音が出るほど強く腰を突きつける。

「あぁあぁあぁっ!!」

そして膣内で射精した。

どこにこれほど溜まっていたのだろうかと聞きたくなるほどの大量の精液が、まるでホースから出された水のように放出される。

それは膣内だけでは収まりきらず、重力で垂れて尻まで汚した。

「あぁっ!?!」

だがクロウは腰を止めなかった。

ズン！と強く膣壁を抉ると、背筋を反らせて快楽を得る千冬。  
Eカップの乳房が重たげに揺れる。

腕を上げさせると、れるお……と脇を舐め上げる。

汗の濃厚な味が口内を満たし、千冬は恥ずかしい場所を舐められて顔を紅潮させる。  
ぐちゅぐちゅと膣内がかき回される音が響き、肛門が何かを求めるようにパクパクと  
開閉する。

「あつ、はつ、あつ、ひいいつ!!」

ぎゅうううつと、まるで牛の乳を搾るように乳房を握りしめる。

乳首だけでなく乳輪も巻き込んで口に含ませ、舐めまわす。

そしていきなり乳首を強く噛んで、引っ張る。

乳房の形がぐにやりと歪み、片方の乳房も強く掴まれて指の間から肉が漏れ出る。

「あああ……」

乳房を揉みまわしながら男根を挿入していると、限界が訪れた。

クロウは男根を引き抜くと、千冬の端正に整った顔に精液をぶっかけた。

しかし今の千冬はうつとりとしてそれを受け入れ、未だ勃起したままの男根に頬ずりをしている。

普段は凜々しくても自分の前では一匹の牝になる千冬にゾクゾクとした興奮を覚え

たクロウは、顔にかかっていた精液を手で塗りたくってやる。

ベチヨベチヨとした精液が顔中に広がるが、それも甘んじて受け入れた。

「あつ、はつ、はつ、はつ！」

今度は千冬を四つん這いにさせ、後ろからパン！パン！と打ちつける。

むっちりとした尻肉に腰が当たって心地いい。

まるで馬の手綱を引っ張るように腕を掴み、奥に奥にと男根を突き入れる。

豊満な乳房も上下に揺れている。

千冬はもつと気持ち良くしてほしいと、後ろに回した手で尻肉を広げる。

陰部どころか肛門まで全てさらけ出される。

突きたびに大量の愛液が飛び散り、地面やクロウを濡らす。

ギユツと乳首をつねりながら男根を奥へ挿入してやると、気持ちよさそうに眉を寄せた。

「はあああ……あつ!!」

しばらく千冬を突いていると、だんだんと子宮が降りてきた。

子宮口に龟头が当たるたびに、くちゅくちゅと淫靡な音が出る。

そして子宮口が男根を求めるように開いたとき……。

「あああああつ！イクうううううつ!!」

学園で教鞭を振るう千冬ではありえないような嬌声。眉尻を下げながら涙を流す。

口を大きく開けて舌を出し、よだれが垂れ墮ちる。

それは胸の谷間へと落ち、下に流れていく。

下腹部では、白く濁った液体と透明の液体が混ざり合っていた。



時は経って夜七時半。

昼間存分に海で遊んだ——ごく一部は違う遊びをした——生徒たちは、大広間に集まって皆で食事をとっていた。

流石国立。料理は一人一人に膳が置かれており、品数も豊富だ。

畳に座布団を敷き、その上で正座になっていたかどうかという形だ。

「う〜ん……美味しい〜」

昼間色々頑張ったクロウの隣に座るのは、浴衣を身に纏ったシャルロットだった。何故かこの旅館では食事中の浴衣着用を義務付けているらしい。

まあそれで困ることはないからいいのだが。

しかし外国人の多くが『これなんて拷問?』と言う正座を、フランス人のシャルロットができてるのは流石である。

日本の環境に適応している。

「う……………くっ……………」

逆に適応できていないのは、クロウのもう片方の隣に座るセシリアである。

そうあからさまに動いてはいないが、時折足の居場所を楽なところを探すように動かしている。

「……………大丈夫か?」

「え、ええ。何も問題ありませんわ」

すぐさま嘘だと見分けられる作った笑顔。

色々な国・地域から集まる生徒たちのために、一応テーブル椅子付きも用意されているのだが、クロウの隣に座れたこの労力と幸運をむげにする訳にもいかないのだ。

しかし他の人に迷惑をかけているのでもないので、クロウはこれ以上言わないように

する。

「ねえ、クロウ。これって何かな？」

クロウの浴衣の袖をちよいちよいと引つ張つて指さしたのは、日本人には欠かせない香辛料、山葵<sup>わさび</sup>である。

今回の料理の中にはカワハギの刺身があるので、これに付けて食べるのだ。

「うむ、これは山葵と言つてな。ほんのりとした甘さが感じられる調味料みたいなものなのだ」

平然と嘘をつく馬鹿。

「へへ、そうなんだ」

そして疑いもせず信じるお人よし。

「うむ、一口でパクリといくといいぞ」

「そうなんだ、いただきます」

クロウのとんでもない嘘を無垢で純粋なシャルロットは信じて、こんもりと小山になつている山葵の塊を箸でつまむ。

そして甘い物大好きなシャルロットは、甘さに期待して笑顔のまま口に含んだ。

「——んにゃあつ?!」

そして顔を真っ青にした。

口内をちくちくとした刺激感が襲い、鼻をツーンと猛烈な痛みが通り抜ける。この時シャルロットは悟った。騙されたと。

水の入ったコップをグツと傾けて、口を癒そうとする。

そんな姿を、クロウは珍しく表情を動かしてニヤニヤして見ていたのだった。

ちなみに少し離れたところでは、一夏が箒に『マツサージしようか?』と部屋に誘っていたりしていた。

傍から見れば、完全に性的な意味で喰うためのナンパである。



食事を終えた生徒たちは、それぞれの部屋へと戻っていく。

クロウも当然それに従っており、温泉に入った後部屋に戻った。

山に近いからか、露天風呂に入ると夜空に煌めく星が拝めた。



都会では中々見ることでできない絶景に、クロウも少し見入ってしまった。

「ふう……いいお湯でした——って、何で上半身裸なんですかあつ!」

頬を伝う水滴をタオルで拭いながら部屋に入ってきた真耶。

真耶も温泉に入っていたようで、緑の髪がしんなりと濡れている。

髪から垂れた水滴が鎖骨を通って深すぎる谷間に消えていく様は、情欲を掻き立てる。

そんな彼女は、部屋で濡れた上半身をさらしていたクロウを見て顔を真っ赤にする。

バツと目を覆っているが、その指の隙間はなんだろうか？

「いや、少し熱くてな。まあ冷房も効いているから、もう少し我慢してくれ」

「は、はい……」

真耶はクロウから少し離れた位置に座ると、チラチラとクロウの鍛え上げられた肉体を覗き見る。

男が女のスタイルを見て興奮するのと同じように、女も男のスタイルを見て興奮するのだ。

当然それぞれの性的嗜好があるのだが、真耶はがっちりとした男が好きなのだ。

「そんなに気になるのだったら、近くで見ても構わんぞ」

「ふえっ!」

そう言われて真耶は顔中を真っ赤にする。

覗き見ていたのをばれたら、誰でも恥ずかしいだろう。

真耶はフラフラとクロウの方に近づいていき、彼に身体を寄せる。

ギョツと抱き着いて、彼の身体の固きなどを堪能する。

勿論抱き着いているので、真耶の爆乳がひしゃげているのをクロウは愉しんでいる。

むにゆりむにゆりと柔らかげに形を変えているそれを、上から覗き見る。

「あ……」

真耶がクロウを見上げると、目がバツチリと合う。

そして自然と顔が両者ともに近づいていき、唇を合わせた。

それから少しして一度唇を離す。

唾液の橋ができて、重力で真ん中から垂れてプツリと切れる。

また唇を合わせたときには、真耶はうっとりとして目を細めていた。

愛しい人を離さないように、キョツと手を絡めるように握る。

「ん……」

唇を離して次にしたのは、浴衣の上からその豊満すぎる乳房に触れることだった。

むにゆりと柔らかい感触が手に広がり、千冬のような張りはないがどこまでも沈んで

いきそうなほど柔らかい。

浴衣を片方の乳房だけ見えるように肩から脱がせる。

直に触ると火照っているような温かさ、ドキドキと高鳴っている胸の鼓動が分かった。

脚の方に移動して開脚させる。

浴衣の中に顔をつ込みショーツを横にずらすと、あまりちゃんとしていないのか、あつとした熱気が出る。

指を少しだけ陰部に触れさせると、くちゅつと粘っこい液体に触れた音がする。

「ひっ……やつ、んはあ……」

陰部を開け、舌でそこを舐める。

漏れ出てくる愛液をじゅるじゅると啜りながら、勃起していた陰核をくちゅくちゅと素早く舌で舐めた。

真耶はだんだん力が入らなくなっていき、そのむっちりとした柔らかい臀部をクロウの顔に押し付けるような感じになっていった。

陰部を舐められ続けて真耶が力なく顔を横たえた近くには、彼女の淫靡な姿を見ているきり立った怒張があつた。

すすすんと匂いを嗅ぐと、汗臭さは温泉に入つて間もないためなかつたが、男臭さがあつた。

嫌な匂いのはずなのに、クロウの匂いだと考えるととんでもなくいい匂いだと思えてくる。

最高級の香水でも、これほどいい匂いは出せないだろう。

「あつ！あつ！ダメです！おしっこ漏れちゃいますうつ！」

膣の入り口を舐められたり愛液を啜られたり陰核を突かれたりしていると、真耶は絶頂へと一気に駆け上って行った。

「あつ！あああああつ！！」

真耶は気持ちよさそうに顔を歪めながら絶頂した。

陰部からはプシヤアアアアツと小水が放出される。

それは下に敷いてあった布団を濡らしていく。

だが真耶には粗相をしてしまった恥ずかしさよりも、クロウが浴衣をずらして見せてきた男根に意識がいつていた。

浅黒く巨大な男性器を見て、切なそうに目から涙を零す。

「ん、はああ……」

男根を陰部に挿入すると、柔らかく優しく男根を刺激してくる。

それはまるで真耶の性格のようだった。

浴衣ははだけて、すでに二つの乳房が外気にさらされていた。

Gカップという巨大な肉の塊である。

ぬちやぬちやとゆつくりと動かし始める。

抜こうとした時、離れないと言わんばかりに吸い付いてくる。

慣れだしてくると、膣内できき混ぜられた愛液が外部へと漏れ出してくる。

「あつ、あつ、あつ、あつ！」

真耶は自分で肉付きの良い太ももを抱えて、クロウが突きやすいようにしている。

腰の運動に合わせて、Gカップの爆乳がダイナミックに揺れる。

真耶を横に寝かせて後側位に変えると、入り口付近の膣壁を舐める。

非常に速い速度で突いてやると、どんどん激しく喘いでくる。

豊満な乳房も小刻みに波打っている。

「んおっ!?ひ……………っ！おお……………」

側位から後背位に変えて男根を奥にねじ込むと、目を見開いて舌を出して息を詰まらせる。

陰部からは突かれるたびに、ピュッピュッと小水が押し出されるように出てくる。

ポタポタとこぼれたそれは、布団のシミを広くする。

腕を引つ張つてみると、まるで馬の手綱を持つているような感じになる。

口から出たよだれや、身体中から溢れ出した汗が魅惑的な肢体を濡らし、興奮を誘う。

真耶の絶頂に近いのか、膣内がキュンキュンと男根を締め付ける。大きく肉付きが良すぎる尻肉をわっしと掴んで、腰を振りたくる。

「あああつーんはあああああつ!!」

そして膣内にドクドクと大量の精液が流し込まれた。

それは真耶の身体にも飛び散り、巨大な臀部に乗っかったりした。



その後流石に今日一日で射精し過ぎたのか、クロウは真耶を優しく抱きしめて眠りについた。

真耶は心底嬉しそうに微笑みながら、一緒に眠りにつく。

しかし明日に大事件が起こることになることは、この時は誰も知らなかった。

……まあクロウは嬉々としていたのだが。

ちなみにこの旅館から少し離れたところで、機械のウサ耳をつけたグラマラスな女性がこの部屋のことを監視しており、女に嫉妬しながらも自慰していたことは誰も知らない。

## 対福音く即終了く

臨海学校二日目は、一日目と打って変わって真面目な話になる。

二日目はISのデータ取りなどを行うので、第一学年全員がISスーツに着替えて砂浜に集合していた。

しかし眼福である。

「おい遅刻者。ISのコア・ネットワークについてわかりやすく説明してみろ」

「は、は、」

そんな砂浜でIS学園教師であり鬼と恐れられる織斑 千冬に鋭い視線を向けられているのは、ドイツの代表候補生で特殊部隊の隊長でもあるラウラ・ボーデヴィッツヒだ。いつも涼しい表情をしているのに、今は少し強張っている。



彼女もグレーのISスーツを身に纏っており、凹凸の乏しい肢体をくつきりとさせている。

小ぶりの乳房も可愛らしいへそも輪郭が浮き出っていて、非常に扇情的である。

「——以上です」

「その通りだ。遅刻の件は、まあこれで許してやる」

あからさまにほっと一息つくラウラ。

昔千冬が上官だった時に、色々叩き込まれたのだろうか？

「では各自データ取りを開始しろ。決してふざけるんじゃないぞ」

『はーいー！』

元気よく返事した生徒たちは、それぞれの持ち場に移動していく。

専用機持ちはここに運ばれてくる新装備のデータ取りである。

この臨海学校に部外者は立ち入り禁止なので、装備は揚陸艇でそれぞれ送られてくる。

イギリス・中国・フランス・ドイツと、大国の国旗がはためいているのは壯観だ。

ちなみにだが、専用機持ちであるクロウと一夏に新装備はない。

一夏は機体の事情で武装は『雪片式型』しか持てないし、クロウの場合はそもそもデータを取る必要はないのだ。

無国籍であるし、機体をつくったのもISの親である篠ノ之 束である。

どこの国にもデータを渡す必要がない。

そんなことからクロウは暇そうに女子生徒たちの肢体を視か——ゲフンゲフン！  
観察している。

「ちくちくあああんっ!!」

それぞれが粛々とデータ取りに勤しんでいると、強い砂煙を巻き上げながら猛烈な勢いでこちらに迫ってくる人影があつた。

人が走るだけでは到底ありえないほどの巻き上げっぷりだ。

そしてその砂煙をあげているのは、現在の世界で最も有名な科学者である篠ノ之 束  
だった。

紫色の長い髪をたなびかせ、巨大な胸を揺らしながら千冬に抱き着こうとする。

「いの……っ!」

しかしそれを千冬は両手でキャッチ。適当な方向へと放り投げた。

うにやあああつと自然落下を始めた束をキャッチしたのは……。

「おつと……大丈夫か?」

「く、クロくん!」

俗にいうお姫様抱っこで、落下していた束を受け止めるクロウ。

束は感極まったようにクロウに抱き着き、すりすりと身体をこすり付ける。束を投げた本人である千冬は、しまった……と小さく呟いていた。

しばらくクロウの体温や体臭などを堪能した束は、バツと腕の中から飛び降りてここまで来た理由の一つにある人物に話しかけた。

「やつほ、箒ちゃん！」

「……久しぶりです」

実の姉妹だというのに、二人の間には何か壁があるように感じられる。

いや、実際は箒が一方的に壁を作っているだけなのだが……。

箒が束に壁を作っている理由は、小さいころに束のせいで愛しの一夏と離れ離れになったことだ。

いやはや、御馳走様です。

さらに束嫌いを加速させたのは、自分は好きな人と離れてしまったのに、姉は姿をくらました先で好きな男とよろしくやっていることを知ったからである。

「あ、あの……臨海学校には関係者以外は立ち入り禁止なんですけど……」

「いやいや、私ISの生みの親なだけど？ っていうか何でこの束さんが君たちが決めたルールを守らないとダメなの？」

規則に則って束を注意するIS学園教師の山田 真耶だったが、もつともな反論を受

けて言い返せなくなる。

当然もつともなのは最初の言い分だけで、最後はとんでもないことを言っているに過ぎない。

「おい、東。一応自己紹介くらいしておけ」

「え、だって皆私のこと知ってるでしょ？」

「だから一応だと言っているだろう」

確かに彼女のことを知らない人はほとんどいないだろう。

特にISを扱っているIS学園生徒しかいないこの場所で、彼女のことを知らない人物は誰もいない。

千冬の言葉を受けて、嫌々ながらも自己紹介をする。

「はろはろー。ISをつくった大天才の篠ノ之 東だよ。よろしくはしないでね♪」

指を頬の横に立てて可愛らしく、とんでもない自己紹介を終える。

これが切っ掛けになり、生徒たちがざわつきだす。

世界各国が探そうと躍起になっている人物が目の前にいるのだ。興奮するのも無理はない。

だが東からしたら迷惑以外のなにもでもない。

彼女の人間嫌いは絶賛発動中である。

「あわわわ……こういうときはどうしたら……」

「落ち着け」

おろおろと周りを見渡しながらあっちこっち行き来している真耶の頭に、優しく手を乗つけて落ち着かせるクロウ。

慌てていた真耶は次第に落ち着いていき、嬉しそうに顔をほころばせる。

「むむう！クロクんに優しくされるなんて生意気だぞ、この爆乳お化け〜！」

「ひゃああっ!？」

そんな彼女に嫉妬したのが、束である。

後ろからガバツと真耶に抱き着き、豊かな胸を揉みしだく。

「昨晚はお楽しみでしたね」

「っ!？」

抱き着きながら真耶の耳元でボソリと呟く。

すると顔をポフンツと爆発的に真っ赤にさせ、バツと束から飛び退く。

その動きは流石は元日本代表候補生と言える。

しかし羞恥に顔を真っ赤にし、爆乳をかばうように手で交差しているので威厳などは全くない。

「な、なななな何でそのことを……っ!？」

「えへへ、何でだろうね〜?」

昨晚それを見ながら自慰をしていたからである。

「ほら、からかうのもそれくらいにしておけ。篠ノ之にプレゼントがあるのではないのか?」

「うんうん、そうだよ箒ちゃん! さあ! 上空を見上げて!」

クロウに首根っこを掴まれ、プラソンとまるで猫のようになる束。

その体制のまま、どこからか取り出したへんてこなボタンをポチツと押す。

束に言われた通り皆が上空を見上げると、何かが凄い勢いで落下してきた。

「きやああああつ!!」

「むっ!?!」

落ちてきたその何かは、金属の塊だった。

砂浜に落ちると轟音と衝撃、それと風圧が生徒たちを襲う。

近くにいた小柄なラウラが軽く吹っ飛びそうになっていたので、抱くようにして防いでやる。

「大丈夫か?」

「う、うむ、すまない」

こんな感じでクロウとラウラがイチャついている間に、金属の壁がはがれて中に入っ

てあったものがさらされた。

それは紅い I S だった。

「どうどう？ 東さんがそこそこ頑張って作った、箒ちゃんの専用機。『紅椿』だよ！」

いつの間にかクロウから離れていた東が、はしゃいだ様子で言う。

これは箒におねだりされて作っていた I S のようだ。

身内に甘い東が頑張った結果、既存の I S のスペックを凌駕したものとなった。

世界各国では第三世代機の実用化に躍起になっているというのに、それを飛び越して第四世代機を開発してしまったのだ。

各国の首脳陣が聞いたら呆けてしまうこと間違いなしである。

「んじゃ、さっさと調整しちやおうか。箒ちゃん、こっちこっち」

「……はっ」

笑顔で手を振る東に、辛辣な態度で接する箒。

自分がお願いでおいて……しかも世界に数百台しかない玩具をもらっておいてこの態度はおかしいと思うが、彼女はまだ高校一年生。まだ未熟なところもあるだろう。

……まあ高校生にもなってお礼も言えないのはどうかと思うが。

紅椿に箒を乗せた状態で、投影ディスプレイを呼び出してキーボードを叩きまくる

束。

膨大なデータを笑顔のまま処理していつているのは、流石稀代の天才だ。

さて、その後少しして束の調整は終わった。

「クロくん、一応機体の調整をしておこうか？」

「そうだな、お願いする」

クロウは専用機を纏い、束の調整を受ける。

と言つても束が全力全開で作つたので、おかしいところは何もなかった。

あの気合の入れようと言つたら、箒に作つてやった紅椿よりも頑張つていたと思う。

「……うん、特に問題ないね。さっすが束さんがつくつたISだよ！」

調整を終えた束は、次に一夏の専用機である白式に興味を示した。

だが白式をつくつたのは束自身だったので、機体への興味ではなく何故一夏が『今も』ISを使えているのかなのだが……。

「なんていうか……凄いですわね」

「普段はテンションの高いバカなのだがな」

セシリアが話しかけてきたので、それに応えるクロウ。

クロウや千冬などの一定の人しか話していないのを見て、セシリアは束が人見知りかと思つて声をかけることを断念した。

束にボロクソ言われる原作フラグを叩き折つたのである。



「うん、調整終わったね。試運転してみる？ 箒ちゃん」  
「そうですね」

箒は束の言葉にうなずくと、紅椿を上空へと飛翔させた。

その勢いは凄まじく、第三世代機のスペックを遥かに凌駕していた。

武装の質も素晴らしく、色々な武器が装備されている。

特に主装備となる雨月と空裂の二本の刀は、レーザーも放出するというとんでも武器である。

箒が上空でそれらを披露すると、生徒たちは啞然とし、代表候補生たちは鋭い目で箒を見つめていた。

もしかしたら母国の脅威となるISなのだから、じっくりと観察しなければならぬ。

「また凄いものを作ったな、束」

「箒ちゃんへのプレゼントだからね、頑張ったよっ！」

クロウと束は箒を見ながら会話する。

世界の常識を覆すようなISを見てもこの反応である。

千冬は、束を鋭い目で見つめていた。

驚異的なスペックを披露する箒ではなく、束を見つめている。

その真意は………？

「た、大変ですっ！」

そう言つて大きな胸を揺らしながら走つてきたのは、真耶だった。

彼女と千冬が手話でやり取りしていることから、重要なことは間違いないだろう。

そしてそんな中で、一匹の兎が心底楽しそうに嗤っていた。



大変なこととは、ISの暴走だった。

ハワイ沖で実験稼動中だった第三世代型の軍用ISの『銀シルバリオ・ゴスベルの福音』が暴走したのだつ

た。

そして開発をしていたのは、世界でも有数の戦争大好き国家であるアメリカとイスラエルであった。

「この暴走 I S は我々が対処することとなった」

千冬が集められた専用機持ちたちの前でそう言った。

現在ここに持ちだしてきている I S はそう多くない。

このことから職員が予想接触域を封鎖し、福音を止めるのは専用機持ちたちがやることとなった。

この緊急事態でも、各国の代表候補生たちはうろたえなかつた。

それは代表候補生になるための訓練の一環として、このような訓練も受けていたからだ。

「対象 I S の詳細なデータを要求しますわ」

セシリアの言葉で、各自に福音のデータが回された。

流石は軍用 I S で、セシリアたちの専用機である試験機のスペックを大きく上回っていた。

これと張り合えるのは、第四世代機を保有する一夏と箒だけだろう。

あくまでスペックの話だが。

データを見ながら彼女たちの意見交換が続く。

このような事態についていけない一夏と箒は、会話に入れず取り残される。

そしてクロウは、会話には参加しないものの結構乗り気だった。

「暴走ISと戦うのも面白そう。」

「どうせこんな考えだろう。」

「このISは非常に機動力が高い。接触できるのは、おそらく一回だけだ」

「うーん……そうなるをやっぱり一撃でISを倒せるような人じゃないと……」

千冬の言葉に、元日本の代表候補生である真耶が続く。

真耶の発言で、意見交換をしていたセシリアたちがバツと一斉に一夏とクロウを見る。

「お、俺……?」

ヒクヒクと頬を引きつらせながら自分を指さす一夏。

それに比べてクロウは、任せるとばかりに胸を張る。

「よし、私に任せておけ」

「いえ、今回は織斑さんの方が適任ですわ」

やる気満々のクロウを否定したのはセシリアだった。

確かにクロウの武装は強力無比なのだが、機動力はお世辞にも高いとは言えない。

それに比べて一夏の白式は、燃費が悪いことに目を瞑れば機動力は高いし、零落白夜

というISの天敵ともいえる能力がある。

これなら一夏が選ばれるのも仕方がないだろう。

セシリアの説明にそれぞれ理解した鈴たちは、どうやって一夏を接触地点まで持つて行くかを議論し合う。

燃費が悪いのだから、なるべく節約しないとダメだからだ。

一夏も最初は嫌がっていたのだが、実の姉である千冬に発破をかけられ戦うことを了承した。

「……むう」

ここですまらないのがクロウである。

暇つぶしにそのISをメタメタしてやろうと思っていたのに、一夏にかっさらわれてしまった。

クロウは戦闘狂とまではいかないが、面白い戦いは好きである。

さらに今回の敵は暴走した軍用ISとなれば、戦いたいと思うのも無理はない。

「呼ばれてないけどジャジャジャーナー！」

クロウが何とかして作戦に食い込もうと考えていると、天井裏から天才科学者が出現していた。

話の流れではイギリスから送られてきていた強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を持つセシリアが接触域まで一夏を運んでいくとなっていたのだが、東が箒の紅椿の方が適任だと言いだした。

セシリアもクロウ以外の男の上に乘られるというのはあまり気分がよくないので、大  
人しくすぐに引いた。

「まあ訓練時間は当然ないけど、紅椿のスペックなら無問題！」モーマンタイ

「いや、それは危ないだろう。私が運んでいくぞ？」

「いやいや、クロくんの専用機つてそんなに機動力高くないよ？むしろ第三世代型の中  
じや下の方だよ」

作戦に入り込もうとしたが失敗した。

しゅんと落ち込むクロウを見て、ブルブルと身体を震わせて恍惚とした表情を見せて  
いる束。

本当に、このカッパルは世界にとって害でしかない。

結局この作戦は一夏と箒が主力となってやることとなった。

しかしクロウの強い提案で、万が一作戦が失敗した場合、一夏と箒が撤退する時間を  
稼ぐ殿役が投入されることになった。

当然それはクロウである。

今はそれぞれ作戦に向けて、皆できることをしている。

束は箒の紅椿を調整していて、一夏はセシリアから高速下における戦闘のレクチャー  
を受けている。

「無理やり自分をねじ込んだわね……あんだ」

「まあいいではないか」

そしてとくに何もせず、ぼおとしていたクロウに鈴が話しかけてきた。

何か重い物でも運んでいたのか、肩を抑えながらグルグルと回している。

「軍用 I S と戦えるのだ……楽しみで仕方がない」

「ふくん……あたしはごめんだけどね、そんな面倒なこと」

呆れたようにクロウを見ながら、けだるそうに言う鈴。

いくら大国の代表候補生でも、軍用 I S と戦うのは骨が折れるだろう。

「僕は皆より劣っている I S だし、軍用 I S と戦うのは遠慮したいな」

クロウと鈴の会話に入り込んできたのは、金髪を後ろで束ねたシャルロットだ。

彼女の専用機は、他とは違い第二世代型である。

試験機ではないこととシャルロット自身の実力が高いことで他の面々にも引けを取

らないが、やりたくない相手であることは事実だ。

「むう……私も戦ってみたかったのだが……」

そう言うのは、ドイツ軍特殊部隊隊長のラウラだ。

彼女は作戦中や訓練で、何度か軍用 I S と戦闘になったことがある。

今ここにいる学生たちの中では、唯一の存在だろう。

そうやってクロウの周りには、関係のある美少女達が集まる。

セシリアも横目で見ながら行きたそうに見ていたが、一夏に教えるために行けなかったようだ。

そうして時間は過ぎていき、作戦開始の時間が来た。



「気を付けてくださいいね」

「うむ、では行っていくる」

真耶の見送りを受けながら、クロウは空へと飛び立った。

一夏と箒はすでに飛び立っており、そろそろ接敵することだ。

クロウも少しの間飛び続け、ISの補助を受けてギリギリ視認できる距離で止まる。

そこで浮遊しながら戦闘を眺めていると、一夏と箒が福音相手に激戦を繰り広げてい



る。

しかし第四世代機が二機も同時に相手になっているのに、福音は逆に押しているように見える。

操縦者の経験が少ないことを考えても、あの福音は相当に強いのだろう。

ちよつとワクワクしてきたクロウ。

一進一退の攻防が繰り広げられていたが、あることで戦況が一気に福音に傾いた。

何故か戦場で戦意喪失してしまった箒を助けるため、一夏がその身を盾にして彼女をかばったのである。

エネルギーが残りわずかしかなかったためシールドもあまり役に立たず、一夏の背中に福音の光弾がいくつも着弾した。

落ちていく一夏と箒に、さらに追撃をかけようとする福音。

「——ッ！」

しかし自分に迫ってくる武器を避けるため、追撃を止めて回避する。その武器は海に着弾し、巨大な水柱を噴き上げる。

「……私の出番だな」

心なしが嬉しそうにしながら福音と対峙するバカ。

一夏がやられているのに、まったく気にしていない。

「織斑を連れて早く戻れ。私が作戦通り殿を務める」

「……すまない」

クロウに言われて、意気消沈とした様子の箒が大事そうに一夏を抱えて去っていく。暗に『お前ら邪魔』と言ったクロウは、本当に最悪である。

「織斑教諭、作戦は失敗した。今は織斑・篠ノ之両名を帰還させ、私が殿を務めている」  
攻撃してくる様子がなく、じつとこちらを見ている福音を横目に千冬に連絡する。  
社会人で必要なのは、ハウレンソウ！

『……分かった。織斑たちが安全域に達したら報告する。それまで時間を稼いでくれ』  
千冬は作戦に失敗しても動揺することなく、冷静に指示をする。

指揮官としてかなり立派である。

「ふっ……時間を稼ぐのはいいが、別に福音を壊してしまっても構わんのだろう？」

『いや、壊されたらこま——』

千冬の指示に、頑強な死亡フラグを建設した主人公。

と言ってもこの物語で彼が負けることなどありえないので問題ない。

千冬も彼が負ける……ましてや死ぬことなんてまったく想像できないので、全然心配していない。

むしろ心配なのは、福音が修復不可能なほど破壊される可能性があることだ。

一応アメリカとイスラエルのISなので、撃破してとやかく言われるのは避けたい。そう言おうとする千冬だったが、途中で回線をぶっちぎられてしまう。

「さて、少しの間遊ぶとしよう」

スツと福音を見やる。

すると福音は翼を広げ、砲口から光弾を発射した。

何十発と襲い来る光の弾丸を見ても、クロウが慌てることはない。

『熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七つの円環<sup>ス</sup>』

ISの倉庫内に入っている防具の名前を呼び、それをコールする。

光でできた七枚の花弁が広がり、飛来した光弾を全て防いだ。

これは束が色々頑張って作った装備の中の一つである。

実弾や斬撃など敵からの攻撃を防ぎ、エネルギー攻撃も防ぐことのできる優れものである。

この世界で束によってつくられたものなので魔術とかは関係ないので悪しからず……。

「よし、次は私の番だな」

クロウの背後にある空間が歪み、武器が現れる。

そしてそれが、福音に向かって射出された。

常人には目で追えないほどの速度で襲い掛かった武器を、福音は高い機動力で躲した。

「?」

しかし誤算だったのは、それは追尾機能のある宝器——武器だったのだ。

逃げてでも逃げてでも迫ってくる武器に、だんだんと追いつかれてくる。

逃げてでもダメなので、福音は自慢の光弾を武器にぶつけた。

……いや、自慢というのは何か違うが。

光弾を受けた武器は方向を少し変え、福音に当たらず飛んで行ってしまふ。

「ふむ……なら次だ」

せっかく武器を避けたところ悪いのだが、ISの倉庫内には腐るほど武器があるのだ。

東がクロウの専用機を作る際に頑張ったのは、超大容量の拡張領域である。

シャルロットの専用機である『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』も驚くほど拡張領域があるが、IS生みの親に作られた機体とはさすがに次元が違った。

しかしシャルロットは自らの高い技能である『高速切替』ラピッド・スイッチがあるのに対し、クロウは

そんな技能を持ち合わせていないので先制攻撃は基本的に相手に取られてしまふ。

『ミキストリ、織斑・篠ノ之両名が帰還した。お前もすぐに帰還しろ』

「ふむ……まあいいか」

クロウと福音が戦闘——と言ってもほとんど一方的の——が始まって十数分したころ、千冬から回線が届く。

クロウの前に浮遊している福音は目立つ損傷こそないが、シールドエネルギーが大きく削られていた。

最早満身創痍と言っても過言ではない。

比べてクロウのシールドエネルギーは武器を呼び出す際に減っただけで、結局福音の攻撃は一度も喰らうことはなかった。

「ではな、福音」

「……」

すでに福音に対して興味を失っていたクロウは、千冬の命令に素直に従う。

こちらに背を向けて去っていく彼に、福音は攻撃を仕掛けなかった。

もしあのまま戦闘を続けていたら、間違いなく落とされていたのは福音だろう。福音には守るべき存在があつたのだ。



「で、これもお前の仕業か？」

「な、何故分かったし!？」

「いや、お前しかいないだろう」

殿役を見事務めて無事に帰還したクロウは、誰も人のいない部屋で話していた。

いや、クロウが話している相手がいる以上、まったく人がいないわけではない。

クロウと話しているのは、機械でできたウサ耳がトレードマークの束である。

午前にあまり甘えられなかったせいも、すりすりとかクロウにスキンシップを取る。

束の柔らかかな身体が当たって心に悪い。

……普通の人ならそうなっていたが、彼は遠慮なく束に触れているので問題ないみたいだ。

「お前の大好きな身内が落とされたわけだが、良かったのか？」

「大好きじゃなくて好きなんだよ。それに箒ちゃんを守ってもらうには、もつと強くなってもらわないと困るしね！」

どうやら一夏よりクロウの方が好きらしい。

頭のねじが何本か吹っ飛んでいるが、女性として魅力的な東に言われて悪い気はしない。

というかクロウが全部吹っ飛んでいるので大丈夫だ。

会話が途絶えて数分経つと、何故か東の吐息が熱っぽくなってくる。

その理由は、当然クロウである。

彼が東の肢体をやわやわと触っていると、だんだんと淫靡な空気になってきたのだ。

「ん、ちゅ……ん、ん……」

東の顔にグツと顔を近づけ、唇を合わせる。

そういう流れになっていたが、いきなりキスされて目を見開く東。

しかし舌が口内に入ってくると、快楽を得るために自分から絡めようとする。

ちゆるちゆるとお互いの唾液を嚙っていると、クロウに舌を絡みとられてぢゅうううと吸われてしまった。

ぷはつと口を離すと、ねっとりとした唾液の橋が架かった。

次に東の豊満な胸に手をやり、むにいつと掴む。

柔らかな感触が手一杯に広がる。

「……」

手に感じた柔らかな肉以外で、何か感じ取ったクロウ。

豊満な乳房に耳を寄せてみると……。

「お前、大丈夫か？心拍数が凄いで」

「だ、ただ大丈夫に決まってるらいつ！」

束の分厚い肉を通って、ドキドキと心臓の高鳴りがクロウの耳にまで届く。

クロウの言葉に、束は顔を真っ赤にして怒鳴る。

自分とクロウなどにしか大切にしないぶっ飛んだ人間で、処女も随分前に失ったくせ

に好きな男と一緒にいると未だ心臓が高鳴る。

変なところで可愛らしい兎である。

「まあ大丈夫じゃないと言われても困るがな」

「うひゃあっ!？」

束の純白のショーツの中に手を入れながら言う。

手をこそこそとショーツの中で動かし、陰部を弄る。

「束、これはなんだ？」

「ちよっ……そんなの見せんな！」

束の目の前で見せつけたのは、指に付着した己の愛液である。

ねとつとした液体を、指で弄びながら反応を楽しむ。



顔を紅潮させ、怒る束。

あまり苛めすぎて愛想尽かされるのも困るので、ここらでやめておくことにする。

「あつ、あつ、やつ、あつ！」

とにかく束を気持ちよくさせることに専念する。

Fカップの巨大な乳房を露出させ、綺麗な桜色の乳首に吸い付く。

何度も吸われているのに、色が黒くならない。

美味そうに乳首を貪りながら、片手は陰部に持つて行つてショーツの上からぐりぐりと弄る。

にちゆにちゆとショーツの中で愛液が音を出し、時折豊満な身体をビクツと震わせる。

「やつ！ああつ！！」

性感帯を刺激されて、首を反らせながら軽く達した束。

愛液で濡れたショーツの横から、ピュツピュツと液体が噴き出してくる。

快感に余韻に浸りながら、荒く息を吐く。

「次は束さんもやつてあげるっ」

ピン！と勃起した逸物を握りながら、恥ずかしそうに言う。

あんなに早く達したのが、少し恥ずかしいらしい。

「それだったらこうしよう」

「わっ」

束の身体を持ち上げて、シックスナインの体位をとる。

肉付きの良いスタイルなのに、何故あれほど軽いのだろうか？

下腹部にFカップの柔らかな乳房が潰れて、淫猥に形を変えている。

「ひっ！あっ、んっ、あっ！」

ショーツを横にずらし、濡れそぼった秘部をレロレロと舐める。

愛液が漏れ出してきて、ぴちやりと顔に付着する。

「んひっ！わ、私だって……っ！」

気を紛らわせるために口淫を選んだ。

ボロンと巨大な男根を露出させると、慣れた様子で舐めはじめる。

柔らかい頬でふにふにと撫でた後、ペロリと陰茎を一舐めする。

束の小さな舌で刺激されて、男根がビクンと撥ねた。

龟头を口に含みと、頭を上下に動かし始める。

ジュポジュポとはしたくない音を立てながら男根を愛撫している反対側では、秘部に吸い付いてジュルルツとこれまたはしたくない音を立てながら愛液を啜っていた。

「……よし、もういっぞ」

陰部から口を離して言う。

ぬるりとした愛液が、舌まで伸びている。

ちゅぽつと音を立てて男根から口を離すと、束は馬乗りになる。

そして亀頭を陰部にこすり付けて、少し遊ぶ。

「ん、ふうううっ!!」

ゆつくりと腰を沈めていき、男根を膣内に埋めていく。

狭い膣内が、ギチギチと男根を締め付ける。

全部挿入すると、力尽きたようにクロウにもたれかかる。

分厚い筋肉の胸板に手を置いて、余韻を楽しんでいる。

……まあこの男が休みなんて与えるはずがないのだが。

「ああああああっ!!」

ズン!と奥を押し上げられ、バツと身体を起こす。

ずちゅずちゅと愛液がたっぷり分泌されている膣内で音が鳴り、クロウに快楽を与える。

激しく揺れている豊満な乳房を掴むが、それでもプルプルと先端の方が小刻みに揺れる。

束は送られてくる強い快楽に耐えようと、グツと歯を食いしばる。

「んあああああつ!!」

射精寸前に膣内から男根を引き抜き、束の身体にぶつかける。

大きく張り出した乳房に多くかかり、白く汚されてしまう。

男根の根元を抑えて精液を止めようとする束だが、びゆるびゆると勢いのある射精は止められなかった。

「んんん……不完全燃焼」

「何だ?またしてほしいのか?」

クロウの言葉に、束はニコニコしながら頷く。

というか彼も一回程度でやめる気はないのだから、いちいち聞く必要はないと思うが……。

「よし、こつち来い」

「わっいっ♪」

胡坐をかくクロウの膝の上に、ちよこんと座る。

彼に背を向けているので、背面座位の体位になった。

「うあつ!あつ、ああ……」

まだまだ受け入れることができる膣内に、男根を突っ込む。

束の頬に汗が伝い、口から少量のよだれを垂らす。

ズン！と奥まで突き入れられると、膣内<sup>な</sup>がキュウキュウと締め付けてくる。激しく突くと、Fカップの乳房がぶるんつと重たげに揺れた。

男根の形が、軽く腹に浮き出ている。

「あつ！あんつ！ううつ！うああつ！！」

ずちゅずちゅと男根にかきまぜられた愛液が漏れ出し、太ももなどに飛び散る。

クロウは片手で量感のある乳房を揉み、片手で陰核を弄つて束に快楽を送る。

束は助けを求めるようにシーツをギュつと握っている。

「束、膣内<sup>な</sup>で射精<sup>だ</sup>すぞ」

「~~~~~ツ！！」

耳元で囁かれた後、耳を甘噛みされる。

ぞくぞくとした何とも言えない快楽が全身を駆け巡り、束の脳内を真っ白にした。

「うん！うん！いっぱい射精<sup>だ</sup>して！束さんの膣内<sup>な</sup>でいっぱい射精<sup>だ</sup>してえっ！！」

顔を後ろに向けて、舌を絡ませ合う濃厚なキスをする。

指の間から乳肉が漏れるほど強く握りしめ、腰の運動を激しくする。

「ああああああつ！！」

膣内に精液を流し込まれる快楽に、舌を出して喘ぐ。

どくどくと衰えを知らない精液が、どんどん子宮内に流れ込んでくる。

ビクビクと身体を痙攣させ、身体中から汗が噴き出す。

「あ……あ……あ……」

もつと出せと精液を求める膣内の動きに、男根から答えるように精液が出続ける。やつと射精が止まって男根を引き抜くと、どぼつと精液が溢れ出てきた。

その後もイチヤイチャし続け、結局温泉も二人で入っていた。

結構身近な人間が生死の境をさまよっているというのに、冷たいカップルである。

## 一夏ハ不遇デアル

公海上空で浮遊している輝く銀の外装を持つ軍用IS、『銀の福音』シルバリオ・ゴスペル。

身体を丸め、まるで何かから身を守るようにしているようにも感じられる。

また別の見解をすれば、何故か落ち込んでいるようにも見える。

もしかしたら非公式チート男のクロウ・ミキストリにボコボコにされたのがショックなのかもしれない。

まあ実際はなるべくエネルギー消費を抑えようとしているが故の恰好である。

そしてそんな恰好をしていた福音に、まるで追い打ちをかけるように蒼いレーザー光線が着弾した。

「……………っ！」

踏んだり蹴ったりである。

福音は人間状態なら涙目になって、自分を攻撃してきたいじめっ子を探す。

それは自分の場所から、およそ十キロも離れた場所にいた。

「ちよろいもんですわっ！」

ドヤ顔を決めながら言葉を発する蒼の機体を纏ったイギリス代表候補生、セシリア・オルコツトだった。

十キロも離れた場所から対象を狙撃するなんて離れ業をやつてのけた理由は、まず第一に彼女の実力である。

第二に機体である『蒼い雫』ブルー・ティアーズの性能だ。

狙撃を主体としているこの機体とセシリアの能力が合わされば、この程度の距離なんてことないのだ。

「……………っ!!」

福音はセシリアを発見すると、猛然と襲い掛かった。

大人しい子だって、怒るときは怒るのだ。

最高速度が2450 kmを超す福音は、どんどんとセシリアとの距離を詰めてくる。

「むむっ……………流石軍用ISですわね」

福音との距離を保つため、自身も後退する。



自立機動兵器・ブルーティアーズのレーザービット四機を射出し、福音に向かわせる。ビットから蒼いレーザーが発射されるが、当たる寸前で福音がさらに加速することによって捉えられない。

とうとうセシリアに襲い掛かろうとした時、上空からもう一機のISが現れた。

「はああああっ!!」

両刃の青龍刀を振りかぶって福音に襲い掛かったのは、ステルスモードで待機していた凰。鈴音だった。

『瞬間加速』で高速度移動し、福音に向かって双天牙月を振り下ろした。

「——っ!」

自分を刈り取らんとする凶刃を、福音は腕で受け止める。

その後すぐに鈴を弾き、後退する。

福音の腕装甲部は、双天牙月を受け止めたせいで大きく凹んでしまっていた。

「もう!遅いですわよ!正直危ないかと思いましたがわ!」

「まあまあ。結果オーライじゃない」

ぶんすかと怒りながら文句を言ってくるセシリアに、福音に視線を合わせたまま鈴が答える。

そしていきなり、鈴の衝撃砲・龍咆が火を噴いた。

今回の臨海学校で母国・中華人民共和国から送られていたパツケージ・崩山を装備した衝撃砲は、普段の不可視の弾丸ではなく、炎を纏った炎弾へと変わっていた。

「……………」

いきなりの不意打ちでまったく反応ができなかった福音は、それに直撃。海に堕ちていった。

「…………何かやけにあっさりと終わりましたわね」

「…………暴走状態だっていっても、軍用ISがこんな簡単に撃墜されるものなのかしら」

福音を倒したセシリアと鈴だが、福音が堕ちた場所を訝しげに見つめていた。

自分たちの専用機の試作機とは違う、完成された第三代型軍用ISである。

しかも戦争大国であるアメリカ合衆国とイスラエル国が共同開発したISだ。

そう簡単に撃墜されるはずがない。

このセシリアと鈴の考えは的中していた。

「きやあつ!？」

「うわっ!」

ドパアッ!と音を立てて海面が爆発した。

その中央からゆっくりと浮上してきたのは、先ほど撃墜した福音だった。

レーザーや衝撃砲による損傷がなくなっており、元の完全な『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルとなってい

た。

そしてそれは、撃墜される前の数倍の速さで襲い掛かってきた。

「回避！」

「ですわ！」

しかし流石代表候補生の二人。それに捕まらず、巧に躲して距離を取る。

福音は二人を取り逃がした場所で滞空すると、ぴたりと静止した。

セシリアと鈴が訝しげに見ていると、変化は起こった。

福音のありとあらゆる場所から、エネルギーで構成された光の翼が生えてきたのだ。

「も、もしかして『第二形態移行』セカンド・シフトなんですの……う？」

「もしかしくてもそうよっ！」

そう、福音は自らの中にいる女性を守るため、自分を進化させたのだ。

先ほどまでよくもボコボコにしてくれたなあ……とばかりに、セシリアと鈴を睨みつける。

そして移行前でさえマツハ2というとんでもな機動力がさらに上昇した機動力で、二人に飛びかかった。

「ひいっ！めちやくちや怖いですわっ！」

セシリアは素早く後退しながらも、ビット四機からレーザーを発射する。

しかしそれは、エネルギー翼で容易く消されてしまった。

それは鈴の衝撃砲も同じで、崩山で出力などが上がったのにも関わらず福音には届かない。

『セカンド・シフト第二形態移行』のパワーアップは、ここまで変わるのである。

「遠距離がダメなら、接近戦しかないじゃないっ！」

衝撃砲を防いでエネルギー翼を退けると、福音の目の前には双天牙月を振りかぶった鈴がいた。

また腕で防御するかと思いきや、今度は腕を鈴の方へと向かわせた。

「なっ!？」

福音がしたことは単純であり困難なこと。

鈴の両手首を腕で捕まえ、それで防いだのだ。

当然鈴のような実力者が振りかぶる手を掴まえるなど、訓練された軍人でも不可能だろう。

これができるのは、軍用ISで暴走状態だったことが大きい。

鈴を捕まえた福音は、ゆっくりと翼を出して鈴を包み込もうとする。

包まれたが最後、至近距離で何百発も光弾を浴びて撃墜されるだろう。

だが結論から言うと、福音は鈴を撃墜することができなかつた。

そう、まだこの空域には敵がいたのである。

「は〜い、そこまでだよ」

側面から飛来してきたミサイルに気づき、すぐに回避行動をとる福音。

しかし避けたのも束の間、そのミサイルは追尾性能があるらしく、福音をさらに追ってきた。

ミサイルは福音に着弾し、大きな爆発音と黒煙を上げる。

「た、助かったわシャルロット」

「ううん、気にしないで」

鈴の言葉にニッコリと笑って返す、中性的な容姿のフランス共和国代表候補生、シャルロット・デュノア。

身体の柔らかかそうな凹凸が、彼女が女性だと主張している。

「っ！和やかに話している暇もなさそうですわよ！」

視界を邪魔していた黒煙を、エネルギー翼で一気に吹き飛ばす。

所々煤汚れているが、福音は未だ健在だった。

といつても代表候補生たちの猛攻により、シールドエネルギーも大きく減少していた。

もうあまり長く戦うことは不可能だろう。

「——っ!!」

なればこそ、福音は絶叫しながらセシリアたちに襲い掛かった。もし自分が動けなくなつたときに、操縦者に危険が少しでもないようにと。

セシリアはビットでレーザー光線をぶつけ、鈴は紅い炎の玉となつた衝撃砲、シャルロットはコールしたショットガンの無数の弾丸を福音に浴びせる。

しかし福音は止まらない。

それはまさしく、自らの命を顧みず敵を屠ろうとする特攻であつた。

「まあそれはさせませんがな」

福音に動きがピタリと止まる……否、止められたのだ。

福音に掌を向けながら浮上してきたのは、ドイツ第三世代型専用機『シュヴァルトツェア・レーゲン黒い雨』を纏つたドイツ連邦共和国代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだつた。

眼帯のつけていない片方の目で鋭く福音を射抜きながら使用しているのは、『慣性停止結界』だ。

これで福音はピクリとも動くことができない。

そして——

「うおおおっ！これで終わりだ、福音!!」

紅のISが襲い掛かった。

箒は空裂を振りかぶり、そして振りぬいた。

斬撃は紅く巨大なエネルギー刃となり、福音を襲った。

福音のシールドエネルギーはどんどんと減っていき、そしてとうとうゼロとなった。

具現を保てなくなった福音が消え、中に乗っていた操縦者が海へと落ちる。

「おっと……危ないわね」

その前に鈴が優しく受け止め、操縦者も安全が確認された。

こうして原作で全ての代表候補生を撃墜した福音は、異物が入ったせいで強化された代表候補生たちに墜とされた。

彼女たちが強くなったことも勝利の大きな要因だが、また大きな要因として彼女たちが非常に冷静だったこともある。

原作では想い人が殺されかけたので、完全に冷静とは全員言えなかつただろう。

しかし実際冷静じゃなかったのは箒くらいで、セシリアたちの想い人は今頃旅館で天

災兎といちやついているのだ。

これらのことから、彼女たちは福音に勝てたのだ。

「あ、あれ？もう終わったのか？」

せつかくパワーアップしたところ悪いが、少々遅かったようだ。



「よくやった。……しかし命令違反はしっかりと罰するぞ？」

『……………』

福音を倒して旅館に戻ってきた彼女たちを出迎えたのは、I S 学園教師、織斑 千冬の冷たい声だった。

彼女たちはクラスメートの仇と戦ったようだが、箒を除いた全員が特殊な訓練を受けてきた者たち。



命令違反がどれだけの重罪かはしつかりと理解していた。

それでも今回の手柄で軽くなると思っていたのだが、どうやらそれは甘い考えだったらしい。

「……戦うのなら私も呼んでほしかった」

そう言うクロウだが、狂った兎とイチャコラしていたので自業自得である。

というか罰を受ける行動をしたがるとはどういうことだろうか。

「ああ……なんて美しい花畑……」

「ちよつとセシリア!? そつちに行つちやダメよー」

顔面蒼白になりながら、何故か幸せそうに笑いながら恐ろしいことを口走っているセシリアを、鈴が必死に引き留めようとする。

何故ここまでセシリアがダメージを受けているかという点、現在進行形で千冬に強要されている正座である。

日本独自のこの座り方は、生粋の英国貴族であるセシリアには拷問に等しかった。

ちなみにだが、箒は日本人の中の日本人という感じなので正座は無問題。

鈴は一時期日本に滞在していたこともあり、受け入れることができる。

シャルロットはその高い順応性で、この短時間で正座を克服した。

ラウラは『これが日本の拷問か……』などと呟きながらも、ドイツ軍人魂で耐えてい

た。

「ま、まあまあ先生。確かに命令違反はいけないことですが、彼女たちのおかげで福音を倒せたんですから……」

「……もう正座を止めていいぞ」

千冬と同僚で I S 学園教師の山田 真耶の鶴の一声で、正座を崩すことを許可される。

その優しさといい、包容力のある爆乳といい、彼女は現代に降り立った天使なのかもしれない。

少なくとも、軽やかに生と死の狭間をスキップしていてセシリアには、そう見えた。

「皆さん無傷で帰還したようですが、一応健康診断はしますね。皆服を脱いでください」

その言葉に、福音と戦えなくてしょんぼりしていたクロウの目がキラリと煌めく。

「ふっ……私が診断してやる——」

「その必要はない」

千冬に引きずられて部屋から退出するクロウの顔は、悲しげに歪んでいた。

……まあこれで許可されていたら大問題なのだが。



福音と戦った専用機持ちたちの健康診断の後、広間で最後の食事を皆でいただいた。  
た。

健康診断の結果は何も問題なかった。

といつても実際福音からは一度も攻撃を当てられていないので、当然といえば当然だ。

下に恐ろしきは、原作からは及びもつかないほど強化された彼女たちの実力か……。

「うむつ、日本の食事は本当に美味だな」

「……………」

ヒロイン勢の苛烈な競争争いに勝利したのは、ラウラだった。

未だ落ち込んでいるクロウの隣に座り、幸せそうに食べ物を咀嚼している。

浴衣に銀髪眼帯少女というのは、彼女の容姿の良さもあつてか意外と似合っている。

「む？どうかしたか、クロウ」

「いや、なに。少し残念だと思っただけだ」

キョトンとして聞いてくるラウラに、気にするなと手を振る。

確かに気にするほどのことではまったくない。

ラウラはクロウが何に残念がっているのかを察知し、頷く。

「あまり積極的すぎるのも考えようだぞ、嫁」

少し常識がかけているラウラでも、これくらいは理解していたようだ。

自分以外の女の裸を見たがるというクロウの姿に、嫉妬したゆえの言葉だとしても

……だ。

「まあその……わ、私なら見せてやらんこともないぞ……？」

常識的な発言をしたのが台無しである。

クロウは、ゴホンとわざとらしく咳をしながら顔を紅に染めたラウラを見て、癒されながら食事を完食した。



「……わざわざこんな時間に泳ぐのか？」

クロウが砂浜に座り込みながら、そう尋ねる。

昼と違って夜の海は黒々としており、独特の恐ろしさがある。

「何を言っている。夜の水練は非常に意味があるのだぞ」

海水を美しい銀髪から滴らせているラウラが、彼に答える。

確かに特殊部隊ともなれば夜の水訓練はあるかもしれないが、臨海学校に来てまで鍛錬というのはどうなのだろう。

ちやつかりクロウも巻き込んでいるのが、軍人のラウラの少女的な部分が出ていて微笑ましい。

「まあ夜の海も悪くはないな」

人口の光がまったく届かないこの場所は、月の光が辺りを照らしている。

決して明るくはないのだが、ラウラの銀髪と組み合わさると妖しい色気がある。

「さて、ラウラ。私もお前に付き合っただから、私にも是非付き合っしてほしい」  
「むっ？」

グイツとラウラの方に体を乗り出すクロウ。

そして常人ならざる神速の速さで、ラウラの下の水着を取り去った。

「な、何をする!？」

いきなりのクロウの蛮行に、目をパチクリとさせながら顔を真っ赤にする。

しかしながらよくクロウの部屋に裸で侵入する彼女が言えた義理では、ある意味ではまったくなかつたりする。

「なに、愛の確かめ合いだ。私がお前の嫁ならば、それくらい当然だろう?」

「う、うむ……そうだな……?」

クロウの出まかせに、純粋なラウラはすぐに信じ込んでしまった。

I S 関連や戦闘のことになるとこれほど頼れる存在はいないのに、日常生活においてラウラはまったく頼れないのだ。

さて、適当なことを言ってラウラを納得させたクロウは、自分の欲望を解放し出す。

月を見ると人は狂うとも言われるが、元から頭のねじが何本か吹っ飛んでいるクロウには、欲望を少し解放させることくらいしかできなかつたようだ。

「ん……」

白く細い太ももを掴む。

それは軍人故に鍛えられた弾力があり、しかし適度な肉付きもあつた。

小ぶりの尻に手を回し、肉の感触を愉しむ。

キュツと持ちあがった尻が心地よい。

「んっ」

陰部を少しこすると、感度の良いラウラはピクリと反応する。

指は膣内に挿入せず、くにくにと外側の秘肉を弄る。

「ん、ふ……う」

そうして挿入せずに焦らしていると、ラウラは自分から快樂を得ようと動き始める。

クロウの手を引き締まった太ももの間にはさみ、陰部をそこにこすり付ける。

指は自分の乳房の方へ持つて行き、水着の上から乳首をくりくりと弄っている。

最早完全に自慰である。

クロウが少し手を引くと、ねっとりとした愛液が大量に手に付着していた。

「まさかこすり付けてくるとはな……」

「お、お前が中々入れてくれないからだぞ」

ぷいっとならばを向きながら言うラウラ。

どうやら陰部を刺激してほしいらしいので、秘裂に指を上下させて擦ってやる。

「あつ、あつ、あつ、あつ！」

擦るたびに愛液が流れ出してきた、指や秘肉を濡らす。

顔を真っ赤にし、ピクピクと可愛らしく反応している。

「ひゃああつ!! ああああつ!!」

秘裂の延長線上にあつた陰核をグツと指で押し上げると、ラウラは甲高い嬌声を上げた。

良い反応をするので何度も指で触ると、ギュツとクロウの頭に抱き着いて絶頂した。ビクビクと大きく身体を震わせ、秘部から押し出されたように愛液が飛び出してくる。

「はあ……はあ……」

クロウに抱き着いたまま、絶頂の余韻に浸るラウラ。

小ぶりな乳房が顔に押し付けられて、ご満悦なクロウ。

いつの間にか上の水着も持ち上げられていて、汗と海水に濡れた乳房が直に顔に当たっている。

「あつ! 指い……」

とろとろに濡れている秘部に、指を挿入する。

締めりの良いラウラの膣内は、指をキュツと締め付ける。

キュンキュンと子宮がうずき、ゾクゾクとした快感が身体中を駆け巡る。

グツと膣壁を押しされると、愛液が大量に分泌された。

「くうつ!?! そ、そこはへそだぞ?!」



少ない乳肉を揉みながら、へそを舌で舐めまわす。

へそ穴をほじるように舌で突いていると、恥ずかしそうにしてクロウの頭をどけようとしてくる。

慎ましい乳房を揉むと、桃色の先端がピクツと期待するように震えた。

「あつ、やつ、あつ！」

ぐちゅぐちゅと、音が大きく鳴るように指を動かす。

片腕を背中に回し、背骨に沿ってスツと指を滑らす。

片方の乳首をキュツと摘まみ、指で転がしたり潰したりする。

もう片方の乳首を舌で舐ると、口に海水と汗の酸っぱさが広がった。

「あつーんっーふふ、まるで子供のようだな……んあつ！」

一心不乱に乳首に吸い付くクロウを見て、胸に暖かい気持ちがある。

普段は凄く頼りになる男なので、こういう風に甘えた姿を見るとギャップでおかしくなりそうだ。

母乳が出るのを促すように、強く乳首を吸引する。

口をつけていない乳房は、大きな手で揉みまわす。

「んんっ！」

音を立てて乳首から口を離し、ラウラを地面に横たわらせる。

ラウラの小柄な肢体は海水や汗、唾液や愛液などの色々な液体がへばりついており、月の光に反射して光っている。

特に濡れているのは下腹部で、クロウの指を見るとべちやべちやになっていた。

クロウはラウラをうつぶせにして尻を上げさせると、固く大きくなつた男根を取り出した。

「……相変わらず大きいな」

「お前が可愛いからな」

秘裂に亀頭をこすり付けて、愛液でコーティングする。

そして十分に濡れた後、ゆっくりと膣内に挿入していった。

ラウラの膣内は処女かと思うほどキツく締め付けており、しかし男根を拒もうとはしていなかった。

小柄な身体をプルプルと震わせ、体内に入り込んでくる異物を確認する。

「あ……ああああ………」

ラウラの小さな口から、押し出されたような声を漏れる。

膣内に全て入った巨大な逸物は、膣内を隙間なく埋めて子宮口にコンコンと突きあたる。

「く……ふう……私の膣<sup>なか</sup>内で動いて……」

強く締め付けてくる刺激に、男根も射精をこらえてピクピクと小刻みに動いていた。口からはよだれが垂れ、地面を濡らしていった。

「ふうふう……っ！」

ズルルルと音を立て、ゆっくりと男根を引き抜いていく。カ리가膣壁を抉るように、なじませるようにゆっくりと……。

「ああっ!!」

そして一気に膣奥へと突き刺す。

ビクビクと身体が震え、グツと顔を前に押し出す。

「あっ！あっ！あっ！あっ!!」

膣口では、愛液が掻き混ぜられて泡立っている。

にゅちにゅちと粘っこい音が出て、ラウラの耳も犯す。

「ああっ！ま、待ってくれ、嫁！」

「待たないぞ？」

「ち、違う！ト、トイレに行きたいのだ！んあっ!!」

会話しながらも、ずっとピストンされている。

どうやらラウラは巨大な男根に刺激されて、尿意を催してしまったようだ。

ブルリと震え、何かを我慢しているような表情をしている。

キュツと眉根を歪めて我慢しようとしているが、突かれるたびに小柄な体躯のラウラは揺れて、ガクガクと頭を動かされている。

秘部は愛液でびしょびしょになっていて、腰が尻に当たると肉の音と水音が同時になる。

後背位の体位になっているので、キュツと閉じている尻穴まで見えている。

後ろにいるクロウの方に首だけ回して見て、トイレに行かせてもらえるよう懇願する。

「それは大丈夫だ。ここですればいい」

「何いつ!? きやつ!」

そう言うと同時に、ピストン運動を止めてガバツとラウラを持ち上げた。

思わず普段では絶対に出さないような声を漏らしてしまうラウラ。

急に持ち上げられたラウラは落ちないように、とつさに後ろに手を回してクロウの首に絡ませ抱き着く。

小ぶりで感度の良いAカップの乳房も、プルンと小さく波打った。

「ほら、ここには人がいないから遠慮せずすればいいぞ」

「ば、馬鹿者お……んうっ! ああっ!!」

持ち上げた状態—— 駅弁のまま、ラウラを動かして陰部を刺激する。

ラウラは非常に軽いので、強靱な肉体を持つクロウなら簡単に動かすことができた。ぶちゅぶちゅとはしたくない音が響き、Aカップの胸がブルブルと揺れる。

ピストンを再開されたことで、尿意がさらに増して尿道がヒクつき始めた。

「あぁっ！そ、そこはぁっ!!」

腕を伸ばして、陰核を刺激する。

クリクリと指で転がしていると、愛液の量が増加して尿道のヒクつきが頻繁になった。

はっはつとまるで犬のように息を漏らしながら、必死に我慢しようとするラウラ。

しかし膣内を抉られ、陰核を弄られてとうとう限界が訪れてしまった。

「あぁぁぁぁっ!!」

プシヤアアアアツ！と勢いよく噴出する小便。

我慢していた分、勢いよく漏れた。

乳首をコリコリと転がされ、陰核も弄られて顔をとりけさせる。

「ふうう………」

尿意から解放された快樂に身を委ねるラウラ。

大量に漏れ出た小便は、持ち上げていたクロウにもかかっていた。

下腹部をギュッと押しやると、ちよろちよると押し出されたようにして少量の尿が

漏れ出た。

「んあああつ!!」

油断をしていたというか放心状態になっていた彼女の膣内に、男根をグツと奥に押し込んだ。

一気に子宮口まで迫って押し上げ、ピュツと少量の尿が勢いよく噴出した。

ラウラは身体をビクリと震わせ、目がチカチカと光った。

「な、何故固くなっているんだあつ!!」

変態だからである。

持ち上げていたラウラをゆっくりと地面に下ろし、四つん這いにさせて腰を突きだし始める。

パンパンパンと腰が尻に当たる音が出て、Aカップの乳房も連動して揺れる。

「可愛いな、ラウラ。本当、私の側に来てくれて嬉しいぞ」

「~~~~~ツ!!」

覆いかぶさるようにしてラウラに抱き着き、耳元でそう囁く。

その言葉に応えるように、膣内がキュンキュンと締め付けてくる。

手を回して乳房を掴み、プルプルと揺らす。

「わ、私もクロウと一緒にいれて嬉しい、っ!」

涙で潤んだ目で苦勞を見つめ、喘ぎながら言う。

そのうつとりと蕩けた表情は、クロウに首ったけなのが一目瞭然だ。

ラウラの言葉に興奮したのか、クロウの腰の動きが激しくなってくる。

ジユポジユポと膣内はかきませられ、男根は射精を求められているように締め付けられる。

「あつ！あつ！あんっ!!」

射精を間近にした亀頭が膨れ上がり、膣壁をゴリゴリと抉る。

そして先に絶頂を迎えたのはラウラだった。

ただでさえ狭い膣内をギュウウウツと締め付けるので、クロウも堪ったものではない。

まるで男根を引きちぎろうとしているかのように、強く強く締め付ける。

「あああああああつ!!」

大量の精液が、膣内で放出された。

勢いよく噴射された精液は膣壁や子宮口に激しくぶつかり、ビリビリとした快感がラウラの身体中を駆け巡った。

クロウが支える肢体はガクガクと痙攣し、強烈な快楽に耐えようとする。

クロウの大きな指は、慎ましい乳房を摘まんでいた。

「ふうふう………つ」

男根をゆつくりと引き抜いていく。

離れないでと言わんばかりに、男根に吸い付いてくる。

ポンと音が立って男根が引き抜かれた。

ラウラの臀部は精液やら愛液やらでドロドロになっていて、汗に濡れた肢体が時折思  
い出したように震えた。

しかしこの臨海学校で何度性交したのだろうか……？



「うくん……紅椿の稼働率は四十パーセント弱かあ。まだまだだねっ」

機械で作られたウサ耳を装着し、ヘラヘラと笑いながら某王子の物まねをしている美  
女。



空中投影ディスプレイをじっと見ている目は、どこかつまらなさげだった。

今夜は美しい満月が辺りを照らしていて、彼女——篠ノ之 東がまるで月の兎のようだ。

「……データをみるのはいいが、何故私の膝の上で見る」

「ええ、いいじゃないじゃない！」

クロウの膝の上で、駄々っ子のように手足をバタつかせる。

つまらなさげにしていた目が、彼と話すときは楽しそうに弧を描いていた。

「それに東さんのお尻が当たって気持ちいいでしょ？」

「まあな」

東のからかい半分の問いかけに、すぐさま答える。

実際、大きくて柔らかい臀部が股間部でぐりぐりと動くので、少し血が集まりだして  
いた。

「もう、クロくんは正直者すぎてからかいがないねっ」

そう言いながら、彼女はディスプレイの画面を紅椿から白式へと変える。

それは一夏が生死の境から蘇った際に進化した、白式の第二形態だった。

結局福音は専用機持ちたちに完封されたので使う機会はなかったが、東にかかれれば見ただけで解析することは可能である。

エネルギー消費量は悪化しているが、それを代償に攻撃力と防御力、機動力などが段違いに進化していた。

そして東が最も驚いたことは……。

「むふふ、まさか操縦者の肉体も回復できるなんて……私はまだこんな技術、あの機体以外には流してないはずなんだけどなあ〜」

にやにやといやらしく笑いながら、ディスプレイを見る。

そう、白式第二形態にはなんと再生能力が付加されていたのである。

このおかげで、福音から受けた傷跡が全て消えてなくなった。

「そうだな。お前が最初に作ったIS、白騎士が最初で最後のはずなのだがな」

クロウと東の会話の中に入ってきたのは、凜とした声の持ち主だった。

ピシツとした黒いスーツに身を包んだ、千冬だ。

「やつほー、ちーちゃん。東さんがクロクんと二人きりだから嫉妬したのかい？」

「殺されたいか、貴様」

言葉の応酬を交わす二人だが、決して目を合わせることにはなかった。

東はクロウの膝の上で少し身じろぎしながら月を見上げ、千冬は近くの木にもたれかかった。

そこから話されたのは、およそ普通の幼馴染との会話ではなかった。

千冬はどうやら東が今回の事件を引き起こし、さらには一夏がI Sを使えるようにしたと推理した。

東はそれを肯定も否定もしなかった。

「ん〜……でももしそれをしていたとしても、私はすぐに飽きちやうんだよね〜。飽きなかったのはクロくんだけだし♪」

顔を後ろに回し、クロウの頬にチュツとキスをする。

千冬のかめかみに青筋が発生した。

「で、今回の暴走事件はどうなんだ？天才科学者。妹のために舞台を用意したのか？」

「東さんは箒ちゃんのこととは大好きだけど、もし晴れ舞台を用意するんだったらマスマゴミが集まりやすい場所にするよ」

東はのらりくらりとした性格だが、クロウに対しては純粹すぎるほどの好意を向けている。

そしてクロウはこの世界最悪の愉快犯といっても過言ではない。

基本的に、自分が面白ければ世界なんてどうなってもいい男なのだ。

勿論、お気に入りの女性は絶対に守りきるが。

そして東も身内のためなら世界なんてどうでもいいと考える。

むしろつまらなすぎて破壊したいくらいだ。

つまり、クロウのために動いたと考えられることもない。

「ふん、まああまりはっちゃけるなよ東。また白騎士事件のようなことを起こすな」  
「あいあいさー！」

元氣よく答えている東だが、まったく信用できない。

あの時、東は日本を攻撃可能なミサイルを保有する十二か国にハッキングし、234  
1発ものミサイルを発射させたのだ。

どこかの国が喜びそうな展開である。

当然ミサイルという高技術を保有している国はセキュリティも相当なもののだが、  
東からすれば紙の壁のようなものだった。

「ねえねえクロくん。今の世の中はどうかかな？」

今まで静観を保っていたクロウに話しかける。

クロウは少し考えた後、話し出した。

「そうだな……まあつまらなければ私が面白くすればいいだけだから、特に不満などは  
ないな。それにお前たちがいるから、私は面白いぞ」

「んもう。そんなこと言ったら襲っちゃうぞ？」

でへへへとだらしなく笑ってクロウにじやれつく東。

すりすりと身体全体をクロウにこすり付け、幸せそうにしている。

彼女がこんな表情をするのは、後にも先にも彼一人であろう。

「……………」

それを見ていて面白くないのが千冬である。

自分は素直に甘えられるような性格ではなく、ましてや第三者<sup>東</sup>がいるのに絶対に不可能である。

しかし分かっていることだが、自分の想い人が他の女とイチャついているのは面白くない。

なので…………。

「みぎゃっ!?!」

東の頭に、どこからか取り出した出席簿アタックが繰り出されたのだった。

## 第四章

### 夏ノ長期休暇 其ノ壺

学生にとって、八月は楽園以外の何物でもない。

約一か月もの休日だが、無条件でもらえるのだ。

宿題？そんなものはなかった。

IS学園でも、例にもれず夏休み中だった。

そんな中、寮の廊下を歩く一人の少女がいた。

「あ、熱い……」

いつも元気な様子はなりを潜め、ぐったりとした様子で歩いている茶髪ツインテール美少女。

彼女は凰 鈴音。中華人民共和国の代表候補生である。

鈴が歩く廊下は、人けがほとんどない。

皆この長期休暇を利用して、母国や実家に帰省したのだ。

しかし鈴の場合、帰省してもどうせ軍のお偉いさん方に捕まるだけなので、今回は帰らなかったのだ。

「(それにあいつとも一緒にいたいしね)」

今向かっている先も、あいつのいる場所だ。

ポケットの中に入っている紙切れを確認し、頷くとまた歩き出す。

そうしてたどり着く、あいつ——クロウが暮らしている寮部屋。

クロウの故郷とかは聞いたことがないので、おそらく帰省はしていないだろう。

小さく喉を鳴らして調子を整えると、むんつと気合を入れる。

「クロウ？ 私、鈴だけど開けてくれない？」

ノックを三回して、クロウを呼ぶ。

それから少しすると、ドアがガチャリと音を立てて開いた。

「……どうかしたか？ 鈴」

いつも通りの無表情で、鈴に話しかける。

しかし頭の寝癖から、今まで夢の世界にいたことが丸わかりだ。

真昼間からベッドの上とは、良い御身分である。

「あんた……もしかして今まで寝てたの?」

「まあな」

呆れたように言う鈴に、何ともないように返す。

とりあえずドアの前で話していてもあれなので、クロウは鈴を部屋に迎え入れることにした。

中はエアコンがガンガンに効いており、非常に快適だ。

自分のお金じゃなかったら使いまくる……最低である。

「あ……涼しいい」

鈴は幸せそうな顔で、冷風を直接受ける。

外のクソ暑いところが地獄なら、このエアコンの効いた部屋は天国である。

「何か飲むか?」

「あ、ちよーだい」

冷蔵庫を開けながら鈴に聞くクロウ。

意外と気遣いができていることに驚きだ。

クロウは冷蔵庫から缶ジュースを取り出すと、鈴に向かって投げた。

女子なら怖がるような物を投げるが、鈴はそれを軽く受け止めてタブを開け飲みだ



す。

「ごくごく」と喉を鳴らして飲む姿は、そこらの男より男らしい。

ちなみにクロウはこの時、汗に濡れた喉が動くのを見て少し興奮していたりする。起きたばかりなのに平常運転だ。

「ぶはーっ！ありがと、クロウ」

「気にするな」

「こちらもいい思いをさせてもらった……とは言わない。

それにあまり考えていると、野生動物並に勘が鋭い鈴に察知されてしまう。

「でもあんた、とりあえずその頭を直してきなさいよ」

「……了解した」

鈴に言われ、洗面所に行く。

だが鈴はこんなことを気にするような女ではない。

では何故こうしたのか……？

「……………」

鈴がジーッと見つめる先には、クロウが普段使っているであろう枕が……。

ススツとベッドの方へ寄っていき、バツと枕を持ち上げた。

それから枕を意味もなくぽふぽふと叩いたり、グニグニと引っ張ったりする。

「…………ふにやあ〜」

そして枕を抱きしめて匂いを嗅ぐと、本当に猫のような声を出す。

その声はとろとろに甘い声で、目もトロンとしていて傍から見ると色気のある危ない人に見ええない。

鈴ほどの小柄さで、スタイルもいいとは言えないのにこれほどの色気を出せるのは凄まじいものだ。

「ん…………ふ」

クロウの匂いを嗅いでいると、下腹部が熱くなる。

下着の中も濡れたような気がする。

これは汗なのか…………それとも…………？

「や、止めないと…………」

そう思う鈴だが、枕を手放すことができない。

むしろさらに顔に押し付けて、匂いを嗅ごうとする。

これはまさに麻薬…………否、猫にマタタビだ。

「(ちよ、ちよつとだけ…………そう、ちよつとだけなのよ)」

スルスルと手が下腹部に伸びていく。

そして熱い秘部に手が触れようとした、その時。

「……何をしている？鈴」

「ふひやああっ!?!な、何でもないわよ!!」

ベッドの上で数十センチ跳ね上がったと思うと、ベッドに枕を叩き付ける。

顔を真っ赤にし、なんでもないと手をパタパタと振る。

勿論、何かあったことは間違いない。

「ふむ……」

「は、早くこっちに来なさいよ！あたしが来た理由を話すから！」

考え込む仕草を見せるクロウを見て、慌てて自分の方へ呼ぶ。

ベッドの上で自慰をやりかけていたなんて知られたら、朝まで一緒に運動コースまっ

しぐらだ。

いや、別に嫌というわけでは絶対にならないのだが、一応今回クロウに逢いに来た理由は

他にあるので、まずそれを終わらせたいのだ。

「で、話とはなんだ？」

「う、うん。それは……」

話そうとしていた鈴が、途中で言葉を止める。

その理由は、頭によぎった一抹の不安。

「(……もしかして、今のあたしって汗臭い……?)」

サツと顔を青ざめさせる。

クロウの部屋まで、毎年異常気象となる気温の中歩いてきたのだ。

あまり暑さに耐性のない鈴は、それはもうへばった。

それはさておき、自分の部屋からクロウの部屋という短い距離でも、鈴はそれなりに汗をかいてしまった。

特に鈴は制服を改造して肩が露出しているので、匂いが漏れているかもしれない。

「……どうした？」

クロウの反応を見る限り、気づいている様子はない。

それならさっさと誘って、退散するでしょう。

「これ見て」

そうやって鈴が取り出したのは、一枚のチケット。

それは最近完成したばかりの、ウォーターワールドの前売り券である。

「プールか？」

「そうよ、あたし……ともう一人のお邪魔虫と一緒に行かない？」

「お邪魔虫？」

「ああ、セシリアのことよ」

一応クロウに誘っている風に言っているが、もし行かないと言われたら最悪だ。

自分の好きな男とデート——お邪魔虫もいるけど——から、恋敵との二人遊びになつてしまうのだから。

本当ならセシリアなんてほつといひて二人で行きたかつたのだが、この計画がセシリアに漏れたのがいけなかつた。

鈴が苦勞に苦勞を重ねてやつと手に入れた前売り券を、セシリアはあつという間に入手してしまつたのだ。

今セシリアはイギリスに帰国しているから彼女がいない間に行けば二人きりなのだが、鈴もそこまで性格が悪いわけではない。

「そうだな……是非行かせてもらおう」

「ホントっ！」

クロウが来てくれることになり、満面の笑みを浮かべながら飛び跳ねる。

そんな子供みたいな行動を、クロウは暖かい目で見つめていた。無表情だが。

「じゃあ明日の土曜日、十時にゲート前待ち合わせね」

「うむ、了承した」

鈴の心の中は大歡喜である。

ミニマム鈴が、小さな五星紅旗を。パタパタと笑顔で振っている。

そしてそのウキウキ気分のまま自分の部屋戻ろうとするのだが……。

「まあ待て」

「……………ふえ？」

細い腕をガシツと掴まれる。

いきなり止められたので、キョトンとする鈴。

「お前の身体を流れる汗などを見ていたら……………興奮してな」

「……………ちよ、ちよちよちよつと待ちなさいよ！せめてシャワー行かせ——  
——」  
続きの言葉は、クロウに届かなかった。



「くろうとう……………」

鈴は小さな舌を懸命に伸ばしながら、クロウの顔を舐めまわす。

その甘えた声は、シャワーに行かせると騒いでいたのが嘘のようだ。

すでに愛撫で心身ともにほぐされた鈴は、一刻も早く男根を膣内に挿入してほしかった。

今は二人でベッドに横になり、クロウが後ろから抱き着いている体位になっている。鈴は顔をひねり、クロウの耳をペロリと一舐めする。

「鈴は甘えたがりだな」

「そ、そんなことないわよ……」

普段ハキハキとしていて自己主張の強い彼女からは、考えられないようなほどしおらしい態度。

暗に本当のことだと言っているようなものだ。

鈴が耳から舌を離すと、ドロリと唾液の橋が架かる。

「ん、ふ……っ」

腋の下から手を入れ、慎ましい乳房を揉む。

鈴自身コンプレックスの胸の大きさが、そこには確かな柔らかさがあった。

いきり立った男根は閉じられた健康的な太ももの間に突っ込み、秘裂を刺激する。

今までの愛撫でほぐれたそこは、大量の分泌液を漏らしていた。

「んはあ……ホント、あんたのつて底なしよね」

まるで自分が生えているかのように太ももの間から露出している男根を掴み、龟头を

手のひらでこする。

自分の愛液と我慢汁で濡れた亀頭は、にちやにちやと粘っこい音がする。

「んっ……」

敏感な亀頭を擦られ、思わず乳房を掴む力を強くしてしまう。

貧乳故か、感度の良い鈴に痛みが走るが、クロウに与えられた感触と思うとそれさえ愛しくなってくる。

重症である。

「ねえ……早く挿入れて……?」

瞳に涙をいっぱい溜め、上目づかいでクロウの目を見ながらおねだりをする。

その言葉の矢は、クロウの心臓を射た。というか貫いた。





「んあっ！あっ！はっ！あっ！！」

正常位で、小柄な鈴に覆いかぶさるようにしながら腰を振る。

膣内から掻き出された愛液が、陰毛一つ生えていない秘肉に付着している。

Aカップの乳房がプルンと可愛らしく揺れ、ささやかな自己主張をする。

シーツを握りしめ、涙を流しながら快楽に酔う鈴。

「はっ！あっ！んっ！！」

いつの間にか鈴は脚でクロウに抱き着き、逃げられないようにしている。

膣内で射精しろということだろうか。

所謂だいしゆきホールドをされながらも腰を振り続ける。

「んんんんっ！！」

快楽の限界になった男根から、白い液体が吐き出された。

子宮口にぴったりとつけられた鈴口から、どんとどんと精液が送り出されてくる。

それでも入りきらなかった精液が、数滴シーツの上に垂れた。

「……もつとしてえ」

離れようとしたクロウの服の袖を摘まみ、甘えた声を出す鈴。

日常生活ではほとんどお目にかかれぬ状態であり、この世界で唯一見れるのはクロ

ウだけだろう。

『はあ……はあ……クロくんの身体いいよお。くそ……この中国人めえ……』

否、どこかの天災兎が見ていた。

さて、鈴にもう一回戦誘われたクロウだが、当然答えは決まっている。

しかしここで少し趣向を変えてみることにした。

「よし、鈴。もう一回服を着ろ」

「……はあ？」



服を着させた理由は、また服を脱がせながらしたくなつたから。

鈴はそれを聞いて顔を真っ赤にして、『変態！』と罵った。

まあ結局着るのだけでも。

汗に濡れた身体に、制服がまとわりつくのが鬱陶しい。

特にシヨーツの中は、中出しされたままでシヨーツを穿いたので、本当に気持ち悪い。少し身じろぎすると、にちゃにちゃと音がする。

「ん、ちゅ……ちゅ」

しかし鈴はそんなこと気にせず、一心不乱にクロウに唇を押し付けていた。腕を首に回し、小ぶりの乳房が胸板で潰れる。

二人は身長差が大きいので、半ば鈴がクロウに持ち上げられているように見える。

「ん、ぶ……はああ……」

口内だけでなく、唇まで舐めまわしていた鈴をゆっくりと離す。

唾液の橋が、何本も架かる。

キスを止めさせられた鈴は、うっとりとした様子でクロウを見上げるだけだ。

「ほら、鈴。舐めてくれ」

「……うん」

鈴は素直に言うことに従い、地面に跪く。

クロウのズボンを下げ、自分のワイシャツのボタンをはずして前をさらす。

可愛らしいブラが見え、Aカップの乳房も見える。

「ん、く、ちゅぶちゅぶ」

陰囊をペロペロと猫のように舐めながら、手は亀頭を弄る。

我慢汁が垂れ、鈴の手を汚す。

溢れた我慢汁を見ると、それを舌で舐めとっていく。

「んちゅ、ジユポジユポっ！」

陰茎の根元を手で持ち、亀頭を含んで顔を上下に動かす。

そして吸引しながら、男根を喉奥まで押し込んだ。

小さな鈴の口内で、男根はかなり奥まで進んだ。

この性技も、クロウに仕込まれたものである。

「っ、もういい」

「ん、ぶはあっ！」

鈴が口から離すと、唾液で濡れそぼった男根が姿を現す。

それはビックビックと震えていて、今にも射精してしまいそうだ。

「次はお前の番だ」

「この体位って結構恥ずかしいわね……」

クロウはベッドに座り、鈴を膝の上に座らせる。

これから対面座位をするつもりのようなのだ。

ワイシャツをスルリと肩から脱がせ、可愛らしいブラも上に持ち上げる。

汗に濡れたAカップの乳房が、プルンと揺れて現れる。

鈴はそれから自分で膝をついて、男根に照準を合わせる。張りのある尻が、プルンと波打った。

「んはあああつ!!」

亀頭を膣内に少し入れた後、一気に腰を落とした。

愛液がクロウの腹にも飛び散り、クロウの陰毛が綺麗な陰部に当たる。

「んっ!あつ!はっ!!」

クロウの肩に手を置き、ギュツと握る。

鈴は胸を揉まれながらも、腰を上下に動かす。

支えている足が快樂でプルプルと震えている。

Aカップの乳房は、小刻みに小さく揺れている。

手と手を絡み合わせて、触れ合う面積を増やす。

「くろう……キスして」

鈴の要望に応え、身体を起こしてキスをする。

くちゆくちゆとかきませられた唾液は、顎を伝ってシートに落ちる。

「んはああつ!!」

キスを止めて首筋を舐めると、大きく喘ぐ。

背筋を逸らせ、乳房を揺らせる。

鈴は両手両足を使ってクロウに抱き着く。

「んはっ！あっ！あっ！！」

腰を動かしながら、今度は鎖骨を舐める。

すると鈴の身体は面白いほど反応し、顔をとりけさせる。

「んっ！あっ！あっ！あっ！！」

敏感な乳首を舐めながら突くと、シーツをギュつと握って気持ちよさそうにする。

「好きだぞ、鈴」

「っ！んひゃああああっ！！」

その一言で、鈴はさらに上の快楽を与えられた。

その間にも、クロウは鈴の乳房を舐るのを止めない。

歯で甘噛みしながら舌で乳首を転がしたり、ただ荒々しく乳房を鷲掴みにしたり。

「あっ！あっ！あっ！あっ！！」

だんだんと上下運動が激しくなってくる。

鈴は激しく動かされているので、慎ましいAカップ乳房もせわしく踊る。

涙を流し、よだれさえこぼしながら快楽を貪る。

「そろそろ射精すぞ」

「はっ！ひっ！う、うん！きて！！」

二つの乳房をグニユツと潰す。

鈴の太ももはガクガクと小刻みに震え、膣内はキュツと締め付けてくる。

肥大した亀頭は、ゴリゴリと子宮口を擦る。

「あああああああつ!!」

ドブドブと、前より明らかに多い量の精液が出た。

鈴は膣内を叩く精液の感覚に耐えるように、クロウに力いっぱい抱き着く。

ビクビクと少しの間震えていた二人は、力の抜けたようにベッドに身を投げ出す。

そして自然に顔を近づけて行って、唇を重ねたのだった。



「やはり日本は暑いですわね……」

ロールスロイスから降りた金髪の令嬢が、日差しを手で遮りながら言う。

夏の平均気温が二十度以下の祖国からすれば、三十度を超す日本は本当に暑い。金髪碧眼の美少女、セシリア・オルコットは、そんなことを考える。

「お嬢様、荷物を部屋へお運びしますね」

「ええ、お願いしますわね、チエルシー」

後ろからセシリアにそう報告したのは、彼女の専属メイドのチエルシーだった。

大人びた微笑みを浮かべて一つお辞儀をすると、荷物を部屋へと運んで行った。

しかしピタリと止まると、微笑みを濃くしながら近づいてきた。

「……う？どうかしましたの？チエルシー」

「いえ、少しお聞きしたことが。あの下着はミキストリ様用ですか？」

ピシリとセシリアの表情が固まる。

何故あの下着のことをチエルシーが知っているのだろうか？

下着屋に行ったらばれると思ってネットで買い、しかもスーツケースの二重底に入れるという徹底して秘密にしていたのに……。

別にクロウに使うのと聞かれて恥ずかしいわけではないが、さすがにあの過激な下着を見られるのは顔から火が出るくらい恥ずかしい。

「え、ええ。それが何か？」

「いえ、ただお嬢様には黒がお似合いかと思ひまして」



「そ、そうですか？ 考えておきますわ」

顔を真つ赤にして目をぐるぐる回しながら言うセシリアにお辞儀をすると、チエルシーは今度こそ部屋へと歩いて行つた。

セシリアはチエルシーを——自分なりに——優雅に見送つた後、ガクツと膝に手を付いた。

羞恥でどうにかなつてしまいそうだった。

「む？ セシリアか？」

「ふえ？……く、クロウさん」

頭上から声をかけられ身体を起こすと、そこには帰国中ずっと会いたかつた人が立つていた。

嬉しきで先ほどの羞恥心は吹っ飛んでしまった。

「お久しぶりですわ、クロウさん」

「そうだな、一週間ぶりか。イギリスは楽しかつたか？」

「ええ、やはり祖国はよかつたですわ」

和やかに交わされる会話。

セシリアは自然体で話せるこの時間が好きだった。

特にイギリスではオルコット家当主としてふるまわなければならなかつたので、この

時間が本当に楽しい。

「あ、ところで鈴さんから……」

「ああ、プールのことか？私も参加させてもらうことにした」

「そ、そうですか！それはわたくしも嬉しいですわ！」

心の中でもしかしたら鈴が裏切つて二人きりで行く約束をしているかどうか心配だったが、彼女はきちんと約束を守ってくれたらしい。

まあもし鈴が意地汚くもそんなことをしていたら、セシリアは戦争を仕掛けることだろう。

「お久しぶりです、ミキストリ様」

「む？」

そんな風にクロウとセシリアが会話していると、クロウの後ろから声がかけられる。

そこにはもう荷物を運び終えたのか、チエルシーが微笑みながら立っていた。

「チエルシーか……久しいな」

「はい、何年ぶり……ですね」

ペコリと頭を下げる。

チエルシーは十八歳ながら大人びた女性で、しかも美人である。

そんな美人がメイド服を着ていると、当然クロウは目で愉しむ。

「むう……クロウさん？」

「お嬢様、嫉妬はいけませんよ」

「し、嫉妬ではありませんわ！」

頬をプクツと膨らませてジト目でクロウを見ているセシリアは、傍から見れば拗ねているというのが丸わかりである。

チエルシーは自分の主人の可愛らしい姿を見て、ニコニコと笑っている。

「しかしチエルシーも美しくなったな」

「ありがとうございます」

何でもないように言葉を返すチエルシー。

しかし幼馴染で長い付き合いのセシリアには分かった。

彼女の顔が、ほんの少しだが嬉しそうに表情を崩したのを。



「いや、しかし二人ともよく似合っているな」

クロウの目の前に、水着姿でいるセシリアと鈴。

二人ともとびつきりの美少女なので、プールに来ている他の人の視線を奪ってやまな  
い。

「ふふ、ありがとうございますわ」

そう言つて優雅に微笑むセシリア。

臨海学校で使っていた水着を新調し、少し露出度が高い水着となっている。

ツンと張った乳房を覆い隠すブラだが、隠しきれずに少しはみ出したりしている。

「あ、ありがとうございます……」

照れながらお礼を言つた鈴。

彼女は水着を新調していないものの、臨海学校の時より身体がキュツと引き締まっ  
いた。

健康的な肢体が惜しげもなくさらされ、男たちの視線を誘う。

「ふむ……だがお前たちが見られているのは、あまり面白くないな」

「———っ」

その言葉に、キュンと胸が高鳴るセシリアと鈴。

遠まわしに『お前は俺のもの』と言われて、嬉しさがこみあげてくる。

セシリアも鈴も代表候補生ということで写真撮影などもこなしてきたので、人に見られることはどうとも感じない。

まあ時折男どもから浴びせられる卑猥な視線だけは腹立たしいが。

セシリアのきわどい水着も鈴が身体を引き締めたのも、クロウのためだけに用意したのだから。

「ふふ、ならわたくしたちが親しい仲だと見せつけないといけませんわね」

「そうねっ」

そう言つて二人はクロウの腕に抱き着く。

女性らしい柔らかさのあるセシリアと、張りがあつて肌触りのいい鈴に抱き着かれてご満悦のクロウである。

しかしセシリアと鈴がクロウに抱き着いたのは、不穏な空気を感じてでもあつた。

「(……何人かクロウさんを見つめている人たちがいますわね)」

「(くう……こんな怖いのに惚れんじやないわよ)」

一夏のような爽やか系イケメンではないが、クロウもそこそのイケメンである。

しかも長身で筋骨隆々。

ゴリマッチョが好き女性やがっしりした男が好き女なら、どんぴしゃなのだ。

勿論威圧感もバリバリあるので、一般受けはしにくい。

まあこれのおかげで、セシリアと鈴にちよつかいをかけてくる男がいらないのだが。

『えー、テスト。本日の午後一時から行われるメインイベント、水上ペアタッグ障害物競争に出場を希望する方は、フロントまでお越しください』

クロウ達がプールでイチヤイチャしている、園内放送が告げられた。

本来クロウと来ているので見向きもしない二人だが、優勝賞品を聞いて目を光らせた。

『なお、優勝賞品は沖縄旅行五泊六日ペアチケットです！こぞつて参加してくださいー！』

沖縄青い海白い雲暖かな日差しペアクロウ二人きりイチヤイチャ e t c …

「クロウさんー！」

「クロウー！」

「ちよつと参加して一きますわ（くるわ）！」

「む？了解した」

こうして二人の代表候補生が参加することとなった。



「今回参加したのは十二組、二十四名の女性たちです！」

司会の女性が飛び跳ねながらそう言うと、大きな歓声が上がります。

それが全部耳障りな野太い声。男だらけである。

この歓声には二つあり、一つは出場者に対する歓声。

セシリアと鈴という超絶美少女たちもさることながら、他の参加者も二人には及ばずとも容姿の整った女性たちである。

そして二つ目は、司会の女性が飛び跳ねるたびにダイナミックに揺れる胸である。

露出度の高い水着なので、揺れ方などがハッキリと視認できる。

勿論クロウは後者で歓声を上げた。

「む……クロウさんの女好きは凄まじいですわね」

クロウの視線が司会の胸にいつていることを目ざとく見つけたセシリアは、むすつとする。

観客——八割が野郎——が大量にいる中で、クロウを見つけれられるのは流石狙撃手。

「そんなのもう分かっていることじゃない。嫌なら離ればいいのよ」

そんなセシリアにズバツと毒を吐く鈴。

澄ました顔をしているが、こめかみには青筋が浮かんでいる。

胸の話題を私に振るな。

「そんなことは死ぬまで……いえ、死んでからもありえませんかね」

そう言つて鈴に見せつけるように胸を揺らす。

観客が完成を上げたのは言うまでもない。

そんなセシリアを、まるで親の仇の如く睨みつける。

セシリアも負けじと睨み返す。

まさしく竜虎相搏つ。

というか今回ペアで戦うのだが、こんなことで大丈夫か。

「大丈夫ですわ。問題ありません」

「……なに言つてんの?」

「いえ、別に」

さて、こんな会話を交わしている二人だが、沖繩旅行はペアでしか行けない。



なのはどうして共同戦線を張ったのか。

まあそれは片方がクロウと行ってもついていく気満々だからである。

費用はどうかと問われると、それこそ愚問。

代表候補生は国家公務員なので、毎月お給料があるのだ。

二人とも散財するような性格ではないので、それなりの額は溜まっているのである。

「ではルールの説明をします！もう一度よく聞いてくださいね！」

ルールは至って簡単で、巨大プールの中央にある浮島に飛び乗り、そこに刺さっているフラッグを取れば優勝である。

しかしこのレースの障害は、ペア参加ということもあり二人で協力しないと突破できないということになっている。

……始まる前から喧嘩している二人は大丈夫なのだろうか。

「大丈夫よ。問題ないわ」

「なに言っているんですの？」

「何でもないわ」

このレースは驚くことに、妨害が許可されている。

つまり競走ではなく戦闘が始まる可能性もあるのだ。

「ではレース、スタートです！」

「行くわよ、セシリア！」

「行きましょう、鈴さん！」

結果、原作のように仲間を傷つけるようなチームプレイをしなかった二人は見事優勝。

この優勝は、原作より二人の基礎能力が大幅に底上げされていることも要因の一つである。

それから三人は沖縄へ旅行することとなるのだが、それはまた別のお話。

## 夏ノ長期休暇 其ノ弐

ドイツのどこかにある、薄暗い部屋。

湿度が高く、部屋の環境はお世辞にも良いとは言えない。

そんな部屋に、一人閉じ込められている女軍人がいた。

輝くような銀色の髪に、片目の眼帯。

ドイツ軍特殊部隊シユヴァルツエ・ハーゼの隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

普段キリツとしていて冷たささえ感じる表情は、今は疲労の色が濃くなっていた。

それも仕方がなく、この三日間不眠断食で過ごしているのだ。

体力など、もうほとんど残っていない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。尋問の時間だ」

いつの間にか目の前に立っていた尋問官がそう言う。

疎ましげにそれを見上げるラウラだが、どうしても顔が陰になっていて見えなかった。

しかし声から男だということは判断できる。

「さて、先の戦闘に於いてのお前らの目的はなんだった？」

「……言うと思うか？」

ラウラは男を嘲笑う。

自分は誇り高きドイツ軍人であり、シユヴァルツェ・ハーゼの隊長である。

国を……仲間を売る行為など絶対にしない。

「ふむ、まあお前がそうすんなりと話すとは思っていない。なのでありきたりで悪いのだが、人質を取らせてもらった」

「何っ!？」

男の言葉に、疲れ切っている身体を押しして反応する。

男が見せてきた写真には、同じ部隊の仲間が数人、地面に転がされていた。全員ぐったりとして倒れており、所々痛々しい青あざが見える。

「貴様!……こんなことをしてただで済むと思うなよ!」

ギロリと睨みつけて呪詛を吐く。

その瞳は軍人であろうとも恐怖で震えるほど迫力のあるものだったが、男はまったく動じた仕草を見せなかった。

「ふむ、威勢がいいのは構わないのだが、今もこいつらは私たちの手の中にあるということを忘れては困るぞ」

「…………。それでも目的を言うことはできない」

苦々しく顔を歪めながら、それでも決断した。

一より多。部隊より国に住む国民の方を取ったのだ。

隊長ともなれば、このような決断もしなければならぬ。

「そうか、ならば構わない」

「…………なに？」

さらに迫及されるかと構えていたラウラだが、男の言葉に肩すかしをしてしまう。

訝しげに見上げてくるラウラに、男が答える。

「私には国に対する忠誠心がないからな。別に栄えようが滅びようが知ったことではない」

「…………ではお前の目的はなんだ」

「このような人間は危険だとラウラは考える。

自分中心的な考えをするものは、基本的に皆危険なのだ。」

特にこの男はこの考えが非常に強いと見える。

「私の目的か……。まあ三大欲さえ満たされていれば、私は満足だ」  
それは獣と同じだ。

眠りたい時に眠り、食べたいものを食べ、子孫を残そうとする。

そこらにいる野生の動物と同じだ。

「さて、ラウラ・ボーデヴィツヒ。私は特に性欲が非常に強い。お前の部下から何人かいただこうかと考えているのだが……」

「ま、待て！」

ラウラの制止に、部屋から出て行こうとしていた男の足が止まる。

依然として男の表情は窺えないが、雰囲気から笑っているように感じられる。

まるでラウラが呼び止めることが分かっていたかのように。

「何かな、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「そ、それは私がする。だから部下たちに手は出さないでくれ」

ラウラがそう言うのと、いいだろうと頷く男。

彼女は自分の身を売って仲間を守ったのだ。

それが悪手だということに気づかずに……。



「さて、まずはキスをしてもらおうか」

「キス？」

男の膝の上に抱えられた状態で、慌てた声を上げるラウラ。

男がかなり大柄で、ラウラ自身も148cmと小柄なので、彼女は男を見上げている形になっている。

ろくに知りもしない男に抱えられているというのは屈辱の極みだが、部下のために我慢しなければならぬ。

何でも言われたらやるつもりだったが、まさかキスをしろと言われるとは思っていなかった。

問答無用で組み伏せられて犯されるものだとはばかり考えていた。

「心外だな。そうしてもまったく愉しくないではないか」

「……………そういうものなのか?」

「そういうものだ」

キスとは接吻……………口と口を合わせる行為。

特殊な育ちから一般的な考えを持っていないラウラからすれば、キスなどいくらでもできる。

普通なら初めては好きな異性と……………なんて考えるものだが、彼女はそんなことはなかった。

「ふむ、わかった」

ラウラはそう言うと、顔を上に向けて男の唇にキスをした。

ちゅつと音がする、可愛らしい接吻だ。

「……………これが何か意味があるのだろうか?」

そんなことを考えていたラウラだが、次の瞬間大きく動揺することになる。

「んんっ!」

男がラウラの柔らかな唇を割り、舌を侵入させてきたのだ。

そして彼女の小さな舌を舐めだした。

「ん、ふ……………」

始め目を見開いて驚いていたラウラだが、舌を愛撫されていると次第に表情が和らい



でいく。

いつの間にか自分からも舌を絡めはじめていた。

「はやく……」

口を離しても、ドキドキと胸が高鳴ったままだ。

キスをしていた時よりもうるさくなっているかもしれない。

男はラウラの軍服をはだけさせると、白く透き通る肌にキスをし始めた。

唇が触れるだけのものだが、ラウラはくすぐつたいような気持ちいいような不思議な感覚に襲われていた。

「立ち」

男の言われた通り、膝から降りて地面に足をつける。

すると男はラウラが穿いているズボンを器用に脱がせた。

白いショーツが男の前にさらされる。

しかし羞恥心がほとんどないラウラは、別に下着を見られたくらいで騒ぎはしなかった。

「……もう濡れているな」

「う、うるさい」

ショーツをズリ下げられると、陰部からショーツに愛液が伸びていた。

流石にこれは恥ずかしかったらしく、顔を少し朱に染める。

男はラウラを四つん這いにさせる。

陰毛が一つも生えていなく、秘裂がぴつたりと閉じた可愛らしい陰部が見え、キュツと閉じた肛門も丸見えだ。

「ひゃあっ!?!な、何を……!?!」

ラウラは凜々しい普段では考えられないほど可愛らしい悲鳴を上げる。

その理由は、肛門から感じられたひんやりとした謎の感覚だった。

男はどこから取り出したのか、ローションをラウラの肛門に塗りつけたのだ。

「ぎ、貴様なに——ああああっ!?!」

背を仰け反らせて大声を発する。

臓器が大きくて固いものに押し上げられる。

男はラウラの肛門に男根を挿入したのだ。

初めて感じる未知の感覚に、ラウラは戸惑いを隠せない。

そう、彼女はかなり小さいものだが、快感を得ていたのだ。

確かに臓器を押し上げられて肛門を広げられるのはかなり苦しく、痛い。

しかしぞくぞくとした感覚が身体中を駆け巡っているのも事実だった。

「ふむ、どうやらお気に召してもらえたようだな」

「そ、そんなわけ、あるか……」

そう言うウウラだが、腸内で男根を強く締め付けている。

それは異物が入ってきたことへのただの防衛反応なのか、それとも……。

「うぐっ！ひあっ！あっ！あっ！！」

後ろから激しく突かれて、思わずといった様子で声が漏れる。

腸内を傷つかせまいと腸液が大量に滲み出し、結果男根の動きを助ける。

陰部がキyunキyunと疼き、愛液も滲み出す。

「あっ！あっ！うっ！あっ！！」

男根を突き入れられると電流が走り、小柄な肢体をビクビクと震わせる。

頭を力なく地面に伏せ、よだれが染みを作る。

「肛門でここまで感じるとはな……お前は変態だ」

「ちが、うううっ！！」

息も絶え絶えに反論する。

しかし奥をゴリゴリと抉られると、またあっけなく嬌声を上げる。

男の動きが激しくなると、腰が引き締まった尻に当たってパン！パン！と肉音が発生した。

陰部の疼きも大きく鳴り、じわりと愛液が太ももにまで侵食する。

「あつーあつーあつーあつー!!」

腰の動きが最高潮になると、肉音の間隔も短くなる。

ラウラは小さな身体をガクガクと痙攣させながらも、それを受け入れる。

男根が腸内でぶるりと震える。

それが射精の前兆だと悟った彼女の身体は、キュウウウつと強く締め付けた。

「んあああああつ!!」

ドブツと鈴口から精液が発射された。

それは男の欲望のように勢いを弱めることなく、腸内に満たされていった。

「こ、ここれで……部下たちに手は出さないな……」

絶え間なく送り続けられた快楽の余韻に浸りながら、達成感を滲み出させるラウラ。

いくら特殊部隊隊長といえども、彼女はその小さな身体で男の欲望を受け取って見せ

たのだ。

「何を言っている? まだ私は元気なままだ」

「なん……だと……!?!」

——まあ男が満足したというわけではなかった。

男はラウラの体位を変えて、四つん這いからM字開脚をさせた。

かばつと脚が開かれると、愛液でむわつとした空気があった。

「ちよ、ちよつと待て！そつち、はあああつ！！」

亀頭を秘裂にこすり付け、動きがスムーズになるように愛液で濡らす。

そして男根を膣内に挿入した。

小さな陰部だが、肛門性交ですでに男を迎え入れる準備はできていたようで、軽く男根を飲み込んだ。

しかし膣内は依然としてきつく、男根を隙間なく締め付けてくる。

思っていた以上の衝撃に、思わず男の背中に腕を回して抱き着いてしまう。

「んっ!?んむうううっ!」

不意打ちだった。

強く抱きしめられたと思ったら、唇を塞がれていた。

それと同時に男の腰も動きだし、膣内を抉る。

キスされるのは嫌なはずなのに、身体が受け入れてしまう。

「ううっ……」

膣内を男根で広げられるので、腸内が狭められ発射されていた精液がドロリとこぼれ出した。

粘度が高いようで、ゆっくりと尻の谷間を伝ってこぼれていく。

その気持ち悪い感触に、ラウラは嫌そうに身をよじる。

「おい、気持ち悪いからなんとかしろ」

「……………ふむ」

ラウラの涙目の嘆願に、男は動き出す。

正常位から彼女を持ち上げ、対面座位にする。

そして指を尻のほうに持って行き、なんと肛門に突き刺したのだ。

「~~~~ツ!!」

声にならない嬌声を上げる。

男のごつごつとした太い指が肛門に埋まり、精液の流出を阻止する。

男根で膣内を刺激されながら腸内も刺激されると、とてつもなく大きな快樂が得られた。

「あつ…あつ…んっ…あつ!!」

ラウラの小さな身体が男の膝の上ではねる。

巨大な男根は膣内を隙間なく埋め、子宮を押し上げる。

子宮口に龟头が当たり、キスをする。

男は尻を弄るのも忘れない。

ぐりぐりと指を回転させたりして、常に刺激する。

「んっ…んっ…んうっ!!」

ラウラの身体も本能に身を任せ、さらに快楽を得ようと貪欲に動く。

男に突き上げられると、彼女の身体は腰を動かす。

腰を回転させたり揺らしたりして、腸壁を抉らせる。

「さて、ラウラ・ボーデヴィツヒ。そろそろ終わりにしよう」

男はそう言うのと膝から彼女をおろし、地面に組み伏せる。

ラウラはすでに言い返せるような気力はなく、ただ男にされるがままだった。

舌をねつとりと絡ませる濃厚なキスをする。

ラウラの顔はうつとりと蕩け、だらしなく緩む。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

ズン！ズン！と激しく奥を抉られる。

ラウラの脚はいつの間にか、男を離さないように抱き着いていた。

綺麗な目から涙を流し、快楽に酔う。

「どこに射精してほしい？」

「ああつ！あつ！あつ！」

男の質問に、ラウラは答えなかった。

しかし腰に回された脚が、雄弁にラウラの答えを語っていた。

ゴツゴツと一番深い場所に強く当たり、目に火花が散る。

一足先に、ラウラが絶頂を迎えた。

キュウウウウつと膣内が脈動し、尻穴から精液が垂れる。

「ああああああつ!!」

そしてそのすぐ後、男も男根から大量の精液を放出した。

勢いよく噴き出されたそれは、膣内を瞬く間に満たしていった。

ラウラの顔は凛々しい女軍人の顔ではなく、快楽に酔うあさましい雌の顔だった。

「あ……」

だんだんと意識が遠のいていく感じがする。

ふと見上げると、先ほどまでどうしても見えなかった男の顔が窺えた。

その顔は……。





「クロウウウウウつ!!」

「うひゃあつ!？」

ベッドから跳ね起き、絶叫する。

顔を真っ赤にし、目には涙が溜まっている。

ラウラの美しい銀髪が、朝日に煌めいている。

「ら、ラウラ?大丈夫?」

はあはあと荒く息をつくラウラに声をかけたのは、彼女のルームメイト。

金髪で中性的な容姿をした美少女、シャルロット・デヌノアだ。

「あ、ああ、大丈夫だ」

ラウラは心配そうに見てくる彼女にふっと笑いかける。

夢は自分の願望だと言われているが、私にあんな願望があるのだろうか?

いやいやそんなはずはない。尻であればよがるなんてありえない。

そもそもほとんど無理やりだったではないか。

私は無理やりやられて嬉しがるようなドM女では断じてない。

「ほ、本当に大丈夫?」

「大丈夫だ、問題ない」

ブツブツと小さく呟き続けるラウラが本当に大丈夫なのか、不安を覚えるシャルロッツ

ト。

しかし本人が大丈夫と言っているのだから、大丈夫なのだろう。それにラウラは体調管理もしっかりとしているし、心配する必要もない。

「まあ全裸で寝ているから体調管理も何もないと思うけど……」

シャルロットは苦笑しながらラウラを見る。

ラウラは寝間着がないと言って、寝るときはいつも全裸なのだ。

そして今も全裸である。

悪夢にうなされていたからだろうか、珠のような汗が白い肌の上に浮かび、扇情的な雰囲気醸し出している。

異性はある男にしか興味がなく、当然同性愛好の趣味がないシャルロットでも、思わず唾を飲み込んでしまう情景だ。

「どうかしたか？シャルロット」

「な、なんでもないよっ！」

キョトンとして首を傾げながらラウラが聞いてくる。

そうすると柔らかな銀髪がはらりとこぼれ、幻想的な美しさがあつた。

シャルロットはわたわたと手を振りながらそう言う、話題を変えようと声をかける。

「ら、ラウラ！ 食堂に行つて朝ごはんを食べない？」

「ふむ……そうだな、シャワーを浴びてからでいいか？」

そう、この汗に濡れた身体も流したいが、とにかく股のぬるぬるとした感触をどうにかしたかったのだ。



いくらなんでも寝間着を持っていないのはどうかと考えたシャルロットは、ラウラを面白い物に誘うことにした。

幸い今は夏休み中だし、朝からでも外出できる。

それに対してラウラは別にいらないと断ろうとしたが、シャルロットにクロウを餌にされて食いついた。

ルームメイトになってまだそう時間は経っていないが、シャルロットはラウラの扱い

を心得ているようだ。

「成程、だから私のところに来たのか」

「うん、もしかして予定とかあつたりした？」

「いや、それは問題ない」

そうして今シャルロットとラウラは、クロウの部屋の前にいた。

無事クロウとも会うことができ、買い物に付き合ってくれるよう頼んでいるところだ。

相手の予定を伺うシャルロットに、クロウは大丈夫という。

上目づかいで見ってくるシャルロットが可愛くて、あまり考えずに出た言葉だったりする。

「さあ、嫁！買い物に行くぞー！」

クロウの腕にまわりついて、グイグイと引っ張るラウラ。

傍から見れば猫が飼い主にじゃれついているように見える。

実際、シャルロットはどこかほんわかとした表情でそれを見ていた。

「まあ待て。私も準備があるし、お前たちも私服に着替えてきたらどうだ？」

「そうだね、行こらウラ」

こうして後で合流することにして別れた三人。

準備している途中で、ラウラが寝間着どころか私服すら持つていなくて軍服しかないことに頭を抱えているシャルロットの姿が見られていた。



三人の姿は今バスの車内にあつた。

一番後ろの広い席に、三人仲良く並んで座っていた。

勿論クロウは真ん中でシャルロットとラウラに挟まれた形となっている。

「その服はシャルロットに似合っているな」

「そ、そうかな？ えへへ、ありがとう」

シャルロットの私服は淡い水色が入った白のワンピース。

彼女の優しげな雰囲気とうまくあっている。

意中の男に褒められて照れる様子は、他の乗客が思わず見惚れてしまうほどだった。

「むう、クロウ。私のことも褒めないか」

「ああ、制服だが似合っているぞ」

「うむっ」

ラウラの頭を優しく撫でながらそう言うと、彼女はご満悦といった様子で胸を張った。

と言つても普段見ている制服の姿じゃ、新鮮味に欠けるのも事実。

「ただお前の私服姿も見てみたいな」

「ふむ……なら買うとしよう」

基本的におしゃれなどにまったく興味を示さないラウラが、クロウの鶴の一声でおしゃれに目覚めた。

動きやすければ何でもいいというほどのラウラにここまであっさりと考えを変えさせることができるのは、クロウだけ——しいて言えばシャルロットも——である。

「ねえねえ、あの制服ってIS学園だよね？」

「うわあ、初めて見た。IS学園って確か倍率が一万倍超えてなかったっけ？」

「なにそれ怖い」

「じゃああの子も超エリートってことかな？」

「私たちとは色々と違うよね」

シャルロットの容姿の可愛らしさや、ラウラの制服が視線を集める。

注目されたシャルロットは恥ずかしそうにしてクロウの陰に隠れるようにし、ラウラはまったく気にせずクロウに甘えていた。

そんな二人を待らしているクロウが気になる人々だったが、筋骨隆々の長身男は怖いので話題に上がらなかった。

それからバスは三人の目的地に着き、三人はバスから降りた。

やって来たのはシャルロットが臨海学校の買い物でやって来た、駅前のデパートだった。

「うくん、まずはやつぱり服だよね。ラウラはどんな服がほしい？」

「クロウが褒めてくれるような服」

あまりにも抽象的である。

といつてもラウラほどの美少女なら、大抵のものが似合う。

そしてクロウもそれを褒めまくることだろう。

「分かりづらいなあ……。まあとりあえず秋の服は後でにして、夏の服を買いに行こう」

「……もう秋の服をかうのか？」

「女の子は季節を先取りするものだよ」

ほへへと感心するラウラ。

自分が見眼麗しい美少女だということを理解していたら、彼女は小悪魔になっていたかもしれない。

ちなみにクロウもほくと頷いていたりする。

そうして三人はまず七階にある服屋に向かうのだが、夏休みということもあって人が溢れかえるほど大勢いた。

一般の女子高生より小柄なシャルロットとラウラは、埋もれてどこかに流されそうになる。

「む、手をつないでいたほうがいいみたいだな」

そんな二人の手を掴む逞しい手。

かなり長身のクロウは、二人が流されかけていることに気づいたのだ。

二人の手を優しく、しかし力強く握ってはぐれないようにする。

「あ、ありがとう……」

「た、助かる……」

シャルロットはクロウと手をつないでいることに嬉しさと恥ずかしさを感じて赤面。

ラウラは純粋に人ごみに参りかけていたので、素直に礼を言う。

「とうかラウラは軽く人ごみに酔っていた。」

「シャルロット、……か？」



「あ……う、うん」

目的地である店に着いたので、クロウはシャルロットから手を離す。

シャルロットは名残惜しそうにクロウの手を見ながら、コクツと頷く。

ちなみにラウラの手も離そうとしたのだが、彼女は小さな両手でギュつと握ってくるのでそのままにしている。

それをシャルロットが羨ましそうに見ていたのは余談だ。

「ど、どのような服をお求めですか？」

そう三人に話しかけてきたのは、この店の店長だ。

テレビでもそうそう見ることでできない超絶美少女が二人と、絶対に顔を合わすことができないような強面男がやって来たことで少しの間フリーズしていたが、仕事を果たすために話しかけてきたのだ。

まさに美女と野獣だなと思っていたのは、店長だけの秘密である。

「あ、この娘が似合うような服を探しているんですけど、何かいいのがありますか？」

「そちらの銀髪の方ですか？ そうですね、なんでも似合うと思うんですけどおすすめしたいのは……」

シャルロットと店長で、ラウラに似合う服が選定されていく。

当事者であるラウラや付添いのクロウは、手持無沙汰に立っていた。

「何というか……凄いな」

「それほどお前のために一生懸命なんだろう」

「ラウラ！これ試着してきて！」

クロウと話しているラウラに、シャルロットが服を押し付ける。

その勢いに押される形で、試着室に入って行った。

「何だか知らんが、今のシャルロットには逆らえる気がしないな」

ふうつとため息をつきながら、制服をするすると脱いでいく。

そしてショーツ一枚になると、鏡に映る自分を見つめる。

シミ一つない真っ白な肌を、長い銀髪がさらさらと撫でる。

眼帯に包まれた片目と、赤い瞳。

凹凸の少ない身体だが、訓練を受けたからか必要な筋肉がキュツと詰まっており、張りのある肉体。

「やはりクロウも胸がある方がいいのだろうか……」

むにむにと胸を揉みながら、むむむと唸る。

確かに柔らかいが、シャルロットと比べてあまりにも量感がない。

「……でもこの体型でも嫁は好きと言ってくれているしな！うん！」

でへへ……とクラス内では決して見せない、だらしない笑顔を浮かべる。

こんな笑顔を見ることができるのは、これまたクロウとシャルロットだけである。

「ラウラー、もういいー?」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

シャルロットの声に、わたわたと着替えはじめる。

「も、もういいぞ」

着替え終えて、試着室から出てくるラウラー。

肩が露出した黒いワンピースで、パーティーのドレスのようにも見えるその服を着たラウラーは、照れくさそうにしている。

一方店内はシン……と静まり返っていた。

それはラウラーの可愛らしさに、言葉を失っているからである。

よく一緒に行動するシャルロットでさえ、ほわあくと幸せそうにトリップしている。

「よく似合っているぞ、ラウラー」

「そ、そうか……」

そんな中ラウラーを褒めたのが、クロウであった。

滅多に表情を変えないクロウが、少し微笑む。

そのことにラウラーはまるで天にも昇る心境だった。

「うわあ、本当によく似合っているよ、ラウラー! さ、このミュールも履いてみて!」

わはくと幸せそうにしながらぐいぐいとラウラに迫るシャルロット。

可愛いものが大好きな彼女からすれば、ラウラはドンピシャだったのだ。

「むう……これは履きづら——」

「おっと」

普段軍用ブーツしか履かないラウラは、履きなれないミユールなので体制を崩してしまおう。

あわや地面に倒れてしまうかと思われたが、その前にクロウが優しく受け止めた。

「す、すまない……」

「気にするな」

もうクロウから離れて自分で立てるのだが、ラウラは中々離れようとしなない。

逆にクロウの逞しい胸板に顔を寄せ、胸いっぱい彼の匂いを吸い込む。

そして何とも幸せそうに微笑む。

「むう……」

それを見ていて面白くないのが、シャルロットだ。

自分も甘えたいのはやまやまなのだが、周りに人が大勢いるので自分の性格上それはできない。

ラウラの性格が羨ましく感じる。

「あ、あの、一枚写真いいですか!？」

「む?。」

幸せそうに笑うラウラを見て、ひとりの女性が写真をねだる。

それに便乗して多くの人が写真を撮り始めた。

その十数分後、某SNSで『リアル美女と野獣』として写真投稿されているのだった。



「つ、疲れた……」

ぐでえ……とテーブルに身を任せるラウラ。

写真を撮られまくったのがよほどこらえたのだろう。

いつもの凜々しさがまったく感じられない。

「あはは……ほら、ご飯食べて元気だしなよ」

「うむ……」

シャルロットが苦笑しながら勸めると、ラウラはパスタを一本ずつ食べていく。無意識なのだが、そんな姿もシャルロットの心にズキユンと矢を穿っていた。

「次はどうするのか決めたのか？」

「あ、僕は腕時計が見に行きたいなって思っているんだけど……」

ブラックコーヒーを飲みながらクロウが聞くと、シャルロットがそう答えた。

高価な腕時計だが、代表候補生として給金があるので金銭面的にはかなり裕福なので、シャルロットでも買えるものである。

ちなみにラウラはクロウのコーヒーをちびりと飲み、あまりの苦さに顔をギュッと歪めていた。

「ラウラは何かほしいものはあるか？」

「うむ、日本刀」

「に、日本刀かあ……」

思春期真っ盛りの十五歳とは思えない発言だが、ラウラらしいといえらうらしい。い。

といつてもデパートで日本刀を手に入れることはできないだろう。

「クロウ、お前は日本刀を持っていないのか？」

「あるぞ」

「本当かつ!？」

クロウの専用機の中には、それはそれは大量の武器が入っている。

その中には日本刀も勿論含まれている。

日本といえば日本刀と頭の中で直結しているラウラは、見せてくれとクロウにまとわりつく。

「……………」

そんな中、シャルロットはため息をついている女性を見つめていた。

彼女の優しい性格上、それを見て放っておけない。

「ねえ、クロウ、ラウラ。ちよつとあの人の話聞いてきてもいい？」

「ほどほどにな」

「うんっ」

ラウラから許可をもらったシャルロットは、悩める女性の元へと近づいていく。

このことが大きな騒動に巻き込まれることなどは、まだシャルロットたちは気づけていなかった。



「いらつしやいませ、お嬢様」

執事服を着た金髪の美少年が、来店した女性たちに笑顔を向ける。

女性たちは呆けたような顔をしたあと、うつとりとした表情で彼を見つめた。

「水だ」

ドン！と音を立てて水が入ったコップをテーブルに置く……というか叩き付ける少女。

メイド服を着た彼女は、その容姿の可憐さで男性客の目を引き付けてやまない。

接客がおそろしく悪くても、彼女を呼ぶ声は途切れない。

「(はあ……まさかこんなことになるなんて……)」

金髪の執事……シャルロットは、客から見えない場所のため息を吐く。

彼女が話しかけた女性は、この執事&メイド喫茶『@クルーズ』の店長だった。

どうやら店員の男女が駆け落ちしたらしく、それで人員が足りてないとのこと。



しかも今日は本社から視察が来るので、どうにかしなければならなかった。そんなとき話しかけてきたのが、中性的な美少女のシャルロットだった。

しかも連れも美少女ではないか。

……もう一人の連れは見なかったことにした。

そういうことで是非手伝ってほしいと言われたシャルロットとラウラ。

彼女の性格上それを拒否することはできなく、またクロウも許可したことからバイトをすることになったのだ。

「(でも僕も可愛いメイド服のほうがよかったよ……)」

クロウには褒められたが、性格が乙女なシャルロットは複雑な心境だった。勿論嬉しかったが。

しかもラウラがとても似合っていることが、羨ましかった。

シャルロットは一人テーブルについてブラックコーヒーを啜っているクロウの近くに行く。

「ごめんね、クロウ。付きあわせちゃって」

「気にするな」

そう言ってくれるが、できるだけ早く終わらせてまた買い物に行くでしょう。

そう考えて接客に精を出す、こういう時に限って邪魔が入るものである。

「全員動くなっ!!」

そう大声を出して、店内に荒々しく乗り込んでくる三人組。顔に覆面をつけた男の一人が、銃を天井に向けて発砲した。

「きやああああっ!!」

女性客の悲鳴が上がる。

それも仕方がないだろう。

現代の日本で普通に生きていくうちは一生見ることのない銃を間近で、しかも敵意を持って向けられているのだ。

「うるせえっ! 殺されたくないけりや黙ってろ!」

男たちの背中にあるバッグから、皆大好き諭吉さんが何枚か顔をのぞかせていた。

そう、強盗だった。

しかし日本で銃を保持しているとは、中々堂に入った強盗である。

「ちっ! もう来やがったかっ……」

男たちの見る先には、店を包囲した警察の姿があった。

リーダー格の男が車の要求をした後、警官たちにむかって発砲した。

外でも野次馬たちの悲鳴が上がる。

某SNSで『強盗なう』と書き込もうとしていた人は、恐怖で腰を抜かしていたりす

る。

「へへ、平和な国ほど犯罪がしやすいって本当だったんすね」

「ああ」

そういつて笑い合う強盗たち。

しかし強盗たちは知らないのだろうか。

確かに平和な国ほど犯罪を起こしやすいというのは事実かもしれないが、平和な国ほど犯罪者は逃げ切れない。

だから平和な国なのだ。

「(えーと……シヨットガンにサブマシンガン、それにハンドガン。よくこの国でこんなに集めたね)」

客や従業員が縮こまっている中、一人の執事が物陰に隠れながら強盗たちを見ていた。

そんなに銃器を揃えるほど頑張るのだったら、他のことで頑張ればいいのにと思ってしまうのは普通だろう。

「(さてと、どうやって——)」

そこまで考えて、シャルロットの思考は止まってしまった。

何故なら皆が地面にひれ伏している中、我関せずとばかりにマイペースを貫いている

二人の男女がいたからだ。

「おい、お前！何で立ってるんだ！それにお前！なに平然とコーヒー飲んでんだよ!!」  
強盗が言う立っている奴とはメイド服を着用したラウラで、コーヒーを飲んでいるのがクロウである。

ラウラは冷たい目で強盗たちを見つめ、クロウはまったく見向きもせず、コーヒーを飲んでいる。

ちなみにだがクロウはそれほどコーヒーが好きというわけでもない。

その後も大人しくしていると告げる強盗だが、仲間が接客を受けたいと言うのでそれを許可した。

……そのメイドがバリバリの軍人であることも知らずに。

「水だ」

ラウラがそう言って持ってきたのは、大量に氷が詰まったコップだった。

最早水など見えないくらい詰め込まれたそれを訝しげに見つめっていると、ラウラをそれを空中にぶちまけた。

「ほら、さっさと飲め」

ニヤリと笑うと、空中を舞う氷を指ではじいた。

「うげっ!」

「痛っ!」

弾かれたそれは、氷の弾丸となって強盗たちを襲った。

さらにラウラは怯んでいる強盗の一人に襲い掛かり、鳩尾に深い膝蹴りを叩き込んだ。

小柄な少女といえども、軍人の攻撃をもろに喰らった男は悶絶した。

「こいつっ!!」

残った二人の強盗は、ラウラに向かって発砲する。

しかしラウラは身を低くしながら素早く移動して、物陰に隠れる。

「僕もいるんだよ」

「なっ!?!」

メイドを追い詰めていたと思うと、金髪の執事——シャルロットが強盗に襲い掛かった。

慌てて彼女に銃を向けるが、シャルロットは身を低くして脚を払う。

バランスを崩して落ちてきた男に合わせて、顎に拳を叩き込んだ。

「クソがつこいつがどうなってもいいのか!?!」

仲間二人がすぐに制圧されたのを見て、リーダー格の男が人質に銃を向ける。

しかしその人質が問題だった。

「……む？」

そう、我関せずを貫いていたもう一人の男、クロウだ。

今も椅子に座ってコーヒーを飲んでることから、今の攻防にもまったくの無関心だったらしい。

「あ、あの……その人を人質にしないほうがいいとおもうよ……？」

「はあ？何言ってるんでめえ」

シャルロットの善意の言葉も、強盗には通じなかった。

クロウはゆつくりとコーヒーをテーブルにおろし、銃を向けている強盗の手首を持つ。

そして――。

「うぎやあああああつ!？」

ぐしやり。

日常生活では決して聞こえない音が、強盗の手首から漏れた。

そう、クロウは強盗の手首をその強靱な握力で破壊したのだ。

強盗の男は地面をのた打ち回る。

「あー……」

「ふつ、流石私の嫁だな」

冷や汗を垂らしながら苦笑いするシャルロットと、何故か誇らしげなラウラ。そんな中、警察たちが店に押し寄せてくる。

捕まったら面倒だと、三人は逃げ出す。

こうして銀行強盗兼店内人質立てこもり事件は終わったのだった。



「うわー、かわいいー!」

目をキラキラと輝かせながら、堪らないとばかりに悶えるシャルロット。

そんな彼女の目の前には、恥ずかしそうに頬を紅潮させた一匹の黒猫がいた。

柔らかそうな毛皮に、プニプニとした肉球……の作り物を着用したラウラがいた。

「うう……何で私がこのような姿を……」

ちなみにだが、シャルロットも白猫に変身している。

全裸で寝ているラウラにと、シャルロットが選んだ寝間着である。

フアツションセンスは非常に乙女だといえるだろう。

もしシャルロットとラウラが他を圧倒するほどの美少女でなければ、ただの痛い女になっただけだ。

「ほくら、ラウラ。にゃんにゃん」

「や、止めるー！」

後ろからラウラを抱きかかえたシャルロットが、ラウラの手を掴んで猫ポーズを強要する。

必死でやめさせようとするラウラだったが、今まで感じたことのない圧力をシャルロットから感じてうまく抵抗することができない。

「もう、ラウラは本当に可愛いな」

「（こ、こんな姿を他人に見られたら私は……！）」

ラウラの考えはフラグである。

がちやり。

「……………」

扉を開けた状態で固まるクロー。

じゃれ合っていた状態で固まるシャルロットとラウラ。



「こ、これはね、クロウ。いろいろと事情があつてね？僕の普段の寝間着はもつと大人のなんだよ？でもね？」

「あわわわわわ……」

目をぐるぐると回しながらとにかく否定しようとするシャルロット。

ラウラなどすでに人語を話せているかすら怪しい。

そんな二人の慌てる様を見て、クロウはふつと良い笑顔を見せる。

「それでね？僕は本当は——あれ？何でどんどんとにじり寄ってくるの？え？クロウ？」

「はわわわわわ……」

ある夏休みの夜。

一室から猫が発情したときのような声が、一晩中間こえつづけたという。

## 夏ノ長期休暇 其ノ参

夏休みとは、非常に長い休暇である。

その分多量な課題を課せられるのだが、適切に配分すれば問題なく終えられる。

いつもギリギリになって半泣きになりながら机に向かっているのは、馬鹿だけだ。

IS学園一年生の更識 簪は馬鹿ではなく、むしろ優秀だった。

レベルの高い高校なので相応の課題があつたのだが、それをすべて七月中に終えてしまった。

そこで余つたおおよそ一か月の休暇を何に使つたのか？

多くの者は趣味をするだろうし、彼女も例にもれなかつた。

ただ一つ問題があるとするとするなら……。

「……次はこれを見る」

「……そうか」

クロウを巻き込んだことである。

いや、別に巻き込んだこと自体に問題があるわけではない。

クロウだつて簪と一緒にいられるなら、喜んで付き合う。

しかし問題だったのは、彼女がほとんど休憩なしでアニメを見続けたことだった。

食事や風呂など、どうしても日常生活に於いて欠かせないこと以外は、常にアニメを見続けた。

その食事や風呂でさえ、ほんの数分で終える。

基本的にのんびりすることが多いクロウは、まるで風のように一瞬で終わった気がした。

さらに問題だったのは……。

「……またヒーローものか」

簪が選ぶアニメが非常に偏ったものであることだ。

彼女が選ぶアニメはすべて、主人公が悪役を叩きのめす痛快な勧善懲悪もの。

別にクロウはそういった類のものが嫌いではないが、何度も同じようなアニメを見ていたら流石に飽きる。

クロウは疲れきったようにため息を吐きながら、膝の間に座る簪の胸を揉む。

「……今はやめて」

その手をペシリと払いのける簪。

そう、これもクロウからすれば大問題だった。

普段ならクロウからモーションをかけられると、遊んでくれるのとすり寄ってくる犬のように答える簪のだが、アニメを見ているときは別だった。

簪の甘い匂いが鼻をくすぐり、まさに生き地獄を味わっているクロウ。

だったら離れればいいじゃないかと思うが、簪が離れようとする袖をキュツと摘まむので離れられない。

「……………」

仕方ないのでクロウは簪の水色の髪を撫でる。

すると簪は眼鏡の奥にある目を気持ちよさそうに細める。

それがまた可愛くて手が出るのだが、また叩き落とされる。

ここ三日同じことを繰り返していた。

「そういえば私も今回DVDを持ってきたのだが……」

「え……………」

簪は思わず振り返り、眼鏡越しにクロウの顔を凝視してしまう。

今まで何度もアニメ鑑賞に付き合ってもらってきたが、こんなことは初めてだった。期待せずにはいられない。

「……どんなの？」

目をキラキラと輝かせながら見てくる簪。

パタパタと激しく揺れる犬の尻尾が幻視される。

「うむ、なんかよくわからなかったから適当に選んだんだが……」

そう言つてクロウはDVDを取り出す。

そのパッケージの題名にはこう書かれていた。

『火〇るの墓』。



眠っていたクロウは、腹への圧迫感で目が覚めた。

普通寝ているときに腹を圧迫されると非常に苦しいのだが、無駄に鍛えられている腹筋でクロウに問題はなかった。

「……楯無か」

「うん、おはよー」

クロウの腹に跨る美少女。

簪と同じ水色の髪で、違う点といえば大きく突き出た胸。

簪の姉である更識 楯無だ。

「しかし軽いな、楯無は」

「あら嬉しい。まあ私も飽きられないようにスタイル維持には気を遣っているしね」

くすくすとどこからか取り出した扇子で口を押えながら笑う。

実際クロウが感じている重さはほとんどなかった。

楯無は服の上から腕で量感のある胸を持ちあげる。

「……で、なんのようだ？」

そう言いながら、クロウは暗い中楯無のスカートの中を見ようと目を凝らす。

跨っているので必然的に股を開いている形になっている。

だから下着が見えてもおかしくないのだが、楯無の技術なのか、見えそうで見えないというギリギリの線を守っていた。

「……クロウさ、昼間簪ちゃんと一緒にいたでしょ？」

「うむ」

髪で目元が隠れ、表情が窺えない。

しかし彼女の声はどこか怒気が感じられた。

「それで一緒にアニメ見てたでしょ？」

「……何故そこまで詳しく知っている」

あの場所に行ったのはクロウと簪だけのはずだ。

だが愛すべき妹と男がいるのなら、様子を窺っていないはずがない。

「それでさ、簪ちゃんのこと泣かせたでしょ」

ピカツと楯無の目が、暗闇の中で光る。

まるで猫のようだ。

それはさておき、とりあえずクロウは語弊を正さねばならない。

「待て、私が直接泣かせたのではないぞ。アニメを見て泣いたのだ」

「その選ぶアニメが悪すぎるのよ！」

クロウが選んだアニメ、『○垂るの墓』。

結構古いアニメで、見る者を涙させ鬱にさせるとてもないアニメである。

アメリカ軍人に見せたところ、自殺しようとした者が複数いるほどだ。

そんなものを受感性の高い簪が見れば、普段おとなしい彼女が大声を上げながら号泣するのは当然だろう。

「それに私をのけ者にした！」

「……いや、それは私に言うことではない」

急に拗ねた楯無。

と言つてもアニメを見ていたのは簪の部屋であり、クロウが誘えるはずがないのである。

「それでも誘つてほしかつたあゝ」

身体を倒し、クロウに抱き着きながら駄々をこねる。

ふくよかな胸が胸板で潰される。

クロウはご満悦である。

「……つと、そうじゃないそうじゃない。私がここに来たのは簪ちゃんのかたき討ちのためよ！」

どーん！と背後に波しぶきが上がっている……ように錯覚した。

「ふむ……で、どうするのだ？」

「こうするっ♪」

待つてましたとばかりにニヤリと笑つて、彼女はワイシャツのボタンをはずしてい



く。

プツプツと一つ一つ丁寧に外していくと、白いブラに包まれた大きな乳房が眼前にさらされた。

「……こんなことでかたき討ちになるのか？」

「なるなるっ。ねえ……ブラ、外して？」

思い切り楯無の欲望が入っていると思うのだが……。

彼女も最近構ってもらえなかったので、寂しかったのだ。

胸をグツとクロウに近づけて、年相応に可愛らしくお願いする。

しかしすつと細めた目でクロウを見つめている楯無の姿は、まるで一流の娼婦のようにも感じられた。

「あんっ」

前のホックをはずしてやると、わざとらしく声を上げる楯無。

ブラが外されたことよって完全にクロウに乳房がさらされた。

Eカップのふくよかな胸の頂には、まるで生娘のような桃色の乳首がある。

普段鍛えているからか引き締まったお腹は、乳房を大きく見せるのに一役買っている。

「そこ座って」

楯無の言われた通り、横たわっていた姿勢からベッドに腰掛ける姿勢にする。

そうすると楯無はクロウの股の間にもぐり、男根を出そうとする。

流石楯無といったところか、彼女は男心のくすぐり方を熟知しているようで、ズボンから男根を取り出す際に手は使わず、口だけで取り出そうとした。

もごもごときまぐり、少しして男根を取り出すことに成功した。

楯無の上目づかいと、少し荒くなつた吐息が男根に吹きかかり、だんだんと固くなつていく。

「ん、ジュポ、ジュポっ」

楯無は最初から自分の武器を盛大に使うようである。

Eカップの大きな乳房で生み出された深い谷間に男根を埋め、はみ出した亀頭と陰茎を飲み込んだ。

頭を上下に動かして男根を擦り、口内で舌を絡めて唾液を塗りたくる。

「ん、ふ……じゆる、じゆる、ちゅぷっ」

楯無は男根を舐めまわしながらも、じっとクロウの目を見つめた。

そんな彼女の姿に我慢できなくなったクロウは、大きな乳房に手を伸ばした。

「ん、んっ、っ」

乳房に伸ばした手を先端の方にやり、乳首を弄った。

片方はくにゆくにゆと捏ね回すように、片方はぎゅつと押しつぶすように。乳首に刺激を送られるとピクピクと反応する楯無だが、レロレロと亀頭を舐めまわして対抗する。

二つの乳首を同時に摘まむと、楯無は男根を加えたまま荒い吐息をした。

「ふう……んっ、んっ、ふっ」

乳首を摘ままれているときゆつと眉を寄せる楯無は、乳房を回すように動かして陰茎を刺激した。

もちもちの肌に汗がにじみ出て、しっとりとした感触を男根に与える。

口の方も忘れず、裏筋を舌でねつとりと舐める。

「ん。ふっ。ジュボ、ジュボ、ジュボー」

急に動きを速める楯無。

頭を激しく上下に動かし、男根に射精を促す。

口内で溜めた唾液が男根にかきまぜられ卑猥な音を出し、口からあふれ出る。

クロウはたまらないと、摘まんでいた乳首をぎゅつと潰してしまふ。

「……………!!」

クロウがブルリと身体を震わすと、大量の精液が口内で出された。

ビュクビュクと勢いよく噴出したそれは、楯無の口内を駆け巡る。

「んぐ、んぐ、んぐ」

中々止まらない射精を受けて、楯無は細い喉を懸命に動かして濃厚なそれを飲み下していく。

それでも口からあふれ出た精液は、下に落ちて張り出した乳房の上に落ちる。

「んはあ……っ」

男根を口から離すと、楯無は口を開けてクロウに口内を見せる。

まだ白濁液が口内に残っており、真つ赤な舌の上にあるとなんとも淫靡な雰囲気漂わせる。

余裕ぶっている楯無だが、あの大量の射精は苦しかったのか、目の端には涙が溜まっていた。

「んぐ、い、いっぱい射精だしたわね。次はこっちはいかが？」

楯無はフラリと立ち上がると、見せつけるようにして制服のスカートを下ろした。

すると上下おそろいの白いショーツが現れる。

秘部があるであろう場所は、少し湿っていた。

そしてショーツをもすりと脱ぎ捨てる楯無。

流石に恥ずかしいのか、その顔は赤色に染まっていた。

「ふむ……濡れてるな」

髪の色と同じ陰毛が、うっすらと茂っている下。

口淫だけで興奮したようで、にじみ出た蜜液は陰部全体を濡らしていた。量感のある乳房。鍛えられて引き締まった腰に、盛り上がった臀部。うっすらと汗が浮かんでいて、色気が増している。

「もうっ、そんな」と言っっちゃダメ」

そう言っつて楯無は顔を見せないように、クロウに抱き着く。

クロウの膝の上に乗つかるような形になり、対面座位になる。

いきり立った男根に、尻をもじもじと悩ましく動かしてこすり付ける。

秘裂に擦れると、愛液が溢れてヌリユヌリユとすべりをよくする。

「あっ、んっ、もう……焦らさないで……」

楯無はもどかしそうに尻を振るが、クロウは中々挿入しない。

入り口を亀頭で軽く押ししたり、固くなった陰核にグリグリとこすり付けたりする。

彼女の秘裂は処女のようにぴったりと閉じていたのに、男根を求めて開いている。

「んっ、あはああああ……っ」

何とも気の抜けた嬌声を上げる楯無。

男根をゆっくりと膣内に挿入すると、楯無の汗に濡れた肢体がビクンと震える。

押し寄せる快楽に助けを求めるように、クロウの服をギュッと握る。

Eカップの豊かな乳房が、クロウの厚い胸板に挟まれて形を変える。

楯無の膣内は巨大な男根をぎゅうううつと強く締め付け、ひくひくと物欲しそうに動いていた。

「あつ、あつ、あつ、あんっ！」

ズツズツと小刻みに男根を動かし始める。

クロウの形をしつかりと教え込まれた膣内は、隙間なく男根を淫肉で埋めている。ベッドのスプリングがギシギシと音を立てる。

大柄なクロウに跨っている楯無は、足が地面についていない。

「あつーんっ！あんっ！あんっ!!」

愛液の分泌量も増え、動かしやすくなる。

男根で膣内をかき回してやると、ジュプジュプと卑猥な音を立てる。

クロウは柔らかな尻をがっしりと掴むと、腰を上突き上げる。

「あつーあつーあつーああつ!!」

たまらなるとばかりにクロウに抱き着く楯無。

今ではクロウが腰を動かさなくても、楯無が積極的に腰を動かしていた。

「んっ！やあつ！恥ずか、しいつ、わよおっ!!」

楯無の身体をくるりと反転させて、背面座位の体位に変える。

肉付きの良い太ももを掴んで大きく開けさせ、卑猥なポーズを取らせる。普段人を食ったような性格をしている彼女だが、今は年相応の恥ずかしがる乙女だった。

「あつ！はつ！あつ！あつ!!」

男根は膣内の奥へと突き進み、子宮口に当たってトントンと小突く。

卑猥な音も大きくなり、グチュグチュと響く。

楯無の顔は真つ赤になり、口からだらしなくよだれを垂らしている。

「んふっ！もっ、とお……もっとおちようだいっ！」

さらなる快楽を求めて、クロウにおねだりをする。

それに応えてクロウは腰の動きを激しくする。

男根を引き抜くときは淫肉がめくれ上がるほど、突つ込むときは子宮が押されて形を変えてしまうほど。

「あつ！ひいっ！あつ！あつ!!」

目から涙を流し、口を大きく開けて喘ぐ。

肢体を上下に動かされて豊かな乳房がたぶたと柔らかそうに揺れる。

クロウは太ももを抑え込み、男根を一番深いところまで押し込もうとする。

「ああっ！クロウ！好き、好きいっ！あああああああつ!!」

ドブドブと大量の精液が膣内に注ぎ込まれた。

最後は太ももを持ち上げ、まるで駅弁の体位のように脚を持ち上げられた。

脚に乳房が当たり、形を歪める。

楯無は眉尻を下げ、盛大に絶頂を迎えた。

「んふううううう……」

あれほど大量に出た精液だが、まだまだ止まる様子はなかった。

どくどくとまるで噴水のようにあふれ出た精液は、子宮口をかくぐつて子宮内を満たしていく。

クロウはブルブルと小刻みに震える楯無の肢体を後ろから抱え込み、離れないようにしていた。

「あひいつ!!ひあつ!!ああつ!!」

クロウは抱えていた楯無を四つん這いにさせると、後ろから激しく腰を振りだした。

突然のクロウの行動を、楯無は目をチカチカとさせながらも受け止める。

グツと前に突き出された乳房は、その存在感を強くする。

「あああああつ!!あああああつ!!」

上半身は力なく地面に突っ伏し、尻だけ高く上げられる。

ジユブジユブと激しく男根を膣内に出し入れすると、中から溢れた精液がボタボタと



地面に垂れ落ちる。

Eカップの乳房は、地面に潰されて卑猥に形を変えている。

「うああっ！あっ！ああっ！ああああっ！！」

括れた腰をしつかりと掴み、腰を突き入れる。

突かれるたびに、豊かな乳房はたぶたぶと重たげに揺れて汗を飛び散らせる。

「あっ！あっ！あっ！あっ！！」

楯無の上半身を上げさせ、まるで犬のように腰を振りたくる。

柔らかな尻に腰が当たると、パン！パン！と高い音を響かせる。

「んふうっ！んあっ！あああああっ！！」

ふるふると揺れる乳房の動きを抑えるように、両の手で鷲掴む。

モミモミと手で覆いきれないほどの肉付きがある乳房を揉みしだく。

「はあっ！ああっ！あああっ！！」

奥まで突いた男根を引き抜く際、ゆっくりと形を教え込むようにする。

ズルズルと引くと、大きく張り出したカリが膣壁を抉る。

乳房に伸ばした手は、片方の乳房を跡が残るほど掴み、片方は固くなった乳首をクリ

クリとこねた。

「あっ！ああっ！ああああっ！んああっ！！」

バックから突いていたのを体位を変えて、後側位になる。

浅い位置を抉ると、楯無の身体にぞくぞくと快楽の稲妻が走る。

脚を大きく開けさせ、手は乳房を揉んで感触を愉しむ。

「好きだぞ、楯無」

「~~~~ツ!!」

耳元でそう囁くと、声にならない歓喜の声を上げる楯無。

その言葉でのぼりつめた楯無の膣内は猛烈に男根を締め付け、射精を促した。

それに抵抗せずに、クロウは底なしと言えるほどの大量の精液を発射した。

ビュルビュルと出た精液は、子宮内どころか膣内さえ満たしてしまった。

「ああああああ………」

中々収まらない射精。

ガクガクと激しく震える楯無の身体を、クロウは後ろから優しく抱きしめる。

ようやく収まったので男根を引き抜いていくと、プププと下品な音が陰部から発生

する。

「んあっ」

男根を引き抜くと、栓となっていたものがなくなつたので精液がゴポゴポと溢れ出し、ベチャリと地面に零れ落ちた。

「ん、クロウ……」

楯無は首を回してクロウを見ると、荒い息のままキスをねだる。

クロウはそれに応えて、彼女の柔らかな唇を貪ったのだった。



「んふふー♪」

クロウと一緒にベッドに入っている楯無は、まるで猫のようにクロウにすり寄る。

くんくんとクロウの匂いを嗅いだと思ったら、彼に頬ずりしたりする。

「これでかたき討ちになったのか？」

「うん、なったなっただっ」

むしろ返り討ちにあっていたようにも感じるが、捉え方は人それぞれなのでいいだろう。

クロウとしても久しぶりに楯無と触れ合えたので、ご満悦である。

ここで終われば『イイハナシダナー』で終わるのだが、現実是非情なのである。

「……クロウ、いる？お姉ちゃんが『かたき討ちじやー！』とか言ってたから様子を見にきたんだ、け……ど……」

ガチャリと扉を開いて現れたのは、楯無の妹の簪である。

最初は申し訳なさそうに入ってきていたのに、中の光景を見るにつれてその表情は凍って行った。

今では眼鏡越しに絶対零度の視線を、楯無に送っている。

「……お姉ちゃん？なんでかたき討ちでクロウと一緒に寝ているの？」

「か、簪ちゃん……これは……」

結局その後簪がベッドの上に乱入し、姉妹の嬌声が部屋から上がり続けたのは余談である。

## 夏ノ長期休暇 其ノ肆

夏休みの過ごし方は、人それぞれである。

遊びに潰す者もいれば、将来のことを考えて勉強する賢明な者もいる。

クロウの場合はどちらかというと前者で、色々な美少女たちと遊んで過ごしていた。列強各国の代表候補生たちや対暗部用暗部の姉妹だったり、現在世界中に指名手配されている科学者や学園の教師だったり。

その女性たちもなるべく多くクロウと過ごそうとする。

その中で誰が一番クロウと過ごしているかというところ……。

「ん〜、おいし〜♪」

「そうか、それはよかった」

もふもふの着ぐるみみたいな普段着を着用したのほほんとした雰囲気醸し出す美少女、布仏 本音。

彼女はお菓子をゆつくりとした動作で咀嚼しながら、クロウの膝の上でニコニコと笑っている。

そう、この夏休みで一番クロウと過ごした時間が多いのは本音だった。

代表候補生たちはISの整備や訓練などで時間を費やされ、更識姉妹は裏の仕事が忙しい。

あの天災ウサギと雖も頻繁に学園に侵入するのは各国の警戒を強める。

勿論侵入すること自体は容易いことである。

教師陣にも当然仕事がある。

その中で最も時間が空いていることが多いのが、本音なのだ。

「ねえ、頭撫でて〜?」

「む、構わないが……」

「えへへ〜♪」

それに彼女が甘え上手だということもあって、クロウとよく一緒にいた。

本音はクロウに頭を撫でられ、だらしなく顔をほにやりと崩す。

二人の過ごし方といえば、基本的に今ののように身を寄せ合い、スキンシップをとって

いることが多い。

「は〜い、あ〜ん」・

「む……」

「んふふ〜♪」

クソ甘い、ピンクの雰囲気醸し出す本音とクロウ。

朴念仁世界大会があれば間違いなく上位入賞する織斑　一夏でさえも、この雰囲気は感じ取れるだろう。

そうしてイチヤイチャしていると、本音のお腹からぐ〜と音がする。

「む？腹が減ったか？」

「う〜ん……そういえば今日ごはん全然食べてなかったね〜」

朝から今の晩まで、ずっと二人で一緒にいた。

食事もとらず、ずっとだ。

正確に言うなら、朝本音がクロウのベッドにもぐりこんだ午前四時から、今の午後八時までだ。

バカツプルとはまさにこのことだろうか？

「食堂に行くか？」

「え〜……私動きたくなく〜い〜」

ベッドに顔を突つ伏し、脚をパタパタと動かして抗議の意思を示す本音。

と言つても本当は二人きりでいたいという可愛らしい独占欲があるのだが。

「ふむ……では私が二人分食事をもらつて、ここに持つて来よう」

「ほんと〜？ やつた〜つ」

本音の心の内を察したクロウは、二人きりで食べようと提案した。

それに彼女はもろ手を挙げて賛成した。

袖の余つた腕を上に掲げ、万歳と言う彼女は非常に可愛らしい。

「よし、では行つてくる」

「は〜い、行つてらっしや〜い」

本音の言葉を受けて、クロウは外へと出る。

まだ夏休み中なので、普段なら食事を終えた女子生徒たちが和気藹々と会話しているのだが、廊下はシンと静まり返っていた。

そんな中、クロウは食堂めがけて歩いてみると、前方にフラフラと危なげに歩く人影を発見した。

「あわわわ……お、重いです……」

後ろからでは背中しか見えないが、緑髪の聞き覚えのある声をした人物が、自分の背丈より高く積み上げたファイルを持つていた。



クロウはそんな彼女にどんと近づいていく。

「あつ！」

そして脚がもつれて後ろに倒れこもうとした彼女を、優しく受け止めた。

「大丈夫か？真耶」

「あ、クロウさん」

緑髪の女教師、山田 真耶はクロウの顔を見ると、あからさまに安心したように顔を緩めた。

それほど彼女はクロウに心を許しているのだ。

今は夏休み中……つまりプライベートなので、二人とも名前で呼び合っている。

「すみません、助かりました」

「気にするな。少し持とう」

「えっ、悪いですからいいですよ！」

「遠慮するな」

そう言つてクロウは少し無理やり、ファイルの七割程度を取り上げる。

遠慮していた真耶だが、格段に楽になったのは本場で、申し訳なさそうにしながらも手伝いを受け入れた。

自分のお気に入りの女性を助けられるということ、クロウも少し機嫌をよくして

ファイルを運んだ。



「本当にありがとうございます、クロウさん」

「ああ」

クロウは大量のファイルを、真耶の私室の机の上に置いた。

真耶は冷たいお茶を持ってきて、クロウに渡す。

「しかし多いな、お前の仕事は」

「あはは……」

クロウがファイルの塔を見ながら言うと、真耶は渴いた笑いを漏らす。

この仕事の量は、今年の専用機持ちの多さが多大に関係している。

普通一学年に一人か二人、専用機持ちがいればいくらなのにな、この第一学年はな

んと七人もいるのだ。

しかもそのうち二人が男。

さらにさらに言うなら、両方ともあの天災・篠ノ之 東と交流があり、片方なんて男女の關係にあるのではないかと疑われているほどだ。

書類仕事が恐ろしいことになるのは当然だろう。

「でも生徒のためですからね、苦ではありませんっ」

えへんと、巨大な乳房を張ってドヤ顔を決める真耶。

その雰囲気はまるで子供のようで、微笑ましきを感じさせる。

しかしその雰囲気とは真逆に豊満に育った肉付きの良い肢体が、クロウの目を引き付けて離さない。

「そうか、頼もしいな」

「えへへへ」

頭を撫でてやると、眼鏡のレンズの奥で気持ちよさそうに目を細める真耶。

撫でてやった時の反応が鈴や簪と類似していて、本当に大学を出た大人の女性とは思えない。

むしろ制服を着させて教室の中に放り込んで、まったく違和感はないだろう。

「……クロウさん、今失礼なことを考えませんでしたか？」

「気のせいだ。それより茶を入れるのがうまくなったな」

「そ、そうですか？えへへ、頑張ったんですよ」

ジトと目を細めて見てきた真耶を少し褒めると、嬉しそうに破顔する。

ちよろいもんである。

しかしここまですらと心配になってくるのだが、それは余計なお世話というものだ。

彼女はこれでも日本の代表候補生だったのだ。

それなりの訓練を受けているし、実力だけなら彼女は代表生にも劣らない。

……あがり症なのが傷である。

「……………とところで一つ気になっていたのだが……………」

「……………」

お茶をズズツと飲みながら、なんでもなくように切り出すクロウ。

真耶もお茶を啜りながら、小首を傾げる。

「お前……………ノーブラか？」

「きゅっ!?けふっけふっ!」

クロウの爆弾発言に、真耶はお茶が変な場所に入り込んでしまつて咳き込む。

しばらく咳をして息を整えると、涙目になってクロウに抗議する。

「い、いきなりなんですかあつ?!」

「いや、気になってな」

「気になってな……じゃないですよっ!」

うがーと手を上げて怒った動作をする真耶。

しかし彼女の可愛らしい容姿や仕草では恐怖を覚えることはできず、むしろ微笑ましくなる。

「しかしそれだけ薄着なら、私に言われても仕方ないのではないか?」

「う……」

クロウの言葉に思う所があったのか、真耶は黙り込んでしまう。

実際彼女の着用している衣服は、外を出歩けないほど薄着である。

特に真耶はどんな男でもその気になれば悩殺できるほどのスタイルなので、今のタンクトップ一枚ではまさに犯罪である。

「だって暑いですし……」

暑さも理由の一つだが、やはり一番大きいのは異性の目がほとんどないからだろう。

それだけならここまでラフな格好にはならなかったかもしれないが、今は多くの学生が帰省中なので人の目も少ないのだ。

だらしなくなるのも理解できる。

「ふむ……お前は一度自分の魅力というものを理解した方がいいのではないか？」  
「み、魅力ですか？わ、私にそんなのありませんよ……」

言っていて自分で悲しくなったのか、ベッドの上で三角座りする真耶。

その状態のまま、ぶつぶつと独り言を言いだす。

『ドジだし……結局代表候補生止まりだったし……おっぱい大きいし……』

彼女の巨大な乳房は、昔はコンプレックスだった。

学生のころから大きかったそれは、他の者たちからやはり逸脱していて、それが真耶は嫌だった。

その後クロウと出会い、彼が褒めちぎってくるのでコンプレックスはなくなったのだが、今は再燃しているらしい。

それを見てクロウはベッドの上にいる真耶に近づいていく。

「真耶」

「ふえっ？く、クロウさん？」

真耶をベッドの上に押し倒し、覆いかぶさる。

彼女の戸惑った表情が、自分を見上げてくる。

「お前は魅力的な女だぞ？」

「え、ええ……？」

ボンッと顔を赤くして、あっちこっちに目線を動かす。

自分の好きな異性から真顔で魅力的だと言われると、真耶のような性格の女はこうなってしまう。

あたふたとしている真耶を見た後、彼は視線を下に動かす。

「……………」

するとそこには当然胸がある。

ノーブラでタンクトップ一枚ということで乳房の形がはつきりと視認できていた。

重力に負けた豊満なそれは、左右に広がってたぶたぶと真耶の動きに合わせて柔らかそうに揺れる。

千冬や楯無は張りのある若い乳房だが、真耶のように熟れた柔らかい乳房もまたすばらしい。

「ひゃっ!?!」

クロウはタンクトップの上から、乳首を一瞬で発見して指でさした。

柔らかい乳房はそれを受け入れ、指が沈み込む。

真耶は身体をピクツと小さく震わせた。

「く、クロウさん！だめえ……」

真耶の言うことを無視して、クロウは彼女の乳房を弄ぶ。

指を広げて乳房に押し付け、沈み込む光景を愉しむ。

そうしていたと思つたら、掴みきれないほどの爆乳を鷲掴みにする。

「ああ……ダメですよ……」

クロウがタンクトップを脱がそうとすると、それを止めようとする真耶。

しかし実際は声だけで、手でだけようと試みることは一切していない。

抵抗しないことをいいことに、クロウは脱がすことを続行する。

「きやつ」

まくり上げていたタンクトップについていくようになっていた乳房が、ぶるんと大きく反動をつけてクロウの前にさらされた。

その柔らかい乳房は、反動からまだ立ち直つていなくプルプルと小刻みに震えていた。

「ほら、ここに座れ」

「は、はい……」

抵抗していた真耶だが、今はクロウの言葉に素直に従う。

元々真耶は誰かに依存するタイプだったようで、今依存しているのはクロウ。

彼のお願いや命令などは、ほとんど言うことを聞いてしまうのだ。

「きやあつーせ、背中……つー」



自分の前に真耶を座らせたクロウは、彼女の白い背中を舐めた。

先ほどもでエアコンをつけていなかったこの部屋はまだ少し暑く、さらに乳房を揉まれたことで汗をかいていた真耶の背中を、ゆっくりと舐めていく。

「ひゃああつ!!わ、腋い……!」

背中を舐めたクロウは彼女の片腕を上げさせると、そこを舐めだした。

腕を上げた反動で、Gカップの爆乳がたぶつと波打つ。

汗の溜まった場所を舐めて、真耶の味を愉しむ。

真耶は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながらも、だんだんと吐息が熱っぽくなっている。

「ひあつ!」

腋に溜まっていた汗を舐め終わると、いきなり大きな乳房をギュウツと握りしめた。

いきなりの奇行に、目を丸くする真耶。

そんな彼女に見向きもせず、クロウは乳房の形を変えて遊ぶ。

「あつ、はああつ」

二つの乳房を寄せ合わせ、擦り合わせる。

汗のおかげと真耶の肌質の良さで、痛みを感じずにスムーズに動く。

「ん、ああつ!やあつ!あつ!!」

乳房を寄せ合わせたまま、乳首をぐりぐりと押し込むようにして弄る。

そしてパツと手を離すと、ぶるんつと大きく揺れる。

弄られた乳首は勃起し、白い肌に桃色の乳首が映える。

非常に乱暴な愛撫だが、それでも真耶は感じていた。

「あつ、あつ、あつ、あんっ！」

勃起した乳首を指でチツチツと何度も弾くと、舌を出して悦ぶ。

真耶の身体中を、ゾクゾクとした快感が駆け巡る。

「本当に大きいな……揉みがいがある」

「んやあ……」

Gカップの量感のある乳房を持ち上げて、後ろから乳首を舐める。

真耶の大きな乳房は、そんなことさえすることができた。

片方の乳房は常に揉みしだき、なんでも受け入れることができそうな柔らかさを感じる。

真耶は目を閉じて、クロウから送られる快楽をただただ受け入れていた。

そんな彼女を確認すると、クロウは胸から腹を伝い、そして一気にホットパンツの中に手をつ込んだ。

「あはああああつ!!そこダメえええつ!!」

目を見開き、大きく喘ぐ真耶。

クロウは秘裂に手を近づけ、擦るようにして弄った。

すでに彼女の身体は胸を揉まれただけで出来上がっていたようで、大して愛撫をしなくても淫蜜が溢れてきていた。

「随分と濡れているな」

「ああ……やめてください……」

指にへばりついたねつとりとした愛液を、真耶の目の前に突き出す。

真耶はよだれを垂らしてうつとりとした表情をしていたが、恥ずかしそうに顔を背けた。

「あ……クロウさん、ここ苦しそうですね……」

クロウの膝に座る形になっていた真耶は、ズボン越しの臀部に固く熱いものが押し付けられているのを感じた。

大きくテントを張ったそこを手で撫でた後、スツと移動してズボンを脱いでクロウに向けて股を開く。

そして自分の指で秘裂を開け、奥まで見えるようにする。

「あ、あの……私だけ気持ち良くなってるのはいけないと思うので、私のここで気持ち良くなってください」

照れながらも懸命にクロウを誘う真耶の姿に、胸に矢が刺さった……ような気がした。

クロウはいきり立つた男根を取り出し、膣口に亀頭を押し付けた。

「ひゃああつ!!」

しかしいきなり突つ込むようなことはせず、焦らすように擦りあげた。

その際に敏感な陰核を擦られ、真耶は嬌声とも驚いた声とも取れない悲鳴を上げた。

「ああ……焦らさないでくだ——んあああああつ!!」

不意打ち気味に、一気に男根を膣奥まで突つ込んだ。

真耶は背を折れるほど反らせ、ベッドの上でビクンと大きく跳ねた。

豊かな乳房もダイナミックに揺れる。

真耶の膣内はラウラや鈴みたいにきつく締め付けてくるのではなく、包み込むように

優しく男根を刺激した。

「はあ……んっ……」

ゆっくりと腰を動かす。

膣内でかき回された愛液が、ジュプジュプと水音を立てる。

口から漏れるのは、腰を突きだされたときに出る吐息と喘ぎ声だ。

「あつ!あうつ!ひぐうつ!いいつ!!」

真耶の喘ぎ声が非常に大きくなる。

クロウが腰の動きを激しくしたのだ。

パン！パン！と肉同士がぶつかり合う乾いた音が響き、真耶は腕を下にもっていつて嫌がるように遠ざけようとする。

腕に大きな乳房が乗っかる。

しかし眉尻を下げ、歯を食いしばり、口の端からよだれを垂らしているだらしない顔を見ると、それが本当に嫌がっていないことが分かる。

「あっ！ああっ！はっ！はっ！！」

そんな真耶の態度を見て激しく腰を動かしていると、真耶は口を開けて大声で厭らしい声を発する。

片腕を頭のほうに持って行き、耐えるようにギュツと拳を握る。

すると二の腕に抑えられていた乳房が解放され、激しく上下に揺れ動く。

膣内は射精を求めて、キュウツと男根を締め付ける。

「んんっ、あああああっ！！」

両手で二つの爆乳を鷲掴み、それを持って腰を動かす。

膣内できき混ぜられた愛液が、外へと漏れ出してくる。

巨大な逸物は奥まで届き、子宮口を押し広げようとする。

ギシギシとベッドのスプリングが、激しい運動に悲鳴を上げる。

「きゃあつ!!う、浮いてる……っ!!」

クロウは真耶を後ろから抱きかかえ、持ち上げる。

膝の裏に腕を回し、強靱な腕力で真耶を支える。

「やつ!あつ!あああああつ!そこグリグリしちゃ……っ!!」

クロウは真耶を抱きかかえたまま器用に腕を動かし、固くなつた陰核をクリクリと弄る。

そうすると真耶の吐息は、まるでハツハツと犬のような息を漏らした。

「やあああああつ!!」

大声を上げて、真耶は絶頂を迎えた。

肉付きの良い脚をピンと伸ばし、首を反らせて盛大に絶頂した。

陰部からはプシャアアアツと勢いよく小便が漏れる。

「あああ……スゴすぎですう……」

汗に濡れた厭らしい肢体をビクビクと時折激しく震わせる。

目からは涙、口からはよだれが流れていて、真耶の端正な顔を汚す。

「あああつ!ううあつ!壊れるうううっ!!」

今度はベッドに二人して寝転んで後側位となり、腰を動かす。

激しい腰の動きは、彼女のむっちりとした尻に当たるたびにパンパンと音を発生させる。

ダイナミックに揺れるGカップの乳房は、大きな手でつかんで揺れないようにする。「あつーあつーダメっ！ 私また……っ!!」

真耶は切羽詰ったような声を漏らし、ビクンと大きく身体を震わせた。

尿道からは残っていた小便が、押し出されたようにプシツと少量漏れた。

「あああああああつ!!」

奥に押し入れられた男根から、ドクドクと白濁液が飛び出してくる。

精液が膣内に入ってくるのと入れ替わるように、尿道からは小便が漏れ出した。

「ああ……長い……」

クロウの射精は中々終わらなかった。

真耶は舌をだらしなく垂らして、その快楽に酔った。

射精し終えた男根を抜き取ると、ドロリと精液が漏れ出た。



「気持ち良かったぞ、真耶」

「わ、私もです……」

情事を終えた二人は、今はベッドで仲睦まじく寝転びながら話していた。

部屋の中には、まだ淫猥な空気が残っている。

「お前が魅力的だから、私はお前を好んでいるのだぞ？」

「あ、ありがとうございます……」

眼鏡をクイツと上に持ち上げながら、真耶は頬を赤く染めて礼を言う。

しかしクロウの言っていることは事実である。

彼のお気に入りの女性といえ、どの女性も皆絶世の美女と言っても過言ではない。

さらに性格などの内面も見られるので、その中に真耶が入っているということは、彼女もまた絶世の美女なのだ。

「わ、私もクロウさんのこと、大好きですから……」

照れながらもクロウの目をしっかりと見て言う真耶の姿は、非常に愛らしかった。

そんないじらしい真耶を見ていると、ムラツときてしまうクロウ。



本当に性欲は底なしである。

「真耶……」

「あ……」

真耶の上に覆いかぶさるクロウ。

真耶も抵抗せず、うつとりとした様子でクロウを見上げる。

そして二人の影がだんだんと近づいて行って、影が重なるまで後少し……。

「あー!!」

後少しというところで、真耶がハツと気づいたように大声を上げた。

いきなり目の前で大声を出されたクロウは、目を丸くする。

「……どうした？」

「し、資料をまとめるのがまだ残ってたんです！明日に会議があるのにいつ！」

真耶は元日本代表候補生の名に恥じぬような動きでうまくクロウをかわすと、机の上に置いてある資料の山に向かって行った。

ベッドの上に残されたクロウは、うつすらと苦笑を浮かべながら、揺れ動く豊満な肢体を眺めていたのだった。



「それで〜？言い訳を聞こうか〜？」

「……………」

ニコニコと笑いながらクロウに問いかける本音。

確かに他人を癒せるような天使の笑顔のだが、クロウに対してとんでもないほど大きい威圧感を叩き付けている。

これはあのブリュンヒルデよりも凄まじい威圧感だ。

「お腹がペッコペッコな私を放っておいて〜、先生といちゃいちゃかく〜」

「……………」

クロウは今まで誰にも物怖じしたことなどない。

何故なら彼は無敵で、誰にも負けることはないのだから。

だが今は本音の顔を直視することはできなかつた。

「ねえ〜、何黙ってるの〜？」

「……………」

ベッドから降りた本音が、正座で地面に座っているクロウのもとにテトテトと近づいていく。

そしてクロウの膝の上に座ると、ゆっくりと腕を首に回し、抱き着く。

迫力のある笑顔から一転して、まるで娼婦のように艶やかな笑みを浮かべる。

「先生にしたこと、私にもして〜?」

クロウと本音は、それから三日間部屋から出てこなかった。

## 夏ノ長期休暇 其ノ伍

稀代の天災科学者にして国際指名手配者、篠ノ之 束。

彼女は世界各国が特殊部隊などを登用して躍起になって探しているのに、まったく捕まらない。

理由としては束が自身で作成して使用している強力なステルス兵器である。

視認は勿論できず、レーダーにも映ることはない。

また、居場所を特定していかないのも大きな理由であろう。

束は世界中に数多のアジトを作っており、短期間の間にアジト間を往還しているのだ。

これらことから、彼女はどの国にも捕まらずに悠々と人生を謳歌しているのだ。

る。

しかし、理由はこれだけではない。

もしこれだけの理由だったら、束は捕まっていただろう。

アメリカや中国などが本気で彼女を狙えば、居場所を特定するのは簡単ではないができる。

実際数か国は何度か束の居場所を特定している。

では何故捕まえられなかったのか？

これにも理由があり、まずは束の保有する軍事力である。

ＩＳの生みの親である彼女は、当然コアもいくらでも作ることはできる。

それに束の高い技術力なら、まだ世界中の科学者が頭を合わせても実現できていない

ＩＳの無人機を作成することも可能だ。

何度かアジトに侵入を試みた特殊部隊たちは、これで潰されている。

だが世界の国々は束を諦めない。

ならばと今度は特殊部隊の中に軍人のＩＳ乗りを複数紛れさせたのだ。

そうすることで無人機と戦える戦力を持ち、無人機をＩＳ乗りたちが足止めしている間に特殊部隊員が束を拉致できる。

これを試みた結果はうまくいき、特殊部隊員は束の目の前に立つことができた。

だがそれでも束の拉致には失敗した。

確かに束は高い身体能力を持つが、流石に洗練された特殊部隊員が十数人も相手じゃ太刀打ちできない。

なら誰が彼女を守ったのかというと、現在世界各国で特S級危険人物としてブラックリストに載せられているクロウ・ミキストリだった。

「ふむ……ここだよかったのか？」

そんな彼は、今アメリカ合衆国のある荒野に立っていた。

風邪が吹くと、砂煙が舞い上がる。

見渡す限り地平線しかないこのような場所に何故クロウがいるのか？

それは夏休みもあと少しといった時に届いた手紙にあった。

あて先はクロウ。差出人は束。

夏休みになっても中々会いにきてくれないクロウに我慢できなくなった束が送った催促手紙である。

クロウは手紙が示す束の現在位置にたどり着いたのだが、それが今の荒野のど真ん中であつた。

「ヤッて……どうしたものか……」

アジトがこの付近にあることは分かったのだが、いかんせんどこにあるのかわからな

いのでなすすべがない。

仕方ないので近くの街に戻ろうと思い、足を踏み出したその時だった。

「むっ」

ふわりと宙に浮く。

地面がなくなつたのだ。

落ちながら上を見上げると、だんだんと光が狭くなつていた。

どうやら機械仕掛けのからくりのようで、空中に放り投げられたのも地面に穴が開いたせいだろう。

そのままどんどんと落下していく。

そして落下してから十数秒後、クロウは地面に叩き付けられ

「むおっ」

——ることはなく、柔らかいクッションに落下した。

そのクッションは非常に柔らかく、落下したダメージがほとんどなかった。

「く〜ろ〜く〜んっ！」

「ぐふっ」

どちらかというと、思い切りダイビングしてきたものに押し掛かれた方がダメージは大きかった。

物凄い勢いで頬をこすり付けてくる美女の頭を撫でて、クロウは口を開く。

「逢いにくるのがぶっ、遅くなつてぐっ、すまなかつたながっ」

「本当だよ、もう！束さんそろそろIS学園襲撃して拉致しようと思つてたんだよ！」

クロウは話している間に動きまくるウサ耳に頬を打たれる。

それに気づいているのか気づいていないのか、束はニツコリしながらクロウを見上げた。

流星は狂つた天災ウサギ。考えていることが恐ろしい。

実際無人機を複数機発進準備させていたりする。

「ふう〜……久々のクロくん成分〜……」

束は基本的に不健康な生活をしている。

ろくに眠れないので目の下には隈があり、肌のつやもけしていいとはいえない。

だが今の彼女曰く『クロくん成分』を補給した束は、隈は綺麗になくなり肌はツルツルになつていた。

彼女の身体はどうなつているのか？

「あ、クロくん。ISの調整しよつか？」

「む、では頼む」

「まつかされた〜♪」



クロウの専用機をペいっと攫うようにとると、コードをぶつ刺して多数現れた空中投影ディスプレイを処理していく。

後にも先にも、これほどの回数を束に調整してもらえる者は、おそらくクロウだけだろう。

「……何故服を変えた」

「え〜?」

調整もひと段落ついたのか、ディスプレイから顔を離してクロウをきよんとした様子で見上げる。

束の現在の服装は先ほどまで『不思議の国のアリス』のようなふわふわした服ではなく、どうみてもナース服。見まごうことなくナース服であった。

「似合っていない〜?」

その場で軽やかにくるりと一回転してみせる束。

ナースキャップはつけておらず、機械のウサ耳をつけたままだ。

これはなにかあっても外さないらしい。アイデンティティだとか。

ナース服は束のスタイルの良さを強調するようになっていて、豊満なFカップの乳房が眩しい。

きゅつと括れた腰や、大きく張り出した臀部もスカートを盛り上げている。

「いや、似合っているぞ」

当然クロウは誤魔化したりせず、束を褒める。

事実だから普通だと思われるが、案外恥ずかしがって本音は言えないものだ。

クロウにはそういうところがなかったので、女性側としても嬉しい。

「もう、まあ似合ってるのは分かっているけどねっ」

そう言いつつも束は身体をくねくねと揺らしていやんいやんする。

そしてベッドの上に座っているクロウに艶っぽい流し目を送る。

「ねえねえクロくん。この服でお楽しみをしてみない？」

「よし、来い」

「ラジャー！」

束のお誘いに即決だった。

バツと両手を広げて束を待ち構えるクロウに、束は疑うことなく身を差し出した。

「んっ……」

その勢いのまま、束はクロウに唇を押し付けた。

しかしすぐにクロウに口内へ侵入されてしまう。

「んあ、えうっ」

口内で舌を絡みとられ、嬲られる。

束の舌を唇で挟み、ぢゅうううつと吸いつく。

たまに唇で扱くようにしてやると、束の顔が気持ちよさそうに緩む。

「んはあ……気持ちいい……」

唇を離すと、唾液でできた細い橋が架かる。

それを逃すまいと束は吸い上げ、口内に収めてしまう。

「んふふ、クロくんも興奮してくれてるんだね」

そう言う束はズボン越しにスリスリと局部を擦りだす。

その間にクロウは上に押し掛かっている束を回転させ、シックスナインの形になる。

束のむっちりとした乳房が厚い胸板に押し付けられる。

「相変わらず大きいね。束さん嬉しいよっ」

ズボンを下ろすと、勢いよく飛び出してくる男根。

それを見て束はうつとりと目を細め、頬を赤らめた。

「うわあ、手の中でドクンドクンなってるよお」

束は陰茎を手を持つと、シュツシュツと上下にこすり始めた。

陰茎に浮かんだ血管が、手のひらに脈動を伝える。

流石に束は慣れたもので、スムーズに男根をしごきあげる。

片手で陰茎を刺激している間に、もう片方の手で亀頭を弄る。

たまに大きく張り出したカ리를弄って、射精を促す。

「お前の胸からも高鳴りが聞こえてくるぞ?」

「あんっ」

クロウはそう言いながら手を伸ばし、胸板に押しつぶされていた乳房を握る。

柔らかいFカップの感触が、ナース服越しに伝わる。

「もうっ、私がしているときに胸触らないでほしいね」

龟头を手のひらでこねながら言う束だが、口で言っているほど嫌そうには見えない。

クロウはそんな抗議を無視して、乳房を揉み続ける。

真耶より張りのある乳房がぶにつと抵抗してくる。

「んちゅ、んんっ、ダメだよお……」

陰茎をしっかりと握って、龟头に舌を這わせる。

敏感な場所を舐めまわして、少しでもクロウに気持ち良くなってもらおうとする。

「んぶっ」

束は先ほどからダメやらやめてなど抗議しているが、身体はまったく逆の行動をしていた。

クロウの顔に肉付きの良い尻を押し付け、陰部を刺激してもらおうとする。

少し汗の滲み始めた尻肉の感触が気持ちいい。

「ほら、立ってみろ」

「んちゆ、ぢゆるぢゆる……ふはっ」

束は名残惜しそうに男根を口から離すと、クロウに言われた通り立つ。

そして壁に手をつき、尻をクロウの前に突き出す体制になる。

「んひっ!？」

クロウは指で濡れそぼっていた陰部を触る。

「あつ、はあ……そこお、気持ちいい……」

時折ピクピクと震えながら、クロウに尻をさらに突き出す。

秘裂に指を挟ませたりしていると、膣口がヒクヒクと男根を求めてうずきだす。

うっすらと茂った陰毛が手に当たる。

「あつ……」

いきり立った男根を束に近づけ、膣口に亀頭を合わせる。

そうすると束の脚はガクガクと小刻みに震え、壁に置いていた手をギュつと握る。

彼女の口からは期待の声漏れる。

「はひっ! ううっ、ああああああつ!!」

クロウは一気に男根を押し入れた。

すでに何度もクロウの男根を受け入れてきた束の陰部は、それをすんなりと受け入れ

た。

押し入れた際に腰が柔らかな尻に当たり、ぺちんと音を立てる。重力で垂れ下がっていた乳房も大きく揺れた。

「くうう、はあつ、はああああつ」

クロウは最初から激しくピストンをしなかった。

ゆつくり、ゆつくりと淫肉の感触を愉しむ。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

そして急に激しく突き入れだした。

腰を突き入れるたびに勢い余って尻に当たり、パン！パン！と肉音がする。

尻肉をしつかりと掴み、腰を動きやすくする。

束の身体はぴくんと可愛らしく反応する。

「んあつ！はつ！あつ！あつ！！」

愛液が漏れ出し、陰毛を濡らす。

さらにこぼれたそれは、太ももを伝って落ちていく。

Fカップの量感ある乳房はぶるつと瑞々しく揺れる。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

尻タブを開けると、ヒクヒクと疼いている尻穴が見えた。

その淫靡な光景を見て一層激しく男根を突き入れる。

飛び散った愛液は、束やクロウの身体だけでなく地面まで濡らしていった。重たげに揺れる乳房は、両方ともバラバラに上下に動く。

「最後は向き合ってやるか」

「う、うん……」

耳元でそう言われて、キュンと胸を高鳴らせる束。

普段のヘラヘラとした表情ではなく、今は一般の恋する乙女の表情だった。

まあ容姿のレベルは一般ではないのだが。

「入ってくるうう……」

バックから正常位に変えて、また男根を挿入しなおす。

膣内がもう抜かないでと男根に吸い付いてくる。

「んっ！はっ！んんっ、んーっ！っ!!」

顔を近づけて、接吻を交わす。

舌を絡めた淫猥なキスは、束をとろけさせる。

キスしている間も腰は休めることなく、膣内をかき混ぜまくる。

束の唇の柔らかさなどを堪能したクロウは顔を離すと、今度は口の前に武骨な指を差し出す。

「ん、ちゅ、クロくん……好き……」

唾液に濡れた舌で、クロウの指を清めていく。

指を舐められていると、柔らかい頬に手がぶにと当たる。

嬉しそうに指を舐めていく東に、ムラツとしたクロウは指を口から離させて豊かな乳房へと持つて行く。

「ぶあつ、乳首気持ちいいよおっ!!」

唾液がぬらぬらと光っている指で乳首を愛撫する。

勃起していた乳首を押しつぶすように指で押ししていると、片方の乳首が興奮と快樂でぷくうつと勃起した。

「乳首を弄ると、膣内なが締め付けてくるぞ」

勃起した乳首を、指の腹でしこる。

すると子宮がキュンキュンと疼き、膣内なを狭める。

ぴっぴつと噴出した愛液は髪と同じく淡い紫の陰毛を濡らす。

「もう射精だすぞ」

そう言ってクロウは東にキスをする。

それを束はうつとりとした表情で受けながら、コクコクと何度もうなずく。

そして限界を悟ったクロウは乳首をキュツと摘まんでから、男根を引き抜いた。



「あはああああ……熱い……」

ビュルビュルと鈴口から溢れ出す精液。

汗に濡れた淫靡な肢体を、白濁液が彩っていく。

男根を引き抜かれた陰部は穴が開いたままで、そこから愛液が大量に漏れ出した。

「ふう……」

ベッドの上で快楽の余韻を愉しむ束の横で、クロウが一息つく。

いやはや、賢者タイムがけだるいけだるい。

そのせいでぼーっとしていると、束の手がにゅっと伸びてきてクロウの男根を掴んだ。

「むっ……」

「何で外に射精したの。腔内なかが良かったよう」

ぷくうつと精液が付いた頬を膨らませながら、手を上下に動かす。

結構な量を出したのだが、流石は性豪クロウ。

ぷにぷにと柔らかい手でこすられていると、すぐに回復した。

「元気になったねっ。じゃあもう一回……しよ？」

ぞつとするようなほど淫靡な微笑みを向けると、束はクロウに覆いかぶさったのだつた。



「……久しぶりに帰って来たな」

IS学園を目の前にして、クロウがそう言う。

束のアジトに行つて、そこで五日間過ごした。

その間ろくに食事や睡眠をとらず、退廃的で淫猥な日常を送つた。

束の性欲は非常に強く、さらにクロウもそれを上回るほど強いので、束が快楽や疲労で気絶するまでひたすら性交していたのだ。

「随分遅いお帰りだな」

「千冬か……」

IS学園の正門に背を預けながら、ピシツとした黒いスーツを纏つた美女が言う。

この学園の教師である織斑 千冬は、どこか不機嫌な様子でクロウを見た。

「束のところに行っていたようだな」

「そうだが……よくわかったな」

「わざわざ教えてもらったからな」

夏季休暇は、生徒ほど多くないにせよ教師にも与えられた。

数少ない休日をクロウと過ごそうと考えていた千冬が部屋に向かうと、そこにはクロウはいなかった。

また他の女のところかと少し不機嫌になって自室に戻ると、一枚の手紙が置いてあった。

『やつほー、ちーちゃん！クロくんはこの怪盗ウサギ仮面が頂いた！当分返さないからねっ！by愛しの幼馴染より』

千冬が手紙を握りつぶしてしまったのは余談である。

「クロウ、今夜は少し付き合え」

「……一応学生だぞ？」

「貴様は未成年ではないだろう」

そう話し合いながら、二人は学園の中へと入って行った。

二人の距離は非常に近く、長年連れ添った夫婦のようだった。

その後クロウの専用機の倉庫内にあった酒を、二人は酌み交わした。

ゆつくりと酒を飲みながら語り合うのも悪くないと考える千冬だった。

## 第五章

## 長期休暇ガ明ケテ

アリーナ上空で激しい爆発が起こる。

黒い煙が上がっている場所を無表情に眺めているのは、世界で二人しかいない I S 男性操縦者のクロウ・ミキストリだ。

彼は現在専用機を身に纏い、空間が歪んでいる背後には剣の切っ先が二本のぞいている。

「くっ……い！」

黒煙からドイツの第三世代型 I S・『シユヴァルツエア・レーゲン』を身に纏った少女が飛び出してくる。

煙を浴びても全く美しさを損なわない銀髪の美少女は、ドイツ軍特殊部隊隊長のラウラ・ボーデヴィッツヒだ。

優秀な人材が集まるIS学園の中でもトップクラスの実力を持つ彼女は、クロウに対して劣勢に立たされているのが現状だった。

「む？まだエネルギーが残っていたか」

クロウは黒煙から脱出したラウラを見ると、背後に展開させてあった二本の剣を彼女に向かって発射した。

剣は回転を繰り返しながら、物凄い速さでラウラに迫る。

「このっ！」

ラウラはそれに対して回避をしなかった。

左の金色に輝く目でしっかりと剣を見て、手のひらを前にかざす。

するとラウラを貫こうと放たれた剣は、ピタリと移動を止めた。

『シュヴァルツェア・レーゲン』の最大武装、『慣性停止結界』である。

「お返した、嫁！」

ラウラはあらかじめ充電を溜めていた大型レールカノンを、クロウに向けた。

『慣性停止結界』を使用している間は多大な集中力が必要なために他のことは一切できないのだが、高い能力を持つラウラはそれが可能だった。

今の彼女は下手な代表生くらいなら圧倒するほどの力がある。  
ズドンッ!!

大きな音を立てて、レールカノンが火を噴いた。

凄まじい破壊力を秘めた凶弾が、クロウを狙う。

「むお。『熾天覆う七つの円環』」

レールカノンの往く道を、光でできた七枚の花弁が遮る。

衝突と同時に、大爆発を起こす。

煙がもうもうと上がり、クロウの視界を遮る。

高い破壊力を持つレールカノンでも、七枚の花弁はまったく欠けることなく存在していた。

某ウサギ科学者が張り切って作った結果である。

「はああああっ!!」

煙の中からいきなり現れ、クロウにプラズマ手刀を振りかぶるラウラ。

爆発が起こると同時に『慣性停止結界』を解除。

二本の剣を避けて『瞬時加速』で一気に迫ったのだ。

「ふむ……」

クロウは手の中に深紅の槍を展開し、プラズマ手刀を受け止める。

ただの槍のはずなのだが、高エネルギーのプラズマ手刀をなんなく防いでいる。勿論ウサギ産武装なので、それ相応の槍である。

「うっ！」

バツと力強くプラズマ手刀とせめぎ合っている槍を振り払うと、ラウラは後ろに飛ばされる。

うまくISを駆使して、体制を整える。

「しまったっ！」

しかしラウラは後ろに飛ばされた時点で敗北を覚悟する。

基本的にクロウは遠中距離のIS操縦者だ。

倉庫内から大量の武器を展開して掃射し、相手を物量で押しつぶす。

だからラウラは突撃して近接戦闘をけしかけたのだ。

もしラウラにもう少しエネルギーが残っていたなら、結末は変わって——はなかつたが、もう少し戦えていただろう。

「私の勝ちだな」

次の瞬間、ラウラの視界いっぱいには無数の武器が襲い掛かってきていた。





「むう……また勝てなかった……」

もにゅもにゅと口の中のものを咀嚼しながら、ふくれっ面になるラウラ。

小柄な彼女がプクツと頬を膨らませて不満そうにしている姿は、高校生とは思えない。

そんな彼女を見て、ルームメイトであるフランスの美少女、シャルロット・デュノアが悶えている。

「はうく……ラウラかあいよいよ！（まあ仕方ないよ。クロウなんだし）」

「シャルロットさん、本音と建前が逆ですわよ。あとそれは昭和58年の方のセリフですわ」

蝸の声がカナカナと聞こえてきそうな発言をするシャルロットに、上品に食事をしていたセシリア・オルコットがツツコむ。

「ふっふっくん！またあたしの勝ちだったわね、一夏」

「悔しい、でも感じ——」

「一夏!?!」

クロウとラウラの試合の前に戦っていた凰 鈴音が、対戦相手である織斑 一夏にドヤ顔を見せつけながら胸を張る。

彼女の容姿が非常に愛らしいので、鬱陶しい態度も可愛らしく見える。

一夏はどこか遠い目をしながらおかしなことを言おうとするので、一夏大好きな篠ノ之 箒が肩をガクガクと揺らして呼び戻そうとする。

「でも本当にクロウは強いよね。ISに関しては最近まで素人だったんでしょ?」シャルロットがトリップから帰還し、クロウに問いかける。

実際クロウは思いつきでIS学園に入学するまでは、ISに乗ったことさえなかったのだ。

同じく最近ISを手に入れたばかりの一夏や箒に勝つのは領けるが、生まれた時から戦闘訓練を受けていたラウラや、小さいころからIS訓練を受けていたセシリアやシャルロットに勝てるのは異常である。

「まあいい師匠に会えたからかもしれないな」

師匠になったIS学園最強にしてロシア代表生を三日で負かしておいてよく言えるものだ。

ただ師事するにあたって彼女が素晴らしい人物であったことは間違いない。

クロウがここまでＩＳで無双できているのも、彼女の影響が非常に大きいだろう。

「ねえねえ、近々またトーナメントがあるみたいだけどさ。もし前みたいにタツグマツチだったら誰と組む？」

シャルロットが最近噂になっている話を切り出してくる。

噂だが、以前無人機襲撃で流れてしまったタツグマツチを、また開催する可能性があるのだ。

最初に答えたのは一夏だった。

「うくん……やっぱり俺は箒かな」

「っ!!」

一夏の思いがけない言葉に、箒が目を見開いてガタツと立ち上がる。

落ちて着けモツプ。まだ慌てるどころじゃない。

「な、何故だ？理由を聞こうではないか」

ゴホンと一つ咳払い。

照れ隠しのつもりなのだろうが、頬がうつすらと赤みを帯びているので意味をなしていない。

鈴やセシリアなどは、箒の反応を見てニヤニヤとからかうように笑っている。

「そりゃあ箒の紅椿は俺の白式と相性がいいからな」

「……………」

と言つても勿論スーパー鈍感マシンの一夏。恋する乙女が聞きたいセリフを言うはずがない。

「この馬鹿者っ！」

「ぶへえっ!?!」

身体は育つていてもまだまだ精神的に未熟な十六歳。手が出てしまつても仕方がない……のかもしれない。

ただやはり手を上げない方がいいのは事実で、一夏の箒に対する好感度は中々上がらない。

「あたしはなんだかんだ言つてもセシリアが一番やりやすいかなあ」

「わたくしは遠距離しか戦えませんし、鈴さんみたいに前衛を務めてくれる方が嬉しいですわね」

鈴とセシリアは意外と馬が合うらしく、二人で組むつもりらしい。

遠距離しか戦えないと言っているセシリアだが、それでも近接戦闘は並の代表候補生並である。

ただ同学年の代表候補生たちが規格外なだけで、セシリアも狙撃や射撃は国家代表生

をも凌駕する。

「私はシャルロットと一緒に心強い」

「えへへ、そう言われると嬉しいな」

シャルロットとラウラの万能型コンビ。

二人とも近接・中距離・遠距離戦闘全てをこなせる優等生である。

トーナメントがあれば優勝最有力候補ではないだろうか。

まあそれはセシリアと鈴の組にも言えることなのだが。

さて、こうしてそれぞれがパートナーを決めていく中、奇数だと必然的に一人余る。

「……………む？」

クロウⅡぼっち。

意外なことに、クロウ大好き四人組はパートナーにクロウを選ばなかった。

理由としてクロウは基本的に遠距離タイプで、近接戦闘能力の高さがいまいちわからないこと。

さらに遠距離攻撃は非常に威力が高く、効果範囲も広いので巻き添えをくらう可能性も高い。

勝負するからにはトップを目指す負けず嫌いな四人は、クロウをとらずに気心知れた人物を選んだのだ。

勿論、四人が一番安らげる場所はクロウの隣なのだが。

「クロウは誰と組むんだ？」

一夏に聞かれ、頭の中で他に誰がいたか考える。

そしてすぐに浮かんだのは、一年四組のクラス代表にして日本国代表候補生の物静かな少女だった。

「まあそれはその時のお楽しみだ」



午後にもアリーナを使つての授業があつた。

食事を早く終えたクロウは、まだ時間に余裕はあるが更衣室に来ていた。

もうすでにISスーツに着替え、後はアリーナに行くだけである。

「やっほ〜♪」

「む……」

アリーナに向かおうとしていたクロウにかけられる、楽しそうな声。

振り向くとニコニコとしながら手を振っている水色の髪をした美少女がいた。

「楯無か」

「は〜い♪」

ロシア連邦代表操縦者でありIS学園生徒会長、さらに対暗部用暗部更識家当主という多くの肩書を持つ美少女、更識 楯無。

クロウを鍛えた師匠である。

まあ三日だけなのだが。

「うわ〜、相変わらず凄い筋肉ね。ガッチガチ♪」

畳んだ扇子で、クロウの胸板をペチペチと叩く。

厚い胸板は、その衝撃を完全に吸収する。

ISスーツだけの薄い生地だと、筋骨隆々の肉体がかなり強調されていた。

「何か用か？」

「ん？ただ逢いに来ただけよ？」

ツツ……と寄ってきて、クロウの隣に座る。

扇子を広げて口元を隠しているが、どうやら笑っているようだ。

「嘘をつくな」

「……んふふ、やつぱりばれるかな」

ニヤニヤと笑いながらクロウを見やる。

こんな何でもないような会話も、楯無からすれば楽しくてしかたないようだ。

「織斑 一夏くんっているでしょ？その子のこと、鍛えてあげようかなって思っているの」

「ほう……」

「最近何だかきな臭くてね。一応私が近くについて護衛していた方がいいみたい」

楯無の頭に浮かぶ文字、『ファントム・タスク亡国機業』。

第二次世界大戦中の発足したとされているテロ組織で、更識家の情報網によればI Sも数機保有していると思われる。

しかし世界中が大変だった時期に発足するとは……迷惑極まりない話である。

思案に暮れていた楯無だったが、じつとクロウが見つめてくるのでそちらを向く。

そして何かを察すると、ニヤニヤと意地悪そうに笑い始めた。

「なあに？もしかして私が織斑くんの近くに行くからって嫉妬してるの？」

「ふむ……まあそうかもな。お前は取られたくない」

「あなたがそれを言うの？」



クスクスと楽しげに笑う。

この男の周りには、楯無含む十人の美女・美少女がいるのだ。

しかも属性も様々で、お嬢様にツンデレ。ボクっ娘に眼帯少女。姉に妹。妹の専属メイド。世界最強のブリュンヒルデに爆乳眼鏡ドジっ娘教師、絶賛国際指名手配中の天災科学者。

楯無が知っているだけでもこれだけの人物が、クロウに想いを寄せているのだ。

あまり浮気とかに忌避感はない楯無だが、流石に嫉妬はしている。

「大丈夫。私はクロウと違って浮気はしないから」

ずいっと顔を近づける。

そしてクロウの首筋を、真っ赤な舌でれるお……と舐めた。

まるで猫がミルクを舐めているように、楽しそうに顔を緩める楯無。

「ふふっ、もう大きくなってるわよ?」

ピッチリとしたISスーツは、いきり立った男根をくつきりと浮かび上がらせていた。

ISスーツ越しからも分かるほどの大きさと硬さを確かめるようにさする。

密着しているので、豊満な乳房が身体に押し付けられる。

「次はアリーナで実習なのだな」

「まだまだ時間に余裕があるじゃない」

苦言を呈するクロウだが、楯無は鼻歌交じりにそれを聞き流した。

IS スーツを脱がせると、大きく膨張した逸物が姿を現す。

外気に触れて、ピクピクと小さく震える。

「ん……臭いのにクセになるのよねえ」

顔に男根が当たるほど近づけ、匂いを鼻いっばいに吸い込む。

水色の髪が亀頭に触れて、少しこそばゆい。

「んふふ、いただきま〜す」

亀頭をついばむように、唇で挟む。

口内で亀頭に舌をつけ、そこから陰茎に移動していく。

横からハーモニカを吹くように、陰茎を含んだ。

男根を弄ぶ厭らしい水音が、更衣室内に響く。

楯無は肉付きの良い尻を突き出し、夢中になつて男根を舐めていた。

「やっぱりクロウのつて大きいわよね。おねーさん、舐めるの大変よ」

陰茎を舌で舐め上げながら、手での愛撫も忘れない。

片手で敏感な鈴口を擦り、もう片方の手で陰囊を優しく握りコロコロと転がす。

脚には、柔らかい乳房の感触がある。

「ちゅばちゅば、じゆる、れろれろ」

陰囊の中にある玉を舌の上に乗せ、舐めまくる。

もう一つの玉は少し強く摘まんてやる。

陰茎は手でしこつてやり、刺激を送るのを途切れさせない。

「ぐぶ、ちゅぶ……もう射精そうね」

はち切れそうなほどいきり立つた男根を見て、嬉しそうに微笑む。

楯無はもうすぐ射精されることを察知して、大胆にも男根を全て口の中に含もうとした。

喉奥まで男根が押し入れられるが、それでもまだすべては入りきらなかった。

「ぢゅぶつ、ぢゅぶつ、ぐぶ、ぐぼおっ！」

先ほどまでのねつとりとしたものではなく、射精を促す激しい動き。

顔を振りたくり、頬肉で男根を擦る。

「もう射精すぞ」

激しい口淫で高められたクロウは、そろそろだと楯無に告げる。

すると楯無はにやあと笑って、射精できないように男根の付け根をグツと握りしめた。

「ストゥップ。まだ射精しちやだめよ」

楯無は口の周りに着いた唾液や我慢汁を舐めながら、淫靡に微笑む。

射精を止められた男根は苦しうにビクビクと震え、鈴口からは大量の我慢汁が分泌されていた。

「どうせ射精すんだったら、私の腔内ななどはいかがですか？」

「……ふむ、ではそうしようか」

高校生とは思えないほど色気のある微笑みをクロウに向ける。

クロウは楯無を抱きかかえ、膝に座らせた。

背面座位の形になっている。

クロウはその状態で、手際よく楯無の制服を脱がしていった。

流石は性豪。慣れたものである。

「大きくなつたな」

「あなたのために育てたものよ？存分に味わって」

楯無ほどの美少女に耳元でそう囁かれると、最早理性などあつてないようなものである。

しかしクロウはなんとか一部を残してはいた。

「あんっ」

露出させた乳房を、下から持ち上げるようにして掴む。

大きくて張りのあるそれは、触っているだけでも愉しめた。楯無も口から熱っぽい吐息を漏らす。

もみもみと、揉むたびに形を変えるEカップの乳房。

クロウは乳房を愛撫しながら、シヨーツを脱がしにかかった。

「んっ、ふっ、はあっ！」

シヨーツを脱がすと、陰部を弄り始める。

クチュツと水音がして、楯無が興奮していることを伝える。

豊かな乳房は、後ろから顔を持って行って舐める。

乳房が唾液と汗でぬめり、陰部から滴った愛液が太ももを伝っていく。

「尻をこっちに向けろ」

「うん……」

椅子から立って、楯無に手を椅子に置かせる。

クロウは尻を突き出す楯無の後ろに行き、後背位で突こうとする。

むっちりとした尻肉を掴んで開けると、濡れそぼった陰部が見える。

「んはあああああっ!!」

クロウはそこに男根を一気に突っ込んだ。

巨大な怒張は、楯無の臓器を持ち上げる。

腰を動かし始めると、陰部から響く淫猥な水音が大きくなった。

「んっ！あっ！はっ！あっ！！」

早くも感じ始める楯無。

尻尻を下げ、口からはよだれと嬌声が漏れ出る。

男根を突き入れるたびに愛液が飛び散り、地面やクロウの身体を濡らす。

「んいっ！ひっ！はっ！ああっ！！」

飛び散った愛液は、楯無の美しい肢体も濡らしていく。

身体をゾクゾクとした快感が支配していく。

快楽によって涙が目溜まり、よだれが地面に垂れる。

腰を突きだすと、大きくて柔らかい尻肉が受け止めてくれる。

「んんんっ！！」

楯無の上体を起こさせ、大きな乳房を握る。

汗に濡れた肌は、まるで手に吸い付いてくるように肌触りが良かった。

そろそろクロウも達しそうなのか、腰の動きが速くなる。

乳房を力任せにギユウウウつと握り潰す。

秘肉がめくれ上がりそうなほど激しく男根が突き動かされる。

「んんんんんんんっ！！」

ドビュツと勢いよく吐き出された精液は、膣内を短時間で満たしていく。

楯無はビクビクと身体を震わせ、気持ちよさそうに顔を緩める。

「ま、まだ時間あるわよね？」

「そうだな……あと一回くらいなら大丈夫だ」

「じゃあしましょっ」

楯無はニコニコしながらクロウをベンチの上に寝転ばせ、上から覆いかぶさった。射精したばかりだというのに、一向に衰えないそれを掴んで陰部に押し当てる。

そしてずぶつと一気に腰を落とした。

その反動で量感のある乳房がプルンとバウンドした。

「あはっ、大きいままね」

ハアハアと荒い息をつきながらも、厭らしく微笑む楯無。

暖かい膣内に入った男根はビクビクと震える。

「あっ！くっ！はあっ!!」

固い腹筋に手を置き、クロウの上で激しく跳ねる。

ぶるぶると柔らかかそうに揺れる乳房は圧巻である。

「はあああっ！あっ！あぐうっ！ひいっ!!」

楯無もかなり感じているらしく、陰部からはまるで小便を漏らしたかのような勢いで

愛液が漏れ出していた。

ぢゅ。ぶぢゅ。ぶと厭らしい音も一層大きくなる。

「んはあっ！はっ！ああっ！あっ！！」

クロウは身体を起こし、楯無の唇を貪る。

舌と舌を絡み合わせる淫靡なキス。

淫猥な水音が、下半身と上半身の二か所から発生する。

楯無はクロウの口内にある唾液を啜り、それを飲み込む。

「はひいっ！あっ！あっ！ううっ！！」

口を離すと、長くて太い唾液の橋が両者に架かる。

楯無はすでに身体が痙攣していて、腰を振れずにその振動で快楽を得ていた。

陰部は時折ぶしゅっつと断続的に潮を噴いていた。

「射精すぞ」

「んあっ！はっ！あっ！あっ！！」

ズン！ズン！と子宮を押し上げる男根。

愛液で濡れそぼった膈壁は、男根に密着して射精を促す。

楯無の顔は色々な体液でグシャグシャになっていて、まるで性的な拷問を受けている

かのようにだ。



「んはっ！あああああああっ!!」

大量の精液が、子宮内に侵入していった。

楯無の汗と唾液に濡れた肢体は、ビクンビクンと悩ましく揺れる。

クロウは肉付きの良い太ももを握って、快楽に耐える。

楯無もやられてばっかりではなく、陰囊をキュウツと握って一滴でも多く精液を吐き

出させようとしていた。



「なあクロウ。この部屋なんか生臭くないか？」

「気のせいだ」

## 英国淑女ハ常ニ毅然ト

「う〜ん……」

午後のISの実習が終わった後、セシリアは更衣室で考え事をしていた。

ISスーツも着たままなので、彼女のスタイルの良さを存分にさらしている。

何人かの女子生徒がそれを見て羨ましそうにしている。

「あれ？セシリア、どうかした？」

考え事をしているセシリアに話しかけたのは、これまた金髪美少女のシャルロットであつた。

彼女はまだ着替え中で、上はブラとワイシャツ、下はショーツだけ履いていた。

チラチラと見える白い布地が目にもぶしい。

セシリアを羨望のまなざしで見ている生徒たちはシャルロットを見てため息を吐く。神は何故平等でないのかと嘆きながら。

「あ、シャルロットさん。いえ、最近織斑さんも箒さんも強くなったと思います……」  
「ああ〜」

確かにとシャルロットは頷く。

二人は最近一緒に特訓しているらしく、ISの動かし方も変わってきていた。

それに二人の専用機は篠ノ之 束特性ということもあって、非常に強力である。

白式は『セカンド・シフト第二形態移行』になってから、近接戦闘しかできないという弱点もなくなり、

近・遠の二つの距離でも戦闘ができるようになった。

紅椿は言うまでもなく、現在世界にあるISの中で最強のISである。

「特にわたくしはBT兵器しか持っていないから、織斑さんとは相性がすこぶる悪いんですの」

「零落白夜のシールドとかあるもんね」

他人事のように言うシャルロットだが、まさに他人事なのだ。

彼女の持っている銃はほとんど実弾を使うので、零落白夜は大して問題ないのである。

「それで？イギリスに実弾兵器を送ってもらおうの？」

「まさか」

シャルロットの問いかけを鼻で笑う。

「わたくしはこの学園にBT兵器のデータを取るようにならされてきているのですよ？そんなのお門違いですわ」

腰に手を当て、むんつと胸をはる。

シャルロットより少し大きい胸部がぶるんと揺れた。

「……いいなあ」

「？シャルロットさん、今何か言いました？」

「な、なんでもないよ？」

セシリアがきよとんととして聞くと、顔を真っ赤にしてわたわたと手を振る。

流石妾の子。あざとい。

セシリアはそうですかと言ったあと続ける。

「それにまだまだ織斑さんたちには負けるつもりはありませんわ」

現在のISS学園第一学年専用機持ちの戦闘ランキングは、ほぼ拮抗している。

半歩先に抜け出しているのが、ドイツ軍人のラウラと巧みな戦い方を見せるシャルロット。

それにクロウや楯無のI.S.データを取り込んだ打鉄式を駆る簪である。

勿論セシリアはこのまま下に甘んじるつもりはなく、必ず追いつき抜くつもりである。

「でもクロウさんにだけはどうしても勝てるビジョンが思い浮かびませんわ」

「……まあ仕方ないよね」

離れていると無数の武器が飛来し、近づいてみると接近戦もこなせて、仕方ないから遠距離で狙撃しても花弁のシールドを出して完全に防がれる。

そんなの絶対に攻撃が通用しない場所から、ひたすらミサイルを撃ち込まれているようなものである。

「あ、セシリア。この後一緒にカフェに行かない？美味しいパンケーキがあるんだ」

「それは魅力的ですわね。是非一緒に一緒にさせていただきますわ」

にこやかに会話するシャルロットとセシリア。

この二人は意外と仲が良かったりする。

更衣室で楯無とイチヤコラした次の日の一限目、全校集会が行われた。勉強嫌いな生徒たちからすれば大歓迎のものである。

この全校集会の目的は、やはり近々にある学園祭のことだろう。ISを学ぶ学園と特殊だが、こういつた行事はしつかりとある。

「は〜い、おはよー。皆朝ごはん食べたかな？」

壇上上がった生徒会長——楯無が、笑顔で生徒たちに向かつて話しかける。

この学園はほぼ女子高で、そうすると異性との出会いなどあまりない。

特にIS学園は特殊なのでまったく言ってもいい。

そうすると何人かの生徒は、『もう女でいいや……』と思ったりしている。

楯無が話していると、何人かが熱い視線を送っているのが証拠だ。

しかし楯無が笑顔を向けている先にクロウしかいないのを知っているのは少ない。

「——で、各部活動の催しのことなんだけど、今回は特別助成金の他にもう一つ景品があります。それは——」

ニヤツと笑い、扇子をバツと開ける。

するとそれと同時に空間投影ディスプレイが表示され、でかかど一夏の顔写真と文

字が示された。

「名付けて、第一回キキキ織斑　一夏争奪学園祭〜！」

一瞬の静寂。

『えええええええええつ?!』

そして爆発。

しかし一番驚いているのは当事者である一夏本人で、目をパチパチさせたりこすったりしている。

夢ではありません。現実を見なさい。

「な、なんで?!」

「いや、生徒会に織斑くんを部活によこせつて苦情してくるところが結構多くてね。面倒だからこうしました♪」

「マ、マジか……」

楯無の説明に啞然とする。

だがこの学園にはもう一人男子生徒がいることを思い出す。

「じゃ、じゃあクロウはどうなるんだ?」

「あ、ホントだ」

「え? ミキストリくんはもらえないの?」

「解散」

一夏の疑問に、複数の女子生徒が反応する。

理由としては、まずクロウがまだ受け入れられない生徒も多いということである。

主に容姿のせいだ。

だから必然的にイケメン・優しい・好青年の一夏は人気があるが、長身・無表情・筋骨隆々のクロウは避けられやすいのだ。

実際先ほど反応した女子生徒たちも、クロウと過ごすうちに親しくなった一組の生徒ばかりである。

「あ、そのことなんだけど、クロウ・ミキストリくんはすでに生徒会に入ってもらっているから問題ありません。以上」

「え？ そうだったのか、クロウ？」

「いや、初耳だ」

「初耳なの!？」

生徒会長特権である。

汚い。流石更識汚い。

「えへへ、クーはすでに私たちのものなのだ」

「ずるいつ！」



「ハンドボール部にも来てほしいっ！」

一組のある場所からはこんな会話が聞こえてくる。

クロウが人気あるのは、運動部の面々だ。

筋骨隆々なのがいろいろいい。

「はい、静粛に」

扇子でペシペシと手を叩き、騒がしくなった場を静める楯無。

彼女のカリスマは、それだけで生徒たちを静かにさせた。

「うん、これで私からの話は終わりよ」

満足気に微笑んで、そう言った。

こうして学園祭で一夏がかけられることが決定し、全校集会が終わったのだった。



さて、学園祭では部活だけが催しするのでは勿論ない。クラスごとに何か出し物をする。

それを決めるために、今年一組では出し物の意見が飛び交わされていた。それは多種にわたり、ポツキーゲームやら王様ゲームやら……。

どれもこれも、クロウがゲームマスターになれば未成年者が見られないような内容になるのは間違いない。

「もう……ちゃんと意見出せよ……」

「えー、出してやるよー」

クラス代表である一夏が意見をまとめて担任の織斑 千冬に提出しなければならぬのだが、彼はすでに疲れていた。

「山田先生、何とか言ってあげてくださいよ……」

一夏が助けを求めたのは、この組の副担任、山田 真耶だった。

「そうですね……こ、このお姫様抱っこ……」

顔をポツと赤くし、眼鏡をクイツと上げる仕草で誤魔化す真耶。

彼女が選んだものに、一夏はガクツと肩を下げる。

真耶がチラチラとクロウを見ているのは気のせいではないだろう。

彼女も乙女。お姫様抱っこには憧れるのである。

結局その後も白熱した議論が交わされたのだが、ラウラのメイド喫茶という鶴の一声で終結を迎えたのだった。



「ね〜ね〜、クー。楯無お嬢様がね〜、生徒会室で待つて〜だつて〜」  
「む、わかった」

そんな会話を更識 簪の専属メイド、布仏 本音と交わしたのは数分前。  
今二人は生徒会室の前に来ていた。

「む？開いていないぞ？」

「は〜い、鍵ですよ〜」

扉を開けようとするが、鍵がかかっている開かない。

そこにほにやつと笑った本音が、だぼだぼの袖から鍵を取り出す。

がちやがちやと鍵穴を弄り、扉を開ける。

「ふむ……まだ誰も来ていないのだな」

「だね。あ、キーキあるよ。食べる？」

そのキーキは来客用だと、本音は姉に言われていたはずなのだが……。

しかしあまり甘いものは好みではないクロウは、それを断る。

「む、共犯者に仕立て上げることに失敗」

いけないことだということとは分かっていたらしく、怒られにくいクロウを味方にしようと考えていたようだ。

柔らかく癒される笑顔の下で考えていることが黒い。

「何時に集合とか決めていたのか？」

「えつとね……あと一時間？」

何故こんなに早く生徒会室に連れてきたのか。

ちなみに今楯無は一夏を生徒会室に連れてこようとしているところである。

さて、これから一時間どうするかと悩むクロウ。

まあ待つのは別に嫌いではないし、適当に本音と話して時間を潰そうかと考える。

「あ、そうさ。最近こんなの見つけたんだ」

本音はポンと手を合わせて、生徒会室の物置をごそごそと探る。

四つん這いで探していて、尻がクロウに向けられている。

スカートがめくりあがって中身が見えていて、肉付きの良い尻にきゅつとショーツが張り付いている。

クロウはそれを見てうんうんと頷く。

もう反応がおっさんである。

「じゃ〜んっ」

につこおつと笑って本音が見せてきたのは、ナース服。

白衣の天使さん。

「……………」

クロウはそれを見て、夏休み中に某科学者と過ごした時間を思い出す。

確かその時もナース服だったような…………。

「…………何故そんなものが？」

「う〜ん…………わからないけど、多分楯無お嬢様の私物だと思う〜」

たてなし。

そう言えば最近初めてをしたばかりなのに、やたら性に貪欲な彼女はコスプレにも興味を持っていたことを思い出す。

彼女の部屋を調べれば色々と出てきそうだと考えるクロウ。

實際彼女のクローゼットの中には警察官の制服やブルマやらスクール水着やら多々入っていたりする。

「ねえねえ、これ着てあげようか？」

「うむ」

頷く速度がとてつもなく速かった。

あまりの素早さに本音は細い目をぱちくりとさせるが、その後満面の笑みになって奥のほうへと行った。

大好きなクロウに求められると嬉しいのだ。

そうして本音が奥にいつて数分後、まさに天使が現れた。

「ど、どうかな？」

頭にのせたナースキャップ。

制服の上からではわかりにくいだが、意外と豊満な肉体を白い羽衣が覆っている。

このナース服はやけにスタイルを強調していて、Dカップの本音の胸もぷりんと前に突き出ていた。

スカートは極端に短く、あと少しでむっちりとした尻が見えてしまいそうだ。

脚にはニーハイソックスを履いていて、何とも言えない絶対領域に唾を飲み込む。

本音は普段は見せない、少し不安げな表情でクロウを窺っていた。

「——すばらしい」

グツと親指を立てて本音をほめたたえる。

このナースに看護してもらえるのなら大怪我することさえいとわない。

「えへへ〜♪」

クロウに褒められて、満面の笑みを浮かべる本音。

彼女の笑顔を見るだけで世界中から戦争がなくなりそうだ。

「ちらりずむ〜」

ぴらぴらと短いスカートを、見えそうで見えない境界を保ちながらクロウに魅せつけ

る。

もうクロウは堪りません。

クロウは立って本音の後ろに行くと、柔らかい胸を鷲掴みにした。

「……お姉ちゃんにばれちゃうかも〜」

「それはそれで興奮するのだろうか？」

「し、しないよ〜」

どうやら本音は抵抗するつもりはないらしい。

最も、一時間も集合時間より早くクロウを連れてきたのは、こういう意図があったこ

とも否めない。

まあ一緒にゆっくりと時間を潰すのもよかったのだが、それは夏休みの間さんざんした。

勿論性交も充分したのだが。

「ひゃんっ!? 耳はダメだよ〜」

ねっとりと本音の耳を舐める。

それこそ、耳たぶから穴までも。

「ん、ちゅっ」

ペロオ……と舌を押し付け合う二人。

しばらく絡み合わせた後、チュツチュツと触れ合うだけのキスを交わす。

本音は幸せそうに頬を緩め、赤く染めていた。

ナース服越しにフニフニと胸を触ると、クロウの制服をギュッと摘まむ。

「レロレロ……チュパチュパ」

本音はクロウのズボンを脱がせると、跪いて固い男根を舐めはじめる。

亀頭だけを舐めた後、そこを口に含んで唾液を塗りたくる。

カリ首をペロペロと舐めていたと思ったら、喉奥まで男根を飲み下す。

「うまくなつたな」

「ジユプジユプ……全部クーが教えたんでしょ〜」



頭を撫でてそう褒めると、本音は男根から口を離さないまま頭を大きな掌にこすり付けながら答えた。

本音はそれからもクロウに教え込まれた性技を存分に使った。

「んぶっ、ふーっ、ふーっ」

横から陰茎を舐めまわす。

男根を舐めているにつれ、本音の息もだんだんと荒くなっていく。

陰囊を口で捕まえ、レロレロと舐める。

「んっ、んっ、ぐぶっ」

陰囊から亀頭に戻り、そこに舌を這わせる。

夢中になっていると、身体も前のめりになっていく。

そうするとDカップの乳房が男根に押し付けられて、口淫とはまた違った快樂をもたらず。

「ぶはっ……えへへ、バッキバキ〜♪」

口を離し、手で男根を擦る。

ぶにぶにと柔らかい掌でこすられて、男根から強い快樂が送られてくる。

「次は……ジャ〜ン！」

「おお……」

本音がしたことに、思わずクロウは声を漏らす。

彼女はナース服の下乳部分のボタンを外すと、そこから男根を挿入したのだ。上のボタンも一つ外すと、ナース服を着たままのパイズリが完成した。

ムギユツと全方位から強い乳圧をかけられる。

「んっ、んっ」

クロウはナース服の上から乳首の上を探して、そこをキュツと摘まんだ。

本音は乳首を摘ままれながらも、乳房を上下に動かす。

そして巨根ゆえに乳房から飛び出した亀頭の部分をはむつと口に含んだ。

むにゆむにゆむにゆと乳肉の波にのまれる男根。

ぎゅううううつと横から乳房を寄せると、強い圧迫感が男根を襲った。

クロウは乳房を鷲掴み、自分から腰を動かさず。

にゆぼにゆぼと男根が谷間から顔を出したり沈めたりとせわしない。

「そろそろ射精すぞ。舌を出せ」

「は〜い♪」

本音の乳房に腰を打ちつけながらそう言うと、本音は嬉しそうに笑って舌を出した。

それを確認するとクロウは乳の谷間から男根を引き抜き、本音の顔に向かって精液をぶっつけた。

勢いよく飛び出したそれは舌だけではなく顔中に、さらには髪にまで飛び散っていた。

「んはあ……レロレロ」

精液と唾液で汚れた男根を、舌で清める。

顔に飛び散った精液も口に入れて、その味を愉しむ。

クロウはそのあとナース服を手際よく脱がせていった。

夏休みの間、うさぎさんと戯れていたときに得た技能である。

しかしナースキャップとニーハイソックスは脱がせない。興奮するから。

「随分と濡れているな。まだ胸だけだぞ？」

「んんんんんっ!!」

縞パンの上から、陰部を指でクチュクチュと弄る。

大量に分泌されていた愛液は、縞パンにじつとりと染み込んでいた。

Dカップの乳房を驚掴みにしながら、陰部を手で愛撫する。

手を離すと、手には大量の愛液が付着していて、陰部は縞パンの上からでもピクピク

と震えていることがわかった。

「あっ、あっ」

今度は縞パンの上から、男根で陰部を刺激する。

所謂素股である。

陰部にぐいぐいと押し付けられたので、縞パン越しにも陰部の形と陰核の位置が分かかった。

「ほら、本音。おねだりをしてみる」

素股を続けたまま、クロウは本音の耳元でそう囁く。

顔に流れる汗を、舌で舐めとる。

本音はクロウに言われた後、縞パンを脱いで大股を開き、言われた通りおねだりをした。

「ここに大きくて太いお注射してください」

恥ずかしがりながら、必死に笑顔を浮かべる本音。

自分で秘裂を開き、ヒクヒクと男根を求めて蠢く腔内を見せつける。

クロウの頭の中で、何かがプツリと切れてしまった。

「ふああああああつ!!」

男根を腔奥の子宮口まで押し込む。

腔内はその衝撃で、キュンキュンと痙攣する。

本音は背をグツと反らせ、ガクガクと小刻みに震えた。

「んああああああつ!!」

何度も出し入れすると、愛液が掻き混ぜられて泡立つ。

ブヂュブヂュと厭らしい水音が、生徒会室に響き渡る。

顔を近づけ、舌を絡み合わせる。

熱い吐息がクロウにかかる。

「んっ…んくっ…んっ…んっ!!」

舌を絡め取り、それを吸い上げる。

そうすると本音はうまく嬌声を上げることができなくなり、くぐもった声をもらす。

その間も腰は激しく振られ、本音に快楽を送り続ける。

密着した乳房が潰れて、形を淫猥に変えた。

「あっ…あっ…あっ…あっ!!」

キスを止めて身体を離す。

厚い胸板に押しつぶされていた乳房が解放され、大胆に揺れ動く。

男根を陰部から引き抜くと、ピュツピュツと少し潮が噴き出た。

クロウは本音を四つん這いにし、後ろから激しく男根を突き入れだした。

「はっ…はっ…はっ…あふっ!!」

まるで犬のような息を漏らす本音。

ズパン！ズパン！と、柔らかい尻肉に激しく腰がぶつかる。

愛液が地面にボタボタと落ちる。

本音は舌をだらしなく伸ばし、クロウから与えられる快樂に夢中になる。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

豊かで触り心地が良い尻肉を鷲掴みにしながら、腰を振りたくる。

後ろからだど、秘部に男根が出入りする厭らしい光景も恥ずかしい部位である尻穴も丸見えだった。

Dカップの乳房も、盛大に揺れ動く。

「ん~~~~つ……んおつ！！」

口を堅く引き締めて、嬌声が漏れないようにする。

しかし乱暴に男根を突き入れられると、思わず恥ずかしい声ももれてしまった。

子宮を押し上げるほど男根が奥まで突っ込まれる。

ポタポタと汗や愛液などが地面に垂れ落ちる。

クロウはぐったりとしている本音の身体を抱きかかえ、背面座位の体位に変える。

「んあああああああつ！！」

大きく股を開かせて、奥へ奥へ突き入れる。

本音自身の体重もあつて、かなり奥へと入り込む。

陰核を指で弄ると、プシヤツと潮を噴いた。

「ふっ……ふっ……」

目をぼんやりとさせ、力が入らなくなる本音。

クロウに胸を揉まれてキスをされてもされるがまだだった。

「んああっ！おっぱい気持ちいいよおおっ!!」

ギュツギュツと乳首を摘まみ、男根を押し込んでやると獣のように喘ぐ。

乳首を摘まんで形が変わるほど引つ張つてやると、膣内をキュンキュンと締め付けてくる。

「あああああああっ!!」

子宮口をこじ開けて、そこから射精する。

本音は柔らかい肢体をビクンビクンと震わせて、膣内を満たしていく精液を感じる。

大量に精液を吐き出した後男根を引き抜くと、秘部は穴をあけたままパクパクと蠢いた。

その穴からは多量の白濁液が逆流してきていた。

「んっ、はああ……」

本音がぐつと力を入れると、膣内に満たされている精液がビュツビュツと飛び出してくる。

放心状態でその様子を眺めている本音をよそに、クロウは彼女の乳房に男根をぬるぬ

ると塗りつけていたのだった。



「あら？何か変な匂いがしない？」  
「そ、そんなことないと思うよ、お姉ちゃん」





その後楯無に連れられて来た一夏は、彼女からの指南を渋っていたものの勝負に負けたのでそれを受けることにした。

なお、真剣を持った日本人少女に襲撃された模様である。

## 番外編 二人ノさんたくろーす

十二月二十四日。

世間というクリスマスイヴである。

恋人のいる者はこの夜愛を深めるために励み、子供はサンタクロースからのプレゼントに胸を躍らせながら眠りにつくだろう。リア充爆発しろ。

さて、このIS学園でも当然クリスマスイヴはやってくる。

皆それぞれ親しい友人と集まって飲んだり食ったりして騒いでいる。

「……暇だな」

しかしクロウ・ミキストリは部屋で一人、することもなく暇を持て余していた。

それはもう一人の男子生徒である織斑 一夏も同じくである。

クロウはともかく、イケメンの一夏なら女子生徒に引っぱりだこのはずだ。それにクロウも一部からは人気がある。

では何故部屋に一人でいるのか。

「……千冬め、覚えておけ」

そう、IS学園教師、織斑 千冬の命令だった。

彼らがパーティーに参加すると、彼ら二人を巡って女子生徒たちは必ず争う。

そうすると学園の備品が破壊される恐れがあるので、今日と明日は部屋で過ごしなればならなくなったのだ。

「……寝るか」

本来ならお気に入りの女性と過ごしそうと思っていたのだが、それもできないのなら起きていても仕方がない。

クロウは明日は何とかして脱出しようと考えながら、目を瞑ったのだった。



「……む」

コンコンコンと扉をノックされた音で目を覚ます。

チラリと時計を見ると、今は午前二時だった。

自室まで届いていた生徒たちのはしやぐ声も静かになっている。

こんな時間に誰が来たのだろうか？

そんな疑問を浮かべながらクロウは扉を開けた。

「メ、メリークリスマス！」

「ですわー！」

扉を開けたと同時に目に入るのは、可愛らしいサンタクローズ二人だった。

「……どうした？ シャルロット、セシリア」

サンタクローズに扮していたのは、クロウのお気に入り女性のシャルロット・デュノ

アとセシリア・オルコットだった。

二人とも肩から胸元を露出させたサンタ服を着用している。

そのサンタ服はスカートも一緒になっていて、丈もかなり短いので染み一つない二人の太ももを魅せつけてくる。

シャルロットの専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムⅠⅠの待機状態である十字型ネックレスが、胸の谷間に挟まっている。

後ろで金髪を一つに束ねている布も、サンタに合わせてか赤色だ。

セシリアも同じサンタ服で、シャルロットより少し深い谷間を魅せつけてくる。

蒼いヘアバンドも、今は赤色だ。

そして二人とも赤色の二―ハイソックスを履いていて、絶対領域を作りだしている。

シャルロットは少し恥ずかしげに、セシリアは満面の笑みでクロウにクリスマスを祝った。

「――似合っているぞ、二人とも」

何故こんな時間に来たのかと問いかけたかったが、まずクロウは二人を褒めた。

流石は美女美少女ばかりを待らせている男だ。女心を理解している。

「そ、そうかな？ えへへ、ありがとう」

「ふふ、少し恥ずかしいですわね」

クロウの褒め言葉に、シャルロットはにへらとだらしない笑みを作り、セシリアは頬を少し赤らめながらも嬉しそうに微笑んだ。

「まあ部屋に入れ」

クロウはそう言って二人を部屋の中へと誘った。

廊下に暖房はついておらず、あんな薄着では寒かっただろう。

そう考えた結果の行動だった。

いや、けしてやましい思いを持っていたわけではない。けして。

「で、どうしたんだ？その恰好は」

クロウがそう尋ねると、二人は話し始めた。

「せっかくのクリスマススイヴですのに、クロウさんと過ごせないのが納得できなかったんです」

「だから僕たちは皆が寝静まったこの時間に、クロウに逢いにきたんだ」

ちなみにこのクロウの部屋に行くことで、鈴やラウラと激しくもめたのは秘密である。

皆クロウの部屋に行きたかったのだが、大勢で行き過ぎると超人・織斑 千冬に見つかってしまう可能性があったので断念せざるを得なかった。

「あとね、プレゼントもあるんだ」

「ごっそそとしてシャルロットが取り出したのは、小さな箱だった。

シャルロットが開けてほしそうにもじもじと見ていたので、箱を開けてみる。

「ほう……指輪か」

中に入っていたのは一つの指輪だった。

勿論結婚指輪のような大層なものではなく、カップルが買うような二つで一つの指輪だった。

「僕のとお揃いなんだ。その……嫌だったかな？」

人差し指にはめた銀の指輪を見せるシャルロット。

その顔は不安そうで、うつすらと目に涙が溜まってさえた。

「いや、嬉しいぞ」

クロウは指輪を取り出し、人差し指にはめる。

大きな指をしているクロウだが、指輪は入らないなんてことなくすっぽりと入った。

クロウのことなら何でも知っていきそうなシャルロットは、指の大きさもしっかりと把握していた。

「ありがとう、シャルロット」

「……えへへ」

頭を優しく撫でると、幸せそうに笑った。

幸せを与えるサンタクロースだが、今は幸せを受け取っていた。

「そうだな、お返しもしないといけないな」

クロウはそう言って立ち上がると、ベッドの方へ向かって行った。

どうしたのかとシャルロットが首を傾げていると、クロウは何か大きなものを抱えな

がら戻ってきた。

「どうしたの？それ」

「私からお前へのプレゼントだ。受け取ってほしい」

大きな箱を地面に置き、それをプレゼントだと言う。

それを受けてシャルロットは嬉しそうに破顔した。

「これ僕の!?!ね、ねえ、開けてもいい!?!」

「勿論だ」

シャルロットはクロウの許可を得てわーいと箱を開封しはじめた。

そして箱を開けた時に出てきたのは、大きな大きな熊のぬいぐるみだった。

「わー！熊だあー！」

ぬいぐるみにギョツと抱き着いて喜びを表すシャルロット。

外面は無表情だが、心の中では喜んでもらえるか意外と心配していたクロウは、彼女の喜びように安堵する。

乙女趣味の強いシャルロットにぬいぐるみを上げたのは正解だったようだ。

「ありがとう、クロウ」

シャルロットの心からの笑顔に、クロウは少し胸を高鳴らせる。

無論、顔に出すことはないが。



クロウとシャルロットは暖かい雰囲気にも包まれる。

しかしここにはそれに納得できない者もいた。

「んんっ！クロウさん？わたくしもプレゼントを持ってきましたの」

わざとらしく咳をして注意を引き、少し引きつった笑顔を浮かべるセシリア。

そんな笑顔でも絵になっている。

良い雰囲気を破壊されたシャルロットは、少し不満そうだ。

「むう……もう少しあの雰囲気のままでもいいじゃないか」

「(わたくしが空気とかありませんわ！)」

目だけで会話する二人。

二人の仲がいいからこそできる芸当である。

「クロウさん、わたくしのプレゼントも受け取ってください」

そう言つてセシリアは紙に包まれたものをクロウに差し出す。

セシリアに了承を得て、クロウはその包みをはがした。

「これは……財布だな」

出てきたのは、黒い革の財布だった。

「ええ、クロウさんは財布を持ち合わせていらつしやらないので……」

「そうか、これはありがたいな。大切に使用させてもらおう」

「はいっ」

セシリアはにっこりと笑う。

彼女の笑顔は、この瞬間世界の誰よりも美しいといえるものだった。

「ではお返しだな」

そう言うときクロウは机の引き出しを開けて、何かを取り出す。

彼が歩いてくるのを、セシリアはワクワクしながら大人しく待っていた。

まるで忠犬である。

そんなセシリアに、クロウはクリスマスプレゼントを渡した。

「これは……チケットですよ？」

クロウのクリスマスプレゼントは、オーケストラの鑑賞券だった。

「うむ、その日に一緒に行けたらと思ってな」

簡単に言えば、デートのお誘いである。

プレゼントでこれはどうかと思うが、セシリアからすれば嬉しいプレゼントに変わ

なかった。

なにせ自分と同じ位魅力的な女性が常に侍っているクロウと、二人きりでデートでき

るのだ。

まさに天にも昇るほど幸せだった。

「ありがとうございます！わたくし、目いっぱいおしやれしますわ！」

セシリアがおしやれすると、とてつもなく可愛らしくなるに違いない。

彼女自身のセンスもいいし、もし酷い場合は彼女のメイドであるチエルシーが止めてくれるだろう。

「え、セシリアいいな。ねえクロウ、僕も二人きりでデートがしたいな？」

「ちよつとシャルロットさん!？」

クロウの目の前でギヤアギヤアと騒ぎ立てるサンタクローズ2人。

賑やかなクリスマスも悪くないと思いつながら、彼女たちを優しく見つめるクロウであった。



なお、クリスマスプレゼントをもらったことを直接聞いた鈴とラウラ。

更識家の情報網を使ったのか、それを知った楯無と簪。

幸せそうにしていたシャルロットとセシリアからじんも…して聞き出した千冬と、それを千冬に聞いた真耶。

何故か知っていた束が、次々にクロウの部屋にサンタのコスプレをしてやってきたのは余談である。

もう一つ余談だが、セシリアとシャルロットそれぞれのデートは、実にうまくいった。シャルロットとのデートの際、指輪が左手薬指にはめられていたりした。

## 番外編 内気な少女と初詣

あけましておめでとうございます。

一月一日、日本で最も交わされるであろう挨拶である。

「あけましておめでとう……」

「うむ、おめでとう」

それはクロウと簪の間でも交わされた。

クロウは普段着だが、簪はいつもの私服ではなかった。

青を基調とした和服を着ていて、桜の花びらの模様が取り入れられている。

頭にも桜をかたどった青い髪飾りをさしている。

「よく似合っているぞ、その和服」

「あ、ありがとう……」

クロウは心からの本心を告げて簪を褒める。

簪も褒めてもらって嬉しく、頬を少し紅潮させて興奮しているのが分かる。

「よし、では行くか」

「うん……」

自然に二人は手を握り合い、指を絡ませ合う。

2人が向かったのは、当然初詣である。



「凄い人……」

思わず簪は頬を引きつらせてしまう。

近くの神社に来てみたのはいいのだが、やはり多くの参拝客がいた。

人ごみが苦手な簪にとっては、まさしく地獄である。

それにせつかく姉におめかししてもらったのに、それが崩れてしまうのも嫌だった。だがここまで来て参拝しないというのは嫌だ。

「ふむ……手を離すなよ、簪」

「う、うん……」

ギョツと優しく、しかし力強く手を握られて安心感を覚える。

簪も小さな手でギョツと大きな手を握り返した。

そうだ、近くにこんなにも頼れる男がいるのだ。

それにクロウと一緒になら、なんでもできると思える。

「よし、行くぞ」

「うん」

そして二人は人が込み合う境内に入って行ったのだった。



「むぎゅっ」

簪は早速人ごみに押しつぶされそうになっていた。

一般の女性から見ても小柄な彼女は、色々な人間に押しつぶされそうになる。

何とか脱出しようとするが、自分の非力な腕力では人を押しつけることもできない。

「(助けて……クロウ……)」

彼女が自分ではどうにもできないと悟って助けを求めたのは、クロウだった。

人ごみに揉まれてもけして離さなかった手をキュツと握る。

すると先ほどまで感じていた圧迫感がふっと消えた。

「大丈夫か、簪?」

助けてくれたのはクロウだった。

簪を引き寄せて、自分の身体で守ってくれているのだ。

自分を見降ろしてくるクロウを彼の胸の中で見上げると、キュンと胸が締め付けられた。

「あ、ありがとう……」

「ああ」



簪はドキドキと高鳴る胸を押しえて、必死に鼓動を沈めようとする。

クロウと密着しているので、胸の高鳴りが聞こえてしまわないだろうかと心配する。

和服は分厚いので聞こえるはずがないのだが、簪の高鳴りはそれを飛び越えてしまい  
そんなほど大きい。

「わ、わわ……」

頬に手を当てると、寒い一月の外気に対抗するように熱かった。

これほど熱いだから、おそらく真つ赤に染まっているだろう。

それをクロウに見せないように、顔をクロウの腹に押し付ける。

「あつ、これもダメ……」

しかしそうすると、今度はクロウの匂いが鼻孔を満たした。

嗅いでいるだけで安心して、この世で最も好きな匂いを嗅いで、簪は思わず脱力して  
しまいそうになる。

抱き着けば匂いでやられ、離れば真つ赤な顔を見られてしまう。

最早簪にはどうすることもできなかつた。

「着いたぞ、簪」

「……ふえ？」

どうやら抱き着いているか離れるかと葛藤している間に、賽銭箱の前まで連れてきて

もらったらしい。

簪はぼつと顔を赤らめて、クロウから離れた。

「さて、賽銭を入れるか」

「うん……」

簪は財布のなかから五百円玉を取り出し、賽銭箱に入れた。意外と奮発した。

ふんすつと何故か鼻息荒くなりながら横のクロウを見ると、諭吉が一枚賽銭箱に消えていつていた。

「……え？そんなに入れるの？」

「まあ一年に一度だしな」

目をパチクリとさせてクロウを見るが、いつも通りの無表情だった。

彼の銀行口座にはあるウサギから毎月目玉が飛び出るような額の金が振り込まれているので、資金は有り余っているのだ。

「ほら、願い事を心の中で言え」

「うん……」

知識として再拜二拍手一拜は知っているが、これだけの参拝客がいるの中でそれをするのは迷惑かと思い、手を合わせてお願いすることにした。

「(クロウとずっと一緒にいれますように……あとお姉ちゃんと……)」

おまけ扱いされている楯無だが、一時期氷河期のように冷え込んでいた姉妹関係がこれほど改善されている。

姉バカがいれば狂喜乱舞して簪に抱き着いているだろう。

「さて、ではおみくじでも引きに行くか」

「うん……」

簪のお願いが終わったことを見て、クロウがそう提案した。

簪も素直にうなずき、また手をつないで歩いていく。

諭吉を一枚使つてまでかなえない願ひ事が何か気になる簪だったが、尋ねるのも無粋と考え聞くことはしなかった。

まさにクロウと神のみぞ知る処である。

「二人分だ」

おみくじ売り場に着いたクロウは、さっさと二人分の代金を払つてしまう。

慌てて自分の代金を払おうとする簪だったが、クロウに止められて渋々やめた。

こういう所も格好いいと考えてしまう簪であった。

「はい、ではこちらをどうぞ」

巫女に御籤棒が入った角柱を渡される。

クロウは巫女服もいいなと不純なことを考えていたりした。

それから二人は角柱を振り、御籤棒に書かれていた番号を巫女に伝える。

そうすると巫女は番号の着いたみくじ箋を二枚持つてきて、それぞれクロウと簪に渡した。

「吉……」

簪の運勢は吉だった。

良い点では、簪の願望が叶うとされていた。

それを見て簪は大いに喜んだ。

「家族に注意……?」

悪い点としては、家族の行為によつてとても疲弊するとあった。

簪の頭の中では、扇子を持った姉の姿が浮かんでいた。

「クロウはどうだった……?」

「ふむ……」

関係の深い自分にしかわからないが、無表情の中に少し自慢げなものが含まれていた。

突き出してきたみくじ箋を見ると、そこには大吉の二文字が書かれてあった。

「すごい……」

「ふっ……」

手をパチパチと叩いて純粹に褒める簪と、それを受けて少し誇らしげなクロウの姿があった。

「簪、次は絵馬を書きに行くか？」

「うん……」

少しして簪からの称賛に満足したのか、クロウはそう話しかけた。

簪はみくじ箋を木の枝に結び付けると、トテトテとクロウに駆け寄った。

そしてまた2人仲良く手をつなぎ、絵馬の売り場へと歩いていく。

「絵馬を二つくれ」

「はい」

売り場に着くと、クロウが巫女にそう言う。

また代金を出そうとしたので、簪は素早く自分の分を払った。

流石日本の代表候補生、学習が早い。

「(今度はなにを書こう……?)」

絵馬を渡され、何を書くか悩む簪。

先ほどは神様に『クロウとずっと一緒に』とお願いした。

なら同じことを書くのはやめとこう。

「(ちよ、ちよと恥ずかしいけど……)」

思いついたお願い事を、すらすらと書き込んでいく。

綺麗な字で書きこまれた絵馬を見て、自分が恥ずかしくなってしまう顔を赤らめる。「何を書いたんだ?」

「だ、ダメっ」

ひよいと覗き込んできたクロウに気づき、バツと絵馬を隠す。

願い事を書いた面を胸に押し付け、絶対に見えないようにする。

そんな反応をする簪に無理やり見せるように言うクロウではない。

それ以上追及することなく、二人で絵馬を掛けに行つた。

「さて、では神社から出てデートをしようか」

「う、うん……」

改めて言われると恥ずかしくなってしまう簪。

絵馬を掛け終わった二人は、身体を寄せ合いながら神社から出ていった。

2人が出て行つた後に絵馬を掛けに来た人は、ある絵馬を見て微笑んだり嫉妬に狂つた顔をしたりと色々な表情をしていた。

『大好きなあの人と結婚できますように』

## 生徒会長カラカウ

「……お姉ちゃんが織斑　一夏に？」

「うむ」

IS学園生徒会長の更識　楯無が一夏の護衛兼教育を始めた。

彼女の妹で日本の代表候補生、更識　簪はそれをクロウから聞いて眉をピクリと動かし、

あまり表情が変わらない彼女だが、今は少し不機嫌そうだ。

簪は一夏のことをあまり良く思っておらず、なんだかんだいって大好きな姉が彼に力を貸すのに納得できないのだろう。

「……もしかしてクロウも？」

簪は自分よりはるかに背が高いクロウを、下から見上げて言う。





簪の専用機・打鉄式式のデータを簡単に見せることから、簪はかなりクロウを信頼していると見える。

まあ最近までISのことなどまったくわからなかったクロウにしてみれば、データを見せられても詳しいことはわからないのだが。

「では最後の調整段階ということか？」

「……うん、手伝ってくれる？」

「勿論だ」

今日も仲良くISを整備する二人。

整備しながらイチヤイチャしているとき、楯無は一夏を鍛えていた。



「うう………疲れた………」

楯無にしごかれた一夏は、廊下をフラフラとしながら歩いていった。まるで幽鬼のようだ。

半年前まではI Sのことなどほとんど知らなかった一夏は、楯無に教えられる技術は未知のものばかりだった。

しかし比較的仲のいい鈴やセシリアなどの代表候補生組は全員できると聞かされ、一夏は戦慄した。

それほど楯無の教える技術は難しかったのである。

「でも……頑張らないとな」

彼は福音との戦いで誓ったのだ。

仲間を守る強い力が欲しいと。

代表候補生組を守るなんておごりはしないが、同じくI Sについてあまり知らないであろう幼馴染のことは守りたい。

「でもしんどいなあ……」

訓練するのに自分が潰れてしまつては元も子もない。

今日はさつさと風呂に入って眠ることにしよう。

ちようど考えを終えたときに自室の前に着いた。

ガチャリと音を立てて扉を開けて中に入——。

「おかえりなさい、一夏くん。ごはんとお風呂、どちらにします?」

——ろうとしてゆつくりと扉を閉めた。

「(あるえ? おかしいな……今俺の部屋に美女が裸エプロンで待機していたような気が……)」

もしかしたら部屋を間違えていたかもしれない。

そうであれば部屋の人に土下座してでも謝らなければならない。

しかし表札を見ると、そこには自分の名字である織斑の文字がある。

「(じゃあ幻覚か? ははっ、疲れているからっていくらなんでも……)」

最早現実逃避である。

冷や汗をダラダラと流しながら、今度は中の様子を窺うようにそつと扉を開ける。

「……扉を開け閉めして楽しいの? 一夏くん」

「誰のせいだと思ってるんですか!」

バン! と扉を開けて自室に侵入していた女性に怒鳴り声を上げる一夏。

部屋の中にいたのは、自分を鍛えてくれている I S 学園最強の生徒、更識 楯無だつた。

いや、それはいい。自室に侵入されているのは甚だ遺憾だが、彼女ならそれくらいできるするだろう。

しかし大きな問題がある。

「な、何でそんな薄着なんですか!？」

そう、それは彼女の今の恰好である。

見まごうことなく、今の楯無の姿は裸エプロン。

白いエプロンにも負けないほど白く透き通った美しい肌を、大胆にも見せてくる。

男なら誰でも悩殺されてしまうであろう豊満な肉体は、そのエプロンを盛り上げていた。

楯無が少しかがむと、魅惑的な深い谷間が惜しげもなく一夏にさらされる。

「うふふ、一夏くんを狼さんにしちゃおうと思って♪（反応は上々……クロウも喜んでくれそうねっ♪）」

「なりませんよっ!!」

色気のある笑顔を向けられて、ドキドキと胸を高鳴らせる一夏。

楯無はこう言っているが、実際に一夏が狼になったらいつの間にか昏倒させられているだろう。

彼女が股を開くのは一人だけなのだ。

「でもざんねくん。下にはちゃんと水着を着ていましたよ」

バツとエプロンを脱ぎ去って、ピキニを纏った肢体を一夏に見せつける。

豊かに実った乳房は、ブラに無理やり押し込んだように窮屈そうに見える。キュツと括れた腰から下に視線をやると、肉付きの良い臀部がある。

プリツと張りのありそうな尻を見てしまい、一夏は思わず顔を赤らめる。

「一夏くん、そんなにジロジロ見ちゃダメよ？（水着の反応も良い……クロウ、楽しみにしててね♪）」

「み、見てませんよー！」

そう言い返す一夏だが、声はあまり大きくない。

他者からの好意に鈍感な一夏だが、勿論性欲は人並みにある。

目の前に絶世の美少女が、豊満な肢体を水着姿で惜しげもなく見せつけてくれるのだ。

チラチラと見てしまうのは仕方がない。

「……とところで何でいるんですか？」

「え？ 勿論一緒に住むからだけど？」

「……ええええええっ!?!」

嬉しいような嬉しくないような、なんとも不可解な気持ちになった一夏だった。



楯無が一夏と一緒に生活することになってすぐ後に、一夏大好きな篠ノ之 箒が部屋に来た。

一夏が美少女を連れ込んでいると勘違いした箒は、ISを部分展開して一夏を襲う。殺人未遂とか言っちゃいけない。

しかしそれは彼を守らなければならない楯無に阻止され、彼女の話術で丸め込まれた箒は大人しくなる。

その後楯無の人たらしぶりが発揮され、箒も彼女に指導を受けることになった。

「ねえ、一夏くん」

「何ですか、楯無さん」

現在は箒が部屋に帰り、楯無と一夏の二人きりの状態。

とびつきの美少女と一緒にいうことで少しドキドキしながらも、一夏は洗面台から楯無に返事した。

「マツサージできるんだよね？私にもしてくれない？」

「マツサージですか？別にいいで——ダメです」

歯磨きを終えて洗面所から出て、すつと無表情になつて言う一夏。

今彼の頭の中では、煩惱と理性が激しい戦鬪を繰り広げている。

何故なら楯無は魅惑的すぎる身体を、下着上下とワイシャツだけで包んでいるのだから。

「えー、何でよケチー」

「だったらちゃんと服着てくださいいよー」

不満そうに頬を膨らませながら。パタパタと脚を振る楯無。

そのたびにワイシャツが少しめくれて、薄紫色のショーツが見え隠れする。

「これもちゃんとした服じゃない」

「上はまだしも、下はダメでしょー！」

何故か楯無は言い合いのさなか、ワイシャツを鼻に持つて行つてクンクンと嗅ぐ。

するとほわあ……と幸せそうな恍惚としたような表情を浮かべる。

そんな大人の色気がある表情を見て、一夏は顔を赤らめる。

「とにかく服を着てくださいい！」

「仕方ないな（クロウは紫好きかしら？ああ……クロウの匂い……）」

一般常識のある一夏は、楯無に背を向けて見ないようにする。

いや、もう遅いかもしれないが。

「よし、もういいよ、一夏くん」

「は〜……最初から服着といて——」

やっと服を着てくれたと安心して振り向くと、一夏は固まってしまった。

彼としては普通のズボンを穿いてくれたと考えていたのだが、楯無が着用したのはスパッツだった。

大きく張り出した尻の形や、大人の下着なショーツの形がうつすらと浮かび上がっている。

一夏はゴクリと唾を飲み込む。

今日はよく興奮する日だ。

「な、なんでスパッツなんですか……」

「これもズボンよ？き、早くマッサージマッサージ♪」

「……………」

この日は辛くも理性が煩惱を打倒した。

だが一夏に多大な精神的ダメージを与えたのは言うまでもない。





そんなことがあつた翌日の昼休み。

皆それぞれ授業から解放された一時の休息を楽しむ。

各々仲のいい友人と食事をしたり、食堂に行ったりする。

「嫁、食堂に行くぞ」

「うむ」

ドイツ軍人のラウラ・ボーデヴィツヒも、自身が愛してやまないクロウを食事に誘う。誘い方が少し強引だが、彼女ほどの可愛らしさがあれば問題ない。

「おじやましまさず」

しかし扉から入ってきた楯無が、ラウラの邪魔をする。

楯無はいきなりの生徒会長登場に呆けている教室をスタスタと歩き、重箱をクロウの机に置いた。

それを見てラウラは目を鋭くする。

「……なんだ貴様は」

「ん？クロウのお嫁さん」

さらに空気が凍った。

平然としているのはクロウだけで、楯無とそういう関係になつていたことを知らなかつたラウラとシャルロット、セシリアなどは驚愕している。

他の生徒たちは美人生徒会長と筋骨隆々野獣男の關係にキヤアキヤアと騒ぎ始める。

「せ、生徒会長もミキストリくんの毒牙に!？」

「許せない!生徒会長は私のもなのなのにいいいっ!」

「誰か!この奇行種を止めて!」

「誰に手え出そうとしてんだ阿婆擦れえっ!!」

「ぐへえっ!」

「鷹月さんが壊れた!？」

騒ぎ始めると止まらないのが女子高生である。

「ほら、シャルロットちゃんとセシリアちゃんもこつちに来なさい」

来い来いと二人を招く楯無。

どういふことか情報もほしいので、大人しく言うことに従う二人。

シャルロットとセシリアは一夏の訓練で、楯無に『円状制御飛翔』サークル・ロンドを見せてあげてと頼まれたので、彼女との面識は一応ある。

しかしまさか彼女がクロウのお気に入り女性の一人だったとは……。

「(あれ?別に不思議でもなんでもない?)」

察しの良いシャルロットはなんとなく感じていたようだ。

結局クロウの周りに集まったのは、重箱を持ってきた楯無にクロウを誘ったラウラ、それを羨ましそうに見ていたセシリアとシャルロットだった。

ちなみに一夏は筈と一緒に食堂である。

「じゃ〜ん。どう?クロウ」

「ほう、これは美味そうだ」

「でしよう?おねーさん、頑張ったんだから」

楯無の重箱の中身を見て、クロウは感嘆の言葉を漏らす。

中身は伊勢海老などの高級食材や、卵焼きなどの和食がたくさん詰め込まれていた。

どれもこれも良い匂いがする。

この中で唯一料理ができると言っているいいシャルロットも、思わず怯んでしまうほどのものだった。

「はい、あ〜ん」

楯無はまるで三人に見せつけるように、クロウに卵焼きを突き出す。

クロウも別に拒むことなく、それを食べる。

「うむ、美味しいな」

「そうでしょそうでしょ。はい、もう一つどうぞ?」

その後もはい、あくさんが繰り返し返される。

セシリアたちもやりたいのはやまやまなのだが、流石に他人がつくってきた料理を食べさせてあげるといふのは気が引ける。

「くっ、なんなんですかこの方は!」

「……………」

「ら、ラウラー! そのサバイバルナイフを下ろして!」

「……………ふん」

悔しそうにこちらを見つめてくる三人に、楯無は勝ち誇った笑みを浮かべる。

原因であるクロウは何もせず、ただ楯無の弁当を堪能したのだった。



「ああ……風呂つて素晴らしい……」

熱いシャワーに身体を打たれながら、一夏はゆつくりと息を吐く。

彼は疲れていた。

楯無にからかわれるとドキドキさせられるし、それを箒に見られると何故か I S を部分展開させて襲い掛かられるし……。

違う意味でドキドキさせられるのだ。

I S の訓練は意外と厳しく、肉体的にも精神的にも疲労する。

勿論楯無の訓練は疲れるだけではなく、実力が上がっていつていることも実感できている。

「楯無さん、いつもからかってくるけど実力は凄いな……」

アメリカとぶつかり合えるほどの実力を持つ、世界でも数少ない列強のロシア。

その国家代表なのだ。実力も相当のものだ。

「俺も頑張つて……」

箒や千冬姉を守るように……。

ふんすつと気合を入れなおす一夏。

とりあえず身体を洗おうとすると……。

「お背中お流ししましょうか?」

「うおおおつ!」

聞こえるはずのない声に尋ねられ、思わず悲鳴を上げてしまう一夏。

いや、本当にここにいるはずがないのだ。

「ここは浴室なのだから。」

「な、なんで入ってきているんですか、楯無さん!」

「いや、親睦を深めようと……」

「他になにかなかったんですか!」

チラリと楯無を見て前を向く。

彼女は全裸で入って来たのではなく、ちゃんと着ていた。

スクール水着だが。

「(うお……すげえ……)」

スクール水着は、楯無にとつては男殺しの強力な武器になっていた。

大きく張った胸は『たてなし』とひらがなで書かれた文字を歪めていた。

安産型の大きな尻にキュツと張り付いていて厭らしい。

「いやん、そんなに見ないでよ」

「す、すみません。……いや、それより出て行ってくださいよ!」

くねつと身体をねじって一夏を咎める楯無。

そのせいで柔らかかそうな胸の部分が揺れて、一夏の股間に熱を持たせる。

「(うおおおつ!まづいつ!静まってくれえつ!!)」

自分のいきり立ったモノを同じ年頃の異性、しかもそれが美少女となればバレると死ぬほど恥ずかしい。

なんとか大人しくなってくれと祈る一夏だが、背中にむにゆりと大きな乳房をスクール水着越しに感じてさらに固くさせてしまった。

「ふむふむ」

「ちよっ……なにジロジロ見てるんですか!」

「あはっ、ご立派ね(あれ?なんかクロウと全然違うんだけど……個人差があるって本当だったのね)」

今楯無が思っていることが口に出されたら、一夏は膝から崩れ落ちるだろう。

それからすぐに、楯無は顔を真っ赤にした一夏に浴室を追い出されるのであった。



「んっ！んっ！んっ！んぐうっ!!」

楯無と一夏がじゃれ合っているころ、クロウと簪もじゃれ合っていた。

勿論ベッドの上である。

ベッドのスプリングがきしみ、ギツギツと音がする。

簪の膣内に、ドクドクと精液が注ぎ込まれる。

手と手を合わせて、指を絡め合わせる恋人つなぎをして離れないようにしている。

「はぁ……はぁ……」

男根を抜き取ると、ドロリと精液が漏れ出す。

膣内から溢れたそれは、尻の間を伝ってシーツに零れ落ちる。

「……またたくさん射精た」

「お前の身体が良いからな」

「……………」



汗を身体中に浮かび上がらせ、荒い吐息をしながら自分の体内に大量にある液体を感じる簪。

クロウの普通なら言えない恥ずかしい褒め（？）言葉に、簪は顔を真っ赤にさせて無言のままクロウをぽかぽかと叩いた。

陰部からはまだ精液が漏れ出している。

「ほら、いつものをしてみろ」

「……うん」

クロウが精液と愛液で汚れた男根を顔の前に突き出すと、簪はそれを舌で清めはじめた。

もうすっかりと調教されている。

まず最初に陰茎にへばりついた精液を舐めとる。

その後は亀頭にキスをするように口をつけ、尿道に残っている精液を吸い出す。

それを口の中でクチュクチュと混ぜて、味を愉しんでから飲み干す。

そして最後に亀頭をペロペロと舐めて、清めて終わりである。

「きれいになった……」

「うむ、ありがとう」

そうやって頬をさすると、嬉しそうに摺り寄せてくる。

もう完璧に調教されていた。

メイド服でも着せたらすごく似合うだろう。

「簪の専用機も完成したしな……おめでとう」

「それは……みんなのおかげ……」

クロウの言葉に、簪は照れから視線を下に向けて言う。

そう、今日簪の専用機・打鉄式は完成したのだ。

ついに簪は姉と同じ偉業を成し遂げたのである。

勿論実践はまだなので無邪気に喜べるわけではないが、それでも凄いのだ。

「これからはお前に背を預けられるな」

「……うんっ！」

ずっと簪は、クロウと楯無の隣に立ちたかった。

今クロウに背を預けられると言われ、簪の夢はかなったのだ。

思わず目に涙が溜まるが、けして流さない。

「と、とにかく服を着ないと……」

「む、そうか……」

自分が全裸で、それをクロウに惜しげもなくさらしているのを思い出して、頬を赤らめながら慌てて立ち上がる簪。

クロウは少し残念そうな声をもらす。

「…………可愛い」

簪は重症だった。

まあとにかく簪は立ち上がり、ワイシャツを拾い上げた。

「んひうつ!？」

「む、どうした？」

ワイシャツを着ようとしていた簪が、ビクッと身体を震わせる。

いきなりの嬌声に、クロウも視線を向ける。

「い、いっぱい膣内なかで射精だされたから……………また垂れてきた……………」

尻を少し突き出してどうなっているかクロウに見せる。

するとそこには白い液体が陰部から垂れて、太ももを伝っていた。

「(勿体ない…………)」

一般女性なら嫌がる精液は、クロウのものとなれば簪にとつてはとても大切なものになる。

垂れた精液を手ですくい、膣内に戻そうとする。

しかし当然戻りづらく、くちくちと自慰をしているようにしか見えない。

「ふむ……………それなら栓をしてやろう」

「…………ふえ？」

良い顔をして、ポンと簪の肩を叩くクロウ。

簪はクロウの顔を見ていないが、とてつもなく嫌な予感がした。

「んいつ!？」

やっぱりと簪は心の中で思う。

先ほどの簪の行為で完全復活した男根を、陰部にニチニチとこすり付けられたのだ。

「ふああああつ!!」

そしてゆっくりと男根を膣内に挿入された。

男根がすべて膣内に入りきると、簪の身体がガクガクと震える。

先ほどまで散々絶頂に追いやられているので、身体も敏感になっているのだ。

「んっ、んっ、あつ、くっっ!」

後背位から突かれる。

それほど肉付きが良いわけではないが、張りのある尻は腰が当たっても気持ちいい。

ぱんっ…ぱんっ…と小さく音が鳴る。

「うあつ、くっ、はっ!だ、ダメ…………!」

「ダメなものか。身体はすっかりとその気になっているぞ」

パンパンパン!と腰の動きが激しくなるにつれ、音も大きくなる。

クロウの言っている通り、すっかり開発されてしまった簪の肉体は、彼から送られる快楽をしつかりと受け取っていた。

飛び散った愛液が、太ももに付着している。

「あうっ、あつ、はあっ！」

快楽を得やすいようにと分泌された愛液は、男根にかきまぜられてグチュグチュと卑猥な音を奏でる。

「んいっ！あつ！はっ！あんっ！！」

手を回して乳房を愛撫すると、嬌声の質が少し変わった。

Bカップの小ぶりの乳房を握り、乳首をコリコリと弄る。

張りがあつて形の良い乳肉も揉んで快楽を送る。

「あつ！あつ！んっ！んうっ！！」

ずっずっずつと小刻みに膣内を抉る。

膣内に溜まっていた精液と愛液が混ざった液体が、地面にべちやべちやと落ちる。

簪の足は爪先立ちになり、小刻みに震える。

「だめえ……せつかくいっばい入れてもらったのに……はっ……全部漏れちゃう……はっ  
！」

荒い吐息を漏らしながら、先ほどの行為で膣内に注がれた精液の心配をする。

そんな簪に構わず、クロウは腰を振りたくる。

舌を出して、だらしなく喘ぐ。

「ふむ……ならばまた大量に注ぎ込めば問題ないな」

「ひああああっ!!」

片足を持ち上げ、男根を奥に突き入れる。

動きも一層激しくなり、強い衝撃が身体に当たる。

「はっ！あんっ！あっ！ひうっ!!」

いつの間にか簪もクロウの腰の動きに合わせて、自分から張りのある尻を押し付けていた。

子宮を押し上げるように男根で突くと、子宮口が龟头に吸い付いてくる。

愛液でぬめった膣内を男根が行き来する。

「ああああああっ!!」

一番深いところで射精する。

ドクドクと勢いが衰えることなく、膣内を精液が満たしていく。

小ぶりの乳房を握り、乳首を摘まむ。

少し強い力で押しつぶされるが、簪はそれすら快樂として受け取っていた。

「風呂も一緒に入るか」

「はー……はー……う、うん……」

荒い息をしながらも答える。

風呂でどうなるかなど、容易く想像できた。



「んむ、んっ、んう……」

浴室にこもった簪の音が響く。

2人は浴槽に浸かりながらも、まだ行為を続行していた。唇を重ね合わせ、ちゆるちゆると唾液を啜り合う。

舌を絡ませ合い、ねつとりと愛撫する。

「はむっ、んっ……!」

唇を合わせながら、クロウは乳房への愛撫を止めない。

乳首を指で挟む。

簪も張りのある乳房を、クロウに押し付けている。

厚い胸板で形が潰れて、卑猥に歪む。

「はっ！あんっ！はっ！あっ!!」

正常位の体位で簪の腔内を突き立てる。

浴槽の中のお湯が波打つ。

「あっ！ま、またイク！イクっ!!」

簪の頭に電流がほとばしる。

クロウもほぼ同時に精液を腔内に吐き出した。

腔内の空気が押し出され、泡となって水中に出ていった。

「は……………ひう……………」

大きく背を反らし、未だ自分の体内で放出される精液を感じる簪。

クロウは背中を持ってやり、精液を吐き出し続けた。

簪の細い身体はビクビクと力なく震えている。

「うあ……………」

放心状態の簪を、乳首を摘まむことで覚醒させる。

「はっ……………はあ……………っ！」



簪の顔はだらしく緩んでいた。

眉尻は下がり、目には薄く涙が溜まり、口をポカンと開けている。

くりくりと乳首をこねたり、きゆうつと摘まんだりすると、そのたびにビクンと身体を震わせる。

「ひうっ！」

強く乳首を摘まんで引つ張つてやると、一際大きな嬌声を上げる。

痛みの中にある確かな快楽を感じる。

「んっーんんっー！」

強く刺激されて敏感になった乳首を、今度は舌で優しく舐る。

口内に入れて、ちうちうと吸引する。

片方の乳房も忘れず、小ぶりの乳房を揉みしだく。

簪の背筋にぞくぞくとした感覚が走る。

乳房を愛撫しているが、腰もまた動いていた。

「んんっーんくっーふあっーひぐうっ!!」

ヂュルヂュルと強く乳首を吸引した後は、一転して舌で優しく舐める。

そして歯で乳首を噛み、ギリギリと力を込める。

「んああああっ!!」

何度目になるかわからない射精。

簪はガクガクと震え、背を反らして乳房をクロウに押し付ける形になる。クロウは乳首をまるで赤子のように吸いながら射精した。

「今度はお前が私にしてくれないか？」

「うん、する……」

簪の水にぬれた水色の髪の毛を掬いながらそう言うと、簪は頬を赤らめてコクリと頷いた。

彼女は立ち上がると、クロウにしなだれかかった。

「ん……」

そしてクロウの鎖骨に顔を近づけて、触れるだけのキスを落とす。

次第にキスから舐めるといふ行為に変わっていく。

そこからどんとどんと下に下がっていき、クロウの乳首を舐めはじめ。

片手はクロウの手と合わせ、指を絡め合わせる。

「男の子も感じるんだね……」

ピクリとクロウが反応したことに気づいて、嬉しそうに微笑む。

身体をさらに密着させ、乳首を舐めたり吸ったりする。

「あ……また大きくなってる……」

固くなった怒張が秘部にこすり付けられるのを感じる。

簪は乳首の愛撫を止め、男根を慰めることにした。

「はあ……このキツイ匂い……」

顔を近づけると、むせ返るようなオスの匂いが鼻孔を満たす。

頭がくらくらとしてきそうだ。

簪は男根の裏筋を、レロレロと舐める。

「はむ、んぐっ」

陰囊を口に含み、まぐまぐと動かす。

舌でも舐めて刺激を与える。

秘裂から精液がトロリとまた漏れるが、どうせ風呂の中だからと気にしないことにした。

「これなんか……どう……っ？」

男根から口を離して、クロウに正面からもたれかかる。

Bカップの乳房を男根に押し付ける。

張りがあつて感触が気持ちいい乳房が、男根に射精を促してくる。

「ふふ……精液が飛び出してくる……」

簪の胸の大きさは男根を谷間に埋めることはできないが、押し付けて擦りあげること

はできる。

ヌリユヌリユとお湯のおかげもあって、スムーズに擦ることができた。たまにクロウの腹に乳首がこすれ、甘い声が漏れてしまう。尿道に残っていた精液が、乳房に押されて飛び出してくる。

「レロオ……ぢゅ……ぢゅ……」

顔を近づけて、裏を向いている男根を舐める。特にカリ首を重点的に舐めたり吸ったりした。

「んんっ！」

飛び出すように精液が鈴口から溢れ出した。

ビュルビュルと出てくる精液だが、簪はもつと出ると陰囊を優しく握る。

あふれ出た精液は簪の手を汚し、小ぶりの乳房にへばりつき、髪にも付着していた。

「ん……んむ……」

簪はそれを呆けたように眺めた後、ちゆるちゆると飲みだした。

手に着いた精液を舐め、吸った。

「ん、む……」

クロウは簪の軽い身体を抱え上げて、背面座位の体位にする。

簪は身体をひねらせ、クロウと唇を合わせた。

にゆるにゆると舌が動き回る。

「んはあっ!!」

秘裂に亀頭を合わせて、ゆっくりと挿入された。

自分の体重もあつて奥深くに突き刺さった男根に、簪は身体をクロウにもたれかからせて快楽を感じる。

「あっ!はうっ!んっ!あっ!!」

ズチュズチュと厭らしい音が浴室に響き渡る。

何度犯されても締まりの良い陰部は、男根をギチギチと締め上げる。

「あぐっ!あっ!んっ!はっ!!」

後ろから簪の細い身体を抱きしめながら腰を動かす。

小ぶりの乳房は左右から寄せられて、浅い谷間を作る。

「んっ!あんっ!んくっ!!」

クロウは簪に覆いかぶさるようにして、唇を合わせる。

簪も自分から唇を押し付ける。

Bカップの乳房を掴み、腰は小刻みに動かす。

よだれが口の端から垂れ、お湯の中に落ちる。

水中で激しく動かされる男根に、膣内の空気が漏れて泡となる。

「うあっ！あっ！んっ！はっ！！」

今度は後背位に体位を変えて、後ろから突き立てまくる。

細い腕を掴んで後ろに引っ張り、奥へ奥へと男根を押し込む。

プルツプルツと水滴に濡れた瑞々しい乳房が揺れる。

「そろそろ射精すぞ」

「わ、私も……もう……っ！」

一層激しく動き出す男根。

クロウと簪はまたキスをして、絶頂を迎えようとする。

「あつ、あつ、ああああああつ！！」

唾液に濡れた赤い舌をだらしなく口外に出す。

ビクビクと身体は震え、つま先をピンと伸ばす。

目からは涙を零し、快楽の強さを訴える。

ビュルビュルとまた大量に精液が射精し、子宮内をどぶどぶと満たしていった。



「きゆう……」

「……やり過ぎたか」

目をぐるぐると回して力なく身体を横たえる簪を見て、流石のクロウも冷や汗を垂らすのであった。

## めいど嫁トで一と

今日はIS学園の学園祭の日である。

一年一組はラウラの提案でご奉仕喫茶となったのだが、爽やかイケメンの一夏が執事をしていることと、レベルの高い容姿のラウラたちがメイド姿のことがあつて大変賑わっていた。

「テーブルへご案内します、お嬢様」

メイド服に身を包んだシャルロットは、ニッコニコと傍から見てもご機嫌だと分かるほど笑いながら接客をしていた。

彼女のメイド姿を見て、クロウが素直に可愛らしいと褒めたことが原因のようだ。

しかし流石メイドの生まれた聖地である西洋の生まれだけあつて、彼女の白い肌と金



髪によく合っている。

是非個人的にご奉仕していただきたいと考えるクロウであった。

「クロウ、来て上げたわよ」

「む……」

よく聞きなれた声を聞いて、クロウは声の方を見る。

そこには鈴がいたのだが、彼女も学園祭の出し物のせいでいつもと着ているものが違った。

「ふむ、チャイナドレスか……」

「そ、どう？」

クルリとその場で一回転し、チャイナドレスを着た自分を魅せる鈴。

真っ赤なチャイナドレスは下品な印象を与えてしまいそうになるが、鈴の容姿の良さと人懐っこい笑みでそれを魅力的に引き出している。

背中が大きく開いて、背筋のラインが露出してしまっている。けしからん。

太ももにも大胆なスリットが入れられていて、健康的な太ももを魅せつけてくる。けしからん。

頭にはシニヨンというボンボンをつけていて、いつもとは少し髪形も違う。

しかし今の鈴は普段もだが、とても魅力的である。

「うむ、実にすばらしい。とても似合っている」

「そ、そう……ありがと」

こどもも愚直に褒められると照れてしまうが、自分の好きな異性に褒められて嬉しくな  
いはずがない。

まあと言つても何度か見せてはいるのだが……夜に二人きりの時間で。

「つて言うかあんたも執事服着てるのね」

「うむ」

少し自慢げに鈴に見せるクロウは、一夏と同じく燕尾服を着ていた。

だが長身でかなりがっしりした体格のクロウが着ると、どうしてもピチツと張りつめ  
てしまう。

筋骨隆々の男がピチピチの燕尾服を着ているのはどうも……。

「ちよつと気持ち悪いわね」

「……そうか」

鈴の言葉に少し落ち込むクロウ。

他人から見ればいつも通りの無表情なのだが、長くて深い付き合いをしている鈴には  
落ち込んでしまったことがわかった。

これに慌てたのが鈴である。

好きな男が自分の発言のせいで傷ついてしまったのだ。

「で、でもあたしは好きよ!？」

「……そうか」

「うう……」

クロウは他人から気持ち悪いと言われても気にはしなかっただろう。

だがお気に入りの女性である鈴に言われたのが思いのほかショックだったのだ。

慌てて取り繕うようにクロウを褒めたが、やはり気分は下がったまま。

鈴は申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった。

「……まあ気にしても仕方がない。テーブルに案内しよう」

「う、うん」

せつかく来てくれたのに、嫌な思いはさせてはいけなさと考えたクロウは鈴を案内する。

自分のことよりも相手のことを考えたのは賢明な判断だ。だが爆発しろ。

「その恰好では、鈴のところは中華喫茶でもやっているのか？」

「うん、飲茶とか出しているわ。来てくれたらサービスしてあげる」

「ほほう、休憩時間になったら是非行くでしょう」

そうして話しているうちに、鈴本来の明るさが戻ってきた。

ナイスアフターケアだ。

「……ところで気になっていたんだけど、このテーブルとか椅子って高級品？ なんだかすごく居づらいわ」

「ああ、それはセシリアが調達してきたものだな」

「あのお嬢様……なに学園祭で本気出してんのよ」

椅子に座つたはいいが、もぞもぞと動いて何だかしくりこないといつた様子の鈴。

中国の代表候補生になつても庶民的な鈴には、どうやら合わなかつたらしい。

鈴がチラリとセシリアを見ると、メイド服を着て美しい金髪をたなびかせながら、意外や意外、お嬢様とは思えないほどしっかりと接客していた。

近くに良い見本チエルシーがいたからであろう。

「それでメニューだが、何を頼む？」

「うくん……結構品数が豊富ね〜」

メニューを見せると、それを見て悩む鈴。

とりあえず全ての品目に目を通してしていると、あるメニューに目が留まつた。

「ねえ、この『執事ご奉仕セット』ってなに？」

「む？ 確か執事が付きつきりつきりで食事を行うものだったはずだ」

「付きつきり……」

その言葉に鈴は囚われてしまう。

クロウと二人きりの食事などもうどのくらいしていないだろうか？

昼休みのときに食事をしようとすれば、セシリアやシャルロットなどのお邪魔虫が引っ付いてくるし。

2人きりになれるのは夜くらいだった。

「じゃ、じゃあそれにするわ」

『執事ご奉仕セット』だな。了解した」

クロウは鈴の注文を受けて、厨房へと向かって行く。

するとすぐに『執事ご奉仕セット』のポツキートアイスハーブティーが渡された。

なんと燕尾服についているブローチがマイクになっていて、それで厨房の店員に伝わったのだ。

流石I S学園の催し物である。

「待たせたな」

「う、うん……で、どんなご奉仕をしてくれるのかしら？」

今の鈴の心境はドキドキワクワクである。

自分がクロウにご奉仕することはあっても、クロウからご奉仕されることはあまりない。

自然と胸が高鳴るのも仕方がない。

「では失礼する」

「……………ふえ？」

鈴は今自分がされたことに、思わず呆けた声を漏らしてしまった。

クロウは椅子に座ると、鈴を両手で持ち上げて自分の膝に座らせたのだ。

体格が小柄で体重も軽い鈴は、まるで猫のように摘まみあげられていた。

クロウの膝の上に座っていることを理解した鈴は、ボツと顔を急速に赤らめた。

「にや、にやにやにやにやにしてんのよっ!？」

「む? 嫌だったか?」

「い、嫌じゃない! 嫌じゃないけど……………」

クロウが暗に止めようかと聞くと、慌てて手と顔を振ってそれを断る。

ちよろいと言えばセシリアだが、案外鈴もちよろいかもしれない。

顔を赤らめる鈴の頭を撫でて愛でるクロウ。

「ほら、口を開けろ」

そうやってクロウはポツキーを一つ摘まみ、鈴の口元まで運ぶ。

「……………あむ」

鈴はそれを小さく齧り、下を向いたまま咀嚼する。

他の客や店員が羨望や暖かいまなざしを送ってくるので、鈴はかなり恥ずかしかった。

照れからもじもじと身体をゆする。

しかしそうすると膝の上………というかクロウの股間部にちょうど当たっている小ぶりの尻も揺れるわけで……。

特に今の鈴は、凹凸は少ないが引き締まった身体のラインが浮かびあがるほどの薄いチャイナ服を着ている。

生々しい感触が直に伝わってくるのだ。

「ふえっ!?!」

ピクピクと尻の谷間で蠢く熱い棒状のモノを感じ取る。

鈴は素つ頓狂な声を上げ、さらに顔を紅潮させた。

バツと後ろを振り返ってクロウの顔を見上げるが、相変わらずの無表情のままだった。

「ん………ふう………」

しかし顔では何でもないような顔をしているのに、固い怒張をぐりぐりと尻に押し付けてくる。

予想を超えた行動をされた鈴は、どこか恍惚とした声を漏らす。

そのことで鈴はカアアアアと顔一面を真つ赤に染め上げた。

「も、もう出るわ！御馳走様！」

ピョンつとクロウの膝の上から飛び降りて、脱兎のごとく走り去って行った。

ちゃんと代金を置いて行っているのが微笑ましかった。

「ご主人様、食器のお片付けをしましょうか？」

そう言つて話しかけてきたのは、豊満な肉体をメイド服で包んだ楯無だった。

ニツコリと微笑んでお辞儀するその姿は、まるで本物のメイドのようだ。

「む？楯無か。メイド服も似合っているな」

「そうでしょ？」

クルリとスカートをとたなびかせながら一回転して、スカートを摘まんでお辞儀する。

確かに彼女はお嬢様なのにメイド服が似合っていた。

クロウによく奉仕しているからだろうか？

「お邪魔しまーす！新聞部の者なんですけど、織斑くんとミキストリくんの写真をいただきにきましたー！」

大盛況な一組に元気な声で侵入してきたカメラを持った少女。

カメラをバツバツと構えて二人を探している。

「あ、薫子ちゃんだ〜」



「おお、 たつちゃん！何でここに居るのかはわからないけど、生徒会長のメイド服はシャッターチャンス！一枚撮っていい？」

「勿論」

写真部の黛 薫子のお願いを、楯無は笑顔で了承した。

楯無はクロウの腕に抱き着き、カメラに向かつてピースする。

クロウもいきなりのことに少し驚くが、カメラの方を向く。

腕にはメイド服越しにも分かる柔らかい双丘が押し付けられている。幸せです。

「やー、まさかミキストリくんも撮れちゃうとはー。これは予想外だー」

「薫子ちゃん、嘘下手だねー」

きやつきやつとじゃれ合う楯無と薫子。

楯無はクロウとツーショットを撮れてご満悦のようだ。

「さくて、今は織斑くんいないみたいだから、いっぱいミキストリくん撮らせてもらっていいかな？」

「え？じゃあまた私がツーショット撮るの？やった」

「いや、 たつちゃんは良いのが撮れたからもういいよ。やつぱり色々な写真撮らないとね」

楯無はぶーぶーと子供らしく批判するが、薫子は一切それに取り合わない。

「うくん……じゃあメイドさんとツーショット撮ってもらおうか。それでいい？ミキストリくん」

「いや、私はあまり写真は——」

うんうんと頷き、自分でいい案だと考えながら薫子はクロウに尋ねる。

だがあまり写真が好きではないクロウは苦言を呈しようとするのだが、ちゃんと働きながらもしつかりと会話を聞いていたシャルロットたちが詰め寄ってきた。

「——撮ろうよ、クロウ！」

「いや、だから私は——」

「緊張していらっしやるのでしたら問題ありませんわ！わたくし、こういうことも慣れていきますし」

「そうではなくてだな、私は——」

「うむ、嫁とのツーショットか……いいいな」

「……………」

「わーい、クーとツーショットだ〜」

写真を撮られることが決定したのだった。



「ではクロウさん、よろしくお願いしますわね？」

「うむ」

一人目のパートナーはセシリアだった。

金髪碧眼の彼女は、メイド服も良く似合っていた。

クロウはクロウでもう吹っ切れたらしく、意外と乗り気である。

「そう言えばセシリアは被写体の経験があったのだったな？」

「はい、祖国で何度か雑誌で特集が組まれましたわ」

クロウはセシリアが出ているということに雑誌を買っていたりするのだが、それは秘密にしている。

セシリアは世界的に見てもまだ若い時期から専用機を渡されており、さらに彼女の容姿も優れていることから人気が高い。

彼女が載っている雑誌などは完売してしまうほどだ。

「クロウさんはこういった経験は？」

「いや、私はないな」

クロウは東の世界逃避行に随伴していたのだから、勿論マスメディアの目にさらされることはなかった。

公に出るからでもIS学園という盾があつたので、写真を求められたことなどなかったのだ。

「そうですか……ふふふ」

クロウの言葉を聞いて嬉しそうに笑うセシリア。

自分の好きな異性の初めてというものは、大概嬉しいものである。

「リラックスしてくださいな、クロウさん」

「む……そうだな」

自分の腕に、自然に腕を絡めてくるセシリアを見てふつと微笑む。

珍しいクロウの笑顔というシャッターチャンス逃すことなく、薫子は写真を撮つたのだった。



「随分楽しそうだったね、クロウ」

じとーとしてクロウを見てくるシャルロットが、二人目のパートナーだった。

その整った容姿は中性的であるがゆえに執事服も似合うのだが、今のメイド服は彼女の可愛らしさをしっかりと魅せつけていた。

「まあな。セシリアと一緒にいて嫌なわけがない」

「む〜〜」

恥ずかしい言葉を臆面もなく言ってみせるクロウ。

耳ざとくそれを聞いたセシリアは、『もうっ、クロウさんったら♪』と言いながらくねと身体を揺らしていた。

しかしその言葉に嫉妬してしまうシャルロットは、頬をぶくーつと膨らませながらクロウを睨みつける。

「勿論、私はシャルロットと一緒にいることも嬉しいぞ？」

「も、もう……こんなので誤魔化されないんだからね」

頭にあるレース付きのカチューシャを外してしまわないように気をつけながら、シャルロットの頭を撫でる。

シャルロットは口ではそう言っているが、顔はだらしなく緩んで頭を手にこすり付けている。

まったく言っていることが信用できない。

「く、クロウ!? こ、これ……」

「む……嫌だったか?」

シャルロットは幸せそうに破顔していた顔を、照れた表情に変える。

いきなりクロウが彼女の手を握ったのだ。

「いい、嫌じゃないよ!? うん、嫌じゃない!」

クロウに聞かれて、シャルロットは慌てて首を振って手にキュツと力を込める。

暖かく握られた手を見て、クロウも少し手に力を入れた。

「……えへへ」

シャルロットは指を絡ませて、恋人つなぎに変える。

それだけで彼女の顔は心底嬉しそうに見えた。



「相変わらず嫁は大きいな」

メイド服に身を包んだラウラが、大きなクロウを見上げながら言う。

148cmと小柄な彼女は、かなり長身のクロウを見上げなければならぬ。

しかしこのまま二人で写真を撮ると、まるで大人と子供の微笑ましい写真になってしまう。まあ、そうだった。

ラウラは、それはそれでいいと思うのだが、やはりここは夫婦として撮ってみたかった。

「お、そうだ！クロウ、私を抱っこしてくれ」

名案だとばかりに手をポンとつき、クロウに上目づかいでお願いする。

普段は軍服風の改造制服を着ているためか冷たい印象を与えてしまうが、メイド服を着た今の彼女はまるで人形のように可愛らしかった。

そんな彼女にお願いされては、断るわけにはいかない。

「むっ、これでいいか？」

「うむっ」

クロウはラウラの膝の裏に強靱な腕を回し、力を少し入れて持ち上げた。

所謂お姫様抱っこである。

彼女は驚くほど軽く、この小柄な体躯で何故あれほど高い戦闘能力を誇っているのか疑問に思えた。

お姫様抱っこされたラウラは、鼻息をふんすと吐いてご満悦のようだ。

「うむ……これから私を抱っこする権利をやるぞ、クロウ」

「そうか、それは嬉しいな」

無表情の執事と嬉しそうでどこか自信満々な表情のメイドは、結構お似合いのカップルに見えた。





「メイド服も中々いいね」

眠そうな声とのほほんとした雰囲気醸し出す一組のマスコット、布仏 本音がくると確かめるように一回転してそう言う。

彼女のメイド服は普段着や改造制服のように袖がかなり余っていた。

「うむ、お前は何でも似合うな」

「えへへ、そうかな？」

そう言って首を傾げはするが、本音は嬉しそうに笑う。

それだけで癒し成分が分泌されたように感じた。

「ん？どうかしたの？」

いつの間にかクロウは本音の頭を撫でまわしていた。

無意識下での行動に、クロウ自身も驚いてしまう。

本音の癒し成分はどれほどの効力があるのか……。

「イチヤイチヤもその程度にして写真撮らせてね」

「はい」

目の前で砂糖を吐いてしまいそうになるほど甘々な空気を作り出す二人に、薫子が少しくたびれた様子でそう告げた。

本音はだぼだぼの袖ごと腕を上げて、元気に返事する。

「むふふ。クー、ぎゅ〜」

本音は腕に抱き着くのではなく、直に身体に抱き着いてきた。

ブラをつけているはずなのだが、柔らかい双丘が脇腹で潰れる感触がした。

本音は幸せそうに息を吐き、キュツと抱き着く腕に力を込める。

「……甘えん坊だな」

「クーだけだよ〜」

先ほど以上に甘い空気を作り出す二人であつた。



「ミキストリくん、休憩入っつていいよ」

撮影会が少ししてから、クロウは一組のしつかり者、鷹月 静寐にそう言われた。

「む、そうか。では休憩させてもらおうとしよう」

IS学園の生徒に怖がられやすいクロウだが、それでも男ということでもそれなりに指名はされていた。

それに運動部からは高い人気があるので、クロウも少し疲れていた。

先ほどまで一夏が休憩に入っていたので、入れ替わりということだ。

一夏はIS学園の大多数の生徒に良く思われているので、今以上の繁盛が期待できるだろう。

「さて、私はあいつを迎えに行かないといけないな」

倍率が、目玉が飛び出るほど高いIS学園に一般人が入れる数少ない機会の一つが、この学園祭である。

IS学園の生徒は一枚の招待券が渡され、それを外部の人間が渡されて学園に来ると中に入れるのだ。

クロウも例にもれず招待券をもらい、ある人物に渡していた。

学園の校門で待ち合わせをしているので、彼はそこに向かって歩いていった。



IS学園の正門は、生徒や招待客でいっぱいだった。

クロウはそこに行き、自分が招待した人物を探す。

人が大勢いるので時間がかかると思われたが、意外に早く見つけることができた。

「……なんだ？その恰好は……束」

「あ、クロくん！」

そう、クロウが招待した人物は、世界の注目の的となつている篠ノ之 束だった。

機械のウサ耳。

目じりが下がっているのんびりとしているが、とても整っている顔。

常識を逸脱したファツションセンスの服で、豊満な肉体を覆い隠している。

いつも通りの彼女の姿だが、一部分だけおかしいところがあった。

「その鼻眼鏡はなんだ？」

彼女の整った容姿を丸潰しにしている鼻眼鏡。シニールである。

「ん？これ？これをつけると、他人には違う人物に見られる優れものだよ」

今の東は、他人から見れば篠ノ之 東として見られることはなく、普通の一般人に見えるそうだ。

確かに東がへらへらと普通に現れていたら、大パニックになることは間違いなかっただろう。

しかし相変わらず東の科学力はチートである。

何でもないように言っているこの鼻眼鏡も、どこかの国に見せつければ大金に変わる。

「ふむ、では別に隠れる必要はなくなつたな」

「おうとも！ 束さんとしつぽり濃厚なデートにしようではないかあ！」

クロウの腕に抱き着き、うおー！と拳を握って天に突き上げる束。

彼女も中々クロウに逢えないものだから、今この瞬間が楽しくて仕方がなかった。

クロウはなによりもむにむにと腕に当たって形を変えまくっている胸の感触を愉しんでいた。

「さて、では適当に回るとするか」

「おー！」



『芸術は爆発だ!』

某日本の有名な芸術家の名言が書かれた紙が貼られている。

そこは美術室で、クロウと束はそこで足を止めた。

「ねえねえ、クロウくん。ここ何するところ?」

「いや、知らないな。入ってみるか?」

クロウがそう尋ねると、束はコクリと頷いた。

嬉しそうにしている束を見て少しほっこりした気分になりながら、クロウは教室の扉を開いた。

「いらつしやいませー。ここでは爆弾解体ゲームをやっております。あ、ミキストリくんじゃーん」

呼び込みをしていた生徒がクロウに気づき、二人の元に近づいてくる。

彼女はどうかやら文化部では珍しく、クロウに対して偏見を抱いていない人物のよう

だ。

「ほう、爆弾解体ゲームか……」

「うん、そう。一回やっていく?」

はいと差し出された爆弾……もどき。

とりあえず受け取ったクロウだが、束は心底つまらなさそうにしていた。

「やってみるか?」

「えー……私がこんなのやったらゲームにもならないよ」

彼女からすれば、高校生のお遊び目的で作られた時限爆弾など、遊びにすらならない。

軍隊が使用している超難解な爆弾でさえ、彼女は簡単に解体してみせるのだから。

束は何か絵画でも展示されているのかと思つて入つてみたのだが、どうやら悪い方向に裏切られたらしい。

「まあ遊びだと軽く考えてしてみろ。せつかくだしな」

「うーん……まあいつか。クロくん、貸して」

クロウから渡される前にパツと奪い取つて、店員に渡されたペンチをカチカチと音を立てる。

一瞬爆弾の全体を見たのだが、それだけで束は爆弾の構造を理解した。

「やっぱりつまらないなあ」

複雑怪奇に絡まり合う無数の導線から適切なものを選び、迷った様子もなくそれを断ち切っていく。

束はふわくと欠伸びながら、それでも確実に爆弾を解体していった。

「さーて、最後に切る導線はどっちかなあ」

「うそ……こんなに早く……」

束は残った赤と青の二つの導線を見ながら、へらへらと笑っている。

口では迷っているようなことを言っているが、実際にはまったく困っていない。

美術部員はポカンと口を開けて、束を見ている。

勿論ゲームだからそういった知識がある者なら解体できる程度の難易度なのだが、一分も経たないうちに解体寸前まで持って行かれたことが信じられないようだ。

「うーん、これは運しだいの選択ってやつかあ」

この最後に残った導線のどちらかを選べば解体完了で、一方は爆発だ。

ここは本当に運なのだが、束ほどのチートになれば外部から操作して無力化することは朝飯前だったりする。

まあしかしあくまでも遊びなので、束もそんなことはしない。

「さてと、こんなつまらない遊びさつさと終わらせて、クロくんとまたデートの続きだ」



そう考えて束は適当に選んだ赤の導線の方にペンチを持って行く。だがあることに気づいて、束はピタリと動きを止めた。

「あれ？待てよ私。もしこれがクロくんと私の運命の赤い糸みたいなものだとしたら、これ切つたら最悪じゃない？」

天才と馬鹿は紙一重と言うが、今の束は馬鹿になっていた。

赤い糸どころか、赤い導線なのに……。

しかし一度考えたこの思考を取り除くことは難しかった。

「(ええい、んじや青を切れればいいだけの話だよ！)」

クワツと目を見開いた束は、勢いよく青の導線を断ち切った。

そしてそれと同時に響き渡るアラーム。

世界最高の頭脳を誇る天災が、高校生が遊びで作った爆弾に敗れた瞬間だった。



「……納得できない」

クロウと一緒にいるときはいつもニコニコ笑顔な束が、今は珍しくふくれっ面をしていた。

しかし理由は大したことではなく、ただ爆弾を解体されなかった美術部員がドヤ顔で束を見ただけである。

勿論彼女たちも束と分かっていたらそんなことは決してしなかつただろうが、今は不思議な眼鏡のおかげで誰も彼女を束として見ていないのだ。

意外とプライドの高い束は怒り心頭で、もう一度リベンジしようとしていたのだが、クロウが引つ張って連れ出した。

「そうむくれるな。あそこにある喫茶店に入るぞ」

「む〜」

クロウに手を握られて歩き出す束。

ぶんすかと怒っている彼女だが、クロウの手を振り払うことはしなかつた。

彼らが向かったのは一年二組。つまり鈴がやっている中華喫茶だった。

「いらっしやいませ……ってクロウ？随分早いわね」

「先ほど休憩になってな。少し邪魔することにした」

クロウをもてなしたのは鈴だった。

一組に来た時のように扇情的なチャイナドレスで頭はシニョンと呼ばれるボンボン。今は接客をしているので、お盆を持っていた。

「……あんた、また新しい女に手を出したの？」

クロウが連れてきている束を見て、鈴はジロリとクロウを睨みつける。

正直今でも多くの強敵ライバルがいるので、新たなライバルは御免こうむりたいところであった。

「……………」

クロウが無表情ながらも必死の言い訳をしている中、渦中の人物である束は不干渉を決め込んでいた。

彼女からすれば、鈴だって他人。はつきり認識できないし、しようとも思わない。

「はあ……まあ今はこれくらいで許してあげるわ。さ、着いてきて。案内するわ」

とりあえず腹の虫がおさまるほどの不平不満をクロウに叩き付けた鈴は、クラスメイ卜からの咎める視線から逃れるため、二人をテーブルに案内する。

お冷を二つ置いて行った鈴を見送ると、先ほどまでだんまりだった束が饒舌に話し始める。

「あれがクロくんのお気に入りのお牝？ちんちくりんのくせにうるさかったね。ていうか

もうあんなの捨てちゃったら？ 束さん、クロくんにいつぱいご奉仕するよ？」

「……………」

目のハイライトを消してグツと身を乗り出して、一息に言葉を紡いだ束。

思わずクロウは頬を引きつらせる。

ヤンデレも普通に好みに入るのだが、実際目の当たりにすると少し恐怖する。

「鈴はいい女だ。私から捨てることはありえないな」

クロウはヤンデレの恐怖に直面しながらも、鈴を捨てることはないと言い切る。

彼女は捨てるには惜しすぎるほど魅力的だからである。

可愛らしい整った容姿に、明るく人懐っこい性格。

家事も一通りこなすことができ、特に彼女の作る中華料理は絶品だ。

さらに自分に強く想いを寄せてくれている。

捨てるような要素がどこにあるのだろうか？

「……………ぶーん」

クロウの言葉を聞いて、束は面白くなさそうに目を細める。

お冷の中に入ってあった氷を口に含み、それを強く噛み砕いた。



東は少し腹が立っていた。

久しぶりに逢えたのに、他の女と仲良くするとは何事か。

彼女はクロウの腕を掴み、グイグイと引っ張りながら歩いている。

いくら東の身体能力が高いといっても、クロウが少し抵抗すれば動かせなくなるので、彼から彼女についていってあげているのだろう。

そんな気遣いが、自分の怒りの炎の勢いを少し弱める。

「私ってこんな単純だったっけかな？」

自問してみる。

……いや、クロウには随分と単純だった気がする。

東は思わず吹き出してしまう。

世界各国政府のブラックリストに載っている自分が、まさかこんなちよいい女だった

とは。

「ん〜……ここでいっか」

束は目についた扉に侵入した。

電子ロックがなされていたのだが、束がウサ耳をピクピク動かすとそれが解ける。

一瞬で鮮やかな手口だったので、後ろにいるクロウも感嘆する。

「おい、いきなりどうし——」

部屋の中は文化祭の道具の一時的な物置らしく、人はいなかった。

クロウは無理やりここまで引つ張つてきた理由を聞こうとするが、途中で言葉が止められた。

「ん……」

束がガバツとクロウに抱き着き、唇を押し付けたからだ。

唇が触れ合うだけの優しい接吻。

束は腕を首に絡ませながら、何度もそれを繰り返した。

「……………どうした？」

口づけの嵐が収まると、クロウは束にそう聞いた。

束はふいっと顔を背けると、口を尖らせながら話し出す。

「だって……………クロくん、久しぶりに私と逢ったのに、あのちんちくりんの貧乳女と仲良くしているし……………」

理由は可愛い嫉妬だった。

彼女は大好きな男に構ってもらえなかったことが不満だったのだ。

束の子供らしい拗ねた表情を見て、クロウはドキリと胸が高鳴った。

余談だが、あるチャイナドレスを着た少女が無性に腹が立ったらしい。

「んっ!？」

今度はクロウから唇を合わせた。

今度は舌を絡ませた本物の口づけである。

ぬりゆぬりゆとそれぞれの唾液で濡れた舌が、両者の口内を往ったり来たりする。

「はー、はー……ん、くちゅ、んく、んく」

クロウは口づけをした状態のまま、器用に束の服を脱がしていく。

束も彼の動きに協力し、脱ぎやすく身体を動かす。

彼女がクロウの唾液を飲まされているころには、ワンピースが脱がされていた。

束は流し込まれる唾液を全て飲み干すと、まだ欲しいと彼の口内を吸引して唾液を飲み込む。

「ん、んう……」

口づけを続けながら、クロウは自分にさらされた大きな乳房に手を伸ばす。

大きな手でそれを下から優しく持ち上げ、少しだけ動かす。

すると柔らかい乳肉がたぶたと波打って、卑猥な情景が出来上がった。

敏感な束の身体は、時折ピクピクと震えていた。

クロウは束の淫靡な肢体を味わうため、唇を離す。

「……あつ、ダメだよ！んっ！」

しばらく口づけされていた感触の余韻に浸っていた束は、はつと意識を取り戻すとまたクロウの唇に吸い付いた。

ガバツと勢いよく抱き着きながらの接吻だったので、歯と歯がかち合いそうになった。

「なんだ？今日はやけにキスが好きだな」

「クロくんは束さんのものだってマーケティングしとかないとね」

クロウの唇だけでなく、顔中をペロペロと舐めながら束はそう言った。

彼女から数多の真っ赤なハートマークが出てくるように幻視する。

クロウは大人しく顔中を舐められている間、Fカップの巨乳をモニュモニュと揉みだしていた。

「ふむ……なら準備はお前がしてみろ」

「あ……」

クロウは束の抱き着いてくる腕をつかむと、それを彼女の股間に導く。



誘われるがままに手を陰部に当てると、すでにそこは濡れており、くちつと小さく音が鳴る。

「ふう、ふう、ん……ふっ」

束は接吻を続けた状態で、陰部をまさぐる。

くちくちと厭らしい水音が聞こえ出し、それに合わせるように彼女の身体も震えた。彼女は陰部をまさぐりながら、今までどんなことをされてきたかを思い出していた。

機械のウサ耳をいつもつけているからとお尻にウサギの尻尾を模した性具を突っ込まれて、その状態のまま奉仕をさせられたこと。

尻穴をクロウに捧げたとき、初めてなのにもかかわらず盛大に絶頂してしまったこと。

四つん這いにさせられ、一日中獣のように犯されたこと。

「あつ、んっ、あつ」

そんなことを思い出しながら陰部を弄っていると、とめどなく愛液が漏れ出してきた。

たまに乳首を摘ままれると、弱い電流が流れて気持ち良かった。

「よし、そろそろ挿入れるぞ」

「うん、いつでも束さんはおーけーだよ」

仰向けに寝転がり、両手を広げてクロウを迎え入れる体制を作る。

にっこにっこと幸せそうに笑う束は、美しい容姿も相まってまるで女神のようだった。

それを今から犯すと思うと、男根がさらにいきり立った。

「あ、あ、あ、あ〜〜〜」

ゆつくりと男根を挿入した。

ぬる〜と体内に入り込んでくる異物を感じ取って、短い喘ぎを漏らす。

重力で少し潰れた乳房をギュッと握られると、ゾクゾクとした快樂が脳を犯した。

「んっ、クロくんのはいつも大きいね」

「束ほどの女なら誰でも大きくなる」

そう言う束は嬉しそうに『わーっ』と声を上げて、覆いかぶさってくるクロウの身体に身体全体を精一杯使って抱き着いた。

クロウは長いストロークのピストンをする。

抜くときは膣肉が外にはみ出すほど吸い付いてきて、突っ込むときはさらに奥に誘い込もうと絡みついてくる。

「あんっ！あっ、んっ！んんっ」

手を絡み合わせて、それぞれの体温を感じる。

男根を出し入れすると、陰部からは愛液がヌツチヌツチと粘っこい音を立て、豊満な乳房がぶるぶると柔らかかそうに揺れる。

腹が彼女の柔らかい肉体に当たってパン！と音がするほど腰を強く突き入れると、眉根を切なそうに下げる。

子宮が突き上げられると、目を強く閉じて快樂に耐える。

「んはあああああ……！」

体位を変えるために束の身体を動かすと、彼女は搾りだすような声を漏らす。

子宮がぐちゆりと押しつぶされて、強烈な快感が束を襲った。

「束、今からもつと気持ち良くなるぞ」

「ひ、あ……うっ……うあ……」

正常位から後側位になると、今まで当たらなかつた場所に亀頭がこすり付けられる。

ぐりぐりと膣肉を押し広げるそれを感じて、束は声を漏らす。

今の束は、クロウの軽口に答える余裕はなかつた。

しかしこれ以上の快樂を得られるという期待から、ぞくぞくと身体に淫靡な電流が走った。

「やんっ！あつ、はあつ。これ以上気持ち良くなつたら、んっ、束さん、馬鹿になつちやうよお……！」

束は口ではそう言っているが、後ろに手を伸ばして受け入れるようにクロウの首に絡みつけていた。

クロウは束の片足を持ち上げて、男根を入れやすくする。

汗の浮かんだ尻に腰が当たって、パン！パン！と音が響く。

肉感的な肢体はガクガクと小刻みに震え、大きな乳房は重力に従って横に形を崩れさせていた。

絶頂が近いのか、膣壁が男根をきゆううつと締め付けてくる。

「ひんっ、ひうっ！」

愛液の飛沫を結合部から飛び散らせながら肉厚のある太ももをさすつてやると、束は面白いように反応した。

クロウとの逃亡生活で色々な性感帯を開発されてしまった束は、彼ならどこを触られても快感を得ることができた。

クロウは束の快楽に歪んだ顔を自分の方に向かせると、嬌声を上げ続けるその口を塞いでしまった。

「ふっ、んっ、んっ！んう——！！」

すると束の身体はビクンと一度大きく震えて絶頂した。

束はその快楽に耐えるようにクロウの身体に手を回し、そこにギュウつと力を込め

た。

クロウも東の名器に搾り取られそうになるのを防ぐため、彼女のFカップの乳房を握って気を紛らわせる。

東は足先までピーンと伸ばす。

「ふう……」

クロウは搾り取られそうになった精液をこらえることができず、一つ息をつく。

しかしこの間にも東の膣内は精液を得ようと、膣壁をぎゅつぎゅつと収縮させて男根を刺激している。

「つ~~~~~」……!!

ぐぐぐつと身体全体に力が入っていたのが、ゆっくりと抜けていく。

東は『はあ……』と艶っぽいため息を漏らすと、完全に身体から力を抜いた。

「気持ち良かったか？」

「うん、さびこー♪」

クロウが尋ねると、東は幸せそうに笑いながらそう言った。

口の中に指を入れると、それをくちゅくちゅと舐めはじめた。

クロウは先ほど顔を舐められたお返しだと、彼女の端正な顔を唾液で汚していく。

東はクロウの身体に抱き着き、身体全体で愛しい男を感じた。

「次は東さんが上ね?ん……」

性欲の強い兎は、一度の強い絶頂ではまだ物足りない。

クロウを下に寝かせ、自分は彼の上に覆いかぶさった。

豊かな乳房が垂れて、クロウの厚い胸板にペとつと密着する。

東が男根をゆつくりと膣内に埋めていくのを促すように、彼はむっちり肉のつまつた尻を撫でた。

「——♪」

男根の全てを膣内に収めると、彼女はクロウに抱き着く。

そして自分を気持ち良くしてくれる異物の感触に、大きくぶるつと震えた。

「ん、ちゅっ、ちゅっ」

東はまるで大好きなご主人様に甘えるペットのように、クロウの顔中に口づけする。

顔中絶え間なく口づけすると、次は口に接吻する。

ニユルニユルと舌を絡ませ合う。

口づけしながら、東は腰を振りだす。

柔らかい肢体がびたびたと押し付けられて気持ちが良い。

「あむ、あむ」

口づけに満足すると、東はクロウの下唇を自分の唇で挟んで食みだした。

ちうちうと吸いつきながらの甘噛みだった。

「んっ！あつ、あつ！」

固くなった桃色の乳首がクロウの胸板にピトッと触れる。

ぐぶぐぶと男根を出し入れすると、強い快感が生じて腰を振るのを止めることができない。

「ん、ちろちろ、ちゆう」

クロウは腰を振るのを止めさせるため、束を自分の胸板に抱き寄せる。

しかし束はそうされると胸板に唇を押し付けはじめた。

乳首もてらてらと唾液で光るほど舐めた。

「んふっ、気持ちいい？クロくん」

束は乳首を舐めながら、上目づかいでクロウを見つめた。

その目は普段、彼女の本性を表すかのように濁っているのだが、今の目は淫欲でドロリと濁っていた。

それを見てみると、クロウも我慢ができなくなった。

「うひゃああつ!？」

それまで好き勝手させていたが、自分から男根を奥深くまで突き刺した。

かなり深く突き刺さった男根は、子宮にゴチュンと体当たりする。

深く突き刺されて、束の身体はビクンツと震え、量感のある乳房がプルツと波打った。  
「あんっ、あ、んっ！あっ」

身体の上に乗る束を尻に手を添えてユツサユツサと揺らして、男根で膣内を擦る。  
太ももにたばんたばんと柔らかい尻肉が当たる。

束の目はドロドロに濁っており、快楽を得ることしか考えていないように見えた。

「ああああっ、あっ、あっ！あああああっ！！」

クロウの突き上げる速度が速くなる。

束も尻を落とす間隔がだんだんと狭くなっていく。

パン！パン！と肉同士がぶつかり合う音が激しい。

「ひあんっ、あう！あっ、あっ！！」

束は送られてくる強い快楽に耐えられなくなり、仰向けに倒れこもうとする。

だがクロウは手を胸に伸ばして、突き出されたFカップの両乳房を掴んで倒れないようにした。

ガクンガクンと危ない痙攣の仕方をしているが、身体に叩き込まれた性技は無意識に行っており、射精を促すように腰を淫靡に揺らしていた。

「どっくに射精してほしいっ」

絶頂が近くなっていたクロウは、自分の上で淫らな姿をさらす牝を見ながらそう言っ



た。

聞いている間にも束は腰を動かしている。

「あつ、あつ、な、腔内なか！ いっぱい射精だして束さんの子宮にぶっかけて!!」

束はそう絶叫し、腰を一層激しく振り始める。

肉にぶつかる音はパチュン！パチュン！と大きくなり、結合部は大量の愛液のせいでぐつちよぐつちよと厭らしい水音を立てている。

「ふあああああつ!!」

ドクドクと大量の精液が流しこまれた。

束は腰を完全に下ろして、結合部を密着させて一番深いところでそれを受け取った。

腔内を駆け上る精液は子宮内にたどり着き、そこを白濁液で満たしていった。

「子宮が吸い付いてくるぞ」

亀頭にへばりついたそれは、もっと出せと吸い付いてくる。

そうされると射精が中々収まらず、大量の精液が束に注がれた。

「はあ……あ、は……お腹いっぱい……」

そう言った束の顔は、とても満足そうに笑っていた。



「ミキストリくん、これお願い！」

「了解した」

束との学園祭デートのあと、クロウは一組に呼び戻されていた。

一夏には及ばないが、運動部系に意外と人気のあるクロウだった。

束はその後ニコニコしながら帰って行った。

どういふ原理なのか、彼女の肌も普段の不衛生な生活をしていながら荒れていたのだが——それでも容姿は優れていた——つるつるの赤ちゃん肌になっていた。

「……………」

今の時間帯はクロウ目当ての客が多く、彼はやっと解放されて一息ついた。

IS学園の生徒は平均的に女子のレベルも高いので話していて楽しいのだが、何人もの客を相手するのは疲れた。

一夏はクロウの数倍の客を接客しているのだから、彼の疲労度はかなり高くなってい

るだろう。

まあしかし代わってやることもできないので、忙しそうに動き回る一夏を横目で見ていた。

「お疲れ様、ミキストリくん」

「む？ 鷹月か」

ボーとしているクロウに飲み物の入ったコップを渡しながらそう言ったのは、一組のしつかり者こと鷹月 静寐だった。

クロウはそれをありがたく受け取り、飲み干した。

「この喫茶店、大盛況ね」

「うむ、お前が仕切っているおかげだな」

「ううん、ミキストリくんと織斑くんのおかげよ」

静寐の言う通り、一組の喫茶店は大成功だった。

今の所、IS学園内で最も盛況な催し物だろう。

「あ、ミキストリくん、休憩に入ってもいいわよ」

「どれくらいだ？」

「うーん……一時間くらいしか上げられないかな」

まあ束との時間で大分店を空けてしまっていたので仕方ないだろう。

逆に言えば一夏などはほとんど休憩がない。

人気がゆえの忙しきなので、彼も嬉しいに違いない。違いない。

「ふむ……」

せっかくもらえた休憩時間なので、クロウは誰かと行動しようとする。

しかし自分のお気に入りの女性は皆忙しそうに動き回っているので、声をかけることがためられた。

「あ、クロウ！休憩もらえたの？」

しかたないので一人で出て行こうとしたところを、シャルロットに止められた。

他のメンバーが忙しそうに動き回っているとき、シャルロットはクロウの休憩を耳ざとく聞いて接触してきたのだ。あざとい。

「ちよっ……シャルロットさん、ずるいですわー！」

「僕はちゃんと鷹月さんに許可もらったよ？」

クロウと学園祭デートをしようとするシャルロットに、お盆を持ったセシリアが声を上げる。

しかしシャルロットは賢く、すでに根回しはすんでいた。

鷹月さんはクロウの上半身裸の写真なんてもらってない。本当に。

「よし、だったら私も休憩だ」

「ダメよ、ボーデヴィツヒさん。あなたにはデユノアさんが抜けた穴を埋めてもらおうわ」  
「なっ!? よ、嫁えええええ……」

クロウの方にスタスタと歩いてきてクロウとシャルロットの間に乱入しようとしたラウラだったが、静寂に首根つこを猫のように掴まれて引きずられていった。

手をこちらに伸ばして涙目になっている姿は、クロウのS心をくすぐった。

「ね、クロウ。僕と学園祭まわる?」

上目使いでクロウを見やってデートに誘うシャルロット。あざとい。

「うむ、望むところだ」

当然クロウも断るはずがなく、それを嬉々として受け入れた。

それを聞いたシャルロットは嬉しそうに笑い、クロウの腕に抱き着いた。

「つ、次は是非わたくしと——!」

一組の教室内からそんな言葉を背に受けつつ、二人は歩き出したのだった。

「でね、皆そろそろ部活入ろうかなって言ってるんだ」

「ほう」

今の二人の話題は、よくクロウと一緒にいるシャルロットたち専用機持ちが、部活に入るかもしれないというものである。

彼女たちは総じてスペックが高いので、どの部活に入部してもそつなくこなすことができるだろう。

「シャルロットはどの部活か決めているのか？」

「うくん……料理部かな。レパートリーも増やしたいし」

顎に手を当てながらそう答える。

彼女の料理技術は高く、たまにクロウに作って食べさせているのだが、彼からも太鼓判を押されている。

しかしシャルロットの料理のレパートリーは洋食が多く、和食が少なかった。

「今料理部が日本食を作っているんだって。そこに行ってもいいかな？」

「勿論だ」

行き先の決まった二人は、料理室へと向かって行った。

調理室に近づいていくと、空腹を加速させるいい匂いがしてきた。中に入るとクロウとシャルロットを迎えたのは色々な和食だった。

特にクロウの目を引き付けたのが肉じゃがだった。

「うわあ……美味しそうなのがいっぱいあるね」

シャルロットはキラキラとした目で料理を見ていた。

料理する身としては、他人がつくった料理も興味があった。

「お、ミキストリくん！ デュノアくん！ いや、来てもらえて嬉しいなあ」

料理を見ていた二人に近づいてきたのは、この料理を作った料理部の部長だった。

クロウの他を威圧する風貌もどこ吹く風で、気さくに話しかけてきた。

「執事とメイドだあ。私も一組に行こうかな」

部長は二人の着ている衣装を見てそう言う。

制服に着替えないで出てきたので、服もそのままだった。

道中やけに視線を感じると思っていたが、そういうことだったのだ。

「はい、是非来てくださいね」

シャルロットは部長にそう言ってニッコリと笑った。

金髪メイドの美少女の笑顔は、向けられていないクロウの心をも穿った。

「おお……そんな笑顔を見せられたら行くしかないじゃないか。さて、何か食べる？」

シャルロットの人たらしスマイルを直接受けた部長は頬をうつすらと赤らめて、それを誤魔化すように料理を勧めた。

同性でさえ魅了する惱殺スマイルである。

「ふむ……では私は肉じゃがをもらおう」

「うん……じゃあ僕はきんぴらを」

「はいはい」

クロウが二人分の料金を支払おうとしたのだが、それに納得しなかったシャルロットが強引に自分の分の金額を支払った。

そういうところは頑固なシャルロットであった。

二人は部長からそれぞれ小皿を受け取る。

「む、美味しいな」

「うん、これも美味しい」

「ほんと？ありがとね」

二人の感想を聞いて、部長は嬉しそうに微笑んだ。

クロウは米が欲しいと思いつつながら、パクパクと肉じゃがを食している。

「クロウは肉じゃがが好きなの？」

「そうだな、好きだ」



無表情だが、深い付き合いのシャルロットは雰囲気でクロウが喜んでいるのを感じ取ってそう聞いた。

肉じゃがはシャルロットがまだ作れない料理の一つである。

「ほら、食べてみるか？」

「え、ええっ!？」

クロウは箸でジャガイモを挟むと、それをシャルロットに向けた。

何を求められているかわかったシャルロットは、照れから声を大きく荒げてしまう。

嬉しいのだが、近くで興味津々に見つめてくる部長がいるので恥ずかしい。

だが断ってクロウに嫌な思いをさせる方が嫌だった。

「あ、あーん……」

シャルロットは目を瞑って、まるでひな鳥のように口を開けた。

クロウは口の中にジャガイモを置く。

「お、美味しいね」

もぐもぐとジャガイモを咀嚼してからそう言った。

確かに美味しく味付けされていたのだが、嬉しさと恥ずかしさであまり味が分からないシャルロットであった。



「ラウラは茶道部か？」

「うむ、日本の文化は非常に興味深いからな」

シャルロットとの学園祭デートを終えたクロウは、帰つてくるとラウラに引つ張られて外に出ていた。

セシリアが悔しそうにしていたのは言うまでもない。

「しかし人が多いな……」

ラウラの言う通り、廊下には学園の生徒たちであふれていた。

一夏のいる一組の近くだからか？

しかしそうなると小柄な体躯のラウラは、人の波に飲み込まれそうになる。

ドイツの軍人で鍛え方が違うラウラは身体能力の高さでは負けないが、この圧倒的数の差ではなすすべもない。

「ラウラ、手を貸せ」

「な、なっ!？」

クロウはラウラの小さな手を握り、自分の巨体で道を作っていく。

後ろにラウラについてこさせているので、彼女はクロウの背中に隠れて人ごみに当たることはなかった。

「ふむ、抜けたな。……ラウラ?」

ラウラはクロウの呼びかけにも応えず、ただじつと自分の手とつながったクロウの手を見ていた。

自分よりはるかに大きな手で、手のひらは武骨で固い。

ラウラも軍用ナイフなどを振るうので手は固くなっているのだが、それでも女性特有の柔らかさは取れない。

自分とまったく異質な手は、握っていると幸せな気分になれた。

「ラウラ?」

「ど、どうした」

二度目の呼びかけにはラウラも応えた。

「いや、反応がないからどうしたのかと思ってな。では茶道部に行くか」

「あっ……」

そう言うときクロウは手を離し、スタスタと歩いて行ってしまった。

ラウラは名残惜しそうに手を見た後、クロウの後に続いた。

本当はもつと手をつないでいたのだが、自分の性格上うまく言えなかった。

「(くっ……シャルロットのような性格だったなら……)」

ラウラが思い出すのは、あざとくてしたたかな親友の姿だった。

彼女なら自然にクロウと手をつなぐことができるだろう。

しよぼんと落ち込みながら歩いてきたラウラの目の前に、クロウの大きな手が差し出

された。

「ど、どうした?」

「いや、お前と手をつなぎたくなくてな。手をつないでくれないか?」

女性の機微に意外と察せられるクロウは、ラウラがなんと何を思っているのかを

察していた。

勿論クロウも彼女の性格は知っているので、自分から声をかけたのだ。

「う、うむ!嫁がしたいというのなら吝かでもないぞ!」

口では偉そうに言っているが、パアアアつと擬音が付くほどの笑顔を見せて小さな両

手でクロウの片手を握っている姿は、素直じゃない子供のようだった。つまり可愛い。

「あ、いらっしやーい。メイドさんと執事くんの珍しいお客様ね」

茶道部の部室に行く、和服を着た部員が二人を迎え入れた。畳が敷かれた室内に案内され、そこに正座で座った。

「どうやら茶道部は抹茶の体験をしているらしく、二人に茶菓子を渡してきた。」

「ラウラは正座が大丈夫みたいだな」

クロウは茶菓子を受け取りながらラウラに話しかけた。

彼が思い出すのは臨海学校の時のセシリアだ。

彼女は正座ができないにも関わらず、クロウと一緒に居ようとしたので、大きな苦痛を味わっていた。

だが正座しているラウラに苦しむ様子などは見られなかった。

「無論だ。この程度の苦痛、拷問訓練に比べれば屁でもない」

「……そうか」

何か違うような気がしたクロウだが、茶菓子を食することで気にしないようにした。

ウサギをかたどった白あんの茶菓子だった。

「うむ、うまい」

あまり甘い物を好まないクロウだが、これはお気に召したようである。

茶菓子を食べると部員から抹茶が渡された。

「う、む……美味しい」

ラウラも茶菓子を食べたようで、口をもごもごと動かしていた。ただウサギを横した茶菓子を食することが心にダメージを与えたようで、少し目の端に涙が溜まっていた。

その後二人で苦みのある抹茶を飲み、二人は部屋を出た。

「ラウラが茶道部に入ると、当然お前も和服を着ることになる」

「?..そうだが……」

いきなり話し出したクロウを見上げて、こてつと首を傾げる。

クロウの頭の中では、黒を基調とした和服を着たラウラの姿があった。

長い銀髪は黒に映えて、片目が眼帯というのも何かそそられる。

「お前の和服姿を見てみたいな」

「つ!?そ、そんなのいつだって見せてやるさ……」



「満を持しての登場ですわ！」

「……………どうした？」

腰に手を当て、胸を反らせて大きな声を出すセシリアに、クロウもたじたじだ。

ラウラと一組に変えようと、今度はセシリアに引つ張り出されたのだ。

「さ、クロウさん。往きますわよ！」

「うむ……………」

普段のおっとりとして常に優美な彼女の強引な姿勢に、クロウも面を喰らっている。

だが少し拗ねているセシリアが可愛いのも事実で、クロウはしっかりとセシリアをエスコートした。

二人で歩いていると、どこからか心地よい音色が聞こえてきた。

「これは……………ヴァイオリンですわね」

「ふむ……………行ってみるか？」

「ええ」

ヴァイオリンを弾けるセシリアは、今の音色で奏者に興味を持った。

それを見たクロウは、彼女を音楽室に連れて行った。

セシリアの実家が名門貴族ということもあつて、彼女は小さなころから色々な習い事をしてきた。

その中の一つがヴァイオリンであり、その腕前は大きな大会で賞ももらつているほどだ。

「失礼しますわ」

小さく声をかけながら、セシリアとクロウは中に入った。

そこにはちようどヴァイオリンを引き終わった様子の吹奏楽部の部長がいた。

「お、いらつしやい。体験していくかい？」

ニツコリと人のよさそうな笑顔を浮かべて、二人に話しかける。

中に人はおらず、あまり盛況はしていないようだ。

色々な楽器が並べられており、ここでは楽器の体験ができるようだった。

「先ほどヴァイオリンを弾いていたのはあなたですか？」

「あれ？扉が開いちやつてたかな？ごめんね、暇だったんだ」

この音楽教室は当然防音設備が整えられている。

今回はたまたま扉が少し開いていたから聞こえたのだった。

「いえ、素晴らしい演奏でしたわ」

「そ、そうかな？へへ、ありがとね」



セシリアに褒められて、照れくさそうに部長は笑っている。

素人のクロウはあまり上手かどうかは分からなかったのも、大人しく黙っていた。

「ヴァイオリンならセシリアも弾けたな？」

「ええ、淑女の嗜みですよ」

「それなら弾いてみてよ。私も他の人の演奏を聞いてみたいし」

ぐいぐいと先ほどまで自分が弾いていたヴァイオリンを、セシリアに押し付ける部長。

やっと回ってきた学園祭デートなのに、演奏して時間を潰してしまうのがもったいなく感じてしまい、ヴァイオリンを受け取るのを渋るセシリア。

「うむ、私もお前のヴァイオリンを聞いてみたいな。期待している」

「そ、そんなこと言われたら……引き受けるしかありませんわね」

愛している異性に期待しているなんて言われたら、その期待に応えたくなくなってしまう。

まあクロウとの関係は深いのだから、二人きりのデートはこれから先いくらでもできるだろう。

そう考えて、セシリアはヴァイオリンを受け取った。

「……では弾きますわ」

セシリアの奏でる音色は、本当に美しかった。

音楽に關しては素人なクロウでさえ聞き惚れ、相当の腕前を持つ吹奏楽部部長も目を閉じて聞き入った。

彼女が奏でるヴァイオリンは音楽室の外にいき、たまたま近くにいた生徒たちの耳に入る。

それを聞いた生徒たちは自然に音楽室へと集まっていた。

そうしてどんどんとセシリアのヴァイオリンを聞く生徒たちが増えていき、最終的には人がほとんどいなくなった音楽室が、多くの人であふれかえっていた。

「――」  
セシリアがヴァイオリンを弾くのを止めた。

すると大気が割れんばかりの拍手が響き渡った。

それを受けて、セシリアはスカートを掴まんで優雅にお辞儀したのだった。



「で、次はお前か」

「うい〜」

クロウが声をかけると、本音は手を上げて応えた。

本音も喫茶店の衣装であるメイド服なのだが、彼女の袖はいつも通り長かった。

それで食品をうまく運べるのか疑問だが、問題にはなっていないので大丈夫なのだろう。

「さて、お前は行きたい場所があるか？」

「う〜ん……私は屋上に行きたいなく」

尋ねて返ってきた場所が思っていた斜め上をいつていた。

屋上に何かあったかと頭をひねる。

「いや〜、いっぱい働いた暑くなっちゃつて〜。風が気持ちよさそうなところがいいな  
〜つて〜」

本音たちが着用しているメイド服はあまり通気性には優れていなく、中に熱がこもつてしまう。

本音も珍しく頑張っていたので、汗を垂らしていた。

「分かった。手をつなぐか？」

「あく、つなぎたいけど、今は遠慮〜」

自然と手を取ろうとしていた自分を押しさえつけ、本音はそう答えた。

彼女が断つた理由は、勿論汗である。

ひょうひょうとした性格の本音も、クロウのことが大好きな乙女である。

汗の匂いを嗅がせるのは嫌だった。

クロウもしつこく食い下がらず、屋上へと向かって行った。

「うわあ〜……風が気持ちいい〜」

屋上に出ると夏の終わりの爽やかな風が吹いていた。

それは本音の火照った体を冷やしていく。

しかしいつもの全身着ぐるみパジャマの方が暑そうだが……。

「ふう……」

クロウは息をついて地面に座る。

お気に入りの彼女たちとの学園祭デートは楽しかったが、それなりに歩いていたので少し疲れていた。

クロウも風を気持ち良く感じながら、ポーと空を見上げる。

「クー、疲れた〜？」

「うむ、まあ少し歩いたからな」

「ん〜……じゃあ膝枕してあげよう〜」

地面に正座して、柔らかそうな太ももをペチペチと叩いてクロウを誘う。

地面はコンクリートなのだから固いはずなのだが、本音はニコニコと笑っている。

当然クロウも断る理由などないので、本音の膝枕に頭を乗せた。

「うむ……柔らかいな」

「あはは〜、クーが子供みたいだ〜」

クロウの頭を優しく撫でている本音の表情は、慈愛に溢れた女神のよう……にも見えなくもない。

今はそう見えるほどに可愛らしく美しいのだが、普段が惰眠をむさぼり仕事をサボるなどのだらしなきなので断言できない。

「……少し眠くなってきたな」

「寝てもいいよ〜?」

「そうか……では少し寝るとしよう」

クロウは言うとすぐに目を瞑り、穏やかな寝息をたてはじめた。

基本的に彼は眠りが浅い方で、何かあればすぐに起きられるようにしている。

だが本音の膝枕で寝ている今は、心から彼女を信頼しているせいかな、深い眠りに落ち

ていた。

「うーん……デートもいいけど、これも中々いいかも」

本音はいつも以上にほにやりと顔を崩しながら、クロウの頭を撫で続けたのだった。

クロウと本音がそんな穏やかなひと時を過ごしていたその頃、IS学園のある場所では非常にシリアスな場面があつたりした。

「ふふふつ。さーて、お姉さんもさっさと仕事終わらせてクロウのところに行こーつと」  
……いや、それでもなかつた。

## 学園祭、終了

体育館が、生徒会の催し物である『シンデレラ』で大いに盛り上がっているころ、更衣室では殺伐とした空気が流れていた。

更衣室にいる人は三人。

「た、楯無さん……」

一人は爽やかイケメンこと織斑 一夏。

彼は王子様の典型的な衣装を身に纏い、片膝を地面に付けていた。

『シンデレラ』の主役である一夏だが、今は襲撃者と戦っている。

「てめえ……どうやってここに入った？ちゃんとロックしたはずなんだけどなあ……」

一人は一夏を襲撃した女、オータム。

世界の裏側で暗躍する秘密結社・亡国機業ファントム・タスクの一員で、今回は一夏の専用機・白式を略奪しようとして襲撃してきたのだ。

彼女はアメリカ合衆国から強奪したI.S.・アラクネを纏っている。

一夏は先ほどオータムと戦闘を繰り広げたのだが、いかんせん半年前まではI.S.をろくに見たこともない一般人だったので、彼女に手も足も出なかつた。

そして白式も奪われ、命まで取られようとした時に、彼女が現れたのだ。

「ふふん。私、ピッキングの心得があつたりするのよ」

口元を扇子で隠しているが、それでも隠しきれない不敵な笑みを浮かべている少女。

彼女はI.S.学園生徒会長・更識 楯無だ。

「おいおい、電子ロックは結構手間がかかるはずだぜ？」

「あら、私にとつては別に関係ないわ」

楯無はそう言いながら、自身の専用機を起動させた。

ロシア連邦が設計したI.S.を元に、楯無がほぼ独力で完成させた第3世代型のI.S.

白式などに比べてかなり少ない装甲で防御力に不安を感じさせるが、左右に浮遊している一対のパーツから水のヴェールが展開されていて、操縦者の身を守っている。

「ほお………てめえも専用機持ちか。どこの国だ？」

「いう訳ないじゃない。あなた、馬鹿でしょ？」



オータムはすでに刃向えない一夏を捨て置き、新たな獲物に向き直る。自分の情報が大国にもれたらマズイことを考え、楯無に国の所属を聞く。

しかし楯無はそれを一蹴した。

まあそれも当然で、敵対者にペラペラと情報を漏らす者を代表操縦者に選ぶわけがない。

楯無は対暗部用暗部・更識家の当主である。

なので彼女は国が知らない亡国機業フアントム・タスクの情報も知っていた。

その中の一つに、オータムの情報もあった。

彼女の情報は非常に短気なことと、同じく構成員であるスコールという者に恋情を抱いているというものだった。

「なんだと、この餓鬼！ぶっ殺してやる！」

「いやー、でもこんな小学生みたいな挑発に引つ掛かってくれるとはねー」

いくらなんでもダメなんじゃないかと、敵対組織を思わず心配してしまう楯無。

オータムはすでに一夏のことには目に入っておらず、楯無だけを睨んでいる。

「(こういうタイプには、普通ストッパーにもう一人つけて組ませるものだけど……)」

楯無と生徒会メンバーで調べたところ、今回侵入しているのはオータムだけだった。

何故彼女だけでこんな強行に及んだのか。

亡国機業ファントム・タスクがただ人材不足なのか。それとも……。

「オータムがとてつもなく強いのか……のどちらかね」

自分が負けるとは思わないが、気合を入れなおす楯無。

ここには無力化された一夏もあり、彼も守らなければならぬ。

「あまり強い兵器は使えないし、ここじゃ機動も限られている」

狭い更衣室の中では、移動して一夏からオータムを遠ざけることもできない。

それに一般装備である銃だって、うまく使わないと流れ弾が一夏に当たってしまうかもしれない。

ここでの戦闘は、楯無にとって非常にやりづらい場所だった。

「ま、それは生徒会長わたしの見せどころね」

「なにブツブツ言ってるんだあー」

オータムはそう怒鳴り、楯無に襲い掛かる。

蜘蛛を連想させる八つの装甲脚が、それぞれ独立した動きで楯無を狙う。

「おっと、危ない」

楯無は大きなランスで、それを迎撃する。

蒼流旋と呼ばれるそのランスは、特殊なナノマシンで構成された水を纏っている。

その水は超高周波振動しており、強固なアラクネの装甲脚にも負けない。

「ちっ！硬えな！いいIS持つてんじやねえか！もう一つ剥離剤リムーバーを持つてくるんだったぜー！」

「あら、あげないわよ。お姉さん、これ結構頑張つて作ったんだから」  
オータムは一度距離をとり、楯無を睨みつける。

楯無は彼女の強い眼光にもひるまず、ニコニコと笑っている。

「その顔が気に入らねえなあ！ぐちゃぐちゃにしてやるよ！」  
「嫌よ。クロウに嫌われたらどうしてくれるのよ」

振り下ろされた装甲脚を受け止めると、金属同士がぶつかり合うような耳障りな音が起きる。

楯無はランスの水の螺旋を加速させて鋭い切れ味を持たせる。

そして切れ味の増したランスは、オータムの装甲脚を切り飛ばした。

「うおっ！こゝ、この——っ!!」

即座に反撃しようとするオータムだが、続けざまに装甲脚をもう一本切り飛ばされる。

まだ装甲脚は6本あるとはいえ、楯無の実力を目の当たりするオータム。

自分が良いようにやられていることに、彼女は怒りを覚えずにはいられない。

「ふざけんな！さっさと私にぶち殺されろ！」

オータムはまたも装甲脚を楯無に叩き付ける。

当然楯無はランスでそれを受け止めた。

「はっ！馬鹿が！引つ掛かったな！」

オータムは楯無を見下し、大きく笑う。

すると装甲脚の砲門が開き、楯無に向かって銃弾が発射された。

「た、楯無さん！」

それを見ていた一夏は、悲鳴のように楯無の名を叫ぶ。

楯無の I S・ミステリアス霧・レイ霧デ霧イ霧の薄霧い装霧甲では、近距離からの銃撃は命に関わると考えたからだ。

しかし楯無は、あの大国・ロシアの代表操縦者。この程度の相手では話にならなかった。

「大丈夫よ、一夏くん。安心して見ていてちょうだい」

「なっ!?!」

勝利を確信していたオータムが見たのは、傷一つ負っていない楯無の姿。

それと水のヴェールに阻まれた銃弾だった。

普通の水なら、これくらいの薄い層なら銃弾はそれを突破して楯無を襲っていただろう。

だがこの水はれつきとした『兵器』だった。

「お返しよ♪」

「ぐあああああつ!!」

オータムに蒼流旋を向け、ニツコリと微笑む楯無。

蒼流旋に搭載されている四門のガトリングガンが火を噴いた。

それは近距離で防ぐ術を持っていないオータムに次々に当たり、シールドエネルギーを大きく減らした。

「くそっ!」

大きく後退して距離を取ろうとするオータム。

しかし楯無の勝利はもう決まっていた。

「な、何だこれは!」

地面に着地すると同時に、オータムの周りに水の壁が発生した。

四方から囲まれたオータムは、身動きが取れない。

「ごめんね。もうおねーさん、飽きちゃったわ」

「があああああつ!」

楯無は誰をも魅了する美しい笑みを浮かべて、指を鳴らす。

すると水の壁の内側で大爆発が起きて、オータムを熱波と衝撃が襲った。

この一撃でアラクネのシールドエネルギーはほぼなくなった。

「すげえ……」

一夏は楯無の戦いに感嘆する。

自分が手も足も出なかつた敵を、まったく苦戦することなく倒した。

IS学園の生徒会長が最強ということに、一夏は納得した。

「さて、と。一夏くん」

「は、はい！おつ、と……」

楯無に声をかけられて顔を上げると、ひし形のクリスタルを投げられる。

一夏は驚きながらも、しっかりと受け止めた。

「これは……」

それはオータムに奪われていた白式のコアだった。

一夏は自分の専用機が帰ってきたことに、ほっとする。

「くそつたれ……」

「さーて、あなたにはいろいろと話してもらおうよ」

うめき声を上げながら、敗者であるオータムは悔しそうに顔を歪める。

しかし楯無が拘束しようとすると、顔をニヤリと嘲笑に歪めた。

「はっ……パーカ」

「っ！一夏くん！」

「うわっ!？」

楯無はオータムが何をしようとしたのか察して、一夏を守るように胸に抱きいれた。

そしてそのすぐ後、オータムに対して決定打を与えた清き熱情クリア・パッションにも劣らない大爆発が、アラクネを中心に発生した。

楯無はその時、アクア・クリスタルから発生する水のヴェールを最大展開し、その爆発から自分と一夏を守った。

「あちゃー。逃げられちゃった」

楯無の言う通り、オータムは爆発に紛れて姿を消していた。

楯無も逃げようと何かするとは予想していたが、まさか自分の危険を顧みない自爆をするとは考えられなかった。

だが、亡国機業フアントム・メカの構成員がそれほどまでの無茶をすることが分かったので、もし同じことが起きたら楯無はもう逃がすことはしないだろう。

「(うーん……最低条件の一夏くんを守るということは達成したけど、できたら捕まえたかったなあ)」

更識家の当主なら、それも求められている。

今回は楯無の勝ちだが、完全勝利とはいかなかった。

「た、楯無さん……」

「ん……っ？」

楯無は自分の胸から聞こえた声に反応する。

特別な感情を抱いていない相手なので、別に胸が当たっていても何とも思わない。

しかし一夏は当然反応してしまう。

「(ぎやああああつ！楯無さんのスタイルやべえ！お、落ち着け俺！守ってもらったのに欲情するとか最低だぞ!!)」

完璧なスタイルの楯無と密着しているのは、性欲旺盛な思春期男子にはあまりにもきつかった。

さらに今は二人ともISスーツという薄い生地で抱き合っているので、感触もまたよく伝わる。

一夏の顔は、ISスーツの胸部を大きく盛り上げている豊かな胸に挟まれている。

しかも脚も密着していて、肉付きの良い太ももが危ない場所を擦りつけてくる。

「(うわああああつ!!早くどいてくれえええつ!!)」

普通の男なら襲い掛かっているような状況だ。

しかし一夏の良識ある性格は、そんな蛮行をしなかった。

まあ仮に襲い掛かっていたとしたら、一瞬のうちに気絶することになっていただろう。



う。

「あらー？一夏くん、興奮しちゃった？」

ニヤニヤと新しい玩具を見つけたような笑顔を浮かべ、一夏を弄りだす。ついでとばかりに、さらに身体を密着させた。

「し、してません！いいから早くどいてくださいー！」

更衣室に、顔を真っ赤にした一夏の悲鳴が響き渡ったのだった。



「はあ……はあ……。くそっ！」

楯無に敗北して何とか逃げ出すことに成功したオータムは、IS学園から脱出して寂れた公園にいた。

顔を憎々しげに歪めている。

「あのガキ！簡単な仕事だとか嘘言いやがって……！あんな化け物がいるとか聞いてねえぞ！」

確かに一夏を倒すことは容易だった。

それなりに亡国機業フアントム・タスクの実働部隊にいた彼女は、まだISを使って時期も経たない子供には負けなかった。

だがその護衛が異常なほど強かった。

彼女が護衛は更識家の当主だと知って納得するのは少し後のこと。

今はこの計画を持ってきたあの少女に怒りを爆発させていた。

「帰ったら真つ先にぶち殺してやる……！」

怒りと憎しみを込めて呪詛をぶちまける。

自分たちのアジトに戻ったらどうやってやろうかと妄想する。

「——いや、お前にはここでつかまってもらおうぞ」  
「っ!？」

突然声をかけられ、オータムは目を見開く。

数々の修羅場を潜り抜けてきた彼女は、自分の近くに接近してくる気配などを察知することができる。

しかし今回はまったく気配を感じなかったのだ。

「なっ!?う、動けねえっ!」

慌てて声をかけられた後ろを振り向こうとしたが、まるで隙間のない壁に押し込まれたように、自分の身体がピクリとも動かない。

いや、目や口は動いているので、完全に拘束されたわけではないようだ。

「な、何者だ、てめえ!」

「貴様が知る必要はない。お前は拘束部隊が来るまで、ここで固まっていればいい」  
自分を拘束する主は、ぞっとするほど冷たい声で告げた。

声からして、拘束しているのは女。それもまだ若い女だった。

「(それに見た限り拘束具はつけられてねえ……慣性停止結界 A I C か!)」

ドイツ連邦共和国が生み出した特殊兵器。

一対一なら強力な効果を発揮する。

おそらく自分を拘束しているのはドイツ人の I S 操縦者と見当をつける。

「お、おいおい。生身の人間に I S の武装は使ったらダメなんじゃねえのか?」

「ふん、貴様がそれを言うか。フアントム 亡国機業の狗め」

どうやらろくに会話をするつもりもないらしい。

自分を拘束している相手は、任務に忠実なのだろう。

「……………あつっ!」

オータムが拘束されている場所から数百メートル離れた場所で、セシリア・オルコツトは声を漏らす。

現在ラウラ・ボーデヴィツヒがオータムを拘束しているが、慣性停止結界 A I C を発動している間はそれ以外のことを行うことが難しい。

なので保険としてセシリアが狙撃手として展開しているのだが、彼女の I S がどんどん接近してくる他の I S を捉えたのだ。

セシリアはチャネルでその I S に警告する。

「とまりなさい。あなたはどこの所属 I S ですか？」

ここは I S 学園の敷地内を出た、れっきとした日本国領土である。

現在は I S 学園側が日本国政府に I S の使用を傳達しているから問題にはならないが、しかしそれはラウラとセシリアの二機だけだったはず。

つまり今接近してきているのは、拘束された仲間を助けに来た敵機の可能性が高い。

「……………」

セシリアのチャネルに応えることをせず、ただ接近を続ける I S 操縦者。

このままでは数十秒もすれば、オータムとラウラの場所に到達してしまうだろう。

「ラウラさん。識別不明機が一機、こちらに接近してきていますわ」

『な……?』

プライベート・チャンネルでラウラに情報を伝える。

慣性停止結界

AIICに集中していたラウラは索敵反応を広げると、確かに一機接近してきていた。

『ふむ、おそろしくこいつの仲間だろうな』

「ええ、どうしますか？」

ラウラはオータムを拘束しているので、実際戦えるのはセシリア一人。

勿論セシリアも凄腕の代表候補生なので負けることはないが、日本の法律が適用される日本国領土で派手に戦闘を行うことはできない。

万が一死者でも出てしまったら、イギリスの評価を下げてしまえばかりか、日本とイギリスの関係悪化もしてしまうだろう。

『日本の領土と国民に被害のない戦闘で、拘束部隊が来るのを待つしかないな。できるか?』

「それはあちらの実力次第ですわね」

セシリアはそう言いながらも不敵な笑みを浮かべる。

それは自分に対する絶対的な自信からくるものなのだろうか……。

「さあ、いきますわよ!」

セシリアはブルー・ティアーズの主力武装であるスターライトmkIIIの銃口を不明機に向ける。

そして蒼い極太のレーザーが、不明機に向かって発射された。

「っー」

オータムを拘束している者の他にもう一人いることを当然知っていた操縦者は、飛来するレーザーもすぐに察知する。

試験搭載されているシールド・ビットを展開し、レーザーから身を守る。

しかしレーザーはそのシールドを破壊し、操縦者に襲い掛かろうとする。

「ふっー」

だがその一瞬できた時間で不明機は射線から外れ、反撃とばかりにビットを五基射出する。

そのうち四つがセシリアに向かい、一つはラウラに襲い掛かる。

「ビット？……ということとは、あれは我が国のISですわね。お恥ずかしいですわ」

セシリアはため息をつきながら、三基のビットを射出した。

不明機はイギリスで開発されているB T兵器搭載の二号機、サイレント・ゼフィルスだった。

まだまだ完成は遠いと言われていたが、一号機で試験機であるセシリアのブルー・ティアーズ<sup>著</sup>で大いにデータが得られたので、もう開発済みだったようだ。

セシリアの有能さがここで裏目にでるとは、まさか彼女は思いもしなかっただろう。

「我が国の不始末はわたくしが処理しなければなりませんわね」

セシリアが射出したビットの二基は、向かってくる四基のビットを次々に撃墜していき。

ラウラを狙っていたビットも、セシリアが向けた一基のビットに撃墜された。

「つー……ほう、イギリスの代表候補生というのは名前ばかりではないらしいな」

「あら、失礼しますわ」

セシリアは残っていたもう一基のビットを射出し、射線が空に向かう位置からレーザーを撃った。

ゼフィルスはそれを避け、彼女も残っていたビットを射出した。

「今度は正々堂々戦ってみたいものだな」

ゼフィルスはニヤリと笑うと、戦闘音に集まっていた野次馬たちに向かってレーザーを発射した。

「くっ……やはりそうきますわね」

セシリアはビットからレーザーを射出して、野次馬たちに迫っていたゼフィルスのレーザーに当たった。

こんな曲芸まがいな技術を持っているのは、世界でもセシリアだけだろう。

野次馬たちを素晴らしい技術で守ったセシリアだが、その間にゼフィルスはラウラに

向けてライフルを撃つ。

「ちっ」

かなりの破壊力を秘めるライフル弾を無防備で喰らう訳にもいかず、ラウラはA I C慣性停止結界を作動させたまま回避した。

他の行動をしながらもA I C慣性停止結界を行える集中力の高さには、目を見張るものがある。

「ドジを踏んだな、オータム。まあこれほどの操縦者がいるのだから、失敗するのも無理はない」

「うっせえ！私は失敗したんじゃないやねえ！戦略的撤退をしたんだ！」

「なんの戦略だ」

ゼフィルスは小型のレーザーガトリングを野次馬たちに向かって撃ち続けながら、A I C慣性停止結界を解除するナイフでオータムを解放する。

野次馬を銃弾の弾幕から守るには、元々狙撃手であるセシリアだけでは少々難しいので、ラウラもワイヤーブレードを使用してレーザーを迎撃する。

「ちっ……守りながら戦うというのはどうも好かん」

「わたくし、凄く戦いづらいですわ！」

ビットを駆使して何とかレーザーを相殺しているが、中々反撃に転じられないのが歯がゆい。



セシリアの戦闘技術ならミサイルビットを射出してゼフィルスを狙うこともできるのだが、ミサイルを日本の領土でぶっ放すことはできないので、防御に徹するしかなかった。

オータムを担いだゼフィルスは、ガトリングを撃つたまま二人に向き直る。

「イギリスの狙撃手にドイツの軍人。なるほど、国の代表にふさわしい強さだ」

「ふん、貴様の賛辞などいらん」

「あら、ラウラさん。こういうのは誰であろうといただいておくべきですわ」

余裕そうに会話している三人だが、この間にも無数のレーザーが撃ち続けられているし、それを相殺させている。

ISを駆る軍人どころか、代表候補生や代表操縦者でさえ難しいことだ。

「貴様らのことは覚えておこう。ではな」

「おい、てめえ！この担ぎ方はどうにかし——うおおおっ!?急に飛ぶんじゃねえよ!!」

オータムの罵声がどんどんと遠くなっていた。

距離が三キロ以内ならラウラでも狙撃可能だし、セシリアに至っては五キロ離れていてもヘッドショットは可能だ。

しかし二人に与えられていた任務はあくまで捕縛であって、殺害ではない。

「……任務は失敗か」

「ですわね」



「任務、成功しましたっ」

「……………」

大きな胸をパンツと張り、えっへんと誇らしげに言う楯無。

部屋に勝手に侵入されており、いきなりそんなことを言われたクロウは無言で返す。

まあいきなり部屋に入ってきてこんなことを言われたら何も返せないのも無理はない。

「任務……警護のことか？」

「そう！今日で襲撃の恐れが極端に低くなったから、もうお役御免ですって」

クロウがベッドの上に座ると、楯無はニコニコとしながら近寄ってくる。

普段は猫のような女なのに、今はご褒美を待つ犬のような雰囲気だ。

とりあえずクロウは頭を撫でてみる。

「むふう……中々のテクニシャン……」

少し癖のある水色の髪を撫でる。

そうしていると、いつかのゴロゴロと喉を鳴らしそうだ。

「あ……」

十分ほどそうしていると、不意に楯無が声を上げる。

クロウは片手を楯無の頭を撫でたまま、もう片方の手で大きな乳房を揉んでいた。

楯無がかなり密着してきていたので、柔らかな肢体が随分押し付けられていた。

欲望に忠実なクロウが我慢するはずもなく、こうなっているのだ。

「ふう、えっちなね」

「うむ、お前ほどの女なら仕方ない」

何が仕方ないのだろうか？

まあこれまで一夏に付きつきりだった楯無もどうやら期待していたようで、一応合意の上なのだろうが……。

むにむにと服の上から楯無の胸を堪能していたクロウは、突然楯無の身体に顔を寄

せ、匂いを嗅ぎだす。

「ちよつ、クロウ!」

乳房を揉まれながら幸せそうに笑っていた楯無は、顔をカツと赤くする。

自分の好きな人とか関係なく、他人に体臭を嗅がれて良い思いをする者は少ないだろう。

普段から身の回りのことをしつかりとしている楯無なら、女性特有の良い匂いを醸し出しているから大丈夫に思える。

だが今はまだ夏の暑さが残る時期で、今日は密閉された更衣室で激しい戦闘を繰り広げている。

それから生徒会長としての後処理をし、そのままクロウに逢いに来ている。

つまり楯無はまだ汗の匂いとかが残っていて……。

「興奮する」

「ぎゃあつ!変態!えつち!離れろ!」

人を喰ったような立ち居振る舞いをする楯無とは思えないほど乙女な反応。

彼女のファンである生徒が見れば、啞然とするだろう。

……いや、案外かわいいと受け入れられるかも。

きやあきやあと騒ぎながら逃げようとする楯無の身体をしつかりと抱きかかえ、絶対

に逃がさないようにする。

「うひゃあつ!?!な、舐めるなあ……」

染み一つない綺麗な頬を舌で舐め上げる。

ほんのりと汗の味がした。

「あつーふつ、あ、だ、ダメだつて……ああつー!」

顔を舐めていた舌をどんと下げていき、首筋をレルレルと舐めていく。

楯無は嫌がる声は上げているが、身体をビクビクと小刻みに震わせていた。

クロウは楯無が逃げないように括れた腰に鍛え上げられた強靱な腕を回し、自分の身体に引き寄せる。

Eカップの豊かな胸は、制服越しにクロウの身体に押しつぶされる。

首から舌を離すと、楯無の細い首は唾液まみれになっていた。

敏感な楯無は首を舐められる快感に口を開けてぼんやりとしていたので、その口に吸いつく。

「んふつ、んつ、ちゅつ、んんっーちゆる、ちゆる」

舌で楯無の小さな舌を舐め上げる。

楯無は眉尻を下げ、目から涙を零す。

勿論嫌がっていることはなく、久しぶりに快感に酔っているだけである。

「んんっ！はっ！あっ！」

二人とも自然に舌を出し合い、舌だけを絡め合う。

ヌルヌルと唾液を交換し合っていると、口から唾液が零れ落ちる。

「んんんっ、ぢゆるるるるる、んんんっ！」

今度は隙間もないほど唇を押し付け合い、唾液を啜ったり送り込んだりする。

楯無の身体はぞくぞくと弱い快楽を感じていて、それに耐えるためにクロウの武骨な手を取り、指を絡め合った恋人つなぎをする。

「楯無は本当に敏感だな。見ていても愉しいぞ」

「ぶはっ……う、うるさいわね」

クロウのからかい言葉に、楯無は息を弾ませながら恥ずかしそうに俯く。

口を離すと、両者の口からそれぞれの唾液がこぼれる。

もともとエアコンがかかっていなかったたので、部屋はとても暑くなっていた。

「ねえ、暑いわ。エアコンをつけましょう？」

「いや、今は必要ない」

「ちよ、ちよつと!?!」

自分の汗の匂いを気にする楯無は少しでも身体を冷やそうと提案するのだが、クロウはそれを一蹴する。

そして抵抗する楯無の服をまくり上げ、彼女の汗に濡れた肢体を露わにする。

「汗で濡れまくるといふのもいいと思う」

「私はいやー!」

何だか少し危ない雰囲気のカロウに、楯無は悲鳴を上げる。

楯無はただでさえ汗をかいていたのに、先ほどの接吻でさらに汗を分泌していた。

服をまくり上げるとむわつとした熱気がカロウを襲う。

「ふむ、色気のないブラだな」

「こんなことに発展させるつもりなかったんだもの。仕方ないじゃない」

豊満な乳房を覆うスポーツブラを見て言った言葉に、楯無はピッと顔を背けながら

答える。

汗は豊満な乳房に垂れ、深い谷間に沈んでいく。

乳房の真ん中を通って、スポーツブラに吸収される汗もある。

鍛えられて引つ込んだ腹を通り、スカートの中へと消えていく。

「んんっ!」

カロウはスポーツブラの上から、豊かな乳房に吸い付いた。

ザラザラとした生地感触を感じながら舐めていると、汗がしみついているので塩っ

ぽい味がした。

スポーツブラの上からでも分かるほど勃起した乳首を見つけると、舌を尖らせてそこをぐりぐりと押しつづす。

「はっ、ああ、クロウ……っ！」

乳首のある場所を、口内に含んで吸引する。

楯無は自分の胸に赤子のように吸い付いているクロウをドロリと熱にうなされたような目で見つめる。

息もだんだん荒くなっていき、はっはつと押し出されるようにして息を吐く。

クロウは乳首に吸い付きながらも、左手でスポーツブラをめぐり上げる。

「相変わらず見事な乳だ。お前のスタイルは素晴らしい」

「は、恥ずかしいわよ。目を見て言うなあ……」

ブラをまくり上げると、汗に濡れた大きな双丘がぶるつと飛び出すように出てきた。

量感のある乳房は勢いがあり過ぎて、ブラをまくり上げていた左腕にびたつと密着する。

クロウが目を直視して恥ずかしい褒め言葉を言ってくるので、楯無の体温はさらに上がる。

「うあつ、あつ、あつ！」

豊満な乳房の片方を揉むと、むにと指が沈んでいく。





スカート脱がして色気のないショーツも横にずらすと、ヌチャツと液体が糸を引く。

粘着性のあるのは愛液だろうが、おそらく尻穴に垂れて行こうとしているのは汗だろう。

「あ、汗よ汗！全部汗よ！」

楯無は恥ずかしさから、結構恥ずかしいことを口走ってしまふ。

目がぐるぐるとまわっていて、まるで正気でない。

「ふむ……まあ舐めてみればわかることだ」

「え……やつ、あつ！あああつ！ひんつ！あはああつ！！」

むっちりとした太ももをしつかりと抱え込んで、じゆるじゆると音を立てて陰部に吸い付く。

楯無も一際大きな嬌声を上げて、強い快楽を愉しむ。

「あつ！だ、だめえつ！あつ！あつ！あああつ！！」

秘裂を親指で開けて、桃色の綺麗な陰部をさらけ出す。

膣口から溢れてくる愛液を、舌でレロレロと舐めとっていく。

それでも溢れる愛液は、重力に従って尻穴を伝ってシートに染み込んでいった。

「あつ！あつ！あああつ！ひあああああつ！！」

ほぐれた膣内に指を突っ込んで、ズボズボと出し入れする。その間に固くなった陰核を、舌で舐め上げる。

楯無の視界には閃光が発生し、快樂の強さを訴える。

「く、クロウっ！あっ！や、やだっ！いくっ！あっ!!」

陰部に隙間がないように吸い付いて、愛液を啜る。

うつすらと生えた陰毛が鼻をくすぐる。

楯無は絶頂が近づいてきており、嬌声がだんだんと切羽詰ったようになる。

「あああああっ！い、くううっ！あああああっ!!」

なおも陰部に吸い付いているクロウの頭を手で掴み、陰部に押し付けるようにする。

腕を下腹部に持つて行っているのです、二の腕に寝ていても自己主張の激しい乳房が寄せられ、柔らかくそうに形を変えた。

楯無はビクビクと身体を激しく震わせて、絶頂を迎えた。

トロトロと粘着力の強い愛液が、秘部から漏れ出す。

「気持ち良さそうだったな、楯無」

「あ、あ……あ……」

クロウのからかった言葉にも反応できない楯無。

クロウが舌を出しながら顔を離すと、陰部と舌の間に愛液の糸が紡がれた。

陰部は快樂の余韻でひくひくと厭らしく蠢く。

「厭らしいな、楯無。ぐちよぐちよじゃないか」

クロウは自分の服を脱ぎながら言う。

冷房が効いていないので、彼も盛り上がった筋肉の上に汗を光らせていた。

「どうだ？汗に濡れたものも、中々良いものだろうか？」

「あつ、んつ、つ」

いきり立つた男根を、濡れそぼった秘裂にこすり付けながら問いかける。

楯無は答えることはせず、ただ期待に満ちた目でクロウを見つめた。

秘部はすでに慣らす必要がないほど濡れていて、こすり付けるとくちゅつと音がする。

「愛しているぞ、楯無」

「——っ!!」

耳元でボソリと囁く。

クロウの言葉に、楯無はだらしなく顔を緩ませて喜びをあらわにする。

ぞくぞくと気持ちの良い感覚が全身をめぐる。

「あああつ！うあつ！あつ！あああああつ!!」

ズププツと、楯無の膣内の感触を確かめるように、ゆつくりと男根を埋没させてい

く。

楯無は脛を固く閉じ、ビクンビクンと汗に濡れた豊満な肢体を揺らす。とても具合の良い名器の膣は、早く射精に導こうと男根を締め付ける。

「あぁっ！あっ！あっ！あっ！あっ！！」

ぎゅううううつと強く引き締まる膣内。

挿入されただけで達したようで、高い嬌声を上げる。

「挿入<sup>い</sup>ただけで達したか。淫乱な女だ」

口ではそう責めるクロウだが、腰を動かそうとはしなかった。

今日は楯無の反応を愉しむために、少し余裕を持たそうと考えている。

しかし楯無はクロウに抱き着き、蠱惑的に微笑む。

「はぁ、はぁ……ふふ、汗だくになるのもいいかもね」

「そうか」

「ええ……でもまだよ。もつと汗まみれにして？そうすれば私、もつと好きになれるわ」

快楽に身体を震わせながらのおねだりに、クロウは心をくすぐられた。

おねだりされたのだったら応えねばならない。

「いいだろう、激しく犯してやる」

そう言うくとクロウは猛然と腰を動かし始めた。

楯無の太ももを抱え込み、覆いかぶさるようにしながら腰を振る。

「あつ！ああつ！あつ！あつ！あつ！あつ！あああああつ！！」

ジュプツジュプツと卑猥な水音が部屋に響く。

男根が抜けそうになるほど腰を引き、子宮内に男根が入りそうになるほど腰を押し込む。

これを高速で行い、楯無に強い快感を与える。

楯無の膣内はクロウのそれにびったりと形を合わせており、まさにクロウのためのものであった。

「あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！ああつ！！」

楯無の腕を掴んで引っ張り、男根がさらに奥へと入り込むようにする。

すると二の腕の上で、Eカップの丰满な乳房がたぶたと重たそうに揺れる。

膣内を固く大きな男根でかき混ぜられ、愛液が泡立って漏れ出してくる。

「んんっ！んんっ！んんっ！んんっ！んんんっ！！」

腰を振ったまま、口を押し付け合う。

楯無の嬌声はクロウの口内に吸収され、口の端から漏れ出すくぐもった声だけが部屋に響く。

汗に濡れた柔らかな乳房を掴みながら、腰を振りたくる。

楯無も引き締まった美しい脚をクロウの身体に回し、離れないようにする。「んっ！んんんんっ！！く、クロウの汗の匂いっ！」

腕をクロウの首に回し、さらに密着する二人。

Eカップの乳房がクロウの胸板に潰され、さらに両者の汗が混ざり合う。

「はっ！はむっ、ぢゅぶ、ぢゅぶ、ちゅぶ！」

舌を絡ませ合い、身体中で混ざり合う。

汗だけでなく、唾液も口の端から漏れて身体にこぼれていく。

「はっ！あっ！ふふ、クロウの汗……おいし」

口を離すと、汗の滴るクロウの顔を舐めて淫靡に微笑む。

ぢゅくぢゅくと、色々な液体が両者の身体に付着する。

「汗まみれの行為はどうだ？」

「あっ！あっ！あっ！あっ！ああっ！す、好きっ！気持ちいいっ！！」

とうとう楯無は声に出して肯定してしまう。

首を反らして天井を見上げ、気持ちよさそうに顔を崩している。

いつの間にか自分から肉付きの良い太ももを抱え込み、クロウを受け入れていた。

「そうか、ならこれから暑い日はこうしようか」

「あっ！あはっ！あっ！う、うんっ！」

両手両足を使ってクロウに抱き着く。

クロウに誘われて、楯無は嬉しそうな笑顔を見せた。

「ふむ……そろそろ射精だすぞ」

「ふあっ！あっ！あっ！あっ！ああっ！！」

ドチュツドチュツと激しくなる腰の動き。

狭い膣内を男根が押し進み、深いところで射精しようとする。

「ああああああっ！！」

ドクツと吐き出された白い欲望。

楯無も同時に達し、身体を快樂で震わせる。

あふれ出た大量の精液は、太ももや尻にまで飛び散った。

「あああ……ああ……っ」

ぎゅぎゅぎゅつと陰嚢を収縮させて、残った精液も吐き出そうとする。

膣内も少しでも精液を搾り取ろうと、男根を柔らかく刺激する。

汗だく性交渉という新たな世界を開拓した楯無は、それからよく熱い性交渉を求めようになったのは言うまでもない。





「はい、皆学園祭お疲れ様ー。じゃあ早速だけど、織斑 一夏くんがどこの所属になるか、発表するよ」

学園祭が無事とは言えないが終わって数日後、全校集会が開かれた。今回の話の目玉は、もちろんどこが一番投票数が多かったかである。

これで一夏がどこの所属になるのかが決まる。

来客数が多かった部は期待に満ちた目で発表する楯無を見つめ、客足がまばらだった部の者は残念そうにしている。

「一番投票数が多かったのは――」

楯無はそこまで言っただけで少し待たせ。

ゴクリ……と女子生徒たちの喉が鳴る。

こういつた間の使い方の上手さは、流石と言ったところだ。

生徒たちの視線を一身に受ける楯無は、ニヤリと笑って口を開いた。

「優勝は劇場・シンデレラの生徒会！」

「「えええええええつ!」」

多くの生徒たちがブーイングを送る。

生徒会のシンデレラは、客も参加できるようなものであった。

王子に扮する一夏が付けていた王冠を取れば、彼と同室になれるということ、多くの生徒たちが参加した。

しかし参加するには生徒会に投票する必要がある、そういつたからくりで生徒会が優勝したのだった。

……まあ嘘はついていないし、今回はまともで民主的な決定だった。

「まあまあ、落ち着きなさいって。別に生徒会が一夏くんを独占するとか言っていないでしょ?」

扇子を開けて口に当てながら言う楯無。

激しいブーイングを叩き付けていた生徒たちが、『え?』と話しを聞く態勢になる。

「一夏くんは申請があつた部活に、一時的に派遣することにします」

これを聞いた生徒たちは、一応納得する。

それどころか、勝ち目のなかった部活の生徒は大喜びしている。

ちなみに当事者である一夏は、もうどうにでもなれと達観していた。

「ここ数日続いた楯無との生活で、彼女が色々常識はずれなことを理解していたからだ。」

「かいちよー！ミキストリくんは派遣されますか!？」

「だめよ。クロウは私のも——」

「もちろんです。彼の場合も申請書を提出してくださいね」

嫉妬心丸出しで所有宣言をしようとした楯無だったが、忠実な専属メイドの布仏 虚にマイクを奪われる。

頬を膨らませてぶーぶーと文句を垂れるが、虚が全面的に正しい。

クロウの貸し出しがあることを知った一部の生徒たちは、歓声を上げて喜ぶ。

そして始まったのは、一夏とクロウに対するアピール合戦だった。

「一夏くん！是非サツカー部に来てよ！」

「ミキストリくんは柔道部なんてどう!?!寝技、あるよ！」

「ほう、寝技……」

「クロウ……いやらしい……」

眼鏡をきらりと光らせた更識 簪に批判され、大人しくなるクロウ。

……いや、無表情だが頭の中では柔道部員とくんずほぐれつをしている妄想をしていた。

こうして一夏は生徒会に入ることになり、クロウもまた色々な部活に派遣されることになるのだった。

## 第六章

## 教師ハ淫ヲニ

「んん、もう九月か〜」

世界で二人しかないＩＳの男性操縦者である織斑 一夏は、食堂でご飯を食べながら独り言を發した。

半年前まではＩＳに触れたことすらなかったのに、今では世界各国から優秀な人材が送られてくるＩＳ学園の生徒。

人生はなにが起こるかわからないものである。

「九月といえば、一夏の誕生日は九月だったな」

一夏の隣に座ってサンマを突いていた篠ノ之 箒は、その独り言を拾う。

一夏に好意を寄せている彼女は、彼との距離を縮めるいい機会だと考えていた。

彼女のライバルは多く、今一番彼に近いのは自分とはいえ、安心することはできない。「そういえば、クロウって誕生日いつなの?」

誕生日の話題に便乗して、クロウの情報を聞き出そうとする風 鈴音。

それには一緒に食事をとっていた他の専用機持ちたちも食いついた。

クロウと色々な意味で関係の深い彼女たちだが、あまり彼の詳細な情報などは持つていない。

「ふむ……」

シャルロットと楽しそうに会話していたのを切り上げて、考える仕草を見せる。

シャルロットは楽しい時間を邪魔されて、少しご立腹の様子。

だが彼女も知りたい情報だったので、鈴をジト目で見ることなく、クロウの方を見る。

「いつだったか……覚えていないな」

「誕生日を覚えていらつしやらないのですか?」

クロウの返答に驚くセシリア。

まだ高校生なのだから、誕生日は覚えている者が大半のはず。

ちなみにセシリアはイギリスの名門貴族出身である。

両親が早逝したが、彼女の膨大な努力によって未だ名門と呼ばれている。

彼女の誕生日にはパーティーが開かれ、盛大に祝われるので、よく思い出に残っている。

「私も自分の誕生日は知らないぞ。あまり興味もないしな」

そう言つてクロウを援護するのは、頬を膨らませてサラダを食べているラウラだ。

彼女はドイツ軍によつて生み出された遺伝子強化試験体の試験管ベビーである。

生まれた時から強く立派な軍人になるように訓練されてきた彼女は、誕生日に祝つてもらうことなどなかった。

それにクロウと出会うまでは『ドイツの冷水』と陰口をたたかれるほど他者を寄せ付けたので、今でも『シユヴァルツェ・ハーゼ』の隊員以外からは避けられている。

「ふふ、嫁と同じだな」

「そうだな」

しかし一般論では寂しいと言える境遇のラウラだが、嬉しそうにクロウを見つめる。

彼女からすれば、クロウと他の者とは比べるのもおこがましいほどの差があった。

大多数の人間にちやほやされるより、クロウに思い切り甘えたいというのが彼女だった。

そしてクロウもそれを拒むことはない。

彼女を骨抜きになるほど甘やかすだろう。

「と、ところで明日から『キャノンボール・ファスト』の調整に入るけど、あんたたちはISに手を加えるの?」

クロウとラウラとの間の甘いピンクの雰囲気を潰すため、鈴は新たな話題をふる。

『キャノンボール・ファスト』はIS学園の行事の一つで、ISを使用したレースである。

一学年に専用機持ちが8人と異常な多さの第一学年は、専用機持ちと一般生徒と分けてレースが行われるので、実力の拮抗した激しいレースが見られることが予想される。

「あー……俺と箒はどうなんだろう? 束さんがつくつたやつだしな」

「うむ、他の会社の製品は追加装備できないだろうし……」

一夏の『白式』と箒の『紅椿』はISの生みの親である篠ノ之 束が開発または改良したISだ。

さらにこの2機は世界のどこの国も開発できていない第4世代型ISなので、既存の武装がインストールできるのかもわからない。

実際『白式』は、他の武装をインストールできない。

「いや、お前たちは少し機体を調節するだけで大丈夫だ。機動力は十分にある」

ラウラは腕を組みながら教える。

流石稀代の大天才が設計したISと言うべきで、この二機は既存のISを軽く凌駕するスペックを持っている。



「わたくしは『ストライク・ガンナー』を搭載していますわ」

セシリアの『ブルー・テイアーズ』には強襲用高機動パッケージである『ストライク・ガンナー』を装備させることができる。

専用機持ちの面々の中で、彼女だけが専用の装備を持っていた。

「あたしの国も高機動パッケージを研究しているみたいだけど、『キャノンボール・ファスト』には間に合いそうにないわね」

はあ……とため息を吐く鈴。

彼女の専用機である『甲龍』シエンロンは、どちらかと言えばパワータイプなので、専用のパッケージがないと少々不利だろう。

「僕の専用機は色々手を加えやすいからね。パッケージじゃなくて、装備を追加させて速く飛べるようにするよ」

シャルロットの専用機は、この中で唯一の第二世代型である。

故に研究も進んでいて装備も豊富で、そういった戦闘のための装備も数多く存在している。

「私の専用機にパッケージはないが、本国にある姉妹機にパッケージがある。おそらくそれを調整して、レースに臨むことになるだろう」

マカロニを口に含みながら、ラウラは言う。

「そーいや、クロウも俺たちと同じで束さんに作ってもらった専用機なんだよな？ お前も装備しないでレースに出るのか？」

「いや、私は武装が豊富だ。探せば機動力を上げる装備も出てくるだろう」

クロウの専用機の特徴といえば、やはり武器の多さだ。

シャルロットの専用機も、他のISとは一線を画すほどの武装を積んでいるが、クロウはそのさらに上をいく。

偏に、束の愛情のためものである。

「あ、そーだ。クロウ、俺がいつから各部活に派遣されるか知っているか？」

一夏の心配事は『キャノンボール・ファスト』だけでなく、先日決まった学園祭のことである。

生徒会副会長の席に着いた一夏は、これから先色々な部活に派遣されることになる。

しかし申込みが殺到していて、今はまだ派遣されていない。

「分かんらん。だが私はすでに何か所か派遣された」

「へー、もう派遣されたのか」

クロウもいつの間にか生徒会に入れられており、庶務という役職を与えられていた。

人気者の一夏と違って、特定の部活からしか申込みが来ないクロウは、すでにいくつかの部活に派遣されていた。

「どこに行つたんだ？」

「そうだな……。テニス部にラクロス部、料理部と茶道部。ハンドボール部や柔道部だな」

柔道部やハンドボール部などの活発な運動部に人気のあるクロウは、よく申込みがあるので出向いている。

柔道の寝技で、女子高生の柔らかい肉体を堪能しているなんてことはない。しっかりとしている。本当に。

テニス部やラクロス部も運動部なので比較的クロウに友好的で、特にイギリスと中国の代表候補生が強ククロウを求めるので、そこにもよく行っている。

意外なのは文化部の料理部と茶道部だが、そこにもフランスとドイツの代表候補生の強い意向のおかげだと言っておこう。

それに最近では他の部員たちもクロウを怖がることなく、だんだんと態度が軟化してきていた。

「へー……。どんな感じだった？」

「ふむ……。テニス部に行ったときは、基本的には雑用だな。ボールを拾ったり、タオルを渡したり」

部活終わりに、程よく汗をかいた生徒たちの汗をぬぐったりもしていた。

とくにセシリアのときは、更衣室に二人で入ると中々出てこなかったこともある。

頬を染めているセシリアを見て、クロウに好意を寄せている三人はなにがあつたか悟つたようである。

「ラクロス部も似たようなものだ。基本的には雑用だ」

同じく鈴も中々更衣室から出てこなかった。

「料理部は試食だな。シャルロットの肉じゃががうまかつた」

「えへっ」

褒められて嬉しそうに破顔するシャルロット。

しかし日本人男性に好印象を与える肉じゃがを作つて食べさせるとは、流石あざといと評判のシャルロットである。

……クロウが日本人かどうかはさておき。

「茶道部は道具の持ち運びなどをした。ラウラの和服姿は似合つていた」

「う、うむ……」

美しい髪は、色が黒でなくて銀色でも、和服に映えるのだと認識したクロウだった。

胸も慎ましいため、和服美人と言つても過言ではなかつた。

片目が眼帯というのも、何らかのギャップがあつてよかつた。

「ふーん、雑用なら俺でも何とかかなりそうだな」

クロウの話聞いて、一夏は自分でも何とかできそうだと安心する。箒はそんな一夏を横目で見て、剣道部の部長に彼を呼んでもらおうと考えていた。



「む……」

食堂で皆と別れ、自室に戻ってきたクロウ。

念のために一応鍵をかけているのだが、何故か扉が開いていた。

大体予想をして部屋に入ると、予想通りの人物がベッドの上で寝転んでいた。

「やつほー、クロウ」

この部屋の主人が帰ってきたのを見て、水色の髪の毛の生徒会長は笑顔で手を振る。

不法侵入をしていることに目を瞑れば問題はないのだが、今の彼女の服装は十分に問題があった。

「ひどく扇情的な恰好だな」

楯無の恰好は、制服ではなく何故かワイシャツ一枚だけだった。非常に大きなワイシャツなので、彼女が着るとダボダボである。

大きく開いた胸元からは深い谷間が覗け、肉付きの良い太ももがスラリと伸びている。

体を動かすたびに、チラチラと桃色のショーツが見え隠れする。

袖もたつぷりと余っていて、まるで本音の制服のようになっていた。

「ふふ、裸ワイシャツよ。可愛いでしょ？」

クロウを挑発するように艶やかな笑みを浮かべる楯無。

「あ、でも今日はちゃんとした目的があるの。クロウには必要ないと思うけど、一応忠告かな？」

そう言うのとベッドに座り直し、まじめな顔をつくる。

しかし恰好が恰好なので、あまり締まっていない。

「アメリカ軍の秘密基地が、何者かに襲撃されたっていう情報が入ってきたの。襲撃者は『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルを狙ったらしいわ」

聞き覚えのある機体名に、クロウはふと思り返す。

今から二か月ほど前の臨海学校で、突然起きた事件。

アメリカとイスラエルが共同開発していた『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルが暴走し、その対処をIS学園の生徒たちに託された事件だ。

その事件は各国代表候補生たちの活躍によつて被害なく解決することができた。

「前も一夏くんのISを狙つて襲撃もあつたし、クロウも気を付けてね」

「うむ、了解した」

と言つても、楯無はクロウがテロリストに不覚をとるとは到底考えられなかつた。

卓越した戦闘技術に、強力な専用機を持つクロウが負けるとは思えない。

……いや、ハニートラップに簡単に引っ掛かりそうだ。

楯無はありえそうな未来を想像し、冷や汗を垂らす。

「用件は終わりか?」

「あ、もう一つあるの。クロウ、ワイシャツ脱いで」

いきなり爆弾発言をする楯無。

クロウを何故かと疑問に思いながらも、素直に着ていたワイシャツを脱いだ。

「それをどうするのだ?」

「洗濯よ。それ以外にないでしょう?」

「む、そうか。助かる」

クロウの質問に、当たり前じゃんと言つた表情を浮かべて言う楯無。

しかし彼女はワイシャツで別の使い方をしている。

今着ているクロウのワイシャツは、匂いが取れてしまつて使えなくなつたのだ。

「ふふーん♪」

楯無は上機嫌に鼻歌を歌いながら、今この場で着替えだす。

ワイシャツを脱ぎ落すと、女性の理想と言えるほどの肢体が露わになる。

桃色のブラに包まれた量感のある乳房。

鍛えられて引き締まつた腰。

たつぷりと肉ののつた尻。

スラリと脚線美が美しい脚。

「……………」

それを見てクロウはうんうんと頷く。

ご満悦の様子である。

「ふふふ、良い匂い……………」

相変わらずダボダボの袖を鼻に持つて行き、くんくんと匂いを嗅ぐ。

すると楯無の顔が、幸せいっぱいといった風に蕩ける。

その表情は、老若男女問わず魅了されて興奮してしまいそうなほど艶やかだった。

まあクロウは少し胸を高鳴らせたくらいであつたが……。



「じゃあね、クロウ」

本当の目的であるワイシャツを手に入れた楯無は、さつさと部屋を飛び出して行ってしまう。

匂いが一番強い今に、何かに使おうというのだろう。

楯無が部屋を出て行って少し経った後、コンコンと扉が叩かれる音がした。

「む、誰だ？」

「あ、シャルロットだよ。入ってもいい？」

クロウはそれを聞くと扉を開けた。

扉の前で立っていたシャルロットは、頬を染めてどこか照れた様子だった。

「どうかしたか？とりあえず、入れ」

「う、うん。お邪魔します」

来客を外で立たせたままとはできないので、部屋へと招き入れる。

まあシャルロットならいつでも歓迎していたのだが。

クロウはシャルロットを適当な場所に座っておけと言ったあと、紅茶を淹れ始める。

料理スキルは全くないが、お湯を注ぐことくらいはできるようだ。

「ありがとう」

シャルロットは紅茶を受け取り、礼を言う。

暖かい紅茶を飲むと、緊張していて固くなっていた身体がほぐれていくのを感じる。

「……それで？ 私に何か用があるのだろうか？」

「あ、うん」

シャルロットが落ち着くのを待って、クロウは話しかける。

なんだかんだで気が利く男だ。

「その……ね？ いつもクロウにお世話になっているから、お礼がしたいんだ」

「ふむ……私が世話になっているような気がするが……」

分かっているじゃないか、この男。

クロウの部屋に来たら洗濯をし、弁当を作り、掃除をし……などなど、最早完全に通り妻状態である。

しかもそれを他のヒロインたちには悟らせないシャルロットのあざとさも相当である。

まあ楯無など、勘のいい者は薄々気づいているが。

「いいのっ！ それでね、何かプレゼントしたいんだ」

「むう……だが私は特に欲しいものはないぞ？」

基本的に何でも欲しいものは手に入れるクロウだが、今は特に欲するものはなかった。

お気に入りの女性に囲まれて、美味しい飯も食べられて、特に不満などないのだ。

クロウにお礼をしたい……というより二人きりで出かけたいたいシャルロットは、待つてましたとばかりに目を煌めかせた。

「じゃ、じゃあさ。何がいいか、僕と街に行つて見てから決めない?」

熱くなる頬を無視し、ドキドキと高鳴る胸を気合で押さえつける。

クロウはそんな様子のシャルロットを見て、少し考えたあとに頷いた。

「うむ、そうしようか」

「ホント!?!」

顔を満開の花のように輝かせる。

芸能人より余程可愛いシャルロットの満面の笑みを見られるのは、この男くらいだろう。

クロウはその笑顔を見て、自分も幸せになる。

「えへへ、じゃあ週末にデートしようね」

「うむ」

その後もクロウの部屋で、楽しそうな会話は続くのであった。



生徒たちが寝静まり、夏の蒸し暑さがまだ残る一年生寮の寮長室。

そこは窓も玄関も完全に締め切られており、とくに蒸し暑さがある。

部屋の中は熱気と、どこか生臭い匂いが充満していた。

「うっ、くっ、あっ、あっ！」

地面には衣服が脱ぎ散らかされており、ブラやスーツが落ちていた。

ベッドの上では、女性が身体中を汗で濡らしながら、後ろから男に貫かれている。

女性の顔の蕩け具合と陰部から滴る愛液の量で、もう長い間交わっていることがわかる。

「あっ！あっ！あっ！あっ！！」

背後からまるで獣のように犯され、女性——織斑 千冬は甲高い嬌声を上げる。

生徒たちから慕われ尊敬されている彼女の普段の姿からは、まったく想像できないほど乱れている。

「良い声で鳴くではないか、千冬」

「うあつ！くつ！う、うるさい……っ！」

クロウの厭らしい言葉に、千冬は顔をカアツと赤くして言い返す。

しかしすぐにまたあられもない悦びの悲鳴を上げてよがり狂う。

固く盛り上がった下腹が、引き締まって張りのある尻に押し付けられ、パンパンと音が何度も鳴る。

Eカップのたわわに実った乳房を撫でるようにして愛撫する。

固く尖った乳房の頂点が掌に当たって、存在を示す。

腕を持ち上げ、露わになった汗に濡れた腋を舐め上げる。

「随分と食欲になったな。抜こうとすると締め付けてくるぞ」

「うぐうううっ!!」

ゆっくりと腰を離そうとすると、膣内がぎゅうううつと男根を締め付ける。

引き抜いた陰茎は、先ほどまで出した自身の精液と白く濁った愛液が混ざりあつた液体が付着していた。

千冬の陰部もドロドロに蕩けており、何度も男根で貫かれたことによつて精液を搾り取る名器となっていた。

「くつ、あまり調子に乗るなよ！あつ、んくつ！」

「むっ」

やられて黙っているほどおしとやかではない千冬は、自分から身体を動かし始める。四つん這いになっている状態で、男根を啜えたままの腰を左右に捻る。

ぐりぐりゆと、男根を色々な方向から締め付ける。

色々な液体が混ざり合っている陰部からは、ちゅぷちゅぷと淫猥な水音が響いてくる。

「んっ！くふうっ！ど、どうした？えらく気持ちよさそうではないか！」

そう言いながら千冬は腰をひねるのを止め、身体を前後に揺らしてピストンする。

大きい引き締まった尻を振りたくって奉仕してくる姿は、クロウの心をくすぐった。

横にずらしていたショーツがさらにずれ、小さく蠢く尻穴までさらしてしまう。

男根にかきまぜられ泡立った淫液が両者の陰毛にへばりつく。

「ほう、言うではないか」

「あっ！あっ、あんっ！くうっ！ま、待て！はっ、ああっ!!」

淫らに自分から腰を振って可愛らしく挑発してくる千冬の括れた腰を掴み、激しく男根を突き入れる。

膣内を抉られる快感に身体を支えていた腕を折り、シートに上半身を寝かせる。



又チュ又チュと粘り気のある淫らな音が何度も何度も出る。

「んんんうっ！んんっ！んっ！んっ！！」

両者ともに大きく口を開け、舌を絡め合う。

混ざり合った唾液は口の周りを濡らし、顎を伝って引き締まった千冬の身体の上に着いていく。

量感のある乳房の頂点にある固い乳首をコリコリと指でこねる。

もう片方の乳房は汗を纏っていることを活かして、ヌルル……とゆっくりと撫でる。

「んんっ！んっ！んふっ！んんっ！んっ、んっ、んっ！！」

撫でていた片方の乳房を、下乳から持ち上げて素早く撫で上げると、プルルツと乳肉が波打つ。

片方の乳房は、乳首を少し手荒く指でピンピンとデコピンするように弾く。

口の中の唾液を全て吸いだそうとし、ぢゅるるるると吸い合う。

「っはああああ！あっ！あっ！！イ、イク！イク！！」

唇を離すと、粘り気が強くて太い唾液の橋が架かる。

整った眉尻を下げ、普段は強い意志を感じさせる瞳からは涙を零す。

「ああああっ！ひああああああっ！！」

目を固く瞑って、ガクガクと激しく身体を震わせて絶頂する。



陰部からは勢いよく潮をプシュツと吹く。

スラリと脚線美を描いている脚は、頼りなさそうに内またに寄せている。

飛び散った潮は太ももを伝い、長い脚をゆつくりと滑っていった。

「うぐっ！あつ！ま、待て！まだイって……っ!!」

絶頂を迎えて、クロウに開発された肢体がさらに敏感になっているのにもかかわらず、クロウは固いままの男根を膣内に押し入れる。

男根をピストンするたびに潮と小便が混ざったような液体をシーツの上に零す。

未だ絶頂を続けている膣内は、男根をぎゅううううと強く締め付ける。

「膣内なかが精液が欲しいとうねっているぞ？この淫乱め」

「うぎっ！いっ！あつ！あつ！あつ！あつ！あつ!!」

クロウの罵倒に何故か快感を覚える千冬。

言い返そうとするも、男根で遅く膣内を抉られては嬌声しか出せない。

膣内は名器らしく精液を搾り取るうとうねうねとひねっていた。

大きく長い男根は、子宮口に触れてしまうほど奥へと押し進んでいた。

「膣内なかに射精だすぞ。いいな？」

「あああああつ!!あああああああつ!!」

クロウの問いかけに、千冬は獣のような嬌声を上げて応える。

肉感的で張りのある尻肉を食い込むほど握りしめ、強く強く男根で貫く。

精液を待つ陰部は、赤く充血して腫れ上がり、陰核は固く勃起し、愛液を垂れ流す。うつつすらと生えた陰毛には、クロウの精液と千冬の本気汁が付着して白く染められていた。

「千冬、射精すぞ」

「ふあつ！あつ！あつ！射精せ！私の腔内に全部射精せ！」

括れた腰を抱えて、ピストン速度を速める。

玩具のように荒々しく突き立てられ、重力によつて下に垂れているEカップの乳房がぶるぶると揺れる。

「あはあああああああつ!!」

ドブドブと今日一番の射精量で、千冬の腔内を精液で満たす。

クロウは尻肉に指を食い込ませるほど強く握り、搾り取られる快楽に耐える。

千冬もまた同時に達し、ビクンビクンと身体を撥ねさせる。

一通り出し切ったあと、ゆっくりと男根を引き抜いた。

「ふう……」

「あ……は、あ……」

激しい運動に流石に疲れたのか、クロウはあまり体重がかからないように気を遣いな

がら、千冬の背中に覆いかぶさる。

千冬はまだ絶頂していて、時折ブルブルと身体を小刻みに震わせた。

その後世界最強である千冬はすぐに回復し、未だ臨戦状態のクロウとさらに熱い夜を過ごした。

抵抗したがクロウに無理やり連れだされ、廊下やトイレなどで誰にバレるかわからぬ背徳感を感じながら、色々な体位で犯されたのは別の話。

それから千冬が『もしかして私はマゾなのか……？』と悩んだのも別の話。

## シャルロットの凱歌

「あ、クロウ！」

デートの約束をした週末の駅前。

一人の可愛らしい金髪フランス人が、駆け足で待ち合わせをしていた人に駆け寄る。

風によって太陽に煌めく金髪がたなびくのと同時に、キラキラと輝く汗を落とす。彼女がテレビに出るモデルやアイドルなどよりも可愛いので、多くの人の目を引いている。

彼女——シャルロットは男の前に着くと、荒くなつた息を整える。

「ご、ごめんね、遅れちゃって」

「いや、私も今来たところだ」

シャルロットの謝罪に、クロウは典型的な答えを返す。

かがんでいるため上目づかいでクロウを見上げていることになり、さらに自分が遅れてきたということからの罪悪感からか、少し目を潤ませている彼女に『許さない』と言える男はいないだろう。

……これは計算でしているのか、それは彼女にしかわからない。

ちなみにシャルロットは待ち合わせ時間に遅れたわけではなく、むしろ四十五分前に待ち合わせ場所に到着している。

ただクロウが待っているのが一時間前からだということが問題だった。

「うむ……今日の服装も似合っているな」

クロウはシャルロットをじっと見つめて言う。

珍しく邪魔が入らないで手に入れた二人きりのデート機会なので、シャルロットはいつも以上に身なりに気を遣っていた。

髪形は何度も直しているし、ちよつとだけ薄くりップを唇に引いている。

ただでさえ柔らかい唇が、プルンと瑞々しく弾んでいる。

彼女のスタイルは今の服装を完全に着こなしており、彼女の可愛らしさを十分に引き出していた。

「えへへ、ありがとう」

シャルロットも褒められてご満悦である。

クロウのために一生懸命おしやれして、それが本人に褒められるほど嬉しいことはないだろう。

彼女の幸せそうな笑顔に、異性同性問わず視線が集まる。

テレビでもそうそう見られない美少女の満面の笑みに、多くの者が魅了される。

「ふむ……では行くか」

「うんっ」

待ち合わせしていた時間よりかなり早くなつたが、デートの時間が長くなつたので不満はない。

すつと差し出されたクロウの大きな手を握り、また幸せそうに笑う。

「プレゼントの話だけだね、時計とかいいかなあつて思っているんだけど……どうかな？」

「時計か？……高いだろう」

「それは大丈夫だよ。僕も代表候補生だし、支給金とかもらえるからね」

シャルロットのプレゼント内容に苦言を漏らすクロウだが、シャルロットは大丈夫と胸を張る。

代表候補生は公務員に近い立場で、国からそれなりの金額が支給される。

シャルロットのようにやりくり上手な者や、ラウラのようにろくに使わない者なら中々の貯金額があつた。

「あのお店に入ろうよ」

シャルロットは目についた時計店を指さす。

そこは高級感の漂う店で、実際に入つて見るといかにもお金を持っていますよといった風の客が多くいた。

そんなところに可愛らしくてまだ未成年の美少女が入つてきたので怪訝な視線を送る店員だったが、隣にいる巨神兵……もといクロウを見てさつと目を逸らした。

「あの子、容姿はめちやくちや可愛いのに、男を貢がせているのか……」

何か壮絶な勘違いをされていた。

シャルロットは他人に貢がせるような女ではないし、貢ぐような女でもない。

例を挙げるなら、自分の容姿と話術を巧く駆使して貢がせるのが楯無。

ダメな男に惚れたらとことん貢いでしまうのがセシリアだろうか……。

「さ、クロウ。気に入つたのがあつたら言つてね」

「了解した」

クロウとシャルロットは仲睦まじく手を結びながら、店内を歩く。

しかし時計などあまり見ないクロウとしては、時計の良し悪しがあまりわからない。

時計を持つているのは持つているのだが、懐中時計だったりする。

「ふむ……決まらん。シャルロット、お前が選んでくれないか？」

「え、いいの？」

「うむ、頼む」

シャルロットはクロウに任せられて嬉しそうに笑う。

それからシャルロットは見回りながら目をつけていた物を買った。

それはシンプルな意匠だが、どこか気品が感じられる腕時計だった。

これはシャルロットが持つている腕時計の男性版であり、所謂ペアアルックというものであった。

「はい、大切にしておね」

「うむ、ありがたくもらおう」

包まれた商品をシャルロットから受け取る。

腕時計の入った包みを持つクロウの手はとても慎重で、大柄でごつい彼には似合わない仕事だった。

しかしシャルロットは自分のプレゼントを大切にしようとしてくれていることがわかり、嬉しい気持ちで心を満たした。





クロウとシャルロットがほんわかとしたデートの時間を楽しんでいるとき、IS学園のアリーナで疾風の如き速さで移動している者がいた。

イギリス第三世代型ISである『ブルー・ティアーズ』を駆るその少女は、美しい金髪をたなびかせてアリーナを駆け抜ける。

そして少しの間空中を飛び回ったあと、彼女は先ほどまでの動きとは打って変わって、ゆっくりと地面に降り立った。

「ふう……上々ですわね」

『ブルー・ティアーズ』の持ち主、セシリア・オルコットは満足気に頷くと、展開していたISを待機モードのイヤリングに戻した。

物々しい装備から解放されたセシリアは、薄く密着したISスーツしか身に纏って

ない。

必然的にふくよかな胸や細い腰。どんと突き出た臀部やモデルより美しい脚線美などの卓越したスタイルが、鍛錬していた多くの生徒たちの前にさらされる。

「くっ……！オルコットさんのあの胸！うらやましい！」

「スタイルもいいよね。あー、私もあんなスタイルになりたいな」

「オルコットさんってイギリスの雑誌とかでも取り上げられているんでしょ？それに代表候補生って……本当すごいな」

尊敬や憧れ、嫉妬の感情を込めた多くの視線を感じながら、セシリアはアリーナを後にする。

「もう、クロウさんったら。シャルロットさんと一体どこに出かけていらっしやるのかしら」

セシリアは二人がデートしていることを知っていた。

せっかくの休日なのでクロウの部屋に行ったのだが、クロウは不在だった。

ではとクロウに近い位置にいる女性たちを調べた結果、シャルロットだけが不在だった。

もう二人が二人きりで出かけたことは分かるだろう。

セシリアの頭の中では、次の休日のさいにクロウをデートに誘う計画がひそかに練ら

れていた。

しかしクロウがいないとわかったら休日を返上して自己を高めようとするのは、流石イギリス代表候補生だと言えるだろう。

「しかし汗をかいてしまいましたわね。早くシャワーを浴びて身体を綺麗にしましよ  
う」

そう呟きながら、彼女は更衣室の扉を開ける。

そこには鍛錬を終えて身体を休めている生徒や、今から鍛錬を行おうとしてISスー  
ツに着替えている生徒など、広い更衣室には寂しい数人がいた。

セシリアはその中に親しい人物を見つけた。

「あら、鈴さんではありませんか」

「あ、セシリアじゃない。あんたも訓練していたの？」

セシリアが声をかけたのは、ツインテールと笑った時に見える八重歯が可愛い風  
鈴音だった。

あまり長身とは言えないセシリアよりも小さな体躯をしている彼女だが、それでも彼  
女は中華人民共和国の代表候補生だ。

「ええ、ストライク・ガンナーを装着して飛ぶのはあまりしていませんでしたしね。鈴さ  
んはスラスタを増設するんですの？」

「ふっふーん。あんただけがパッケージ持ちだと油断しないことね」

鈴はドヤ顔で胸を張る。

彼女もISスーツを着用しており、身体の線がはつきりと浮かび上がっている。

しかしそうすると向かい合っているセシリアの豊満さと鈴の貧相さが残酷にも現実を突きつける。

と言つても鈴のスタイルはむしろかなりよく、ただ胸が慎ましいだけである。

彼女の身体には、セシリアよりも張りがあり、健康的で触れ合うだけで気持ち良さが生まれるのだ。

「あら？ 鈴さんはパッケージが間に合わないとかおっしやられていませんか？」

「間に合ったのよ」

鈴が母国のIS開発局に圧力をかけたなんて事実はない。本当です。

担当者が半泣きになりながら、徹夜を繰り返して作り上げたという事実もないです。本当です。

「ま、レースでどれくらいのパッケージなのか見せつけてやるわ」

「ふふふ、それは楽しみですわね」

二人とも不敵な笑みを浮かべ、睨み合う。

他の生徒から見たとき、両者から凄まじいオーラが出ていたとのこと。

この二人、性格も容姿も似ていないが、負けず嫌いという点に置いては共通していた。



「さて、ちようどいい時間になったな」

シャルロットはクロウの言葉に首を傾げるが、空腹感を感じて納得した。

楽しいときは時間が経つのが早く感じるものだが、今のシャルロットにはまさにそれが言えた。

「あ、あのお店に入ってみない？」

シャルロットが示したのはおしゃれなオープンカフェだった。

そこは少し値段が張る料理が多いが雰囲気も良く、デートをするカップルが多かった。

「そうだな、入るか」

「うん」

二人は仲良く手をつなぎながら入店する。

店員に案内されて、席に着く。

この店にはデザート中のカップルが多く、女性もおしゃれをしていて自分を可愛く見せているのだが、その中でもシャルロットが一際輝いていた。

その証拠に、彼女がいるのにもかかわらずシャルロットを見て惚ける男性が後を絶たない。

「注文はお決まりになりましたか？」

「うむ、私はこのランチセットをいただこう」

「あ、僕も同じものでお願いします」

注文を聞きに来た店員に告げると、店員はかしこまりましたと頭を下げ去って行った。

二人が頼んだのは蟹クリームスパゲッティとデザートにアイスがついたランチセットだった。

料理が来る間、二人は楽しみに世間話を交わす。

それは最近の授業についてだったり、ラウラが可愛いだったり、あの服が可愛いだったり、ラウラが可愛いだったり……。

「お待たせしました」

そうしていると、店員がパスタを持ってきた。

二人はいただきますと合掌してから食べ始める。

シャルロットはフランス人だが、日本独自の文化にもしっかりと順応していた。

「うーん、おいしいね、これ」

「うむ」

「クロウからすれば量は明らかに足りないのだが、確かに味は美味しいので不満はない。」

ただシャルロットの料理の方が美味しいと感じていた。

蟹クリームスパゲッティを食べ終えると、デザートのアイスが運ばれてくる。

二人で味が違うようで、クロウはバニラ、シャルロットはストロベリーだった。

「わあ！イチゴの味が口に広がる！」

シャルロットはストロベリーのアイスを口に含むと、頬に手を当てて顔を蕩けさせた。

「はい、クロウもどうぞ。あーん」

「む……」

おすそ分けとクロウの口元にアイスが載ったスプーンを差し出す。

クロウはそれを口に含み、アイスの味を楽しむ。

シャルロットは学生のデザートのレストランができてうれしそうである。

「ねえねえ、クロウのもちようだい」

「む、わかった」

クロウもバナラのアイスのスプーンに載せて、シャルロットの口の中に置いた。

バナラの味も楽しんでるが、何か別のものをもっと楽しんでいるように見える。

溶けてなくなったアイスを載せていたスプーンを、何故か口に含んだままだ。

「もういいか？」

「うん、美味しかった」

それはアイスが美味しかったのか、それとも関節キスが美味しかったのか……。

ニコニコと笑っているシャルロットの表情からは読み取れなかった。





クロウとのデートを終えたシャルロットは、自室で何やらいそいそと準備をしていた。

同居人であるラウラはまだ自主訓練に出ているらしく、この部屋にはいなかった。年齢十五にしてドイツ軍の特殊部隊隊長を務めるのは、何もI Sが使えるということだけではないのだ。

卓越した戦闘能力に冷静な判断を下せるラウラでこそ、『シユヴァルツェ・ハーゼ』を率いることができているのだ。

それはともかく、今はシャルロットのことである。

「ふふ、クロウ、悦んでくれるかな？」

シャルロットはそう言って艶やかな笑みを浮かべる。

まだ高校生とは思えないほどの色気を醸し出しており、男が見れば思わず見てしまうことは間違いない。

「さ、クロウの所に行く」

シャルロットは部屋着として愛用しているジャージを着用し、意気揚々と部屋を出て行った。

向かう先はデート相手のクロウ・ミキストリの部屋。

誰か他の女がいないことを祈りながら、シャルロットは歩いて行った。



「む……」

シャルロットと楽しい時間を過ごし、今は自室でのんびりとしていたクロウ。コンコンと扉を叩かれる音を聞き、玄関へと向かう。

「どうかしたか？シャルロット」

扉を開けて訪ねてきた人物を見る。

そこには上下をIS学園指定のジャージで包んだシャルロットが立っていた。つい先ほど別れたばかりなので、何とも言い表せない不思議な雰囲気になる。

「今大丈夫だった？入ってもいいかな？」

「うむ、問題ない」

クロウは快くシャルロットを迎え入れる。

シャルロットはなんだかんだと言い訳をつけて、よくクロウの部屋に入り浸っている。

ヒロイン勢では三番目の多さである。

ちなみに二番目に楯無。一番目にラウラが位置する。

四番目に何故か東がランクインしていたりするが、彼女なら何でもこなせそうなので問題ないのだろう。

「紅茶でいいか？」

「うん、ありがとう」

よく来る人物が好んでいる飲み物はしっかりと備蓄されていた。

シャルロットは紅茶。楯無はコーヒー。ラウラは緑茶である。

紅茶を淹れたコップをシャルロットに渡す。

渡されたそれをちびりと飲み、少しの間心地よい沈黙が辺りを支配する。

「今日のデート、楽しかったね」

「ああ」

クロウの頭の中では、今日一日の出来事が再生されていた。

ペットシヨップの猫を見て目を輝かせていたシャルロットや、真っ白な妖精のような

ワンピースを着て照れた様子のシャルロットなど……。。

ワンピースは腕時計のお礼にと買ってプレゼントしている。

「うん……本当に楽しかった。全部クロウのおかげだよ」

「私が楽しかったのはシャルロットのおかげだな」

そう言われたシャルロットは一度キョトンとした後、嬉しそうに笑う。

その後『ありがとう』と言って、また話し出す。

「それでね、お礼がしたいんだ」

すでに腕時計をもらっているクロウとしてはすぐに断ろうとしたのだが、シャルロットの行動を見て思いとどまった。

シャルロットは着ていたジャージをおもむろに脱ぎだす。

すると中には薄くて身体が透けて見える扇情的な下着が露わになる。

上はワンピースのような下着で、胸元が大きく開かれていてシャルロットの着やせする胸の谷間が見える。

薄く透けているので、乳房の頂点も見えてしまっていた。

下腹部はショーツが覆っているのだが、それも上と同じく透けており、うつすらと茂った陰毛が窺えた。

シャルロットの魅力的な肢体が、扇情的な下着によってさらに色気を増していた。

「受け取って……もらえるかな？」

頬を恥ずかしそうに赤らめ、クロウを下から上目づかいで見やるシャルロット。

その目にはうつすらと涙が溜まっており、端正な顔を彩っていた。

自分の容姿の良さをしつかりと理解して利用しているあたり、シャルロットは賢い。

「うむ、是非受け取らせてもらおう」

プレゼントの内容に大喜びなクロウは、大きく首を縦にふる。

そしてシャルロットに近づき、唇に触れるだけの接吻を交わす。

「ふわ……暖かい……」

シャルロットはほう……と熱い吐息を漏らしながら言葉を漏らす。

クロウとの接触によっての暖かさや、接吻して自分の胸の内がぼかぼかと温まったこ

とが原因である。

クロウはうつとりとしているシャルロットを優しくベッドの上に押し倒した。

華奢な身体のシャルロットに体重をかけないようにしながら、覆いかぶさってまた唇

を押し付ける。

シャルロットも目を閉じてそれを受け入れる。

手はシャルロットの腋からゆっくりと胸の方へと移動させる。

「あ……っ」

クロウの手が胸に当たると、シャルロットが悩ましげな声を漏らす。

スケスケの厭らしい下着の上から、仰向けになってもツンと吊り上つて形の良い乳房を手で覆う。

潰そうとするとしつかりと押し返してくる張りの良さを手のひらから感じる。

「ん…………ん…………」

ふにふにと優しく乳房を揉む。

デートの最中、色々な男が目を奪われていたシャルロットの胸を揉んでいると考えると、クロウの性欲が高揚した。

量感もたつぷりある乳房を手で弄ぶと、たぶたぶと柔らかそうに乳肉が波打つ。

「あ…………」

淫猥な下着をズリ下ろし、仰向けになってもツンと上を向いた形の良い乳房を出す。

下着から解放された乳房は、ぷるんと零れ落ちるように飛び出してきた。

そしてクロウは頂にある桃色の乳首に吸い付いた。

形の良い乳房が歪な形に変わってしまうほど強く吸い付く。

「んっ、ひっ、あっ」

ひとしきり吸い付いて満足した後、今度は労わるようにちろちろと優しく舐める。

薄い色素の乳首は固くなりはじめ、シャルロットが感じていることを示す。

「あつ、そんな子供みたいに吸っちゃ……っ、んんっ」

ちゅっちゅっつと赤子のように吸い付いてくるクロウを見て、シャルロットの母性が強く刺激される。

クロウの頭を胸に抱き寄せるように抱え、性欲と母性が混ざった笑みを浮かべる。乳首に吸い付いている胸とは逆の方は、大きな手で愛撫する。

ふにゆふにゆと柔らかな感触と、強く握れば押し返してくる張りの良さを愉しむ。

「あんっ、んっ、クロウ……こっちも切ないよお……」

シャルロットは胸を揉みしだいているクロウの手を取り、熱くなっている下腹部に持つて行く。

下着の上から陰部を触り、シャルロットがどれほど昂っているか感じるクロウ。

「胸だけじゃ寂しいよ……触って……?」

乳房を唾液まみれにさせながら、上目づかいでクロウを見上げるシャルロット。

自分の容姿の良さをしっかりと理解している彼女は、クロウが断れないことを知っていた。

流石シャルロットさん、あざとい。

クロウは胸への愛撫を止め、陰部を下着の上から擦りだす。

「あつ、ひあつ」

すでに十分濡れており、指で少しこするだけでくちゆくちゆと水音が発生する。

シャルロットは小さな手をギュッと握りしめ、愛しい男から送られる快楽を受け止める。

「やつ、あつ、ひんっ！」

膣口を下着越しにぐにぐにと押す。

少し乱暴な愛撫でも、シャルロットは感じてしまう。

弄っていた場所から少し上に指を移動させ、陰核を弄ると面白いように反応した。

程よい肉付きの肢体がびくびくと震えた。

「あつーあつーもうイクうー！ひあああああつ!!」

シャルロットは全身にぶわりと汗を浮かばせる。

身体中をピンと張り、天を仰いで絶頂を迎える。

指の入った膣内は、さらに大きなモノを求めるようにひくひくと蠢く。

「うむ、よく濡れている」

「あ、あ……クロウ……」

透けて厭らしい下着を横にずらすと、秘裂から溢れる愛液が陰部をてらてらと濡らしていた。

膣口は物欲しそうにひくひくと動き、クロウを誘惑する。



妖艶なシャルロットの姿を見て、クロウの男根は固く大きくなる。それを彼女の眼前にさらす。

「あ……濡らさないかね」

何度も何度も自分の身体を蹂躪した男根を見ると、シャルロットの顔が淫靡に蕩ける。

シャルロットはそれからまんべんなく全体を舐め、挿入しやすいように濡らした。張った亀頭を口内に含んで舐め、陰茎の裏筋を舐め上げる。

「んっ、んん、ぶっ」

最後に大きく口を開けて、固い男根を飲み込む。

口の中に溜めた唾液をたっぷり塗る。

男根から口を離すと、シャルロットの唾液でてらてらと輝いていた。

「よし、挿入れるぞ」

「うん、きて」

股を開き、男を受け入れる態勢を作る。

クロウはいきり立った男根を、膣内に押し込む。

これまで何度も使われてきたはずのシャルロットの秘部は、みちみちと肉棒を強く締め付ける。

しかし膣内は優しく男根を撫で上げ、射精を促してくる。

「動くぞ」

「う、うん」

クロウは優しく動き出す。

男根も奥まで突つ込まず、入り口辺りを軽くこすりあげる。

そんなゆつくりとした動きでも、Cカップの張りのある乳房はたぽつと揺れた。

「ひあつ、あつ、あつ、あつ」

入り口を擦るだけの軽いピストンに、シャルロットは物足りなさを感じる。

彼女の身体もそのようで、男根を責めるようにぎゅうううつと強く締め付けた。

膣内から愛液が溢れ、程よい肉付きの尻や太ももに垂れ落ちていく。

「ちゆく、あう、くちゆ、ちゆぶ」

緩やかに腰を振りながら、シャルロットの小さな唇に吸い付く。

シャルロットからも舌を出し、積極的に舌を絡め合う。

舌を舐めあうと、彼女の背筋にぞくぞくと性的な快楽が発生する。

「あつ、いいっ！もつとっ！あつ！」

腰を押し付け、ぐりぐりと膣内を押し上げる。

子宮口を亀頭でこすりあげ、圧迫感を与える。

「んぷっ、んく、ちゅぷっ、ん~~~~っ！」

唾液をシャルロットの口内に流し込む。

彼女もそれを受け入れ、コクコクと飲み下していく。

シャルロットはその間クロウの服を握りしめて、さらにせがむ。

彼女が全て飲み下すと、クロウはよくできましたと頭を優しく撫でる。

シャルロットは気持ち良さげに目を細め、にへらつとだらしない笑みを浮かべた。

「ねえ、クロウ。もう動いて？」

シャルロットは子供が親に欲しい物をねだるように、クロウにお願いする。

二人が離れた口の間には、唾液の橋がつつ……と架かっていた。

膣内は先ほどの接吻でさらに昂り、きゅんきゅんとうずいて仕方がなかった。

「では望み通りにしてやろう」

「ひっ、はっ！あっ、それっ！いいよおっ!!」

クロウは先ほどまでのゆっくりとした動きからは想像できないほど激しく、早く腰を振る。

ずちゅずちゅと交わっている秘部からは激しい水音が起き、愛液が掻き混ぜられて白く泡立つ。

奥まで突くたびに子宮口に突き当たり、ごりごりと押し上げる。

「だめっ！だめっ！あっ！あっ！ひあああっ！！」

シャルロットを横に寝転がせ、その体制で猛然と腰を振る。精液を欲しがって、膣内がきゆうきゆうと締め付ける。

シャルロットは口を大きく開け、はっはっとなのよう息を吐く。シーツをグツと握り、強い快感に何とか耐える。

「なんだ、止めてほしいのか？」

クロウは意地悪そうに言う。

腰の動きも止めはしないが緩やかになり、刺激を少なくする。

Cカップの程よい乳房を掴む。

クロウはこう言っているが、もし止めてと言われても腰を止めることはないだろう。シャルロットをただ苛めたいだけなのだ。

「や、やだあ！いい！いいのおっ！もっ！動いてえっ！」

まるで子供のように声を張り上げるシャルロット。

涙を零し、よだれも垂らして男をねだる姿はあさましくて淫靡だった。クロウはこの言葉に満足したのか、また激しく腰を振りたくる。

愛液が掻き出されて大量に漏れ出し、シーツをしみだらけにしていく。

「ひっ！いっ！後ろからあっ……気持ちいいっ！！」

壁に手を付かせ、膝立ちにさせて後ろから突きまくる。たぶたぶと揺れる程よい大きさの乳房を掴む。

あふれ出る愛液が男根にかきませられ、淫らな音が出る。

「いっ！あっ！いいっ！いいよっ！！」

むにつと強く乳房を掴む。

鈍い痛みが走るが、それすらもシャルロットには気持ち良く感じられた。

射精感が高まってきたクロウは、彼女の体位を変える。

後ろから突いていたのだが、仰向けに寝かせて正常位にする。

シャルロットが甘えて舌を出していたので、それに吸い付いてやる。

固く尖った桃色の乳首をくにと摘まみ、胸からの快感も送ってやる。

「んっ！んっ！んんんんっ！！」

腰の動きがより一層激しく、速くなる。

大きな嬌声を上げようとするシャルロットだが、クロウに口づけによつて口を塞がれているのでぐもった声しか上げられない。

Cカップの乳房を押さえつけるように揉みながら、気持ちの良い最後を迎えようとする。

「もう射精すぞ。どこに欲しい？」

クロウがそう言うと、シャルロットの膣内ながきゆうきゆうと締め付けてくる。

彼女はまだ何も言っていないが、最早どうしてほしいかは察することができた。

「ぼ、僕もイク！膣内なにちようだいっ!!」

クロウから送られる強い快感に、彼女の端正な顔は崩れてしまっていた。

目からはとめどなく涙がこぼれ、口からもよだれを垂らしている。

身体もあまり力が入らないのか、ベッドに全体重を沈めている。

クロウに突かれるたびに、たぶたぶと揺れる乳房だけが動いていた。

「ひああああああつ!!イクっ……くくくくっ!!」

びくびくと意思に反して震える身体。

クロウに上から押さえつけられながら、ベッドの上で地にあげられた魚のように跳ねる。

シャルロットの絶頂に合わせて放出された精液は、びゆくびゆくと膣内を満たしていった。

一人で絶頂を迎えるのが不安だったのか、シャルロットはクロウの手をギュッと握っていた。

それが両者ともにほぐれ、恋人つなぎへと変わった。

「お前のプレゼント……最高だったぞ」

た。耳元でそう囁かれたシャルロットは、幸せそうに笑みを浮かべて眠りについたのでっ

## 派遣先はテニス部

IS学園は日本国立の特殊な学園である。

世界中の有能な少女たちが集まるので、色々な面で金がかけている。

例を挙げるとするなら、メニューの豊富な食堂などだ。

他に力が入れられているのは、部活動である。

野球用グラウンドやサッカー用のグラウンド。大きな体育館ではバスケットボールやバドミントンなどが活発に行われている。

そして今クロウが見ているテニス部も活発に活動をしている部活の一つだった。

「はあっ！」

「なんのおっ！」



テニスコートの中では、ボールの激しい応酬が繰り広げられている。

普段も真剣に部活動に取り組んでいるのだが、今は特に力が入っていた。

その理由は、現在テニスを見ているクロウだった。

テニス部でトーナメントを行い、優勝した者はクロウにマッサージをすることができ、権利が与えられるのだ。

……優勝賞品があまりにもひどい。

しかしクロウに対して悪感情を抱いていないテニス部の面々は、その権利を得ようと白熱したトーナメント戦が行われていた。

ちなみにクロウにマッサージの心得はなく、どうしたものかと珍しく頭を悩ませていた。

「これで終わりですわ！」

「くうっ！」

片方の選手のスマッシュが決まり、トーナメントの優勝者が決まった。

縦ロールの長い金髪をはねさせ、浮かび上がった汗は太陽の光に当てられてキラキラと輝く。

汗によって身体に張り付いたテニス服は、彼女のスタイルの良さを周りに示していた。

短いスカートから伸びる白い脚は、健康的な肉付きでスラリとしている。

優勝を決めたセシリア・オルコットは、嬉しそうに勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「くっそお……ミキストリくんにマツサージしてあげて、そこから発展させる未来予想

図が……！」

決勝でセシリアに敗れた女子生徒は、悔しそうに唸る。

しかし彼女も非常に強く、セシリア相手になんくらいいついていた。

「つていうかセシリア、いつもより凄くなかった？」

初戦で敗れた生徒が言う。

普段でもエースとして活躍しているセシリアだったが、今回はステータスが底上げされていたように感じられた。

サーブの速度も物凄く、男性選手と比べても遜色なかった。

「ふう……中々疲れましたわね」

ベンチに座って息を整えるセシリア。

思っていた以上に対戦相手が強敵だったので、体力も消耗してしまっていた。

そんなセシリアに、クロウはタオルとドリンクを持って行く。

「あら、クロウさん。今疲れていて腕を動かすのも億劫ですの。わたくしの顔を拭いてくださるかしら」

セシリアのお願いに、クロウは快く承諾した。

自身の顔も近づけ、セシリアの汗に濡れた端正な顔を優しく拭っていく。

汗の浮かんだ額をタオルで拭い、白い頬を撫でる。

セシリアは気持ちよさそうに目を閉じており、近くで見ると長い睫毛が見える。

肌にもシミ一つなく、触って気持ちよさそうだと考える。

「これでいいか？」

「ええ、ありがとうございます。マッサージを楽しみにしててくださいいな」

浮かんでいた汗を大体拭うと、セシリアは満足そうに頷く。

身体にへばりついてくる気持ち悪い汗を拭ってもらったことでさっぱりし、さらに大

好きな男に甲斐甲斐しく世話を焼かれたことで彼女の機嫌はすこぶる良くなる。

卒業したらクロウをオルコット家の執事として雇ってみたいと考え出していた。

まあ家事がまったくできないクロウを執事に仕立て上げるのは、相当の労力が必要となるのだが。

「ふふ、では身体を綺麗にしてから訪ねさせていただきますわ」

「私は汗の匂いがあるこのままでも良いのだが」

「わ、わたくしが嫌ですわ！」



セシリアは自室に戻り、浴室でシャワーを浴びていた。

部室の近くに備え付けられているシャワー室で一度汗を流したのだが、念入りに二度目のシャワーを浴びている。

熱い水滴がセシリアの美しい肢体を滑り落ちていく。

「ふう……さっぱりしますわね」

日本に来てからここ最近、セシリアは浴槽に浸かることもあった。

これはクロウの影響なのだが、今まで入浴ということを行わなかったセシリアは最初は敬遠していたものの、一度体験してみるとすぐに虜になってしまった。

入浴は命の洗濯と言われるが、セシリアはそれに大いに賛同したかった。

「欲を言えば浸かりたいのですが、これ以上クロウさんを待たせるわけにはいきませんわね」

浴室から出たセシリアは、身体の水滴を柔らかいバスタオルで拭き取って行く。濡れているところが無いように隅々まで拭く。

そのあとは長くて量が多い髪を乾かす。

実家では専属メイドであるチエルシーにしてもらうのだが、ここにはチエルシーはいないので当然自分で乾かしている。

最初はなれなかったが、今ではお手の物である。

だから時折うまく乾かせないからとクロウの所に行つて髪を乾かしてもらっているのは、彼女の策略ということになる。

ちなみにこれはチエルシーの入れ知恵だったりする。

「むむむ……下着をどうしましょうか……」

セシリアはいくつかの下着セットを並べ、それを見ながら悩む。

清纯さを見せつける少しエッチな純白の下着か。

子供らしさと活発さを示す少しエッチな水色と白色のストライプの下着か。

小悪魔らしさを演出する少しエッチな桃色の下着か。

他を圧倒する色気を持つかなりエッチな黒色の下着か。

なににせよ、少なからずエロい要素があるのは確定である。

「むう……これにしますわー」

セシリアが選んだのは、何とも大胆なかなりエッチな黒色の下着であった。  
シヨーツを穿き、豊かな双丘をブラの中に押し込む。

白色人種ということと、彼女自身の肌の美しさも併せて白い素肌に、黒色の下着はとでも映えていた。

イギリスに数多くいる彼女のファンに見せたら、大喜びすること間違いなしである。

それから肌触りの良い高級シルク製パジャマを着用する。

これで準備万端。後はクロウの部屋に行くだけである。

「いざ、出撃！ですわ！」



「む、来たか。入ってくれ」

「はい、失礼いたしますわ」

クロウの部屋の扉をノックして訪れたことを伝えると、来ることがわかつていたクロウはすんなりとセシリアを部屋の中へと通した。

まあセシリアなら先に伝えておかなくとも、快く歓迎されるのは間違いない。

「それで、私にマッサージをしてくれるという話だが……」

「ええ、もちろんですわ。ですがその前に少しお話しませんか？」

クロウの質問に、セシリアが即座に頷く。

しかしその前に話をしようと思ちかけてくる。

せつかく二人きりになれたのだから、できるだけ長くいたいのだろう。

だが、苛烈なトーナメントを制して優勝賞品が他人にご奉仕というのはどうなのだろ

う。

ただ優勝した本人が嫌そうではないので問題はないのだろうか……。

クロウはセシリアの提案を受け入れ、紅茶の用意をする。

セシリアの肥えた舌を満足させることは到底できないが、何も出さないよりはマシだ

ろう。

「お前の愛飲している茶葉には到底及ばないものだが、それでも構わないだろうか？」

「ええ、わたくしから訪ねているので文句など言う資格はありませんわ」

クロウに差し出された紅茶を受け取りながらそう返すセシリア。

言葉通りに取るなら、本当なら文句の一つや二つは言いたいらしい。

セシリアが愛飲している茶葉は超高級茶葉で一般庶民には中々手が出せないもので、市販で売っているようなものでもないので手に入る機会すら少ない。

とはいえ、セシリアも大人しく安い紅茶を飲み、部屋の中にはほっこりとした暖かい雰囲気が充満する。

「そういえばセシリアはテニス部と吹奏楽部、合唱部を掛け持ちだったか?」

「そうですわ。わたくしとしてはテニスを嗜みたいのですが、部長さんに嘆願されました……」

セシリアはふう……とため息をつく。

IS学園の部活動は、運動部・文化部ともに非常に活発である。

なので優秀な人材が集まっているIS学園の生徒でもほとんど部の掛け持ちはできない。

出来る者は、よほど優秀なものしかないだろう。

例を挙げるとすれば、時折助っ人として色々な部活に御呼ばれしている生徒会長。

しかし三つの部を掛け持ちしているセシリアは、かなり優秀な人物と言えるだろう。

「だがテニスに重点を置いているのだったか」

「時々助っ人を頼まれるのですわ」



セシリアは三つ掛け持ちしているとは言っても、文化部の二つには自分から脚を運ぶことはほとんどない。

部の方から助っ人を頼まれたときに駆けつけるくらいだ。

セシリアのヴァイオリンの演奏やピアノの伴奏は、頭を下げてでもしてもらいたいほど上手なのだ。

「そうか。それでは『キャノンボール・ファスト』の準備はあまり進んでいないのか」

「あら、そんなことはありませんわ。このセシリア・オルコット。オルコット家の名に恥じない成績を上げてみせますわ」

クロウが悪戯気に尋ねると、セシリアも茶目つ気のある笑みを浮かべて応える。

セシリアは両親が一度になくなって没落寸前だった実家を立て直すほどの優秀さがある。

もちろんチェルシーなどの優秀な部下に助けられてということもあったが、セシリア自身の能力がなければオルコット家は貴族の列から名を消していただろう。

そんな彼女が、部活動のせいで大会に勝てなかったなどと言うはずがない。

「それにわたくしはクロウさんの方が心配ですわ。わたくしには『ストライク・ガンナー』がありますけど、クロウさんにはないでしょう?」

今度はセシリアが悪戯気にクロウに質問する。

確かに強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を所持しているセシリアは、一年の専用機持ちの誰よりも一歩前に出ている。

中国の代表候補生である鈴も専用パッケージが開発されたが、装着して訓練していた時間は最も長いので、優位性は変わらない。

「ふむ、私のI Sは束がつくつたのだ」

「ふふふ、確かに篠ノ之博士ならどんな強力な装備を開発しているのか、想像もできませんわ」

クロウの自信満々な答えに、セシリアは頷くしかなかった。

史上最強の兵器をたった一人で開発し、世界の軍事バランスをめちやくちやにした稀代の大天才、篠ノ之 束。

彼女ならセシリアが持つ『ストライク・ガンナー』を超える専用パッケージを簡単に作ってしまうだろう。

「ですが、わたくしも簡単には負けてあげませんわよ」

「ほほう、楽しみだ」

二人ともニヤリと不敵な笑みを向けあう。

ほっこりとしていた雰囲気から、ピリピリと肌に刺さるような……しかし不快ではない空気に変わる。

だがその空気はすぐに霧散した。

「あら、わたくしはクロウさんのマッサージに来たのに、すっかり失念しておりましたわ」

口には手をあてて、苦笑するセシリア。

クロウとの会話が楽しく、元々の目的を完全に忘れてしまっていた。

「む、ではそろそろ頼もうか」

「お任せくださいな」

セシリアはドンと胸を叩いて了承する。

クロウをベッドの上でうつぶせになるように促す。

「では足から失礼しますわ」

そう言うのとセシリアはクロウの足を揉み始める。

マッサージの経験など、お嬢様であるセシリアには当然ながらなかったのだが、この日のためにチエルシーに教えを乞うていた。

完璧メイドにしてクロウにマッサージをした経験のあるチエルシーは、自分の技術をセシリアに叩き込んだのだった。

とはいっても数日間でチエルシーほど上手になれるわけもないが、それでも普通のマッサージ師並の腕前となっていた。

「く、クロウさんは脚も筋肉だるまですわね……い」

ふくらはぎもガチガチに張っていて、指圧するのにかんりの力を要した。

一般人とは比べ物にならない程度には鍛えているセシリアだが、他の専用機持ち面々と比べると少し劣る程度の筋力では、中々うまくいかない。

しかし男らしさあふれる肉体に触れて、疲労を感じながらも堪能していた。

「次は腰ですわね」

クロウの身体の上に跨り、腰を押し始める。

大きくて柔らかい尻の感触を感じて、機嫌が良くなるクロウ。

セシリアは筋肉で覆われた固い背中を押しながら、男の力強さに胸が高鳴っていた。

「んっ……んっ」

思い切り力を入れるので、セシリアの口から時折声が漏れる。

別に厭らしいことはしていないのだが、何故か興奮してしまいそうな色っぽい声を出す。

マッサージの間クロウは嬌声もどきの声と、ムニムニと形を変える尻肉の感触を存分に楽しんでいた。

「ふう……これで終わりですわ」

マッサージを開始してから数十分、セシリアはマッサージを止める。

汗の浮かんだ額を拭い、達成感に浸る。

「む……なんだかスツキリしたな」

クロウも起き上がり、肩をぐりぐりと回す。

セシリアにマッサージをしてもらう前より、身体が楽になった。

「ふふ、それはなによりですわ」

セシリアは嬉しそうに笑う。

クロウに喜んでもらえたなら、マッサージをした甲斐があつたというものだ。

「あ………クロウさん、シャワーをお借りしてもよろしくて？ 少し汗をかいてしまいましたわ」

マッサージに熱中したあまり、またまた汗をかいてしまった。

シルク製のパジャマが身体にへばりついて気持ち悪いので、一国も早く身体を流したかった。

「勿論、構わんよ。なんなら一緒に入るか」

「は、入りませんわよ！」



「(け、結局入ってしまいましたわ……)」

浴室の中には、セシリアだけでなくクロウの姿もあった。

恥ずかしがって拒否していたセシリアだが、クロウに甘い彼女は頼まれたら断れないのである。

今はもう自分の身体は洗って、クロウが身体を洗う番になっていた。

クロウに身体の隅々まで洗われて、セシリアの身体は火照っていた。

「セシリアは私の身体を洗ってはくれんのか？」

「え、ええっ!？」

クロウの完全セクハラ発言に、セシリアは顔を真っ赤にして驚く。

本当なら殴り飛ばしても問題ないのだが、惚れた男に弱い彼女は、嫌と思うどころか嬉しく思ってしまった。

だから断ることをせず、身体を洗うことにしたのだ。

「で、では失礼しますわ」

「うむ、頼む」

セシリアはクロウの後ろに座り、スポンジを手に取る。

すでに身体を流したセシリアの身体はとも色気を出していた。

長く美しい金色の髪は水滴を多分に含み、しっとりとしている。

恥ずかしそうに顔を歪め、頬を赤くしているのは大変可愛らしい。

豊満な胸は前に張りだし、キュツと括れた腰が彼女のスタイルの良さを際立たせる。

括れた腰から大きな臀部までを描く身体の線が艶めかしい。

細いながらもむっちりとした肉付きのある脚は、脚フェチの者が見れば思わず拝んで

しまうほどのものだ。

そんな魅力的なセシリアに身体を洗わせるクロウは、世の男たちから恨まれても仕方がない。

セシリアはスポンジにボディソープを垂らし、よく泡立たせてからクロウの背中を洗い始めた。

「(か、固いですわ……。マッサージュのときも思いましたが、直に触るとそれが良くわかりますわね……)」

セシリアは身近に男の力強さを感じて、うっとりとしたため息をつく。

男が女の身体に興奮するように、女だって好きな男の身体に興奮するものだ。

特にセシリアはがっちりとした男らしさを感じる身体を好んでいるので、クロウの身体はまさにと真ん中ストライクだった。

「ああ……背中も大きいですわ……」

セシリアは夢中になってクロウの身体を洗う。

彼女は夢中になって気づいていないが、近くで身体を見ようと密着しており、肉感的な肢体をクロウに押し付けてしまっていた。

豊かな乳房が固い背中に押し付けられる。

セシリアはクロウの背中を存分に洗った後、今度は身体の前面を洗い始めた。

後ろから抱き着くように手を前面に伸ばし、厚い胸板や割れた腹筋を丹念に洗う。

「ど、どうですか？ わたくしは巧く洗えているでしょうか？」

「うむ、心地いいぞ。続けてくれ」

「は……」

不安げに聞いてきたセシリアに対して、クロウは頷くことで応える。

セシリアもそれを聞いて嬉しそうに笑い、また一生懸命身体を洗う。

欲を言えばもう少し強くこすってもらった方が気持ちいいのだが、クロウはそれを言わなかった。

スポンジで胸板を擦られると、身体を洗われる心地よさと性的な興奮が生まれる。



平均のそれを大きく越えた逸物を固くいきり立たせる。

手を出さず、さらさら身体が密着し、豊満な双丘が背中押し付けられて形を変えらる。

「お、終わりましたわ」

「いや、まだここを洗ってもらってないのだが……」

「な、なんてもの見せるのですかあつ！」

くるりと身体を反転させて、いきり立った逸物を見せつけるクロウ。

セシリアは手を両目に当てて、見えないようにする。

指の間が開いていて意味がないことは秘密だ。

「このままでは私は出ように出られない。お前が何とかしてくれ」

「う、うう……」

セクハラ発言を通り越して最早性犯罪並の発言に、セシリアは顔を真っ赤にして唸る。

別にセシリアはクロウに奉仕するのは嫌いではないのだが、ただただ恥ずかしいのである。

「頼む」

「……、今回だけですわよ」

クロウの嘆願に、セシリアはどうとう頷いてしまう。ちよろ……ゲフンゲフン！

セシリアはクロウの正面に回り、手を使って男根をしごきだす。

楽器を使って美しい音を奏でるその白くて細い指で、しゅっしゅつと男根を上下にこする。

時折亀頭部やカリ首を指で刺激して、クロウを感じさせる。

「セシリア、愛しているぞ」

「あ……」

クロウは懸命に男根を擦りあげるセシリアを抱きしめて、耳元でそう囁く。

愛しい男に力強く抱きしめられて愛の告白をされたセシリアは、ふにやりと身体のが抜けた。

もし彼女が犬なら嬉ションでもしてしまっていただろう。

大きな胸がクロウの厚い胸板に押しつぶされて、形が淫猥に歪む。

「んっーぢゅっ、はっ、ちゅっ」

そのままの態勢で二人は唇を押し付け合う。

舌を口内に侵入させ、唾液を交換する。

激しい接吻に唾液が零れ落ちる。

クロウは貪るように、セシリアのプルプルとした艶やかな唇を奪った。

「はあ……はあ……」

唇を離して荒息を整える。

セシリアの頬は紅く染まり、発情しているのがわかる。

両者の舌の間にかかった唾液の橋は、名残惜しそうに途切れて崩落した。

「あんっ!？」

不意打ち気味に乳首を摘ままれて、驚きと快感の混じった嬌声を上げるセシリア。

少し強めにギユツと乳首を潰されても、少しの痛みよりも大きな快感を得た。

「あつ、あつ、んっ、はっ、はっ!」

潰した乳首の方はくりくりと捏ね回し、残った方の乳首は舌でレロオと舐め上げる。

固くなった乳首は指で摘まみやすく、また舌で舐めやすかった。

「あつ!あつ!ああくくっ!!」

Dカップの乳房を大きな手でわし掴みにして、強く握ると指の間から乳肉が漏れる。

舐めまわしていた方の乳首は、口内で取れてしまうかと思われるほど強く吸引する。

そんな乱暴な愛撫にもセシリアは感じてしまい、乳首はピンピンに固くなってしまう。

う。

顔も快楽に蕩け、凄まじい色気を醸し出す。

「セシリア、お前が動いてくれるか?」

「ん、んんっ！は、はい……」

恥ずかしそうにセシリアは了承する。

クロウは地べたに仰向けに寝転がり、セシリアはその上を跨ぐ。

膣口に亀頭をしつかりと合わせて、ズブリと一気に腰を落とした。

「んんんんんっ！！は、入りましたわあ……」

クロウの胸板に手をつき、強い衝撃から身体を支える。

二の腕に乳房が寄せられて、存在を強調する。

セシリアはやはり大きな逸物が体内に入ってきたので動きづららしく、挿入した格好から動かない。

「すまん。動かすぞ」

「あ、ああ……待っててくださいまし。まだわたくし……ああっ！あっ！はっ！んっ！はっ！！」

腰をがっちりつかんで告げると、セシリアは慌てたようにお問い合わせする。

しかしクロウがそれに応えることなく、下から強くセシリアを突き上げ始めた。

ズン！ズン！と激しい突き上げに、量感のある乳房が大きく揺れる。

その淫靡な光景をおかずにして、クロウは腰を振るう。

「好きだぞ、セシリア。愛している」

「わ、わたくしもおっ！わたくしもあなたを愛しておりますわ!!」  
クロウの愛の言葉に、セシリアもまた愛の言葉で応える。

指を絡め合つて手をつなぎ、話さないと意思表示をしているかのように強く握りしめる。

豊満な臀部がクロウに押し付けられ、ぱんっぱんっとな肉のはじける音がする。

大きな男根はセシリアの締めりの良い膣内を押し広げ、ずっほずっほと出たり入ったりする。

「はっ！はっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ!!」

括れた腰をがっちりと掴み、激しく腰を突きあげる。

常人が突き入れたら数分持たずに射精してしまいそうな名器を押しわけ、子宮口を押し上げる。

ドン！ドン！と強力な腰のバネで子宮口を押し上げると、ビクツとセシリアの身体が震える。

顔は快感と歓喜が満面に広がり、クロウへしか見せない女の貌を見せる。

「いやあっ！あっ！あっ！それダメですわっ！ダメっ！あっ！ああっ！ああんっ!!」  
ずんずんと突きながら胸を荒々しく揉みしだき、乳首に強く吸い付く。

セシリアは身体をビクビクと反応させ、よだれを垂らして悦ぶ。

「あぁっ！んっ！んううううっ!!お、おかしくなっちゃいますわぁっ!!」

大きな声を上げて悶えるセシリアだが、むっちりとした肉付きの脚をクロウの背中に回し、離れられないように力を入れる。

口では何とも言っていないでも、身体は正直なのだ。

手も首に回して、だいしゆきホールドで抱き着く。

「おかしくなっても構わん。私はお前を愛する」

そう言っつて唇を押し付けるクロウ。

それを言われたセシリアは幸せそうに目を瞑り、唇からの感触を存分に受け入れる。

「はっ！あっ！あっ！やぁあぁあぁあぁあぁあぁっ!!」

セシリアが一際高い嬌声を上げる。

それと同時に身体が撥ねるようにびくんびくんと震え、膣内に挿入された男根をギョウギョウと締め付ける。

クロウの言葉で達してしまったようだ。

しかしクロウはまだ終わらせなかった。

ぐったりとしているセシリアを立たせ、壁に手を付かせて尻を捧げさせる。

そしてまた後ろから攻め立てはじめ。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ!!」

口の中に指を押し込むと、奉仕しようと愛おしそうに舐めてしゃぶる。口を開けさせられているため、多量のよだれが垂れ落ちる。

片方の手は胸に手を回し、感觸の良いそれを揉みまわす。腰も常時振りたくり、ぱんぱんと尻肉がたわむ。

背後から物を扱うように使われるのが好きなセシリアの顔は、淫猥な娼婦のように歪んでいた。

「私もそろそろイキそうだ」

パンパンと肉の音を響かせながら、クロウがそう呟く。

セシリアは生まれたての小鹿のように頼りない四肢で、送り込まれる快感に耐える。

クロウは絶頂が近づいてきて快感が高まったので、挿んでいた尻にぐつと力を込めた。

柔らかく肉厚のある尻肉は淫猥に形を変え、開かれた尻たぶの中から今もなお激しく突き立てられている陰部と、物欲しそうに動く開発された尻穴が見えた。

「はっ！あっ！あっ！あっ！あっ！！」

だんだんと激しくなるピストンのせいで、セシリアはうまく身体を支えることができなくなり、壁に自身の身体を押し付ける。

大きな乳房が潰されて、横から漏れる。

パンパンと尻肉がはじける音も大きくなる。

「イク！イク！またイっちゃいますわっ！奥はダメですわあっ!!」

ゴツゴツと子宮口に男根が突きあたる。

細い腕を掴んで後ろに引つ張り、馬の手綱を持つようにしながら男根を奥に突き入れる。

ドスッ！ドスッ！と激しい突き入れに、セシリアは舌を出して大きく喘ぐ。

後ろ手に引つ張られて張り出された胸もブルブルと震える。

「クロウさん！大好きですわ！あっ！あっ!!」

首を回して振り返り、クロウの顔を見上げて笑顔で言うセシリア。

そんな彼女の姿を見て、クロウの精液が一気に駆け上った。

「あっ！ああああああああああああっ!!」

びゆくっ！と大量の精液がセシリアの膣内に注ぎ込まれる。

クロウは射精している間セシリアを抱きしめ、グツと力を入れた。

セシリアはクロウの腕の中でビクビクと身体を震わせた。

「はあ……はあ……」

精液をたっぷりとセシリアに注ぎ込むと、クロウは男根を引き抜いた。

抜かれた男根はホワホワと湯気が出ている。



男根を引き抜かれたセシリアは、くてつと力なく地面に座り込む。

だらしなく脚を開いた格好は、淑女としては到底受け入れられないが、今の彼女にそれを気にするほどの思考は残っていないかった。

まだだらしなく口を開け、同じく開いた下の口からも精液がこぼれ出す。

「もう一度風呂に入るか」

「ですわね……」

その後二人は一緒に湯船につきり、セシリアは後ろからクロウに抱き着かれる恰好だった。

結局この後もイチヤつきまくり、セシリアが部屋から出てくるのは次の日の朝となったのだった。

## レースに向けて

「ねえ、クロウ。セシリアが昨日あんたの部屋に泊まったって本当かしら？」

にっこりと満面の笑顔を浮かべながら、鈴がクロウに問いかける。

状況は朝の食堂で、一夏と箒を除いたいつもの面々で食事をとっているというものだ。

鈴の笑顔は他人まで笑顔になれるような愛らしい笑顔なのだが、額に青筋が浮かんでいるのがマイナスになっている。

快活さを示す八重歯も、今はキラリと光って何故か恐ろしい。

「ふむ……どうしてそう思う？」

「えへへ、セシリアが朝クロウの部屋から出てくるのを、僕がバッチリ見ていたの」

同じく笑顔でクロウを見つめるシャルロット。

こちらは怒りというよりも、どこことなく拗ねているように感じられた。

例えるなら、片方の子供と遊んでいるのに、自分とは遊んでくれない子供のような顔だ。

「まあ別に隠すことはないな。それは本当だ」

「ええ、わたくしはクロウさんの部屋で何とも甘美な時を過ごしましたわ」

クロウは認め、セシリアはそんなクロウの腕に抱き着き、ふふんと勝ち誇った笑みを二人に向ける。

鈴は額に浮かんでいた青筋が太くなり、シャルロットはあからさまにぶすつとした不機嫌な表情になる。

二人ともクロウが色々な女に手を出していることを承知しているが、やはりあまり気の良いものではないのである。

本来ならここにいる全員の女性は、男が全てを投げ打つてでもモノにしたいと考えるほどの美少女たちだ。

容姿も良く、性格も良い彼女たちがクロウに囚われたのは、まさに悲劇といってしかるべきだ。

「ねえ、今度は僕がクロウの部屋に行っていない？」

下からクロウを見上げて、上目づかいでお願いするシャルロット。

自分の容姿の良さを完璧に理解したこの行動。流石妾の子、あざとい。

しかしそれに反対する者がいた。

「ちよつと、あんたは前にクロウの部屋に行ったじゃない。今度はあたしの番でしょ」  
大きな目を吊り上げながら、シャルロットに異議を申し立てる鈴。

前にシャルロットがクロウと二人きりでデートしたことを言っているのだろう。

あの時鈴は新たに送られてきた高速機動パッケージ『風』の調整をしており、クロウと過ごすことができなかった。

「むむむ……」

「フウ……」

睨み合うシャルロットと鈴。

特に鈴は八重歯をむき出しにし、猫のように威嚇している。

「いや、次は私の番だ。さあ、早速部屋に行こうぞ、嫁よ」

「い、いつの間に……」

あたかも当然のようにクロウの膝の上に座り、サラダを食みながら言うラウラに、セシリアは驚愕する。

つい先ほどまでいなかったはずなのに、まるで最初からいたかのような顔をしてい

る。

クロウを除く三人は、世界でも有数の軍事力を保有している国の代表候補生で、彼女たちもそれ相応の訓練を受けてきており、さらに彼女たちはその中でも優秀なのだが、ラウラがいつクロウの膝の上に座ったかはわからなかった。

ドイツ軍特殊部隊隊長として鍛え上げられた隠密技術を無駄に発揮した結果である。

「む……今からか？」

「ふっ……私と嫁の間には時間すら遮ることはできない」

「ほう……」

これから授業のはずなのだが、ラウラは何故かドヤ顔で持論を展開する。

納得している様子のクロウも馬鹿である。

基本的に人の意見を聞かないラウラと、予想の斜め下を往くクロウを止められる者は誰もいないと思われたが、この学園には止められる人物がいた。

「ほう、面白いことを言っているな。もう一度私に話してもらおうか」

遠くまで透き通る綺麗な声が、二人の背後に降りかかる。

その声に聞き覚えのあるラウラは、ピシリと身体を固める。

ギギギと壊れかけの機械のような動きで首を回すと、案の定そこには予想していた人

物が。

「きよ、教官……」

腕を組み、小柄なラウラを冷たく見下ろしているスーツ姿の麗人。

かつてラウラを訓練したことのある世界最強の女、織斑 千冬だ。

ラウラと共に戦々恐々とするはずのクロウは、組まれた腕によって持ち上げられた、スーツの上からでもわかるほどの巨乳を見て頷いていた。

「ボーデヴィツヒ、貴様は今日の授業をサボるといったのか。この私の授業を……だ」

「い、いえ！そんなことはありません！ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします！」  
千冬の決して責めていないにも関わらず恐怖を感じる質問に、ラウラは軍隊仕込みの敬礼をしながら弁明する。

千冬から、ここでは教師と教え子の関係で接しろと言われているので、普段ラウラはそれに従っているのだが、それを忘れて軍隊勤務の接し方になってしまっていた。

「オルコット。貴様は寮生活における特別規則を忘れたとは言わさんぞ。放課後生徒指導室に來い」

「は、はい……」

ラウラの返答に満足した千冬は、今度はセシリアに矛先を向ける。

セシリアは自業自得ではあるが、がっくりと肩を落とす。

特別規則とは、男子の部屋に女子を泊めてはならないというものだ。

つまりクロウはそれをガツツリ破っている。

「さて、ミキストリ。お前は懲罰部屋三日間だ。いいな？」

「む、構わん」

あつさりと罰を受け入れるクロウ。

ちなみに懲罰部屋に入っている間の三日間、すべて千冬が彼の指導を担当した。

時折懲罰部屋から苦しそうな声が聞こえてき、それを聞いた生徒たちがクロウに同情した。

……その声はクロウが出したものだとは言っていない。

「さあ、授業時間も近いぞ。さっさと食べて教室に向かえ！」

そんな未来のことなど当然知ることはできず、千冬は生徒たちを急かす。

生徒たちは皆遅刻することなく、授業を受けることができたのだった。



「ではみなさーん！キャノンボール・ファストの日が近づいてきた今日の授業は、高速機動についてというものです。ついてきてくださいねー？」

生徒たちに混じっても何ら違和感のない、幼い容姿をした真耶が授業についての説明をすると、生徒たちがはーいと返答する。

今一組の生徒たちは第六アリーナに集まっていた。

皆身体の線がはつきり出るＩＳスーツを身に着けており、クロウにとつてはまさに楽園であった。

「それじゃあ最初に専用機持ちさんたちにお手本を見せてもらいましょうー！オルコットさんと織斑くん。前に出てください」

真耶に指名された二人は、返事をして前に出る。

この二人を選んだ理由は、高速機動パッケージを持っていることと、機体のスペックが他を圧倒しているからであろう。

前者がセシリアの『ブルー・ティアーズ』<sup>著</sup>で、後者が一夏の『白式』<sup>特</sup>である。「さ、織斑さん。全力を尽くして戦いましょう」

「おおい、まだ本番じゃないぜ？でも本気でやってやるさー」

二人とも気合十分なようで、それぞれ専用機を呼び出して装着する。



ISの装備もキャノンボール・ファスト用に変えられている。

二人は真耶のスタートコールで飛び出した。

「うおっ！速えっ!!」

一夏は心の中で驚く。

それはキャノンボール・ファストように変えた機体の出力もそうだが、自分の前を疾駆するセシリアのこともあった。

第三世代型のスペックを全て凌駕する第四世代型を駆る一夏だが、セシリアはその何倍も速かった。

「(あいつもパッケージを装備しているとはいえ、こんなに差があるのはやっぱり実力の差か!)」

一夏は悔しそうに唸る。

とは言っても、一夏は一年前までISについて何の勉強もしていない普通の学生だったのだ。

それこそISの勉強を小さなころからし、代表候補生に選ばれてからはさらに鍛錬を積んだセシリアに追いつけるはずもない。

「(あと後ろからだとセシリアの尻が……!)」

一夏は顔を真っ赤にして狼狽する。

もうすでに大分距離は離されているのだが、ISのハイパーセンサーのせいでセシリアの姿もくつきりと見える。

当然セシリアも布地の少ないISスーツを身に着けているので、大きくて柔らかそうな臀部がはつきりと見えてしまうのである。

まだまだ元気な男子高校生としては、この光景は楽園と共に地獄であった。

その後も一夏はセシリアに距離を離され続けたまま、アリーナの地表へと戻ったのだった。

「はい、ご苦労様でした。オルコットさんも織斑くんもありがとうございます」

真耶はそう言つて二人をねぎらう。

そのあと千冬から授業の説明があり、それぞれ専用機組と一般生徒組に分かれて作業を開始した。

専用機組はキャノンボール・ファストに向けての機体の調整で、一般生徒組はレースに出る生徒の選出である。

「ミキストリくん、調整は捗っていますか？」

「む、山田教諭……」

一人で何やら考え込んでいたクロウの元に、真耶が向かつて話しかける。

クロウも一夏と同じくISの勉強をし始めたのはごく最近で、まだ専門用語などは理

解していないものもある。

なので、真耶に放課後特別補修を受けさせてもらっていた。

……保健の補修はしていないよ？

「まあぼちぼちといったところだな。武装が多くて探るのが大変だ」

「あはは、篠ノ之博士特製の I S ですからね」

クロウの言葉に苦笑する真耶。

束が関わっている時点で、すでにその I S は何らかの特殊なことがあるのは間違いないのだ。

「しかし山田教諭。また胸が大きくなったのか？」

「ふえっ!？」

今まで比較的真面目な話をしていたというのに、いきなりセクハラ発言をかますクロウ。

真耶は顔を真っ赤にし、胸を腕で隠そうとする。

しかしたわわに実ったそれを細い腕だけで隠すことはできず、むしろ卑猥に形を変えて男の情欲を誘っていた。

「その I S スーツもきつかりろう」

「そ、その……最近オーダーメイドで作ってもらったばかりなんですけど……また苦し

くなって……」

クロウの答えなくてもいい発言にも、真耶は真面目に返してしまう。

しかし世界でも数少ないGの領域にいるのにもかかわらず、未だ成長途中とは……。思わずクロウは喉を鳴らす。

「ほう、なら私が作ってやろう。どれ、採寸させろ」

「え、ええっ!?!」

手をわきわきとさせながら真耶に近づいていくクロウ。

真耶は顔を羞恥で彩りながら、ゆつくりと後ずさりする。

いくらクロウといえども、公衆の面前で胸を揉みしだかれるのは嫌だった。

まあ強く求められたら応えるのであろうが……。

だがクロウを止める存在が今はいた。

「馬鹿者。何をしているか」

「む、千冬か」

千冬は後ろからそう呼びかけ、クロウの背中をペシンとはたく。

クロウも真耶ににじり寄ることを止め、千冬に向き直る。

本当は頭をはたきたかったのだが、身長差の原因でそれは断念した。

「調整が終わったのなら、他の専用機持ちのところを見てくればいい。お前も学ぶべき

ところがあるはずだ」

「うむ、了解した」

千冬に勧められたクロウは素直にうなずき、他の専用機持ちたちのところに向かう。クロウから離れた真耶は、少し頬を赤らめながらも生徒たちを的確に指導するのであった。

とりあえずクロウは近くにいたシャルロットとラウラのところに向かった。

「む、嫁。私に会いにきてくれたのか？」

「うむ」

クロウにいち早く気づいたラウラは嬉しそうにして、とてとてとクロウに近づくと。

自分の推測にクロウが頷いたのを見て、ラウラはむふう……と満足げに何度もうなずく。

確かに逢いに来たと言えそうなのだが、なんだか違う気がする。

「あ、クロウ！どうかしたの？」

「うむ、お前たちの機体調節はどのようなものかと思つてな」

ラウラと同じくクロウに気づいたシャルロットも、嬉しそうに笑いながら近づいてくる。

二人とも頭にヘッドギアを展開している。

特にラウラのヘッドギアはまるでウサ耳のようで、時折動いているのが愛らしい。

どこかの天災科学者と被っている。

「うん、僕たちもついさつき量子変換インストリアルが終わって、今から調整に軽く飛ばうって言うていたの」

「ほう、二人はスラスターを増設するのだったな」

「ああ、そうだ。流石私の嫁、私のことをよく理解している」

「ふっ、それほどでもない」

嬉しそうにラウラが言うと、クロウも少し微笑んでそう言う。

二人だけの空間を作られて、シャルロットは少しご機嫌斜めだ。

そのあと少し談笑した後、二人はISを駆って飛び去って行った。

「あ、ミキストリくん。今暇だったら私と模擬戦をしますか?」

手持無沙汰なクロウを見て、真耶が声をかける。

やることもなくて暇だったクロウはそれに頷き、ISを展開する。

「では行きますよ。よーい、ドン!」

真耶のコールと同時に二人は飛び出す。

クロウはスタートを告げる声が可愛いなど邪念を持ちながらISを駆る。

数多くある武装の中から適当に選んだ機動力上昇の武装を身に着けているクロウは、

元日本代表候補生の真耶に喰らいついていく。

「えいつー！」

「むっ」

真耶は可愛らしい掛け声とともに、短機関銃をクロウに向けてぶっ放す。

クロウはそれを躲すが、そのせいで少し距離を開けられてしまう。

キャノンボール・ファストは妨害ありのレースなので、真耶の行為はまったくルールに違反していない。

「ふむ、ならばお返しだ」

「えへへ、負けませんよお」

背後の空間を捻じ曲げて数艇の武器を掃射するクロウ。

真耶は楽しそうにしながらそれを撃ち落としたり躲したりする。

その後も激しい妨害戦の末、クロウが僅差で真耶に勝った。

「あく、負けちゃいましたか……。流石ミキストりくんですね」

「いや、山田教諭も流石IS学園の教師だ」

それから二人で楽しくキャノンボール・ファストについての意見を交わし合い、充実した授業時間を過ごしたのであった。



「ん、は……んっ」

キャノンボール・ファストが翌日に迫った日の夜。  
クロウの部屋ではくぐもった女の声が響いていた。

女は後ろからクロウに抱かれながら、口を貪られていた。

「はぁ……っ」

唇を離すと、女——ラウラは蕩けた表情をクロウに見せる。

彼女の衣服は普段の動きやすさを重視して改造制服ではなく、黒いワンピースだった。

容姿が人形のように整っているラウラが着ると、黒の布地に銀髪が魅力的に映えて妖精と思えてしまう。

「い、いきなり強引ではないか。私は受け入れるが、少し驚いたぞ」



「む、すまん。お前が魅力的だったものでな」

本気で怒っているとはいかないものの、赤くなつた頬を膨らませて抗議してくるラウラに、クロウは謝罪する。

ラウラはナチュラルに褒められて、顔をさらに赤くして喜ぶ。

この間クロウはまんべんなくラウラの全身を撫でまわしていた。

「少し汗をかいているな。暑いか？」

「す、少し……ひゃんっ!」

近くで見ると、ラウラはうっすらと汗をかいており、綺麗な銀髪が肌へばりついている。

クロウは頬を垂れる汗を舐めとりながら聞くと、ラウラは驚いて声をもらす。

ラウラの汗はしょっぱかったが、何故か美味しく感じられた。

「ひあっ!み、耳は……んあっ!」

「耳がどうした？」

「うっ、んっ……あっ!」

クロウは小さなラウラの身体を抱きかかえて、耳をペロペロと舐めはじめ。

敏感な彼女はそれだけで身体中にゾクゾクとした快感が走る。

しかしクロウに答えるのは恥ずかしく、顔を真っ赤にしながら耳の愛撫に耐える。

「ふむ……また汗をかいてきているな」

「う、うわあつ!? そ、そこは……っ!」

クロウは黒いワンピースを上を持ち上げて脱がし、汗の溜まった腋の匂いを嗅いで言う。

自分の匂いがはつきりと出てしまう場所を嗅がれて、羞恥心の薄いラウラも恥じらう。

ラウラは慌てて腕を下ろそうとするが、クロウががっしりと掴んで下ろさせない。

軍人として鍛えられたラウラの腕力は成人男性をも凌駕するもののだが、クロウの腕力はそれ以上ということだ。

ムワツとした熱気が腋から発生する。

「あつーそ、そこを舐めるなあ……」

ペロペロと腋の汗を舐めとると、ラウラはか細い声でクロウを止めようとする。

しかし敏感な彼女は脇を舐められて感じてしまい、強い声が出せないでいた。

「べろお……じゆる、はぷっ」

「あつ、はつ、あつ、あつ」

腋を食るように舐めると次第に抵抗が弱くなっていき、最後にはなされるがままとなっていた。

身体をびくびくと震わせて、気持ち悪いようでも気持ちがいい、微妙な感覚に犯される。溜まっていた腋汗が全て舐めとられ、クロウの唾液だけになったところ、今度は慎ましい胸への愛撫へと移った。

「はあっ、んっ、あっ！はあっ！」

ラウラを立たせ、クロウは地面に膝をついた状態で胸をいじくる。

Aカップの小さな乳肉をふにふにと揉み、胸の大きさに比例して小さな乳首を親指の腹でクリクリと転がす。

「んぎいっ！んああっ!!」

強く乳首をキュツと摘まめば、一際大きな嬌声を上げる。

彼女はどこかマゾの属性があるのかもしれない。

「はっ……はっ……!!」

強く摘まんだので敏感になった乳首を、今度は労わるように舐める。

桃色の乳首は舐められるとピクツと身体が反応する。

貧乳は感度が良いと言われるが、ラウラはその中でもかなり感度が良い方だろう。

「あっ！んっ！んっ！んっ!!」

ちゅうううううと強く吸引する。

乳首どころか周りの乳肉まで吸引する。

ラウラは眉を寄せて目を閉じ、ビクビクと身体を震わす。それと同時に輝く銀髪も揺れ、幻想的な光景を生み出す。

乳首から口を離すと、そこにはクロウが強く吸い付いたせいで吸引痕が付いてしまっていた。

桜色の乳首は唾液で濡れて、厭らしく光っている。

「んんっ!?!んっ、ふっ、ちゅむ、ふうっ!ん、ん~~~~っ!!」

ラウラの身体に痕が残って満足したクロウは、もう一度ラウラの口を貪り始める。

くちゅ、ぬちゅと絡め合う二人の口の間から、淫靡な水音が聞こえる。

ラウラも細い腕をクロウの首に回し、積極的に口づけをする。

クロウは片膝にラウラを乗せて、口づけがしやすいようにしてやる。

そして片手でラウラの頭を支え、もう片手で小さな臀部をギュウウウっつと握りしめる。

さらに陰部に膝をぐりぐりとこすり付けてやると、黒いショーツをジュワワと濡らし始めた。

「んっ!ちゅうっ、んんっ!!」

鼻で荒い息を出しながらも、決して口を離そうとはしないラウラ。

全体重が陰部に押し付けられる膝にかかっているので、強い刺激が襲ってくる。

グリグリと乱暴に陰部を刺激してくるが、ラウラはそれでも快感を得ている。クロウの口内を、ラウラの小さくて熱い舌がかき回す。

何度も膝に押し付けられていた秘部は愛液をたらし、グチュグチュと音が出るほどにま でな った。

「ふっ、んむっ！ふっ、ふっ」

レロオ……とねつとりとした接吻を交わす二人。

ラウラの身体を支えるクロウは、彼女の身体がだんだんと引きつっていくのを感じ、彼女が絶頂を迎えるのを察知した。

首に回す腕にも力が入ってきて、ギユウウツと抱きしめられる。

「んっ！ふっ！んんんんっ!!」

クロウに未発達な肢体を押し付けながら、身体をガクガクと震えさせるラウラ。

小さな乳首は固く尖って、クロウに存在を伝える。

小さな舌を捕まえてレロレロと舐る。

「はー……はー……クロウ、ずるいぞ……」

口を離してラウラの顔を覗き込むと、いつもの凛々しい軍人の貌はなく、快楽を求める雌の貌に蕩けていた。

もうこの男に何も逆らえないといった様子で、クロウの嗜虐心をくすぐってくる。

「胸と口だけで達するとは淫乱な女だ。ここを触つてやるとどうなることやら……」  
「ふっ！んっ！わ、私は淫乱などでは……ふうふうんっ!!」

黒いショーツの上から、すでに濡れそぼった秘裂をクチュクチュと弄る。

ワンピースを口に噛ませ、声が出ないようにすると同時に、小さな乳房が露わになるようにさせる。

露出した小さな胸の頂点にある突起をコリコリといじくり、二点からラウラを攻め立てる。

「分かっていたことだが、もうぐしよぐしよだな」

「んっ……ッ」

ショーツの中にするりと手を忍ばせ、直に陰部を可愛がる。

まだ陰毛が生えていない子供のようなプニプニとした陰部の感触を愉しみながら、秘裂を弄る。

ラウラは恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「膣内なかもトロトロだ。いつでも私を受け入れることができるな」

「んんんっ!!」

指を二本膣内に侵入させて、膣内の状態を確かめる。

小さくて狭いラウラの膣内は、クロウの指を容易く受け入れた。

固くてゴツゴツとした男の指の感触に、大きく反応する。

「んっ！んっ！んっ！！」

膣内で指を回転させたり、軽く出し入れをしたりしてさらに陰部をほぐす。ラウラは腰を曲げ、快楽に屈しそうになる。

しかしクロウにそれを許されず、また直立に立たされる。

「また汗が出てきたな。私がせっかく舐めてやったというのに……」

「んっ！んっ！んっ！！んむっ！」

額から垂れてくる汗をべろべろと舐める。

乳首を摘ままれ、陰核を指でコリコリと転がされてどんどん鼻息が荒くなるラウラ。

鍛え上げられた張りのある尻をフルフルと振り、次の行為を期待する。

動くための筋肉で張りつめた脚はガクガクと震え、まったく頼りなかった。

「そういえばラウラはここが良かったな」

「~~~~~っ！！」

指を膣内のある場所で曲げてぐりぐりと押しながらこすると、ラウラはブルツと汗に濡れた肢体を震わせる。

彼女のGスポットを擦り、一気に絶頂へと押し上げる。

「んんんんんんんっ!!」

ちゅぷちゅぷと同じところを擦ると、とうとうラウラが絶頂を迎えた。

ビクンと一度大きく震えたあと、プシップシッと潮を噴く。

身体を支えていたなけなしの力も抜けて、がつくりと地面に倒れこもうとする。

勿論クロウはラウラを怪我させるつもりはないので、腕を持って支えてやる。

まだ意識が朦朧としていることをいいことに、ぐしよぬれになった黒いショーツを脱がす。

美少女の芳しい汗の匂いと、雌の厭らしい匂いがブレンドされている匂いがクロウの鼻をついた。

「はぁ……はぁ……んん」

ぐったりとしているラウラが身に着けていた衣服を全て剥ぎ取り、全裸にさせる。

凹凸の少ない未発達な身体を仰向けに横たわらせ、脚を開けさせて陰部の状態を見る。

秘裂はヒクヒクと蠢き、強い快楽を待ち望んでいる。

「充血していて真っ赤だな」

小さな秘裂を指で開けると、何度使っても綺麗なままの膣内が覗けた。

膣内は真っ赤に充血しており、淫猥に蠢いていた。



「んっ、んくっ!」

そこをクロウは舌で優しく舐めはじめた。

あふれ出てくる愛液を舐めとるようにべろべろと舐める。

「ひうつ! あつ! んううつ! ま、待て! も、もういいから……!」

ラウラは慌ててクロウの頭を持って止めさせようとするが、それはクロウを調子づかせてしまった。

ジュールジュールと下品な音を立てて愛液を啜り、それで渴いたのどを潤していく。

「あつ………つ!!」

存分に舐った腔内に舌を侵入させる。

愛液でしとどに濡れそぼった腔内はあつさりと舌を受け入れる。

ラウラの細い脚がブルブルと震える。

「むっ、ラウラ、お前……」

「い、言うなあつ! 言わないでくれ!」

クロウが陰部を舐めていると、愛液とも汗とも違った味を感じ取る。

それを確認しようとラウラを見やるが、手で顔を覆って表情を見せないようにしていた。

しかし耳や見えている肌が赤く染まっていることから、それがクロウの予想している

ものだと確信した。

ぐに……と秘裂を開いて見ると、尿道口からピュツと液体が噴き出していた。

「と、トイレに行かせてくれ！頼む！」

「行く必要はない。ここで出せ」

「そ、そんな……あつ！ひつ！や、待ってえ……！」

ラウラの嘆願を一蹴し、無情にも彼女の陰部を舐めることを続ける。

逃げられないようにしっかりと太ももを掴んで押し上げ、ジウルジウルと愛液と小便を啜る。

ラウラはハツハツと犬のように短い吐息を断続的に漏らす。

「あつ！ふあつ！ひつ！で、出るっ！出てしまっ！！」

固くなった陰核を舐めると、我慢できなかつた小便がシヨワシヨワと漏れ出てくる。

ラウラは何とか我慢しようとするのだが、生理現象にはどうすることもできない。

「ふあつ！んうっ！やああああああつ！！」

何度も何度も丁寧に舐められて、とうとう尿道口が開いてしまう。

プシャアアアアつと潮を噴き出し、同時に小便もチヨロロと漏れ出した。

ラウラはこれで絶頂したようで、ビクビクと身体を痙攣させたのだった。

## 行事は大体中止になる

「くう……何故トイレに行かせてくれない!？」

むきやーと怒るラウラ。

よく早朝にクロウがいるベッドに侵入するほど羞恥心が欠けている彼女だが、小便を漏らすのは恥ずかしかつた。

しかもそれを飲まれたのだ。恥ずかしさも倍増である。

「うむ、すまん」

「……おい、謝罪をしているときにそれをこすり付けるな」

クロウの気持ちがあまつたくもっていない謝罪に、ラウラはジト目で見やる。

固くいきり立った男根を、濡れ濡れになった陰部にこすり付ける。

膣外に漏れ出た愛液はヌルヌルとこすり付けられる男根を濡らしていき、すべりをよくする。

「ん……ああ……」

秘裂に亀頭をこすり付けると、ラウラは小さな身体を反応させる。

何度も何度も絶頂させられた陰部はかなり敏感になっていた。

「っ、あ……ふああああああつ!!」

巨大な男根を全て膣内に沈める。

小さなラウラの体軀の中に大きな逸物が埋まっているのは、何とも背徳的な景観を生み出していた。

「うむ……よく締め付けてくるぞ」

「んぐうっ！んんっ！よ、嫁専用だからな」

男根は隙間がないほど膣壁に密着され、愛液のコーティングを受けていた。

ラウラは犬のように短く断続的な吐息を漏らしながら、とても嬉しいことを言ってくれる。

彼女の身体はこれからの未来のことを予想して、男根を啜えている膣壁をキュウウウウと収縮させる。

「んっ！んあっ！あっ！んうっ！はあつ!!」

ズツズツとピストンを開始する。

ラウラの膣は狭くて小さいのだが、すっかりとクロウに開発されており、難なく巨大な逸物を受け入れていた。

しかし小さな身体はどうすることもできず、クロウが腰を振るたびに身体を前後に動かされる。

「あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！！」

「お前は相変わらず奥が好きだな」

ラウラに覆いかぶさり、より奥へと男根を押し込む。

クロウとラウラの身長差で、まるで犯罪現場のように見えてしまう。

子宮口をゴンゴンと押されて強い快感を得る。

激しい運動のせいで垂れていたラウラの汗を、ペロリと舐めとる。

「~~~~~っ!!」

身体を強張らせ、ビクビクと小さな震えが発生する。

男根を締め付ける膣圧は、キュウツとさらに強くなり、痛いほどになる。

ラウラはもう何度目かわからないが、また絶頂の快楽を得た。

「はっ！んっ！あつ！あつ！お、奥が気持ちいいっ!!」

正常位から体位を変えて、彼女を持ち上げて駅弁と呼ばれる体位になる。

ラウラの身体はかなり軽く、平均を大きく越える筋力を持つクロウからすれば、まるで羽のように軽かった。

ゆっさゆっさと彼女の身体を動かすと、巨大な逸物がさらに奥へと入り込む。

ラウラは口をだらしなく開け、そこから真つ赤な舌を垂らしていた。

「あああああああつ!!」

固く尖った小さな乳首をぎゅつと押しつぶす。

もう片方の乳首は指の腹でコリコリと優しくこねる。

ラウラは大きく口を開けて甲高い嬌声を上げた。

「んひひひひひひひひひ!!」

手を下に回して陰核をくりくりと弄る。

ラウラは首を反らせて天井を仰ぎ、強い快感に絶叫する。

「あああああああつ!!クロウっ!そこはダメだあああつ!!」

真つ赤に充血した陰核を弄りながらラウラの身体を上下にゆする。

ズブツズブツと男根が未熟な陰部を貫く。

ラウラの身体はビクビクと面白いように反応した。

「あつ!あつ!あつ!あつ!あつ!あつ!!」

ラウラを下ろして四つん這いにさせ、後ろから猛然と突きはじめ。

片腕を掴んで後ろに引っぱり、腰を打ちだす際の引き繩とする。  
ラウラは自由な片手でシーツをぎゅうつと握る。

「んっ！あっ！あうっ！あっ！！」

何度も絶頂したせい、愛液の分泌量もいつもよりかなり多い。

脱水症状になるのではと心配してしまっただ。

ただ流石は軍人。体力は他の代表候補生たちよりも幾分か多く、まだクロウからの攻めに耐えられていた。

「ふっ、可愛いな、ラウラ。これからもずっとお前を可愛がってやるからな」

「はあっ！ふああああああっ！！」

ラウラの頬をれろれろと舌で舐めながらそう嘔くと、ラウラは大きな嬌声を上げた。

何度も突っ込まれたことよって少し緩んでいた膣圧が、一気にきつくなる。

「ふむ、射精すぞ。もっと締めろ」

「んっ、んふっ、んっ！わ、わかった……んんっ！だ、射精してくれ！」

クロウの横暴な態度にもラウラは従順に従い、下腹部にグツと力を入れる。

ラウラの頭を持って自分の方に向けさせ、力の入っていない口を塞ぐ。

レロレロと小さな舌を絡め取ってしゃぶる。

だんだんと腰を打つ力が強くなり、パンツ！パンツ！パンツ！と鍛えられて張りの良い尻肉が

叩かれて波打つ。

膣内は男根をキュウウウウつと締め付け、射精の瞬間を待つ。

「んやあつ！熱いツ！あああああああつ！！」

細い腕をがっしりと掴まれ、腰と尻がみっちりと密着する。

そして一番深い場所で、精液を放出した。

ドクドクと大量の精液が膣内に流し込まれる。

ラウラも同時に達し、ビクンビクンと身体を震わせる。

びゅーっ、びゅーっとして射精の勢いは衰える様子がなく、子宮内をコポコポと満たしていった。

「ふむ……まだできるな？ラウラ」

「……ああ、勿論だ」

クロウの問いに答えたラウラの顔は、見ただけで発情してしまいそうなほど蕩けてしまっていた。

未発達で男を誘うにはあまりにも未熟な身体だが、全身から色気が醸し出されている今ならどんな男でも墮とせるだろう。





数時間後、クロウとラウラはまだ身体を押し付け合っていた。

背面座位になり、クロウの巨根を咥えるラウラの陰部。

ヌプヌプと粘っこい音が、密着した二人の陰部から聞こえる。

「あああ……また射精<sup>で</sup>てるう……」

びゅっびゅっど勢いが強いままの精液が膣内に発射された。

ラウラの反応はだんだんと鈍くなっていき、今ではほとんど反応しなくなっていました。

ただ時折不意打ち気味に強く乳首を摘まんでやると覚醒するので、クロウとしては問題ない。

「さて、そろそろ飯に行くか？」

「あへあ……」

クロウは男根を刺したままそう言うが、ラウラは意味のない声を漏らすだけであつ

た。

「むふう……これは存外悪いものではないな」

ラウラはご満悦といった表情で、首に回した腕に力を入れる。

散々情事を愉しんだあと、二人は空かした腹を満たすために食堂に向かっていた。

幸いラウラの黒いワンピースはあまり汚れていなかったため、そのまま出てくること  
ができた。

だが何度も達した敏感なラウラの身体はうまく立てないほどガタが来ていて、仕方な  
くクロウにお姫様抱っこされている状態なのだ。

そう、仕方がないのだ。だから怒りの表情を浮かべこそすれ、幸せそうにほにやつと  
した笑みなど浮かべていない。

「しかしラウラは軽いな。あれほどの筋力がどこにあるのか知りたいほどだ」

「ふふん、鍛えているから当然だ。……というか筋力ならお前の方があるだろう」

クロウに褒められて嬉しそうにドヤ顔を決めたラウラは、彼の厚い胸板をペチペチと叩きながらそう言う。

ラウラは勿論クロウの全てを愛しているのだが、一番気に入っているのはガチガチの筋肉である。

力強い男を感じられるのが好きなのだとか……。

「ラウラの身体は柔らかくて好きだぞ。中にみっちり筋肉が詰まっっていて素晴らし  
い」

「ふひやあつ!?や、止めろ！先ほどの行為で敏感なのだ！」

お姫様抱っこをしている片手で太ももをさするクロウ。

ラウラは顔を真っ赤にして抵抗する。

散々攻め立てられたラウラの身体は未だ火照ったままで、少しの刺激でも達してしま  
いそうになっているのだった。

そんなこんなでイチヤイチヤしながら歩いていると、いつの間にか食堂についてい  
た。

そこにはちょうど晩御飯を食べ終えて談笑をしていた生徒たちがいて、お姫様抱っこ

という異様な形で入ってきた二人を見て騒ぎ出す。

「な、何でお姫様抱っこ!?羨ましい!」

「ミキストリくん、人を簡単に持ち上げるなんて、やっぱり男だね」

「あの筋肉ゴリマツチヨにむちやくちやにされたい。はあはあ」

「た、鷹月さんがまた壊れた!」

「どうかあの二人の体格差だったらボーデヴィツヒさんが拉致されているようにしか見えな——」

「屋上」

お姫様抱っこをされて嬉しそうにしているラウラを見て羨む者や、クロウの筋力に感心する者など色々な反応をする生徒たち。

その中で一人の生徒が引きずられていったが、一体どうしたのだろうか。

「さて、もういいな?下ろすぞ」

「むう……もう少ししてもらいたかったが、今は十分だな。また次の機会にやってもらおう」

クロウはラウラを脚から優しく下ろす。

ラウラは少し残念そうにするが、今まで時間でそれなりに満足しており、すぐにそれを受け入れた。

それから二人はそれぞれ気分合った料理を選んで、向かい合って席に座った。

「ラウラはよく食べるな」

クロウはラウラが食べている料理の品数を見て言う。

彼女は五人前ほど頼んでおり、それを無理している様子もなくパクパクと胃に収めていた。

クロウもかなりよく食べる方で、ラウラより食べる速度が速い。

「食べたら成長するからな。ムチムチの身体になってお前を骨抜きにしてやるのだ」

ラウラは決意を語りながら肉を齧る。

男がマツチヨに憧れる者がいるように、女はボインボインに憧れる者もいる。

ラウラは自分が大人のスタイルになっていて、クロウが自分を見て目にハートマークを浮かび上がらせている場面を妄想する。

何とも素晴らしい光景だった。

「私は普段のお前が好きだぞ。小さくて可愛らしいな」

「むう……頭はもつと撫でていいが、その小さいというのはやめろ」

腕を伸ばして頭を優しく撫でると、ラウラは嬉しそうにするものの『小さい』という言葉が嫌だったのか、頬を膨らませる。

ラウラは不健康な痩せた身体ではなく、無駄な贅肉を落として必要な筋肉を圧縮させ

た張りのある身体だ。

だから抱いても気持ちいいと思うことはあっても、気持ち悪いと思うことはない。ラウラのむっちりとした肉の詰まった太ももを撫でまわすのが趣味なクロウとしては、今のままでもまったく問題がない。

「そうだ、嫁。明日にキャノンボール・ファストがあるだろうか？」

「うむ、それがどうした？」

静かにご飯を食べていたラウラが唐突に話しかけてくる。

代表候補生たちや選抜生徒たちが臨むレースは、明日に控えていた。

選抜生徒は一組からは鷹月 静寂が選ばれていた。

「明日私たちが賭けをしないか？ 順位が上の方が下の者に何でも命令できるという賭けだ」

「ほう……」

ニヤリと不敵に笑って賭けの内容を伝えるラウラ。

クロウはそれを聞いて少し考える。

勿論それは勝てるかどうかを吟味しているわけではない。

勝った後どのような命令をラウラに突きつけようか考えているのだ。

ラウラの細い首に首輪をつけて全裸に剥き、夜のIS学園内を練り歩くのもよし。

恥ずかしがるラウラにメイド服を着せて一日中自分に奉仕させるのもよし。

尻穴に浣腸してトイレに行かせず、涙目になって苦悶するラウラを見て興奮するのもよし。

ここまで考えて、クロウは断る理由がまったくないことに気づく。

「ふむ……いいぞ。賭けをしようか」

「おお、流石嫁。食いついてきたな」

ラウラは嬉しそうな、かつ獰猛な笑みを浮かべる。

彼女もクロウを一日好きにできるといふ打算があり、そのことを考えてニヤニヤと笑う。

二人とも流石というべきか、考えていることは似通っていたのだった。



「そうか、レースには間に合わなかったか」

「うん……」

ラウラとの食事を終えて別れたクロウは、自分の部屋で簪と話していた。

簪は顔を下に向けて落ち込んでいる様子だ。

姉と同じく水色の髪がさらりと揺れる。

彼女はクロウをはじめとして色々な友人に助けられてISを組み立ててきたのだが、レースには間に合わせる事ができなかったのだ。

「だがほとんど完成しているのだろうか？」

「うん。でもキャンボンボール・ファスト仕様にするには時間が足りなかった……」

簪の専用機である打鉄式は簪の努力と友人の助力のおかげでほぼ完成しており、飛行や戦闘をするのには何ら問題はない。

しかしキャンボンボール・ファストは高速機動レースなので、他の専用機持ちたちはパッケージを装備したりスラストを増設したりしている。

それらの装備を作ることがまだできていないので、簪は今回のレースには参加しないことになったのだ。

パッケージやスラストを装備しないという例外が一夏と筈だが、それは二人の専用機の機動力が抜群に高いからこそできることである。



簪も友人も下手な科学者よりよっぽどI Sに精通しているが、生みの親には勝てない。

クロウは落ち込んで昔のように下を向いている彼女の頭を撫でる。

「まあ今回のレースに出られずとも、お前はまだ一年生。これから先挽回できる機会がいくらでもある」

「……うん」

クロウが優しく諭すと、簪は素直にうなづく。

これがシスコンである姉の言葉ならここまですんなり受け入れることはできなかつたであろう。

簪は勿論楯無を尊敬して信頼しているが、それよりも信頼しているのがクロウというだけのことである。

「今回は私の応援をしてくれ。お前の応援があれば、私は優勝できる確率が格段に上がる」

「う、うん……っ！ 応援するよ」

簪は顔をバツと上げてクロウを見上げる。

彼女の顔は真っ赤に染まっており、それはクロウに頼られたことによる嬉しさによるものだ。

眼鏡越しにみる簪の目が潤む。

そんな彼女を見て、可愛いなあと抱き寄せるクロウであった。



キャノンボール・ファスト当日の朝である。

クロウは珍しく一人で朝ごはんを食べていた。

大体一緒に行動する専用機持ちの面々はすでに会場に向かい、最後の機体の調整をしている。

一般生徒たちも会場の観客席に向かい、場所取りに励んでいる。

いつも騒がしい食堂だが今はとても静かで、寂しさを感じる。

まあクロウは特に感じていなかったが。

彼は一人で食事をするのも好きなのだ。

しかしクロウに近づいてくる一人の少女がおり、静かな食堂内に響く靴の音が教えてくれる。

「おはよう、クロウ。昨日はよく眠れたかしら？」

「うむ、おはよう。いつも通りだったぞ」

クロウに話しかけた楯無は、口元を扇子で隠しながら微笑む。

彼女は自然な動作でクロウの前の席に座る。

「後輩ちゃんたちは皆機体をいじくっていたわよ。あなたは何もしなくていいの？」

「私には優秀な調整者がいるからな、そのあたりは心配していない。それよりもお前は私より先にレースに出るのではなかったのか？」

キャンノンボール・ファストは学年ごとに部が分けられており、最初のレースは二年生部門だった。

その後一年生の専用機持ち部門、一年生の選抜生徒部門、三年生のエキシビジョン・レースと続く。

一年生だけ専用機持ち部門に分けられている理由は簡単で、数が多いからである。

未完成の簪を入れると全員で八名。これは異例の多さだ。

二年生では楯無を含めて二名、三年生では一名である。

「それが聞いてよ、クロウ。私は強すぎるから出ちゃダメだって言われたの。皆が

レースを楽しんでいるときに警備とか嫌よ〜」

楯無はぶすつと頬を膨らませながらクロウに愚痴を語る。

彼女はIS学園最強の操縦者で、この学園唯一の代表生である。

ぶつちやけ二年生のレースに出たらダントツで優勝してしまうだろう。

このレースは各国の軍隊や研究機関などが勧誘をしに来てもいるので、彼女が出たら他の生徒たちの実力を見極めにくくなるのだ。

「むう……専用機持ち部門のところに私も入れてくれればよかったのに……」

「ふむ……それは楽しそうだな」

楯無が専用機部門に出場することになると、最有力優勝候補であることは間違いないのだが、それでもレースは接戦となるだろう。

それぞれ世界に影響力の持つ国の代表候補生で、しかも下手な代表生よりも強い彼女たちとならいい勝負をするだろう。

ただ楯無は代表生の中でも上位に位置する実力を持っているので、やはり彼女が一番速いことは間違いない。

クロウはそんな彼女を相手にしても怯まない。

確かに速さだけなら楯無の方が速いかもしれないが、このレースは妨害ありきのレースである。

戦闘に関してならクローウより強い者は存在しない。

「ふふ、クローウとなら楽しい勝負ができるでしょうね。まあ今回はあきらめるわ。何だかきな臭い感じもするしね」

「ほう……またあの組織か？」

クローウは残念ながら参戦できなかったのだが、学園祭では一夏を狙った襲撃があった。

それ自体は楯無が簡単に撃退したのだが、セシリアとラウラという屈指の実力者をもつてしても逃走を許してしまったのだ。

その一連の事件を引き起こしたのが、『亡国機業』

ファントム・タスク

クローウが暇になったら襲撃しようかなと考えており、まさに滅亡の危機にある組織である。

「特に今回は一般人の招待もあるから、余計に侵入されやすいのよね。まあこの学園自体の警備がゆるゆるなだけだね」

楯無は呆れているようにため息を吐く。

IS学園は完全に独立した機関であり、他国の権力は当然通じず、日本国内にあるにもかかわらず、日本の政府が影響を及ぼすこともできない。

そんな面倒な立地状態にあるので、当然警備なども自力でどうにかしないとイケない

のだ。

他国からの干渉を受けないのに軍隊や警察に力を借りるわけにもいかず、必然的に警備は緩くなってしまう。

勿論、楯無の実家である更識家の力も当然使えない。

「本当、面倒よねえ……」

「私は襲撃があつた方が楽しいがな」

「もう、他の子たちをクロウと一緒にしないの」

それから二人は楽しく談笑しながら食事（クロウだけ）を終えた。

その後楯無は警備に、クロウはレース会場に向かうのであつた。



「もう、クー遅いよ」

「む、すまない」

会場について真つ先に向かった場所は本音の場所だった。

前日簪に応援を頼んだのだが、そうすると彼女は自分の専属メイドである本音に連絡してクロウの機体を調整するように指示したのだ。

まあ本音は頼まれなくともクロウなら機体を調整することくらいするのだが……。

あまり機体に詳しいわけではないクロウからすれば、嬉しい助力であった。

「は〜い、機体見せてね〜」

「うむ」

本音が何らかのコードをクロウの専用機にぶつ刺すと、多くの空間投影ディスプレイが現れる。

クロウが見ても全くわからないそれを、本音は次々に処理していく。

流星に束のような神速ではないが、それでも彼女は相当優秀であった。

普段はのほほんとしているが、やはり彼女も更識家に仕える布仏家の人間なのである。

「う〜ん……よろし、これでお〜け〜。完璧だよ〜」

「そうか、ありがとう」

何やらいじくっていたディスプレイを閉じ、クロウに終わったことを告げる。

クロウは機体を確認することなく、待機状態に戻す。

自分が確認してもあまり良くわからないし、本音の技術を信頼しているからだ。

「ふく、疲れたく。このお礼はクーとの一日デート券でいいよ」

「む、それは私からお願いたいくらいだな」

「えへへく、嬉しいこと言ってくれるじゃないのく。それじゃあとことん悦ばせてやるからな」

本音がクロウに脱力して抱き着きながら報酬内容を言うと、クロウはすぐさま受け入れる。

彼女とのデートはクロウからしても楽しい。

こうして二人は時間ぎりぎりまでまったりとした時間を過ごしたのであった。





「おお……すげえ盛り上がりだな……」

ピットの中にいる一夏が、外の歓声を聞いてそう呟く。

現在行われている二年生部門のレースはどうやら接戦のようで、手に汗握る良いレースのようだ。

「う、うむ……少し緊張するな」

一夏の独り言のようなものを拾ったのは箒だ。

彼女も専用機を与えられてまだ日が経っていない、こうした大勢の観客の前でISを駆るということに少し緊張していた。

「ふふふ、深呼吸ですわ、箒さん。適度な緊張は必要ですが、過度な緊張は実力を発揮できませんわよ」

そんな箒に優しく助言するのはセシリアだ。

彼女は今まで人の目を集める舞台に何度も上がったことがあるので、緊張することなくいつもの優雅な姿を示していた。

「ふっふーん。今回のレースはあたしがもらったわよ」

鈴は急ピッチで製造された『甲龍』の高速機動パッケージ『風』<sup>フエ</sup>によってほど自信があるようで、始まってもないのにすでに勝ち誇っていた。

まあ確かにスラスタを増設したり機体を調整しただけよりは、パッケージを装備し

た方が良いのは良いのだが……。

「僕も皆も優勝を狙っているし、そう簡単にはいかないと思うけどね」

シャルロットはスラスターを三基増設し、このレースに合わせてきた。

ISの操縦技術もこの面々より一歩前に出ているので、彼女が優勝する可能性は少なからずある。

「まあ始まつたら分かることだ。私が優勝することがな」

ラウラは不敵に微笑む。

彼女の視線の先には、前日に賭けをしたクロウの姿があつた。

クロウと一日イチャコラするためにも、このレースは決して負けられない。

「ふむ、精一杯楽しもうではないか」

クロウの言葉に、専用機持ちの面々がそれぞれ笑顔を見せながら頷く。

それから少しの後、彼らはスタートコールに合わせてレースを開始した。

そして開始した直後に、全員がクロウめがけて攻撃したのは余談である。

ちなみにクロウはそれを全て迎撃し、猛然と巻き返したりした。



一年生の専用機持ち部門のレースが白熱した展開になっているとき、上空に一機のI  
Sが浮遊していた。

それは以前オータムを救出した『亡国機業』ファントム・タスクの者で、構成員からはエムと呼ばれる少女であった。

イギリスから奪ったサイレント・ゼフィルスを装着し、眼下の生徒たちを見やる。

彼女の目は非常に冷たく、考えていることも冷徹であることが見て取れた。

「…………この人数の専用機餅を相手に一人で戦えとか…………ムリゲーだ…………」

…………いや、考えでは悲壮感がにじみ出ている。

エムのIS操縦技術は確かに高い。

そこらにいる一般的な代表候補生相手なら、三人までなら同時に戦って勝つことも可能だ。

しかし今レースをしている代表候補生たちは格が違う。

「あ、今トップなのはイギリスの代表候補生だな」

グレートブリテン及び北アイルランド連合王国代表候補生のセシリア・オルコットは狙撃に優れ、BTシステム適性においては世界最高の数値を叩きだしている。

さらにチームの偏向射撃も完全に使いこなし、次期英国代表生になると噂されている。

「(おお、中国の代表候補生が抜き去ったぞ)」

中華人民共和国代表候補生である凰 鈴音は、パワーアタッカーで機体の燃費も良いので非常に戦いづらい。

近接格闘に精通し、離れば見えない砲弾の衝撃砲が飛んでくる。

世界最多の人口を誇り人材が豊富な中国の代表候補生に選ばれる有能さが、彼女にはあった。

「(ほほう、フランスの代表候補生はISを賢い使い方をしているな……)」

フランス共和国の代表候補生、シャルロット・デュノアは、この面々の中では唯一の第二世代型の専用機を持っている。

しかし侮るなかれ、彼女はそれでも一年生準最強のラウラと互角の戦いを繰り広げられるのだ。

慣性停止結界

『AIC』などの強力な武装を持つラウラと互角に戦えるのは、彼女の戦術である

『砂漠の逃げ水』と技能である『高速切替』があるからである。

「むう……流石私を手こずらせただけはあるな、ドイツの代表候補生は。フランスを追い抜いたか」

ドイツ連邦共和国代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒは、あの男を除いたら一年生最強のＩＳ操縦者である。

ドイツ軍特殊ＩＳ部隊であるシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしく、戦闘能力は非常に高い。

今回のレースにおいても、最有力優勝候補である。

「こんな奴ら、私一人では手に負えないぞ、スコール」

エムは自分の上司を頭の中で思い浮かべ、次会ったら一発殴ると決意する。

今回彼女の任務はレース中の彼女たちを襲撃することである。

何故なのかは知らない。それは上の考えることだからだ。

作者も知らない。何でレース襲ったの？

「織斑 一夏は放っておこう。あいつは後でじっくりと殺す」

エムが考えだしたのは襲撃する標的である。

今自分の姿は相手に認識されておらず、完全に奇襲をかけることができる。

この絶好の機会は大切に使わなければならない。

「誰を狙うか……やはり実力のわからないクロウ・ミキストリか？」

猛スピードで妨害をものともせず、選手たちをごぼう抜きしている男を見る。

クロウに関してはまず情報すら少なく、『亡国機業』フアントム・タスクの者は誰も戦ったことがないので、どれほどの実力を持っているのかさっぱりわからないのである。

「(いや……厄介な代表候補生たちを奇襲して撃破するのもいい……)」  
 エムは誰を狙うかと悩む。

しかしずつと考え込むのもいけない。

眼下のレースはすでに一周目を終え、二週目に入ろうとしていた。

「(……いや、別に一人を狙う必要はないな)」

エムは自分の機体の武装を思い出す。

イギリスから奪ったサイレント・ゼフィルスはセシリアの専用機、『ブルー・ティアーズ』著のデータ書を参考にして作られた二号機である。

ビットはセシリアより二基多い六基となっており、より性能が増していた。

「くつくつ、いくらお前たちが強いと言っても、奇襲を仕掛けられたらどうかかな?」

エムは薄気味悪い笑い声を漏らし、全ビットである六基を展開する。

そしてそこから六筋のビーム光線が、クロウ達に向かつて降り注いだのであった。

## 襲撃者（かわいいそう）

「うわ、また襲撃〜？」

上空から飛来したビームが切っ掛けとなり、侵入した所属不明のISと戦闘が起こっているレース会場。

観客たちは予定にない戦闘に悲鳴を上げ、我先にと逃げはじめた。

そんな中いつものほほんとしている少女は、こんなときでもものんびりとしていた。

「え〜と、いちおう見た限り侵入者は一人〜。……一人で何しに来たんだろう〜？」

ほへ〜と笑いながら、布仏 本音は状況の分析をする。

世界でも屈指の戦闘力を誇るIS学園第一学年専用機持ちたちに一人で奮闘している敵ISだが、どうにも目的が分からない。

もしかしたら何かの陽動だろうか？

いや、それともここで専用機持ちの誰かを戦闘不能にして、誘拐することが目的だろうか？

「……あく、やめやめ。こういう頭を働かせるのは私じゃなくてお姉ちゃんの仕事だよ」

面倒事は姉に押し付けろの要領の良い妹。

逆に姉は真面目すぎる性格なので、巧く避けることができずに不憫な目に合っている。

まあ姉の虚は考えることが別に嫌いではなく、むしろ好きな方なので問題はないのだが……。

「ん〜……やっぱりあれの他にも敵が侵入しているよね〜」

いくらなんでもあのISが単騎駆けしてきたわけではないだろう。

捨て駒にするには惜しい人材だし、まず理由がない。

とすると、どこかに仲間がいるはずなのだが……。

「まあそれは私の仕事じゃないよね〜。見つけても捕まえないし〜」

えへへ〜と笑う本音。

確かに彼女はISの整備が担当であり、それで主である簪を支えているのだ。



とは言っても彼女は代々更識家に仕えてきた布仏家の人間。

身代わりになれるくらいに必要な最低限の武術訓練を受けているはずなのだが、彼女が本気で戦っているところを誰も見たことがない。

「がんばれ、クー！」

のんきに応援している彼女の實力は、まだ誰も知らない。



最初に異変に気付いたのはラウラだった。

キャノンボール・ファスト仕様にしていたため広範囲にわたる索敵は行っていないかったのだが、彼女がそれに気づいたのは軍人ゆえの勘なのか……。

とにかく異変に気付いた彼女はすぐに行動した。

「全員！避けろっ!!」

そう言いながらラウラは自身に迫りくるビームを発見する。

今まで訓練されたことが身についていた彼女は、見事ビームを避けることに成功する。

「うわっ!？」

ラウラの言葉に真っ先に反応できたのは、彼女とよく行動を共にするシャルロットだった。

シャルロットは攻撃を見るよりも先にラウラの言葉を信じ、『ラビッド・スイッチ高速切替』の早業でガードン・カーテンを呼び出す。

そしてシャルロットに迫っていたビームは、そのシールドに受け止められた。

「もうっ！一体何なのよ!？」

鈴は悪態をつきながらもラウラの言葉を信じた。

しかし高速で移動していた彼女は、ラウラのように技術で避けることもできず、シャルロットのように防御パッケージを持っているわけでもない。

だから彼女は衝撃砲を後ろに発射し、その反動でほんの少しだけ加速した。

そんな小さな行為でもビームを避けることに成功した。

「警備は一体何をしているんですの!？」

セシリアは最後の勝負時のためにとっておいたエネルギーを使い、急加速してそれを

避ける。

キャノンボール・ファスト用にビットを全て封印し、スラスターとして使っていたからこそできた加速だった。

「はああつー！」

箒は空裂を振るい、エネルギーの斬撃を出してビームを撃墜した。

流石東がつくった武装なだけあって、かなり使い勝手のいい武器となっている。

そして最後のビームは、勿論クロウを狙っていた。

ラウラの忠告に気づいたクロウだが、いつものように武器を掃射して迎撃することはできない。

あれは少しだがタイムラグがあり、今みたいに切羽詰った状況では不利になるのだ。

だからクロウは仕方なく――

「ふんっ」

裏拳で迎撃した。

本来なら迎撃した方が大ダメージを受けるはずなのだが、ビームが霧散して、クロウには大したダメージは通っていなかった。

いくらISを装備しているとはいえ、エムが使った武器も対ISのことを考えて作られているのに、拳でビームを消し飛ばすというのは異常である。

「な、なんなんだ一体!？」

唯一攻撃を受けなかった一夏が言う。

いきなり上空から攻撃を受けるといふ異常事態に、代表候補生たちはすぐにレースを止めて索敵を行う。

そして自分たちの上空に、一機の国籍不明機がいることを知る。

「貴様……あの時の……」

「……………」

ラウラは襲撃者を見て目を細める。

以前自分とセシリアから逃げおかせ、さらに今レースを邪魔した敵。

今回のレースにクロウとの賭けがあったラウラは、氷の如き冷たい目でエムを睨む。

エムは何も言わないが、内心冷や汗だらだらである。

あの奇襲で全員とは言わないものの、何人かにダメージを与えるつもりだったのだが、全員無傷で自分を睨みつけてくる。

特にあのマツチョ男はなんだ。やけにキラキラした目で見つめてくるぞ。

「うーん……織斑先生に判断を仰ぎたいのですが……」

「こっちは攻撃されているんだし、自衛戦闘で話を通るでしょ。というかやられっぱなしは腹が立つし」

セシリアはいわば上司である千冬の指示に従おうと言うが、鈴は攻撃することを意見する。

彼女たちの性格の差がはっきりと表れたときだった。

「織斑先生と通信が取れないなら、今はラウラに従おうよ」

シャルロットはそう言ってラウラを見る。

彼女はこの中で最もＩＳ戦闘を経験しており、特殊部隊の隊長をしていることから自分たちを巧く使ってくれることを理解していた。

指名されたラウラは、自分の考えを言う。

「ふむ……教官と通信できないのなら仕方がない。あの襲撃者をボコって捕まえるぞ」

『らじやー』

「い、いいのか……?」

ラウラの辛辣な指示に、嬉々として応じる専用機持ちたち。

とくに全員負けず嫌いな性格なので、大小あれどいきなり奇襲されたことに関しては憤りを感じていた。

そんな中一夏だけが、明確な敵にも関わらずエムの心配をするのであった。

ちなみにクロウはすでにやる気満々である。

「ではわたくしからー！」

「あたしもよー」

二人して銃口と砲口をエムに向け、ぶっ放す。

スターライトmkIIIの銃口から発射された巨大な蒼いビームがエムを狙う。

それに少し遅れて龍咆の見えない衝撃砲が疾駆する。

「……ふん」

エムはそれらの攻撃を一笑すると、セシリアのビームを身体を反らせて避ける。

続いて襲い来る衝撃砲には、前方にシールド・ビットを展開して防ぐ。

少々衝撃が身体を襲うが、大したダメージもなく防ぐことに成功する。

「あー、やっぱり今の威力じゃあ通用しないわね」

鈴は分かっていたことのように苦笑する。

今の『甲龍』<sup>シエンロン</sup>はキャノンボール・ファスト仕様であり、高速機動パッケージの『風』<sup>フエン</sup>を

装備している。

なので衝撃砲の威力は格段に落ちて、近距離の相手にしか効果が期待できないのだ。

「ふふ、わたくしの攻撃はまだ終わっていませんわよ？」

全ての攻撃を避けて自分を見下してくるエムに向かって、優雅に、かつ不敵な笑みを

見せるセシリア。

それを訝しげに見つめるエムだったが、すぐに理由が判明した。

一度避けたビームが再び自分に向かって襲い掛かってきたのだ。

「なっ……『偏向射撃』だど!？」

エムはその技術に見覚えがあった。

何故ならそれは自身も使える技能だからだ。

しかしセシリアが『偏向射撃』を使えるという情報は見たことがなく、彼女がそんな

高等技術をできることに不意を突かれた。

「ちっ!」

だがエムのIS操縦技術は非常に高い。

再び背後から迫ってきていたビームを避けることに成功する。

しかし安心したのも束の間、また屈折して襲い掛かってくる。

「舐めるなっ!」

エムは自身の主要武装である大型ライフルを呼び出す。

『星スターブレイ<sub>を</sub>神レイ<sub>者</sub>カー』と命名されたそれは、ビームと実弾の両方を撃つことができる優れものである。

エムはそれから太いビームを発射し、向かってきていたセシリアのビームと相殺させた。大きな爆発が起き、煙が辺りを覆って視界が悪くなる。

しかしハイパーセンサーなどの機能が搭載されているISに視界不良など問題にならない。

そう、例えばセンサーが知覚しても身体が動かせないほどの速度で攻撃されない限りは……。

「な、なにつ……!?!」

超高速で飛来した剣がエムを襲う。

急な攻撃で避けられなかった彼女のISのシールドエネルギーをごとそりと奪って行った。

エムは混乱する中、自身を攻撃した者を見つけ出す。

クロウ・ミキストリ。

彼が背後の空間を歪ませて発射した武器が、自分に命中したのだろう。

「くそ……っ!」





「ま、まさかあのエムがここまで追い詰められるなんてね……」

突然に戦闘で人々がいなくなった観客席で、ある女性は驚きの感情を抑えることができなかつた。

彼女の名前はスコール・ミューゼルと言い、エムと同じく『亡国機業』の構成員である。

実働部隊のリーダー的役割を担っており、『亡国機業』の襲撃は大体こいつの命令のせいである。

普段冷静沉着で、常に人の上に立つような女だが、今は珍しく焦りを覚えていた。

「ここまで代表候補生たちが強かつたなんてね……」

スコールとしてはエムが専用機持ちたちの面々を圧倒し、『亡国機業』の保有戦力を誇示する腹積もりがあつたのだが、むしろこちらが圧倒されているようにすら見て取れる。

今回の襲撃に当たって要注意人物をまとめておいたのだが、代表候補生たちはそこには入っていないなかつた。

入っているのはIS学園最強の生徒、更識 楯無と、前線を退いてなお最強と謳われ

る織斑 千冬である。

「……これ以上戦闘を続けさせてもエムが墮とされてしまう可能性の方が高いわね」

スコールはそう判断し、通信を使ってエムに撤退命令を下そうとする。

しかしその時、目の前が何かに遮られ、急に真っ暗になる。

「っ!？」

目を覆っている物体からはほんのりと暖かさが感じられ、それが人間の手であることを伝える。

スコールは慌てて手を振り払い、その場所から距離を取る。

「きやんっ!もう……ちよつと悪戯しただけじゃない」

「……更識 楯無」

スコールの目を覆っていたのは楯無だった。

目をパチクリとさせた後、楽しそうにクスクスと笑う。

ひろげられた扇子には、『悪戯成功』と書かれてあり、スコールを苛立たせる。

「いつの間に私の後ろに立ったのかしら?」

「そんなのついさつきよ? たまたま『亡国機業』フアントム・タスクさんを見つけたから、挨拶をしておこう

と思つて」

「次からは普通の挨拶で構わないわよ」

冷静にふるまって見せるスコールだが、心の中では大いに慌てていた。

彼女はかなりの実力者で、ISを使用していなくても屈強な軍人を楽に倒せるほどの格闘能力を持っている。

気配察知なんて漫画のようなこともできるのだが、楯無はまったくそれに気づかせることなく間合いに入られたのだ。

もし楯無が殺すつもりだったのなら、スコールはすでにこの世から去っているだろう。

「ところであの襲撃者の子。少しかわいそうじゃないかしら？ あんなに代表候補生たちが集まっているところに一人で攻撃させるなんて……」

私でも負けるわよと付け加える楯無。

もうエムは次から次へと飛来してくる攻撃をいなすのに必死である。

傍から見ればイジメ……さらに悪く見ればリンチにしか見えない。

それも専用機持ちたちが一夏と箒を除いて嬉々として攻撃しているものだから、二人が少し止めようかと考え始めてさえいる。

「ふふ、私の計画通りよ」

「何が？」

嘘をついて強がるスコールに、楯無は冷たく返す。

もつとしつかりと調べておけばよかったと思っっているのは内緒である。

「で、更識 楯無さんは私を捕まえにきたのかしら？」

「ええ、そうよ。面倒だし、大人しくしてね？」

につこりと可愛らしい笑みを浮かべる楯無に反して、スコールの顔は強張る。

自分の背後を容易くとする彼女に、戦闘で勝てるとは思えない。

ISを使った戦闘ならまだわからないが、もしここで展開してドンパチを繰り広げれば、楯無から逃げおおせる前に異変に気付いた代表候補生たちがこちらにやってくるだろう。

彼女たちの戦闘を見て、複数人を相手するのは危険だと判断する。

しかし『ファントム・タスク亡国機業』の人間がそう簡単に捕まってしまうわけにはいかない。

「ふふ、私を捕まえられるかしら」

「結構簡単だと思うのだけれど……」

「失礼ね、あなた」

代表候補生たちのことは特に調べていなかったが、要注人物の楯無のことはしっかりと調べていた。

彼女の弱点も、こちらは把握済みである。

スコールの余裕を見て、楯無は何かあるのかと身構える。

「これ……なんだと思う？」

「そ、それは……！」

スコールの手にある紙切れを見て、楯無は目を見開く。

そんな馬鹿なと思いいながらも、確かにそれは本物であった。

「な、何であなだがクロウの写真を……」

そう、それはクロウの姿が写された写真であった。

普段の制服を着た姿や、何故か筋骨隆々の肉体を露出させた写真まである。

楯無はくつと鼻を抑える。

クロウジャンキーの彼女は、下手をしたら鼻血が出てしまう。

「ふふふ、ある場所から拝借したのよ」

ドヤ顔をさらしながらスコールは言う。

彼女が奪ったのはなんと東のパソコンからハッキングして得たものであった。

世界的なテロ組織である『亡国機業』フアントム・タスクには、それを可能にしてしまうハッカーがいる

のだ。

とは言っても、東が管理しているパソコンにハッキングしていたわけではない。

そんなことをできるのは、この世界に一人もいない。

簡潔に言えば、東が捨てたパソコンから得たものであった。

「どうやら束はそのデータを移行することを忘れていたらしく、それをたまたま彼女たちが拾ったというわけだ。」

普段の束ならクロウに関する事で忘れることなんてありはしないのだが、その時はクロウの部屋に隠してあるカメラから新たなデータが送られてくるときで、それに夢中になって忘れてしまったのであった。

「私を見逃してくれるのなら、これを上げてもいいわ」

「くっ……なんて女……！」

二人は大まじめだが、傍から見ればギャグにしか見えない。

「というか楯無は別に写真がなくても生でいくらかでも見られるのだが、写真は写真でほしいようだ。」

楯無は苦渋の決断を迫られる。

スコールを見逃して写真を得るとすれば、私的には大満足だが、更識家当主やI S学園生徒会長としてのプライドが許さない。

スコールを捕まえて写真を得ないとすると、役目はきっちり果たしたことになるが、貴重なデータが失われてしまう。

楯無は悩んだ。悩んで悩んで、とうとう答えが出た。

「なんだ、あなたをひっ捕らえて写真を奪えばいい話じゃない」

「…………え？」

キュピーンと目を光らせてじりじりとスコールににじり寄っていく。

スコールはまさかの返答に頬を引きつらせる。

そしてとうとう壁に背中が付き、これ以上逃げられなくなってしまう。

「うふふ、追い詰めたわ」

「お、落ち着きなさい」

「私は落ち着いているわ。だからこんなにも冷静な判断を下せたのよ」

スコールはなに言ってるんだこのジャイアンと怒鳴りたくなつたのだが、何とかそれを我慢する。

背後の逃げ道は行き止まりになり、前にはハアハアと荒い息を漏らしている榊無。

スコールが出した判断は……。

「はあっ！」

「な、何を…………!?!」

手に持っていた写真と、懐に隠していた写真を全て空中にぶちまける。

当然最初の目的から乗り換えていた物が目の前を舞っているの、榊無は写真に目がいく。

その際にスコールはすぐさまI S、『黄ゴール金デン夜・ド明ーンけ』を展開、大空へと飛翔する。

「ちよつ……待ちなさい！」

そう言つて手を上げて制止する楯無を一切振り返りもせず、彼女は凄まじいスピードを出して大空の彼方へと消えて行つた。

楯無はそんなスコールを見送るしかなかく——いや、追えば彼女の實力なら捕らえることも可能だったのだが、写真をかき集めるのに忙しくてしなかつた。

地面に散らばつた全ての写真を拾い上げた後、楯無は千冬に連絡を入れる。

「あ、織斑先生。すみません、逃げられてしまいました。……ええ、彼女も中々の使い手でした。次こそは必ず捕まえてみせます。はい、失礼します」

逃がしてしまつたのは全てスコールの實力のせいということにした楯無。それでいいのか、生徒会長。

楯無は報告を終えた後、恍惚とした表情で写真を眺めていた。





「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「……俺らつて襲撃された方だよな？被害者だよな？」

「ああ、そうだ」

「傍から見れば、俺たちつて加害者じゃないか？しかもかなり性質の悪い……」

「……言うな」

一夏と箒が、どこか遠い目をしながら話し合う。

二人の視線の先には、絶賛ボコられ中のエムの姿があつた。

下からはセシリアの『偏向射撃』

フレキシブル

ありのBT狙撃と、シャルロットの実弾狙撃。

空中の少し離れたところからはラウラがワイヤーブレードを飛ばす。

双天牙月を持った鈴は近接格闘を挑み、エムを苦戦させる。

苦戦どころか、何とか負けないように必死に防御しているだけである。

バイザーの中では、普段冷徹な目がうるんでいたりする。

「あ、また吹っ飛ばされた」

「や、やりすぎではないか……？」

エムはクロウからの攻撃を受け、否応なしにダメージを受ける。

代表候補生たちの攻めもかなり鬼畜だが、クロウが一番厄介だった。セシリアやシャルロットと同じように遠距離から武器を飛ばしてきたと思えば、鈴と一緒に武器を振り下ろしてくる。

鬱陶しいことこの上なかった。

一夏と箒は、だんだんと襲撃者をかわいそうに思う気持ちが強くなっていく。

「……戦闘不能になつたらすぐに助けてやるか」

「……そうだな、それがいい」

襲撃された被害者にも関わらず、二人は敵の救出を考えていた。



「うりやああつ!!」

「くろう……つ!!」

振り下ろされる双天牙月を銃身でなんとか受け止める。  
重い衝撃が全身に負荷される。

エムは銃身を押し返し、何とか距離を取る。

リンチとも言える飽和攻撃を受けて、すでにシールドエネルギーは全体の一割ほどしか残っておらず、これ以上の戦闘は本当に危険だった。

「はあ……はあ……くそっ！」

エムはこれまで敗北ということをほとんど知らない。

大抵の者なら簡単に倒せるし、前も世界最強と謳われるアメリカ軍の秘密基地を一人で襲撃して無事に帰ってきたほどだ。

なのに、今回敗北の色が濃厚になっている。

彼女はそれが許せなかった。

「(そもそもなんでこいつらこんなに強いんだ！レース用にISを調整しているはずだろっ!?)」

そう、第一学年専用機持ちの面々は、レースに合わせて機体を変えてきていた。

主に武装を外し、速度に重点を置いた機体に変えている。

それなのにもかかわらず、エムを圧倒するだけの実力を備えていた。

「ねえ、クロウ。あたしとあんた、どっちがあいつにとどめを刺すか勝負しない？」

「うむ、いいだろう。私が勝ったらねっとり可愛がつてやる」  
「ね、ねっとり!？」

漫才をしている目の前の男女をジロリと睨む。

何でこんなふざけた奴らが自分より強いのだ。

国際的なテロ組織の実働部隊で、長い間前線に立ち続けたエム。

そんな彼女が命を張った実戦経験がほとんど皆無といった少女たちに負けるという事実は、どうにも受け入れがたい。

しかし勝てないのも事実。どうかにかけてこの危険領域から脱出することを考えていたエムに、スコールから通信が届く。

「なんだ、スコール！私に何の……なに？撤退だど？」

自分の襲撃に紛れて侵入していたスコールは、すでに逃げ出しているとのことで、エムもすぐに逃げろとの命令だった。

体内に監視ナノマシンが注入されていることを忘れて、本気で殺してやりたいと思う。

しかもどうやって逃げろと言うのだろうか。

先ほどまで格闘戦をしていた二人は漫才を繰り広げているが、少し離れたところではあの手ごわいドイツの代表候補生が睨みを利かせているし、下では二人の狙撃手が自分

を狙っている。

「どうか何であのドイツ人は自分を睨みまくってくるのだろうか？」

「(クロウとの賭けを……許さん)」

ラウラはまだ根に持っていた。

彼女にとっては大きなイベントだっただけに、エムに向けられる敵意は最も大きい。

「(さて、どうやって逃げるか……)」

エムはとりあえず自分に怒気に向けてくるドイツ人を放っておき、逃げるために頭を働かせる。

一目散に逃げる？

そんなことをしたら、後ろからイギリス人とフランス人に狙撃されるだろう。

下手したらあの男が強力な武器を撃ってくるかもしれない。

敵を全員倒す？

そんなの無理。一番無理。

視界を悪くさせて逃げる？

ISには大して意味がない。

エムはとにかくいろいろ考えた。

そして考えた結果——。

「よし、一般市民を楯にしながら逃げよう」

わりと外道な作戦を思いついた。

そうと決まれば話は速い。

再び襲い掛かってくる鈴とクロウを何とかいなしつつ、市街地へと移動する。

そして突然 I S を解除し、生身になって人ごみの中に突入する。

「なっ!?!逃げた!?!」

鈴は驚きの表情で人ごみを見る。

あれだけの人数がいる中に、I S で突入するわけにはいかない。

I S を解除して追いかけてもいいが、対人格闘となるとエムにも分があるかもしれないし、そもそもここから先は学生の手に残るものだ。

セシリアやシャルロットもそう考えたのか、展開していた I S を解除する。

一夏と箒は不謹慎ではあるが、これ以上エムがいじめられないことに少しホツとした。

ただ納得できない者がいるのも事実で……。

「ふむ……とりあえずあの付近一帯に武器の掃射を……」

「ダメに決まっているでしょ!!」

「いや、構わんぞ嫁。やってしまえ」

「あんたは日本とドイツの国際問題を引き起こさせる気!？」  
鈴のツツコミが冴えわたった。



キャノンボール・ファストの日は、一夏の誕生日でもあった。

彼の家には多くの者が誕生日を祝いに行き、盛大な誕生日会が開かれた。

クロウも誕生会には行き、お祝いの言葉とプレゼントを渡してきた。

彼が渡したのは革の靴であった。これから先必要となることも多くなるだろうと考  
えてのことである。

意外とまでも、他の面々……特に箒や虚が驚いていたのは当然のことである。

そしてクロウは早めにお暇し、現在簪を部屋に呼んでいた。

「んっ! あっ! あっ! あっ! あっ!!」

最初は普通の会話を楽しみ、ほんわかとした雰囲気の流れていたのだが、いつの間にかねっとりとした淫気が部屋中に満ちていた。

大きな身体のクロウが簪に覆いかぶさって腰を激しく振っているのは、どうにも犯罪臭がぬぐえない。

ぱんっぱんっ和张りのある小ぶりな尻肉が叩かれる音がする。

「んんんんんんんんっ!!」

ビュクビュクビュクと大量に流し込まれる精液。

簪は細い脚をピンと張らせ、ビクビクと小刻みに痙攣する。

小さな手はキュツと閉じて、歯をグツと食いしぼる。

しかし口の端から一筋のよだれが垂れてしまっている。

「はあ……はあ……クロウ、激しい……」

激しい動きでずれた眼鏡を直しながら、抗議する簪。

その抗議は本当の嫌悪感はなく、これ以上されたら困るという意味にとれた。

まだ陽は落ちたばかりで、夜は長い。

とりあえずクロウは簪を連れてシャワールームに入ることにしたのだった。





なお、一夏を暗殺しようと拳銃の用意までしていたエムであったが、クロウたちに散々痛めつけられて動けないため、暗殺は延期になったようである。

「くっ……この借りは必ず返すぞ……！」

## 最終章

### 姉妹の妹の方

簪の中に欲望を流し込んだクロウは、シャワールームに入っていた。

彼女との性交で汗をかいたし、キャノンボール・ファストでかいた汗もあった。

そしてシャワールームには、クロウ以外にも人の姿があった。

「うう……恥ずかしい……」

タオルで身体を隠そうと必死に伸ばしている簪。

しかし身体を洗うためのタオルなのでそこまで布面積がなく、うまく隠しきれなかった。

慎ましく小ぶりだが、感度がかなり良く、形も良い乳房。

その頂点にある、色素の薄い桃色の乳首。

彼女も次女とはいえ更識家の人間として鍛えられており、腹も引つ込んでいて腰が括れている。

陰部には陰毛が少し生えており、未熟な肢体とのギャップにくらりとくる。

細いながらも張りの良い太ももはスラリと伸びている。

そんな簪の欲情を掻き立てる肉体を見て、クロウは嬉しそうにうんうんと頷く。

「く、クロウは早く座って……」

ジロジロと自分の身体を見られて恥ずかしくなった簪は、クロウに椅子に座ることを催促する。

自分の身体にあまり自信の持てない彼女は、見られるのが恥ずかしかった。

まあクロウが簪の身体が好きだと言うので、最近はコンプレックスではなくなってきたのだが。

「じゃあ背中を洗うね……？」

「うむ、頼む」

簪はシャワーノズルを取ると、そこからお湯を出してクロウの背中にかける。

そしてタオルにボディソープをつけて泡立たせ、クロウの背中をゴシゴシと擦る。

「やっぱり……大きい……」

近くで見ても直に触り、改めてクロウの肉体が男として凄いかを知る。

背筋もバキバキに発達しており、筋肉の厚い層で感覚がちゃんと通っているのかも疑問だ。

簪は意中の男が非常に遅いことに、女の部分が刺激される。

「(だ、ダメ……！今はえつちなことを考えたら……！)」

つい先ほどまでたくさん可愛がられていたのに、もうクロウを求めてしまっている。元々簪は性欲が強い方だが、クロウに開発されてからさらに強くなった気がする。

特にクロウにだけ反応するこの身体は、もう彼なしでは生きてはいけないのだろう。ちなみに肉体だけでなく、精神の方も大分依存していたりする。

万が一クロウが死んだりしたら、おそらく簪は真つ先に後を追ってしまうレベルである。

「お、終わった……」

「む、ありがとう。前も頼む」

「ま、前……!?!」

カツと頬を赤くする簪。

背中ですえドキドキと胸を高鳴らせていたのに、前なんてとてもじゃないが我慢できそうになかった。

しかし簪はクロウに頼まれれば断ることはできないので、クロウの前面に回って身体を洗うことになる。

あまりクロウの身体を見ないようにそつぽを向く。

ただあまり我慢できていないようで、鍛え上げられた身体をチラチラと見ている。

「じゃ、じゃあ洗うね……」

そう言つて簪はタオルにボディソープを追加し、泡立たせる。

固くて太い大きな腕を取り、ゴシゴシと擦る。

最初はクロウの身体に興奮していた彼女だったが、洗っているうちにそちらに夢中になり始め、真剣に身体を洗いだす。

そうすると簪の身体のガードが緩まり、ほぼすべての場所が見えてしまう。

性豪であるクロウは、一度出したのにもかかわらず、また固く大きくさせはじめる。

そしてついに最大の大ききさになった男根が、簪の目に入った。

「ひゃあつ……!?お、おちちちちちち……っ!」

「うむ、落ち着け」

顔を熟したトマトのように赤くし、目をぐるぐると回す。

壊れたラジオのように『ち』を繰り返すその姿は、少し怖かった。

先ほど自分の中に入ってきて、かき回したモノを見て簪の子宮がジュンと潤む。

この男の子種が欲しいと身体が主張する。

「あ、あんなに射精だしたのに……こんなに大きい……」

簪は男根に顔を近づけ、じーっと見つめる。

陰茎の部分には太い血管が浮かんでおり、カリ首は大きく張り出していて膣肉を良く挟めるようになっていた。

何度も使い込まれているので赤黒くなっており、少々グロテスクに感じる。

指でツンツンと突くと、その重さが指から伝わり、逸物はビクンと反応する。

簪の薄い胸の内では、心臓がどきどきと高鳴りを強くしていた。

「くんくん……少し臭い……」

さらに顔を近づけ、鼻が男根に触れてしまいそうになるほど近づく。

鼻をひくつかせ、スンスンと匂いを嗅ぐ。

濃厚な汗と雄の匂いが鼻孔を見だし、脳を犯す。

簪はまるで薬物中毒者がそれを嗅いでいるように顔を蕩けさせていた。

その顔からは強い色気が発せられていた。

「どうした、簪？洗ってくれ」

「……はっ!?う、うん……」

どこか淫靡な場所に意識を飛ばしていた簪はクロウに呼び戻される。

一生懸命洗っていたので、簪の肢体にも泡が付着していた。

胸の前で泡立ったタオルを持っているので乳房は見えないが、うつすらと茂みのある陰部はくつきりと見える。

泡がゆつくりと簪の身体を滑っていき、可愛らしい臍を通り、茂みで一時止まる。そんな淫靡な姿を見て、逸物はさらに固くなる。

「ん……固い……」

タオルを放り出し、泡立った手で直に男根を清める。

固く張った亀頭部を、泡だらけの手でぬちゅぬちゅと擦る。

陰茎に手をやると、上下にこすって汚れを落とす。

「ん、ん……」

泡のせいですべりの良くなった柔らかな掌で男根を擦られて、心地いい快感がクロウを襲う。

細い指が陰茎に絡まる光景は非常に淫靡だった。

「いいぞ、簪。気持ちいい」

「そ、そう……」

そっけなさそうに言う簪だが、手の動きがより優しくかつ射精を促してくる。

顔も少しにやけているし、本当は嬉しくて仕方がないのだろう。

クロウは上から跪いている簪の肢体を覗き見る。

Bカップと小ぶりではあるが確かなふくらみが覗ける。

「む、射精るぞ」

「う、うん……」

「ごごしと男根を上下にこすりあげて洗っていると、クロウは射精が近いことを告げる。

掌の中で熱くて固い逸物がビクビクと震えているのを感じ、簪はそれを察知する。

「ひゃあっ……!?!」

優しく射精を促され、鈴口から決壊したように精液があふれ出る。

ドビュツと勢いよく飛び出した精液は、天高く吹き上がる。

簪は驚いて強く男根を握りしめてしまうが、それも射精量を増やすことに貢献する。

ビュツビュツと大量に放出された精液は、床を汚し簪も汚す。

水色の髪にかかった白濁液は、顔に垂れ落ちて端正な顔を化粧する。

「さ、先に出るね……!」

簪はしばしの間射精する男根を呆然と眺めていたが、立ち上がると勢いよく浴室を飛び出して行った。

出ていく際覗けた耳が真っ赤だったことから、おそらく照れているのだろう。



クロウはそんな彼女を可愛く思いながら、お湯の溜まった湯船に浸かるのであった。



「あ、あんなの見たら……こっちが恥ずかしい……」

簪はベッドの上にチョコンと腰掛け、顔を真っ赤にしてさきほどのことを思い出していた。

彼女も今更逸物で照れたりするほど乙女ではないはずなのだが、クロウに関してはずつと恋する乙女であった。

もし他の男のモノを見ても、冷たい目でそれを見やるだけである。

……それはそれで（ry

「どうかしたか、簪？」

「ひゃいっ……!?!」

突然隣から聞こえた声に、身体をはねさせる。

隣を見れば、少し髪を湿らせたクロウの姿が。

浴室から出て普通に隣に座ったのだろうか、羞恥で考え込んでいた簪は気が付かなかつた。

「あ、あう……クロウ……」

眼鏡越しに上目づかいで彼を見やり、恥ずかしそうに頬を赤らめる。

そんな可愛らしい仕草と、元からの容姿の良さも相まって男心をくすぐる愛くるしさを感じさせる。

これが狙ってやったのではなく、天然というところが恐ろしい。

楯無やシャルロットとなれば、また話は変わってくるのだが。

「ふっ、可愛いな」

「ふえっ……!?!」

簪の華奢な身体を力強く抱き寄せる。

彼女も興奮しているのか、火照っていて暖かさが身体に流れてきて、柔らかな感触も感じられる。

両目を見開いて慌てていた簪は、おずおずと腕を伸ばしてクロウに抱き着く。

「んっ、んっ、んふっ！んむっ、んっ、んむっ、んっ」

簪の薄くて形の良い唇に荒々しく吸い付く。

最初から激しい接吻で、ぢゆるぢゆると口内の唾液を吸い上げる。

簪も目を強く瞑って、舌を伸ばして絡ませる。

押し付け合っている二人の口の間から、唾液が何筋かたれてくる。

「んっ、ん……ふあっ」

口を離して簪の顔を見る。

目は細くなり、うっすらと口を開けている。

とろんとした蕩け顔で、ぼんやりと眼鏡にクロウを映らせていた。

力が抜けているようであった……とだらしなく座り込む。

服の上からでも分かるほど胸にはポツチが浮きあがり、子宮はきゅううんつと切な

げに男を求める。

「顔が蕩けているぞ」

「あっ、あっ！」

簪の頬をれろれろと舐める。

シャワーに入って汗を流したばかりなのだが、ほんのりと汗の味がした。

簪は片目を瞑り、気持ちよさそうに声を上げた。

「ああ……恥ずか……っ、しい……っ」

シヨーツの上から秘部を指でこする。

軽く触れるような愛撫なのだが、とめどなく溢れてくる愛液はシヨーツをびしょびしょに濡らし、触れるだけでぷちゅぷちゅと音を立てる。

「うっーん！んっ！」

服の上から浮かび上がった乳首をつんつんと舌で突く。

ぷつくりと膨れ上がった乳首は、さらに固くなる。

胸の感度が良い簪は、舌が触れるとぴくつと小さく反応する。

「ひあああああっ!!」

大きく口を開けて乳首と服を口に含み、ぢゅぱつと吸いあげる。

濡れそぼった秘裂をシヨーツ越しにぐりぐりと少し強くこする。

すると首を反らせて天井を見上げ、高い嬌声を上げる。

「ふむ……これだけ濡れていたら、もう大丈夫だな」

「う、うん……ちようだい……」

クロウは煩わしそうにズボンをずらすと、巨大な逸物が姿を現す。

ギンギンにいきり立った男根は、早く膣内に入りたくて仕方がないようだ。

簪はドキドキと高鳴る胸を抑え込みながら、自身で脚を持って陰部が見やすく姿勢を取る。

陰部は愛液で濡れて十分にほぐれており、小ぶりの尻に液体が飛び散っていた。「あつー！んっ！んっ！」

クロウはいきなり挿入するようなことをせず、秘裂に太い逸物をこすり付ける。表面に浮かんでいた愛液で男根がコーティングされる。

にゆちにゆちと粘っこい音が響き、敏感な陰部を擦られて簪は快感を得る。

「よし、挿入れるぞ」

「う、うん……」

亀頭を秘裂にあてがう。

「んっ、んっ！んんっ!!」

それから腰をゆっくりと押し進めていく。

ずぶぶとグロテスクな肉棒がほぐれた膣内に埋まっていく。

「うっ、んっ！~~~~~っ!!」

ずんつと根元まで男根を膣内に押し込む。

ただでさえキツイ膣内は、きゆうきゆうと締め付けることでさらなる快感を逸物に与える。

簪は菌をぐつと食いしぼり、声を上げそうになるのをこらえる。

何度もクロウのモノを突っ込まれた膣内は、巨大なそれをあつさりと受け入れた。

「あつ、あつ、あつ!」

ぬるう……と緩慢に男根を引き抜こうとすると、膣壁がきゅんきゅんと締め付けきて離そうとしない。

ねつとりとした愛撫に、ぞくぞくと快感が背筋を駆け上る。  
特に今両脚を密着させているので、膣圧も強くなっている。

「ふむ……少し変えるぞ」

「んっ、んううううっ!!」

軽い身体の簪をごろんと転がせ、後背位の体位になる。

そして小ぶりな尻を掴んで持ち上げる。

こうすることで背面座位の体位に変わる。

ぬぼお……と男根を引き抜いていくと、膣内から出た陰茎は愛液で濡れて妖しく光っていた。

「はひいひいっ!!」

持ち上げていた尻から手を離すと、ずんつと奥まで男根が突き刺さる。

焦らされて十分にほぐれていたことと、彼女自身の体重でかなり奥まで刺さってしまつた。

ぶちゅんつと大きな水音が起きて、愛液が飛び散る。

足の裏を反らせ、びくびくと小刻みに痙攣する。

「あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！！」

クロウは強靱な腕で簪の身体を上下にゆすり、ピストンを開始する。ずちゆずちゆと愛液が掻き混ぜられる音が大きく聞こえる。

華奢な身体は揺らされるたびに、ガクガクと揺れる。

陰部からぷしゅと潮が噴き出る。

「気持ちいいか、簪？」

ぐっぽぐっぽと男根を突き入れながら簪に問う。

巨大な逸物が比較的小さな秘部に押し入れられている光景は、どうしてか背德的であつた。

「き、気持ちいい、いつ！あつ！あつ！！」

はへはへとだらしない表情を作りながらも、律儀に答える簪。

賢明さを感じさせる目からは涙を零し、小さな口はだらしなく開いてよだれを垂らす。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

持ち上げていた簪を下ろしてベッドにうつぶせに寝かせ、背面座位から背面伸長位に変える。

ヌプヌプヌプヌプと奥まで突っ込まず、比較的入り口の方を擦る。

脚を閉じているため摩擦が強くなり、両者に及ぼす快感もまた高くなる。

「んっ！うっ！んっ！んっ！んっ！んっ！んっ！！」

小ぶりの尻を掴みながら腰を振る。

豊満な肉付きではないが、汗を弾く瑞々しい肌と押し返したらずくに押し返してくる張りの良さがあった。

簪は声を出すまいと、枕を噛んで口を閉じる。

そうするとふーっふーっとな息が荒くなる。

「んっ！んっ！んっ！く、ロウ……っ！ぎゅっ！ぎゅっ！ぎゅっ！ぎゅっ！ぎゅっ！ぎゅっ！！」

簪は首を回し、クロウを見上げながらそう言う。

顔も蕩けていて、クロウに攻められて余裕がないはずなのだが、無意識にクロウを求めていのか、彼女はそんなお願いをした。

クロウはそんな彼女の態度にときめき、簪の言った通りにしてやる。

「あっ！はひっ！あっ！あっ！あっ！あっ！！」

簪の身体を回転させ、仰向けに寝かせて正常位になる。

ぱんっぱんっぱんっ！！

クロウの強靱な筋肉と張り艶のある簪の身体がぶつかり合って、渴いた音がする。



「んはあっ！あっ！むっ！はっ！はっ！！」

クロウは顔を落として簪の唇に吸い付く。

舌で優しく唇を舐めまわすと、彼女も舌を伸ばして絡めてくる。くちゆくちゆと唾液混じりの舌が絡まり合い、液体を交換する。

「簪、射精すぞ」

腰の振りが速くなる。

ずちゆずちゆと力強く膣内を抉り、愛液を掻き出す。

簪は両腕をクロウの首に回し、両足を身体に巻き付ける。

離れられないようににだいしゆきホールドを極めて、絶頂の瞬間を待つ。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あああああっ！~~~~~っ！！」

ぶちゆぶちゆとかきまぜられた愛液が白く泡立つ。

簪は物静かな普段とは真逆に、口を大きく開けて絶叫する。

ガクガクと華奢な身体を震わせ、涙を流す。

「あああああああああっ！！」

ドプツと精液が発射される。

子宮口に密着した鈴口からビュービューと精液が流れ出し、小さな子宮内を満たしていく。

逆流してきた白濁液が、どぼつと膣外にこぼれ出る。

簪は今日一番の痙攣具合を見せ、激しく絶頂を迎えたことを教えてくれる。

服をまとったままの上では、乳房の部分にポツチが浮かび上がっている。

「満足できたか？」

「うん……」

男根をずるんと引き抜くと、栓がなくなつてより多くの精液がどぶつと流れ出てくる。

零れ落ちた精液は尻たぶの間を通り、シーツを汚していく。

秘部はかわいそうにもビクビクと痙攣している。

クロウに聞かれた簪は、はっはつと息を荒くしながらも、淫靡な笑顔で応えたのだつた。



「楯無おねーさん、参☆上！」

いきなり部屋に転がり込んできて、何やらポーズを極める楯無。

ベッドの上でのんびりとくつろいでいたクロウは、付き合いの長い者だけが分かる程度に、小さく目を見開いた。

キャノンボール・ファストの日から数日が経っていた。

襲撃の後処理などがようやくやく落ちて着いてきたころである。

「どうした、楯無？」

「ん、ちよつとお話がしたくなっただけよ」

そう言うくとクロウが寝転んでいるベッドに座り、やけに近くに来る。

身体をピタリと密着させたかと思うと、頭をごしごしとこすり付けてきたり、クンクンと匂いを嗅いだりする。

「ほう、では何の話をする？」

「うーん……何にしようかしら……」

楯無の頭を撫でながら聞くと、彼女は特に考えていなかったのか、今から考える素振りを見せる。

目を細めて気持ちよさそうにしている姿は、気まぐれな子猫のような印象を受けた。

「あ、そういえばまた行事があるのよ」

「またか」

ひとしきり頭を撫でられる心地よさを堪能した楯無は、唐突に話題を振ってくる。

しかしクロウは行事という言葉に眉を顰める。

何故なら今までの行事といえは、悉く襲撃があつたのだ。

別にクロウはそれが嫌なわけではない。

戦いは好きだし、襲い掛かってくるのなら返り討ちにするだけだ。

クロウが嫌がっているのは、その襲撃者と戦える機会がほとんどないからだ。

大抵は自分が察知する前に、セシリアなどの代表候補生組が一掃してしまうのだ。

当然襲撃があると行事は途中で終わるので、絶対に戦える行事も潰されて襲撃者とも戦えずということになれば、やはり不完全燃焼なのである。

「今度こそ警備は大丈夫なのだろうな？」

「う、うーん……」

竹を割ったようなはつきりとした性格の楯無には珍しいあやふやな態度。

扇子で隠しているが、口元には苦笑が浮かんでいた。

「……ダメなのか」

「やっぱりIS学園の力だけではどうしようにも……ねえ？でも今回は学園内で行われ

るし、一般公開もないから確率は低いと思うわ」  
確かに楯無の言う通りであろう。

もし学園に大規模な攻撃をかけようとすれば、それは日本国の領域を侵すこととなり、白騎士事件のおかげで少し平和ボケから脱却しているこの日本は、すぐさま自衛隊を差し向けるだろう。

テロ組織との戦いとなれば当然同盟国であるアメリカ合衆国も手を貸さなければならぬので、大戦争に発展する可能性がある。

『亡国機業』ファントム・タスクも国際的なテロ組織とはいえ、それはISを保持しているからであり、戦闘機や戦車などの旧兵器はほとんど持っていないので、IS部隊が足止めされて本部が攻撃されると、一たまりもないのである。

流石にそんなリスクは冒さない。

ただ学園に襲撃をするのは別に『亡国機業』ファントム・タスクだけではないということだ。

「ふっふー♪ついにできたぜ、暇つぶし三号くん！」

世界の誰も知らない場所で、一人ウサギが狂喜の笑みを浮かべていた。

……そのすぐ後にクロウの写真を見てニヤニヤとだらしない笑みを浮かべるのだが。

「とこころでその行事とはなんなのだ？」

「えっとね、タッグマッチのトーナメントだよ。専用機持ち限定だけど」  
目的は専用機持ちの自衛力の底上げ。

とは言うが、今の学園にいる専用機持ちたちにその必要性があるのかどうか疑問である。

セシリアはBT兵器を使った戦闘となれば最強に近い戦闘力を誇る。

鈴は近・中距離を青竜刀と衝撃砲によって万能に戦える。

シャルロットの戦闘センスは世界トップクラスで、銃を使って絶え間のない弾幕を張ることができる。

ラウラは軍人として小さなころから鍛えられており、左目には切り札の『<sup>オー</sup>デー<sup>ン</sup>・<sup>の</sup>オー<sup>ズ</sup>』<sup>嘘</sup>を使って戦うと、最早敵はいない。

簪はこの中で最も実戦経験が少ないが、それを補って余りある分析能力で戦闘を有利に進めていくことができるだろう。

この楯無は言わずもがな、学園唯一の国家代表だけあって、近・中・遠距離全ての分野において最強の戦闘力を有す。

楯無と同級の専用機持ちや、三年生唯一の専用機持ちも相当の実力を持っている。

学園で戦闘力向上の必要があるとすれば、それは未熟な一夏と筈くらいなものである。

「といっても興味ないわ。自分が出られない行事なんて」

「また出られないのか？」

「私が出ると奇数になるからダメだって。納得できるかつ！」

がーっと両腕を上げて怒りを表す楯無。

皆で楽しく騒ぐということが好きな彼女は、行事に参加できないことが寂しいのだ。

現在の I S 学園には専用機持ちが簪を入れて 11 人。

タッグマッチなのだから偶数でないといけないので、この中で最も戦闘能力が高いで

あろう楯無が弾かれたのだ。

「というか私よりクロウの方が強いじゃない！」

確かに楯無や千冬などはそれを知っているが、他の者は知らないし教えられても信じられないのである。

片や大国・ロシアの国家代表かつ対暗部用暗部の当主。

片や素性がハッキリせず、最近まで I S に触ったこともなかった素人の男。

どちらが強いかと問われれば、常識的に考えて前者である。

「ふっ、まあ今回も警備しておいてくれ」

「そんなの嫌——！」

バタバタと脚を動かして抗議する楯無。

そんなことをやってもクロウにはどうすることもできないのだが、誰かにぶちまけてイライラを解消したかったのだろう彼女は、しばらくするとスッキリとした表情になっていた。

「ところで簪とはいい関係を築けているか？」

「ふっふーん。また二人で遊びに行こうって話をしたわ。……とても面倒くさそうに顔を歪めていたけど」

こうして二人はのんびりとした会話を続けるのであった。



## 教師のドジっ娘の方

「インタビュー?」

「うん、そう。インタビュー」

オウム返しに聞き返してきたクロウに、新聞部部長の黛 薫子が頷く。

授業と授業の合間にある休み時間を使って、彼女は一年一組にやってきていた。

「私に何故?」

クロウの疑問も尤もだろう。

彼は一夏のように整った容姿ではないし、愛想もお世辞にも良いとはいえない。

男でI Sが使えるということに興味があるのかもしれないが、それなら一夏を使えばいい話である。

「あ、織斑くんと篠ノ之さんからは了承を得ているの。あとはあなたと更識さんだけよ」  
更識ということとは、簪のことだろう。

しかしこういっただことに嬉々として参加する姉の楯無ならともかく、引つ込み思案な簪が了承するとは思えない。

写真撮影もあるとなれば、なおさらである。

「簪はどういったのだ？」

「ミキストリくんがやるんだつたらやるって」

インタビューも撮影も嫌だが、クロウと二人きりのデートとなるのなら行くというこ  
とらしい。

彼女の頭からは一夏と箒のことが完全に抜けていた。

クロウも簪とのデートのことがあるので、インタビューを受けるのは吝かではない。

「え、なに？クロウ、インタビュー受けるの？」

「む、鈴か」

クロウの背中に抱き着きながらコテッと首を傾げて聞くのは鈴だった。

未熟な身体であるが、確かなふくらみがある胸を押し付けられて、心地いい感触を愉  
しむ。

「鈴は慣れているのか？」

「うーん……あたしはインタビュートてよりモデルの方が多いかな。ほら、こんな感じの」

そう言つて鈴は携帯端末を取り出して、指ではぽつと操作する。

その操作の速さは、流石現役女子高生と言えるものであった。

お目当ての写真を見つけたのか、携帯画面をクロウに見せてくる。

「ほう、可愛いな」

「ふふん、まあね」

画面の中には、カジュアルな最新の服を着こなす鈴の姿が映っていた。

活発そうな印象を受ける晴れやかな笑みを浮かべていて、ちよこつと見える八重歯が可愛らしい。

ホットパンツから伸びる健康的な焼け方をした太ももが、目にまぶしい。

「どう？…惚れ直した？」

「うむ」

からかうつもりで言つたのだが、真剣に返されたので自分が照れてしまう鈴。

頬をカッと赤くさせ、目を泳がせる。

だが次の瞬間、彼女の羞恥は絶頂を迎えることとなる。

「だが私の方がいい写真を持っているな」

「…………え？」

クロウはそう言っておもむろに懐をあさり、写真を数枚鈴の前に出す。それを見て彼女はピシリと石の如く固まってしまふ。

そこには撮られた覚えのない写真があつた。

いつものツインテールをほどこき、よだれを垂らしながらスヤスヤと眠っている寝顔。

制服に着替えるためにパジャマを脱ぎ、純白の下着だけを纏つた姿。

短い制服のスカートから白いショーツが覗けるパンチラ。

どう見ても盗撮としか言えない危ない写真をばらばらと見せつけてくる。

「な、何持ってるのよあんたはあああつ!!」

鈴の悲鳴にも似た怒鳴り声が、教室内に響き渡つた。



「本当に良かったのか？」

「うん……クロウと一緒にだから……」

クロウは珍しく自分から動き、四組に行つて簪と話をする。

今の話題は勿論、雑誌のインタビューのことである。

「そういえば報酬はなんだつたのだ？」

「ん、ホテルのディナー招待券だつて……。ペアで」

簪には最後のことが重要だつたのだ。

ペアじゃないのなら絶対に受けていない。

招待券のホテルは超一流と言われているところで、美しい夜景も見られるおしゃれなところである。

まあ簪の実家である更識家の資産なら、別に招待券に頼らなくても簡単に行ける場所なのだが。

そうすると必ず楯無が乱入してくるため、彼女はこの仕事を引き受けたのだ。

「そうか、楽しみだな」

「うん……。あ、あの……クロウ、お願いがあるの……」

「む、どうした？」

珍しい簪のお願いに、クロウは少し驚く。

基本的に大人しく、何か言いたいことがあっても自分の中に溜めこんでしまう性格の彼女にしては積極的だ。

逆に楯無は自身の容姿とスタイルの良さを活かして、遠慮なくお願いをしてくる。

二人は姉妹とは思えないほど性格が真逆だった。

「あの、ね……タッグマッチのパートナーになってほしい……」

そんなこと言わずに人生のパートナーになってほしい——とは思っていても言えない。

このお願いでも、爆発してしまいそうなほど胸を高鳴らせ、勇気を振り絞ったものなのである。

断られたらどうしようかなど、ネガティブな思考に囚われてしまう。

「うむ、かまわんぞ」

「っ！」

だが当然クロウが断るはずもなく、即答すると簪はパツと顔を輝かせる。

普段人付き合いが悪くて無表情なことが多いのでクラス内でも少し距離を置かれていたのだが、彼女の満面の笑みは非常に可愛らしく、思わず四組の生徒たちは見惚れてしまった。

「じゃ、じゃあよろしくね……！」

「ああ、優勝するぞ」

こうして学園で最初のタッグが決まったのだった。

その後少しの間会話を交わした後、クロウは四組の教室から出る。

「あ、クロウ！どこにいたのよ。探したじゃない！」

するとすぐに声をかけられる。

声をかけてきたのは午前中に写真を取り上げた鈴であった。

彼女には言っていないが、まだ自室に大量の写真があったりする。

鈴の母国である中国で売れば、ちよつとした財産が築けるレベルである。

そんなことをするつもりは毛頭ないが。

「何か用事か？」

「ん、一緒に昼ご飯を食べようと思ってね。迷惑だった？」

「いや、嬉しいぞ」

普段の勝気な態度は身を潜め、不安そうな目で下からのぞきあげてくる。

そんな鈴の頭に手を置き、優しく撫でる。

そうすると目を細め、気持ちよさそうに喉を鳴らす。

クロウには鈴の頭にピコピコと動く猫耳と、ふらふらとゆつくりと揺れる尻尾が幻視

できた。

「じゃあさっさと二組に行きましよ！お弁当作ってきたんだから！」

小さな手でクロウの手を握り、グイグイと引つ張る鈴。

お父さんに甘える娘に見えなくもない。

そのまま二人は二組に入り、鈴はいそいそと弁当を机の上に出す。

「ほう、チンジャオオロスか」

「自信作よ」

蓋を開けると、食欲をそそる良い匂いがあふれ出てくる。

中華料理は鈴に任せておけば問題ないようだ。

まあその分日本料理などはあまり巧くはなかつたりする。

クロウは鈴から箸を受け取り、チンジャオオロスをパクリと食べる。

「ど、どう……？？」

「うむ、美味しいぞ。白米が欲しいな」

「そ、そう！よかつたわね！ほら、ご飯なら持つてきてあげているわよ」

自分の中華料理には絶対の自信を持っている鈴だが、クロウに食べさせるときは毎回

緊張してしまう。

ただ褒められた分はそのまま返ってきて、鈴の機嫌は非常に良くなる。

米が食べたいというわがままにも彼女はしっかりと対応する。



現在正妻争いが熾烈になっており、こういった何気ない気遣いが状況を変えるのである。

「ところで鈴は、タッグマッチの相手は決まったのか？」

「うん、セシリアよ。まああいつなら結構戦いやすいしね」

鈴のパートナーは、やはりというかセシリアであった。

鈴が近・中距離を担当し、セシリアが中・遠距離を担当するのだろう。

この二人のタッグは非常に強力なものとなるだろう。

「ふむ、そうか。戦うときが楽しみなな」

「ふふん、簡単には負けてやらないわよ」

ニヤリと不敵な笑みを向けてくる鈴。

こういう勝気な性格も、クロウは非常に好ましく思っていた。

その後鈴が作ったチンジャオロースを堪能した彼は、鈴と少しの間話して一組に戻った。

「む、嫁。どこにいたのだ？」

廊下で出くわしたラウラは、とてととと近寄ってくる。

その姿がまるで帰ってきた飼い主にすり寄る子猫のようで、とても可愛らしく思う。

自然と彼女の綺麗な銀髪を撫でて、彼女のタッグ相手について聞いてみる。

「むふー。……うむ、私のパートナーはシャルロットだ。あいつとなら優勝も可能だろう」

飼い主に頭を撫でられてご満悦な子猫は、満足気に鼻息をしながら答える。

シャルロットもラウラも、どの距離での戦闘もこなせる万能タイプである。

二人とも手数が多いのも特徴で、色々な戦術を練ることができる。

それに操縦技術が卓越しているので、確かに良いところは狙えるだろう。

「そうか、お前たちとの戦いは心が躍りそうだ」

「うむ、今度こそお前に勝つぞ」

ラウラはやる気満々といった様子である。

彼女は別に戦闘が好きというわけではないが、ただクロウと何かするのが好きなのである。

簡単に言えば、彼とずっと一緒にいたいのだ。

「そうだ、私はお前に聞きたいことがあるんだ」

「なんだ？」

両手をポンとたたき、思い出したといった様子のラウラ。

懐をこそそこそとあさり、何やら雑誌を取り出す。

「お前はどれが一番興奮するのだ」

「……………」

ラウラが取り出したのは女性用下着の雑誌。

モデルの女性が色とりどりの下着を身に着けて、こちらを見ている。

純白の可愛らしい下着もあれば、黒の大人っぽい下着もある。

しかしモデルは中々身体の凹凸がハッキリとしている人が多いのだが、ラウラは下着をつけられるのであろうか。

流石のクロウもこんな話題を教室で話すのは気が引け——。

「うむ、このストライプとかどうだ？」

「むう………それか」

——そんなことはなかった。

しかも水色と白色の縞々ストライプ。マニアックである。

ただ小柄で可愛い容姿をしたラウラに似合いそうなのは事実である。

「お前たちは何の話をしている」

クロウとラウラの頭が、軽くペシペシと叩かれる。

振り向くとそこには呆れた表情をした千冬がいた。

あと少しで休み時間も終わりなので、もう教室に来ていたのだ。

「あ、教か————織斑先生。今この下着が一番クロウを誘惑できるかと考えており

まして……」

「内容を言えとは言っていない。そんな話は自室でやれ」

「千冬は黒が一番似合うが、清楚さを感じさせる白も捨てがたい」  
「やめろ」

パシン！といつもより強い音が響き渡った。



山田 真耶とは、あまり外でデートということとはできない。

年齢的には問題ないのだが、立場がマズイ。

教師と生徒。中々そそられるシチュエーションであるが、現実ではこの二者が恋仲になるのは犯罪である。

しかも世界中の国々からエリートが集まるIS学園の教師と生徒なのだから、もっと

ダメになる。

だから基本的に二人がデートする場所は、どちらかの部屋ということになる。

「……………」

「……………」

お茶を飲みつつ会話をし、のんびりとした時間を過ごすときもあれば、今のよう  
に読書にいそしむときもある。

真耶は小さなころからの読書家で、休日をもっぱら読書で潰れている。

だから読書を理解してくれるクロウには、本当に感謝していた。

趣味が認められるというのは、存外嬉しいものである。

「……………ふわ〜」

今読んでいる本を読み終え、ぐぐぐと伸びをする真耶。

ただでさえ圧倒的存在感を示す巨大な胸が、背を反らしたことによってさらに前  
に突き出る。

しかも今着用しているのはラフな服なので、余計に胸の形がはつきりとする。

少し前掛けボタンが外されており、深い谷間の一部分が覗ける。

「(クロウさん……熱心に読んでるな……)」

ずれ落ちそうになった眼鏡の位置をクイツと元に戻し、隣で本を読んでいるクロウを

チラリと見る。

学生のころは、好きな男の人と好きな読書をしてみたいと小さな願望があったのだが、それは十分になんかえられていた。

「ちよっと悪戯しようかな……」

真耶の脳内で悪魔のミニ真耶がそそのかす。

二人で読書する際、大概彼女は本の世界にのめりこんでしまつて、あまり周りが見えなくなる。

そんなときクロウは大きな胸を揉みまわしたり、ショーツの中に手を突っ込んで陰核をクリクリと弄ったりする。

そのせいでいつも読書は途中で終わってしまうのだ。

「ちよっとだけ……なら大丈夫よね」

天使の真耶は悪魔の真耶に負けてしまった。

熱心に本を読んでいるクロウの下腹部に、手をやる。

そのちよっとした動きだけで、柔らかくて重量感のある乳房はぶるつと揺れる。

さわさわと優しくズボンの上から男根を撫でると、次第に固く大きくなつていく。

「……まだ気づいていないのかな？」

チラリと眼鏡の上からクロウを見るが、彼の視線は本に集中していた。

今彼から下を見れば、豊かな谷間が見ることができ、性欲の塊である彼なら見逃すはずがないのだが、それに気づかないほど読書に集中していた。

本好きな真耶はそれが嬉しく感じるが、しかし自分を見てくれないことに少し不満を覚える。

「まだ大丈夫……」

本来なら少し摩るだけで止めるつもりだったのだが、そんな考えが大胆な行動にとらせる。

ズボンのチャックをおろし、男の象徴たる男根を取り出す。

太くて熱いそれを手に握り、顔を近づけてそつと息を吐きかける。

クロウの男根に生暖かい吐息がかかる。

こんな大胆な行為に至っている真耶の顔は真っ赤である。

もう『きやつ、恥ずかしい☆』なんて言うにはギリギリの年な二十代前半だが、彼女の幼い容姿ならまったく違和感がなかった。

むしろ男心をくすぐる強力な武器であった。

「ん……ん……」

真耶の手は、男根を掴んだまま自然と上下に動いていた。

もうばれている可能性が非常に高いのだが、今の彼女はそんなことを考えられなかつ

た。

……まあクロウはとつくに気づいているのだが、普段恥ずかしがり屋な真耶が珍しく積極的なので、好きなようにやらせる。

銃器を扱っているようには思えないほど柔らかい掌で陰茎を擦る。

「クロウさん、気持ちいいですか？」

顔を寄せて、耳にふつと息を吹きかける。

思わぬ行為にビクツと反応するクロウの身体。

「クロウさんの、本当に大きいですよね……」

今度は顔を下腹部に持つて行く。

いきり立った男根に顔を寄せ、頬にそれを押し当てる。

中学生のようにぶにぶにの柔肌の感触が気持ちいい。

「熱い……」

手のひらを亀頭に被せるようにし、そこを優しく撫でまわす。

我慢汗が鈴口から浮かび上がり、それが潤滑液となつて動きをスムーズにする。

くちくちと弄っているうちに、真耶の息も熱を帯びてくる。

凹凸のはつきりした身体をクロウに寄せて、大きな乳房をぐにゅつと押し付ける。

手の動きも忘れず、陰茎をこしゅこしゅと摩る。



その優しくも慣れた手つきに、我慢汁の量が増える。

服の上からでも分かるくらい、真耶の胸にはポッチが浮かび上がっていた。

陰茎を擦りながら鈴口を指でこする。

さらに手を下にやり、ずっしりとした陰囊を優しく揉む。

「あつ、んあつ、はっ、はっ」

我慢できなかつたクロウは腕を伸ばし、大きな胸を揉みしだく。

彼の大きな手でも掴みきれないほどの量感がある乳房は、指がどんどん沈んでいく

ほど柔らかい。

「あつ………！」

何度も擦られて限界の来た逸物から精液が飛び出す。

びくびくと男根が震え、真耶はその感触に声を漏らす。

ドブドブと勢いよく飛び出した精液は、シーツを汚していった。

「クロウさん……私、もう……！」

自分から悪戯を始めたはずなのに、自分の方が発情していることを感じる真耶。

自分で上着をめくりあげると、ぶるつとGカップの乳房が飛び出してくる。

ズボンもショーツごと一気にズリ下ろすと、むっちりとした尻が露わになる。

陰部からはすでに愛液があふれ出ており、ショーツに付着するどころか、ショーツを

も超えてズボンにも糸を引かせていた。

真耶は自分で尻肉を掴んで、尻タブを開くと、むあつとした熱気が発生する。

「真耶、挿入れるぞ」

「んあああああつ!!」

そんな淫靡な光景を見せられて当然我慢が出来なかつたクロウは、いきり立つた男根をズプツと一気に突き入れた。

豊満な尻肉を力強く掴んで、感触を愉しむ。

「んあつ!んあああつ!んつ!んんつ、んつ!!」

細い腕を掴んで後ろに引つ張り、馬の手綱を持つているようになる。

ばんつ!ばんつ!ばんつ!ばんつ!

激しいピストンは、腰が豊満な尻肉に叩き付けられて軽快な音を出させる。

Gカップの豊かな乳房は上下左右に、ぶるんぶるんと揺れる。

真耶は切なげに眉を寄せ、グツと食いしばった口からは一筋のよだれを垂らす。

むつちりとした肉付きの良い脚は弱弱しい内股になっていて、頼りなさを感じさせる。

「あふつ!ふはあつ!ひあつ!!」

後ろから突きたてているのは、クロウの目も楽しませた。

でんと肉がたっぷり乗った尻は見えているだけで射精してしまいそうになるほど厭らしく、そこにぬめりのある愛液が飛び散っているのは非常に扇情的だった。

ぴつたりと閉じている秘裂が、太い男根に押し広げられて中に突っ込まれている光景もそそられる。

尻タブを開くと、固く閉じた尻穴まで見えてしまう。

男の目線を引き付けてやまないグラマラスな真耶の身体をここまでじっくりと見られるのは、クロウだけである。

「あつーはっーあうっーもっど……！もっどくださいっ!!」

真耶のおねだりに応えるため、腰の動きを強くする。

むっちりとした尻を鷲掴み、そこを揉みほぐす。

激しい動きに自分で支えられなくなった真耶は、壁に両手をつく。

そうすると重力で下に垂れた量感のある胸が、ぶるっぶるっときさらに激しく揺れ動く。

真耶はだらしなく口を開け、舌を出している。

「ふあつーあつーあうっーあつーいいっ!!」

片腕で肉の詰まった片足を持ち上げる。

薄い陰毛の茂みに覆われた陰部からは、かきませられた愛液が零れ落ちてきて、肉と

肉がぶつかり合うさいに瑞々しい音を奏でる。

脚を持ち上げている逆の腕は、ダイナミックに揺れ動く乳房を掴む。ぐにゅつと押せばどこまでも沈みそうな乳肉の感触を味わう。

「はうっ！んっ！んあっ！んひいっ!!」

戯れに乳をペチペチと叩くと、大きな波が発生する。

汗に濡れてしっとりとした肌触りは、触っているほうが気持ちよくなってしまうほどだった。

固く勃起した薄い色素の乳首を掴み、こしゅこしゅと指の腹でこする。

「んっ！んんんんっ！んふううっ！あっ！はううっ!!」

後背位で激しく突き立てていたが、真耶の身体を反転させて向かい合うようにする。そうするとGカップの胸が重たげに目の前で揺れ動く。

そんな淫靡な光景を見て何もしないわけにはいかず、片方の乳首にしゃぶりつく。

もう片方の乳房は驚掴み、乳首は手のひらで押しつぶす。

「あっ！あっ！あっ！あっ！気持ちいいですうっ！ああああっ!!」

まるで牛の乳を搾るように、真耶の乳房を奥から先端へ搾りあげる。

何度も擦られた秘部は、痛々しく充血していた。

しかし真耶は痛みを感じず、強烈な快感しか得ていない。

かきまぜられた愛液は白く泡立ち、膣外へと漏れ出る。

薄く茂った陰毛に付着して珠のような輝きを見せるものもあれば、尻タブの間を通して尻穴に漏れていくものもある。

「あつ！あつ！あつ！大きくなっていますっ！今までのでも大きかったのにいつ!!射精だしてくださいっ！一番奥で!!」

真耶は荒く息を吐きながら、手を口元にやって物欲しそうにクロウを見上げる。上にあげられた腕に押しつぶされた乳房は、ぐにと柔らかそうに形を変える。

もう片方の腕は下腹部に持って行き、秘部を押さえる。

そこには怒張した男の逸物が激しく突き立てられていた。

「よし、射精だすぞ」

「んぎいいっ!」

ズンツ！と一番奥に男根を突き入れる。

先ほどもで擦られていなかった部分を攻められ、獣のような嬌声を上げる。子宮はこれから送られる子種に期待をし、きゅんとうずく。

「あつ！あつ！あつ！イクっ！イクうっ！ああああああつ!!」

ドボン！と放出される精液。

奥まで推し進められた男根に、膣壁がきゅうううつと優しく締め付ける。

真耶は強烈な快感に耐えるために何か掴むものを求め、結局自身の大きな乳房を掴んだのであった。

びくびくと激しく震える、汗に濡れた淫乱な身体。

舌をだらしなく口から露出させてよだれを垂らす。

「んっ！あっ！あっ！あっ！！」

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

クロウは射精した後もしばらくピストンを続けた。

一滴残さず子宮内に注ぎ込もうとしたからである。

「あ……ん、ん……」

全て精液を出し切った後、ようやくピストンを止める。

とぶとぶと勢いは衰えたが、残った精液を絞り出す。

そして男根を陰部から抜く。

精液と愛液が混じり合ったドロリとした液体が漏れ出てくるのであった。



「ふん♪ふふーん♪」

「なんだ、真耶。随分機嫌がいいじゃないか」

「あ、織斑先生。えへへ♪秘密ですっ」

「(……あいつか)」

## 取材

「……………」

IS整備室でもくもくと作業をしている少女がいる。

彼女——更識 簪は、自分と友人の力を借りて作り上げた専用機——打鉄式式の調整を行っていた。

数多くの空間投影ディスプレイを駆使して、打鉄式式をより優秀な機体にしようと試みる。

今の彼女は真剣に作業しているだけなのだが、普段通りの無表情と愛想の悪さ、そして睨みつけるようにしてディスプレイを見ているので、近寄りがたい存在になっていた。



「調整は捗っているか？」

「……クロウ」

そんな雰囲気をもともせず、クロウは気安く簪に話しかける。

これかもし知らない人や、ましてや苦手な相手であつたなら、良くて無視、悪くてビシタであつた。

苦手な相手に一夏と楯無が組み込まれているのは言うまでもない。

「ん、順調……。大体終わったから、後は見直すだけ……」

「相変わらず慎重だな」

簪は楯無以上に完璧主義者だ。

テストでも、できたと思つても時間があつた限り見直しをするタイプの娘である。

とくにこれはIS。姉にどれだけ近づけるかという重要な意味も持つ。

これが見落としていた欠陥でダメになると、それは手伝つてくれたクロウや本音にも顔向けできない。

そう思つてまたディスプレイと睨み合いを始めようとした簪の肩をたたく。

「お前のそれは美德であるが、あまり根を詰め過ぎても良いことはない。少し休憩しろ」

「……クロウ」

自分のことを気遣つていてくれるという事実、簪は頬を朱に染めて歓喜する。

クロウが彼女にこんなことを言えることが驚きである。

まあ簪のことは確かに心配していたが、第一に自分と話してほしいという欲望があったのは隠せない。

「しかしよく頑張ったな。お前は楯無と同様、ISを作り上げた」

「そ、それは皆が助けてくれたから……」

「それでも大して違いがないぞ。あいつも私やらに手を借りていたからな」

クロウからの珍しい褒め言葉に、簪は顔をポツと赤くする。

そもそも学生がISを組み立てることができるのが異常なのである。

本来ISというものは、束が作り上げたコアを、各国それぞれ優秀な科学者と技術者をかき集めて作られるものである。

それを他人から力を借りたとは言え、ほぼ独力で作り上げた簪は世界でもぬきんでた技術を持っている。

もしそれが公に知れば、数多くの各国軍隊や企業が勧誘することだろう。

「……私が頑張ったのは……」

素直に頭を撫でまわされていた簪が、クロウの手を掴む。

大きな手を、小さな両手でキュツと握る。

そして恥ずかしそうにしながらも、クロウから目を離さずに語りかける。

「わ、私が頑張ったのは、クロウの隣に立ちたかったから……。お姉ちゃんより能力が劣る私は、こんなことしかできないから……」

物静かで無表情な彼女が、ここまで口数多く、切なげな顔をしているのを見られるのはクロウだけである。

たとえ肉親であろうと見ることはできない。

そして彼女の小さな口から告げられる熱い想いに、クロウは珍しく心を動かされる。目の前にいる小さな女の子が、とても愛らしく思える。

「確かに何らかの能力があると望ましいが、私はお前が必要なのだ。たとえ能力があるうがなかるうが、もうお前は私のものなのだ」

「~~~~~っ!!」

物語の主人公が言うにはあまりにも不遜で無礼な口説き文句。

しかしそれを受けた簪は、これ以上の幸せはないと語っているような表情を見せる。身体中に電流が走り、ゾクゾクと何とも言えない快感が駆け巡る。

子宮がキュンキュンと疼き、目の前の男を欲する。

「クロウ……」

簪は本能のまま行動する。

クロウの顔に自分の顔を近づける。

ブサイクとは言えないが、お世辞にも端正とはいえない顔。

しかし簪には、顔の端正なことでよくテレビに出ているそこの俳優やアイドルよりも魅力的に見えた。

二人の唇が近づいていく。

そして後少しで重なり合うといったところで……………。

「は〜い、簪ちゃん！根を詰め過ぎてない？美味しいお菓子持ってきたから休憩にしましょー！」

スライド式の扉を開けて、元気な声で簪に語りかける邪魔者<sup>姉</sup>。

簪の実姉、更識 楯無は最愛の妹との会話を楽しみにしており、その思いが顔ににじみ出していた。

対してそれを受け止める簪の顔は、凶悪犯罪者も裸足で逃げ出すような絶対零度の冷たさであった。

「あ、あら……………？お姉ちゃん、タイミング間違っちゃったかしら？」

楯無は簪の恐ろしいほどの冷酷さをにじみ立たせる表情を見て、失敗したことに気づく。

頬を引きつらせ、冷や汗を垂らしているその姿からは、普段憧れの的である生徒会長の威厳はまったく感じられなかった。

「……お姉ちゃん、嫌い」

楯無は膝から崩れ落ちた。



「うえええっ！クロウ……簪ちゃんに嫌われちゃったあああっ！」

クロウの身体にしがみついて号泣する楯無。

親しみやすくして常に余裕のある笑みを浮かべている彼女の姿しか知らない者が見れば、これは本当の生徒会長なのかどうか疑問に思ってしまうほど泣いていた。

楯無は簪とクロウのことになればポンコツになってしまふのだ。

「落ち着け、楯無。簪も本心からお前を嫌っているわけではないぞ？」

「ううう……そうなの……？」

まだクロウにしがみつきながら彼を見上げる楯無。

目からは大量の涙を零しており、鼻水すら垂れていた。

クロウの制服が大惨事なのは言うまでもない。

そんな一刻も離したいであろう彼女の背中を優しくこすりながら、語りかける。

「あいつも本心ではお前のことを愛しているぞ。私と二人で話すときは、よくお前の話題になる」

「本当……?」

パアアアつと顔を輝かせる楯無。

話題の内容が彼女に対する愚痴というのは言わないほうがいいだろう。

しかし簪が楯無のことを大切に思っているのは事実である。

なんだかんだいって、彼女も姉のことが大好きだ。

ただ一時確執があっただけに、素直になるのが恥ずかしい。

「それにまた二人で遊びに行くのだろうか?」

「ええ、そうだったわ!」

簪に嫌いと言われたことがよっぽどショックだったのか、スケジュール帳に赤文字で書き込んである予定も忘れていたようだ。

何度も何度も懲りずに誘い、ようやく得た妹とのデート券。

何としてでも成功させる気でした。

「簪ちゃんを楽しませるために今からプランを練らなくちゃ! 慰めてくれてありがと

ね、クロウ」

楯無はバツと立ち上がり、拳を握って決意を固める。

部屋から出ていく途中で振り返り、クロウの頬に唇を押し付ける。

ニコツと小悪魔のように悪戯げな笑みを浮かべて、彼女は部屋から出て行った。

クロウは頬の柔らかな感触を十分に愉しむのであった。



「……………」

姉がクロウに縋り付いて泣きわめいていたころ、妹も部屋で悩んでいた。

展開された空間投影ディスプレイでは、簪が好んでいるヒーローアニメが上映されていた。

しかしその内容はあまり頭に入らず、脳内では別のことを考えていた。

「お姉ちゃんに酷いこと、言っちゃった……」

簪が悔やむのは、衝動的に言い放ってしまった姉への暴言。

姉のことを苦手に思っていたことは一時期あったが、嫌いなんて思ったことは一度もない。

むしろ簪は楯無のことが大好きである。

天性の才能があつたのは事実だが、姉は他の者が想像もつかないほどの努力をしている。

だからこそ、楯無は完璧超人とまで言えるほど多才なのだ。

そして努力をして実力をつけた姉のことが、簪は大好きだ。

「でも、お姉ちゃんも酷いよ……。あと少しで……」

あと少しでクロウとキスできたのに……。

そこまで考えて顔が熱くなった簪は、布団を抱えてゴロゴロとベッドの上を転がる。

あの時クロウの名前を呼んだ自分の声は、今思い返してみるととても蕩けていた。

まるで客に媚を売る娼婦の言葉に、世界で最も愛おしいものに声をかける情が乗って

いたような……。

「(でも、あんなこと言われたら……)」

思い返すだけで胸がキュツと締め付けられる。



身体全体が火照り、クロウを求めろ。

子宮がうずき、膣内では愛液が分泌される。

それが膣外へと漏れ出て、白いシヨーツを湿らせる。

「ん……」

簪は手をスルスルと下ろしていく。

この火照った身体を静めたら、姉に謝りに行こう。

そんな考えをして、細くてきれいな指でシヨーツの上から秘裂を擦る——。

「簪ちゃんー！」

「っ!？」

——直前に動きは止められた。

ノックもしないでいきなり姉が侵入してきたからだ。

楯無は早く簪に謝って、二人で楽しく遊びに行きたいが故の行動なのだが、流石空気を読めない女・更識 楯無。タイミングが最悪である。

「……お姉ちゃん」

「あ、あら？またタイミング間違っちゃった……?」

フルフルと身体をわななかせながら、ゆらりと立ち上がる簪。

そんな彼女を見て、楯無は少し前に似たようなことがあったように思いながら、頬を

引きつらせる。

まだしていなかったとはいえ、自慰をしている部屋に家族が入ってきたときの気まづさは異常である。

簪はその恥ずかしさを今実感していた。

「お姉ちゃんなんか、大っ嫌い」

楯無は口から泡を吹きながら、膝から崩れ落ちた。



「……………」

簪がチケットにつられて許可したインタビューの当日。

彼女は可愛らしくおめかしして、クロウと一緒に待ち合わせ場所に向かっていた。

簪が黙っている理由は、クロウにその私服姿を褒められたことと、はぐれないように

というのと恋人らしきを出すためということ手で手をつないでおり、この二つの理由から照れているからであった。

ちなみに簪はおしゃれなどにはあまり関心がなく、クロウとのデートと認識しているこの日を迎えるのに盛大にテンパったのだが、そういった方面にも才覚がある姉に助けをもらい、今日を迎えたのだった。

「(後でお姉ちゃんにお礼を言わないと……)」

楯無が選んだ簪の私服は彼女にとても似合っていて、彼女の容姿の良さと相まって多くの視線を引き寄せている。

しかし隣にいる強面のおかげで、ジロジロと見つめられることと、声をかけられることはなかった。

簪はこのことをクロウが守ってくれていると盛大に誤解し、クロウへの好感度をさらに上げる。

もう何か良いことが起これば、すべてクロウのおかげだと言わんばかりの勢いである。

「その服は楯無に選んでもらったのか？」

「う、うん……。私はあまりわからないから……」

「そうか、二人で出かけたのか。楽しかったか？」

「……………うん」

簪は恥ずかしがりながらもコクリと可愛らしく頷く。

彼女も久しぶりに姉と二人きりで遊んで、大変喜んでいた。

普段は何かと冷たい態度を取ってしまう簪だが、楯無のことはクロウの次くらいに大好きである。

その後も二人で会話しながらゆつくりと歩き、目的地である会社へと向かって行った。



クロウと簪が会社に着き、フロントにいた受付嬢に話を告げると、すぐに中に通された。通された取材場所は広い場所で、一人の女性が待っていた。

通された取材場所は広い場所で、一人の女性が待っていた。

『インフィニット・ストライプス』の副編集長をしています、黛 渚子よ。今日はインタビューを受けてくれてありがとうね」

「クロウ・ミキストリだ」

「……更識 簪です」

につこりと笑って言う女性、渚子に、クロウと簪も自己紹介をする。

女尊男卑の時代に敬語も使っていないクロウはマズイはずだが、彼女はそんなことを気にするような女ではなく、ニコニコと笑っていただけだった。

世界で二人しか確認されていない男のIS操縦者と、普段取材を全て断っている日本の代表候補生のインタビューをすることができて、上機嫌なことも理由の一つだろう。

二人は渚子に勧められて椅子に座る。

「他の二人はいないのか？」

「二人には別の日に取材するわ。更識さんが織斑くんのこと、あまり良く思っていないみたいだし」

妹からの情報だろうか？

しかし簪からすればありがたいことである。

一応専用機は皆の力を借りて完成間近だからいいものの、これまで専用機を持たない代表候補生ということで随分馬鹿にされてきた。

とは言っても、代表候補生が皆専用機を与えられるというわけではなく、代表候補生の中でも優秀な者だけが与えられるのだが、一部の生徒たちはそんなことも考えずに、ただただ簪の陰口をたたいたのだ。

無論、その生徒たちはどこぞのシスコンに襲われて、もう二度と悪口を言わなくなっただけだ……。

「じゃあ早速取材させてもらおうわね。まずはミキストリくん、IS学園は女の園なわけだけど、そこに入学した感想は？」

レコーダーを起動させてインタビューを始める渚子。

思春期真っ只中の男子高校生には何とも答えづらい質問だが、クロウはこの程度で恥ずかしがったりするような魂ではないので、問題はなかった。

「うむ、世界各国から優秀な少女たちが集まっており、私も学ぶことが多い。設備も素晴らしい、教師の指導もまた良いものだ」

「(クロウが真面目なことを言っている……!?)」

簪は失礼なことを考えているが、普段の態度から考えれば仕方のないことである。

しかしクロウは頭でも打ったのだろうか？

「ほうほう、まじめだね。もっと面白いことはない？」

「面白(面白い)ことばっか。」

「またまた。高校生と言えば青春時代真っ只中じゃない。気になる女の子とかいないの？」

ニヤニヤと笑いながらクロウに問いかける渚子。

インタビュアーとしては今のような真面目な回答も嬉しいのだが、少し面白い回答も欲しかった。

クロウもそれに乗る形で話し始める。

「そうだな、優れた容姿の者が多いから目は惹かれるな。この簪のように」  
「うう……」

ぼんと頭に乗せて告げると、簪の顔が真っ赤に染まる。

この回答で楯無などと言っていたら、彼女の目からハイライトが消えるのは想像に容易かった。

渚子は男性操縦者の色恋ごとを記事にするため、さらに掘り返す。

「おおう、アツアツね。ミキストリくんは魅力的だし、モテるんじゃない？」

「そうだな、色々な女と仲良くさせてもらっている」

「……え」

「はっはっはっ」

思わぬ返しに渚子の身体はピシリと固まる。

哑然としてクロウを見るが、無表情で気持ちのこもっていない笑いを浮かべるのみ。流石に雑誌に『IS男性操縦者が語る！学園内の淫靡な桃色ハーレム生活！』なんてものを載せることはできない。

載せれば売り上げも爆上がりするはずだが、そんなことをすれば会社が色々な方面から圧力をかけられて潰れてしまう。

「じゃ、じゃあ次は更識さんに質問させてもらおうかな。専用機がまだないって聞いたけど、それって本当？」

「……はい、織斑　一夏が優先されたみたいで。でも皆が助けてくれたので、機体は完成します……」

渚子は慌ててもう一人の取材対象に質問するが、簪の禁忌に触れてしまう。

答えるには答えているのだが、冷たい声色で背筋が寒くなる。

一夏が悪いというわけではないのは簪も理解しているのだが、感情的には簡単ではないようだ。

「えっ、機体を組み立てたの!?!」

ISのコアを作るのは未だ束しかできないことだが、機体を組み立てることは他の者でもできる。

しかし組み立てることができるのは、国のトップレベルの科学者などが十数人集まっ



てできるのだ。

いくら優秀な人材の宝庫であるＩＳ学園の生徒でも、機体を組み立てることができないのは異常だった。

「はー……やっぱり凄いわね、代表候補生は。ところで稚拙な質問で悪いんだけど、二人じゃどちらが強いのかしら？」

「クロウです……」

渚子の質問に即答したのは、何故か簪だった。

まあ確かに事実なのだが、食い気味返答されて渚子は顔をひきつらせた。

「クロウは凄いです……。近接戦闘では並み居る敵をぶった切り、遠距離戦闘では離れた敵を武器で吹き飛ばす。苦戦しているとすぐに助けてくれる私のヒーロー……」

はあ……と熱っぽいため息を吐いて語る簪。

目はキラキラと輝いており、まるで危ない宗教にどっぷりとはまってしまった信者のような態度になっていた。

クロウ教なんて宗教があれば、教祖となるのは間違いない。

「あ、ああ、そうなの。うん、インタビュはこれでいいかな。最後に撮影させてもらうから、着替えてくれるかな？」

渚子はまだまだ用意していた質問があったが、それを打ち切った。

簪はまだ話したりなさそうで、不満げである。

しかしクロウとのツーショットということで、ご機嫌になる。

渚子にとって記者をしていて、一番疲れた日になったのだった。



簪は案内された更衣室の中に入る。

撮影に使う衣装もすでに置かれていて、彼女に着てもらうのを待っている。

「今日の取材……やっぱり受けてよかった……」

クロウと二人で豪華ディナーを楽しむために引き受けたこの取材だが、簪は少し後悔していた。

やはり性格的にこういったものは受け付けなかったのだ。

楯無なら嬉々として引き受けていたであろう。やはり二人は姉妹といえども似てい

ない。

「(取材は面倒だったけど……あと撮影さえ我慢すれば、デート券をゲット……!)」  
グツと拳を握る簪。

一番乱入してくる可能性の高い姉には、以前遊びに出かけたときにしっかりと釘を打ちこんでいる。

『来たたら嫌いになる』とまで言ったのだから、来ることはないだろう。

「(よし、着替えよう……)」

会社側が用意した衣装は、簪の穏やかで物静かなイメージにあった水色のドレスだった。

少し胸元が開けすぎているような気もするが、自分が貧にゆ……胸が慎ましいことを気にしているみたいに思われては困るので、文句を言わずにドレスを着用した。

「更識さん、衣装は着れましたかー?」

「……はい」

「じゃあ次はお化粧しますね? さあ、早く来て」

「……え」

簪は撮影スタッフの呼びかけに言葉を詰まらせる。

化粧などしたことがないので、少し抵抗感がある。

勿論化粧をするのはスタッフだと思うが、あんな派手に見せるおしやれはする気にならなかつた。

「……化粧はいいです」

「もうっ、何言っているんですか！早く来て！」

「うわ、なにをするやめ——」



クロウは衣装に着替えて簪を待っていた。

彼が来ているのは黒いスーツ。

元のいかつい顔立ちと合わせて、堅気ではない人にしか見えない。

事実、撮影スタッフたちは彼に目を合わそうとしなかつた。

女尊男卑の時代であるにもかかわらず、女性も見ないのである。相当なものだ。

「ふむ……少しきついな」

それにスーツを盛り上げる鋼の如き筋肉がさらに圧迫感をも与えていた。

スーツの上からでもわかるほどの筋肉など、最早凶器以外の何物でもない。

これで黒いサングラスをかければ、屈強なSPにも見える。

「クロウ……」

そんな近寄りगतすぎる彼に声をかける少女。

この現場にはそんな人物は一人しかいない。

クロウは身体を振り向かせて、その人物に向き直る。

「簪、随分きれいになったな」

水色の髪をまとめて、それに合わせたのか、淡い水色のドレスを身に着けた簪。

所々見える肌色が、未成熟な身体を魅力的に演出する。

顔はうつすらとだが化粧が施されていた。

普段は大人しい雰囲気醸し出しているが、今は化粧によって少し明るい印象を受けた。

可愛らしさというよりは美しさを増進させているように感じる。

「あ、ありがとう……。クロウも格好いい……」

初めて化粧をしたということに少し不安げにしていた簪だったが、クロウに褒められ

て恥ずかしそうに笑みを見せる。

そんないじらしい姿にやられたのか、男性スタッフの何人かが胸を押さえて膝をつく。

しかし簪の褒め言葉に同調する者は誰もいなかった。

クロウはお世辞にも格好いいとは言えず、怖いという感想の方がずっと頭に浮かぶからだ。

今の彼を見てほめたたえるのは、セシリアや鈴などクロウと密接な関係にあつて盲目になつている彼女たちと、悪い男に捕まることに定評のあるIS学園教師の榎原 菜月くらいである。

「はいはい、いちやつくのは後にして先に撮影をしちゃいませよ。二人とも、よろしくね」

砂糖を口から吐きそうになるような桃色空間を無理やりぶち壊し、撮影を始める渚子。

簪はクロウに褒められて十分に満足しているのか、不満そうな顔を見せることはなかった。

素面のままなら顔が強張つていただろうと予想できるが、今はちよいどいい感じにぶっ飛んでいた。

クロウと簪は色々なポーズをとりながら撮影されていく。

とはいえ二人はあまり大げさなポーズをとることはなかったが、簪の容姿の良さのおかげで良い写真が取れていた。

これがクロウだけなら大惨事である。

「うんうん、いいわねー。じゃあもつと身体を寄せ合つてくれるかな？」

「っ!？」

渚子の要求に、簪は顔を赤らめる。

二人きりのときは遠慮なく甘えられるのだが、人の目がある状況では恥ずかしい。

姉とは違つて羞恥心の強い彼女には、中々難しい要求だった。

しかしこれは報酬も用意されたれっきとした仕事である。

恥ずかしいからやりたくない、とは到底言えない。

「……………」

だから簪は羞恥心を押し殺して精一杯の行動に出た。

同じソファアの隣に座るクロウにすすすつと尻をずらして近寄つていき、スーツの袖をちよこんと指で摘まむ。

これだけでも相当恥ずかしいらしく、顔を真っ赤にして俯く。

そんな姿にキュンキュンきたカメラマンは、パシヤリとシャッターを切る。

「たつちゃんの妹ちゃん、可愛いつ！流石は更識ね！」

渚子はもじもじといじらしい簪を見て、頭を撫でまわしたくなる欲求に襲われるが、それを何とか押しとどめる。

そんなことをしたら、もう二度と取材を受けてくれなくなるだろう。

ついでにキング・オブ・シスコンの楯無もだ。

「ふむ、もつと近くに寄れ、簪」

「ひゃっ……!?!」

袖を掴まむ簪がもどかしかつたのか、クロウはさらに身体を近づける。

布に覆われていない細い肩に腕を回し、グツと抱き寄せる。

簪はクロウの胸板に手を添えて、真つ赤にしながらクロウを見上げる。

眼鏡越しに見る男の姿は、とても魅力的に見えた。

なお、魅力的に見えるのは簪だけである。

「おお……」

思わずカメラマンは息をのむ。

切なげに眉を寄せて顔を真つ赤にした簪の表情は、老若男女を問わず魅了してしまう魅力があつた。

まさに恋する乙女といった表情の簪は、撮影中ということはずでに頭の中になく、彼



女の目にはクロウしか映っていなかった。

「あ、ありがとう！撮影は以上よ！お疲れ様！そしてありがとう！」

「っー」

かなり良い写真が撮れて非常にご機嫌な様子の子。

彼女の言葉に簪は我を取り戻し、バツとクロウから離れる。

しかしドキドキと胸を打ち鳴らす音は消えない。

その後は衣装がプレゼントされる旨が伝えられ、撮影は終了した。

クロウと簪は、それぞれ更衣室で私服に着替える。

「(き、緊張した……)」

それは撮影ということもあったが、クロウと近づきすぎたことでもあった。

特に肩を抱き寄せられたときなど、心臓が口から出てきてしまわないか不安になるほ

ど高鳴っていた。

「(ご飯はいつなんだろう……。後で確かめないと……)」

簪は着ていた水色のドレスを脱ぐ。

質素な白い下着に覆われた自分の身体を改めて見る。

姉に比べてあまりにも起伏の乏しい身体だが、簪はあまり気にしていなかった。

「(だってクロウは、わ、私のこと、好きって言ってくれたし……)」

ただ慎ましい胸の持ち主が、豊かな胸の持ち主に敵対心を持つのはよくあることで、簪も楯無の豊満な肉体を敵視していた。

後はあまり話したことはないが、篠ノ之 箒である。

制服の上からでもわかる巨大な双子山は、簪の敵である。

「(まだ私は成長期……。クロウに育ててもらおう……)」

新たに決意を固めた簪は、私服を着用する。

更衣室を出るとちようどクロウも着替え終わっており、二人して会社を後にした。

## 酒は飲んでも飲まれるな

自分の身体をクロウに育ててもらおう。

男に開発される宣言を心の中でした簪だが、姉のように『好き！抱いて！』と言えるような性格ではない。

だから彼女はお酒の力を借りた。

日本人である簪は20歳以上にならないと飲めないのだが、ここはIS学園。治外法権万歳の立地ゆえに、問題はないのである。

ないのである（暴論）。

勿論教師陣に知られればただでは済まないが、彼女は更識家の一員。これくらいのことならば必ずできる。

さて、お酒の力を借りて簪は今何をしているかというところ……。

「うわぁー……大きいな」

「……………」

クロウのズボンを剥ぎ取り仰向けに寝かせ、いきり立った男根をつんつんと指で突いていた。

クロウと一緒にお酒を飲んでいたので、彼も飲むことには反対はしなかったものの、あまり飲ませてはいけないと常識はあったため、ほんの少量しか飲んでいない。

しかし簪は普段の物静かな言動から真逆になり、明るい笑顔を見せる元気な美少女になつていた。

クロウの側に股を開けて座つていて、白いショーツが丸見えになつている。

正常な簪なら、このような座り方は決してしない。

いつもとは違うSな彼女に、クロウは新鮮さを覚えて反抗しない。

やはり変態である。

「本当大きいー！凶器だ、凶器」

ケラケラ笑いながら巨大な逸物を見やる簪。

皮も全て向けて赤黒い亀頭を丸出しにしている。

長くて太い陰茎にはいくつもの血管が浮かび上がっており、おどろおどろしさがあ

る。

天高く上を向くそれは、見るだけで何度も開発された簪の子宮を疼かせた。

「はあ……大きくしてくれただから」褒美を上げるねー」

簪は目を細めて舌を出し、意地悪そうに笑う。

立ち上がるとクロウに見せつけるように、純白のショーツをずらしていく。

「えいつ」

楽しそうに笑いながら、簪は脱ぎたてのショーツを男根に被せた。

脱ぎたてゆえの暖かな感触が男根を覆う。

この暖かさが簪の下半身の温度だと思おうと、逸物がさらに元気になる。

「おお……悦んでるの?」

男根に被せたショーツの上から、酔っていて普段より体温が高くなっている手で摩る。

陰茎を掴み、ぐりぐりと亀頭を弄ぶ。

そうしてクロウを愛撫していると、簪も胸がドキドキと高鳴り厭らしい気持ちになつてくる。

「クロウの見てるから、私のも見せてあげる。おあいこね」

簪は仰向けに寝転がっているクロウの上を跨ぎ、ショーツに覆われていない丸裸の陰

部を彼に見せる。

ニヤニヤと笑いながら、挑発的にフリフリと尻を振る。

恥ずかしがり屋の簪が絶対にしらないようなことをしていることに、クロウは興奮を覚える。

「こんなの見たら、もつとおちん○ん固くなる?」

簪は自分の指で秘裂を開き、クロウに見せつける。

くぱつと開かれた秘裂から覗ける膣内は、何度も使い込まれたとは思えないほどきれいなピンク色だった。

陰毛が薄い姉よりもさらに薄い茂みは、ほとんど産毛と違って間違いない。

あまり肉が乗っていない臀部は、可愛らしく窄まった尻穴まで窺えた。

「あははっ、本当に固くなった」

天めがけて突き上げられた男根に愛撫を行う簪。

シヨーツの上から陰茎をしこしここと擦りあげ、我慢汁を染みさせている鈴口を指でくりくりと弄る。

クロウからその様子を見ることはできないが、簪の陰部を視姦することができた。

ぴつたり閉じられた秘裂は、まるで処女のように、彼の凶悪な男根を何度も受け止めてきたとは到底思えない。

「私もお返しに弄つてやろう」

「きやつ!？」

臀部を鷲掴み、自身の顔のほうに引き寄せる。

処女のような陰部に吸い付く。

じゅぱじゅぱと下品な音を立てて啜ると、その音で簪は羞恥心と快楽を植え付けられ  
てしまう。

秘裂をなぞるように、舌でれるると舐め上げる。

ほんのりと汗と小便の味が口に広がる。

「んあっ!んっ!はっ!んっ!!」

陰部を舐められて、ぞくぞくと快感が全身を走る。

舌をだらしなく口から出して、よだれを垂らす。

大きな手を活かして、秘裂と尻穴の両方を広げてみる。

二つとも開発されており、柔らかく開いて非常に淫靡な光景になる。

「あっ!ひゃんっ!あっ!んっ!!」

指で尻穴をほじりながら、陰部を舐める。

あふれ出てくる愛液をじゆるじゆると啜ると、彼女は身体をビクビクと震わせる。

少しすると、秘裂から舌を離して尻穴を舐める。

ぬちゆぬちゆとしつこく舐めていると、秘裂が物欲しそうにひくひくと蠢く。

「はっ、んっ！もう、クロウ。お尻は舐めちゃダメだよ」

素面のときに尻穴を攻めてやると、恥ずかしさから一切声を出さずに黙り込んでいたのに、酔って積極的になった簪は小悪魔のような笑みを浮かべるのみだった。

そんな彼女も新しく、クロウを興奮させる。

すでに簪の下半身はよだれまみれになってしまっていた。

秘裂付近にはよだれと愛液が、尻穴付近にはよだれだけが付着していた。

「お返ししちゃうんだからっ」

「むっ」

簪はペロつと唇を舐めると、細い指でクロウの尻穴を弄る。

しばらく弄っていたかと思うと、いきなり指を腸内に突っ込んだ。

そしてすぐに前立腺を発見すると、そこを指の腹でコリコリと執拗に攻め立てる。

「ぐうっ」

「あはっ、いっぱい射精た」

クロウの口からきいたことのないような声が漏れる。

クロウのほとんどない——いや、そんなこともないか——弱点の前立腺を攻められ、彼はあつけなく射精する。



陰囊をきゆううつと収縮させ、多量の精液を絞り出す。

ビュツビュツと飛び出した精液は、被せられていた白いショーツの中にぶちまけられる。

簪はそれを見て、嗜虐的な笑みを浮かべた。

「うわあ……凄いい臭い……」

男根からショーツをはぎ取って持つてみると、ずっしりとした重みを感じられる。

それほど精液が溜まっているということだ。

むわつと鼻を突く臭気は、簪の女を刺激する。

かなりの量の精液を吐き出したというのに、未だ男根は固く天を向いている。

まだまだ一度の射精程度では、クロウは収まらないようだ。

「えへへ、まだ大きいまま。流石クロウ」

根元を持ち、ふるぶると男根を振る簪。

悪戯な笑みを浮かべてクロウを見下す。

「普段の簪も良いが、今の簪も好きだぞ」

「っー……そう」

簪はドキリと胸を高鳴らせ、頬を紅潮させる。

それはお酒のせいなのか、今まで行っていた淫靡な行為のせいなのか、あるいは……。



簪は慣れていないながらも、必死に腰を動かす。

身体はヒクヒクと震え、ゆったりとした動きだが、彼女はクロウを愉しませようと身体を動かす。

Sな性格を見せていた簪だったが、身体の芯まで調教されてしまっていた彼女は、クロウが悦ぶために淫靡な技を使う。

膣内はきゅんきゅんとうずき、精液を求める。

「気持ちいいぞ、簪」

「あつーんっ！あつーあつーあつーあつー！！」

簪が腰を上げると、太い逸物がズルズルと抜け出してくる。

子供のような陰部に大人の男根が突き刺さっている光景は、非常に淫靡だった。膣内に満たされている愛液が男根をコーティングして、ぬらぬらと光る。

簪はクロウに感想を告げられると、嬉しそうに微笑んだ。

前かがみになると、胸元から慎ましい乳房が覗けた。

「あんっーんっーんっーんっー！！」

簪は腰をぐりゆぐりゆと蠱惑的に動かして男根を刺激する。

クロウに教え込まれた性技が発揮される。

そしてまた腰を上下に振り、ピストンを再開する。

きゅーっと絶頂が近い膣内が男根を締め付ける。

きゅんきゅんと子宮は男の種を求めてうずき、口から吐く息が荒くなる。

「あつ！あつ！はつ！んんつ！んんつ！あんつ！！」

男根が抜き差しされる陰部からは、じゅぽじゅぽと淫靡な水音が聞こえ出す。

小さな秘豆は刺激を求めて固く勃起している。

巨大な逸物は膣壁をかき分け、子宮口を圧迫する。

「はつ！んんつ！はつ！クロウ、もうイクの？射精しちゃうの？」

「うむ、もうそろそろ射精すぞ」

ごちゅごちゅと男根が子宮口に叩き付けられる。

簪が勢いよく臀部を腰に落とすと、パンパンと軽快な音が鳴る。

二人は強く手を絡め合わせ、近づいてきた絶頂に耐えようとする。

簪の腰の振る速度が速くなる。

ぐぼぐぼと大きな音を立てて、男根を抜き差しする。

逸物が奥に突っ込まれると、愛液が飛び出してくる。

「ああつ！イク！イク！イっちゃうつ！！」

——パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

激しい肉のぶつかり合いに、大きな音が鳴る。

絡め合わせた手は、強く強く握られた。

簪は激しい快楽に耐えられなくなり、身体を前に倒れさせる。

目の焦点はあつていなく、口から出された舌を合わせると、とてもみつともない表情になつていた。

「はあっ！あっ！んあっ！イクううううっ!!」

射精する寸前、男根を陰部から抜く。

直後に決壊した鈴口から溢れ出した精液が、簪の肢体を汚していく。

白濁液が薄い水色の髪を犯し、凹凸の乏しい身体に付着する。

「もう……何で中に射精だしてくれなかったの……う？」

簪は身体にへばりついた精液を拭い、それを口に含みながら言う。

子宮内に射精してもらえなかったことが不満なようで、頬を膨らませている。

このような仕草から、まだ彼女が酔っていることがわかる。

「いや、お前の全身にかけたくてな」

「……変態」

隠すことなく恥ずかしいことを言うクロウを、簪は呆れた目で見つめる。

それでもこの男に対する好感度がまったく下がらないのは、流石というべきか……。

簪はまたクロウにすり寄り、まだ固さのある男根を手でこする。

「むっ……」

「ねえ、まだ大丈夫でしょ……？次は膣内なかで射精だして……ね？」

もうすでに夜遅く、ほとんどの部屋は電気が消えていたのだが、クロウの部屋だけは一日中消えることはなかった。



「——ということがあったのだが」

「……嘘」

散々お互いの身体を貪り合い、スーパ―賢者タイムに陥った二人はようやく穏やかに会話する。

勿論話の内容は、先ほどまでの簪の酔いっぷりである。

普段なら絶対にしないような淫靡な行為を散々行い、厭らしい言葉を吐きまくったこ

とは、彼女には到底受け入れることができなかつた。

「ここにその様子を撮つた映像がある。見るか？」

「……………」

何性交場面を撮っているんだと思う簪だが、今はそれが重要な証拠になる。

彼女は覚悟を決め、コクリと頷いた。

なお、この後彼女は一週間ほど部屋に引きこもつたのだが、これは余談である。



クロウが簪とイチヤコラしているころ、専用機限定タッグマッチに出場する専用機持ちたちは、それぞれパートナーとの親睦を深めていた。

とは言つても、セシリアと鈴や、シャルロットとラウラのように、よくお互いが知れている彼女たちにとってはあまり深めるものはないのだが。

「どうぞ、鈴さん」

「ありがとう」

鈴はセシリアの部屋に招かれていた。

これが専用機持ちでもないタッグだったら作戦の打ち合わせや練習などを行うのであろうが、彼女たちは勿論準備は必要だが、慌てる必要のない実力を持っているので、のんびりとお茶会を開けていた。

セシリアが置いた紅茶は、あまりそちらの方面に知識がない鈴でも、良い茶葉を使っていることがわかった。

「うん、美味しい」

「それはよかったですわ」

実際に飲んでみると、すんなりと称賛してしまうほど美味しかった。

セシリアはそれを聞くと嬉しそうに微笑み、自分も紅茶を飲んだ。

しかし彼女は眉を顰める。

「……やっぱりチェルシーに淹れてもらった紅茶が一番おいしいですわね」

幼馴染であると同時に専属メイドであるチェルシーのことを頭に浮かべるセシリア。

彼女の淹れる紅茶は、今自分が淹れた紅茶とは比べ物にならないほど美味しい。

同じ茶葉でも、淹れる人によって味が変わるものだと思えて実感する。



「そのチエルシーって誰よ」

「わたくしの専属メイドですわ」

「はー……お金持ちは違うわねー」

セシリアは英国名門貴族のお嬢様。

対して鈴は中国のごくごく一般的な家庭の生まれである。

性格もまったく逆といっていいのにもかかわらず二人の仲が良い理由は、二人はなみなみならぬ努力をしてきたということだ。

セシリアは両親が遺した財産を守るためにあらゆる方面で努力し、その一環としてイギリスの代表候補生になった。

鈴は中学生のとき、日本から中国に帰国してたった一年の間にI Sのことを一から猛勉強し、代表候補生に登り詰めた。

二人ともやはりどこか似ているのであろう。

「そういえばさ、最近クロウってあの更識って娘のところに行っているけど、あんたあいつのこと知ってる？」

特定の男に好意を寄せる二人の間で上がる話題は、当然クロウのことである。

最近足しげく整備室などに足を運ぶ彼を見て、鈴は小さな嫉妬を抱いていた。

「ええと……確か生徒会長の妹さんでしたわね。あと日本の代表候補生ですわ」

「へー、日本の……」

鈴は今知ったといった様子だが、普通代表候補生は他国の代表候補生のことを知っているはずなのだが……。

とくに小さなことで衝突し合う近隣国同士なら余計に……。

まあ彼女は知らずとも大抵の相手には快勝してしまうので、あまり問題はないのかも  
しれない。

「あら、鈴さん。クロウさんに構ってもらえなくて寂しいのかしら？」

「そ、そそそそんなことないわよ！ あんただって、最近オナニーの回数増えたんじゃない  
の!？」

「な、なんでそれを……っていきなり何の話ですの!？」

クスクスと悪戯そうに笑いながら鈴をからかうと、反撃を受けてしまい顔を真っ赤に  
するセシリア。

鈴が適当に言ったことにも正直に答えてしまうことから、彼女の人の良さがうかがえ  
る。

しかしここでは致命的な隙を露見してしまった。

鈴はニヤリと笑い、反撃を開始する。

「へー、そんなことやってたのね。このエロ貴族」

「エロ貴族とはなんですか！わたくしは別に脳内が常にお花畑ではないんですよ!」  
「時々お花畑になるのね……」

普段余裕を持つて優雅なセシリアだが、鈴の前ではこのように自分を出すこともするようになつていた。

ここまで本心をさらけ出しているのは、この世界で鈴を含め三人だけだろう。

ちなみに残りの二人はクロウとチエルシーである。

その後も二人はギヤアギヤアと、美少女としては想像できないほど大騒ぎしていた。しかし二人とも楽しそうに時間を過ごしたのであった。



「はー……ラウラの髪は本当にきれいだね……」

同時刻、シャルロットは自室でルームメイトであるラウラの髪を梳いていた。

櫛を入れてもまったく絡まることなく、スルリと先端まで下ろすのは何とも気持ちいが良かった。

風呂上りだからか、シャンプーの良い匂いがシャルロットの鼻孔を満たす。

ラウラはそういつたことにまったく興味がないので、シャルロットがシャンプーを選んでいるのは余談である。

「む、そうか？」

「そうだよー。ああ、こんな髪が欲しいなあ……」

「や、やらんぞ」

銀色の髪を手のひらに乗せて弄ぶ。

サラサラとした感触が肌に心地いい。

シャルロットの髪が別に悪いというわけではないのだが、彼女の髪は少しくせつけがあり、サラサロングのラウラが羨ましいのだろう。

彼女の本気の声色に、ラウラは少し震えながら返答した。

そんな姿は、ラウラ・コンプレックス——略してラウコンのシャルロットにとって  
は非常にツボだった。

「うううっ、ラウラ可愛いよおっ」

「むぎゅっ！は、離せえっ」

正面に回り、ラウラを胸に抱き寄せるシャルロット。

もともと豊かで、最近ますます大きくなっている彼女の胸に顔を押し付けられ、息をするのが困難になる。

しかし何とも言えない母性の塊に、ラウラは気持ちいいと考えてしまった。

「~~~~つ……ふはっ！はあ……はあ……いい加減にしろ、愚かもの！」

「ご、ごめんね、ラウラ」

何とかシャルロットの柔らかくクツシオン付き拘束から脱出したラウラは、素早く身をベッドの陰に隠れさせ、シャルロットを警戒する。

小さな全身を隠れさせて目と鼻だけ陰から出している猫のような姿を見て、またシャルロットは暴走してしまいそうになるが、今度こそ嫌われてしまうので理性でそれを押さえる。

シャルロットはラウラに機嫌を直してもらうために、秘密兵器を使う。

「ごめんね、ラウラ。お詫びにココア淹れたから、一緒に飲もう？」

「……………よ、よせ」

シャルロットの持ったカップから甘い匂いが漂う。

ラウラはしばらく沈黙していたが、未だ不機嫌といった表情で影から出てきて、ココアがなみなみ入ったカップを受け取る。

鼻をカップに近づけてヒクヒクと可愛らしく動かして匂いを嗅ぎ、そつと舌をつける。

「あうっ」

思つたより熱かつたのか、うつすら涙目になりふーふーと懸命に息を吹きかける。そんなラウラの様子を見て、シャルロットはベッドの上で悶える。

可愛いものが大好きな彼女にとつて、ラウラはど真ん中ストライクなのだった。

「あれ、ラウラ。あれつてアルバム？」

「む？ああ、そうだ」

「へえ……見てもいい？」

「ああ、いいぞ」

シャルロットが見つけたのは、飾り気のないアルバムだった。

持ち主に確認を取り、それを開いて見ていく。

中にはたくさんさんの写真が貼られていて、おそらくドイツにいたときの部隊の仲間だろうか、みんな可愛らしい少女が笑顔で写っていた。

「ラウラつて慕われていたんだねえ」

「まあ隊長だからな」

写真にはよくラウラと隊員たちが写っていた。

ラウラは相変わらずの仏頂面だったが、隊員たちは皆笑顔だった。

それだけで彼女がどれだけ愛されているかが見て取れた。

ラウラも何でもないように言っているが、幾分声が柔らかい。

彼女も隊員たちを大切に思っているようだ。

「あれ？これってもう一つのアルバム？」

「む？そ、それは……っ！」

また目についたアルバムを手取るシャルロット。

しかしラウラはまずい物を見られたといった慌てた様子で、取り返そうと襲い掛かってくる。

「おっとおっ！何か見られたらダメなものがあるのかな？」

「くうう……っ！」

ラウラの攻撃を飛びずさって避け、ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべるシャルロット。

特殊部隊の隊長で近接格闘術もかなりのものを持っているラウラでも、一瞬の間にシャルロットからアルバムを奪い返すことは不可能だった。

シャルロットもラウラと戦えば負けは確実とはいえ、すぐに負けることはないくらいには鍛えている。

「中を見させてもらおうよ」

「ああっ！」

悲痛な声を上げるラウラ。

ニヤニヤと笑いながら見ていたシャルロットの顔が、ピシリと固まった。

「こ、これは……」

「くつ、ばれてしまったのなら仕方がない。そうだ、それは『クロウ専用アルバム』だ  
あの部隊のアルバムより圧倒的な写真の多さ。

そのすべてにクロウが写っていた。

いかつい表情のまま眠っている寝顔や、授業で戦っている様子などが写真に収められていた。

「よ、よくばれなかったね」

「いや、おそらくばれている。何も言ってこなかったが」

実際、風呂の着替えシーンを撮ろうとして捕まったラウラの言葉である。

何も言ってこなかったと言っているが、実際にはラウラの色々な姿を写真に収められたのだが、それは自分のプライドのために言わないことにした。

スクール水着やらブルマやらメイド服やら……恥ずかしくて言えるはずがない。

「わー……この写真いいなあ……」



「ふふん、そうだろう。それは私が撮った中でも自信のあるものでな……」

こうしてシャルロットとラウラの写真談義は長い間続くことになる。

シャルロットが常に持っている、珍しいクロウの笑顔の写真を見て、ラウラとシャルロットの間で激しい争奪戦が勃発するのは余談である。

ちやっかり良い写真を持っているのは、シャルロットの性格ゆえにである。

## それぞれの思惑

「……休みつて素晴らしい」

学生にとって休日というのは非常に愛おしい日である。

大人になると学生時代に戻って勉強したいと思うのだが、今絶賛学生生活を謳歌している彼らはそうは思わない。

布団を頭からかぶり、空間投影ディスプレイを展開している彼女——更識 簪もそうである。

「……宿題も終わった。ISも完成した。これで一日中アニメ見放題……」

簪の目には大きな星が浮かび上がっており、見る人が見れば機嫌が良いことが分かる。

朝なのにまだパジャマを着替えず、頭も寝癖が付いてぼさぼさだ。

そんな彼女が眼鏡をかけているので、白衣でも着ればずぼらな研究者と見えてしま  
う。

可愛らしさがあるが冷たい雰囲気醸し出す研究者……あります。

「さあ……帰らぬ旅に出かけよう……」

そうやって簪はシリーズもののヒーローアニメを再生する。

恰好つけているが、『帰らぬ旅』というのはただ単にこれから十数時間もぶっ通しでア  
ニメを視聴するだけである。

アニメに影響されたのか、これはヒーローアニメの主人公のセリフだった。

勿論、使われている意味がまったく違うのだが。

「かんちゃん、何恰好つけてるの〜?」

「……………」

帰らぬ旅（笑）に出かけようとしていた簪を呼び止める人物。

それは彼女の専属メイドであり、一番の友人でもある布仏 本音だった。

彼女も未だパジャマのまま、全身着ぐるみのようなゆるいパジャマを着用してい  
た。

「本音……………いたの……………」

「帰らぬ旅に出かけよう……キリっ！」

「~~~~~っ!!」

一瞬で顔を真っ赤にし、声にならない悲鳴を上げる簪。

誰もいないと思つていたからこそ発したセリフを、人に——しかも性格が意地悪い友人に聞かれていたのだ。

穴があつたらそこに逃げ込みたいと考えてしまう。

「本音……あなたは今何も見なかつた……」

「かんちゃん……催眠術は流石に……」

「うう……」

いつも眠たげで細められている目が、さらに呆れたように細くなる。

自分の主が必死に記憶を消そうとしてくれるのが涙ぐましい。

まあ簪もこれほど嫌がつていることだし、これでからかうのはやめようと思える本音。

「大丈夫だよ、かんちゃん。私は何も見ていなかったから」

「う、うん……」

簪の頭を胸に抱き、よしよしと頭を撫でる本音。

忘れてくれるというのはありがたいのだが、この慈愛に満ちた目で見られるのは釈然

としない簪である。

しかも顔に当たる柔らかい感触に腹が立つ。

「本音……胸が当たってる……」

「おお、気に入った？」

そんなわけないだろ。

そう怒鳴りつけてやりたいが、それは非生産的なので自重する簪。

しかしどうしてここまで育ったのか。

自分より小さな背丈のくせに、簪より一回りも大きな胸。

これが天然もののロリ巨乳か……。

「何を食べたらかこうなるの……？」

「な、なにつて……別に特別なことはしてないよ？」

特別なことをしていなくてこれか。

簪が苦手な牛乳を涙目になりながらも飲んだり、弱弱い筋力で必死に腕立て伏せをしているのに、何もしていなくてこれか。

簪の胸にメラメラと怒りの炎が宿る。

非生産的だからといって滅多に怒りを見せない彼女が、今猛烈に怒っていた。

本音は八つ当たりの対象にされてしまった。

「本当に何もしてないの……?」

「ひゃあつ!?か、かんちゃん?」

ガシツと本音の胸を驚掴む簪。

パジヤマ越したがノーブラなのだろうか、柔らかい感触が掌に伝わってくる。小さな手のひらから乳肉がこぼれているのが分かる。妬ましい。

「ほ、本当に何もしてないよ」

「本当に……?」

もう本音は少し泣きが入っている。

この後クロウの所に行つて慰めてもらっているのが予想できる。

「あ、でも……」

「……なに?」

早く簪から解放されようと、一生懸命頭を回転させてみたところ、一つだけ思い当たる節があった。

思っていた以上の速さで食いつかれて、本音は少し引き気味である。

自分の主の珍しい姿に、嬉しさを感じる反面、自分が絡まれる対象となつているために残念にも感じる。

「わ、私が大きくなりだしたのつて、クーにナデナデされ始めてからかな」

「そんなこと、もう散々されている……」

「ご、ごめんなさい〜」

勿論ナデナデされる場所は胸である。

本音は背丈に関しては伸び悩んでいるが、胸の大きさはどんどん大きくなっていく。

成長速度は、シャルロットと同等である。

それに対して簪も大きくなってきているとはいえ、非常に微々たるものである。

クロウがお気に入りになっている女性陣の中には簪より小さな胸の大きさの者が二人いるが、彼女たちはまだ背丈も小さいためこれから先大きくなる可能性がある。

「もういつそのこと、本音の胸をもぎ取って……」

「うわ〜んっ！クー、かんちゃんが怖いよ〜！」

本音はこの後何とか脱出し、クロウの部屋に逃げ込んだ。

「ほえく……やっぱり専用機持ちがこれだけいるっていうことは凄いですね」

「そうだな」

ＩＳ学園教師である山田 真耶は、目の前にあるトーナメント表を見てため息をつく。

それに答えるのは、同じく教師である織斑 千冬だった。

このトーナメント表は近々行われる専用機限定タッグマッチのものである。

一年生の専用機持ちが八人。そして二年生、三年生の専用機持ちが一人ずつ出場する。

「今こうして見ると、やっぱり一年生に専用機持ちが固まっていますね」

「そうだな。これは一夏とクロウが原因なのだろうが」

世界で二人しかいない男性操縦者に合わせて、各国が代表候補生を集めたのだろう。

現在はあらゆる国家権力が侵入できないＩＳ学園にいるため手を出せないが、卒業後に自国に引き入れるために、見目麗しい少女たちを送り込んだのだ。

あわよくば何らかの情報を手に入れることも期待されている。

「まあその点は大丈夫だろう。あいつらがクロウや一夏を売るようなことはするまい」



「そうですね、私も同意です」

一年生の専用機持ちの女子は、皆それぞれ好きな異性がいる。

まあクロウと一夏しかいないわけだが。

彼女たちは確かに愛国心を持っているが、クロウに敵対するほど強いものではない。

というか敵対したらすぐに叩きのめされて屈服（色々な意味で）されそうなので、絶対に裏切らないだろう。

「今回は大丈夫でしょうか……」

真耶は心配そうに呟く。

今までIS学園で行われた行事には悉く襲撃されている。

生徒思いの真耶は、それで生徒が傷つくことがとても嫌だった。

「……自信を持って大丈夫……とは言えないな。不測の事態が起こる可能性はある」

そもそもIS学園に警察などがいないので、警備しようにもできない。

警察に依頼したいものだが、それは日本の国家権力を借りることになり、そうすれば色々な国がこれを理由にして干渉してくるだろう。

「まあ今回はIS学園内で行われるから、『ファントム・タスク亡国機業』の襲撃はないだろう」

千冬はそう言っファントム・タスクて真耶を安心させるが、彼女の頭の中には世界的テロ組織である『亡国機業』より面倒な馬鹿のことを考えていた。

「やはり今回もちよつかいをかけてくるか、束」

千冬の頭の中で、『いえい、いえい♪』とダブルピースをしている美女ウサギ。元気いっぱいイメージに腹が立つ。

自分の研究成果を世界に示すために各国の軍事コンピュータを同時ハッキングするという人外技を使い、日本建国以来最大の滅亡の危機に追いやった大馬鹿者。

まあその事件に関係した千冬もあれなのだが……。

「それにあいつらは襲撃者にやられるほど、軟弱ではない」

「ふふっ、そうですね」

千冬が自信をもって言い切ると、真耶は楽しそうに微笑む。

普段は厳しいことを言っているが、彼女も生徒たちのことを信頼しているのだ。

そう思うとおかしくて仕方がなかった。

……ただ笑いすぎるとまた近接格闘訓練を強要されるので、適度に笑いを止めた。

「でも今回のタッグマッチは良い試合が多そうですね」

「ふん、まだまだだな」

「もう、そんなこと言って。織斑先生も楽しみにしているのは分かっているんですよ？」

とくにクロウさんに期待していることとか——

「山田先生、私たちも襲撃に備えて訓練をした方がいいと思うのだが。まず相手からし

ようか」

「びいっ!？」

結局組手をする事になったのは余談である。

なお、戦績は真耶から見て1勝34敗。大金星である。



「い、一夏!」

「ど、どうした筈? そんな大声出して……」

「す、すまない。その……タッグマッチのパートナーは決まったか?」

「いや、それが皆もう組んでてさあ。どうしようか悩んでいたんだ」

「そ、そうか! それじゃあ私がパートナーになつてやろう!」

「おっ、いいのか。助かるぜ。優勝しような」

「う、うむ！当然だ！」

箒は意中の相手と組めてご満悦である。



「あ、更識。貴様は今回も出場禁止だ」

「なん……だと……」

職員室ではとある生徒会長が絶望していた。

妹や好意を寄せている男に格好いいところを見せたかったのに、その計画が根本から折れてしまった。

まあ現在の学園にいる専用機持ちが奇数なので、タッグを組むと必然的に一人余るので仕方がない。

そしてそれが唯一の国家代表である楯無がそうなるのは仕方がない。

ただし、同情はする。



こうしてタツグマツチに向けて、それぞれのチームと教員たちは動き出していた。

いや、動き出していない者の方が多いが……。

そしておそらく一夏と同等に注目されるであろうクロウは、現在自室にいた。

「なあ、兄ちゃん。えらいこと、しようや……」

「うむ、セクハラおやじ感が凄いで、束」

ニヤニヤしながらすり寄ってくる絶世の美女（ただし外見だけ）。

世界中の国々から追い求められている篠ノ之 束は、またクロウの部屋に侵入していた。

色々な機関からの目を潜り抜けて侵入する彼女の能力は、無駄に高かった。

そんな彼女は四つん這いになり、胸元を強調するようにクロウににじり寄っている。豊満な胸が寄せられたことによって、深い谷間を形成している。

クロウはそこに穴が開くほど目を向ける。

「ふふーん、クロくんもその気だね。さっすが束さんの身体だよ！」

「うむ、流石だ」

「え……そ、そんな直接褒められると……」

自分からニヤニヤしながら聞いたのに、まっすぐに褒められると頬を赤らめて恥ずかしがる束。

自分で攻めるのは問題ないが、攻められると一気に弱くなるタイプである。

ちなみにだが、似たような人物に楯無の名前が挙げられる。

「そ、そうじゃなくて……ほらほら、クロくん。興奮するでしょ？」

「寂しかったのか？」

「うん、最近全然会えなかったから……じゃなくてっ！」

誘惑していたのに、つつい本音を漏らしてしまう。

両手を上げてぐわーっと怒ってみせるが、今の束がやっても可愛らしいだけである。

しかし本音も中々恥ずかしいことなので、怒るのも仕方ないかもしれない。

このままではらちが明かないと考えた束は、強硬策に出る。

「えーいつ…どう？…これならもう夢中でしょう？」

束は身に着けていたアリスの服のようなものを、男らしくポイッと脱ぎ捨てる。

現在の彼女は上下の下着しか身に着けていない。

それも黒色と、非常に色気のある下着だった。

「ふむ……」

クロウは束の肢体をじっくりと視姦する。

大きな乳房は、それを覆っているブラから漏れるほど張りだしている。

束が少し身動きするだけで、柔らかそうにぶるつと震える。

視線を下にずらしていく。

普段自堕落な生活を送っているとは思えないほど、腰は括れていて胸の大きさを強調している。

そこから臀部にかけては肉付きがよく、黒いショーツに覆われた尻はむちつと肉感がある。

日常生活においてほとんど陽の光を浴びることがないおかげで、肌にはシミ一つなく、病的なまでの白さが美しさを演出していた。

肌は衰えていてもおかしくないのに、ぶるつと弾力のありそうなすべすべとしている。

「ねえ、クロくん。ちょっと私と遊ばない?」

四つん這いになり、二の腕で乳房を寄せる。

下を向いた乳房は重たげに揺れている。

ここまで誘われて、クロウは我慢できるほど立派ではなかった。

束の後ろに回り込み、背後から彼女の身体を貪ろうとする。

「良い匂いがするな、束」

「おおうつ?!? 嗅ぐのはやめて〜!」

濃い紫色の長い髪に鼻を埋める。

研究に熱中しすぎると、時々風呂に入ること忘れ束の身体は、ほんのりと汗の匂いが漂っている。

それに甘い束特有の匂いが混ざり合い、濃い雌の匂いを醸し出している。

「しかし良く育ったな」

「束さんのパーフェクトな身体は悩殺絶対!それを育てたのはクロくんなんだよ?」

上から覗き見ると、前に大きく張り出した胸が視界を遮っている。

少し小さめの黒いブラに覆われているそこは、男を興奮させるには充分の魅力がある。

そつと手で柔らかな乳房を持つと、たぶつと重量感が手にかかる。



東は小さく声を漏らす。

「んっ……」

手をブラの中に突っ込み、直に乳肉を揉みほぐす。

むにと柔らかい乳肉が手に吸い付いてくる。

東はキュツと口をつぐみ、身体をピクピクと敏感に反応させる。

「きゃんっ♪」

黒くて扇情的なブラを下にずらす。

するとFカップの大きな乳房がぶるんつと飛び出してきた。

「えっちななあ、クロくんは」

「ほほう、お前が言うか」

クロウは日本をはじめとして、イギリスや中国の将来有望で容姿端麗な代表候補生たちを毒牙にかけて一年中イチャつきまくっている。

東はまるでウサギのように良く発情し、そのたびにクロウの元に忍び込んで発散している。

どっちもどっちである。

「あっ!!」

むき出しになった豊かな乳房を、両手でぐつと握る。

今まで散々揉まれてすっかり固さがなくなった乳房は、どこまでも沈みそうなくらい柔らかい。

しかし指を押し返そうとする張りは健在で、クロウを愉しませる。

「んっ、あんっ、あっ」

下から乳房を持ち上げてみると、ずっしりとした量感が感じられる。

手のひらで乳房を撫でまわし、すべすべの肌とむっちりとした弾力を愉しむ。

圧倒的な大きさを誇る胸を、手でたぶたぶと弾ませる。

「いつから育ってきたんだっただか？」

「んっ、んっ。小学生のときには、もう大きくなり始めていたよ。全部クロくんのせいだからね」

ふにふにと乳房を揉みしだきながら聞いてみる。

小学生のころから開発され始めていた束は、元々早熟だったこともあるだろうが、他の同級生に比べて発達が良いかった。

今の時代、小学校高学年にもなれば異性の身体にも興味を持つもので、彼女はよくジロジロと見られたものだった。

「そっだな、私がちやんと責任を持ってお前を飼おう」

「んっ、はうっ。ペ、ペット発言!? あっ、う……んっ、んっ」

耳をちろつと舐めると、ビクツと身体を反応させる。

胸を揉まれまくっていると、束はだんだんと嬌声を上げるようになってくる。

すつかりほぐれている乳房は、まだ成長の過程である少女たちより乱暴がきき、ぐにぐにと自在に形を変えている。

「なんだ？嬉しくないのか？」

「あつ、ダメっ！そこ弱いから！強くしちや……っ！」

固くなり始めていた先端の桃色を、指できゅつと挟む。

「あつ、はああああつ、う、嬉しいよおっ！あああああつ！！」

乳首を掴みながら、爪を立てるように押し込む。

もう一方の乳首は、指の腹でこねるようにくりつと弄ぶ。

束は眉を寄せて口を大きく開けて、胸を愛撫されただけで絶頂した。

「流石淫乱ウサギ。胸だけで絶頂したか」

「は、はあ……気持ちいいから仕方ないじゃん。大体束さん、ここまで感度は良くなかったし」

顔を真っ赤にしてクロウから視線をずらす束。

小さなころから余すことなく開発されたその身体は、クロウからの行為はほとんど快楽を得てしまう。

「私はそんなお前が好きだぞ」

「んっ……」

顔を背ける束の頭を掴み、自分の方を向けさせる。

そして無防備な唇に吸い付く。

それだけで束の目はトロンと蕩け、なんでも言うことを聞いてしまう奴隷と化す。

「やはり束の胸は良いな。柔らかくて張りがあって」

「あんっ♪」

いきり立った巨大な逸物を、Fカップの巨乳に押し付ける。

ぐにゅっつと乳肉の柔らかさが伝わり、それだけで射精できてしまう。

「うわぁ……クロくんの、凄く熱いよ……」

「束が相手だからな」

男根を掴んで乳首にこすりつけたり、乳肉を撫でたりする。

乳首は乳肉とまた違った感触で、クロウを愉ませる。

乳肉はプリプリの肌で、ぷにゅぷにゅと男根を優しく刺激し、乳首は少し固く、ぐにゅにと強く愛撫してくる。

「下も淫乱だ。準備万端だな」

「んひゃあっ!?!」

乳房に男根を押し付けながら、腕を下腹部に持って行く。

黒いショーツの上から触ったというのに、指に愛液が付着するほどぐつちよりと濡れていた。

「ああんっ！クロくん、えつちだよおっ」

下を指で弄りながら、男根で乳房を叩いたりして遊ぶ。

固く熱い逸物で、桃色の綺麗な乳首をぺしぺしと叩く。

「んあああああっ!!」

ぐつしよりと濡れて湿ったショーツを横にずらして、直に秘部を愛撫する。

濡れそぼった秘裂を開き、真っ赤なそこを指でなぞる。

束はむつちりと肉付きの良い脚をバタバタと暴れさせて、せわしない。

「乳首を固いな」

「ひゃんっ!?!」

固く勃起した乳首を、不意打ち気味にキュツと摘まむ。

束は食いしばった口の端からよだれをたらし、身体をぶるぶると震えさせる。

「んんんんんっ!!」

指を二本、膣内に挿入する。

太くてごつい指をいきなり二本入れられても大丈夫なほど、愛液で濡れていた。

膣内は入ってきた指にねっとり絡みつく。

「あつ！あはつ！やあああああつ！！」

膣内に挿入した指を、上下左右、縦横無尽に動かしまくる。

ぬちちやぬちちやと愛液がかき回される淫靡な水音が発生する。

飛び出してきた愛液が、クロウの掌を濡らす。

「よし、挿入れるぞ」

「あつ！あんつ！ああんつ！！」

長大な男根を、たっぷり開発された膣内に突き入れる。

愛液で十分に濡らされていた陰部は、あつさりと巨大な逸物を受け入れた。

束は体を大きく震わせ、豊かな乳房をぶるんと上下させる。

「はあああ……やっぱりクロくんの、大きい……」

束は快感からくる涙を流しながら、自分の身体に埋まっているそれを感じる。

強い圧迫感を感じるが、それ以上に幸福感を感じていた。

「んくっ、やっ、んあつ、はひっ！」

緩やかに腰を振り始める。

ぬちぬちと粘っこい水音がする。

膣内は肉の層が分厚く、男根をねっとり愛撫してくれる。

「うくっ！んっ！うっ、んっ！はあっ！ああっ！！」

束を横に寝かせ、脚を持って腰を振る。

むっちりとした肉が付いていて、汗でしつとりと濡れている太ももは、非常にさわり心地が良かった。

大きな胸はだらしなく崩れることなく、ぶるんぶるんと柔らかそうに揺れている。

抱えていた脚を下ろすと、四つん這いの形に変えさせる。

そして後ろから腰を突き立てる。

束は激しく上下する乳房が邪魔だったのか、腕で支えようとしますが、Fカップの豊かな乳房はそれだけで抑え切れるものではなく、努力空しく揺れていた。

「やあっ！はああっ！ああっ！あうっ！はうっ！！」

キュツと括れた腰を掴んで、腰を振りやすくする。

束は力なく上半身をベッドに押し付ける。

豊かな乳房は形を変え、視覚で愉しませる。

膣壁が精液を求めて、きゆうきゆうと締め付けてくる。

「あんっ！あんっ！あんっ！あぁ……喉渴いてきたあ……！あんっ！」

「このまま冷蔵庫に連れて行ってやろうか？」

「んっ！あっ！うーん……それもいいけど、今はこれでいいかなっ」

そう言つて束は身体を回転させてクロウと向き合いニヤニヤと笑いながら、彼に顔を近づけるように言う。

そして言う通りに顔を近づけてきたクロウの唇に吸い付いた。

舌を口内に侵入させ、彼の唾液を奪い取つていく。

十分満足したら、今度は快感を得るために舌を絡め取つて舐めあう。

しばらくそうした後口を離し、ゴクリと唾液を飲み込む。

「うーん、美味しいっ。御馳走様、クロくん！」

「私が、喉が渴いてしまふではないか」

舌をペロリと出して、満面の笑顔を浮かべる束。

まるで極上の酒を飲んだように、うっとりとした顔を見せている。

「お仕置きだな」

「はひっ！んはっ！はうっ！んひいっ！乳首はあっ!!」

男根のピストン速度を速くする。

ズチユズチユと卑猥な音が部屋中に響く。

乳首をキュツと強めに潰してやれば、あられもない嬌声を上げた。

「んっ！くっ！ああんっ！ふあああああっ!!」

プルツと柔らかそうな唇に、自身の唇を押し付ける。



ちゅっちゅっつと舌を絡め合う。

クロウの手には余るほどの乳房を鷲掴み、卑猥に形をゆがめさせる。

腰を打ちつけるたびに愛液が飛び散り、ぱちゅっぱちゅっつと肉がはじける音がする。

「はああ……気持ちいい……」

「そうか、もつと気持ちよくなってもいいぞ」

「ああんっ!!」

心底幸せそうな笑顔を間近で見せられ、クロウは胸がキュンキュンする。

これが日本の萌え文化。

色々たぎったクロウは、少し大きくなった男根を、上から体重をかけるようにして押し込んだ。

「あつ、すごっ! 激しいっ! やっ! んひいっ!!」

肉厚のある尻を掴み、腰を激しく突き入れる。

パンツパンツと肉がぶつかり合う軽快な音が響く。

むき出しの乳首が、クロウが来ているワイシャツにこすれて快感を助長させる。

ズリユズリユと少し痛いくらい擦られているが、今の束は痛みよりも快感の方が強かった。

「ふあっ! あっ! あっ! あっ! あっ! あっ!!」

肉感的な太ももを掴んで腰を振りたくる。

ぐにっと感触を愉しむことも忘れない。

束の膣内は男根を、射精を促すように締め付けてきていた。

これは若い少女たちが出せるような動きではなく、大人の、しかも開発されつくした牝にしかできない動きであった。

押し込んでから男根を引き抜く際、名残惜しそうに吸い付いてくる。

「んあっ！あっ！あっ！！」

ズズズツと巨大な逸物が秘裂の形を歪めながら膣内に侵入していく。

束の目は焦点が合っていないく、大きく口を開けて嬌声を上げているだけだった。

Fカップの豊かな乳房は、仰向けなのにもかかわらず、ツンと上を向いてぶるぶると震えていた。

そろそろ射精感が高まってきたクロウは、自分が動きやすい後背位バックの体位に変える。

「ああっ！あっ！ぐりぐりきてるうっ！！」

むっちりとした肉の詰まった尻に腰が当たり、パンパンと軽快な音が鳴る。

豊かな尻肉を揉みほぐしながら、射精の瞬間を待つ。

束も絶頂がもう間近のようで、蕩けた顔に必死に力を入れる。

しかし肉感的な身体はぶるぶると震え、すでに限界のようだ。

「あつ！あつ！クロくん！大好きだよつ！あああつ！イクうううつ!!」  
ビクビクと激しく震える束。

重力で下を向いている豊満な乳房が、ブルンブルンと上下する。

大きく口を開けて、そこから舌をだらしなく垂らす。

男根からほとぼしる白濁液は、とぶとぶと膣内を満たしていった。



「ふふー、クロくん、好きだよ」

あれから数回身体をぶつけ合った二人は仲良く風呂に入り、今はベッドの上でいちや  
ついている。

浴室でまた何回戦かあったのは余談である。

ここまで何度も性交ができるのは、二人の性欲が一際強いからであろう。

「そうか、私も好きだぞ」

「えへへー」

束の頭を撫でてそう言うと、彼女は嬉しそうに笑って身体を密着させてくる。

お互い裸なので、感触が直に感じられる。

柔らかくて暖かい感触に、クロウは悦ぶ。

「そう言えばクロくん。そろそろ行事があるんだってね」

「何だ？また何かするつもりなのか？」

「うふふー、ヒ・ミ・ツ♪」

クロウの上に乗りがり、目の前でちゅちゅと指を振る。

クロウは腹の部分に厚い尻肉の感触と、やわやわと腹をくすぐる陰毛の感触が感じられて、内心ニツコリする。

束が何をしようが、クロウとしては楽しめたらそれでいいのである。

少し目の前の兎の遊びは過激だが、クロウが気に入っている少女たちはそんな簡単にはやられない実力者なので問題ない。

他の生徒たち？気に入れば守るかもしれない。

「そうか、では教えてもらうまで攻め立てようか」

「あんっ♪簡単に教えたりなんかしないよっ」

下から見上げれば壯観なほど大きい乳房を、下から揉みあげる。

そうすると束はあれほど動いたにもかかわらずに悦び、自分の手でさらに胸に押し付けてきた。

その後本当にクロウは束が口を割るまで、ひたすら腰を振りたくった。

最初は行為を愉しんでいた彼女だったが、次第に余裕がなくなつてクロウに話してしまふ。

しかしそれでも行為は続けられ、結局束がアへ顔をさらして気絶するまで許されることはなかつたのであつた。

## 機体

専用機限定タッグマッチが目前に迫った今、クロウと簪は最後の調整ということで、I S 学園第二整備室にいた。

ここには専用機持ちだけでなく、整備の技術を高めるため、二・三年生の整備科の生徒も大勢いて訓練機を整備していた。

その整備されたI Sに乗るためにいる生徒は当然ながらI S スーツを着用していて、身体の線がはつきりと出ており、瑞々しい女子高生の肢体を眺められてクロウは楽しげだ。

「クロウ……目が厭らしい……」

そんな彼に横からジト目を送る簪。

彼女もISスーツを着用しており、姉に比べればるかに劣るが、確かな胸の膨らみや腰の括れ、張りの良さそうな尻を見てクロウは頷く。

やはりISスーツを開発した束は素晴らしい、と。

「旋回や移動の速度を上げたいので、ブースターの出力を上げてください」

「うーん……機体制御の難しさもあるし、安全性も落ちるからおすすめてはできないけど……まあオルコットさんならいけるかな？」

「ええ、お願いしますわ」

扇情的な光景の辺りを見渡していると、よく見知った顔を見つける。

彼女はその豊満な肢体を蒼いISスーツで守っており、整備科の生徒と何やら相談をしているようだった。

豊かな胸に細い腰、とくに肉ののった尻にむっちりとした太もも。

彼女の写真集がイギリスでバカ売れたのも理解できるといふものだ。

「あら、クロウさん」

向こうもじっくりと見つめてくる視線を感じて、クロウを認める。

少し整備科の生徒と話をすると、ニツコリと笑いながらクロウに近づいてきた。

「お前も整備か？セシリア」

「ええ、タッグマッチは負けられませんから」

彼女、セシリア・オルコットはクスクスと上品に微笑む。

それは同性をも魅了するほど美しい笑みで、実際に何人かの生徒が頬を赤らめていた。

「あら、こちらの方は……」

「ああ、私のパートナーだ」

簪の存在に気付いたセシリアが聞くと、クロウがすかさず答える。

『パートナー』という言葉に少し嫉妬を覚えるも、セシリアはそれを我慢して飲み込む。

「わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

「更識 簪……。日本の代表候補生……」

二人はどちらともなく手を出し合い、握り合う。

この単純な行為だけで、二人は理解した。

『あ、こいつもクロウの女だ』……と。

「ではわたくしは失礼しますわ。まだ機体を調整したいので」

「そうか、楽しい試合にしよう」

「……クロウさんが楽しめる試合は怖いですわ」

悪戯気に笑いながら、セシリアは離れて行った。

しかし彼女の実力も非常に高く、クロウを楽しませるには充分なものだった。



相手が強者であれ弱者であれ戦闘は好むクロウだが、やはりセシリアほどの実力者が相手となれば、とても楽しみになる。

「さて、ではこちらも調整に入ろうか」

「……うん。打鉄式……」

左手中指にはめられたクリスタルの指輪が光る。

何故その指にはめられているのかは察してほしい。

簪や本音、協力してくれた仲間の努力の結晶が現れる。

「ほう、素晴らしいな。将来はI-S制作の大企業でも就職できるのではないか？」

「……私だけの力じゃないから」

そう謙遜する簪だが、自分の大好きな異性にして目標にもしている男に褒められて、思わず笑みがこぼれる。

「武装はどうなっている？」

「遠距離戦闘用の荷電粒子砲……。近接戦闘用の薙刀……。シールドパッケージ……。最後に切り札……」

「ふむ」

空間投影ディスプレイを展開して、クロウに見せながら説明する簪。

しかしながらクロウはよく理解していなかった。何が『ふむ』なのだろうか。

まあ彼がISについて学び出したのは半年ちよつと前だし、メンテナンスもたまに現れる束に任せていたのだから仕方がない。

学ぼうとしないのは愚かであるが。

だが束が作った専用機といつても、流石にたまにしかメンテナンスをしないというのはマズイ。

そこでいつでも機体を見てもらっていたのが……。

「お〜い！ クー、かんちゃ〜ん！」

手を振りながらトテトテと走り寄ってくる少女。

眠そうに目を細め、ゆっくりと近づいてくる彼女は布仏 本音。簪の専用メイドである。

クロウが束に見せられない日に、時々機体を見てもらっていた少女である。

「……どうしたの？ 本音……」

「いや〜、かんちゃんがIS動かすって聞いて〜、いてもたってもいられなくなつたのですよ〜」

てひひつと笑いながらスパナを持った手を振りまわす。危ない。

簪は自分の従者が手伝いに来てくれて嬉しく思う。

自分は口下手だが、後でちゃんとお礼を言わないといけないと考えた。

「ん〜……かんちゃん、ここはこうした方がいいかも〜」

「ん……わかった……」

二人してディスプレイを覗き込み、画面内をいじくる。

クロウは完全に戦力外となっている。

暇なのでまたISスーツを着用したうら若き乙女たちの肢体を眺める。

「こら〜、クー！女の子をジロジロ見ちゃダメだよ〜」

「む、そうか。じゃあお前を見ることにしよう」

「それならお〜け〜」

「……いいの?」

本音はISを装着しないので普段着でも構わないのだが、何故かISスーツを着用していた。

もしかしてこういった状況になることを見越していたのかもしれない。

未だ成長途上の本音の身体は、凹凸がはつきりした女らしい身体である。

簪がそれを見て舌打ちをしたのは言うまでもない。

「うい〜、これで完成〜」

最後に本音がディスプレイに指を押し付けると、ぶは〜と息を吐いた。

どうやら調整が終わったらしい。

「ありがとう……本音……」

「私は専属メイドですから」

うつすらと頬を染めながら礼を言う簪に、本音はニコニコと笑う。

二人は性格こそ大きく違うが、それがちょうどよく合わさって良い主従となっている。

「じゃあ後は飛行テストだけだね」

「うん……クロウ、一緒に来てくれる……？」

「勿論だ」

簪の申し出にクロウは快く引き受けたのだった。



飛行テストを無事終えた簪は、クロウと別れてシャワーを浴びていた。

身体に付着していた汗を流してくれる。

上から流れてくる水滴は、簪の瑞々しい肢体の輪郭に沿って流れ落ちる。

浮き出ているのが艶めかしい鎖骨。

年相応に膨らんだ乳房。周りの者が大きいモノが多いため、ちよつとしたコンプレックスになっている。

更識家の人間らしく鍛えられたお腹は、押すとしなやかさが感じられる。

小さく細長い臍に水滴が溜まる。

うつすらと生えている茂みに守られている秘部は、何度クロウを受け止めたかわからない。

鍛えられて高い運動能力を誇る太ももを伝い、地面に水滴が落ちる。

「(今日のテストも問題なかった……。皆のおかげ……)」

簪はこみあげてくる喜びを我慢することができず、小さく笑みを浮かべる。

それぞれ国家の優秀な科学者や技術者たちが何十人も集まって、やつと作ることができるIS。

それを学生の身で、一から作り上げた喜びは大きなものだった。

しかしいくら簪が優秀といえども、一人で完成させることはできなかつただろう。

本音や整備科の先輩たちに手伝ってもらってできたことを、彼女はちゃんと理解して

いた。

「(まだ油断しちゃだめ……。クロウと一緒に優勝することがゴール……)」  
クロウにお気に入りの女性が何人もいることは知っている。

この大会で優勝し、他の者より何歩かリードすることが必要だ。

「(……もうちよつと大きかったらな)」

簪は自分の胸を揉んでみる。

張りのある乳房が指を押し返してくる。

中々大きくなる兆しを見せない胸に、落胆を隠せない。

自分に身近な楯無や本音は、高校生離れた豊満な肉体を持っている。

とくに本音は未だにぐんぐんと成長していると聞く。

「(本音の胸をもぎ取って自分のもののできたら……)」

ハイライトのない目でじつと胸を見つめる。

この時本音は言いようのない悪寒に襲われたらしい。

のほほんとしている彼女だが、危険察知に関して群を抜いて敏感なようである。



「はーい、今日はこれでおしまい」

「ありがとうございますました！」

とあるアリーナで元気な声が響く。

ここではタツグマツチに出場する一夏と箒が、強すぎて出場できない楯無から指南を受けていた。

いつもは一夏だけなのだが、どうせならと箒も訓練に参加しているのであった。

「いやー、二人ともうまくなつたわね。見違えるわよ」

「本当ですか!？」

「うん、本当よ」

ただ楯無やクロウは当然、代表候補生組にも勝つのは難しいであろうが。

ただ二人とも専用機を持たされて一年も経っていないのに随分と操縦がうまくなっているのは事実である。

「さて、じゃあ着替えて一緒にご飯を食べましょう? 一夏くんは先に食べちゃっても

「いいわよ」

「え、何ですか?」

「何でって……私たちシャワーも浴びないといけないし、時間がかかるじゃない。あ、もしかして一緒に浴びようとしていたのかな?」

楯無はニヤニヤと意地悪そうに笑って、一夏の顔を覗き込む。

魅力的な身体の輪郭がはつきりと出てしまうISスーツを着ているので、一夏は顔を赤くする。

それに近くにいるだけで、ふわりと汗と女の匂いが混ざり合った何とも言えない匂いを嗅ぎ取ってしまう。

思春期真っ只中の一夏には、あまりにも厳しい状況であった。

「一夏……貴様……」

「わ、わあああつ! 違うって! 先に行きますね!」

ギリリと睨みつけてくる箒から猛スピードで逃げる一夏。

箒は納得いかない表情でそれを睨んでいた。

「さ、箒ちゃん。私たちも早く行きましょう」

「……はこ」





「はあ……やっぱり汗が流れていく感覚っていいわねえ……」

「そ、そうですね……」

熱いシャワーを浴びながら会話をする楯無と箒。

箒は他人に身体を見られる可能性がある更衣室のシャワーを使うのは嫌だったのだが、一夏を待たしていることもあるし、今の時間にシャワーを使う生徒はほとんどいないので、楯無の誘いに応じてシャワーを浴びていた。

「ねえ、箒ちゃん」

「はい？」

「箒ちゃんってやっぱり一夏くんのが好きなの？」

「ブハッ!!」

いきなり予想外の質問を投げかけられ、箒は思わず咽てしまう。

そんな彼女の姿を見て、楯無は悪戯好きな本性を露わにし、『あらあら』とニヤニヤしている。

「まあ聞くまでもないことだったわね」

「なっ、な……なっ!？」

「進展とかないのかしら?」

「何とか言い返そうとする筈だが、羞恥から上手く口が回らない。

まるで鼠をいたぶる猫のような顔をする楯無。

相変わらず他人をからかうのが好きな女である。

「わ、私のことはいいでしよう!楯無さんはどうなんですか!？」

「え、私?私は幸せよ」

「で、でもミキストリは他にも女を……」

筈も彼が色々な女に手を出していることは知っている。

だからこそあまり好ましく思っていない。

一夫一妻制が普通の国の者からすれば、他の異性に手を出すことは浮気なのだから、それも当然である。

「うーん……まあ欲を言えば私だけを見てほしいわ。でも私だけが幸せになって、他の女の子たちが不幸になるっていうのは嫌じゃない?」

「……………」

箒は楯無の言わんとしていることは理解した。

そもそもクロウのようにモテまくっていることが珍しい。

……まあ箒が好きな一夏も、今クロウ以上に恋慕の感情を寄せられているのだが。

「それに今私は幸せ。だから別にいいんじゃないかな」

「……そんなものですか」

「そんなものよ。あなたも一夏くんが他の女の子とお付き合いしても、諦められないでしょう?」

その通りだった。

箒はもし一夏が他の異性と付き合うことになったとしても、まだ彼に想いを寄せ続けるだろう。

それほど彼女の愛情は深かった。

「まあそんな話はどうでもいいのよ。箒ちゃんは一夏くんを籠絡させなきゃいけないんだから」

「ろ、籠絡……!?!」

「うん。この大きなおっぱいを使ってね!」

「うひゃあっ!?!」

いつの間にか同じシャワー室に侵入していた楯無に、後ろから胸を揉みあげられる。対暗部用暗部当主の能力を、無駄なところで発揮するものだ。

「おお……これは凄い……」

「は、離してください！あんっ」

モミモミと手で巨乳を弄ぶ楯無。

箒の胸はずつしりと量感があり、張り柔らかさも兼ね備えていた。

楯無の揉み方が巧みなこともあるが、感度も良い。

まさにパーフェクトなおっぱいだっただ。

「これを武器にしたら凄いものになるわよ、箒ちゃん」

「……っ！いい、いやですっ！んっ！」

きやあきやあと楽しげな——箒は全く楽しくなかったが——声を上げながら、二

人はシャワーを浴び続けたのだった。

一夏が律儀に待っていたことが仇となり、腹を空かせていたのは余談である。



「お帰りなさいい」

「お、お帰り……」

「……………」

たまたま自室に帰る途中にあつた鈴を撫でまわして帰宅すると、部屋に何故か楯無と簪の二人がいた。

楯無はまったく遠慮することなく、ベッドに寝転がってファッション雑誌を読んでい

る。簪はそんな姉とは反対に、地べたに正座して申し訳なさそうにしている。

「どうした？」

「クロウに慰めてもらおうと思つて」

そう言うのと楯無はファッション雑誌を投げ捨て、とととととクロウに近づく。

彼女は普段の制服ではなく、下着にワイシャツだけを身に着けていた。

そのワイシャツもクロウのものらしく、随分大きい。

どうやらブラはつけていないらしく、深い谷間がちらりとうかがえる。

「うえええっ！また試合に出られないよおっ！」

「そうかそうか」

ガシツとクロウに抱き着いて泣きマネをする楯無。

クロウはそんな彼女の肩を抱いて、優しく慰める。

決して腰に当たる弾力がある双丘が気持ちいいからというわけではない。

楯無もニヤリと、某新世界の神のように笑っているが……。

「簪はどうしたのだ？」

「わ、私はクロウにこれを……」

そう言つて彼女が差し出したのは、大切そうに綺麗に包装されたカップケーキだった。

クロウが好む抹茶のものである。

「その……機体を作るのに協力してくれたお礼に……」

「そうか、ありがたい。後で一緒に食べよう」

「う、うん……！」

自分が一生懸命に作つたお菓子を食べてくれ、しかも自分と一緒にとなると彼女の幸せ度は非常に高くなる。

えへへと頬を赤らめて喜ぶ妹の姿を見て、姉としては微笑ましさを、女としては軽い

嫉妬を覚える。

「ねえ、クロウ。私を慰めてくれないの……？」

「お、お姉ちゃん……!?!」

楯無はワイシャツのボタンをプチプチと外していき、するつと脱ぎ捨てた。

豊満な乳房がワイシャツから解放され、たゆんと柔らかかそうに、かつ重たそうに揺れる。

乳首がツンと上を向いた形の良い胸は、クロウを誘惑する。

簪は姉の蛮行に驚きを隠せない。

「な、何してるの……お姉ちゃん……!」

「いくら簪ちゃんでも、クロウは譲らないわよ」

ニコツと簪に笑いかけ、クロウのズボンをかちやかちやと弄りだす楯無。

勿論クロウは抵抗しない。望むところである。

楯無は手慣れているように、すぐにベルトを外してズボンをズリ下げる。

「(お、大きい……!)」

パンツもズリ下ろされると、すでに大きくなっていた逸物がびよんと飛び出してくる。

簪は小さな手で目を覆うが、指の間からしつかりと観察していた。

意外と彼女はむつつりなのかもしれない。

「大きいわね、いつも思うことだけど……あむっ」

ぼーっと呆けるように男根を見つめる楯無。

巨大な逸物を褒めると、パクリと口に含んでしまう。

熱い口内と舌で、にゆるうううっつと男根を刺激する。

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ！」

顔を上下に振りたくり、口内の男根を舐めまわす。

唾液の溜まった口内はぢゅぽぢゅぽと淫らな音を立てる。

簪は隣でそれを顔を真つ赤にしながら見つめていた。

「んっ、う、ぢゅうううううっ！」

喉奥まで男根を飲み込み、一気に顔を引く。

龟头近くまでずり下がる口。

楯無の唾液が竿にねっつりと付着する。

「ふぷうっ、んふっつ、んっ、ぢゅぽっ、ぢゅぷっ、ぢゅぷっ、ふぷっ！」

また激しく頭を上下させ、男根を口内で抜きあげる。

大きな逸物は楯無の頬の内側を抉り、形を厭らしく歪ませる。

豊かな胸がむにむにと太ももに押し付けられて気持ちがいい。



荒い鼻息が陰毛をくすぐる。

「ぶあつ、はっ！ れろれろ、れるれろ」

「気持ちいいぞ、楯無」

太い男根から口を離し、舌で亀頭を舐める。

ちろちろともどかしいような快感が送られてくる。

「お、お姉ちゃん……凄い……」

簪の目の前では、淫靡な行為がどんどんと激しさを増していく。

楯無は指で亀頭を弄り、もう片方の手で陰茎の根元を持つ。

横から口をつけ、裏筋に舌を這わせる。

はっはっ熱い吐息が男根に降りかかる。

「わ、私も……」

「あつ、簪ちゃん」

すつと手を差し出してきて、ビクビクと震える男根を掴む簪。

直に触ると熱いやら固いやらビクビクしているやら、色々な感覚がある。

「そうか、では二人で胸を使ってくれ」

「……え」

「ほら、簪ちゃん。脱いで脱いで♪」

「きゃあっ!？」

せつかくの姉妹丼。二人で愛撫してもらおう。

楯無は大好きな妹と大好きな男に尽くせることが嬉しいらしく、嬉々として簪の服を脱がしにかかる。

「うむ……」

容易く上半身を裸に剥かれた簪は、Bカップの胸を男根に押し付ける。

反対側から楯無もEカップの胸を押し付ける。

むちむちとした若さゆえの張りや弾力が男根を襲う。

簪は顔を真っ赤にして恥ずかしがり、楯無はニヤニヤと楽しげに笑い、クロウは満足そうに頷いている。

「あっ……」

楯無が胸を上下に動かしたせいで、感度の良い簪は思わず声を漏らしてしまう。

鈴口から漏れ出した我慢汁が潤滑液となり、にゆるにゆると乳肉の圧迫を愉しめる。

「はっ、はっ、はあっ!」

「んっ、熱いっ!」

簪の場合は包み込めるほどの量感がないため押し付けるようになっていたが、楯無は深い谷間に男根をしっかりと埋めていた。

次第にクロウから腰を動かしだし、パンパンと軽快な肉の音が響く。固く尖った乳首同士がこすれ合い、二人の快感を押し上げていく。

「あっ！」

「んうっ！」

快感が高まっていたのはクロウも同じで、鈴口から大量の精液を吐き出す。

噴き出た精液は簪と楯無の顔と胸に付着する。

「まだ固いままね」

「(あ、熱い……)」

楯無は蕩けた表情で男根を見つめ、簪は顔に飛び散った精液に胸の鼓動を速くする。

最後とばかりにビュツと飛び出た精液が簪の顔を汚した。

「私、我慢できなくなっちゃった。クロウ、来て」

楯無は簪の上に覆いかぶさり、豊満な尻をクロウに向ける。

ぷりんと柔らかくて大きな尻を向けられ、逸物は完全復活する。

自分でショーツを横にずらし、指で秘裂をくぱつと開ける。

大きな乳房が簪の慎ましい胸に押し付けられ、むにと形を歪める。

「よし、いくぞ」

「あんっ♪」

むっちりとした肉の詰まった尻をがっしりと掴み、男根を濡れそぼった秘裂にこすり付ける。

ぬるぬると愛液で亀頭をコーティングする。

「んはあああつ!!」

そして一気に男根を膣内に突き刺した。

じつとりと濡れていた陰部は抵抗することなく、男根を奥まで飲み込む。

子宮口を押し上げられ、キュンと反応する膣。

激しい突き入れに、量感のある乳房がぶるんぶるんと上下に揺れた。

「いい締め付けだ、楯無」

「あつ、あつ、あつ、あつ!」

後ろから腕を回し、大きな胸を弄ぶ。

もみもみと乳を搾るように乳房を握ったり、押しつぶすように手で押さえつけたりする。

桃色の乳首は固く尖り、感じていることがわかる。

「あつ! あんつ! はつ! すごいっ! 気持ちいいっ! あつ! あつ! あつ! あつ!!」

ズツズツと激しくピストンすると、陰部から愛液が滲み出し、簪に向かって雫が落ちる。

バックの体位で、獣の交尾のように激しい性交を行う。

豊かな乳房は揉みしだき、肉がむっちりとのった尻は腰が強くぶつかり、パンパンと濁いた音を立てる。

「気持ちいいぞ、楯無」

「あつ！あつ！はつ！あつ！はつ！！」

鍛えられて美しく括れた腰を掴み、腰を突きだす。

楯無は力が入らなくなり、簪の上に押し掛かる。

口から舌を出して唾液を垂らし、目元を緩めて涙を流している姉の姿を見て、簪はドキリと胸を高鳴らせる。

「よし、簪も挿入れるぞ」

「んんんんんんんんつ！！」

何度も突き入っていた楯無の肉壺から男根を抜き取り、簪の膣内へ挿入する。

正常位の体位となっており、ショーツをずらして挿入していた。

Bカップの乳房が小刻みに震えている。

「ひあつ！あつ！動いちや……っ！！」

「あうつ！あえつ！あへつ！へあつ！！」

ズンズンと男根を小さな簪に激しく突き入れる。

上で四つん這いになってゐる楯無のことも忘れておらず、指を膣内に突っ込んでかき回す。

ぐちゅぐちゅぐちゅと粘っこい愛液の音が立つ。

楯無の陰部から垂れた愛液が、ぼたぼたと簪の陰部に降りかかつて混ざり合う。

「あつ、あつ………！」

「あんっ！あつ！あつ！」

クロウは膣内の感触を比べるように、男根を交互に出し入れする。

簪の陰部は処女のようにきつく、ぎちぎちと男根を締め付けてくる。

楯無の陰部はねつとりと絡んできて、時折きつく締め付けきて射精を求める。

「はっ！あつ！あつ！あつ！！」

「んあつ！あつ！やつ！あつ！！」

パン！パン！パン！パン！

膣内でかき混ぜられた愛液はずつちゅずつちゅと淫靡な音を出す。

楯無が自身の身体を支えきれずに倒れこみ、乳房同士がつぶし合う。

汗に濡れた乳房がむちむちと形を歪ませ合う。

「そろそろ射精すぞ。どちらが欲しい？」

「んはっ！あつ！イクっ！私！私に射精して！」

「ああっ！すごいっ！くるっ！くるっ！お姉ちゃんじゃなくてっ！私に射精<sup>だ</sup>してえっ  
!!」

いつそう腰を激しく振りたくり、男根で膣壁を抉る。

二人はクロウの精液を求めて、精一杯男根を締め付ける。

乳房を押し付け合い、とくに楯無の豊かな胸がむぎゆううつと形を変える。

「あっ！あっ！あっ！んんんんんっ!!」

「あああああああっ!!」

結局最後は男根を抜き取り、二人の全身にぶっかけた。

同時に楯無と簪も絶頂を迎え、びくびくと可愛らしく身体を痙攣させている。

二人とも荒くなった息を整える。

二人の顔はとくに精液でドロドロになっていた。



その後は仲良く簪が作ってきたカップケーキを一つずつ食べて、穏やかな時を過ごしたのであった。

## またまた襲撃

とうとう専用機限定タッグマッチが開催される当日になった。

全校生徒は一つの場所に集められ、楯無の開会のあいさつを聞かされている。

クロウはというと、一応生徒会のメンバーであるので、他の生徒会メンバーと共に前に出て整列している。

「ふわ〜……」

クロウの隣に整列していた本音は、だらしなく大きな欠伸をする。

姉の虚とIS学園教頭はキラリと目を光らせる。

このままだと、後で怒られるのは確実だろう。

「眠そうだな、本音」



「ん〜……クーが夜遅くまでするから〜……」

クロウはそんな二人の睨みを気にするそぶりも見せず、イチャイチャとし出す。

本音は目を擦りながらとんでもないことを口走ったが、それを咎める虚や教頭が遠くにいたため聞こえなかつたらしく、何とか無事のようなのである。

……ちなみに近くにいた一夏は顔を赤らめていた。何を妄想しているのだろうか。

「つていうか、何でクーは眠たくならないの〜？」

「体力があるからな」

精力も凄まじいものである。

最後の方など、本音はすでに失神していたのに腰を振りたくつていたのである。

まあなんだかんだいって本音も悦んでいるので、問題ないのだろう。

「眠いのであれば、少し眠るか？」

「う〜ん……じゃあお言葉に甘えて〜」

そう言うくと本音はほんの少しクロウに身体をもたれさせ、寝息をたてはじめた。

立ちながら眠ることができるとは、器用なことをするものだ。

「この大会に参加しない一般生徒の皆さんも、専用機持ちたちの操縦が見れる貴重な機会です。彼女たちの技術を盗むつもりで、しっかりと見ていただきたいと思えます」

本音がすっかり夢の世界に旅立っているころ、舞台の上では楯無が挨拶を続けてい

た。

確かに専用機を持つているような面々は、それぞれ各国の最高戦力なので、一般に露出することはあってもISを使っているところはほとんど公にはさらされない。

楯無の言う通り、確かに貴重な機会である。

「といつてもただ見ているだけじゃ、つまらなく思つてしまう子もいるでしょう。というわけで、『第一回キキキキ！優勝タッグ予想応援・食券争奪戦』を実施したいと思います！」

「そんなことしていいの!?!」

楯無が発表した企画に大歓声を上げる生徒たち。

そんな中一夏が驚きの声を上げていた。

確かに学園の教師陣や生真面目な虚が、このような賭博を許すとは思えないが……。

「ふっふっふ……織斑副会長。そのことについて抜かりはないわ  
「え……」

一夏がどういふことかと辺りを見回す。

すると目線があつた教師や虚はスツと目を逸らした。

「(ば、買収されている……!?!)」

絶対に許しそうにない千冬や真耶でさえ、目を逸らしていた。

この二人はクロウの上半身裸写真で買収。

教頭や教師陣は一夏の上半身裸写真——勿論盗撮。提供は新聞部部长——で買収。

虚は一夏の友人である五反田 弾の普通の写真で買収。

流石対暗部用暗部当主、汚い。

「さて、じゃあ大会の対戦表を発表するわ。どうぞー！」

バツと扇子を開くと、同時に大型空中投影ディスプレイが現れる。

そこには今日の大会に出場する、楯無を除いた専用機持ちたちの名前が書かれてあった。

そして肝心のクロウと簪の対戦相手は……。

「ふむ……よろしくな、一夏」

／＼（　〇　）／＼

◆  
「ミキストリくん！ちよつと待って！」

「む……」

ISスーツに着替えるために更衣室に向かっていたクロウを呼び止める薫子。

すでに出場者たちはそれぞれペアで着替えているので、急がなければならない。

パートナーである簪も待っているだろう。

「何か用か？」

「うん、出場者にインタビューして回っているんだけど、ミキストリくんにも協力してほしいの」

「ふむ……手短に頼む」

クロウは少し思案するが、結局受けることにした。

出場者全員に回っているのに自分だけインタビューを受けなかったらマズイのではないかと考えた結果である。

「勿論！じゃあまず先にこれを見てくれる？」

「これは……」

薫子が差し出した紙は、今回のタッグマッチのオッズだった。

先ほど楯無が言っていた賭博である。

もう情報を集めているとは、流石新聞部部長である。

「ほう……トップは知らない者だな」

「ああ、二人は二年生と三年生のタッグよ。上級生の票が集まったみたいね」

上級生タッグのオッズは1，5倍。

その下にシャルロットとラウラのタッグがあり、2，1倍。

鈴とセシリアのタッグが2，8倍。

一夏と箒のタッグが4，7倍。

最後にクロウと簪のタッグがあり、6，7倍となっていた。

「ふむ……我々がドベか……」

「ミキストリくんと更識さんは情報が少ないのよ。その点、他の出場者たちは国家代表候補生だし、織斑くんと篠ノ之さんはそれぞれ姉が凄いて有名だからね」

確かに簪も日本の代表候補生ではあるが、実戦記録がほとんどないので仕方がないだろう。

クロウだって半年ちよつと前にいきなり出てきた男性操縦者だ。あまり評価されていない。

「さ、それも踏まえてコメントをお願いします！」

「楽しいタツグマツチにしよう」

「……君が言うのと不安に感じるのはなぜだろう」

たらりと冷や汗を垂らして苦笑いする薫子。

その後写真を一枚撮られ、別れようとしたその時だった。

「きやつ!?!な、何!?!」

大きな爆発音がしたと思うと、激しい揺れが起きる。

思わず倒れそうになった薫子を、クロウが遅しい身体でがっしりと支える。

「あ、ありがとう」

「ああ、気にするな」

クロウは腕の中にある色々柔らかい感触と甘い匂いを存分に楽しんだのだった。ちよいちよい手が臀部や胸に当たったのは、仕方のないことだった。



クロウと薫子が異変に気付いたところ、I S学園の教師陣はすでに状況の確認を行っていた。

世界各国から優秀な人材が集められているだけはある。

「山田先生、状況は？」

「はい！外部から襲撃を受けました。おそらく以前襲撃してきた無人機の発展型だと思われます。数は五機。それぞれ分かれて生徒たちを襲っています」

真耶は手元の資料を見ながらすらすと答える。

その姿はいつも生徒たちに親しまれてからかわれているドジっ娘教師とは思えないほどだった。

「……また襲撃か」

「また……ですな」

はあ……と頭が痛そうにため息を吐く千冬。

それを見て真耶は苦笑いしかできない。

本来であれば学園の警備担当者に怒鳴りつけてやりたいところだが、千冬が予想している今回の首謀者から守れとは到底言えなかつた。

「ただ襲われている生徒が全員専用機持ちたちですので、それぞれすでに応戦していま

す」

「そうか……」

襲われているのが専用機持ちと聞いて、千冬は少し安心する。

各々卓越した操縦技術と戦闘力を保持している彼女たちなら、簡単にやられることはない。

これが一般生徒を狙ったものだったら、目も開けられない。

「セクシオンはやはりロックされているのか？」

「はい、それも最高レベルです」

「仕方ない……戦闘が可能な教員はISを装着して待機。いつでも突入できるように準備させておけ。ロック解除に必要な教員は全力で解除にあたり、残りの教員は生徒たちを安全な場所に誘導しろ」

「はいー」

真耶は千冬の指示を受けると、近くにいた教員たちに声をかけて自分も行動を起す。

彼女も高い戦闘力を持っている優秀なIS操縦者。ISを装着するために格納庫に向かった。

「あいつらは中々手ごわいぞ、束」



残された千冬は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべてそう呟いた。



「はああああっ!!」

鈴は双天牙月を両手で持ち、全体重を乗せて敵機・ゴーレムIIIIに振り下ろす。しかしゴーレムIIIIは右腕の巨大ブレードで難なくそれを受け切る。

「ちっ!」

ギリギリと鏝迫り合いになる。

無人機で完全に人の力を借りていないゴーレムIIIIと互角の力を示している

『シエンロン甲龍』も中々のものである。

「鈴さん! 避けてくださいいね!」

「ちよ……っ!」

鈴の背後からセシリアがビームを放つ。

一直線に向かうそれを鈴は巧みに避ける。

鈴がギリギリまで鏝迫り合いを行っていたため、ISを装着しているとはいえ、反応をできない最高の攻撃だった。

しかしゴーレムIIIIは無人機である。

人間離れた機動を行い、セシリアの攻撃を避けてみせた。

「ああ、もう！面倒くさいですわね！」

「本当にね！前のより強くなっているんじゃない？」

鈴はそう言いながら衝撃砲・龍咆を発射する。

砲弾や砲身が一切見えないそれは驚異的な武器なのだが、ゴーレムIIIIは強力なエネルギーシールドを展開。

龍咆を完全に防いでみせた。

「うわ……あれぶっ放してくるの？」

「……どうやらそのようですわね」

ゴーレムIIIIは、今度は自分の番だと、左の掌を二人に向ける。

そこには超高密度圧縮熱線を放つことのできる砲口が四つ存在していた。

今にも放たんと、熱線のチャージが行われている。

「火力なら負けないわよ！」

「……こんな狭い空間で爆発しても大丈夫でしょうか？」

「……さあ？」

龍咆の出力を全開にしてやる気満々の鈴に、冷静にセシリアが問いかける。

二人とも冷や汗が流れているが、最早時間はなかった。

「この戦いが終わったらわたくし、クロウさんと結婚しますわ」

「はあ!? ちよつとその話待ちなさいよ！」

大きな大きな死亡フラグを立たせながら、セシリアは『ブルー・テイアーズ』<sup>著</sup>主力武装であるスターライトmkIIIをゴーレムIIIに向ける。

日本の文化に精通している鈴は死亡フラグだと分かっていたが、それよりもその内容の方に腹を立てている。

「さあ！ 勝負ですわ！」

「だから話聞けよ！」

「――」

次の瞬間、ゴーレムIIIから放たれた超高密度の熱線と、巨大な蒼い光線、最大出力の衝撃砲がぶつかり合い、大爆発を起こした。



「また襲撃か……」

「みたいだね……」

正面から睨んでくるゴーレムIIIIに嘆息するラウラに、シャルロットは苦笑いで応える。

ゴーレムIIIIからは無人機らしく、敵意も殺意も飛んできていない。

しかし明らかに自分たちを倒そうとしていることは理解できた。

「先手必勝だな」

ラウラは四つのワイヤーブレードをゴーレムIIIIに飛ばす。

四方から襲い掛かるように操縦し、敵が防御できないように工夫する。

しかしゴーレムIIIIは右腕のブレードで前から迫りくる二つを叩き落とし、背後から迫っていた二つをエネルギーシールドで防いでみせた。

「む？エネルギー弾だけを防ぐのではないのか？」

「そうみたいだね。実弾も届いてないみたい」

シャルロットは二丁のサブマシンガンをお得意の『高速切替』ラビッド・スイッチで呼び出し、ゴーレム  
IIIに連射している。

だがすぐさま前方に回ったエネルギーシールドがそれを防いでいた。

ゴーレムIIIはシールドに守られながら、手のひらの砲口を二人に向けようとする。

「やいせんで」

ゴーレムIIIの身体がピシリと動かなくなる。ラウラの『AIC』慣性停止結界だ。

動かなくなり攻撃される心配のなくなったシャルロットは、サブマシンガンから火力のある連装ショットガンを呼び出す。

「これは効くかな？」

連続で引き金を引く。

やはりシールドに防がれてしまうが、少しずつ銃弾がシールドを貫くことが多くなる。

ゴーレムIIIのスリムな装甲が傷つけられていく。

「む……抵抗するか」

「ゴーレムIIIIはただ攻撃を受けることから逃れるべく、『A I C』を無理やり解除する。」

そして手のひらの砲口を二人に向け、高密度熱線を撃ち出した。

「シャルロット!」

「うん!」

ラウラの呼びかけに応えたシャルロットは彼女の前に躍り出て、呼び出したガードン・カーテンで熱線を受け止める。

シールドに防がれた熱線が、傘のように開いて分散する。

その隙にラウラは横から飛び出し、『瞬<sup>イグニッション・ブースト</sup>時加速』でゴーレムIIIIに一気に迫った。

手首から伸びただプラズマ手刀でゴーレムIIIIを切り裂き、今度は超近距離で『A I C』を発動させる。

「今度は逃がさんぞ」

ニヤリと不敵に笑う黒ウサギ。

いくら人外じみた力を持つゴーレムIIIIといえども、ごく至近距離で強力な縛りを受けては逃れることはできない。

「トリはくれてやる、シャルロット」

「えへへ、ありがとう」

動きが完全に止まっているゴーレムIIの横に位置するシャルロット。

彼女は持っていたショットガンを戻し、自身が持つ最大であり切り札でもある武装を解放する。

シールドの裏から取り出されたのは、『灰色の鱗殻』。

通称『盾殺し』とも呼ばれており、第二世代型の機体の中では最高の威力を持つ武装である。

「!!」

「これで……おしまいー」

人が乗っていない無人機のはずなのに、悲鳴を発したように聞こえたラウラ。

シャルロットは勇ましい声を上げて、『灰色の鱗殻』の引き金を引いたのであった。



専用機持ちたちが襲われているということは、当然簪の元にもゴーレムIIIは現れていた。

他と違うところは、タッグでゴーレムIIIと戦っているのに簪は一人で相手をしていくところである。

パートナーであるクロウはなにをしているのだろうか？

初めての实战を迎えて簪はたいそう怯えていてもおかしくないのだが、彼女は歓喜していた。

「模擬戦じゃなくて……実践のデータ……。これは美味しい……」

やはり操縦者というより研究者向きの性格だろう。

彼女は打鉄式式の性能を確かめるように戦っていた。

しかしここは狭いピット。激しく戦うことができないでいた。

「戦いづらい……」

そもそも打鉄式式は機動性に特化したISである。

うまく動けないのであれば、機体の利点があつたたく活かせない。

「あつ……」

そんなことを考えてため息をついていると、ゴーレムIIIが砲口をこちらに向けていることに気づくことが遅れた。



「まずい……かも……」

簪の機体に防御用の武装はない。

一応考えてはいるのだが、今回のタッグマッチには間に合わなかったのだ。

「(ダメージを最小限に抑える……)」

両腕で身体をかばい、武装を解除してエネルギーをシールドに回す。

それでも少なくないダメージを受けることは必至だが、何もしないよりはマシだろう。

熱線のチャージを終えたゴーレムIIIIは、とうとうその莫大なエネルギーを解き放った。

「……っー」

一直線に向かってくる熱線は、簪が考えていたより強力なものだった。

これは一撃でやられることはないだろうが、戦闘に大きく支障が出るだろう。

簪は冷静に頭の中でそう計算し、援軍がくるまでの戦術を立てていた。

だがその戦術は、簪を守るように現れた花卉のような盾によって、必要なくなった。

「た、盾……っ！」

桜色の花の盾は二枚花卉を散らすものの、見事熱線を防ぎきってみせた。

当然守られていた簪に被害はない。

「無事か？ 簪」

「クロウ……っ！」

ふわりと簪の隣に移動してきたのは、専用機を身に纏ったクロウだった。

無駄に良いタイミングで登場である。

簪は戦略的に見て、クロウのような強者が援軍に来てくれたことに歓喜する。

女として見ると、自分のピンチに大好きな異性が助けに来てくれたということで狂喜する。

とくにヒーローに強いあこがれを持つ簪は、クロウへの愛情のグレードをさらに上げた。

もう頭を撫でまわされただけで腰が砕けてしまいうくらいである。

「一人でよく頑張ったな」

「はう……っ」

簪は顔を真っ赤に染めて、恍惚とした表情を浮かべる。

何故か濃厚なエロい雰囲気立ち上っているように感じる。

褒めただけでこれである。

「これがあいつの……」

クロウはスツと、何の感情もこもっていない目を向ける。

普通戦闘に於いては、恐怖やら殺意やらが込められているはずなのだが、クロウは無  
人機程度には何の感情も抱かない。

これが生身の人間であつたならば、楽しく戦つていたのだろうか……。

「さつさと倒すか」

「うん……」

クロウは東特性の莫大な拡張領域から武器を召喚。

呼び出した二つの武器を、ゴーレムIIIIに向けて発射した。

ゴーレムIIIIは当然強力な可変シールドユニットによつて防ぐ。

少しの間拮抗していた衝突は、発射した武器が弾かれることで決着がつく。

「ほう……」

久しぶりに攻撃を防がれ、思わず声を漏らすクロウ。

流星は束が作つた無人機であろう。

しかしこちらはその束が精魂込めてクロウのために作り上げた最強のIS。

遊び半分で作つた無人機が勝てるはずもない。

「簪はここでは戦いづらいだろう。アリーナに移るぞ」

「アリーナのシールドは……？」

「私が解除する」

そうやって取り出したのは深紅の槍。

決して聖杯戦争は関係ありません。これはウサギ印のエネルギー消滅武装です。本当です。

簪がゴーレムIIIIに斬りかかっている間に、クロウはアリーナのシールドをその槍で切り裂く。

「簪」

「うん……」

クロウの呼びかけに簪が答える。

背中に搭載された二門の連射型荷電粒子砲が火を噴く。

ゴーレムIIIIはそれをシールドで防御するが、激しい連射に少しずつ後ずさりする。

「とどめだ」

そしてクロウの武器掃射が行われる。

普通の掃射ならまたシールドで防げたのだが、次に飛来したものは少し違った。

シールドと衝突したと思ったら、爆発したのだ。

その爆風で切り裂かれたアリーナシールドに吹き飛ばされ、ゴーレムIIIIはアリーナに出る。

それと同時に、反対側のアリーナのシールドも破られ、そこから三機のI Sが飛び出してくる。

「クロウ！お前も戦っていたのか!？」

「うむ」

飛び出してきたのは一夏と箒、それにゴレムI I Iだった。

同じく戦いづらいと感じた一夏が、零落白夜でシールドを切り裂いてアリーナに戦場を移したのだ。

「そちらはどうだ?」

「中々うまくいかねえな。あの熱線が厄介だ」

一夏も箒も防御武装を保持していないので、直撃したら大ダメージを負ってしまった。

しかもゴレムI I Iは絶対防御システムにも干渉しており、直接操縦者にダメージを与えることができることが脅威だ。

「ならば簪と協力し、三人で敵機を撃墜しろ。後の一機は私が引き受ける」

「……分かった!」

一夏はそんな危ないことをやらせたくないが、どうしてもクロウが殺される未来が想像できなく、案外簡単に了承した。

実際戦ったことのある彼は、クロウがどれだけ非常識に強いのかも分かっているから

でもある。

「…………え、織斑 一夏と共闘？」

対して嫌がるのが簪である。

勿論クロウのことが心配でもあるが、それはほとんど必要のないことを知っているからそれほど大きな理由ではない。

ただ一夏が嫌なのである。

彼が悪いというわけではないのだが、専用機の作成が後回しにされたことを、簪はただ根に持っていた。

「頼む。後で何でも言うことを聞くから」

「分かった」

駄々をこねて中々動かないと思われていたが、あっさりとクロウの言うことを聞いた簪。

もう彼女の脳内では、クロウとのイチヤイチャデートの構想が練られていた。

一夏と簪が戦っているゴーレムIIIIのもとに飛翔する簪を見送り、クロウは残るゴーレムIIIIを見やる。

「だが無人機と戦っても面白くないのも事実。もう終わりにしよう」

そう言うところクロウは新たな武器を呼び出す。

それは某戦争で騎士様が持っていた約束の剣に非常に酷似しているが、ウサギ印のビーム兵器である。

この世界に魔術はないのである。

しかしゴーレムIIIは何か非常にマズイものを向けられていることを理解する。

ただちにこの脅威を除くべく、熱線を放つ。

その一撃は一夏が警戒していた通り、とてつもない破壊力を持っている。

他の場所で戦っているセシリア・鈴ペアやシャルロット・ラウラペアを苦しめているのも、この熱線である。

「ふんっ」

しかし熱線はクロウに到達することなく消え去ることになる。

クロウが振るった聖剣から莫大なエネルギー波が放出され、向かってきていた熱線を飲み込み、ゴーレムIIIに直撃した。

その異常なまでの破壊力は、ゴーレムIIIの強固なシールドを焼きつくし、コア諸共存在自体を消し飛ばした。

「うむ……束やり過ぎ」

流石のクロウも少し引いたのであった。



「うおっ！なんだ、あの光!？」

簪たちが戦闘を行っている場所からも、莫大なエネルギー光は見取れた。

一夏は思わずゴーレムIIIIが離れて、驚きの声を出す。

「クロウ……勝った……」

「やはりあいつか……」

簪はクロウの勝利を確信し、それを聞いた箒は疲れた表情でため息をつく。

あんな強大な攻撃を行える武装は、最新のISである紅椿にも存在しない。

「そっか、じゃあ後は俺たちがあいつを倒せばいいんだな」

一夏は仲間の勝利を聞いて喜び、闘志を燃やす。

専用機持ち三人の攻撃は、ゴーレムIIIIを徐々に追い詰めていた。



それは近・中・遠距離と三人がそれぞれこなすことができるからというのが大きい。「うおおおつ！」

一夏はエネルギーの消費を無視して、零落白夜、そして雪羅という破壊力がずば抜けている武装を惜しげなく使う。

最近楯無に鍛えられたこともあり、剣術も目を見張るものがある。

「箒！」

「ああー！」

白式のエネルギーが心もとなくなってくると、後ろから箒が援護する。

雨月を使って刺突すると、そこからレーザーが発射される。

一夏は後ろから迫りくるレーザーを見ることなく避け、それはゴーレムIIIに直撃する。

そして一夏と箒は簪の後ろに戻り、絢爛舞踏の力でエネルギーを回復する。

「こつちには来させない……！」

勿論ゴーレムIIIもこの絶好の機会を逃すことなく攻撃を試みるが、簪が荷電粒子砲を連射して近づかせない。

こうしてゴーレムIIIに一方的にダメージを負わせながらも、こちらはほぼ無傷であった。

「でもこのままじゃ……ジリ貧……」

ゴーレムIIIも簪たちの攻撃を、避けたりシールドで防いだりしてうまくかわしている。

お互いに決定打を撃てないでいた。

「(山嵐ならコアを露出させることができるかも……。でもこのジャミングの中じゃ……)」

ゴーレムIIIは絶対防御への干渉や、通信の妨害などありとあらゆるジャミングを行っていた。

誘導ミサイルもジャミングされて、あらゆる方向に飛ばされてしまうかもしれない。

「……疲れるけど仕方ないか……」

簪はそう言うのと両手の装甲を解除して、空中投影ディスプレイを展開する。

そう、彼女は四十八発ものミサイルを全てマニュアル操作しようというのだ。

「私がコアを露出させる……。二人はそれを破壊してほしい……」

「そんなことができるのか？」

「……わかった」

簪の要請に簪は疑惑的だった。

実際今までの戦闘で有効なダメージを与えられていないのだから、それも当然だ。

しかし一夏はそれに領いた。

「一夏!？」

「このまま戦っていても勝てるかわからねえ。だったら俺は仲間を信じる!」

「……………」

簪の中で一夏の評価が少し上昇する。

箒も一夏が言うのだったら……と簪の要請を引き受けた。

「じゃあ……………いく。山嵐!」

簪は切り札にして最大の武装を解放する。

六機×八門のミサイルポッドが呼び出され、四十八発の独立稼働型誘導ミサイルが火を噴いた。

それは簪によってマニュアル操作され、前後左右上下ありとあらゆる方向からゴーレムIIIIに襲い掛かった。

「……………」

ゴーレムIIIIは何かシールドで防ごうとするが、一方向を守れば他の方向からミサイルが抜け出てくる。

何十発ものミサイルがゴーレムIIIIに直撃し、装甲を吹き飛ばす。

そしてとうとうISのコアが露出した。

「行くぞ、紅椿！」

そこを見逃す筈ではない。

つい先ほど新たに使用許可が下りた武装、穿千。

クロスボウの形状をしたそれを、ゴーレムIIIIに向かって撃つ。

「――！」

ゴーレムIIIIはシールドでそれを迎え撃つ。

しかし圧倒的な威力を持つ真紅のビームは、シールドを木端微塵に吹き飛ばした。

「うおおおおおっ!!」

そしてとどめに一夏の零落白夜である。

ゴーレムIIIIはシールドを失ったが、それを大型ブレードで受け止める。

「邪魔だああああっ!!」

一夏はそれを力技でぶっちぎる。

零落白夜の圧倒的破壊力で強靱なゴーレムIIIIのブレードをぶった切り、そのまま

コア目がけて振り下ろした。

金色に光るコアはなすすべもなく、一夏にあっさりと斬られてしまった。

「終わったか？」

「うん……」

「そうか、よくやった」

いつの間にか現れていたクロウの問いかけに簪が答える。

そんな彼女の頭を優しく撫でると、猫のように頭を擦り付けてくる。

先ほどまでの激闘の空気はなく、のんびりとした空気が辺りに漂うのであった。

「簪ちゃん、無事!?!あなたのお姉ちゃんが助けに来たわよっ!」

そしてここで現れる『霧<sup>エア</sup>困<sup>アブ</sup>気<sup>ブレイ</sup>破壊<sup>イカ</sup>者』・更<sup>淑</sup>識<sup>女</sup> 楯無。

彼女は専用機である『ミステリアス・レイ<sup>淑</sup>デイ』を装着し、やる気満々でアリーナに入ってきた。

「(簪ちゃんに良いところを見せて好感度アップよ!)」

そんな邪な想いで、アリーナのシールドで突破してきたのだから、シスコンは強い。

しかし時すでに遅し。最早全てのゴレム<sup>II</sup>が撃墜された後だったので、クロウを除く三人から冷たい目で見られるのであった。

「……………あらっ!」

◆  
戦いの後というのは、死が隣りあわせだったということ、子孫を残そうとする本能が働き身体が昂ると言われる。

クロウも昂っているので、当然身体の火照りを冷まさなければならぬ。

……年がら年中昂っている気もするが。

「クロウさん、まだやりますの？」

セシリアは先ほどまでの情事を思い出して頬を赤くする。

今クロウの相手をしているのはセシリアだった。

どうやら制服を脱ぎ捨てる時間も惜しかったらしく、彼女は乳房を露出しているが制服は着たままだった。

豊かな乳房の上を、汗が流れていく。

これも先ほどまでの行為の余韻である。

「ふいふい……」

セシリアは自分で胸を揉みまわしてクロウを誘惑する。

豊満な乳房を下から支えるように揉みあげる。



そして腰を手で掴み、猛然と腰を振りたくる。

ばちつばちつとセシリアの豊満な尻に腰が激しくぶつかり、大きな濁いた音を立てる。

一方で陰部からは大量の愛液が分泌されており、湿った音と共に地面に垂れ落ちる。セシリアはだらしなく舌を出して、快楽を享受する。

Dカップの乳房が重力で下を向き、腰がぶつけられるたびにふるふる揺れて汗を滴り落とす。

「あはあああつ！腔なか内に射精でてますわあつ!!」

ゴプつと粘り気の強い白濁液が腔内に注がれる。

むっちりときわまり心地の良い尻を掴みながらの射精は、とても気持ち良かった。

セシリアはクロウの子種をもらい、嬉しそうに顔を緩めたのであった。



## ナース姉妹

謎のウサギから送り込まれたゴーレムIIIIの襲撃により、タッグマッチは中止になった。

しかし幸いにもゴーレムIIIIが積極的に襲ったのが戦闘力の高い専用機持ちたちだったので、一般生徒に被害はなく、専用機持ちたちも重傷者なしで勝利した。

クロウに群がるメスを一匹でも減らそうとゴーレムIIIIを送り込んだ謎の兎は、地団駄を踏んで悔しがっているだろう。

「……………」

千冬や真耶が事後処理を懸命に行っている中、クロウは保健室のベッドの中にいた。とは言っても、重傷を負ったとか病気になったとかではない。

ゴーレムIIIIを破壊するべく振った聖剣が思った以上に反動があり、クロウの身に負荷がかかっただけである。

まあこれが一般人なら反動だけで肋骨などを骨折するレベルの反動だったのだが……。

しかしベッドの上で安静にしておくのも暇なものだ。

だがクロウに限ってはそんなことはなかった。

「クロウ……リンゴ食べる……？」

「お姉さんが剥いてあげるわよ？」

クロウが寝転んでいるベッドの側にいる二人のナース。

彼女たちの容姿の良さは、まさしく白衣の天使であった。

ナース姿の二人は更識姉妹。クロウの世話をしていた。

「うむ、ではもらおうか」

「はい」

「あっ……」

クロウの答えに楯無はにつこりとほほ笑み、リンゴを手にとるとスルスルと器用に皮を剥き始める。

出遅れた簪は思わず声をもらす。

ナースのコスプレをしているだけでも恥ずかしいのに、クロウにお世話する権利さえ剥奪されて、簪は怒りと羞恥で顔を赤くする。

「く、クロウ……。汗、拭くよ……。？」

「む、そうか。では頼む」

「うんっ……」

何か奉仕できることはないかと探した結果が、汗ふきであった。

クロウは別に汗をかいてはいなかったのだが、簪に奉仕されるということは嬉しいので、それを許可した。

簪は嬉しそうに濡れタオルを用意し、クロウの身体を脱がし始める。

「……………」

服を脱がすと同時に現れる強靱な筋肉。

まるで鋼鉄のように固く熱いそれは、女である自分とは根本的に違うことを示す。

そしてその男臭さに、簪の胸がキュンキュン締め付けられる。

「ん、ん……」

濡れたタオルを厚い筋肉の上を滑らせる。

ゴツゴツとした感触がはつきりと伝わってきて、簪の女心をくすぐる。

背筋が発達した背中を拭き終わると、次は前である。

簪はベッドの上上がり、クロウの脚に跨って座り、厚い胸板を拭う。

「ふむ……」

冷たいタオルで身体を拭われるのは気持ちがいいし、それがお気に入りの美少女ともなればなおさらである。

視線を下にやれば、一生懸命自分の身体を拭いている眼鏡美少女の顔がある。

そしてさらに下を見ると、少し開けたナース服の間から小さな谷間が見える。

形が良く小ぶりの乳房で作られた谷間は、クロウの視覚を愉しませる。

「よし、できた。ってあれ？簪ちゃん羨ましいっ！」

むふーっと綺麗に切ることのできたウサギ型リングを見てドヤ顔を決めていた楯無は、自分が見てない間にクロウの身体を弄りまわしている（楯無視点）簪に妬みを込めた視線を送る。

まあいい。自分も今から密着すればいいだけの話だ。

「はい、クロウ。あーん」

そう考えた楯無はリングウサギを一つ摘まみ、簪と同じくベッドの上上がり、クロウに口を開けるよう催促する。

「うむ……美味い」

「よかったわ。まだいっぱいあるからね」

「ぬぐぐぐ……」

クロウの褒め言葉に嬉しそうに笑った楯無は、またリンゴを摘まんで『はい、あくん♪』を行う。

クロウは妹より深い谷間を覗き込みながら、リンゴを食べる。

これが面白くないのは簪である。

先ほどまで自分のことを見ていたのに、姉にそれが奪われたのである。

クロウを奪われたことで冷静さがなくなったことと、先ほどの戦いでクロウへの愛情が天元突破したことで、簪は大胆な行動に出た。

「く、クロウ……」

「……ふむ」

「か、簪ちゃん!？」

ナース服を勢いよく脱ぎ捨て、クロウに全てをさらけ出す簪。

普段の妹とは思えない大胆な行動に、楯無は驚く。

勢いよく上半身を裸にしたため、ぽいんとBカップが柔らかそうに揺れる。

恥ずかしいことをしてしまった自覚のある簪は、顔を赤く染める。

しかしまた服を着ようとしたり、身体を隠そうとしたりはしない。

「触るぞっ!」

「う、うん……優しく……あっ！」

拒絶されていても襲い掛かったであろう建前の言葉で了承を得たクロウは、形の良い乳房を見る。

桃色の可愛らしい乳首は露出していることの興奮からか、固くなり始めていた。そこにクロウは吸いつく。

「あっ、あっ……あっ、あっ」

まだ固さの残る胸を揉みながら、口内で乳首を弄ぶ。

ぢゆるるるつと厭らしくも大きな音を立てて、下品に乳首吸う。

乳首から垂れた唾液が、乳肉を覆っていく。

舌を伸ばして勃起した乳首をその上に乗せて、捌る。

Bカップの胸を下から手で支え、でぼつとした乳肉の感触を愉しむ。

「大きくなってるわ。簪ちゃんの次は私だからね」

「ひゃっ！」

楯無は頬を膨らませて羨ましそうに言うのと、後ろからズボンを一気にズリ下ろした。

すでに固くなって刺激を求めていた男根は、びんつと飛び出す。

何度も見てきたものだが、近くで見るとまた違う。

だから簪は顔を赤くしてそれを見つめた。

「ほら、簪ちゃん。これにご奉仕しないと」

「う、うん……」

楯無が優しく簪に語りかける。

簪の目がぐるぐるとまわっており、何やら危ない雰囲気を漂わせている。

「ハ、ハハハ……どうぞ……」

簪はドキドキと高鳴る胸を必死に抑える。

自分の指で秘裂をくぱつと開く。

真っ赤に充血して、愛液でしつとりと濡れている膣内が覗ける。

きつく締め付けてくるその感触を思い出したクロウの男根が、さらに固くなる。

「挿入れるぞ」

「うん……」

ドキドキと激しく胸を叩く心臓の鼓動。

それを見て察したクロウは、まず男根を秘裂にこすり付ける。

くちゆくちゆと水音が立ち、二人の気分を昂らせる。

「んっ、んんっ！」

ズズ……とゆつくりと男根を膣内に埋没させていく。

ぐつと歯を食いしばって快感と違和感に耐える。

「んっ、んん……ひっ!!」

男根を挿入したら、早速ピストンを開始する。

脚を大きく開けさせ、正常位の体位で繋がる二人。

クロウの動きと連動して、簪の小柄な身体もゆさゆさと揺れる。

始めは巨大な男根が押し上げてくる感覚に目を見開いたが、開発されつくした陰部はすぐに慣れ、周りにまで飛び散るほど愛液が分泌しはじめた。

「んっ！あっ！いっ！あっ!!」

簪はクロウに縋り付くように腕を伸ばし、首に回して身体を密着させる。

ハアハアと二人の荒い息が間近で交わされ、生々しさが感じられる。

豊満とは言えないが、整ったスタイルの身体が押し付けられる。

小ぶりな乳房も胸板に当たる。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ!!」

鍛えられた筋肉の詰まった太ももをしつかりと持ち、腰を振る。

じゅぷじゅぷと水音が大きくなる。

慎ましい胸を強調するように寄せているので、それは柔らかかそうに形を変えて、谷間を作る。

陰部から溢れ出した愛液はうっすらと生えた陰毛や太ももに付着し、さらに尻穴に垂



れるまでに多量であった。

「ふふ、簪ちゃん、気持ち良さそうね」

「あつ、あつ、あつ」

微笑ましそうに妹の情事を見る楯無。

目の前でクロウと簪が淫らに身体をぶつけ合っているのを見て、自分も興奮していることが分かる。

妹の幸せそうな表情は見ていて嬉しいのだが、自分も幸せになりたい。

「ねえ、クロウ。そろそろ私も……」

そう言つて楯無もナース服を脱ぎ捨てる。

Eカップの豊満で艶のある乳房をさらけ出す。

抜群の容姿とスタイルを併せ持つ楯無の誘惑は、誰でも飛びついてしまいそうなほど色気があった。

「だ、ダメっ！あつ、あつ！まだ、私にいつ！あつ、あつ、あつ！！」

「え、ええっ!?!簪ちゃん?!」

しかしそれは簪によって止められてしまう。

クロウも可愛らしいおねだりを無視することはできない。

小ぶりの乳房を手で弄びながら、ばふっばふつと激しく腰を突きだす。

肉がぶつかり合うたびに、愛液が激しく飛び散る。

「もつと、私に……エッチなことして……？はむっ、ちゅ、ちゅ、んっ」  
身体を持ち上げて、唇を押し付ける簪。

舌をクロウの口内に滑り込ませ、絡め取る。

「クロウ！私があっ!?!」

「んっ、あんっ、んっ、んっ!」

鍛錬の成果である腰の括れを持ち、男根を膣内に突きこむ。

ぐちゅぐちゅと粘性の濃い厭らしい水音が響く。

簪は自分で胸を揉んで快感を高める。

「四っん這いになれ」

「うんっ……」

「わ、私の声が届いていない……!」

キスをしながら命令口調で体位を変えることを言われて、簪は好きな人に命令される何とも言えない快感を得ながら素直に従う。

楯無は隣で見ていることしかできない。不憫である。

「あっ！あっ！あっ！これっ、凄いいいっ!!」

後背位の体位になって肉体をぶつけ合う。

簪はその華奢な身体をビクビクと震わせて、快感を得る。

ドストドと荒っぽい性交は、まるで考えることをしないケダモノのようだ。

簪の細い腕を掴んで後ろに引つ張り、胸を反らせる。

クロウは腰を突き入れながら、鍛えられてキュツと引き締まった臀部の全てを見下ろす。

太い男根を咥えこんでいる淫猥な陰部も、固く閉ざした尻穴も。

「これっ！凄いい気持ちいいっ!!」

簪の括れた腰を掴んで、すぱん！すぱん！と軽快な肉音を出しながら腰を尻にぶつける。

普段の姿からは想像もできない淫乱な姿である。

「んっ、んっ……気持ちいい……」

また体位を変えるクロウと簪。

クロウが下に仰向けに寝て、その上に簪が仰向けに寝るといふ変則的な体位。

激しい動きはできないが、まったくとした性交を愉しむことができる。

クロウが下から身体をゆすると、簪の身体もゆさゆさと揺れる。

小ぶりであるがツンと上を向いた形の良い乳房も可愛らしく揺れる。

陰部は膣内の浅い場所を擦られて愛液を多量の分泌し、太ももまで垂れている。

手を重ね合わせて、幸せそうに性交をする簪。

「可愛いぞ、簪」

「……照れるからやめて」

イチャイチャと甘い空気を垂れ流す二人。

それを見て我慢できないのが、近くでお預けをくらっている楯無である。

「も、もう十分でしょ？ 簪ちゃん。ちよつとお姉さんにも分けてよ……ね？」

「あつ……」

楯無は簪の陰部から男根を引き抜くと、愛液で濡れそぼったそれを手で上下にしごき始める。

簪は残念そうな声を漏らす、これまでによく絶頂を迎えていたことと、姉がそろそろかわいそうになつていたので、我慢することにした。

すでに楯無もナース服を全て脱ぎ捨てて全裸になっており、二人の淫気に当てられて火照つた豊富な身体が惜しげもなくさらされている。

「や、やつと私の番……」

楯無はクロウの上に覆いかぶさり、騎乗位の体位で性交をしようとする。

未だ固くそそり立っている男根を秘裂に合わせると、くちゅつと厭らしい音がする。

触られていなくとも、すでに準備は万端だった。

「あつ、あつ、おつ！入ったあ……！」

ただ挿入しただけで軽い絶頂を迎える楯無。

心底气持ちがいいと蕩けた表情を見せる。

きゅんきゅんと膣内が男根を締め付け、絶頂を迎えていることを教えてくれる。

「あつ、あつ、あつ、あつ！どう？これ、好き？」

楯無は上下に尻を振りたくつてピストンするだけでなく、時折豊満な尻を密着させて前後に身体を動かす。

ぐちゅぐちゅと粘っこい水音が高く響き、溢れ出した愛液が密着している二人の陰毛を濡らす。

楯無は背筋をピンと伸ばしているため、豊満な肢体がクロウに見せつけているようになっている。

Eカップの豊かな胸。引っ込んでいるお腹。むちむちした尻と太ももの感触。

そんな二人の情事を、今度は簪が横から息を整えながら見つめていた。

「腰使いがうまくなったな、楯無」

「ふふっ、んっ、そうでしょっ？んっ、んっ」

だんだんと早くなる尻の上下運動。

粘っこい愛液がクロウの身体に付着して、楯無の身体と橋を架ける。

膣内は男根を押し入れるときは奥まで飲み込もうとし、引き抜く際はそれを惜しむかのように吸い付いてくる。

「んんんんんんんんっ!!」

長い間焦らされて火照っていた楯無の身体は、あっけなく絶頂を迎える。

しかもそれは深いもので、彼女はプシャツと潮を噴く。

自分の豊かな胸を揉み、強く歯を食いしばる。

「お姉ちゃん……イったから交代ね……」

簪は楯無の膣内に深く埋まっていた男根を引っこ抜いて、両手でこする。

楯無はあまりにも深い絶頂で意識が朦朧としており、抵抗することがなかった。

だらしなく開いて露わになっている陰部からは、ねっとりとした愛液が零れ落ちていく。

「はっ、んっ、あっ、あっ……、こっ……っ……」

「うむ、いいぞ」

簪は楯無の真似をして、クロウの身体の上で淫らな踊りを踊る。

ぐちよぐちよと聞くだけで発情してしまいそうな淫らな音を立てる。

Bカップの小ぶりな乳房を揉み、乳首を摘まむ。

巨大な逸物は深く突き刺さった時、子宮口を押し上げる。

「そろそろ射精すぞ」

「あつーあつーあつーうっ！んあつーいいよ……いっぱい射精して」

たんつ、たんつと規則的に尻を上下に振り、脚に引き締まった臀部を叩き付ける。触ると張りの良さを実感できる尻を掴み、クロウも下から突き上げる。

ジユプジユプと大量に溢れ出す愛液は、二人の下半身を濡らすほどであった。

簪は口を大きく開け、よだれを零す。

慎ましい乳房を下からむにゆうつと形が変わるほど強く揉みあげる。

「あつーあつーイクっ！イクッ！イクッ……！」

クロウは身体を起こし、対面座位の体位になつて激しく男根を出し入れする。

張りのある引き締まった尻をしっかりと抱え持ち、太い逸物で膣内を抉る。

クプクプと浅く速いピストンになる。

「イクうううううっ!!」

ドクドクと大量に膣内に注ぎ込まれる精液。

簪は両腕をクロウの首に回し、脚を背中に抱き着かせて強く抱きしめ、強い快感を享受する。

小ぶりだが張りがあつて揉み心地の良い乳房が、厚い胸板に当たつて潰れる。

多く出してもまだ足りないのか、ビュルビュルと精液は流れ続けていたのであった。



「あつ！あつ！あんつ！あんつ！！」

「簪ちゃん！いい加減変わってよおっ！」

あれからまた何度も交わり続けた三人。

しかし簪が中々クロウを離そうとしないため、八割方簪が抱かっていた。

楯無も愛する妹には強く言えないのである。

今も簪は壁に手をつき、後ろから激しく突き立てられている。

「はっ！はあつ！イクっ！イクっ！！」

ドロップと吐き出される熱い精液は、簪の膣内を満たしていく。

もう何度も射精しているのにもかかわらず、量も勢いもまったく衰えない。

簪は大きく口を開けて、クロウ以上に味わっている絶頂を再び味わう。



「あああつ！また簪ちゃん、精液もらってるうっ！」

「あつ、あつ、あんつ、あつ、あつ♪」

まだ射精している途中にもかかわらず、ピストンを再開する。

クロウもクロウで最早猿である。

ゴプツゴプツと掻き出された精液が零れ落ちて太ももを伝っていく。

ぬちゃぬちゃと、精液と愛液が混ざりあつた粘度の高い液体が、簪の尻とクロウの腹に当たって音を立てる。

クロウは括れた腰を持ちたり、下を向いた形の良い乳房を揉みながら腰を振る。

手を離すと、ぷるぷると揺れるので、それを見て興奮するのもありである。

簪は、身体中が汗と精液で汚れていた。

それを楯無は羨ましそうに見つめる。

「もう……次は絶対に変わってね!？」

「うむ、精液まみれにしてやろう」

「あつ、あつ、あつ、あつ！」

ぱんぱんと軽快な音を立たせながら答えるクロウ。

簪はただただ喘いでいるだけだった。

その後は楯無も散々に犯され、姉妹揃って失神してしまうのであった。

# コスプレリベンジ! (最終話) (あとがき)

これは余談であるが、クロウはコスプレ用衣装をかなり豊富に持っている。

勿論自分が着るのではなく、女性に着せて愉しむためだが。

たまに……というかよく、部屋にお気に入りの女性を連れ込んでコスプレちよめちよめを堪能する。

そして今がちょうどその時であった。

大体は一人を連れ込んでコスプレしてもらうのだが、今回は四人もの女性が一度に部屋に遊びにきたので、四人がコスプレしている。

「っ、これは恥ずかしいですね……」

豊かな金髪を持つセシリアは、その豊満な肢体をブルマで覆っていた。

白い上の服は厚い制服以上にはつきりと身体の線が出るようになっており、胸の部分で大きく盛り上がっている。

ISスーツを着る以外は身体の露出を避けたがる彼女の下半身は、ブルマのせいでありむき出しになっていた。

紅いブルマにはむっちりと尻肉が詰め込まれ、そこから伸びるスラリとした脚も、瑞々しい。

「むう……何で僕だけいつもいっしょなのかな……」

シャルロットは普段着ているIS学園の制服を着ていた。

いつも身に着けている彼女からすれば不満なのだろうが、IS学園の制服は外に出るとプレミアがつくほどレアである。

目が飛び出るほど倍率の高いIS学園の制服は、入手するのも困難なのである。

しかし不満そうにしているシャルロットもよく似合っている。

とくに短いスカートから覗ける健康的な白い脚は、むしろぶりつきたくなるほどである。

「私はメイド服か。最近よく着るな」

夏休みや学園祭でメイド服を着たラウラが、自分の衣装を見て言う。

キラキラと光を反射するほど美しい銀色の長髪の上に、メイドキャップを装着してい

る。

メイド服はスカートが長い清纯ものではなく、小悪魔的な短いものだ。白いニーソが張りのある太ももに食い込んでいる。

「ちよつ……これ身体に密着しすぎじゃない？」

ナース服を身に纏った鈴が、ほんのり頬を染めながら抗議する。

活発な印象を与えるツインテールの邪魔にならないようにナースキャップを装着している。

彼女の言う通りナース服は、鈴の凹凸の少ない身体にぴったりと張り付いて身体の線を浮かび上がらせている。

スカートもかなり短く、黒のサイハイソックスで露出を少なくしている。

しかしこのせいで絶対領域が作りあげられ、鈴が美少女なこともあり、男なら垂涎ものとなっている。

「よく似合っているぞ」

「ふつ、当然だろう。私はお前の夫だぞ」

やはり間違ったことを言いながらも、クロウに褒められて嬉しかったラウラは、それを体で表現する。

クロウの首に細い腕を回し、ギョツと胸に抱き寄せる。

セシリアやシャルロットに比べると小さいが、確かな柔らかさが顔に伝わる。「そうだ、クロウ。お前は全裸よりも、こういった方が好みなのか？」

ラウラはクロウから離れると、彼の目の前に立ってスカートをめくりあげる。すると鍛えられた腹や可愛らしい臍が見え、彼女の大切な陰部も見える。

そこは当然ショーツで覆われているのだが、ラウラが着用している下着が問題だった。

彼女の下着は紐パン。それも布の部分が極端に少ないものである。

とはいってもラウラの場合陰毛が生えていないので、つるつるの秘裂ギリギリの場所まで見えていた。

「うむ、そちらも好きだが……誰から聞いたのだ？」

「シャルロットだ。これがクロウに気に入られると教えてくれてな」

「うわああああああつ!!」

ラウラの言葉を誤魔化そうと大声を上げるが、少し遅い。

シャルロットは顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに顔を背ける。

クロウに気に入られるためにエロい下着を買う。流石妾の子。エロい。

「しかしラウラ。お前はもう興奮しているのか？」

「う、うむ……久しぶりだからな、期待してしまっているようだ……」

メイド服をたくし上げられて露わになっている、紐パンに覆われた陰部。

しかしそれは下着の役目を担っていないほど、愛液で濡れてしまっていた。

もともと布が薄いこともあったせいで、秘裂の形がくつきりと浮かび上がっている。

トロリと愛液が太ももを伝っているのが艶めかしい。

そんな厭らしい情景を見せられて、クロウの股間も固くなる。

「あら、クロウさん。もう固くなっていますわ」

体操服のコスプレをしたセシリアがクロウの前に跪き、かちやかちやとベルトを弄つて男根を引っ張り出す。

「どうやらその姿にも慣れたようで、男臭い肉棒を目の前にして優雅に笑っている。

「今日はクロウが『ひぎいっ!もうだめえっ!』と言うまで、徹底的に奉仕してやる」

「そのセリフはクラリツサから教えられたのか?」

「うむ、私の部下は頼りになる」

またとんでもなく間違った知識をラウラに植え付けた黒ウサギ隊。

「軍事的知識を除けば子供のような彼女に、このような知識を植え付けるのはどうだろう……。」

「しかしクラリツサのほうも悪気があるわけではないので、面倒である。

「んっ、ちゅっ、ちゅっ」

「んちゅっ、ちゅっ」

体操服姿の金髪豊満美少女と、メイド服姿の銀髪ロリ美少女を目の前に跪かせ、男根に奉仕させているクロウほど幸せなものはないだろう。

ラウラは真つ赤で小さな舌を伸ばし、陰茎を舐め上げる。

セシリアは陰茎の皮を唇で優しく食む。

「あ、あたしも奉仕するわよっ」

「むっ」

置いてけぼりの状態になっていたナース服姿の鈴は、クロウの後ろから攻め立てる。クロウの尻に顔をつつ込み、尻の穴に舌を這わせる。

普段勝気で活発な鈴に、一般的に屈辱とも言える行為をさせることで、征服感による快感も加わる。

くちやくちや、ぴちやぴちやとクロウに奉仕する水音が、身体の前後から発生する。

セシリアとラウラはそれぞれ横から陰茎を舐める。

ラウラはそれに手も加え、亀頭を手のひらや指でこすりあげる。

我慢汁が鈴口から溢れ出し、にちやにちやと指でこするたびに厭らしい音が立つ。

鈴は尻穴を一通り舐めた後、たつぷりと精液の詰まった陰嚢を舐めはじめ。

ねつとりと唾液を絡ませた小さい舌で、陰嚢に詰まった睾丸を転がす。

セシリアが横から陰茎を舐めたままなのに対し、ラウラは亀頭を啜えちゅーつと吸引する。

柔らかい唇に包まれて射精感が高まる。

「そろそろ射精すぞ」

鈴は陰囊を自身の唾液でべたべたにすると、満足したように立ち上がり、クロウにじゃれつくように抱き着く。

そうして腕を正面に回し、乳首を指で刺激する。

セシリアは淫らな舌を伸ばし、べろべろと陰茎を舐める。

はあはあと熱い吐息が陰茎にかかる。

誰もが羨むような三人の美少女に奉仕されていることもあって、いつも以上に多量の我慢汁は、セシリアの口から零れ落ち、受け止めようとした手に伝っていく。

「んっ……んっー!」

最初の射精はラウラが受け止めた。

小さな口を大きく開き、巨大な男根を飲み込む。

受け止めきれなかった精液が顎にこぼれる。

ドクドクと震える男根を、口内の舌を使って刺激して精液を搾り取る。

「ちゅっ……相変わらず濃いな」



男根から口を離すと、どれだけ出たかを示すために口を開ける。

真つ赤な舌の上には白濁液がぶるぶると乗っていて、背徳的な雰囲気醸し出す。

生臭くてマズイだろうに、ラウラの顔は幸せそうに蕩けていた。

「しつかりと味わえよ」

「んっ……」

ラウラは主人に言われたことを忠実にこなす。

口を閉じて、その中で精液を食む。

しばらくくちゆくちゆと厭らしい音を立てた後、ごきゅつと喉を鳴らして飲み込む。

そうして飲み込んだことを示すために、また口を大きく開けてクロウに示す。

もあつとした熱気と生臭さが、ロリ体型の美少女の口から感じられる背徳感強い。

「ああ……あたしも欲しかったのに……」

そんなラウラの様子を見て残念そうにするのが鈴である。

なんだかんだ言って、好きな異性には尽くす性格のある鈴は、クロウの精液は大好物である。

「むっ。だつたら次は鈴だな」

「んぶっ!」

鈴の言葉を聞いたクロウは、いきなり極太の逸物を鈴の口に突っ込んだ。

ズツと小さな鈴の口の中は、男根ですぐにいつぱいになる。喉の奥まで入り込んでくる感触に、鈴は瞳に涙を浮かべる。

「おっ！ぼっ！んぶっ！」

ゴツゴツと喉奥まで男根を押し込む。

小さな鈴の口内を全て埋め尽くしてしまい、ろくに息もできなくなる。

しかし彼女は逃げようとしてたり抵抗したりする様子はなく、ただただクロウからの乱暴なイラマチオを受け止める。

防衛本能で、唾液が多量にあふれ出る。

「んっ！ゴポッ！ゴプッ！んんっ!!」

ナースキャップを押しつぶすように力強く頭を掴み、男根を口内に突き入れる。

じゅぼじゅぼと大きな厭らしい水音が立つ。

しかし傍から見れば、今行われている行為は明らかに桃色の雰囲気醸し出すものはなかった。

まあ当人たちは別だが。

何度も何度も窒息させられそうになり、自然と目から涙があふれる。

鼻からは鼻水が泡を作り、みつともない容貌に変わる。

口は引き抜かれるたびにひよつとこのようになり、あさましい。

「よし、射精すぞ」

「んぶっ！ぶっ！ぶあっ……」

クロウは一度男根を口から引き抜き、鈴の様子を見る。

やつと大きく息を吸えるようになり、口を開けて酸素を吸収する。

涙は流れ、鼻水は垂れ、口からはよだれと我慢汁が混ざり合った粘液が滴る。

そんなまるで強姦されたかのような惨状だが、鈴はクロウに使われたということにまた何とも言えない興奮を覚えていた。

「んぶううっ！んんんんんんっ!!」

再度男根を鈴の口の中に突っ込む。

そしてドクドクと射精が開始される。

鈴はクロウの尻に手を回し、ギユツと力を入れる。

肩を噛まれたり背中を引っ搔かれたりすることはよくあるのだが、尻に爪を立てられることは初めてだったので、少しクロウは驚く。

口で収まりきらなかった精液がナース服に垂れ落ち、なだらかな山を描く胸を通っていく。

「よく頑張ったな」

「ゲホッ、ゲホッ！うう……いつも以上に喉がイガイガするわ……」

あーっと声を出して喉の調子を確認する鈴。

しかし嬉しそうな雰囲気から、褒められて嬉しがっていることがわかる。

「セシリア、来い」

「な、なんですかの……っ？」

セシリアは先ほどまでのイラマチオで少し警戒している。

だがクロウに言われると考えるよりも先に身体が勝手に動き出していた。

心も身体も墮とされたセシリアは、もうクロウには逆らえないだろう。

セシリアを近くに來させたクロウは、鈴を仰向けに寝かせ、セシリアをその上にうつぶせに寝かせ、抱き合わせる。

「ちっ……この無駄な脂肪が……」

「ど、どうしたんですの?」

下で鈴が恐ろしい顔をして悪態をつくので、セシリアは戸惑っている。

密着しているせいでDカップの胸が存分に押し付けられ、胸の慎ましさに悩んでいる鈴からすれば、喧嘩を売られているようなものなのだ。

そんな仲の良さから微笑ましい喧嘩——片方からの文句のような気もするが——

——を見ながら、クロウはセシリアのブルマに手をかける。

ショーツごと横にずらしてみると、むんつとした熱気が漏れ出す。

先ほどまでの口での奉仕と、鈴の凄惨な情事を見て、彼女も少なからず興奮していたようで、秘裂から愛液がこぼれている。

桃色の尻穴も見え、背徳的な快感を覚える。

「あっ……」

二度射精しても未だ硬い逸物を、セシリアの秘裂にこすり付ける。

ぬるぬると敏感な陰部を擦られ、男根に愛液を付着させる。

溢れ出した愛液は綺麗に整えられた陰毛を濡らし、下にあるパイパンの鈴の陰部に垂れ落ち、鈴の愛液と混ざりあう。

「ああっ!!」

「んいっ!!」

そしてクロウはちょうど真ん中に男根を突き刺した。

ずんつと力強く押し込まれる逸物。

セシリアは少し放置させられていたせいか、今の一擦りだけでも目が上を向き、だらしなく口を開けてしまう。

「そ、そこは違いますわ……あっ」

セシリアと鈴の陰部の間に男根を挿入し、抜き差しする。

二人の膣内から滲み出す大量の愛液が、動きを滑らかにする。

セシリアは不満があるようだが、せっかくの機会なので二人同時に愉しませてもら  
う。

ぬちやぬちやと愛液がしずくとなり、二人の身体に付着する。

「あつ、あつ、あつ、あつ!!」

「んっ、んっ、やああつ……」

セシリアの豊富な尻に手を置いて男根を抜き差しする。

赤いブルマには覆いきれない尻肉がむっちりとした感触を伝えてくる。

二人の陰部からとめどなく流れる愛液は、地面に水たまりを作る。

「んっ、んはあつ!」

「これも、んっ、結構いいかも……っ」

ぱちっぱちつと、セシリアの大きな尻に腰があたるたびに乾いた音が立つ。

鈴はラウラと同等の感度の良さから、セシリアよりも快感を得ていた。

「あつ!あつ!あつ!やあつ!!」

「イクっ!んっ!んっ!イクうっ!!」

クロウの腰の動きが速くなるにつれ、ぐちゅぐちゅと愛液が泡立つ音も大きくなる。

二人の勃起した陰核が、張りあがったカリが擦られ強い快感をもたらす。

セシリアと鈴は自然と口を重ね合わせていた。

舌を絡ませ合う濃厚なキスで、上からも下からもくちゆくちゆと淫猥な音が上がる。  
「あああああああつ!!」

「イクううううつ!!」

クロウが射精するよりも先に達してしまふ二人。

セシリアは尻を高く持ち上げ、鈴は力なく地べたに身体をへばりつける。

プシャアアアアアツと二人して潮を噴く。

男根と鈴の下半身に、セシリアの潮が大量に付着する。

セシリアはこの情事で多分に発汗しており、ブラをつけていなかった胸が透けて、大きく尖った桃色の乳首がうっすらと見える。

セシリアと鈴は舌を絡め合わせたまま、2人仲良く絶頂するのであった。

「……終わったか?」

セシリアと鈴がだらしのないアへ顔をさらしてポーっとしているのを見ているクロウに話しかけるラウラ。

最初の口内射精からほっとかれたと感じているせいで、頬を膨らませて不満を伝えてくる。

「私のこゝともしつかりと見ろ。妻の務めだぞ」

ラウラはメイド服をグツと上につまみ上げる。

クロウとセシリアたちの三人の情事に当てられたので、彼女の引き締まったスレンダーな身体には汗が浮かび上がっていた。

そのせいでクロウの目にはいつも以上に扇情的に映る。

「ふふっ、どうだ? 興奮するか?」

ラウラはその状態でクロウに抱き着く。

慎ましいが確実に感じ取れる母性の象徴が、腹にぶにゅつと当たって形を変える。

いつもは抱きしめる側なのだが、庇護していた対象に抱きしめられるというのは何となくいいものである。

「僕は完全に空気だったね……」

「あ……」

どよんと暗いトーンの声を聞いて、ラウラは声を漏らす。

声の方向には、学生服を着たシャルロットが三角座りをしていじけていた。

最初の口淫のときに出遅れたことが痛かった。

「寂しい思いをさせたな、シャルロット。来い」

「ふうんだ……僕のことを無視したクロウのことなんか、知らない」

ぷいっつと顔を背けるシャルロット。

彼氏に構ってもらえなくて拗ねている彼女という微笑ましい構図である。



……彼女がスカートを脱いだりしていなければの話だが。

なんだかんだ言つて、シャルロットも淫気にあてられていたようだ。

純白のショーツもスリりと下ろすと、最近肉ののつてきた臀部と綺麗に整えられた陰毛に守られる秘部が露わになる。

「もうクロウが無視できないように、僕に夢中になつてもらうからね」

下半身を露出した後、シャルロットは上もずらす。

ブラごと一度にずらし、成長が著しい胸をさらけ出す。

汗が伝つていた胸は、ぷるつと張りがあることを示すように弾んだ。

「ん……」

クロウの厚い胸板に手を置き、正面からしなだれかかる。

そして爪先立ちになり、クロウの胸元や首筋に舌を這わせる。

つーつと舌が這つたあとには、唾液の線ができている。

クロウはゾクゾクとした快感を覚えていた。

「むう……」

イチヤイチャとし出したクロウとシャルロットを見て、悔しい思いをするラウラ。

シャルロットはラウラの一番の友人なので、強く立ち退きを言うことはできなかつた。

そんなラウラの様子を、空気を読めるシャルロットは察知して、仕方ないなあ……とため息をつく。

「クロウ、先にラウラを抱いてあげて」

「い、いいのか……?」

「もうっ、そんな顔しているくせに、白々しいよ」

ラウラは『もう譲らないぞ?』とクロウの腕をキュツと握る。

そんな彼女を見て、シャルロットは苦笑する。

……思惑にラウラを動けなくさせて、一番長くクロウを独り占めしようとしていたりする。

流石シャルロット。腹黒……計算高い。

「クロウ……来てくれ」

シャルロットがそんなことを考えていると知らず、好意で譲り受けたと思っっているラウラはシャルロットに感謝しつつ、クロウに尻を向ける。

息は上がっており、陰部はすでに濡れそぼっていた。

クロウはそこに亀頭をこすり付ける。

すると準備万端とばかりに、くちゆりと音がする。

「ふああああ……っ!!」

ずぶぶぶ……と小さく狭いラウラの腔内に押し込まれていく男根。

小ぶりで張りのある尻を掴み、ゆっくりと押し入れていく。

ただでさえ狭い腔内は、待望の逸物がやってきたことで収縮を激しくし、ミチミチと男根を締め付ける。

ラウラは目を見開き、よだれを垂らして男根の感触に酔う。

「んっ！んっ！んっ！んっ！！」

小さくて狭い腔内が、巨大な逸物の形に変えられていく。

ラウラは体内でにゆるにゆると動くその形を、はつきりと感じ取る。

押すとすぐに押し返してくる尻を揉みながら、腰を振る。

愛液が掻き出されてぶぢゅぶぢゅと音がする。

「あっ！あっ！あっ！あっ！！」

ラウラははっはっはっ短い吐息を犬のように行う。

剥きだされたAカップの小ぶりな乳房を、後ろから腕を回して揉む。

ラウラの身体全体に汗が浮かんでおり、艶めかしさを演出する。

男根をずぶずぶと何度も出し入れし、愛液がラウラの太ももを濡らす。

「あっ！はっ！はっ！クロウ……激しい、ぞっ！あっ！」

ドスドスと乱暴に腰を突きたてる。

ラウラは自分が物のように扱われることに、何とも言えない快感を得ていた。眉は切なげに歪み、口からよだれを垂らす。

「あつ!あつ!あつ!あつ!あんっ!!」

張りのある小ぶりの尻に激しく腰がぶつかり、ばちつばちつと肉がはじける音がする。

ぐちゅぐちゅと荒々しくかきませられた愛液は、膣外に零れて地面に落ちる。

ラウラはあさましくも尻を高く上げて、さらに快樂を得ようとする。

慎ましい乳房は、激しい身体の動きに合わせて可愛らしく震える。

「射精すぞ」

「そ、そうか、あつ!いつでもっ、いいぞっ!あつ!あつ!!」

最後はラウラの身体を反転させ、向き合って身体をぶつけ合う。

ラウラはクロウの首に腕を回し、さらに密着する。

射精が近づいている男根は、また大きくなる。

ラウラも絶頂が近く、愛液がかなり溢れ出す。

「イクっ!!熱いのが……きてるっ!!」

ラウラの膣内に、ドクンと精液が流し込まれる。

最終的に対面座位のような体位になっていた二人。

ラウラはクロウに身体を密着させて、強い快感を味わう。  
小ぶりな胸がクロウの身体に当たって潰れる。

大量に流し込まれた精液は、子宮内に侵入してそこを満たす。  
入りきらなかったものが、どぼつと外に押し出される。

「あう……っ」

たつぷりと膣内に精液を流し込んだ後、男根を引き抜く。  
するとドロ……と粘性の高い白濁液が零れ落ちる。

「シャルロット、そこに寝ろ」

「うん……優しくしてね?」

最後まで残っていたシャルロットを標的にする。

彼女を仰向けに寝かせて、クロウはそれに覆いかぶさる。

汗に濡れたCカップの乳房を見ながら、男根を濡れそぼった秘裂にこすり付ける。

シャルロットも自分の考えから最後になったとはいえ、今まで情事を見ていただけなのは寂しかったようで、ハーツハーツと荒い息になっている。

くちゅつと音がすることから、クロウを受け入れる準備は万全だと分かる。

「あんっ! あっ! あっ! あっ! ひあっ!!」

始めから激しい腰の振り方で、シャルロットもそれに合わせて愛液を多量に分泌させ

る。

ぶちゅぶちゅとこぼれ出した愛液は二人の身体を濡らす。

最近どんどんと大きくなり始めている乳房を揉みしだく。

口を近づけると、シャルロットの方から押し付けてくる。

れるれると舌を絡め合わせると、唾液が両者の口からこぼれ、口周りを汚す。

「シャルロット、可愛いぞ」

「んきゅうっ!!」

クロウが褒めると、へんてこな嬌声を上げるシャルロット。

今の言葉だけで達してしまつたようで、ビクビクと身体が震えている。

先ほどまで腕を胸に寄せて乳房の形を変えさせ、魅力的にそれを見せる余裕はあつた

のだが、達してしまつたせいでそれもなくなってしまう。

クロウはむっちりと肉のつまつた太ももを持ち、腰を何度も打ち付ける。

「私もそろそろだな」

「ひっ、ひっ! ひいっ! いっ! あっ! いいっ!!」

奥をずんずんと何度も押し上げられ、目の焦点が合わなくなる。

陰部に突き刺さっている男根が膨らみ、膣内をぐぐぐ……と押し広げていく。

「あああああああああつ!!」

シャルロットはまたしても、クロウよりほんの少し先に絶頂を迎えた。ブパツと大量の潮を噴き、クロウの腹にかかる。

奥までしつかりとねじ込まれた男根は、子宮内にドクドクと精液を流し込む。シャルロットの身体はピンと張って、ビクンビクンと震える。

汗に濡れた豊満な肢体が跳ねる様子は、逸物を元気にするには充分であった。

「気持ちいいか？」

「うんっ！あつ！あつ！何も考えられなくなるっ！」

クロウは抜かないまま続けて腰を振りたくり始める。

ばんばんと軽快な音が響く。

汗に濡れてしつとりとした適度な大きさの乳房が、クロウの胸板に当たり形を変え

る。  
シャルロットはクロウに抱き着き、密着させて快感を得る。

性器がぶつかり合う下半身は、掻き出された精液と愛液が混ざり合い、ぐちゅぐちゅと泡立っている。

「愛しているぞ、シャルロット」

「僕もっ！僕も大好きだよっ！あんっ!!」

シャルロットは嬉しそうにクロウに抱き着く。

腕は首の後ろに回し、脚は腰に絡ませて絶対に離れないようにする。

シャルロットの淫靡な吐息が耳元で感じられる。

ぱちぱちと肉がぶつかり合う音に加えて、水音も聞こえる。

「イクウウウウウウっ!!」

ドブツとまた大量に流れる精液。

二度目の膣内射精で奥にあった精液が押し出され、重力に従って尻の方に垂れる。

シャルロットは普段の優しそうな美顔からは想像もつかないほど、蕩けて厭らしい表情を浮かべていた。

「はあ……はあ……っ」

男根を陰部から引き抜くと、でろお……と色々な液体が付着していた。

シャルロットの膣内が暖かかったこともあり、軽く湯気立っていた。

栓を抜かれた陰部から、とぷつと精液の塊が漏れ出してくる。

シャルロットはまだ軽い絶頂を迎えているのか、小刻みに震えている。

「大好きだよ……クロウ」

汗と精液に汚れた胸から下をさらけ出したらしのなない恰好で、シャルロットは愛の言葉を伝える。

こうして壮絶なコスプレ5Pは幕を閉じたのであった。



◆ 「ちえー……結局成果はあんまりなかったねー……」

束は自分とクロウしか知らない場所で、ゴーレムⅢから送られた戦闘データを見る。無人機が全機撃墜されたことは、彼女にとつても予想外であった。

クロウやあのいけ好かない生徒会長。それに一夏と箒がタッグで戦えば倒されるかな……と考えており、大体三機が撃墜されると思っていたのだが、まさか他の代表候補生たちがここまで戦えるとは思っていなかった。

「不慮の事故つてことで、クロくに近寄るメス共を減らそうと思っただけだなあ……」

恐ろしいことを呟く束。

だが彼女にとつて、クロウや千冬などの家族以外はどうでもいいのだ。

そこらじゅうにいる蟻とやら変わらない。

「まあそうなると思うクロくんやちーちゃんに怒られちゃうんだろうけど……」

てひひつと笑う東。

だが彼女は企みを止めない。ただ自分やクロウが楽しめる世界にするために。

……一般人からすれば鬱陶しいことこの上ないが。

「さてと……そろそろクロくん成分も切れそうだし、逢いに行こうつと♪」

そう言う東はシャワールームに向かう。

クロウと逢うのに恥ずかしいところは見せられないのだ。

……まあ身体のありとあらゆるところは、もうすでに見せているのだが。

東はルンロンと上機嫌で研究室を後にする。

その一週間後、とある国の特殊部隊がこの場所を急襲するが、すでに東はおらず、データも何も残っていないのであった。

## 番外ノ章

山田 真耶

「え、えーと……皆一年間よろしくねっ」

『……………』

「うう……誰も反応してくれない……」

ずらりと座つて並ぶ生徒たちに色々話しかける新任教師。

しかしまったく言つていいほど反応がなく、早くも心が折れかけていた。

それも仕方がないだろう。

まだ交流も深めていないのに、赤の他人が大勢いる中で目立つことをしたがる者はそうはいない。

それに普通の高校であれば、同じ中学からの同期生がいるかもしれないが、ここに限ってはほとんどない。

ここはI S学園。

世界で唯一I Sの操縦者育成機関。倍率は優に三ケタを超え、世界各国から優秀な人材が集まってきている。

そんな学園なので、生徒たちが緊張してもおかしくはない。

「ひいくん！先生、早く助けにきて〜！」

生徒たちは仕方がないのだが、教師としては中々キツイ。

しかも彼女は新任教師。

このような経験などないので、どうしていいかもわからない。

新任だからこそ副担任なのだが、肝心の担任はまだ現れない。

『最初は色々なことを経験した方がいいんですよ。私もそうでしたから』

そう言った担任の先輩教師のことを思い出す。

ニコニコと優しそうに笑っていたからいい先輩の下で学べると喜んだが、実際は腹黒だったらしい。

とうとう自分が受けた仕打ちを八つ当たりしているのではないだろうか。

新任教師はそのようなことを思ってしまった。

「あらー、やっぱりうまくはいかなかったようですね」

「せ、山田先生！」

教室の扉を開けて入ってきた人物を見て、新任教師は涙を流しそうになる。

というかもう流していた。

先ほどまで心の中で『お化けおっぱい』などと悪口を呟いていたことも忘れ、ただただ担任教師に感謝する。

「わあ、凄く綺麗な先生……」

「おっぱいも大きい！」

「私も大きくなりたいなあ」

先ほどまで一貫して沈黙を保っていた生徒たちも、近くの同級生たちと話し始める。

それほど入ってきた教師が、話題性に富んでいたのだ。

優しそうな笑顔からは親しみやすさを感じられ、さらに童顔ということもあって生徒たちは好印象を受ける。

身体全体からほんわかとした和む雰囲気醸し出して、話しやすそうだ。

黒いスーツでピシッと決めていて、そのほんわか雰囲気をいい具合に中和している。

その黒いスーツの上からでも分かるほど身体は起伏に富んでいて、生徒たちの羨ましそうな視線を一手に引き受けている。

そんな彼女は教卓に手をつくすと、後ろの黒板に名前が大きく表示される。

「二組の担任を務めることになりました、山田 真耶です。一緒に勉強して、立派な操縦者を目指しましょう」

かつて同じ場所でおどおどとしていた彼女は、にっこりと笑って自己紹介をした。



「せんせー！一緒にご飯食べよー！」

「はい、いいですよ」

三人の生徒からの食事の誘いを、真耶は快く受ける。

新入生が入学して二週間。

たったそれだけの間で、真耶は多くの生徒たちの信頼を勝ち取っていた。

今のように食事に誘われることも、少なくない。

人に教えることが上手で、さらに元日本代表候補生の実力。そして彼女の人の好き。それらすべてが、真耶を人気者にしていた。

「先生って専用機を持つてないよね？それなのにあんなに強いって凄いよね」  
「えへへ、頑張りましたから」

褒められると嬉しそうに笑う。

そんな彼女の素直さも、生徒たちは大好きだった。

ほにやつと癒し成分を撒き散らしながら笑うことも、理由の一つだ。

「確かに強いけど、いつかはあたしが倒すんだからー」

ガタツと椅子を後ろに蹴って立ち上がり、真耶に向かって宣戦布告をする生徒。

彼女はイギリスの代表候補生で、専用機も保持している。

それ故に入学当初は他者を見下し、驕っていたのだが、真耶との模擬戦で完膚なきまでに叩きのめされ、少し態度が変わった生徒だ。

「はい、楽しみにしています」

「くうう………！嫌味なしで言っていることが腹立つー！」

ニツコリと笑ってそれを受け止める真耶。

彼女からすれば、向上心を強く持つ生徒がいてくれて嬉しいのだ。

それに今の生徒には、真耶に勝つことは到底不可能だった。

現役代表候補生を完封するほどの実力を、今の真耶は持っている。

「そういえば先生って、五年前にもIS学園にいたんだよね?」

「はい、そうですよ」

「じゃああの人たちに会ったことってある!?」

興奮した様子で生徒の一人が聞いてくる。

身を乗り出しているの、せっかくの料理がこぼれそうになっている。

真耶は誰のことを言っているのかわからず、首を傾げてしまう。

その小動物のようなしぐさも、生徒たちは可愛いと思ってしまう。

「あの人たち……?」

「もー、知ってるでしょ?黄金世代の人たちだよ!」

聞いて真耶は、ああと納得する。

黄金世代とは、ほぼ同時期に世界各国に現れた、卓越したIS操縦能力を保持する女性たちのことである。

そこに男性操縦者である織斑 一夏も入っているので、なおさら有名である。

日本、イギリス、中国、フランス、ドイツ、ロシアなどの世界列強国に現れた女性たちは、それぞれ非常に高い戦闘力を持っている。

なので抑止力による世界平和が、今実現していた。



「私はやっぱり更識 簪さんかなあ。ISをほとんど一人で組み立てたって聞くし」「いやいや、簪さんも凄いいけど、やっぱりシャルロット・デュノアさんでしょ。旧型のISであそこまで強いのも、あの人くらいだよ」

「あたしは別に好きな人はいないけど……」

三人はそれぞれ尊敬する人物のことを思い浮かべる。

口では否定している生徒も、実はセシリアファンであつたりする。

黄金世代の女性たちは皆絶世の美女と謳われるほどの容姿なので、ISのことに興味がない人からも人気がある。

たまにファッション雑誌などに出ていると、その雑誌は完売してしまうのが通例だ。

「ふふ、私はあの子たちを教えていたこともあるんですよ」

「おおおつ！ 凄いいね、先生！」

むふんつと胸を張る真耶。

教え子たちが色々な人に慕われていることは、嬉しい。

その教え子たちがほとんど教える必要がないほどすでに完成されていたことは、秘密にしておこう。

「あ、先生。それって手作りなの？」

「え、はい。そうですけど……」



「え、ええっ!? そ、そうですか……?」

「え……先生、彼氏いるの……?」

からかうつもりで言ったのだが、真耶が恥ずかしがりながらも嬉しそうに聞き返してきたので、生徒の方が固まってしまう。

いや、不思議なことではないのだ。

優しく、時には厳しい真耶。

容姿は二十代後半とは思えないほど可愛らしいし、その童顔に見合わず身体はとてつもないダイナマイトボディである。

身体の線がくつきりと出てしまうISスーツを着ているときなど、そっちの気はないはずなのに、思わず固唾を飲みこんでしまうほどのものである。

そんな彼女に、深い仲の異性がないことの方がおかしいのだ。

しかしここは女子高であるIS学園。

出会いもほとんどない生徒にとって、真耶のことは格好の獲物である。

「どこで出会ったの!?!」

「彼氏はどんな人!?!」

「このおっぱいで誰かしたのかあつ!!」

「や、止めてくださいいいっ!!」

飢えた獣のように目をぎらつかせ、真耶に押しよる生徒たち。

代表候補生の生徒など、真耶の胸をスーツの上から鷲掴みにしている。

真耶は涙目になりながら、わたわたと両手を振る。

この数年で真耶は立派な教師になったが、こういったところは昔のままだった。

『山田先生、山田先生。お客様がお見えになっております。至急、応接室に向かってください』

「よ、呼ばれたので私は行きますね！ではっ！」

「あっ……」

普段は憂鬱に感じられる校内スピーカーでの呼び出しも、今は神の手助けだと感じる。

IS学園の教師を務めるのにふさわしい体術を駆使して包囲網から抜け出し、応接室に向かう。

真耶から恋愛事情を根掘り葉掘り聴きだそうとしていた生徒たちは残念そうに声を漏らす。

そんな隅で、真耶の胸を揉みしだいていた生徒は、大きすぎる敗北感を感じ、落ち込んでいたのであった。



「ふう……」

包囲網から抜け出した真耶は、応接室に向かいながらも息を整える。

もみくちゃにされたことは、肉体的というより精神的に疲労を感じた。

「あまり胸を揉まれるのは困ります……」

自分の大きな胸を見下ろし、ため息をつく。

真耶の胸はかなり大きいものにもかかわらず、ある男にしっかりと開発されてしまっているため、非常に感度が良い。

揉まれるだけで絶頂するのはその男だけだが、感じてしまうことはある。

しっかりとした頼りになる先生なのだから、そんな恥ずかしい姿は見せるわけにはいかない。

「特に最近は大メです……」

真耶はある時から、とある体質になってしまい、非常に困っているのだ。刺激されていると、どうなってしまうかわからない。

「でもお客さんって、誰でしょうか？」

気分を変えるため、自分の中の話題を変える。

IS学園に来客など、非常に珍しい。

各国の役人などは、行事のときでもない限り入ることは禁止されているし、IS企業のセールスだってお断りしている。

だから真耶はお客様と言われても、まったく心当たりがなかった。

「まあもうすぐ分かることですけど」

一人で色々考え込んでいるうちに、応接室の前に到着する。

どのような偉い人がいるかもわからないので、とりあえず身だしなみを整える。

先ほどもみくちやにされたせいで、スーツも乱れている。

所々跳ねてしまった緑髪を直し、よしと気合を入れる。

「失礼します。遅れて申し訳ありません。わたし……が……」

入室すると同時に、まくしたてるように言葉を紡ぐ真耶。

面倒くさい相手にはこれが観面なのだ。

しかし中にいた人物を見て、彼女は徐々に言葉をなくしていく。

「む……」

ソファーに座っている人物は、ただ座っているだけなのにもかかわらず、まるで小山のように大きい。

服の上からでも分かるほど盛り上がった筋肉を持っている。

変態的な性格がまったく出ていない、落ち着いた雰囲気。

そして真耶が、逢いたくて逢いたくて仕方のない人物。

「クロウさん……」



「ここで少し待っていてくださいね。すぐにできますから」  
「うむ」

真耶はクロウを寮長室に連れてきていた。

数年前まで織斑 千冬のゴミ屋敷やだったのを、一年の寮長を引き継いだ真耶が使っている。

部屋は綺麗に整理整頓されており、住人の性格がうつしだされている。

真耶は座布団を取り出し、クロウを座らせる。

「〜♪」

嬉しそうに鼻歌を歌いながら、料理を作りだす真耶。

先ほど感動的な再開……みたいなことがあったが、別にそんなに長く離れていたわけではない。

むしろ一週間前に会っている。

しかし何よりもクロウを引き立てることを生きがいとしている真耶は、少しの間でも離れることが苦痛なのだ。

「えへへ……クロウさんの匂いがします……」

着ている無地の大きなシャツを鼻に持って行き、匂いを嗅いでほにやりと笑う。

その間にも料理は続行されており、危なげない手つきで料理が作られていく。

クロウのお気に入りの女性たちは、皆クロウに依存気味である。

当然真耶もお気に入りの女性であり、しかも性格的なこともあり、クロウへの依存はかなり大きい。



クロウに逢えない日々は、匂いがしみついたシャツでもって我慢するのである。今日は会えたので、新しく匂いがたつぷりとしみついたシャツをいただいた。前のシャツは色々を使いすぎたため、廃棄処分である。

「ふむ……」

クロウは楽しそうに料理を作っている真耶の後姿を見やる。

大きなダボダボのシャツだけを着て、下はショーツ一枚である。完全に誘っているとしたか考えられない。

たつぷりと肉ののった大きな尻が、真耶が調理のために動かたたびにぷりんと揺れる。ショーツもだらしなくずれており、尻の谷間などが見えてしまっている。

「クロウさん、味噌汁はいかがですか？」

真耶がくるりと振り向く。

すると大きな胸がブルンと揺れる。

そして服の隙間から桃色の突起物がチラリと見えてしまう。

まさかまさかのノーブラである。

ここまであからさまに誘われて、クロウも我慢するはずがなかった。

「真耶、飯は後で良い」

「く、クロウさん!？」

自分に背を向けて料理中の真耶に、後ろから抱き着く。

ほとんど身に着けているものがないので、真耶の柔らかな身体の感触がはつきりと伝わってくる。

料理中にイチヤつくのは危ないのだが、クロウはそれを当然承知しており、流れるように包丁を手から離させた。

真耶は顔を真っ赤にしてあわわわと慌てているが、目の奥に期待の色が混じっている。

「うひゃああつ?!」

真耶は胸をがしつと驚掴みにされ、大きな声を上げる。

クロウの大きな手にも余るほどの、爆乳。

彼が学生時代のときはGカップだったのだが、今では2カップも上がってIカップである。

それでいて、胸はほとんど垂れず、形が良いのは奇跡である。

「だ、ダメです、クロウさん。私、胸を揉まれていると……」

真耶は胸を揉まれるだけで、一気に蕩けた表情を見せる。

首を反らせてはあ……と何とも悩ましい吐息を漏らす。

しかしそんな真耶の懇願を受けずに、クロウは薄いシャツの上から胸を揉みしだく。

自分が手を動かすたびに、最上級の柔らかさを持つIカップの乳房が、むにゅむにゅと形を変える。

豊かすぎる乳房には汗が浮かんでいて、シャツを濡らす。

そのせいで桃色の固くなった乳首が、目で視認できるほどに浮かび上がっていた。

「あつ、あつ、ダメですー！出ちゃいますうっ！」

「いいぞ、出せ」

何やら切羽詰った声を漏らす真耶。

クロウは胸を押しつぶすように圧迫して、その時を待つ。

「んっ……ううっ!!」

真耶が唇をグツと食いしぼる。

豊満な身体が、クロウの腕の中でブルリと震える。

そしてしばらくすると、グツと押さえつけられていた胸のあたりが、じんわりと濡れだす。

辺りには甘い匂いが立ち込める。

「ふむ……出てきたな」

「ああああ……」

クロウはそう言いながら、胸を揉み続ける。

真耶は首を反らして天井を見上げ、気持ちよさそうに舌を出している。彼女は別に妊娠しているわけではない。ただ母乳体質になっていたということである。

クロウが卒業して毎日会うことができなくなると、成長が止まったはずの胸が、また大きくなり始めたのだ。

そしてある時、クロウを思つて自慰を行つていると、乳首から白い母乳が滲み出したのだ。

最初はクロウに嫌われると思い、絶望したのだが、クロウが美味しそうに母乳を吸つてくれるのを見て、真耶も何か吹っ切れた。

「ああ……クロウさん。全部ちゃんと飲んでくださいね……う。」

真耶はドロドロに蕩けた目でクロウを見つめる。

今では彼女の方から母乳を飲んでほしがっているくらいだ。

確かに母乳が溜まって胸が張るのだが、それは普通に搾ればいい話だ。

だが自分の体液が愛している異性に大量に飲まれるということに、真耶は背徳的な快感を覚えているのであった。

クロウは牛の乳を搾るかのように、胸をギュつと掴む。

するとピンと勃起した色素の薄い乳首から、ピュツと母乳が溢れ出す。

その母乳はせっつかくもらったばかりのクロウの匂い付きシャツを濡らし、ビシヨビシヨにする。

「ひゃあああああ……っ!!んはっ!はあっ、ふっ!」

ダボダボのシャツの中にスルリと手を侵入させ、直に爆乳を揉みしだく。

下から持ち上げると、圧倒的重量が感じられる。

母乳をにじませる乳首をぎゅつと摘まむ。

そして片方の乳房は持ち上げて、舌でペロペロと舐める。

両乳首への愛撫のせいで、さらに母乳が溢れ出す。

それをクロウは丹念に舐めとっていく。

本来母乳は美味しいどころか、むしろマズイのだが、何故か真耶の母乳は甘い。

クロウはそれがお気に入りです、よく子供のように胸に吸い付くのであった。

「んひいっ!」

胸の痛みがなくなる程度に母乳を搾ったあと、今度は真耶の腋をレロオ……と舐めた。

ペロペロと可愛らしく舐めていた乳首と違って、ねっとり味わうかのようにして腋を舐める。

真耶の全身にぞくりと凄まじい電気が走りぬけ、豊満な肢体をピクンと震わせる。

その間も、勿論胸を揉むことを止めない。

I カップの爆乳に詰まった母乳は、搾っても搾ってもきりが無い。

「そ、そこはダメですよっ！」

一日生徒たちにもつちりと授業した彼女の身体は、汗で汚れていた。

クロウが来てすぐに誘惑を開始したため、シャワーに入れていない。

こんなところでもドジっ娘が発動である。

クロウは綺麗に処理された腋のくぼみを舐める。

そこは確かに汗が溜まっており、しよっぱさを感じるのと同時に、母乳の影響だろうか、甘さも感じられる。

「うむ、美味いぞ。ただ少し匂うな」

「や、やめてください……」

真耶は恥ずかしさのあまり、ここから逃げ出してしまいたい気持ちになる。

しかしいくら一般人より強いといえども、筋骨隆々の変態からは逃れられない。

しっかりと腕を持ち上げられ、腋を舐められ続ける。

だが次第に真耶も感じるようになり、ビクビクと身体を小刻みに震わせる。

「んっ、あっ、はっ、ひんっ！」

クロウはしつこく真耶の腋を舐め続ける。

最早最初に感じていた汗の味などはなくなっており、クロウの唾液で汚れきつていた。

真耶の抵抗が弱くなるのを感じ、片手で乳首をくりくりと転がす。するとじわりと母乳がにじみ出てきて、甘い匂いが辺りに充満する。

「中々の匂いだ。これが真耶の匂いか……」

「ち、違いますっ！本当はもつと良い匂いがあるんですっつー！」

唾液でべちよべちよになった腋に鼻を寄せ、わざと声に出して匂いの感想を述べる。

こうすることによって、Mっ気がヒロインたちの中では比較的高い真耶を興奮させることができる。

真耶は顔を背けるが、クロウは蕩けた表情をしていることが手に取るようにわかった。

腋の匂いは、クロウの唾液と甘ったるい匂いが混ざり合い、何とも言えない匂いを醸し出していた。

しかし意外と真耶には受け入れられ、陰部の温度が高くなる。

「こっちはどうなっているっ？」

「あつ、そっちは……！」

真耶は慌てて止めようとしてくるが、クロウは止まらない。

爆乳にむしゃぶりついて母乳を啜り、力が抜けた瞬間を狙いショーツをずらす。

ぐいっとずらすと、陰部は愛液で大変なことになっていた。

粘性の高い愛液はショーツにへばりつき、ねつとりと淫靡な橋を架けていた。

何度も使い込まれたはずなのに綺麗な形をしている秘裂からは愛液がこんこんと今も溢れ出しており、薄い陰毛をべつとりと濡らしている。

下は尻穴にまで、愛液が垂れている。

「随分濡れているな。それに匂いも強い」

「嗅がないでくださいっ！」

むわっと熱気がクロウの顔を襲う。

汗の匂いと、女が興奮している匂いが混ざり合っている。

ふーっと息を吹きかけてやると、ひくひくと秘裂がうずく。

言葉攻めされたせいで、乳首から母乳が滲み出す。

「綺麗だぞ」

「は、恥ずかしいからやめてください……」

指で秘裂をくぱあっと開ける。

大量の愛液が指に付着し、ぬるぬるとする。

大きく開けられたそれは、陰部の器官すべてをクロウにさらけ出していた。



真耶は顔をさらに赤く染めて手で隠そうとするが、クロウが邪魔してうまくできない。

「ひあつ！あう！あつ！あつ！あつ！！」

べとべとになっていて陰部に顔を近づけ、開けた秘裂をれろりと舐める。

すると敏感な真耶はびくうつと驚いたように身体を反応させる。

次に固くなっている陰核をレロレロと舐める。

最も敏感で感じやすい器官を舐められて、真耶は爆乳を揺らしながらあられもない嬌声を上げる。

腔内からトロトロと愛液が絶え間なく流れ出している。

真耶はキュウウウツツと軽く絶頂を迎える。

しかしそれでもクロウは舐めることを止めない。

「腰が震えているぞ、真耶。気持ちいいか？」

「ひっ！あつ！ああつ！かつ……はっ！や、やめ……っ！！」

最早真耶はクロウの問いに、ろくに答えることすらできなかつた。

敏感な陰部を舐め上げられていると、腰が言うことを聞かなくなる。

腰以下の下半身すべてをがくがくと震えさせる。

何とか真耶はクロウを離れさせようとして頭に手を置くのだが、クロウの強靱な肉体

はまったく動く気配がない。

それどころかお仕置きだとばかりに、ヂュルヂュルと激しく音を立てて攻め立てる。そのせいで真耶は反抗する気概さえなくなってしまう。

クロウはそれだけでなく、胸を揉みしだく。

何度も連続して絶頂を迎えているせいで、母乳が絶え間なく流れ出している。

真耶はだらしなく口を開けて舌を出し、見事なアへ顔を見せてくれた。

このまま一度イさせることを決めたクロウは、しつこく陰部に顔を埋めるのであった。

## 続・山田 真耶

「ひあああああああつ!!」

何度も連続して軽い絶頂を迎えていた真耶だが、ここにきて大きな波を迎えた。肉付きが良すぎる肢体が、悩ましげにビクビクと震える。

顔を陰部から離すと同時に、プシヤアアアアツと勢いよく潮を噴く。

真耶は脚をピンと張り、カクカクとあさましく腰を振る。

乳房からも母乳が溢れ出す。

クロウがあげたシャツは、もう母乳と汗で着られるものではなくなっている。

「いったな、気持ち良かったか？」

「う……はい……」

消え入りそうなほど小さな声で、クロウに同意する。

ただ身体はまだ絶頂の余韻の真っ只中にあった。

ヒクヒクとあさましく動く陰部から、思い出したかのようにびゅるると潮が噴き出す。

勢いは衰えてしまっていたが、脱水症状が心配になるほど体液を排出している。

膣内は愛しの肉棒を求めてキュンキュンと疼いている。

「さて、そろそろ私も気持ち良くさせてもらおうか」

「わあ……本当に大きいですね」

そう言うところクロウはズボンをおろし、興奮して固くなっている逸物を取りだす。

亀頭は我慢汁で濡れており、わざわざ濡らす必要はない。

太くて長い陰茎には、グロテスクにも血管が何本も浮かび上がっている。

そんな男根を見て、真耶はドキドキと爆乳の中で胸を高鳴らせる。

これから何度もその巨根で貫かれると思うと、子宮が期待できゅんとうずく。

「ん、んん……っ」

一応濡れてはいるが、さらに濡らしておけばスムーズに動くことができるだろう。

そう考えてクロウは愛液で濡れそぼった秘裂に逸物をこすり付ける。

にゆるにゆると粘性の高い体液が、男根に付着していく。

そして十分に濡らした後、クロウはついに真耶の陰部に照準を合わせた。「はっ、あっ！うあっ！あっ！ひいっ!!」

いきなり突っ込むようなことはせず、馴らすようにじつくりと腰を沈めていく。

何度も使われて開発されており、Mつ気の強い真耶ならいきなり突っ込まれても大丈夫なのだが、クロウは焦らしてみたいようだ。

亀頭が入るだけでも愛液がとくとくと溢れ出し、小刻みに身体が震える。そこからゆつくりと男根を埋めていく。

びつたりと閉じていた膣内が、逸物に押し広げられていく。

真耶の膣内は男根を優しく締め付け、やわやわと揉んでくる。

まさに何でも受け入れてくれる女神である。

しかし射精を促すように動くのは、サキユバスのようだ。

「んはあああああ……っ!!」

じつくりと押し進めていた男根が、とうとう止まる。

亀頭の先にコリコリとした子宮口の感触がする。

さらに推し進めて子宮内まで侵入させてもいいのだが、真耶はまだ慣れていないので、今はそれを止めておく。

Iカップの爆乳の先っぽからは、白い母乳がにじみ出る。

「動くぞ、いいな」

「は、はい。私で気持ち良くなってください……」

尋ねるといふより命令のような感じでクロウが聞く。

しかし真耶はそれを嫌がることはせず、むしろ命令されたということで身体がゾクゾクと反応し、悦んでいた。

クロウは真耶の返答を聞いて、腰を動かしだす。

大量にあふれ出ている愛液が腰を打ちつけるたびに付着し、又チャ又チャと淫靡な音が立つ。

「はうううっ!!う、後ろからは……っ!!」

クロウは自慢の筋力を活かして、真耶の身体をくるりと反転させる。

今の体位は背面座位だ。

真耶は後ろから突かれるのが支配されている感じがして好きだったりする。

クロウも真耶を後ろから突くと、爆乳が面白いように跳ねるから好きだ。

「はあっ!んっ!も、もっとなんて動いてください……んんっ!!」

「激しく動かされたほうが好きだろう?」

確かにその通りだが、エロい女と言われているようで釈然としない真耶。

しかしそれはクロウに子宮口を突かれることで、完全に忘れ去ってしまう。

ほとんど動けない真耶に代わり、クロウは下から長大な逸物を膣内に突き入れる。ずっずつと子宮口が押し上げられる。

後ろから暴れまくる爆乳を掴む。

むにゅむにゅと感触を愉しみながら揉んでいると、ピンと尖った乳首から母乳が垂れる。

「んっ！はっ！んっ！んっ！！」

巨大な男根を咥える陰部は、卑猥に広がっている。

そこからまるで洪水のように、大量の愛液が漏れ出している。

でんと肉が大量にのった臀部にも、淫猥な水滴が飛び散っている。

男根は言うまでもなくビチヨビチヨで、引き抜くさいには白く濁った本気汁も混じっている。

「可愛いぞ、真耶」

「ふああああああ……！！」

耳元でポソリと囁かれ、真耶の脳が蕩ける。

そのまま真つ赤になっている小さな耳をれりりと舐める。

真耶の背筋にゾクゾクとした電流が走り、大きく口を開ける。

しつこくIカップを揉んでいる手は、母乳でベトベトになってしまっていた。

「ひゃああ……！耳は舐めないでください！ああっ！！」

身体中余すことなく開発されつくした真耶の身体は、豊満な肢体に似合わずかなり敏感である。

当然耳もしっかりと開発されている。

クロウが耳をレロレロと舐めると、びくんびくと可愛らしく反応する。

腕の中で可愛らしく震える真耶を見て、クロウはまた悪戯心が刺激される。

「真耶、私が見ていてやるから、自慰を試してみろ」

「んっ！いつ！な、何ですかあっ！ひいつ！！」

命令を断りそうな雰囲気だったので、無理やり逸物を子宮口に押し付けてやり、反論できなくする。

卑猥に広がって男根を受け止めている陰部から、ヌチュヌチュと粘っこい音がする。

真耶は恥ずかしすぎる命令をされたのにもかかわらず、胸をドツドツと高鳴らせていた。

胸を揉みまくっているクロウからはお見通しである。

真耶にしては長く抵抗したのだが、結局クロウに耳の穴まで舐められて自慰することに頷いてしまう。

まあ長くと言っても二分くらいなのだが……。



「んっ、はあ……っ！あっ！ふあっ！！」

恐る恐るといった様子で、真耶は自慰を始める。

片手は母乳でベトベトになった乳房へ、片手は今もつながったままの陰部へと伸ばす。

そして真耶はクロウに見られているということに興奮しながら、手を動かし始める。母乳で指を濡らすと、色素の薄い乳首をこねる。

さらに下は愛液で指を濡らし、つながっている上にある固くなつた陰核を弄りだす。間近で豊満な美女の自慰を見て、クロウは男根をさらに固くさせる。

真耶も嫌がっていた割には、クロウに見られていることにいつも以上に興奮していた。

「んはあっ！ああっ！はっ！あっ！」

クロウに膣内を抉られ、自分で陰核を擦りあげる。

そうしているとぷしゅと勢いよく潮を噴く。

また新たな液体により、クロウと真耶の下半身が濡れる。

だがクロウは腰を振るのを止めず、チュポチュポと愛液で満ちた膣内をかき回す。

「ふっ！あっ！んひいひい……！激しいですうう……！！」

潮を噴いて大きな絶頂を迎えた真耶は、だらしなく顔を緩める。

ビクビクと身体を振るわし、たぶんと爆乳を波打たせる。

しかし当然クロウはさらに真耶を蕩けさせようとする。

いつてしまつて胸の自慰を止めていたので、代わりに乳首をひねりあげてやる。

すると甲高い悲鳴を上げて、乳首から母乳を吐き出す。

そして身体を支えることができなくなり、力なく上半身を地面に倒す。

しかしクロウは腰をがつちりと掴んで持ち上げ、尻だけ掲げさせる。

こうして背面座位から体位を変えて、後背位になつたクロウは、猛然と腰を振る。

「あつ、あつ、あつ、あつ!!」

ずちゆずちゆと膣内をかき回しながら、逸物を突き入れる。

むつちりとした尻を掴み、時には撫でたり叩いたりする。

真耶は脚に力を入れることができず、カクカクとあさましく震わせている。

だがクロウがしっかりと尻を掴んでいるので、腰の位置は安定している。

「真耶はバックが好きだったな」

「んひひひ……はいいつ！好きです！気持ちいいですっ!!」

クロウに聞かれて正直に答える真耶は、普段の慕われている教師の顔ではなかった。

腰を掴まれて奥深くに男根を突き入れられるたびに、あられもない嬌声を上げる。

コツコツと子宮を押しつぶされると、目を見開いて快感を貪る。

陰部からはびゆるつと勢いが衰えた潮を噴かせ、クロウの下半身を汚す。

爆乳が身体を揺らされるたびに連動して動き、乳首がシャツにこすれて刺激され、母乳を垂れ流す。

真耶は口からよだれをたらし、ぎゅつとシーツを掴んで快楽に耐える。

クロウから見ると、下には自分に手によってよがる美女がおり、征服感が刺激されて非常に興奮する。

「はあっ！あっ！ひんっ！あっ！うっ！！」

色々な液体を全身から垂れ流す真耶を見て、クロウは満足する。

ニコニコと笑顔の絶えない教師の鑑とも言える人物が、だらしなくアへ顔をさらしなから自分の下で嬌声を上げているのだ。

多くの男が見たい、触りたいと思っていたものを、クロウは全て手にしているのだ。

こうやって厚い尻タブを開くと、不浄の穴まで見ることがができる。

「クロウさん！好きです！大好きです！」

真耶はろくに力の入らない身体に鞭を打ち、身体をくるりと反転させ、クロウに抱き着く。

太い首に腕を回し、キュツと抱きしめる。

こんな愛の言葉を受け止められるのもクロウだけだ。

そのことがクロウを興奮させる。

豊満で柔らかい肢体が自分に抱き着いてきて、その感触を堪能する。

爆乳からにじみ出た母乳が、クロウの胸板や腹筋を汚す。

「真耶、愛しているぞ」

「んんっ!?!んっ、はあ……」

クロウも熱烈な愛の言葉を受けて、嬉しくないはずがない。

ぼつてりとした唇に吸い付く。

真耶も驚いたように目を見開いていたが、次第に顔を蕩けさせ、自分から唇を押し付けはじめた。

舌を絡ませ合ったり、唾液をたつぷりと交換する。

「あぁっ…ひいいっ…んんっ…いいっ!!」

腰の動きが激しくなる。

豊満な真耶の身体とクロウの鍛え上げられた固い身体がぶつかり合い、パン!パン!と軽快な音が立つ。

真耶は逃げることなく、むしろ自分から尻をぶつけに行く。

男根を包む膣内は、きゅんきゅんと締め付けてくる。

「あっ…ふっ…バックもいいですけど、この体制も好きです。んんっ!!」

最終的に対面座位の体位で落ち着く。

真耶はプルプルと震えながらも腕をクロウの首に回して、抱き着く。

顔を近づけあい、ねっとり大人のキスを交わす。

ちゅちゅちゅと舌を絡め取り、押し付け合う。

Iカップの爆乳は、クロウの厚い胸板に押しつぶされる。

にじみ出た母乳が身体にこすり付けられ、甘い匂いを発する。

汗と愛液だらけの尻を掴んで、腰を振りやすくしている。

真耶が腰を落とすと、愛液と汗がクロウとの間に何本もの橋を架ける。

もう下半身は濡れているどころのさわぎではなくなっているほどに、びしょ濡れだった。

「んはっ！やっ！んあっ！はひいっ！ああっ!!」

自分の手が液体だらけになりながらも、むっちりとした尻を揉みまくる。

そして尻タブを開くと、キュツと窄まった尻穴に指を侵入させる。

一応いつでもいいようにはしているが、真耶もさすがに恥ずかしいようだ。

しかし尻穴をにゅぽにゅぽとほじられる快楽は我慢できるものではないようで、顔をすっかり蕩けさせてしまう。

時折乳首に吸い付かれて母乳も吸われ、すっかり肉便器と化してしまった。

「んひいっ！イグー！イきます!!」

「私も射精すぞ」

尻穴をほじられて、さらに反応を過敏にする真耶。

ギュツとクロウに力いっぱい抱き着き、天を仰ぐ目は見開き、口はポカンと開いている。

腸内に侵入させていた人差し指を、さらに奥へと突っ込む。

一般人の指と比べて太く、ゴツゴツと武骨なそれは腸壁をゴリゴリと抉る。

「はあっ！んはあっ！あっ！あっ！あっ！あっ!!」

舌をだらしなく出して、大きな嬌声を部屋に響かせる。

素早く男根を出し入れしている陰部は、もう何の液体かわからないほどの洪水状態。

それでもさらに濡らしてやろうと、尻穴で指をぬぶぬぶと出し入れするのはやめない。

すると男根を締め付ける膣内と、指でほぐされている腸内が、きゅうううつと締め付けてくる。

真耶の絶頂を予感したクロウは、自身も同時に射精できるように調整する。

「んあああああああっ!!」

まず真耶が絶頂を迎えた。

クロウに力いっぱい抱き着き、ビクンビクンと身体を跳ねさせる。顔全体を蕩けさせ、超難関高校の教師とは思えない牝顔である。

絶頂と同時に母乳も吹き出し、クロウの胸板を汚す。

そしてクロウも少し遅れて射精した。

真耶の豊満すぎる肉体に溺れ、射精量はかなり多い。

ドピユツと大量に飛び出した精液はすぐに子宮内を満たし、逆流を始めた。

最後までクロウに弄られていた尻穴はポカンと穴をあけており、ヒクヒクとそこだけ疼いていた。

「はぁ……はぁ……」

しばらく二人は抱き合ったままでいた。

汗やら精液やら母乳やらでべたべたになっていたのに、身体をギュッと密着させ合っていた。

未だ膈内に収められた逸物からは、どくどくと精液が漏れ出している。

真耶の子宮内は、文字通り精液で溺れそうになっていた。

「真耶」

クロウが名前を呼ぶ。

それだけで彼が何を求めているのかが、真耶には分かった。

自分の前で仁王立ちし、精液と愛液で汚れた逸物を突きつけてくる。

ひくひくと小刻みに震えているそれに、ちゅつと唇を落とす。

ちよつと口をつけたただけなのだが、どろつとした精液が舌の上ののつた。

それを胃の中に流し込むと、ゾクゾクとまた軽く絶頂を迎えた。

自分の精液を飲んで、豊満な身体を震わせる爆乳美女を見ると、クロウは興奮することを禁じ得なかった。

「ん、ぢゆるるるるっ」

男根をハーモニカのように横から啜える。

そしてへばりつく精液と愛液の混合液を掃除するように、先端から根元へと顔を滑らせる。

自分の舌でビクビクと震える男根が可愛らしく思える真耶。

緑の髪が陰茎に引っ付くのも、気にしなかった。

「ん、ちゅ……はあつ、ぺちや、れろっ」

陰茎を綺麗にし終わると、次に真耶は陰囊を舐めはじめる。

大量に精液が溜まっているそこを、労わるように舐める。

クロウの太ももに手を置き、奉仕させられている被虐的な快感が真耶を襲う。

時たまクロウの脚に爆乳が押し付けられ、母乳を残して離れていく。



「ん、んぐぐぐ……っ」

そうして一通り男根を綺麗にすると、最後の締めとばかりに、亀頭から男根を飲み込み始める。

臨戦態勢ではないが、それでも巨大な逸物を全て口に含むのは大変だろう。

しかし当然クロウからやり方を教えられているため、真耶はすんなりと男根を飲み込んだ。

喉奥まで男根を突き入れ、ゴキユゴキユと喉で逸物を愛撫する。

爆乳が身体に当たって気持ちが良い。

「ヂュルルルッ！グプグプ、ヂュプ」

「むう」

根元まで咥えていた男根を、吸いながら引き抜いていく。

精液を全て搾り取られるような快感に、クロウも呻く。

派手な水音を立てて、男根を綺麗にする。

クロウは思わず真耶の頭を掴み、強く握ってしまう。

しかしM嗜好のある真耶は、それを快楽に変換して意外と平気であった。

「ふはあっ……」

ようやく男根から口を離す真耶。

そしてクロウに結果を示すために、大きく口を開ける。

真耶の口内には、大量のねばっとした白濁液が溜まっていた。

口から零れ落ちる精液を、真耶は手で皿を作って受け止める。

でろお……と零れ落ちるのが、またエロい。

「よくやったぞ、真耶」

「ありがとうございます……」

クロウは真耶の頭を撫でて、功劳をたたえる。

真耶は撫でられる感触をしっかりと感ずるよう、目を細めて頭を手にごすり付ける。

そしてクロウにしなだれかかるように、寄りかかる。

口から精液を零し、爆乳からは母乳を垂らし、陰部からはこぶつと精液をあふれさせる。

傍から見れば、大量の男に犯された女のように。

だが真耶は幸せそうに笑っているのであった。



「はい、クロウさん。お茶です」

「うむ」

真耶は綺麗に食べつくされた食器を片しながら、クロウに食後の熱いお茶を渡す。

愛している男に手料理を食べてもらおうということで、彼女はかなり張り切って作り過ぎてしまったのだが、クロウはそれを全て食べた。

真耶の手料理がうまかったということも理由だが、彼女が作ってくれた料理を残すと選択肢はなかったのだ。

真耶もそれをなんとなく察しており、嬉しそうに笑っている。

「料理がうまくなつたな、真耶。いつでも私の嫁になれるな」

「よ、よよよ嫁ですかっ!?!」

ズズズ……と美味そうにお茶を飲みながら、ふととんでもないことを言うクロウ。

真耶は耳ざとくそれを聞き、ポフンと顔を真っ赤にする。

確かに真耶も、そろそろ結婚を考えてもおかしくない年齢だ。

というか最近では女尊男卑の間違った風潮が世界に蔓延しているので、結婚をしたがる男性が減っているのだ。

そのおかげで少子高齢化が高速化し、結婚平均年齢もだんだんと上がっていきたりする。

だから真耶はその容姿や性格もあり、まだまだ余裕があるのだが、結婚に憧れるのが、普通の女性というものである。

「む？嫌だったか？」

「いい、いいいいいい！そんなことありませんよ？むしろ待ちわびていたというか……」  
クロウの質問に慌てて首を振って否定し、でへへ……とだらしなく笑う真耶。

真耶が可愛らしくなかったら、間違いなく通報ものである。

彼女はよくクロウとの結婚生活を妄想していた。

朝、中々起きてこないクロウを起こし、一緒に寝ている子供たちも起こす。

そして決して豪華ではないが、愛情を込めた朝ごはんを振る舞い、それぞれ学校や仕事場に送りだす。

出勤前に行ってきますのキスを……。

「きゅーん」

真耶は頬に手を当てて、くねくねと身をよじらす。

すでに子供がいる設定になっていたり、クロウがどこで働いているのかと疑問は尽きないが、これは真耶の妄想。

ハッキリ言つて、なんでもありなのである。

「雰囲気も何もないし、改めて後日結婚を申し込もう。今はゆっくりとしよう」

「……はい」

真耶が淹れたお茶を飲みながら、ぼけーつとして言うクロウ。

まさか結婚を申し込んでいるような態度ではない。

しかし真耶は、クロウが真剣に考えてくれていることが分かっているので、満足だった。

だから彼女はにっこりと幸せそうに笑ったのであった。



「その前にまずはこれだな」

「そ、それは……っ！」

クロウが無表情のまま置いたそれを見て、真耶は心の中で絶叫する。

何故これが今ココで人の目を浴びているのか……。

しっかりと隠してあつたはずなのに……。

色々な想いが頭の中に浮かび上がっては消えていく。

真耶は改めて、クロウが置いたそれを見る。

ふわふわな毛糸が付いた、手錠もどき。

プニプニの素材で叩いてもいたくない、鞭もどき。

そして何故かこれだけが本物の、首輪。

「さあ、真耶。今日は寝るのが遅くなりそうだな」

「お、お手柔らかにお願いします」

ソフトM、山田 真耶。

今日は中々ねられそうにないようだ。

## セシリア・オルコット

オルコット家は、イギリスの名門貴族である。

一度は当主とその夫が事故で還らぬ人となったために没落の危機となったが、一人娘の尽力によりそれは防がれた。

その娘は女性にしか使えない超兵器である I S の優秀な操縦者となり、オルコット家をさらに繁栄させる。

今ではイギリス屈指の大貴族となり、総資産も世界有数のものとなっている。

イギリスの国家代表生としても活躍しており、モデルとしても露出している彼女は、イギリス淑女の憧れの的である。

しかしそんな淑女たちが想像しているような清廉な生活ではなく、その娘——セシ

リア・オルcottの送っている生活はもつと墮落した、退廃的なものであった。



「ん……」

セシリアはいつも定刻通りに目を覚ます。

彼女の他者を引き付けてやまない美貌は、この規則正しい生活にも理由がある。

身体を起こし、ググーっと背筋を伸ばす。

高級ベッドの上に散りばめられていた宝石のような金色の髪が、さつと持ち上げられる。

背筋を伸ばすことによつて胸を張る形になり、豊かな乳房が強調される。

セシリアは何も身に着けておらず、美しい肢体を惜しげもなくさらしていた。

いくら暖かい季節とはいえ、普段なら彼女もネグリジェを着て寝ている。



しかし昨日は色々致していたため、全裸なのだ。

「クロウさん……」

セシリアは隣で眠っている巨漢に、ほう……と熱いため息を漏らす。

筋骨隆々の巨大な男が、貴族の美女と同じベッドで寝ているのは少し異様である。

しかしセシリアの熱い視線からは、幸せといった感情しか伝わらない。

昨日も彼女はクロウに散々に追い詰められて失神してしまった。

あれこれと体位を変えられ、何度も子宮を押しつぶされると前後不覚になってしまうのも当然だ。

「あら、わたくしが眠ってしまった後も、たくさん愛されたようですね」

セシリアはふと自分の身体を見下ろし、クスクスと笑う。

彼女の純白の肌の上に、男のキスマークが大量につけられていた。

それは細い首筋につけられており、また豊満な乳房には何個もつけられていた。

乳首の周りを覆っているようにも見え、ぐにと乳房を開けてみると谷間にもいくつも見える。

大貴族の当主であると同時に国家代表生であるので普段から鍛えられて引き締まったお腹にもつけられている。

肉付きが良く、性感帯でもある内の太ももにはかじりついたような跡もある。

セシリアは見えていないが、背面もまた大量に男の跡がつけられていた。

普段は豊かな金髪のロールに隠されている産毛一つ生えていない美しい背中にも、自分のものだとマーキングするかのように痕がある。

特にひどいのが、セシリアの豊満なお尻である。

むつちりと豊かな肉付きの臀部には、キスマークは当然のことながら、歯型や強くたたかれた手の痕まであった。

それでもセシリアはクロウに所有されているかのような自身の身体に、興奮を隠せない。

大貴族の当主がこれでいいのかとも思うが、本人が幸せそうなのでいいのだろう。

「それに……凄い臭いですわ……」

セシリアは腕に鼻を寄せて、クンクンと匂いを嗅ぐ。

するとよく使う高級な香水の匂いではなく、生臭い雄の臭いが鼻孔を満たす。

普通の人なら鼻をつまむ臭いも、愛おしい人のものだとするとセシリアは非常に強い媚薬のように感じる。

それは胸やお尻など、女性の象徴とも言える場所はとくに臭いが強い。

セシリアはそうされることに文句はないのだが、大切に扱っている金色の髪まで汚されるのは面白くない。

いくらクロウといえども、髪はセシリアにとって一番大切な身体の部位なのである。「もう……女性にとつて髪は命ですよ？」

仰向けになつて眠るクロウの上に跨り、キュツと鼻をつまむ。

表情はほとんど変わらないものの、長い付き合ひのセシリアは息苦しそうにピクリと一瞬歪んだ眉を見逃さなかつた。

そんな反応がおかしかつたのか、また上品にクスクスと笑う。

しかし全身から精液の臭いを発しているので、淑女とはいえないのが悲しい。

「む……」

「おはようございませう、クロウさん。起こしてしまいましたか？」

息苦しきから目を開けたクロウは、全裸で自分の身体に跨り、ニツコリと微笑みながら見下ろすセシリアを見る。

鼻をつまんだのは自分なのに、まるでクロウが自然に起きたかのように接する。

彼女もI S学園を卒業してから社交場に出ることが多々あり、演技もまたかなり上達したのであつた。

クロウとしてもとくに文句はなかつた。

昨日だつてセシリアが失神したのにもかかわらず、腰を掴んでベッドに崩れ落ちないようにして腰を振り続けたのだから。

最後の方は彼女に憧れている人々には見せられないような凄惨な姿になっていたのだが、それはクロウの脳内にだけ収められるのである。

さて、文句はないのだが身体は反応していた。

自分の身体に跨り見下ろしてくる絶世の美女。

しかも彼女は全裸で、クロウを覗き込んでくるせいで量感のある乳房が垂れて柔らかそうに揺れている。

先端の乳首もツンと立っていて、昨晚どれだけイジメぬいてやったか思い出すとたまらない。

それにむちむちの柔らかい尻肉の感触が下腹部に感じられる。

そんな情景を見たりしていると、逸物に血が集まるのは当然のことであった。

「んっ……当たってますわ」

「うむ、どうしようか」

お尻に感じる熱い棒のことをクロウに告げるが、ただ自分の目を見返してくるだけだ。

昨晚散々に出したはずなのに、もう元気なそれには呆れを通り越して感心してしまう。

グイグイとお尻に肉棒を押し付けられると、可愛がられたことを思い出す。

口でそれに奉仕して、胸でそれを奉仕し、肉壺でそれを収めたことを。キyunと子宮がうずき、秘裂から愛液が垂れる。

自然と腰を自ら動かし、男根にお尻をこすり付けるように動いてしまう。

「……どうすればいいのか、教えてくださらないのですか？」

「セシリアなら分かるだろう？」

自分を見降ろして助けを請うかのような視線を受け止めるが、答えを言わずに頭を撫でてやるクロウ。

セシリアは自分から淫靡な行為をしると言われていることに羞恥心を覚え、白い肌をカツと赤くするが、確かにクロウの言う通りなのでコクリと頷く。

一度触れるだけのキスをして、身体をどんと後ろにずらしていく。

そしてクロウの身体を覆っているシーツを掴み、横に置く。

すると赤黒く、巨大な女泣かせの男根が天に向かってそそり立っているのが、セシリアの視界に入った。

その凶悪な形は、女の気持ちいい場所を抉り擦るに違いない。

実際にセシリアはそれを実感しているため、そのことがよく分かる。

そんな逸物に、彼女は顔を寄せる。

スンスンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぐと、自分の身体を匂った時以上の雄の臭いが鼻

いっばいに広がった。

「はああああ……っ」

セシリアは媚薬のようなその匂いを嗅ぎ、堪らないといった表情でため息を吐く。

美しい蒼い瞳は涙で潤み、口内は唾液でいっばいになる。

豊満な乳房の先端にある乳首は固く隆起し、陰部から愛液が垂れて太ももを濡らす。

背筋にゾクゾクとした電流が走り、子宮がキュンキュンと疼く。

ただ匂っただけで、こんなにもセシリアは昂つてしまうのだ。

「はあっ、はあ……っ」

セシリアはまるで犬のように短く息をして、雄の臭いを貪る。

クロウも昨日身体を洗わずに寝たため、とくに臭いがきついのだ。

精液と汗、それにセシリアの愛液と小便の臭いが混ざり合っている。

鼻が曲がるように悪臭は、彼女にとって強烈な媚薬である。

「わたくしのせいでこうなつたのですから、んっ、わたくしの口で静めてさしあげますわ」

セシリアはそういうとニツコリとクロウに微笑む。

しかしそれは先ほど浮かべた上品な淑女の笑顔ではなく、獲物を前にした捕食者の笑顔であつた。

まあクロウにしたらそちらのほうがありがたいのであるが。

セシリアはあんと口を開け、強烈な匂いを放つ男根を飲み込もうとする。

彼女の口内は唾液でいっぱい、真つ赤なそこに逸物を突つ込むと気持ちいいことは間違いない。

そしてとうとう男根がセシリアの口の中に収まろうとしたとき。

「——お嬢様」

「!？」

自分でもクロウでもない、第三者の声を聞き、バツとクロウから離れるセシリア。

一気にクロウから距離を取る姿は、普段から足腰を鍛えている様子が伺える。

……ただ今の状況にはあまり関係がないようだが。

セシリアは顔を真つ赤にして、声の主を見る。

「ちえ、チエルシー!?!どうしてここに……」

「もう八時です、お嬢様。朝食の準備はすでに終わっています」

セシリアが問いかけると、彼女の専属メイド——チエルシーは目を閉じたまま答える。

えつと壁にかけられている時計を見ると、確かに針が八時を指していた。

クロウとイチャイチャしているうちに、時間は着々と進んでいたのだ。

「いつも朝食に降りてこられるお嬢様を起こしに、私が来たということですよ」

「そ、そうなの、ありがとうチエルシー」

「お嬢様、食事の前にシャワーを浴びた方がよろしいかと」

「そ、そうですね。それではクロウさん、失礼しますわ！」

わたたと慌てて服を着て出て行こうとするセシリアの背中に、チエルシーの助言が追いかける。

自分がクロウに散々犯された臭いが残っていることを思い出した彼女は、顔を赤くしながら飛び出して行った。

後に残されたのは、未だ臨戦態勢の逸物を持ったクロウと、静かにたたずむチエルシーだけだった。

「えらくタイミングが良かったな、チエルシー」

「そうでしょうか」

手持無沙汰になったクロウは、チエルシーに話しかける。

チエルシーも静かにそれに答える。

そっけなく感じるが、二人はこういった関係だった。

「自分の主に嫉妬したか？」

「……あなたも早く準備をしてください。今はオルコット家の執事なのですから」



クロウはベッドから抜け出しながら、チエルシーに問いかける。少し間はあつたものの、彼女は冷静に言葉を返す。

「そんな彼女にじりじりと近づいていくクロウ。」

とうとう正面に立ち、固くいきり立つた逸物を強調する。

「うむ、そうしたいのはやまやまなのだが、いかんせんこれが邪魔になつて仕方がない」

「……………」

「やっつけてくれるな?」

逡巡するチエルシーに、グツと迫るクロウ。

結局彼女はクロウの頼みを断ることができず、仁王立ちする彼の前に跪き、勃起した

男根に顔を寄せるのであつた。



朝食を食べた後は、セシリアは意外とゆったりとした生活を送る。

オルコット家を立て直すときなら忙しかったが、安定した今はそれほど忙しいことはない。

午前にIS操縦訓練を受け、午後はのんびりと過ごす。

オルコット家の膨大な資産でスポンサーになってくれという面談も多々あり、セシリアが気に入った人物とだけ話して金銭援助をする。

ちなみによくに支援しているのが、フランスのIS企業であるデュノア社である。

まあフランスといっても世界中に支社を持つ大企業なのだ。

クロウが執事としてオルコット家にいなかった時は、セシリアはチエルシーなどの使用人たちとテニスをしてゆったりとした時間を過ごす。

彼が来てからは見るだけで孕んでしまいそうなほど色狂いの生活になっていたりする。

今日もまたクロウとしつぱりやるのかというと、そうではない。

夕方からイギリス貴族たちが集まる社交界があり、大貴族であるセシリアもそれになら参加するからだ。

個人的にはクロウとイチヤイチヤしていたと思うが、オルコット家の当主としては必ず参加しなければならない。

感情を理性で抑制し、セシリアは社交界に出席した。

「おお……実に美しい」

「まさに英国の宝石だ」

「ぜひともお近づきになりたいものだ」

そんな彼女が公の場に出席するときは、いつも人々の視線を独占して話題の的となる。

それは一般人のみならず、美女や美少女を見慣れているはずの英国貴族でもだ。

男性は勿論のこと、同性である女性でさえも目を引き付けてやまないセシリアの美貌。

それが社交界用にとおめかしをしているため、さらに美しく映えている。

金色の光り輝くような髪は美しくロールを巻き、彼女の周囲を煌びやかにする。

蒼い瞳は透き通り、見る者を捕らえる。

プルプルとした瑞々しい唇には薄く口紅が塗られ、蠱惑的に見える。

セシリアの専用機、『ブルー・ティアーズ』の機体カラーでもある青色のドレスは、彼

女の豊満な肢体を優しく覆っている。

スラリとした長い脚は、彼女がモデルでもかなり実力のある方だと教えてくれる。

「はあ……つまらないですわ」

セシリアは悩ましくため息を吐き、思っても口に出してはいけない言葉を話す。まあボソリとしたごくごく小さな独り言であつたので、聞いた人は誰もいなかったが。

しかしそれでも大貴族としてセシリアは言つてはいけなかつた。だがそれほどまでにこの社交界がつまらないのである。

セシリアに話しかける貴族は、この中にはほとんどいなかった。

普通なら傾国の美女と称すことができる彼女の美しさ目当てに、男性が寄つて行つてもおかしくない。

だがセシリアは今ではイギリスを代表するほどの大貴族である。

さらにはイギリスの国家代表生ということもあり、つりあう人がいないのだ。

それを弁えているので、人々はセシリアに話しかけない。

ここにクロウでもいれば話は別なのだが、貴族が大勢集まるこの会場で一執事が入場することは許されない。

セシリアは実家で使用人たちに見送られて、一人で来ていた。

「(あら？　そういえばクロウさんとチェルシーが見送りに出ていなかったような気がしますわね……。まさかっ!?)」

ふとセシリアは出立する前のことを思い出す。

彼女は使用人にも分け隔てなく接するため、多くの使用人たちに慕われている。

そんな多くの人たちに見送られたのだが、その中には自分の愛する人と姉的存在の完璧メイドがいなかった気がする。

というかいなかった。

ハツと何かに気づいたセシリアは、一刻も早く実家に帰ろうとする。

もう十分社交界に出たし、帰っても文句は言われまい。

そう考えて会場を後にしようとするセシリアだったが、そんな彼女の前に立ちはだかる人物がいた。

「オルコット様。どちらへ？」

「あなたは……」

セシリアの前に立ちふさがる壮年の男性。

彼女はこの人物に見覚えがあった。

オルコット家よりも歴史が古い大貴族だった。

影響力的にはセシリアの方が多分にあるのだが、男性の家も無視することができないほどの力はあった。

「何か御用でして？ わたくし、これから急いで家に戻らなければいけませんの」

「そうですか、それは残念です。ところでオルコット嬢、あの話は検討してくださいまし

たか？」

「あの話……?」

早く家に帰ってクロウとチエルシーを問い詰めたのに、邪魔をする男にイライラするセシリア。

しかし表面上はニッコリと美しく笑って対応する。

男性は残念そうにため息を吐くと、前にセシリアに提案した話とやらを切り出す。彼女の方は完全に忘れており、キョトンと首を傾げる。

はて、何のことやら……?」

「御冗談を。私の息子との結婚の話ですよ」

「……ああ」

男性に言われてやっと思い出したようで、ポンと手のひらに拳を置くジェスチャーをするセシリア。

そういうえば少し前に、この男性にそんな提案をされたような気がする。

クロウがいるセシリアは絶対に受け入れるつもりがなかったもので、すっかりと忘れてしまっていた。

一応その場でお断りしたはずなのだが、この男性はまだ息子のことを諦めていなかったらしい。

というかこの男性の息子は色々と問題なのだ。

容姿は醜いし、身体は典型的なおデブちゃんだし。

年齢だつて四十代。まだ二十代前半の美女であるセシリアには少し年が離れているように感じる。

そもそも血を絶やさないと重要な貴族の男性で、この歳になつてまで妻がいないということはよつぽどなのだろう。

「そのことでしたら前もお断りしたはずですわ。わたくしの気持ちは変わりませんわ」  
「そ、そう仰らずに！一度会うだけでも……」

きつぱりと断るセシリアに、男性は必死に食らいつく。

最早自分の息子のことはボンクラものだど理解しており、そのせいで大貴族である自分の家の名声がどんどんと落ちていっていることも理解している。

だからこそ、名声も財産も人望も美貌も、全て持ち合わせるセシリアに実家に嫁いでもらえれば、名声が回復すると考えているのだ。

「お、お願ひします！せめて息子に会うだけでも！」

「(し、しつこいですわね……)」

セシリアとしては一刻も早く家に帰つて真相を知りたいのである。

だがいい年をしたおっさんが半泣きになりながら縋り付いてくるのを、蹴っ飛ばして

先に行くこともできない。

どうしようかと悩んでいるとき、セシリアにとって救世主が現れる。

「セシリア」

「く、クロウさん!？」

背後からかけられた声に、バツと素早い動きで振り向くセシリア。

まるでご主人様に声をかけられた犬のような速さである。

そこには今セシリアが最も逢いたかった男——クロウが立っていた。

強靱な肉体を無理やり執事服におしこんであるため、やけにピチピチとしている。

少し気持ちが悪い。

「クロウ……クロウ・ミキストリかー」

そしてこの男性にも、クロウは知られていた。

というか全世界のほとんどの人が知っているといっても過言ではない。

数年前にぼつと出てきた二人の男性操縦者。その片割れなのだから。

その後はどの男もI Sを使うことができずに、結局世界で一人だけの男性操縦者となっている。

「うむ、似合っているぞ、セシリア」

「ありがとうございます。嬉しいですわ」



クロウに褒められ、華の咲くような満面の笑みを浮かべるセシリア。

それは先ほどの社交界や、今この場にいる男性に見せていた作り物の冷たい笑顔ではなく、心の底から発した暖かい笑みだった。

そんな笑顔を見せられたら、男性はもうセシリアのことを留めることができなかつた。

本来であれば自分の孫くらいの年齢であるセシリア。

そのような彼女の心からの笑顔を奪うほど、男性は腐つてはいなかつた。

さらに現実的な話をする、男性は確かに大貴族であるがその権力はイギリス国内のみでしか効力を発揮しない。

しかしクロウの持つ権力は世界中、ほぼ全国で行使することができる。

もし無理やりセシリアを息子に嫁がせてクロウの怒りでも買えば、酷い目にあうことは明らかであつた。

なので男性は、仲睦まじそうに歩いて行く二人を、残念そうに見送るのであつた。

## 続・セシリア・オルコット

オルコット家に戻ったクロウとセシリアは、セシリアの自室のベッドに座っていた。クロウの膝の上に、セシリアがちよこんと座っている。

普段ならはしたないと嫌がる彼女だが、クロウに助けてもらったと思っただけで女心がうずき、甘えたくなっているのだ。

セシリアは早速クロウにチエルシーとこのことを聞こうとする。

「クロウさん、少しお聞きしたいことが……んっ!？」

別に非難するつもりはないのだが、姉的存在のチエルシーのことを知りたかったセシリアは問い詰めようとするが、その前にクロウに口を塞がれてしまった。

勿論クロウの口で、である。

薄く口紅が塗られたプルプルの柔らかい唇の感触を愉しむクロウ。

「ん、んっ……」

十分に愉しんだ後は、セシリアの口をこじ開けて舌を伸ばす。

セシリアも目を細めて自身の舌を彼のものに絡ませる。

ちゅ、ちゅるとお互い唾液を舌に塗り合う。

セシリアは切なそうに鼻を鳴らす。

クロウは彼女の蒼いドレスをまくり上げ、ショーツの上から陰部を指で刺激する。

柔らかいそこを、くにくにと指でほぐす。

秘裂をなぞるようにスリスリと摩る。

「んはっ……」

唇を離すと、セシリアは深く息を吸い込む。

だが陰部をクロウに擦られて刺激されるため、すぐに息を吐き出す。

目をキュツと瞑って、気持ちよさそうに吐息を漏らす。

クロウとチェルシーとのことを聞き出したセシリアだが、クロウに愛撫されている

ためだんだんと思考がぼやけてくる。

ついには、終わってからでいいかなとさえ考え始める。

「あっ、はっ……、んっ」

しつこく、ねっとり陰部を刺激し続けるクロウ。

次第に愛液が滲み出し、純白のショーツが濡れはじめ。

その上から指をくにくいと動かしていると、ちゆくつと厭らしい水音が聞こえる。

敏感なセシリアはピクン、ピクンと身体を震わせる。

「セシリア、四つん這いになって尻を向けろ」

「こ、ことうですか……？」

クロウの膝から下ろされたセシリアは、彼に強い口調で命令される。

といつてもクロウは普段通りの無表情なのだが、それが何とも思っていないように感じられて強く言っているように聞こえるのだ。

大貴族の当主であるセシリアに、命令できる人間などほとんどいない。

イギリス軍部の上層部や政府高官たちでさえ、彼女には敬意を払っている。

セシリアは聞きなれない口調に、ゾクゾクと気持ちを昂らせた。

誰かに———というかクロウに命令されることに、性的興奮を覚えるようにまで調教されている。

まあそれはクロウのお気に入り女性の女性たち全員に言えることだ。

とくに強いのが、現在日本のIS学園で教鞭を振るっている爆乳教師であったりする。

セシリアは柔らかい高級ベッドの上で四つん這いになり、大きく張り出したお尻をクロウに向ける。

秘部を覆っているショーツは豊かな尻肉に軽く食い込んでいて、見る者の情欲を誘う。

太ももの裏やお尻には、プツプツと汗が浮かび始めている。

セシリアは当然のように胸元をはだけさせ、白い巨乳をさらけ出す。

おっぱい星人であるクロウの嗜好をよく理解している。

しかしセシリアに限っては、クロウはお尻フェチとなる。

「うむ、いいぞ。お前の厭らしい尻が全て見えている」

「そ、そんな恥ずかしいこと、言わないでくださいまし……んんっ!」

クロウの、意図して相手に羞恥を感じさせようとする言葉に、セシリアは顔を赤くして恥ずかしがる。

セシリアは抗議しようとするが、その言葉を途中で遮られる。

クロウが濡れそぼった陰部に手をつ突っ込んだからだ。

愛液と汗がうつすらと濡れているそこをまさぐり始める。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

秘裂を優しく撫でるだけで、ぢゅくつと湿っているのを感じる。

武骨で濁いた指を、セシリアの厭らしい液体が潤す。

くちゆくちゆとかき回してやると、ピクピクと可愛らしく反応する。

ぐつと突き出されている豊かな臀部の肉がフルフルと揺れる。

「あんっ」

充分に愛液が染みだしてきて、陰部を濡れたと判断すると、クロウは固く勃起した逸物を秘部にこすり付けた。

しつかりと準備されたそこは、ぬるぬると男根がスムーズに動けるようになっていく。

陰部を喉から手が出るほどほしい逸物に刺激され、身体が前に倒れそうになるセシリア。

そうすると動かしづらいので、クロウは強靱な腕で尻だけは今の位置に維持させる。

普段から体型の維持に努めているおかげでキュツと括れた腰を掴み、腰を動かす。

重力で下を向いている胸は、タプタプと柔らかそうに揺れる。

クロウに揉んでもらってワンカップ上がり、今ではEカップのそれは重たげに揺れている。

「んああっ!!あっ、ああっ……!」

ぬりぬりゆと秘裂に男根を擦られて、陰核がどんどん固くなり始めた。

クロウはそれを目ざとく発見し、そこに逸物が当たるように腰の動きを変える。

擦られたセシリアの反応は顕著で、ビクビクと豊満な肢体を震わせる。

目をグツと見開き、歯を食いしばる。

それでも陰核から送られる強い快感は、セシリアの脳を溶かしていく。

「あつ、あつ、あつ、あつ！」

セシリアが拒絶したり考え事が頭に浮かばないように、休憩をはさむことなく陰核を攻め続ける。

大きく張り出したカリ首で、コリコリとしつこく陰核を弾く。

括れた腰を掴んでいた手を下げ、むっちりとした肉のつまった臀部をすりすりと撫でる。

皮膚に浮き出た珠のような汗で、しっとりとした手触りになっている。

「んおっ!?そ、そこは……っ!!」

セシリアは目を白黒させて、後ろを見る。

自分の尻を抱え持ち、腰を押し付けている男。

問題なのは、クロウの巨大な逸物が入ってきた場所が腸内だということだ。

先ほどまで陰核を弄られて受け入れ体制が整っていた陰部を差し置いて、尻穴に突っ込まれたのだ。

ヌプププ……とゆっくりと腸内に侵入してくる男根。

セシリアの背筋にゾクゾクと電流が走る。

猛烈な息苦しさとそれを上回るほどの快感に、手はシーツをギュッと握りしめ、口を開けて舌を出す。

「ああああっ!!」

半分ほどまでしか入っていなかった男根を、一気に根元まで突っ込む。

キュツと窄まった腸内をかき分け、逸物の形を思い出させる。

汗で湿った豊満な尻に腰が回り、尻肉が波打つ。

セシリアはグツと背を反らして、量感のある乳房をタプタプと揺らす。

大量に浮き出した汗が飛び散り、キラキラと輝く。

尻穴に男根を突っ込まれたせいで、陰部からは愛液がピュツと漏れ出してしまった。

セシリアは四つん這いのあさましい姿のまま、身体はビクビクと震わせて絶頂した。

「尻でイったのか。いいぞ」

「ああ……んふう……」

クロウはいきなり激しく突くようなことはしなかった。

又チ又チとセシリアを焦らすように動く。

それほど深い絶頂ではなかったため、だんだんとセシリアはじれなくなった。

まるでここは自分のものだと、ゆっくりと形を教え込むようにしている。



「あ、あの……わたくしはもう大丈夫ですから……」

「ふむ……ではお前が動いてみる」

とうとう我慢ができなくなったセシリアが頼むと、何とも恥ずかしい要求をされてしまう。

しかし何年も前から色々と教え込まれてしまった彼女は、クロウの言う通りに動いてしまう。

両手と両膝で身体をしっかりと支え、お尻を淫靡に動かす。

くねくねと卑猥なお尻のダンスをして、腸内にある怒張を刺激する。

腸液が男根と絡まり、くちゆくちゆと淫猥な音もする。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

自分で動かしていると、良いところばかり刺激してしまうようになる。

だんだんと羞恥心も忘れていき、懸命に尻を振る。

身体を前後させ、男根をピストンさせる。

成熟した尻と乳房はブルンブルンと激しく揺れる。

吐息もまるで犬のようで、非常にあさましい。

そんな姿からは、普段尊敬されて愛されている名門貴族の当主と連想することはまったくできない。

「あつ！おつ！おつ！おつ！！」

イギリス屈指の貴族美女に、自分から尻を振らせるといふ光景に十分満足したクロウは、激しく腰を振りだす。

腸内をゴリゴリと抉る固くて巨大な逸物。

腸壁を擦られ、尻の中を蹂躪されるセシリアはあられもない嬌声を上げる。

高価で弾力にも優れたベッドが、ギシギシと悲鳴を出す。

「尻穴をほじられてよがるのか。そんなお前も可愛いぞ」

「んはああつ！おつ！おぐつ！だめでつ、すうつ！！」

クロウはセシリアに覆いかぶさるようにしながら、腰を突きだす。

巨漢に包まれた貴族の美女は、まったく見えなくなってしまう。

クロウの下から桃色の悲鳴を上げ、助けを請う。

しかし腸内を男根が我が物顔で行き来すると、口を大きく開けて顔をとろけさせる。

「ふあああああつ！あひつ！やつ！うあつ！！」

イギリス国家代表生の体力で何とか四つん這いの体勢を維持していたセシリアだったが、とうとう自分の身体を支えることができなくなってしまう。

後背位から、寝バックの形になる。

動きづらい性交体位だが、クロウは器用に腰を振って尻穴を抉る。

豊かな乳房はベッドに押しつぶされ、ムギユツと柔らかく形を変えている。嬌声を上げてゐる口の中に手をつ込み、真つ赤な舌を引きずり出す。

指でヌルヌルと弄んでいると、セシリアはそれさえも快感となつてしまい、顔を緩める。

クロウがグツと顔を近づけると、彼女は自分から顔を横に向け、舌を伸ばす。

レロレロと互いに絡め合い、唾液を交換し合う。

「あつーやつーああつーあつ!!」

クロウはセシリアとつながったまま、背中からベッドに倒れこむ。

するとセシリアはクロウの上に仰向けで寝転がる形になる。

中々に動きづらい体位だが、スプリングが優れている高価なベッドが手助けしてくれる。

ベッドに押しつぶされ窮屈だった乳房は、セシリアの上で解放された喜びを実感しているように、タポタポと揺れている。

セシリアの美しい白い肌の上には、汗が浮き上がり、彼女の身体が上下するとキラキラと輝きながら飛び散っている。

「む……………」も固くなっているな」

「——ツ!？」

セシリアは声にならない悲鳴を上げた。

目をぐるんと回転させて白目を剥き、ガタガタと身体を痙攣させる。全身から汗がブワツと多量に浮き出し、尋常ではない反応を見せる。

それはクロウがセシリアの勃起していた陰核を摘まんだせいであった。

「ひっ、ひいっ！そ、そこはおやめに……んおおおおっ!!」

セシリアが必死に呼び止めても、やはりクロウはまったく聞かない。

敏感な陰核を、クリクリと指の腹でいじめられる。

あまりの強烈な快感にセシリアはクロウの手の甲に爪を立ててしまおうが、頑丈なクロウにはまったく効かない。

陰核だけでも相当な快感なのに、腸内も再び抉られ始める。

尻穴と陰核。

セシリアの最も大きな性感帯を二つ同時に弄られ、最早耐えることなどできるはずもない。

「あああああああつ!!」

穏やかで物静かな大貴族の当主が、決して出さないような獣の如き嬌声。

防音設備が整えられたこの部屋でなかったら、屋敷中に響き渡っていたことだろう。

クロウの身体の上で、ビクンビクンと美しい豊満な肢体を震わせるセシリア。

陰核をギュッと潰されて、口をパクパクと開閉させる。

腸内に埋められていた男根は、ぐにぐにとまるで引きちぎらんがごとく締め付けてくる腸壁に囲まれていた。

我慢する必要もないので、セシリアの絶頂と同時にクロウも射精した。

たつぷりと濃厚な精液が注ぎ込まれていく。

「ふむ、やはりセシリアは尻だな」

「はあ……はあ……いい、嫌な評価ですわね……」

自分の身体の上でぐったりしている美女を見て、なんとも失礼な感想を述べるクロウ。

流星は国家代表生。セシリアは未だぼーっとしているものの、答えるまでには回復したようだ。

口からは唾液がこぼれているし、顔は真っ赤だが、それもセシリアの美貌に色気をたしている。

クロウとセシリアの汗が混ざり合い、ヌルヌルとした感触があるが、それさえも気持ち良く感じる。

「もう、クロウさん！ どうして、お、お尻……に挿入れたんですの!？」

またそれから少しすると、セシリアはベッドの上に膝立ちになってクロウに抗議す

る。

全裸でポンポンと怒っている様子は、滑稽であるが美しい。

それにセシリアが学生だった頃のようにふるまえていることが、クロウには懐かしかった。

また彼女も心を開けられる人物とは、成人してからはあまり会えていないため楽しく感じる。

それにクロウは唯一甘えられる存在である。

今絶賛甘え中であつた。

「だが尻でするのは好きだろうか？」

「そ、それは……話のすり替えですわ！」

「……そうか」

お尻でするのは確かに好きなので、嫌いとは言えない。

しかし受け入れるのも、お尻でするのが好きな変態貴族というのを認めることになるのでできない。

セシリアは顔を真っ赤にして怒ることしかできなかった。

こうして可愛らしく抗議をしている間にも、むつちりとした肉付きの尻タブに隠れている尻穴は、未だぼっかりと穴が開いていてそこから白濁液が漏れ出していた。

「ふむ、つまりセシリアはもう一度やりたいということだな」  
「え、あ……それは……」

クロウはセシリアを優しく押し倒し、顔をじつと見つめる。

急に至近距離から見つめられたセシリアは、純情にも顔を真っ赤にする。

少しの間視線を合わせずにキョロキョロとあつち見たりこつち見たりとしていたが、次第にクロウの目を見ることで落ち着く。

そしてクロウがグツと顔を近づけると、また自分から唇を捧げるのであった。

「はああああ……」

ズプププ……とゆっくりと挿入される男根。

今度は尻穴ではなく、ちゃんと膣内に入ってくる。

まるで自分の身体の一部が戻って来たかのような印象を受けるセシリア。

それほど彼女の膣内はクロウの逸物とびったりであった。

「あつ！あつ！あつ！あつ！」

ズンズンと奥にもぐりこんでくる男根。

何年もの間にしっかりと教え込まれている膣内は、それを受け入れつつ適度な力で締め付ける。

巨大な逸物は子宮口をコツコツとつつき、セシリアの身体を食る。

すでに屈服している子宮は、早く精液をよこせと食欲に蠢く。

「んはあつ！大好きですわ、クロウさん！」

セシリアは男根に貫かれながらも、腕を目いっぱい伸ばしてクロウに抱き着く。

鍛え上げられた強靱な肉体を、身体全体を使って抱きしめる。

お互いの身体が密着して汗のぬめりのせいで、このまま溶け合ってしまう幻想に囚われる。

先ほどまで元気に弾んでいた量感のある乳房は、クロウの胸板に押しつぶされてしま

う。  
「私も愛しているぞ、セシリア」

見つめ合うと、自然に唇を重ね合わせる二人。

二人とも目の奥まで見透かし合い、舌を舐めあう。

セシリアの豊満な胸を内側から叩く心臓の鼓動が、大きく、強くなる。

身体はクロウの言葉に敏感に反応し、熱く火照る。

「んああつ！あつ！あつ！ああつ！！」

しばらく密着してイチチャイチャしていたと思えば、激しく動き出すクロウ。

セシリアの肉付きの良い脚を持ち上げて、顔の横に来るまで押し上げる。

そして自分は覆いかぶさり、激しく腰を突きだす。



完全な種付けプレスである。

タポタポと揺れる巨乳から、汗が飛び散る。

「もうそろそろ射精すぞ」

「んぐうううっ!!」

ぼそぼそと耳元で囁くクロウ。

そんなこそばゆさも感じてしまい、セシリアはグツと歯をかみしめる。

真つ白な美しい肌を見せるほどに、首を反らせる。

ピクンピクンと小さく震えているのは、セシリアも絶頂が近いという証拠だろう。

「腔外か腔内、どちらに射精してほしい？」

「あっ！あっ！あっ！あっ！」

クロウは膣壁を男根でほじりながら、セシリアの目を見つめて言う。

種付けプレスをしている時点でどこに出すかなど決まりきっているのだが、彼女の口から言わせたいのだろう。

しかし舌を出して快楽によがっているセシリアに、それほど余裕はない。

大量の汗が噴き出ており、美しい金髪も額にへばりついている。

「ほう……」

中々答えないセシリアをじつと見つめていたクロウは、ニヤリと薄く笑う。

それは自分の身体に彼女の脚が巻き付いているのを感じたからである。

セシリアは言葉で表さなかったが、身体で表したのだ。

精液が吐き出される場所を、子宮と決めたのだ。

「いいのか？子供ができてしまうぞ」

「ひんっ！ひんっ！おっ！おっ！！」

学生時代散々生で中出しを連発しておいて、今更何を言っているんだと思うが、こうして言葉責めするのが楽しいのだろう。

しかし肝心のセシリアは男根のピストンにだらしなく嬌声を上げるだけである。

ただクロウが言った言葉は届いていたのか、彼女は自分から手をつなぐ。

指と指を絡め合い、存在を確かめ合う。

さらに子供と聞くと同時に、膣内が男根をキュンキュンと締め付けてくる。

子宮も下がり、精液を受け止める状態ができあがる。

セシリアは身体でクロウを求めた。

「あああああああつ！！」

セシリアは絶叫する。

ドクドクと大量に吐き出された精液が、膣内を満たして子宮に溜まっていく。

クロウの身体の下で、セシリアはビクビクと激しく痙攣する。

それと同時に豊満な乳房がプルンプルンと左右違った動きで弾む。クロウと握り合った手にギュッと力を込める。

眉尻を下げ、垂れ気味な眼を涙で濡らす。

大きく開かれた口からは、あられもない嬌声と唾液が飛び出してくる。

「はああ……愛していますわ、クロウさん……」

とぶとぶと子宮に精液が溜まっていくのがわかる。

それは暖かく満たしていき、セシリアを幸せな気持ちにする。

セシリアは心を許した者にしか見せない屈託のなさ、クロウにしか見せない甘えを含んだ、美しい笑顔を見せるのであった。



そのあとセシリアとクロウはピロートークを楽しんだ。

気を許すことができず、作り笑顔を常時しなければならぬ社交界の後に、クロウとの濃厚な性交。

セシリアはかなり疲れていたのか、会話の途中で眠ってしまった。

すやすやと柔らかい表情で眠る大貴族の美女。

彼女がこのような表情を見せるのは、ひどく久しぶりだ。

丹念に手入れされた金髪を撫でながら、クロウはセシリアの顔を見つめていた。

彼女の寝顔を十分に堪能すると、クロウは急に立ち上がる。

そして全裸のままスタスタと扉の前まで歩いて行き、ガチャリと音を立てて開いた。

「あ……」

「どうした？ チェルシー」

ぼかんと口を開けてクロウを見上げる女性。

それはセシリアの専属メイドでかつ親友であり、彼女が心を許す数少ない人物のチェルシーであった。

冷静沈着で美しいメイドな彼女が、今は唾然とした様子でクロウを見つめている。

彼女が立っている真下の廊下には、何やら水滴が垂れている。

「盗み聞きをしていたのか」

「……………」

チエルシーは答えられない。

仕える主人とその執事の情事を、覗いていたなんて。

あまつさえ、自身を慰めていたことなど言えるはずもない。

「ふむ、失態を犯した人間には、罰が必要だとは思わんか？」

「……………」

チエルシーは答えない。

恥ずかしく、また自分の行いに憤怒しているがために。

……………そしてクロウが言った『罰』という言葉に、身体が反応してしまっただがために。

長いメイド服のスカートの中では、太ももにまで液体が伝っている。

「入れ。私がしつけてやろう」

「……………はい」

クロウが扉を開けてチエルシーを誘う。

中には安らかに眠る主人がいる。

そしてこれからされるであろう罰を、賢いチエルシーは知っている。

それでも彼女は抗うことをせずに、中に入っていく。

クロウとすれ違うとき、メイド服越しに尻を掴まれる。

ただそれだけのことなのに、じゅわりと愛液が滲み出してしまう。

主人の恋人との、決して許されない関係。

しかしチエルシーはクロウに囚われてしまっていた。

彼女が部屋に入ったことを確認すると、クロウは扉を閉めた。

その時の音が、ひどくはつきりと聞こえるチエルシーであった。



このあとめちやくちやセックスした。

途中で起きたセシリアも混ざって。

## 凰 鈴音

世界で唯一の I S 操縦者教育機関である I S 学園。

そこには世界中から優秀な少女たちが集まってくる。

このことから、身体能力や知能が優れた彼女たちに教えるために、I S 学園の教師たちもまた優秀な人たちである。

たとえば現在の第一学年の主任を務める山田 真耶。

彼女は元日本代表候補生であり、現在でもその実力は軍事大国の国家代表生にも引けを取らないと言われているほどだ。

たとえば元 I S 学園教師であった織斑 千冬。

彼女は第一回 I S 世界大会総合部門及び格闘部門で優勝し、ブリュンヒルデと敬称さ

れる。

現役を引退した今でも世界中のIS操縦者の憧れである。

さて、IS学園では時たま外部から優秀なIS操縦者を招き、講義をさせることがある。

現在、その招かれたある人物が、IS実習授業を行っていた。

「きゃあああつ!!」

IS学園内にあるアリーナで、響き渡る悲鳴。

少女を乗せた一機のISが、いま地面にたたき墮とされたのだ。

彼女のシールドエネルギーはゼロを示しており、彼女が敗北したことを表していた。

しかしまだ試合終了を告げるブザーは鳴らない。

何故ならまだ上空では三機のISが衝突し合っているからだ。

「うわあ、また一機落とされちゃった」

「確かあの子ってギリシヤの代表候補生よね?」

「これで三人目かあ……」

そんなIS同士の戦いを地上から見上げる生徒たち。

全員ISスーツに着替えている。

彼女たちは今日特別講師としてきたある女性から、IS訓練を受けていた。



『あたしは座学よりも実践を重視するわ。とりあえずアリーナに集合しなさい』  
そういった特別講師に従って来てみると、早速始まる模擬戦。

しかも相手が講師の女性一人なのに対して、学生側は五人での戦闘である。

最初は、学生側は怒りを覚えた者もいれば馬鹿にした者もいた。

確かに講師の女性は世界的にも有名なＩＳ操縦者であるが、いくらなんでも五人同時に相手できるなんてことがあるはずがない。

さらに今年のはあの黄金世代に次ぐ数の専用機持ち代表候補生が入学していた。

特別講師の彼女と戦うことになった五人全員が専用機持ち。

学生たちは講師の敗北という形で未来を予想していた。

だが結果はどうだろうか？

すでに三人の専用機持ちが地上に落とされ、現在戦っている二人の専用機持ちもかなり押されている。

今では攻撃すらろくにできず、ただ講師の女からの攻撃を防ぐか避けたりするしかないでいる。

「いやー、黄金世代の人たちを舐めていたかも。こんなに強いなんてねー」

「私、戦わなくてよかったよ。……あ、また一人やられた」

感心する生徒の隣で、安堵のため息をもらす生徒。

自分より格上の専用機持ちたちがボコボコにやられているのを見て、模擬戦に立候補しなくてよかったと心から思っていた。

そんなことをのんきに会話している間に、また一人エネルギー残量が尽きた生徒が下りてきた。

悔しそうに顔を歪めている専用機持ちの少女は、講師の女性との実力差を痛感していた。

これが世界トップレベルのIS操縦者の実力。

真耶の教育で少なからずプライドを折られていた少女たちであったが、実際にその実力を目の当たりにするとまた大きすぎる壁であった。

少女は睨みつけるようにして上空を見上げる。

そしてその時はちょうど、講師の女性が駆るIS・『甲龍』<sup>シエンロン</sup>の武装・龍咆が火を噴き、最後の一人に命中するところであった。

『学生側五人全員の撃墜を確認。特別講師の勝利とし、模擬戦を終了する』

試合の終わりを告げるブザーが鳴り響く。

専用機持ちたち五人全員を、ほぼ無傷で撃墜した女性が下りてくる。

撃墜された彼女たちからすれば、まさに悪魔の降臨である。

『甲龍』<sup>シエンロン</sup>のその攻撃的な造形と色彩から、余計恐怖感をおおる。

しかしそれを駆る女性は、まるで天使のような容姿であった。

そんな彼女が、戦々恐々としている生徒たちに向かって、二カツと太陽の如き笑みを  
見せる。

小さく見える八重歯が可愛らしい。

「さ、こんな感じでやってみなさい」

『できませんけど!?!』

学生たちから一斉に突っ込みを受けてきよとんと首を傾げる女性。

彼女は基本的に勘でISを操縦するため、学生のころから他人に教えることを不得意  
としていた。

そんな彼女の名前は風 鈴音。

中華人民共和国の国家代表生である。



「いやー、鈴ちゃん先生、凄かったねえ」

「ほんとほんと」

専用機持ちたちのプライドを粉々に打ち砕いたあの模擬戦の日から一週間後。

数人の学生は集まって、また鈴のことを話題にしていた。

「めちやくちや強いし、戦っているときは格好いいし、笑った時は可愛いし。本当、完璧よねー」

「デュノア様もいいけど、鈴ちゃん様もいいかも……」

生徒たちが鈴と過ごしたのはたった一日であるが、彼女たちの中に強い印象を与えていた。

まずその圧倒的な強さである。

I S 学園に入学できる時点でかなり優秀な人材の中で、さらに弱冠十五歳にして国家代表候補生である。

彼女たち自身も相当強かったのであるが、ほぼ無傷で完勝してしまうほどの圧倒的実力。

さらに鈴の容姿もまたすばらしいものであった。

茶色が混じった髪は意外と長く、それをツインテールに結んで活発な印象を与えてい

た。

吊り上った眉と瞳は、彼女の気の強さを示していた。

笑った時にチラリと見える八重歯が、彼女に幼いイメージを与えていた。

しかし雰囲気はできる女のもので、ギャップが生じている。

桃色のＩＳスーツによって浮き上がっていた身体の線は、スレンダーで美しいものであった。

これらの要素から、シャルロット党の一員であつた生徒の一人が、セカン党に乗り換えようとした発言をうかつにもしてしまふ。

次の瞬間、彼女の姿は消えてしまった。

シャルロット党员、血の粛清である。

「あ、あんなに魅力的だつたらさあ、やっぱり彼氏っているのかな？」

「そりゃあいるでしょ。私たちがみたいに、出会いがないわけではないだろうし」

彼女たちは姿を消した友人のことを気にせず、会話を続ける。

党派閥闘争は、水面下で過激に行われているのだ。

彼女たちの話題は、やはりと言うべきか恋愛方面へと移り変わる。

長期休暇の間にしかＩＳ学園を出ることができず、また織斑 一夏、クロウ・ミキストリ以来男性操縦者が現れていないこともあつて完全な女子高であるので、彼女たちの

恋愛に対する興味は非常に強いのだ。

鈴に彼氏がいるかという話題。

確証が取れているわけではないのに、彼女たちはいると勝手に断言してしまっていた。

まああれほどの美人で国家代表という非常に高い社会的地位もあれば、いないというのがおかしい話だ。

「どんな人なんだろうね」

「そりゃあ凄いイケメンなんじゃない？」

「いやー、鈴ちゃん先生は案外イケメンよりも頼れる逞しい男が好きだと思うよ。気の強い人ってそういうのに弱いし」

彼女たちは脳内で妄想彼氏を作りだす。

最初に浮かぶのはイケメンの彼氏像である。

黒髪日本人で、爽やかな印象を与える男だ。

ワンサマーという言葉が、何故かしっくりときた。

続いて浮かぶのは逞しい彼氏像。

顔は超強面。筋骨隆々の大男。

逞しいを通り越して圧迫感すら感じられるようなマッチョマンだ。

何故か勝手にイメージが動き出し、色々なマッスルポーズを取り出す。キモい。

元々普通にイケメンが好き少女たちは、はち切れそうな筋肉がピクピク脈動している状態なんて見たくない。

すぐに頭を振ってイメージを消し飛ばす。

「でもさー、あれだけ美人だったら偉い人とかの愛人を強要されたりしないのかな？」

「そうだね、とくに中国の政治家って愛人いるのがふつうなんでしょ？」

「……まあ鈴ちゃん先生なら、そんな提案された時点でその人殴っちゃいそうだよね」  
「確かに」

鈴の気の強さを実感している生徒たち。

確かに提案されたと同時に拳を振りかぶるツインテールの美女が簡単に想像できた。

「うーん……本当、どんな人なんだろうね、彼氏」



IS学園の生徒たちが話題にしていた人物である鈴は、現在中国に帰国していた。今彼女がいるのは政府から与えられた高級住宅である。

鈴はこれまたお高いフカフカのベッドの上に座っている。

そしてこの部屋の中には鈴以外にもう一人存在していた。

彼女を見下ろすように立つ男。

それは奇しくも少女たちがイメージした強面筋骨隆々の大男であった。

「ね、ねえ、クロウ。本当にこれ、しなくちゃいけないの……？」

鈴は目の前の男——クロウに問いかける。

顔をうつすらと紅潮させて、困ったように目を細めている。

声も小さく震えていて、快活とした普段の様子がまったく消え失せている。

この前IS学園で猛威を振るった凄腕操縦者の片りんすら感じさせない。

「ああ、勝負は私の勝ちだからな。当然従ってもらおう」

「うう……」

クロウが言う勝負とは、先日行われたISでの模擬戦である。

IS世界大会でもそう見ることのできない、高い戦闘力を保有する二人の勝負。

模擬戦というにはあまりにも勿体ないその試合は、クロウの勝ちという形で終わりを



告げた。

結果、最初に約束した『敗者は勝者の言うことを何でも聞く』というとんでもな義務が、鈴に生じたのであった。

「そもそもそれを言いだしたのは鈴だしな」

「あうう……」

そう、勝負を仕掛けたのは鈴からであった。

中国の国家代表となり、学生るときよりもさらに実力をつけた鈴。

ここでクロウに勝利して、一生添い遂げることになる誓約書を突きつけるつもりだったのだ。

ちなみにクロウとしては模擬戦こそ乗り気であったが、賭け自体はどうでもよかった。

別にそんな約束がなくても、鈴に自分の言うことを何でも聞かせることが可能だからだ。

「さあ、やってくれ」

「うう……いいわよーやってあげるわよーちゃんと見てなさいー」

ぐいぐいと催促するクロウに対して、カッと意気込む鈴。

顔を真っ赤にしてうつすら涙目になっているが、それは言わないであげたほうがいい

だろう。

彼女はそう言うと、白いショーツを脱いだ。

細いが肉付きはいい矛盾した太ももの根元には、女性の最も大事な部位である陰部がある。

学生のと看は無毛の地であったが、今ではほんの少し生えていた。

それでも一般の女性に比べれば非常に薄いが。

「身長は伸びたが、ここはまるで成長しないな」

「うっさい！」

痛いところを突かれた鈴は、顔を真つ赤にして牙をむく。

確かに彼女はIS学園を卒業した後から、身長がぐんと伸びた。

在学中は150cmだった身長は、今では160cm近くある。

しかし局部を隠す陰毛はほとんど生えてこず、また腋の方も同じであった。

学生よりもきれいな腋と陰部である。

さすがに処理するのが面倒だと考える鈴だが、ここまで薄いというのは恥ずかしい。

何度クロウに使われてもぴったりと閉じている一本の筋が、年齢とのギャップを生んで興奮を高める。

「さあ、やってくれ」

「い、この変態……」

恨めしそうにクロウを見上げるが、当然それで許すはずもない。

長い付き合いでそれを熟知している鈴は、諦めて手を伸ばす。

向かう先は自身の陰部。

そこをむにつと指で揉む。

クロウが鈴に強要したのは、自慰をしている姿を自分に見せろというものであった。

現在、国家代表として中国少女の憧れを一身に受ける鈴。

さらにIS世界大会での活躍で世界中にファンがいる。

皆の羨望のまなざしを受け続けた気の強い少女が、一人の男の前で自慰を見せなければならぬ。

その屈辱とほんのり感じる快感に齒噛みする鈴。

「んっ、ふっ……」

鈴は細くて小さな指で、陰部を弄りだす。

最初から皮を被った陰核に指を置き、くりゆくりゆと転がす。

クロウに自慰を見せると言う屈辱的行為をさっさと終わらせるため、もつとも敏感なところに手をつけたのだ。

感度の良い鈴は身体をビクビクつと反応させる。

「鈴、もっと私に見やすくしてほしい」

「っ………、これでいいの？」

何故か鈴はクロウに反発することなく、その言葉に従ってしまった。

細くて長い脚を開け、弄っている陰部をクロウに捧げるようにさらす。

さらに自分の指で秘裂を開け、中まで見ることのできるようにする。

そこからはトロリと淫液が垂れていた。

鈴の吐く息がはあはあと荒くなり、小ぶりな乳房を内部から心臓が叩く。

もともとプライドの高い彼女は他人に命令されることすら不快に思うのに、今クロウに従うことには何のためらいも覚えていなかった。

むしろ彼の言うことに従うことに悦びを覚えていた。

学生時代からの調教の賜物である。

「んっ、んんっ、くうっ、ふうっ………」

ぬぶっ、ぬぶっ、ぬぶっ、ぬぶっ

鈴は人差し指を膣内に挿入する。

膣内が愛液でしっとり潤っていることを確認すると、指を前後に動かし始めた。

中でき混ぜられた淫液が、ぐちゅぐちゅと小さく音を立てる。

鈴は思った以上に強い快感に、自分でも驚いていた。

クロウにめちやくちやにされるとき以外にはたまに自慰をするのだが、これほどまでに強い快楽を得たことはなかったからだ。

ちらりと上を見上げれば、無表情で自分を見降ろす男がいる。

おそらくこれが原因だ。

彼に見られてする自慰が、ここまで気持ち良くなってしまうのだ。

鈴は顔をリングのように紅潮させる。

眉を切なげに歪め、瞳は潤み始める。

身体は不規則に震えはじめ、気持ちよさそうに開かれた口からはよだれが垂れる。

「ひああああああつ!」

そんな時、不意打ちであった。

指が天井の辺りをぐりゆりつと擦ると、今まで以上の快楽が鈴を襲った。

頭が一瞬真っ白になってしまふほどの強烈な快感。

先ほどまで声を出さぬように我慢していた鈴だったが、あつさりと嬌声をクロウに聞かせてしまう。

ぞくぞくぞくと全身を駆け巡る快楽の電流。

膣内に収められた指を、内部がきゆううううと締め付ける。

「あつ……ううううあ……つ」

鈴は目を見開いて驚く。

どうしてここまで強い快感になるのか？

またそこを指でぐぐつと押し上げると、勝手に身体が震えてしまうほどの気持ち良さを感じる。

疑問で頭の中がいっぱいになった鈴だったが、すぐに原因が分かってしまった。

鈴がジト目で見上げる男、クロウであった。

彼と初めて肉体的関係を持つてから、もう何年もたつ。

その間にクロウは鈴の身体を調教するだけでなく、じつくりと開発も行っていたのだ。

今鈴が触っている場所も、クロウによってつくられたGスポットであった。

「（勝手にあたしの身体を作り替えちゃって……何してくれてんのよ！）」

キツと睨みつける鈴。

しかし指を止めることはなく、ひたすらに陰部を弄り続ける。

ぐちゅぐちゅという音はもはや隠しきれるほど小さくはなく、しっかりとクロウの耳にも届いていた。

折り曲げた脚は淫靡にビクビクと震える。

吐息は熱っぽくなり、息を吐く回数も増えてくる。

嬌声を止めようとしても自然と喉から出てしまい、ついには鈴も諦めてしま

もつと快楽を求める身体は鈴の理性に従わず、勃起した陰核にも指を伸ばしてしま  
う。

「はあっ、あっ、んっ、ああっ、あっ!!」

ビクビクと身体を震わせながらも、指を動かすのを止めない鈴。

瞳からは涙がこぼれ、大きな口を開けて嬌声を漏らす。

ハツハツと犬のように短い息を吐き続ける。

腔内に指を出し入れするたびに、ぐちゅぐちゅと音が立つ。

さらに同時に陰核を親指の腹でぐりゆぐりゆとこねる。

全身から汗が噴き出し、健康的な鈴の身体をぬめらせる。

「イクときはちゃんと言うんだぞ」

「んっ、うっ、イ、イクっ、んうううっ!!」

クロウの言いつけを守り、絶頂の宣告をしてからそれを迎える鈴。

ビクツと一度大きく身体を震わせる。

釣り目がちでクリクリとした丸い目をギュッと閉じて、快楽を享受する。

脚を上ピンと伸ばし、陰部をクロウに見せつけるような形になる。

指を挿入したままの陰部はきゅううううと収縮し、愛液がいつそう体外に漏れ出

す。

鈴はクロウに見降ろされたまま、絶頂を迎えたのであった。

「はー、はーっ……こ、これで満足した!？」

「うむ、良かったぞ」

膣内から指を抜き取ると、大量の愛液が指に付着していた。

陰部は絶頂の余韻でいまだひくついていた。

ぬるぬるの淫液が垂れて、尻の割れ目に入っっていく。

お尻はピクピクと小さく震えていた。

「よく頑張った。こっちに來い」

「……うん」

クロウに呼ばれて、鈴は彼の元へと向かう。

トテトテと近づいていく様子は、さながら親を見つけた子供のようだ。

彼女はつい先ほど絶頂を迎えたのにもかかわらず、それを感じさせないしつかりとした足取りで歩いていた。

やはり自慰程度では、体力精力ともに余りある鈴を疲れさせることはないようだ。

鈴は褒めてくれるかもという期待を胸に、彼の前に立った。

「ひんっ!？」



鈴は唐突に素っ頓狂な声を上げる。

彼女の背筋をぞくぞくと快感に上りあがった。

いきなり感じた快樂に目を白黒させる鈴。

ゆつくりと自分の身体を見下ろすと、自身の臀部に手を這わせるクロウの大きな手があつた。

さらに小ぶりで張りのある臀部を揉みながらも、一本の指が膣内に収められていた。愛液でしとどに濡れているそこは、大きな指でもにゆるるると簡単に受け入れてしまっていた。

「ちよ……な、んで……っ」

「うむ、自慰の褒美だ。私の指を使つていいぞ」

キツとクロウを睨みあげる鈴。

しかし彼はそれを何でもなくように受け止めて、とんでもないことを言い放つ。使つてもいい？この大きな指を？

外観こそ強気な鈴だが、内心は揺れに揺れ動いていた。

自分の指でさえあれだけ気持ちよかつたのだ。

それが想い人の指なら、どれほど大きな快樂を得ることができのだろうか。

鈴は自然と喉を鳴らして唾液を飲み込む。

しかし今ここであさましくも身体を動かすと、恥ずかしさのあまり死んでしまう。

鈴が内心激しく葛藤しているとき、まず身体に限界が訪れた。

ガクガクと小鹿のように震わせながらも身体を支えていた脚が、崩れ落ちてしまったのだ。

「んひいっ!？」

入り口辺りにあつた指が、少し奥まで入ってしまう。

そしてそこはちやうど、自分で弄つていても感じてしまうほど開発されてしまったGスポットであつた。

天を仰ぎみて口を大きく開ける鈴。

溢れ出した愛液は、クロウの手を濡らしてしまう。

「あっ……はああっ……んっー」

何とか膝に力を入れ、これ以上指が入ってこないようにする鈴。

スカートをキュツと握りしめ、いじらしく我慢する。

しかし膣内はクロウの指をきゅんきゅんと締め付け、男を受け入れることを催促する。

ガクガクと震える身体に鞭を打ち、立つ姿勢を崩さない。

クロウは指を動かす様子は一切なく、ただ至近距離で蕩けた表情を見せる鈴を見つめ

ていた。

「くっ、うう、何で、動かさない、のよ……っ」

「使ってもいいといったのだ。私から動かすことはない」

どうやらクロウはまだ自身の痴態を見たいらしい。

先ほどは彼の目の前で自慰までしたというのに、それでもまだ飽き足らないのか。

今度はクロウの指を使って自慰をしろというのだ。

すぐに指を膣内から引き抜き、ふざけたことをいう口に噛みついてやりたいと思う

鈴。

しかし身体は言うことを聞かず、なんと腰を動かし始めてしまった。

「んんんんんんんんっ!!」

自ら小ぶりの尻を持ち上げ、指を引き抜く。

内太ももを愛液が大量に濡らしていく。

ガクガクと震える脚は、当分止まりそうになかった。

「んんんんんんんんっ!!」

ズププププ

ギリギリまで指を引き抜くと、再び尻を下ろして指を迎え入れる。

尻肉を揉まれながら無骨な指で自慰。

しかもそれが大切な男のものなのだから、鈴の感じる悦楽は非常に強いものであった。

しばらくそうして自慰をしていると、突然クロウが指を動かした。

自身が開発したGスポットを、強く刺激したのだ。

不意打ちを受けてしまった鈴は、膝をガクツと折ってしまふ。

「~~~~~ッ!!」

声にならない嬌声があがった。

固くてゴツゴツとした指が、奥深くまで突き刺さってしまった。

奥をぐりゆつと潰され、白目を剥きそうになる鈴。

初め何が起きたのか理解していなかった鈴の身体だが、すぐに認識が追いついてくるとぞくぞくぞくぞくつと快感が昇りあがってきた。

とてつもないほど大きな快楽だと悟った鈴は、ガバツとクロウに抱き着いた。

身長が伸びたといってもクロウ程の大男に抱き着いているのを見ると、まるで子供の

ようだった。

「ああああああつ!!」

ギユツとしがみつくようにして抱き着き、絶頂を迎える鈴。

ビクビクと身体が激しく震える。

目からは涙がこぼれ、口からはよだれが垂れ落ちる。  
すべてクロウの服に付着して、そこを濡らしてしまう。

「……汚れてしまったな」

「はあ、はあ……それは、あんたがやるから……んんっ!？」

「言い訳か。お仕置きだな」

クロウの咎めるような言葉に、鈴は彼の胸の中で恨めしそうに見上げて反論する。

もともと敏感な自分を昂らせておいて、最後なんて動かないと言っていたくせに動かして自分を一気に高みに昇らせた。

鈴の主張は尤もである。

しかし絶頂の余韻で動けなくなっており、そのスレンダーながらも柔らかみのある身体をクロウに預けることしかできない今、そう言つて反論することは悪手であった。

クロウはいとも簡単に彼女の身体を持ち上げ、くるりと反転させる。

再び膝上に座らせると、力なく伸ばされていた脚の間を通り、手を陰部の方に向かわせた。

そして今度はクロウから、秘裂を開けてにゅぶぶぶつと音を立てて指を挿入した。

「あつ、ひつ、そ、そこはつ、だめえっ!」

すぐにまた身体を震わせる鈴。

二度の絶頂でこれ以上ないまでに敏感になつてゐる鈴は、またすぐに快樂の階段を駆け上がつていく。

にゅぷにゅぷと指を出し入れされる。

はしたなくも溢れ出した愛液は、クロウの手を濡らしていく。

「鈴の気持ちのいいところは知つてゐるぞ。ここは私が育てたのだからな」

「んひいつ!? そ、そこは、ああああつ!!」

クロウは指をかぎづめのように曲げ、天井をぐりぐりと押し上げる。

そこは鈴が自慰のさいに見つけたGスポットであつた。

鈴の反応が一層激しくなる。

身体が言うことを聞かずにガタガタと震え、涙とよだれが止まらない。

今度は短い時間で絶頂を迎えた。

「あああああつ!!」

———プシヤアアアアアツ!!

目をギュつと瞑り、大きく口を開けて嬌声を上げる鈴。

ビクンビクンと身体を震わせる。

モデルのようにスレンダーな肢体がクロウの膝の上で跳ねる。

ピンと細くも肉ののつた脚を伸ばしたので、クロウはそれを受け止めてやる。

そして脚に隠されることなく露出した陰部から、勢いよく潮を噴いた。クロウの手だけでなく、地面も濡らしてしまった。

男の武骨な指をキュウウウつと物欲しそうに締め付ける。

## 続・凰 鈴音

「また汚れてしまった。今度は綺麗にしてくれるな」

「はー、はー……」

クロウの問いかけに鈴は答えることはできなかった。

だから自分が排泄した潮で濡らした手を口の中に入れてられたときも、何の反応もすることとはできなかった。

熱く荒い吐息が手にかかる。

小さく真つ赤な舌を指で挟んだりして弄びながら、汚れた手を綺麗にした。

「さあ、次は何をすればいいか、分かるな？」

「……さっさと出しなさいよ」



クロウの膝上からフラフラになりながらも何とか立ち上がり、彼と向き合う。じつと顔を見られながら言われ、鈴はそっぽを向きながら答える。

傍から見れば堅気じゃない大男が美少女に恐喝しているように見える。

実際は正反対なので、誤解はしないでもらいたい。

クロウは鈴の返事を聞くと、ズボンを下ろして逸物を露出させる。

今までの彼女の痴態ですっかり戦闘態勢に移っていた。

鈴はそれを見てビクツと身体を震わせる。

「も、もう大きくなってるじゃん……」

「ああ、鈴が可愛かったからな」

「……変態ね、あんた。分かっていたことだけど」

こう言っではいるが、悪い気はしない鈴。

またまたそっぽを向くが、視線は男根から一切離れない。

あれを見ていると自然と身体が火照り始めてしまう。

今まで何百、何千と自分を気持ち良くさせてきた肉棒。

今の彼女には、肉棒だけが光り輝いて見えてもおおかしくない。

鈴はドラッグ中毒者のように、フラフラと近づいて跪いてしまう。

そそり立つ男根に顔を近づけ、すんすんと小鼻をひくつかせて匂いを嗅ぐ。

男臭い独特な匂いが鼻孔を満たす。

しかしそれはまるで媚薬のように、鈴の脳と身体を侵していく。飽きることがなく、ひたすら匂いを嗅ぎ続ける鈴。

しばらくすると小さな口を開け、そこから真っ赤な舌を伸ばす。

唾液が大量に付着していて、舌先から垂れ落ちる。

息は犬のように早くなり、目は蕩けている。

そしてあと少しで舌がつくといつた時——。

——鳳国家代表生」

「うひゃいっ!？」

ピシリと空間が引き締まるような凜とした声色。

クロウと鈴の二人しかないはずの空間で、第三者の声が響いた。

鈴が驚きながら声が出た扉付近を振り返ると、そこには一人の神経質そうな女性が立っていた。

鈴よりも年上の妙齡の美女であるが、イライラしている雰囲気醸し出しているため容姿を台無しにしている。

「や、楊管理官……」

おそるおそるといつた様子で、鈴が彼女の名前を呼ぶ。

神経質そうな妙齡の美女の名前は楊麗々。中国国家代表生の管理官である。

かつて鈴が学生で代表候補生だったときにも、彼女は担当官であった。

代表候補生の管理官だったのだが、これまでの間に楊も出世していた。

そんな彼女は、乱れた服装のまま男の逸物に顔を寄せていた鈴を冷たいまなざしで見やる。

代表候補生になってからずっとお世話になっていることもあり、鈴は彼女の前では大変萎縮してしまう。

「本日は政府高官の前でのIS操縦披露があると告げていたはずですが？」

「あ……」

鈴は壁にかけられた時計を見上げて青ざめる。

確かに彼女は楊にスケジュールを伝えられていた。

本来の時間よりすでに五分ほど遅れてしまっている。

それほど長時間ではないが、きつちりとした性格の楊にはそもそも遅刻することがありえない。

「あなたほどの逸材ですから許されますが、本来であれば代表を解任されてもおかしくありませんよ」

「す、すぐ行きます！」

楊の苦言に身体を飛び跳ねさせた鈴は、すぐに乱れた服装を直す。

クロウとデートする前よりは服装は乱れているが、まあ相手はいけ好かないおっさんたちだしどうでもいい。

股間のあたりが湿って気持ちが悪いが、シャワーを浴びている時間すら惜しいのでそのまま行くことにする。

ちなみに楊の言っていることは事実で、強大な権力を持つ中国政府高官たちを不機嫌にさせることは、社会的にも生命的にも色々とまずいことになる。

だがIS操縦技術が世界トップレベルで、容姿もミスユニバースに選ばれても何らおかしくない美女である鈴を抹殺してしまうほど、彼らは馬鹿ではない。

そもそも物理的に排除しにかかっても、すぐに返り討ちに合ってしまうだろう。

鈴は部屋から出る直前、ピタッと止まってクロウの方に振り返る。

「次はちゃんと相手してもらおうからね！待ってなさいよ！」

「……風国家代表生？」

「い、今行きましゅっ」

ギロリと睨まれて飛び上がり、ぴゃーっとかけて行った鈴。

最後にはわわ軍師やあわわ軍師のように嘯みながら突っ走って行ったのであった。



「……あなたも早く服を着てください」

楊はベッドに座るクロウを見て言う。

つい先ほどまで繰り広げられた鈴の乱れつぶりに、未だ逸物は勃起したままだ。

ビクンビクンとたまに震えている。

「うむ、そうしたいのだが、このままではズボンに収めることもできん」

「ち、近寄らないでください」

すつくと立ち上がり、楊ににじり寄るクロウ。

楊は恐れを抱いた様子で、彼から少しでも離れようと後退する。

しかし所詮四方を囲まれた部屋の中。

次第に追い詰められていき、ついには壁に押し付けられてしまう。

「や、やめてくださいっ！」

眼鏡がずれても逃げようともがく楊。

しかし鈴の代わりの獲物として見ているクロウが見逃すはずがない。

「楊、貴様の管理下にある者のせいで見ているクロウがなくなったのだ。責任は取るべきではないか？」

「わ、私は陳首相の妾です。殺されたくなければ離れなさい」

楊はキツとクロウを睨みあげて警告する。

陳とは現在中国政府の中でも強い影響力を持つ政治家だ。

楊はその男の愛人の一人として囲われていた。

確かに中国国内で強大な権力を持つ陳に逆らえる者はほとんどいない。

そのことを見込んで、楊は彼の愛人になったのだから。

当然、クロウも引き下がるものと思つて余裕を持つて彼を見上げる楊。

しかし残念。性欲魔人に権力など通用しないのだ。

「ふむ、まあ私にとつてはどうでもいいことだ。それにそこまで嫌がらずともよいだろう。私と肌を重ねるのが初めてというわけではあるまいし」

「……………」

以前肌を重ねたからこそ嫌になったのだ。

楊は常に冷静沈着で、自分を見失うことはない。

自分の思い描く最良の未来に向けて、決して揺らぐことはない。

しかし唯一クロウとの性交が、彼女の我を忘れさせる。

圧倒的快樂により、普段からは想像できないような言葉を口にして、また態度でも示してしまった。

もう二度とあのような痴情を見せることはできない。

しかし……しかしあの甘美な時を忘れることもできなかった。

「これは鈴の不始末を貴様が後拭いするのだ。いいな？」

「……………」

クロウの問いかけに楊は沈黙で応えた。

彼によってピッチリとしたスーツが、パサリと地面に落とされたのであった。



中国政府から鈴に与えられた部屋では、ピチャピチャという水音が響いていた。

クロウが堂々と座っており、その股倉に鈴が顔を埋めていた。

男根を食べてしまうかのように、熱心に口に含んでいる。

「シャワーにも行かず、いきなりか」

「んあ……なによ、文句あるの？」

鈴はブスツとした表情でクロウを見やる。

しかし男根を口から離そうとはしない。

すつかり蕩けてしまった表情で、巨大な逸物に舌を這わせる。

鈴はIS操縦披露が終わるとすぐに戻ってきた。

普段なら適当にやって汗ひとつかかずに終わらせるのだが、たぎりまくっていた性欲を誤魔化すために全力で披露したので、身体中から汗が噴き出している。

鈴ほどの実力者になれば、一般のIS操縦者の全力でも汗はかかないが、彼女が披露したのは世界最高の操縦技術である。

見学に来ていた政府高官もニツコリである。

汗をかきまくった状態のまま部屋に飛び込んできた鈴は、そのままクロウの股倉に飛びついたのであった。

真つ赤な亀頭を小さな舌が這う。

彼女の口からこぼれた唾液が、陰茎を塗らす。



滑りがよくなったそこを、鈴は小さな手を使って扱きあげる。ぬるぬると動きがなめらかでいい。

「ん、んふっ、んんっ」

—— ぺろぺろ、ちろちろ

真つ赤で小さな舌が男根を舐めていく。

彼女の口から吐かれる熱い息が、陰毛にかかつてこそばゆさを感じさせる。

唾液で濡れた陰茎も手でこすりあげ、快感を高めていく。

クロウは鈴の上着をずらし、乳房を露出させる。

ブラも付けていなかった胸は、汗でてらてらと光っていた。

クロウとの性交の成果により、学生するときよりカップ数は一つ上がってBとしていた。

ただ同じくAカップ仲間であったドイツの銀髪が身長はほぼ変わらず胸だけ異常発達しているのを見て、鈴が血涙を流したのは言うまでもない。

クロウはBカップの慎ましい乳房を、大きな手でむにむにと揉んだ。

男根に奉仕させながら胸を我が物顔で揉むのは、何とも気分がいいものだ。

胸を揉まれて、切なそうに眉を歪めながらクロウを見上げる鈴。

「フー、フー、んぐうっ」

かぱっと口を大きく開けて、亀頭を啜える鈴。

関所を失ったせいで、唾液がだらだらと顎を伝う。

そこから顔を前に動かし、ぬぷぷぷと喉奥にまで挿入した。

学生の小柄な体躯であればいざ知らず、すっかり中華美女に成長を遂げた鈴は巨大な逸物の大半を口内に収めることが可能だ。

そしてそんな鈴の健気な奉仕に、クロウは一気に昂ってしまう。

「んんっ!?!」

鈴は目を大きく見開く。

何の宣告もなく、いきなり喉奥に精液をかけられたからだ。

ブピユツと勢いよく鈴口から飛び出した精液は、すぐに鈴の口内を満たしてしまう。

それでも鈴は全て飲み干そうと頑張るのだが、クロウはそれよりもしたいことがあった。

未だドブドブと精液を流す男根を鈴の口内から抜き取る。

「ぷあっ!?!んっ、あああっ!あ、熱いつ!」

クロウは鈴の端正な顔に精液をかけたのだ。

プライドが高くて気が強い自信にあふれた顔に、男の欲望が付着していく。

しかし鈴は白濁液を掛けられてもよけようとはせず、甘んじてそれを顔で受け止めて

いた。

「な、何で顔にかけるとのよお……」

「嫌いか？」

「……好きかも」

ビチャビチャと大量に精液を顔にかけた後、ようやく射精が止まる。

鈴は顔中が汚れたまま抗議するが、その声に力はない。

ぽーっと顔は呆けているし、頬などは真っ赤である。

精液は顔だけでなく、小ぶりの乳房にも垂れ落ちていた。

鈴は自身の股間に手をつ突っ込ませたまま、ビクンビクンと身体を震わせる。

クロウに精液を顔にかけられたという被虐性癖と、精液の匂いによる効果で軽く絶頂を迎えていた。

「次はこちらでお願いしようか」

「あっ!?!い、今はちよつと……っ!」

クロウの手が下半身に伸びてくるのを見て、パツと払いのける鈴。

少しの間、ピタリと時が止まる。

再びクロウが手を伸ばすが、また叩き落とす。

それを何度か戯れのようにしたあと、とうとうじれなくなったクロウが無理やり鈴

の脚を掴んででんぐり返しさせる。

「うむ、よく濡れているな」

「ばっ?!何言っているのよ?!」

カアアアアツと一瞬で顔を赤くする鈴。

気の強い彼女が他人に見せたことのない涙が、今こぼれていた。

しかしそれは羞恥の涙ではあるが、また悦びの涙でもあった。

クロウにさらけ出された陰部は、確かに大量の淫液が付着していた。

びったりと閉じられた秘裂から漏れ出した愛液は、陰部の周りをグシヨグシヨに濡らしていた。

成長することによってほんの少し茂っている陰毛も、液体を滴らせるほど濡れている。

キュツと窄んでいる尻穴や、健康的な肉付きの細い太ももにも付着していた。

「これからここに入れるぞ」

「い、言われなくても分かっているわよ……」

顔を腕で覆い隠しながら口を尖らせる鈴。

しかし腕で隠しきれない首筋や耳が真っ赤に火照っていた。

クロウが小さな秘裂を指で開け、膣奥まで覗き見る。

膣内は真つ赤に熟していて、愛液がねばあつと何本も糸を引いていた。小さく自己主張する陰核も、触れていないのにピクピクと反応していた。

「あつ、うあんっ！んあつ！」

真つ赤な亀頭が陰部にこすり付けられる。

つぶつぶと、入るか入らないかといったふうに陰部に合わせてくる。

さらに愛液で男根をコーティングするように、秘裂にこすりあげる。

ぬりぬりゆと擦られるが、微妙な快感しか得られない。

「こ、ここにあんたのそれを、い、いい入れなさいよ……」

自分で細い脚を開けて、指を使って秘裂をくぼつと開ける。

とろとろと絶え間なく愛液をこぼし、ヒクヒクと淫靡に蠢く陰部を見せつける。

そして顔を真つ赤にして何とかおねだりをする。

強すぎる恥ずかしさと屈辱で、目をぐるぐる回してしまっている。

軽いM気質のあるセシリアや真耶であればもつといじめてやるのだが、鈴はこれ以上すると泣きが入ってしまうのでこのあたりで我慢するクロウ。

もともと自身もあまり我慢ができる状態ではなかつたので、あつさりと拙いおねだりを了承した。

「んあ……お……おおう……」

ズブズブ……と巨大な逸物が膣内に侵入を開始する。

成長した鈴は昔ほどではないが、しかしまだ小さめの陰部をミチミチと音を立てながら男根が埋まっていく。

鈴は少しでも楽になろうと自分で秘裂を開けているが、あまり効果を成していない。強い圧迫感に、鈴はあられもない嬌声を漏らしてしまう。

何年もかけてじつくりと開発された陰部は、逸物の大きさに悲鳴を上げるところか歓喜の叫びをあげていた。

「んひいっ!!」

ズンつとクロウが強く腰を押し出す。

一気に奥まで侵入された鈴は、クロウの下で身体をビクンと跳ねさせる。驚いた陰部からプピュツと少量ながら潮を噴く。

「うむ、奥まで入れて偉いぞ」

「んぐうつ、んおう……んんん……っ!」

根元まで挿入された男根を、膣壁がギユツギユツと締め付ける。

亀頭の先は子宮にコンコンと当たっている。

いつでもそこを押しつぶしてしまうことが可能だ。

鈴はこの挿入で絶頂を迎えていた。

ブルブルと身体を震わせ、汗を大量に浮かび上がらせている。小ぶりのBカップの乳房もブルツと揺れている。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

——ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ

絶頂している鈴のことなど知ったことかと、クロウは腰を振り始める。

鈴はまた登り詰めてしまう。

「んぐうつ！？ひつ、ひいひいひいっ！！」

——ズズズズズズズ

膣内を男根が蹂躪する。

クロウは腰を振りながら、指を小さく勃起した陰核に合わせる。

そしてそこを指の腹でくりくりと弄ってやる。

すると鈴は白目を剥くほどの衝撃を受け、絶頂を迎えた。

ピクンと一度大きく震えた後、小刻みにガクガクと震える。

手で弄られた時に潮を噴いたのだが、残っていた少量のものがピュツピュツと飛び出してきた。

クロウはそれに合わせて、奥にぐりぐりとこすり付けながら射精した。

白濁液が鈴の膣内を汚していった。

ひとしきり出し終わった後に引き抜くと、愛液が大量に付着していて糸がねばねばと引っ付いてきた。

「まだだぞ、鈴。次は尻を向けろ」

「…………ふあい」

何かとクロウに反抗する鈴だが、今ではすっかりと従順になっていた。

クロウに言われた通り、フルフルと頼りなく揺れる身体に鞭を打ち、小ぶりながら張りのある臀部をクロウに向ける。

プリンと突き出された臀部に、再び腰を引っ付ける。

ズチユズチユと厭らしい水音を立たせながら、陰部をこすり付けあう。

「あっ…あっ…ひんっ…ひいっ!!」

—————パン！パン！パン！パン！

軽快な音を立てて尻肉がたゆむ。

張りのある臀部は気持ち良く押し付けた腰を戻してくれる。

鈴は身体をビクビクと震わせながらも、健気に立ち続けている。

括れた腰を掴んで、腰の振りに勢いづける。

時折戯れに、鍛えられて引っ込んでいるお腹を撫でる。

「ひんっ…あぁっ…これっ、すきいっ！」



——ズプツ、ズプツ、ズプツ、ズプツ！

熱い肉棒が突き刺さるように奥まで侵入する。

子宮を押しつぶされそうになり、大量の愛液が滲み出す。

鈴は舌を出して犬のように喘ぐ。

何度も擦られる陰部には、白い泡が噴き出していた。

「鈴、もう出すぞ」

「んっ、んぶうっ！んおっ！だ、出してっ！奥に出してえっ！！」

——ズズズズズズズ！

クロウは鈴に覆いかぶさるようにして身体を曲げる。

それを感じ取った鈴は、言われずとも首を後ろに向かせて唇を合わせる。

舌を絡め合う濃厚なキスをしながら、口内でくぐもった嬌声を上げる。

さらにクロウは巨大な手でBカップの乳房を鷲掴みにする。

汗でしっとりとした肌触りが気持ちいい。

唇を離れた後、鈴は大きな声で欲望を叫ぶ。

あられもない内容であるのに、最早彼女は羞恥心をなくしていた。

鈴の了承も受けられたので、クロウは遠慮なく我が物顔で膣内を汚すことにした。

「んああああああああああっ！！」

声が枯れるほど大きな嬌声を上げる鈴。

もしここが防音性のない部屋だとしたら、建物の周りまで声が聞こえていたかもしれない。

ドプツと先ほどまでの性行為を否定するかのようになり、まったく衰えない勢いで射精する。

鈴の身体も、それを一滴たりとも零さないと言う意思でもあるように、膣内を脈動させて受け入れる。

鈴は端正に整った気の強そうな顔を、涙やら鼻水やらよだれやらで汚しながらとろけさせる。

ガクガクと身体全体が震え、とうとう態勢を崩してしまふ。

これまで頑張って持ちこたえていたことが称賛に値するだろう。

クロウが射精し終わった男根を抜き取ると、ドロツと精液が零れ落ちる。

やはり大量の白濁液を全て収めることはできなかった。

愛液と汗でグショグショになっていた陰部だが、そこに精液も混ざっていいよわわらなくなってしまうた。

「よく頑張ったな、鈴」

「…………えへ、当然よ」

クロウが崩れ落ちている鈴の頭を撫でてやると、嬉しそうに破顔する。今まで感じてきた快樂に疲れたのか、鈴はスツと瞳を閉じる。

クロウにしがみつくようにしながら、すぐに健やかな寝息をたてはじめるのであった。



鈴が寝静まって少しした後。

コアラのようにしがみついてくる鈴から何とか抜け出したクロウは、クローゼットの前に立つ。

「気分はどうだ？」

「……最低です」

中には一人の女性が座り込んでいた。

キツとクロウを睨みあげる眼鏡をつけた美女。

鈴の管理官である楊 麗々であった。

「ふむ、しかしそれは鈴が戻ってくる前に意識を回復させなかつた貴様が悪い」

「ふ、ふざけないで——っ！」

鈴が披露するために部屋を出て行った後、クロウに犯されてしまった楊。

久しぶりの圧倒的な快楽に、簡単に意識を飛ばしてしまった彼女は鈴が戻ってくるまでに部屋を退出することができなかったのだ。

大きな声を上げて抗議しようとした彼女に口を塞ぎ、無駄に洗練された動きで彼女の背後に回るクロウ。

そして楊に続いて鈴にも大量に精液を出したのにもかかわらずまったく萎える様子のない逸物を、スムーズに挿入した。

しかもそれは尻穴である。M気質の全くない楊には、セシリアや真耶ほど喜ぶことができない。

「なに、終わるころにはクセになっているようにしてやる。鈴を起こしたくなかつたら、声を出すな」

「っーんっ、んっ!!」

結局翌朝になって鈴が起きるときでも、クロウは楊のことを犯し続けていた。

白目を剥いてろくに反応を見せない楊に腰をぶつけるクロウを見て、鈴が物理的にも性的にも襲い掛かったのは別の話である。

一年後には鈴の隣で仲良くクロウに奉仕する眼鏡美女がいたそうなの……。

なお、その眼鏡美女はとくに尻穴を好んだとされている。